

# 京都府遺跡調査報告書

第 10 冊

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

<本 文 編>

1 9 8 8

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。昭和62年度におきましても44件のほる調査を実施しました。これらの調査成果は、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』を通じて、広く紹介してまいりました。これらの刊行物が関係各位の参考に供され、地域の文化の発展に少しでも寄与すれば幸いです。

本書に収めました「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」は、当調査研究センターが発足した昭和56年に京都府教育委員会から引き継ぎ、昭和61年度まで調査した7次区間に所在する遺跡群であります。遺跡の種類としましては、集落跡・古墳・城館跡と広く及んでおり、かなりの成果をあげることができました。

本書に掲載した各遺跡の調査にあたりましては、発掘調査を依頼された日本道路公団大阪建設局の方がたをはじめ、京都府教育委員会・福知山市教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・厳寒の中で多くの方がたが熱心に作業等に從事していただきましたことを明記して、これらの人びとに厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本報告書は、京都府福知山市大字宮・大内・大内山田・多保市地区に所在する近畿自動車道舞鶴線(第7次区間)関係遺跡の発掘調査報告書である。
2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査は、日本道路公団大阪建設局の依頼により、昭和54年度から55年度までは京都府教育委員会が実施し、昭和56年度から60年度まで、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となり実施した。
3. 現地調査及び本報告書にかかる経費については、すべて日本道路公団大阪建設局が負担した。なお、本報告書については、京都府教育委員会実施分についても合わせて収録した。
4. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡のうち、昭和56・57年度に調査を行った大内城跡については、その重要性から判断し、京都府遺跡調査報告書第3冊 大内城跡(1984)としてすでに刊行済みである。
5. 本書に掲載した写真については、現地調査分に関しては各調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては高橋猪之介氏に依頼し、一部を各担当者が撮影した。
6. 本書に掲載した遺構図の方位は、すべて磁北である。
7. 本書の執筆は各現地担当者が分担して行った。なお、本書の編集は、劉 和子の協力を得て各執筆者と調査第1課資料係土橋 誠があたった。

# 本文目次

第1章 位置と環境	1
第2章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至る経過	4
第2節 各年度の調査	7
第3章 各遺跡の調査	8
第1節 集落跡	8
(1) 宮遺跡	9
(2) 城ノ尾遺跡	37
(3) ケシケ谷遺跡	41
(4) 奥谷西遺跡	88
(5) 洞楽寺北遺跡	142
(6) 洞楽寺遺跡	145
(7) 多保市城跡・同下層遺跡	156
(8) 大内城跡下層遺跡	183
(9) 多保市遺跡	186
第2節 古墳	190
(1) 城ノ尾古墳	191
(2) 後青寺古墳	209
(3) 小屋ケ谷古墳(付 後正寺古墓)	217
(4) 洞楽寺古墳	253
(5) 薬王寺古墳群	265
第3節 古墓	283
(1) 宮墳墓群	284
(2) 山田館跡	298
第4節 城館跡	317
(1) 城ノ尾城館跡	318
(2) 後青寺城館跡	322
(3) 仁田城跡	328
第4章 結語	332

# 挿 図 目 次

<b>第1章 位置と環境</b>	
第1図	遺跡分布図……………2
第2図	近畿自動車道舞鶴線関係遺跡……………3
<b>第3章 各遺跡の調査</b>	
第3図	本文掲載集落跡遺跡分布図……………8
<b>第1節 集落跡</b>	
<b>(1) 宮遺跡</b>	
第4図	宮遺跡各地点調査地位置図……………10
第5図	A地点検出遺構図……………11
第6図	SD01 瓦質鍋検出状況図……………14
第7図	弥生土器実測図……………16
第8図	その他の土器実測図……………17
第9図	石庖丁実測図……………17
第10図	SD01 出土鉄製品実測図……………18
第11図	SD01 出土土器実測図……………19
第12図	B地点遺構平面図……………20
第13図	B地点中世墓(SX10)実測図……………21
第14図	C地点遺構平面図……………21
第15図	D地点1号住居跡(SH16)・SX17実測図……………22
第16図	D地点2号住居跡(SH18)・溝(SD19)実測図……………23
第17図	溝(SD19)土層断面図……………24
第18図	SX17遺構実測図……………25
第19図	D地点出土弥生土器実測図(1)……………26
第20図	D地点出土弥生土器実測図(2)……………28
第21図	D地点出土弥生土器実測図(3)……………30
第22図	D地点出土石鏃・石錐実測図……………31
第23図	D地点出土石庖丁・石斧類実測図……………32
第24図	A地点遺構変遷図……………35

	(2) 城ノ尾遺跡	
第 25 図	城ノ尾遺跡出土遺物実測図	39
	(3) ケシケ谷遺跡	
第 26 図	地形測量図	41
第 27 図	E トレンチ西壁土層図	42
第 28 図	I トレンチ南壁土層図	42
第 29 図	H トレンチ北壁東西土層図	42
第 30 図	検出遺構図	43
第 31 図	SH72実測図	44
第 32 図	SH102実測図	45
第 33 図	SH119実測図	46
第 34 図	SH135実測図	46
第 35 図	SH118・SH138実測図	47
第 36 図	SH136実測図	49
第 37 図	奥谷西遺跡・ケシケ谷遺跡検出竪穴式住居跡分布図	50
第 38 図	SB163実測図	50
第 39 図	21～23-M・N区検出遺構平面図	51
第 40 図	SK117実測図	52
第 41 図	SK116実測図	52
第 42 図	SX134実測図	52
第 43 図	SD05実測図	53
第 44 図	分銅型土製品実測図	54
第 45 図	出土遺物実測図(1)	55
第 46 図	出土遺物実測図(2)	56
第 47 図	出土遺物実測図(3)	57
第 48 図	出土遺物実測図(4)	58
第 49 図	出土遺物実測図(5)	59
第 50 図	出土遺物実測図(6)	60
第 51 図	出土遺物実測図(7)	61
第 52 図	出土遺物実測図(8)	62
第 53 図	石器実測図(1)	68
第 54 図	石器実測図(2)	69

第 55 図	石器実測図(3)……………	70
第 56 図	石器実測図(4)……………	71
第 57 図	石器実測図(5)……………	72
第 58 図	石器実測図(6)……………	73
第 59 図	石器実測図(7)……………	74
第 60 図	敲石類形態区分図……………	75
第 61 図	石器実測図(8)……………	76
第 62 図	石器実測図(9)……………	77
第 63 図	石器実測図(10)……………	78
第 64 図	石器実測図(11)……………	79
第 65 図	石器実測図(12)……………	80
第 66 図	石器実測図(13)……………	81
第 67 図	石器実測図(14)……………	83
第 68 図	石器実測図(15)……………	84
第 69 図	石器類分布範囲図……………	85
<b>(4) 奥谷西遺跡</b>		
第 70 図	地形測量図……………	89
第 71 図	遺構配置図……………	90
第 72 図	竪穴式住居跡 1 実測図……………	91
第 73 図	竪穴式住居跡 2 実測図……………	91
第 74 図	竪穴式住居跡 3 実測図……………	92
第 75 図	竪穴式住居跡 4 実測図……………	92
第 76 図	竪穴式住居跡 5 実測図……………	93
第 77 図	竪穴式住居跡 6 実測図……………	93
第 78 図	竪穴式住居跡 7 実測図……………	94
第 79 図	竪穴式住居跡 8 実測図……………	95
第 80 図	竪穴式住居跡 9 実測図……………	96
第 81 図	竪穴式住居跡 9 カマド実測図……………	97
第 82 図	竪穴式住居跡 10 実測図……………	97
第 83 図	竪穴式住居跡 10 カマド実測図……………	98
第 84 図	竪穴式住居跡 11 実測図……………	99
第 85 図	竪穴式住居跡 11 カマド実測図……………	100

第 86 図	竪穴式住居跡12実測図	101
第 87 図	竪穴式住居跡13実測図	102
第 88 図	溝 1 実測図	102
第 89 図	溝 1 土層断面図	103
第 90 図	溝 2 実測図	103
第 91 図	溝 2 土層断面図	104
第 92 図	土塚 1 実測図	104
第 93 図	土塚 3 実測図	104
第 94 図	土塚 4 実測図	105
第 95 図	土塚 5 実測図	105
第 96 図	土塚 6 実測図	106
第 97 図	土塚 7 実測図	106
第 98 図	集石遺構実測図	106
第 99 図	井戸状遺構実測図	107
第 100 図	各土塚出土遺物実測図	108
第 101 図	土塚及び竪穴式住居跡 1 出土遺物実測図	110
第 102 図	溝 2 出土遺物実測図	112
第 103 図	溝 1・2 出土遺物実測図	113
第 104 図	竪穴式住居跡 6 出土遺物実測図(1)	115
第 105 図	竪穴式住居跡 6 出土遺物実測図(2)	116
第 106 図	竪穴式住居跡 7 出土遺物実測図	117
第 107 図	竪穴式住居跡 9・10・11・12 出土遺物実測図	119
第 108 図	土塚 6 出土遺物実測図	120
第 109 図	各土塚等出土遺物実測図	121
第 110 図	包含層出土遺物実測図	123
第 111 図	柱穴及び包含層出土遺物実測図	124
第 112 図	石鏃実測図(1)	126
第 113 図	石鏃実測図(2)	127
第 114 図	磨製石器類実測図	127
第 115 図	石斧類実測図	128
第 116 図	環状石斧実測図	129
第 117 図	敲石類実測図(1)	130



第 118 図	敲石類実測図(2).....	131
第 119 図	敲石類実測図(3).....	132
第 120 図	敲石類実測図(4).....	133
第 121 図	石皿実測図.....	134
第 122 図	遺構変遷図.....	135
<b>(5) 洞楽寺北遺跡</b>		
第 123 図	洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡トレンチ配置図.....	142
第 124 図	洞楽寺北遺跡地形図.....	143
第 125 図	検出遺構平面図.....	143
第 126 図	調査地土層図.....	144
<b>(6) 洞楽寺遺跡</b>		
第 127 図	洞楽寺遺跡地形測量図.....	145
第 128 図	調査地検出遺構図.....	146
第 129 図	調査トレンチ土層実測図.....	147
第 130 図	SH02実測図.....	148
第 131 図	SH02カマド実測図.....	148
第 132 図	SH03実測図.....	149
第 133 図	SK01・SK04実測図.....	149
第 134 図	洞楽寺遺跡出土遺物実測図.....	150
第 135 図	SH02内出土紡錘車実測図.....	150
第 136 図	出土須恵器分類案.....	151
<b>(7) 多保市城跡・同下層遺跡</b>		
第 137 図	多保市地区調査範囲図.....	157
第 138 図	A地点全体図.....	160
第 139 図	第1郭推定矢倉台部分実測図.....	161
第 140 図	第1郭土塁断面図.....	161
第 141 図	A地点断面図.....	162
第 142 図	A地点第4郭.....	163
第 143 図	A地点出土遺物.....	164
第 144 図	B地点全体図.....	165
第 145 図	B地点墳墓SX01実測図.....	166
第 146 図	B地点墳墓SX11等実測図.....	167

第 147 図	B 地点墳墓SX04実測図	168
第 148 図	B 地点墳墓SX06実測図	168
第 149 図	B 地点墳墓SX09実測図	169
第 150 図	B 地点出土遺物	170
第 151 図	D 地点全体図	171
第 152 図	D-1地点土壘付近土層断面図	172
第 153 図	SH101実測図	173
第 154 図	SK137実測図	174
第 155 図	D-1地点出土石器実測図	175
第 156 図	D-1地点出土遺物(弥生時代)	176
第 157 図	D-1地点出土遺物(奈良時代)(1)	177
第 158 図	D-1地点出土遺物(奈良時代)(2)	178
第 159 図	D-1地点出土遺物(平安時代以降)	179
第 160 図	D-1・D-2・D-3地点出土遺物	180
第 161 図	墳墓と区画図	181
<b>(8) 大内城跡下層遺跡</b>		
第 162 図	大内城跡下層遺跡遺構配置図	184
第 163 図	出土遺物実測図	185
<b>(9) 多保市遺跡</b>		
第 164 図	多保市遺跡遺構配置図	187
第 165 図	住居 1 実測図	188
第 166 図	住居 1 出土遺物実測図	189
<b>第 2 節 古 墳</b>		
第 167 図	本文掲載古墳分布図	190
<b>(1) 城ノ尾古墳</b>		
第 168 図	調査地位置図	192
第 169 図	調査地周辺地形図	193
第 170 図	石室実測図及び墳丘断面図	195
第 171 図	石室床面遺物出土位置図	197
第 172 図	石室 2 次使用面平面図(上)及び石室埋土土層断面図(下)	198
第 173 図	鉄製品実測図	199
第 174 図	装身具類実測図	200

第 175 図	須恵器実測図(1).....	202
第 176 図	須恵器実測図(2).....	204
第 177 図	石室 2 次使用面出土土器実測図.....	206
(2) 後青寺古墳		
第 178 図	調査地位置図.....	209
第 179 図	墳丘土層断面図.....	210
第 180 図	主体部実測図.....	211
第 181 図	第 1 主体部出土鉄器実測図.....	214
第 182 図	出土土器実測図.....	215
(3) 小屋ヶ谷古墳(付 後正寺古墓)		
第 183 図	調査地測量図.....	217
第 184 図	調査トレンチ配置図.....	218
第 185 図	A 区検出遺構配置図.....	219
第 186 図	墳丘土層実測図.....	220
第 187 図	石室実測図.....	221
第 188 図	遺物出土状況図.....	223
第 189 図	後正寺古墓平面図.....	225
第 190 図	後正寺古墓 塚 1・3 土層図.....	228
第 191 図	SK17 実測図.....	229
第 192 図	SK14~16・18 実測図.....	229
第 193 図	集石遺構(SX04・05) 実測図.....	230
第 194 図	SX05 下層検出遺構(SX10・11) 実測図.....	230
第 195 図	B トレンチ西壁土層実測図.....	231
第 196 図	C トレンチ土層実測図.....	231
第 197 図	出土遺物実測図(1)SK17 埋納土器.....	232
第 198 図	出土遺物実測図(2).....	233
第 199 図	出土遺物実測図(3).....	235
第 200 図	出土遺物実測図(4).....	237
第 201 図	出土遺物実測図(5).....	238
第 202 図	出土遺物実測図(6)鉄鏃.....	239
第 203 図	出土遺物実測図(7)鉄器.....	240
第 204 図	出土遺物実測図(8)鉄器馬具.....	241

第 205 図	出土遺物実測図(9)装身具	242
第 206 図	出土遺物実測図(10)	243
第 207 図	出土遺物拓本 錢貨	244
<b>(4) 洞楽寺古墳</b>		
第 208 図	墳丘測量図	254
第 209 図	東西方向断面図(1)	255
第 210 図	東西方向断面図(2)	258
第 211 図	SX3実測図	258
第 212 図	SX6実測図	259
第 213 図	中世墓SX7・8実測図	259
第 214 図	SX9実測図	260
第 215 図	洞楽寺古墳出土遺物実測図(1)	262
第 216 図	洞楽寺古墳出土遺物実測図(2)	263
<b>(5) 葉王寺古墳群</b>		
第 217 図	葉王寺古墳群分布図	265
第 218 図	葉王寺古墳群地形測量図	267
第 219 図	墳丘断面図	268
第 220 図	1号墳第1主体部実測図	270
第 221 図	1号墳第2主体部実測図	271
第 222 図	1号墳第3主体部実測図	272
第 223 図	2号墳第1主体部実測図	273
第 224 図	2号墳第2主体部実測図	274
第 225 図	3号墳第1主体部実測図	275
第 226 図	3号墳第2主体部実測図	276
第 227 図	4号墳石棺実測図	277
第 228 図	5号墳石棺実測図	278
第 229 図	刀実測図	279
第 230 図	出土土器実測図	280
第 231 図	出土鉄製品実測図	281
<b>第3節 古 墓</b>		
第 232 図	本文掲載古墓分布図	283

(1) 宮墳墓群	
第 233 図	宮墳墓群位置図…………… 285
第 234 図	調査地周辺地形図…………… 286
第 235 図	1 号墓外形実測図…………… 287
第 236 図	1 号墓埋葬施設実測図…………… 288
第 237 図	1 号墓土層断面図…………… 289
第 238 図	2 号墓検出遺構実測図…………… 290
第 239 図	2 号墓蔵骨器検出状況図…………… 290
第 240 図	3 号墓埋葬施設実測図…………… 291
第 241 図	3 号墓埋葬施設遺物出土状況図…………… 291
第 242 図	石組遺構検出図…………… 292
第 243 図	礎石建物跡(SB01)実測図…………… 293
第 244 図	礎石建物跡土層断面図…………… 294
第 245 図	礎石据え付け状況図…………… 294
第 246 図	出土遺物実測図…………… 295
第 247 図	丹波焼甕実測図…………… 296
(2) 山田館跡	
第 248 図	調査地地形測量図…………… 298
第 249 図	調査地土層断面図…………… 299
第 250 図	検出遺構配置図…………… 300
第 251 図	SX01平面図…………… 301
第 252 図	SX01東西土層図…………… 301
第 253 図	検出遺構配置図 中世墓関係…………… 302
第 254 図	SX02実測図…………… 303
第 255 図	SX03・04・06・31実測図…………… 304
第 256 図	SX05・07・30・38実測図…………… 305
第 257 図	SX08・09・56実測図…………… 306
第 258 図	SX24・25・27・29・32実測図…………… 307
第 259 図	SX52実測図…………… 307
第 260 図	SK10・11実測図…………… 308
第 261 図	SX34実測図…………… 308
第 262 図	SX40実測図…………… 308

第 263 図	SX23・51実測図	308
第 264 図	SX26実測図	309
第 265 図	SK12実測図	309
第 266 図	SK13～19実測図	310
第 267 図	SX20・21・22実測図	310
第 268 図	出土遺物実測図(1)	311
第 269 図	出土遺物実測図(2)	312
第 270 図	出土遺物実測図(3)	312
<b>第 4 節 城館跡</b>		
第 271 図	本文掲載城館跡分布図	317
<b>(1) 城ノ尾城館跡</b>		
第 272 図	城ノ尾城館跡平面実測図	319
第 273 図	土塁・空堀断面実測図	320
第 274 図	出土遺物実測図	320
<b>(2) 後青寺城館跡</b>		
第 275 図	調査地周辺地形図	322
第 276 図	調査地位置図及び地区割り図	324
第 277 図	調査地土層断面図 Aライン	325
第 278 図	調査地土層断面図 Bライン	326
第 279 図	景德元豊拓影	326
第 280 図	出土遺物実測図	327
<b>(3) 仁田城跡</b>		
第 281 図	地形測量図	329
第 282 図	出土遺物実測図	330

# 付 表 目 次

第1章 位置と環境	
第2節 各年度の調査	
付表1 各年度別調査一覧表	7
第3章 各遺跡の調査	
第1節 集落跡	
(3) ケシケ谷遺跡	
付表2 出土石器一覧表	64
付表3 近舞線関係遺跡弥生時代遺跡消長表	87
(6) 洞楽寺遺跡	
付表4 近舞線関係遺跡古墳時代遺跡消長表	152
付表5 須恵器杯・蓋分類案	154
第2節 古墳	
(2) 後青寺古墳	
付表6 出土遺物一覧表	212
(3) 小屋ヶ谷古墳(付 後正寺古墳)	
付表7 出土遺物観察表	244
第3節 古墓	
(2) 山田館跡	
付表8 山田館跡遺構表(墓関係)	315
第4章 結語	
付表9 近舞線関係遺跡消長表	336

## 第1章 位置と環境

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡が所在する福知山市は、京都北部の、いわゆる中丹地域に位置している。地形的には標高200mの丹波山地の中に開けた盆地である。

この盆地の中には、京都北部最大の河川である由良川が貫流しており、当調査地はその上流の竹田川と土師川との合流地点に散在している。ふたつの河川により形成された平地は、南北2km・東西0.5kmに及んでいるが、そのほとんどはかつては氾濫原であり、実際に生活基盤を形成していたのは、河岸段丘より上部の地帯であった。

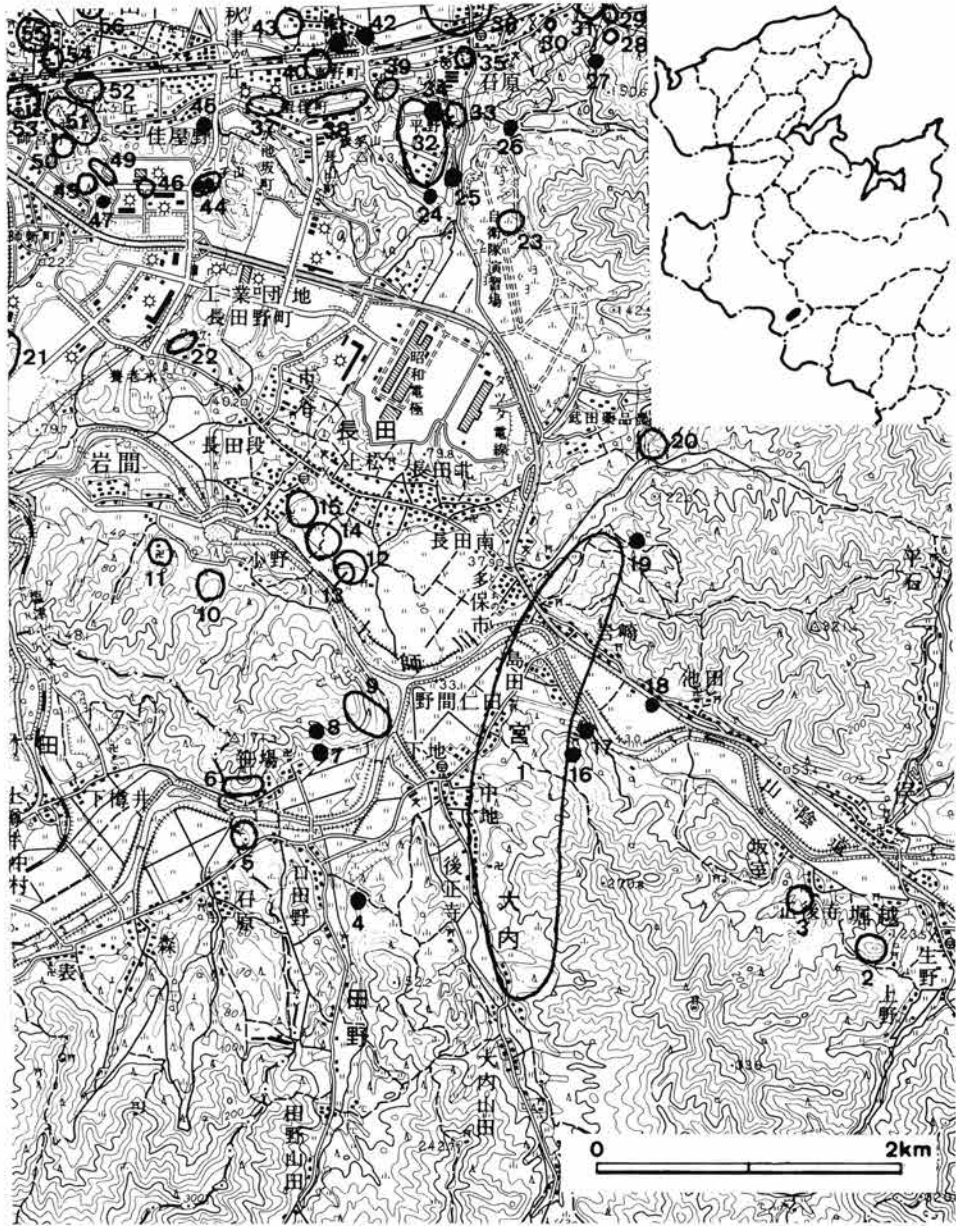
今般、調査対象となった地帯は、現集落と畑地のある台地より一段上がった丘陵地であり、その多くは山林となっていた。地質的には、これらの丘陵地は洪積層で、小滝篤夫氏<sup>(注1)</sup>によれば、長田野段丘と同じく高位段丘に相当する地帯と、段丘面の標高が約50mで、現河床からの比高が約20mの中位段丘に相当する地帯に分布している。そして、これらの段丘のところどころは小河川により開析されて、小さな谷間を形成している。

歴史的環境は以下のとおりとなる。福知山に人々が住み始めたのは遠く1万年以上前に遡る。和田賀遺跡(第1図15)で採集されたチャート製削器は、その製作技法から旧石器時代の所産である可能性が指摘<sup>(注2)</sup>されている。縄文時代の遺跡は不明だが、武者ヶ谷遺跡から縄文時代草創期の小型丸底土器が出土しており、半田遺跡からは後期の遺物が出土している。しかし、縄文時代を通じて遺跡数は少なく、この状態は弥生時代前期まで続く。将来、低湿地あるいは低位河岸段丘を発掘調査すれば、発見される可能性を残している。

遺跡数が増大するのは、弥生時代中期になってからである。遺跡名を列举すると上野平遺跡(丘陵上)や観音寺遺跡(低地)を始め、当調査においては宮遺跡(10)、ケシケ谷遺跡(9)、奥谷西遺跡(8)、多保市城跡下層遺跡(16)などがあり、福知山の中でも密集した状態を呈している。これは、当時の人々が居住地を中位段丘面に求めた結果であり、たまたまその一帯に自動車道が設定されたために、飛躍的に遺跡の存在が知られるところとなった。後期になるとやや遺跡数は減少する。

古墳時代前期の集落跡はあまり知られていないが、古墳は多数築かれている。そのタイプは豊富谷丘陵遺跡<sup>とよとみだに</sup>にみられるように、弥生時代の方形台状墓の系譜をひくものである。この時期の古墳は立地や他の外見に差異はみられない。古墳時代中期になると、その中にやや規模の大きいものがあり、他の古墳との格差が認められるようになる。後期になると群集墳が形成される。墳形は「方形」から「円形」へ変化し、杉本宏氏はその事象を「在<sup>(注3)</sup>





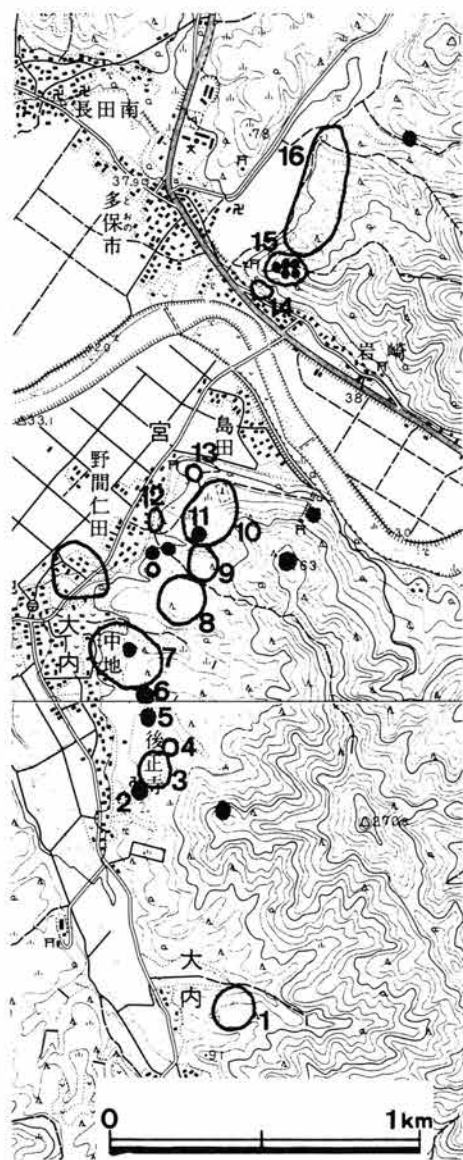
第1図 遺跡分布図

- |               |              |              |              |               |
|---------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 1. 近舞線関係遺跡    | 2. 堀越城跡      | 3. 正後寺城跡     | 4. 口田野古墳     | 5. 田野城跡       |
| 6. 境谷1~6号墳    | 7. 庵戸古墳      | 8. 庵戸山西古墳    | 9. 庵戸山1~11号墳 | 10. 岩間遺跡      |
| 11. 岩間城跡      | 12. 仲堤遺跡     | 13. 高橋屋敷跡    | 14. 前ヶ嶋遺跡    | 15. 和田賀遺跡     |
| 16. 古墳        | 17. 古墳       | 18. みこし塚古墳   | 19. 狐塚古墳(仮称) | 20. 多保市廃寺     |
| 21. 高畑古墳群     | 22. 宿1・2号墳   | 23. 丸山1・2号墳  | 24. 平野古墳     | 25. 狐塚古墳      |
| 26. 火柴原古墳     | 27. 小谷古墳     | 28. 西山館跡     | 29. 西山古墳     | 30. 興経塚       |
| 31. 興南遺跡      | 32. 上野平遺跡    | 33. 池尻1・2号墳  | 34. 上野古墓     | 35. 石原城(洞玄寺)跡 |
| 36. 石原遺跡      | 37. 中坂1~9号墳  | 38. 大池坂1~4号墳 | 39. 仏山1・2号墳  | 40. 下野遺跡      |
| 41. 山ノ下古墳     | 42. 赤の水古墳    | 43. 土遺跡      | 44. 二子山1・2号墳 | 45. 八ヶ谷古墳     |
| 46. 大野下遺跡     | 47. 大野下古墳    | 48. 土師新町城跡   | 49. 南町1~4号墳  | 50. 土師城跡      |
| 51. ケシ山1~17号墳 | 52. 宝蔵山1~6号墳 | 53. 土師南遺跡    | 54. 岩畑遺跡     |               |
| 55. 愛宕山遺跡     | 56. 前田坪ノ内城跡  |              |              |               |

地性」の否定と把えており、福知山の地においても西日本通有の傾向が認められると理解している。

奈良時代になると、調査地周辺は天田郡六(人)部郷の中心部となっている。多保市廃寺が経営され、かなり有力な地であった。多保市城跡下層遺跡では当時の住居跡が検出されており、関連が注目される。

平安時代になると遺跡は不分明だが、後期になると「六人部荘」が立荘され、その荘官屋敷と推定される大内城跡(7)が発掘調査されている。多量の遺物が出土したが、とりわけ中国製陶磁器は約1,300片を数え、全国的にみても注目される遺跡である。「六人部荘」は、平安時代末期は八条院領であり、それから春華門院・順徳天皇に受け継がれるが、承久の変で幕府が没収した。後には大覚寺統に伝領されるが、南北朝時代になると武家方に接收されたらしく、天竜寺領となっている。この時代には大内城跡や城ノ尾城館跡(13)などが機能していたが、城の縄張りのはびやかで、広い丘陵地の一面を占めており、防御体制としては緩いものであった。ところが戦国時代になると後青寺跡(5)や仁田城跡(12)のように高い土塁の外側に空堀をめぐらせた一辺40～50mの方形城館が築かれる。防御体制はかなり厳格に執っており、緊張状態を追証できる。しかし、これらの方形城館は現在の大字単位程度であり、小規模な集団がそれぞれに結束しているのみで、ついに戦国時代末期まで、これらを統轄する城館は現われなかった。



第2図 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

1. 山田館跡
2. 洞楽寺古墳
3. 洞楽寺遺跡
4. 洞楽寺北遺跡
5. 後青寺城館跡・後青寺古墳
6. 小屋ヶ谷古墳・後正寺古墳
7. 大内城跡・同下層遺跡
8. 奥谷西遺跡
9. ケシヶ谷遺跡
10. 宮遺跡・宮墳墓群
11. 城ノ尾古墳
12. 仁田城跡
13. 城ノ尾遺跡
14. 多保市遺跡
15. 薬王寺古墳群
16. 多保市城跡・同下層遺跡

(伊野 近富)

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至る経過

近畿自動車道舞鶴線(現在舞鶴自動車道と呼称)は、兵庫県美囊郡吉川町から京都府北部の日本海に面する舞鶴市に至る高速自動車専用道路として、「国土開発幹線自動車道建設法」並びに「高速自動車国道法」に基づき計画されたものである。本自動車道の完成により京都府ならびに兵庫県北部の丹波・丹後地域の開発や経済の活性化を促進し、また、京阪神地域との交流にも大きく寄与するものと期待されている。

本道路の建設計画は、中国自動車道吉川ジャンクションから、西舞鶴に至る総延長76.5kmであるが、諸般の事情により、まず兵庫県多紀郡丹南町の(仮称)丹南篠山口インターチェンジから、京都府福知山市の(仮称)福知山インターチェンジまでの約41.2km区間について、昭和52年9月に路線の発表が行われた。このため、京都府教育委員会では、昭和52年度に日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所の依頼を受けて、上記予定路線の内、京都府側区間の福知山市大字大内山田から同市長田に至る、延長15km間の遺跡分布調査を実施した。この分布調査の結果、従来から知られていた遺跡のほかこの分布調査により新たに確認された遺跡を加え、合計9か所の遺跡が路線内に所在することが明らかになった。路線内の分布調査についてはその後も継続して行われ、樹木伐採後に確認されたものも含め最終的には14遺跡にのぼることが判明した。京都府教育委員会では、日本道路公団とこれらの埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、事前に発掘調査を実施し、遺跡の範囲および性格等を確認するとともに、特に重要な遺構等が検出された場合、その保存方法を検討するための資料を作成することで合意に達した。

現地発掘調査は、昭和54年度に開始され、翌55年度調査とともに京都府教育委員会によって実施された。その後、昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター(以下、センターと呼ぶ)が設立されるに至り、近畿自動車道の調査についても当センターが継続して行うことになった。

現地調査は、昭和60年3月をもってすべての調査を終了し、その後、61・62の2か年を費やして調査の整理・報告書等の作成作業を実施した。各年度毎の調査遺跡・概要等については、次節で述べるが、当センターが調査主体となってから5か年、京都府教育委員会の調査期間を含めると7年、さらに整理期間の2か年を足すと全体で9年間に及ぶ長期の発掘調査になった。また、調査遺跡の内容も、集落跡・古墳・古墓・城跡等様々であり、

特に昭和56年から57年にかけて調査を行った大内城跡は、規模・構造の点からも全国的に話題を呼んだ。

今回の調査に当たっては、多数の機関・個人の方々から、多大なる協力及び援助を受けた。特に、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・京都府教育委員会・福知山市教育委員会・同市編さん室・同企画調整室・福知山史談会・京都府中丹教育局の各諸機関からは、調査全般にわたって協力を受けた。さらに、地元、宮地区及び大内地区の区長ならびに、宮総代(当時)今川栄一氏、大内総代(同)西躰 太氏には格別のご高配を賜ったほか、各地区の方々には現地作業において多数の参加協力を得ることができた。また、多数の学生諸氏には、現地調査及びその後の整理作業に関して多大の援助を受けた。<sup>(注4)</sup> これらの方々の献身的な協力なしには、おそらく順調に調査を進めることはできなかったものと思われる。

最後になったが、埋蔵文化財の保護に理解を示され、発掘調査を快諾された土地所有者の方々や、本報告書の作成に当たって資料の教示・助言を賜った方々、有形無形のご援助を賜った多くの方々に対し、調査関係者一同、心より感謝申し上げます。

(辻本 和美)

#### 年度別調査組織一覧

昭和54年度	
発掘調査主体者	京都府教育庁指導部文化財保護課
発掘調査総括責任者	東 条 寿(文化財保護課課長)
発掘調査責任者	堤 圭三郎(同上 記念物係係長)
発掘調査担当者	辻 本 和 美(同上 埋蔵文化財調査員) 石 井 清 司(同上 埋蔵文化財調査員) 大 槻 真 純(同上 埋蔵文化財調査員)
発掘調査事務局	京都府中丹教育局
昭和55年度	
発掘調査主体者	京都府教育庁指導部文化財保護課
発掘調査総括責任者	東 条 寿(文化財保護課課長)
発掘調査責任者	堤 圭三郎(同上 記念物係係長)
発掘調査担当者	辻 本 和 美(同上 埋蔵文化財調査員) 石 井 清 司(同上 埋蔵文化財調査員) 引 原 茂 治(同上 埋蔵文化財調査員)
発掘調査事務局	京都府中丹教育局
昭和56年度	
発掘調査主体者	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
発掘調査総括責任者	栗 栖 幸 雄(事務局長)
発掘調査責任者	堤 圭三郎(調査課課長)
発掘調査担当者	松 井 忠 春(調査課主任調査員) 辻 本 和 美(調査課調査員)

発掘調査事務責任者	伊野近富(調査課調査員)
昭和57年度	白塚弘(総務課課長)
発掘調査主体者	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
発掘調査総括責任者	栗栖幸雄(事務局長)
発掘調査責任者	堤圭三郎(調査課課長)
発掘調査担当者	辻本和美(調査課主任調査員)
	伊野近富(調査課調査員)
	小山雅人(調査課調査員)
	岩松保(調査課調査員)
	藤原敏晃(調査課調査員)
発掘調査事務責任者	白塚弘(総務課課長)
昭和58年度	
発掘調査主体者	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
発掘調査総括責任者	栗栖幸雄(事務局長)
発掘調査責任者	堤圭三郎(調査課課長)
発掘調査担当者	辻本和美(調査課主任調査員)
	伊野近富(調査課調査員)
	岩松保(調査課調査員)
	藤原敏晃(調査課調査員)
発掘調査事務責任者	白塚弘(総務課課長)
昭和59年度	
発掘調査主体者	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
発掘調査総括責任者	荒木昭太郎(事務局長)
発掘調査責任者	堤圭三郎(調査課課長)
発掘調査担当者	辻本和美(調査課主任調査員)
	伊野近富(調査課調査員)
	小山雅人(調査課調査員)
	藤原敏晃(調査課調査員)
	山下正(調査課調査員)
発掘調査事務責任者	白塚弘(総務課課長)
昭和60年度	
発掘調査主体者	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
発掘調査総括責任者	荒木昭太郎(事務局長)
発掘調査責任者	堤圭三郎(調査課課長)
発掘調査担当者	長谷川達(調査課主任調査員)
	伊野近富(調査課調査員)
	藤原敏晃(調査課調査員)
	山下正(調査課調査員)
発掘調査事務責任者	白塚弘(総務課課長)

## 第2節 各年度の調査

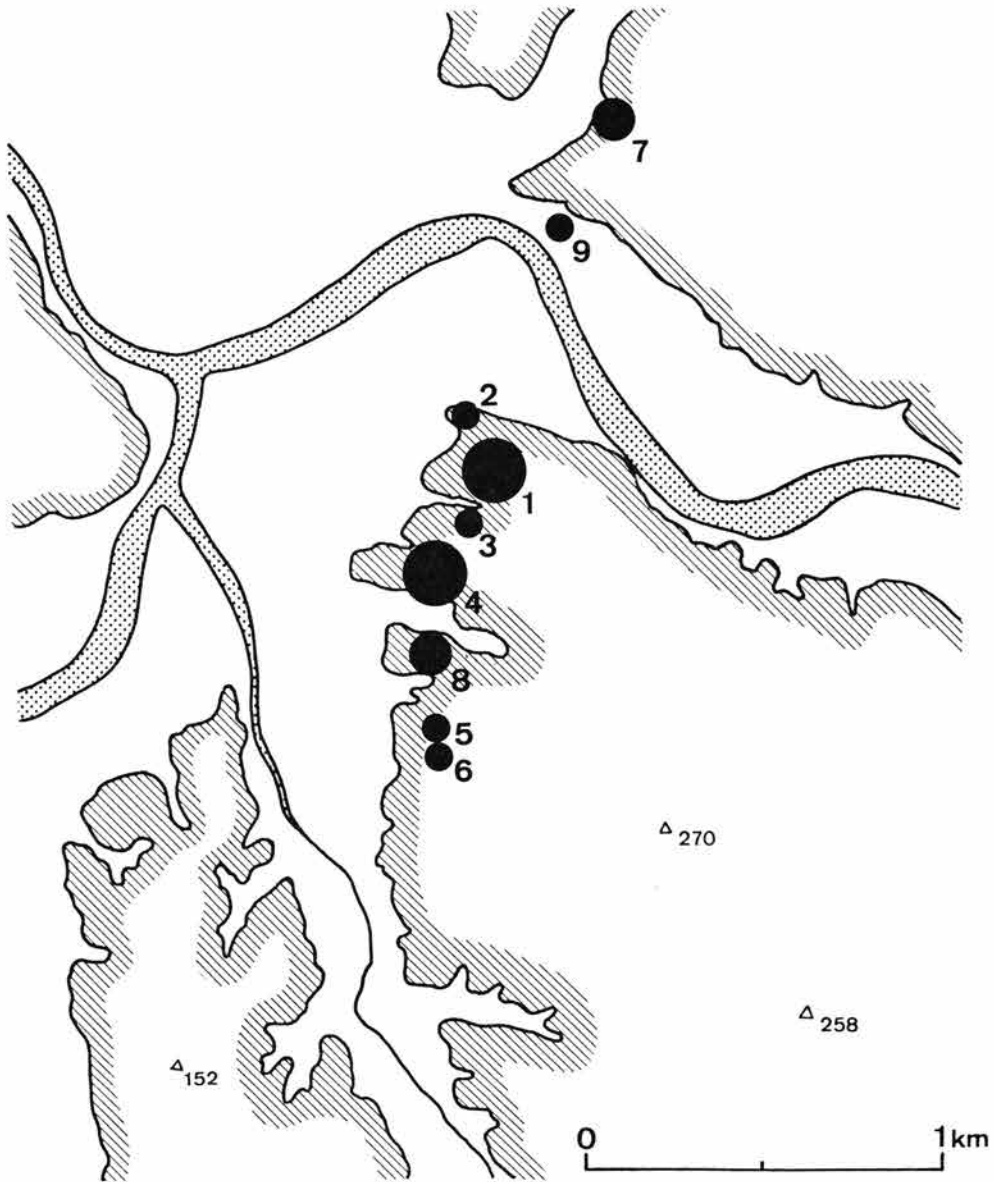
各年度毎に調査した遺跡は、下表のとおりである。

付表1 各年度別調査一覧表

年度	遺跡名	種類	位置	時代	担当者	調査期間	概報
54	城ノ尾古墳 宮遺跡(試掘)	古墳	11	古墳後期	辻本 和美 石井 清司 辻本 和美	55. 3~55. 4	『府報』 1981
		集落跡	10	弥生~室町		55. 3~55. 4	
55	城ノ尾古墳 宮遺跡(試掘)	古墳	11	古墳後期	辻本 和美 引原 茂治 辻本 和美	55. 4~55. 7	『府報』 1981
		集落跡	10	弥生~室町		55. 4~55. 7	
56	大内城跡 後青寺古墳 後青寺城館跡 宮遺跡 宮墳墓群	城館	7	平安~室町	伊野 近富 辻本 和美 辻本 和美	56. 6~57. 3	『概報』 第1冊
		古墳	5	古墳後期		56. 8~56. 9	
		城館	5	室町時代		56. 10~56. 12	
		集落跡	10	弥生~室町		56. 10~56. 12	
57	大内城墳墓 後正寺古墓 小屋ヶ谷古墳 洞楽寺古墳 山田館跡 城ノ尾城館跡 城ノ尾遺跡 ヶシヶ谷遺跡(試掘)	古墓	7	鎌倉~室町	伊野 近富 岩松 保 伊野 近富 岩松 保 小山 雅人 伊野 近富	57. 4~57. 7	『概報』 第6冊
		古墓	6	平安~江戸		57. 6~57. 12	
		古墳	6	古墳後期		57. 9~57. 11	
		古墳	2	古墳後期		57. 12~58. 3	
		古墓	1	室町時代		57. 12~58. 3	
		城館	13	鎌倉時代		57. 12~58. 3	
		集落跡	13	弥生~古墳		58. 3	
58	洞楽寺遺跡 洞楽寺北遺跡 ヶシヶ谷遺跡 奥谷西遺跡 薬王寺古墳群	集落跡	3	古墳後期	岩松 保 岩松 保 藤原 敏晃 小山 雅人	58. 5~58. 6	『概報』 第10冊
		集落跡	4	不明		58. 8~59. 3	
		集落跡	9	弥生~古墳		58. 12~59. 3	
		集落跡	8	弥生~古墳		59. 3	
		古墳	15	古墳後期		59. 3	
59	多保市城跡 奥谷西遺跡 薬王寺古墓 薬王寺古墳群	城館跡	16	鎌倉~室町	伊野 近富 藤原 敏晃 山下 正 山下 正	59. 5~60. 3	『概報』 第13冊
		集落跡	8	弥生~古墳		59. 5~60. 3	
		古墓	15	不明		59. 10	
		古墳	15	古墳後期		59. 3~60. 3	
60	多保市遺跡 薬王寺4・5号墳 仁田城跡 大内城跡下層遺跡	集落跡	14	奈良時代	藤原 敏晃 山下 正 藤原 敏晃 藤原 敏晃	60. 5	『概報』 第20冊
		古墳	15	古墳後期		60. 5~60. 7	
		城館跡	12	鎌倉~室町		60. 6~60. 8	
		集落跡	7	弥生~室町		60. 8~10, 61. 3	

### 第3章 各遺跡の調査

#### 第1節 集 落 跡



第3図 本文掲載集落跡遺跡分布図

- 1: 宮遺跡    2: 城ノ尾遺跡    3: ケシケ谷遺跡    4: 大内城下層遺跡    5: 洞楽寺北遺跡  
6: 洞楽寺遺跡    7: 多保市城跡・同下層遺跡    8: 大内城跡下層遺跡    9: 多保市遺跡

## (1) 宮 遺 跡

## 1. 位 置

宮遺跡は、由良川の一支流である土師川と竹田川の合流点を望む丘陵尾根先端部に位置する。この丘陵は、標高336mを最高所として南東から北西方向にのびており、東側は現在国道9号線が走る土師川の形成した谷筋に、西側は大内谷と呼ばれる狭い谷地形に面している。遺跡の所在する付近の標高は55～70mを測り、比較的なだらかな段丘状地形を呈するが、遺跡前面にあたる丘陵下の沖積平野面までは、比高差約30m前後の急斜面となる。

## 2. 調査の方法

調査にあたっては調査地全面にわたり地区割り設定を行った。地区割りは、道路建設のセンター杭(NO375, NO375+60)を用いて軸線を定め、全域を10m方眼に分割した。地区表示は、南北軸を南方からA～Vのアルファベット、東西軸を東方から6～18の数字で表し、各個別の地区名は両者の組み合わせにより呼称した。各地区内は、さらに2m四方の小区画に分割し、地区東南隅から西方向に1～25の番号を付け、遺物取り上げ等の最小単位とした。発掘調査作業にあたっては、まず、グリッド掘りによる試掘調査から実施することにし、各地区の北東隅に2m四方のグリッドを1か所ずつ開掘することを原則とした。試掘調査で開けたグリッド数は合計62か所である(第4図)。

試掘調査の結果、広範囲にわたって遺構・遺物の存在が確認されたが、このうち城ノ尾古墳周辺(A地点)およびB・C・Dの各地点で顕著な遺構が検出された。このためこれらの地点については面的な拡張調査を行った。各地点の発掘調査については、各年度にまたがり、また、城ノ尾古墳・宮墳墓群・城ノ尾遺跡と同一地域にあるため明確に分離することは難しいので、ここでは、試掘調査の概要および各地点の調査に分けて記述することにする。

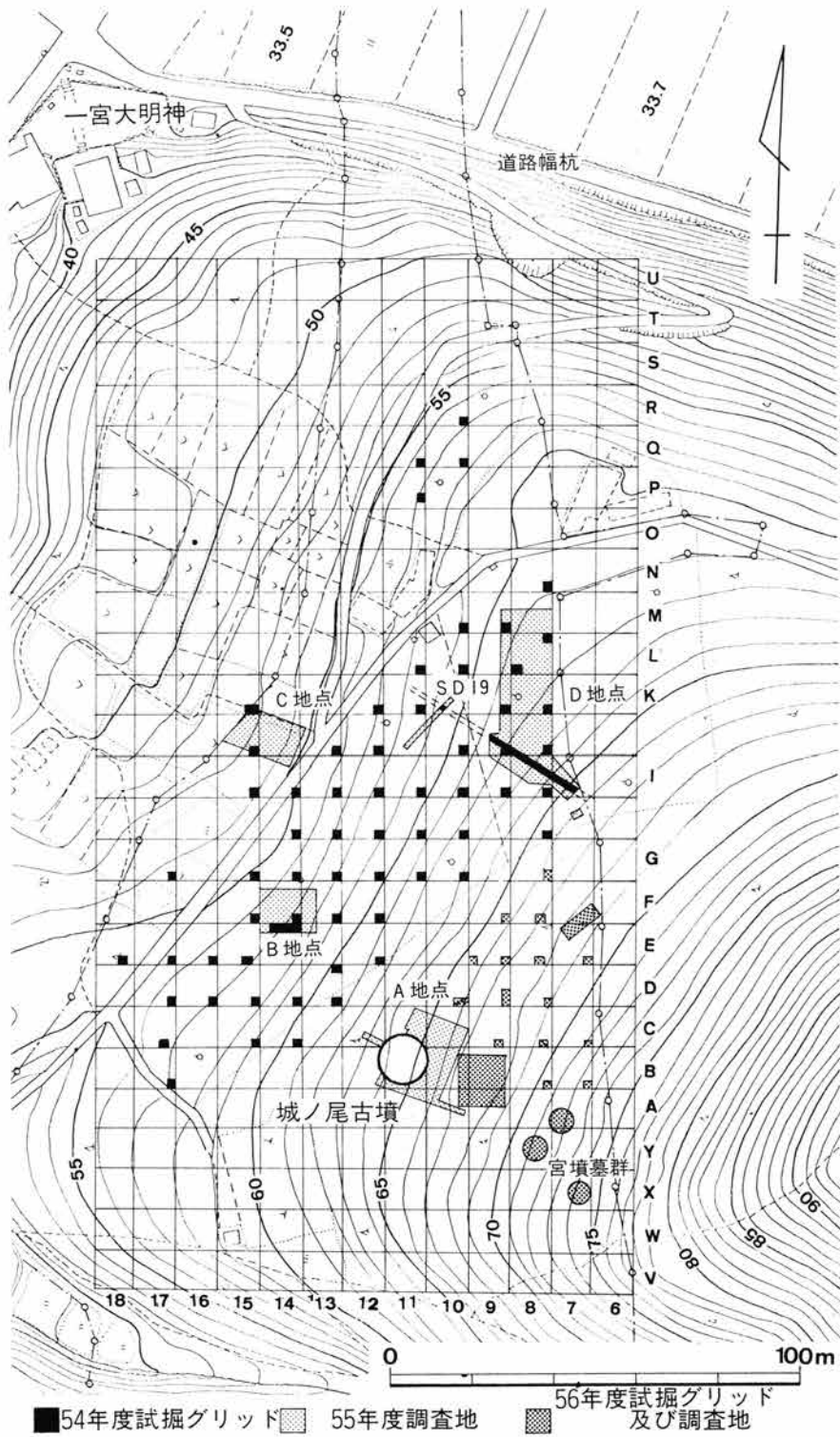
## 3. 試掘調査の概要および遺跡の層位

各試掘グリッドの基本層位は、表土下20～40cmが暗褐色土で、それ以下が暗褐色土の地山層になる。地山検出面は各地区によって深淺があるが、今回検出した遺構はすべて地山面から掘り込まれている。

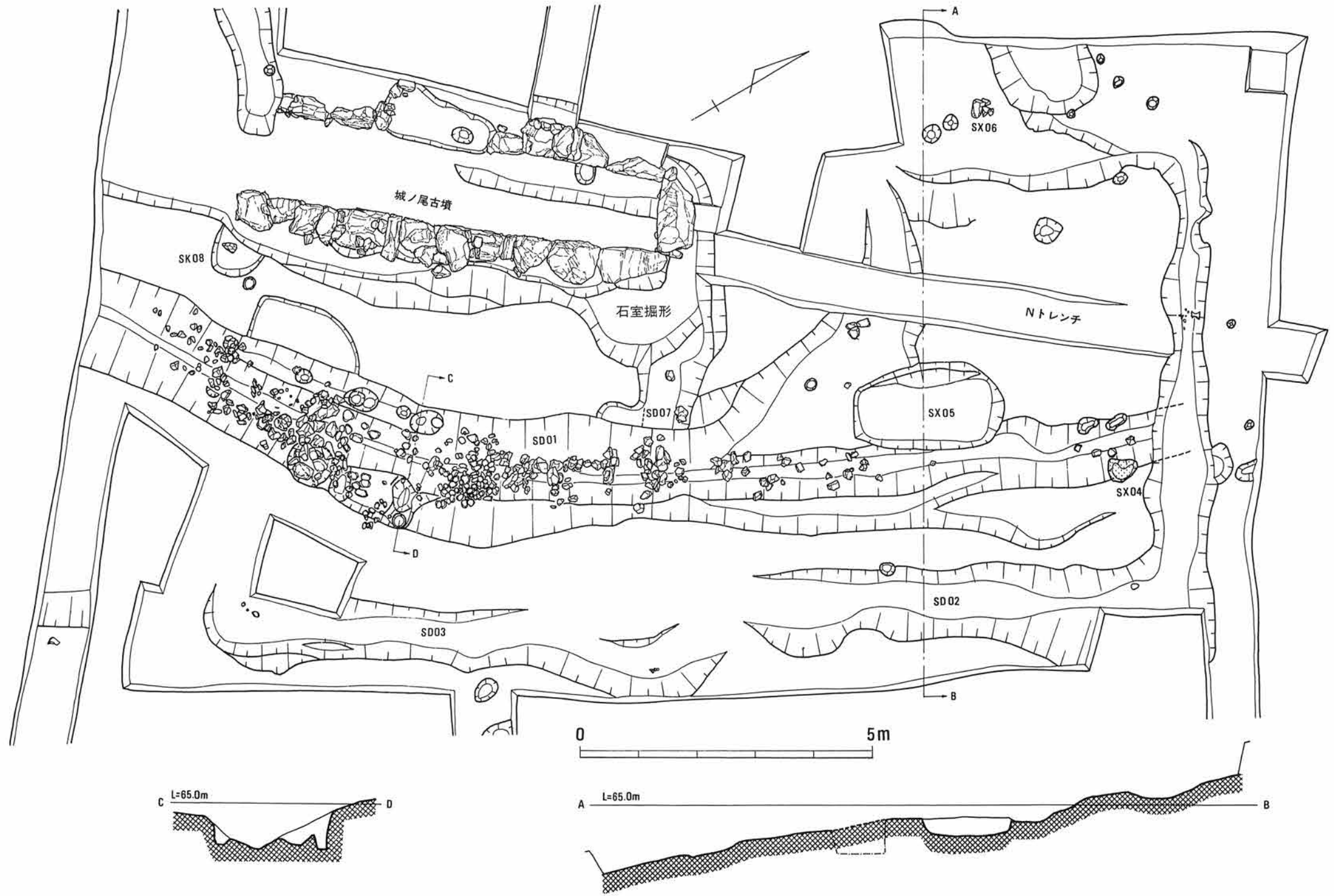
**F14** 幅80cm・深さ60cmの断面台形状の南北溝を検出した。埋土に弥生土器片を含む。南西方向に拡張した結果、溝は西側でL字形に曲がるのが判明した。溝西端部は、攪乱のため不明である。B地点の調査を参照されたい。

**L9** 表土下40cmから、深さ約80cmの落ち込みを検出した。埋土に多量の弥生土器片を





第4図 宮遺跡各地点調査地位置図



第5図 A 地点検出遺構図

含む。D地点の調査を参照されたい。

**K8** 表土下約30cmの地山面で、直径約20cmの柱穴状ピット列を確認した。ピットは6個が約20cmの間隔を開けて並んでおり、北東から南西方向にのびる。ピット内に弥生土器の小片を含むが、時期・性格等は不明である。

**K15** 地山面に堆積した黒褐色土の上面を掘り込む井戸状の遺構を検出した。直径約90cm・深さ約50cmを測る。内部から人頭大の石塊多数と完形に近い瓦器碗が1点出土した。C地点の調査を参照されたい。

**L8-A** 北東壁際から土壇状の落ち込みを検出した。土壇は二段になり、一段目が深さ約15cm、二段目が約30cmを測る。内部には、炭・焼土が堆積し、弥生土器片・石器の剥片等が出土した。D地点の調査を参照されたい。

このほか、G14・J10・J9・J12・M8・N9の各グリッドで遺構状のものを検出したが、後世の削平が著しく遺存状態は概してよくない。

#### 4. A 地点(城ノ尾古墳周辺)の調査

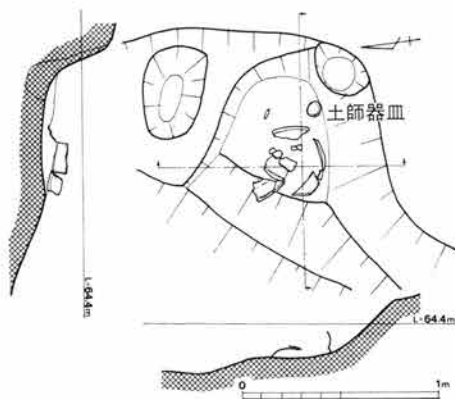
城ノ尾古墳の墳丘築成の状態を知るために周辺部に入れたトレンチから弥生時代に属する溝および各時期の遺構を確認した。このため、墳丘の東側全面を除去し下層遺構の調査を実施した。調査面積は、約200m<sup>2</sup>である。

##### (1) 検出遺構(第5図)

**SD01** 城ノ尾古墳の墳丘東裾を切って南北に走る溝である。断面はU字形で最大幅2.2m・深さ50cmを測る。溝は南に行くにしたがって深くなり、断面の形状も深く切れ込んだV字状を呈するようになる。北端は削平されており途中で消失する。墳丘の北側にも同様な溝が存在し、このSD01と合流する。検出部分の延長は27mを測るが、さらに南側にのびるようである。溝内には、拳大から人頭大の礫が多量に含まれており、礫群に混じて瓦器碗や土師器の皿類・鉄小刀・鉄釘が出土した。遺物はいくつかの固まりをもって出土しており、また、それらを区画するように割り石が溝と直交して並べられていた。溝内の堆積土には若干の炭と骨片が認められ、この状況から火葬墓に係わる埋葬施設になるものと考えられる。鉄釘等の出土からみて木櫃等を埋納したものと想定される。

溝内の遺構としてはこのほか円形ピット列がある。ピットは、溝の両側斜面に掘られており、その形状から南北二群に分けることができ、それぞれが溝両肩のものと相対している。北群の4つのピットは平均で径40cm・深さ20cmを測り、斜面のわずかな平坦面に穿たれている。ピット群のある溝東側の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっており、表面には火を受けた痕跡がある。この南東の平坦面から土師器皿と、瓦質の鍋形土器が倒立した状態で

出土した(第6図)。南のピット群は北側にあるものに比べ径も小さく、とくに東の2つのピットは溝の底部に接して存在する。これらのピット群の性格としては、溝に伴う小規模な橋の脚柱または塀等の施設が想定されるが、前述したように溝内の埋葬施設との関係も考慮に入れる必要がある。溝SD01の時期は、埋土から出土した土器から鎌倉時代前半頃(13世紀前半)に比定される。



第6図 SD01瓦質鍋検出状況図

**SD02** SD01の南東側斜面上方で検出した溝である。最大幅1.3m・深さ20cmを測り、断面はU字形である。北東側で屈曲し平面の形状はL字形を呈する。溝の南および北側は先のSD01や古墳の造営の際に削平を受けている。埋土は暗褐色土で、弥生土器片とともに、北辺の溝内から弥生土器の高杯と石庖丁の未製品が出土した。この溝は後述する城ノ尾古墳墳丘下で検出したSD07・SD03と一体のもので、方形周溝墓の区画溝になるものと考えられる。

**SD03** SD02の南西延長上に位置する溝状遺構である。約9mが残存するのみで、溝両端および斜面下方の溝肩の一部は削平され消失する。なお、溝端の検出状況からみて斜面下方に屈曲してのびるものと想定される。

**SX04** 調査地南東で検出した平面形状が不整三角形を呈する土坑状遺構である。長辺55cm・短辺40cm・深さ約32cmを測る。土坑内の埋土には若干の焼土・炭が混入する。性格等については不明であるが、中世溝SD01によって切られており、弥生時代に属するものと考えられる。

**SX06** 城ノ尾古墳墳丘の北裾に接する位置で検出した埋石遺構である。長軸35cm・短軸20cmを測る土坑内に小人頭大の割石を詰める。遺物等の出土がなく時期・性格等不明であるが、類例からみて火葬墓になる可能性がある。

**SD07** 城ノ尾古墳墳丘下層から検出した溝である。幅約1mを測る。東端はSD01、西端は石室掘形により削平されている。埋土に弥生土器片を含む。

**SK08** 城ノ尾古墳の羨道前端部付近で検出した土坑状遺構である。長軸約80cmを測るが、北辺部分はSD07と同様石室掘形によって削平を受ける。深さ約28cm前後を測り、埋土に石塊・弥生土器片を含む。

## (2) 出土遺物

A地点の調査によって弥生時代から中世に属する各種の遺物が出土した。以下、出土遺物・所属時期別に分けて記述し、また、試掘調査で出土した遺物についても合わせてふれておきたい。

## 弥生土器(第7図)

弥生土器には、壺・甕・高杯の各器種がある。

**壺** 形態の差異によりA1・A2・B・C・Dに細分することができる。

**壺A**(1・14~16) 口縁部は大きく外反し、口縁端部は上下方向にわずかに拡張するものである。14は口縁上下の端部にキザミメ文、頸部に指頭圧痕のある粘土の貼り付け突帯を巡らす。15は口縁部端部上面に竹管文を押圧する。

**壺B**(2) 2は短い頸部からさらに屈曲し、水平方向にのびる口縁部をもつものである。端部は無文である。

**壺C**(3) 頸部から口縁部にかけて大きく広がるものである。口縁端部は面をなす。器壁外面は、口頸部以下を縦方向のハケメ、内面は横ないし斜行するハケメ調整を行う。

**壺D**(4) 口縁部を途中で屈曲させ真っすぐに立ち上がらせるものである。口縁端部は面をつくる。器壁の調整は内外面とも縦ハケである。

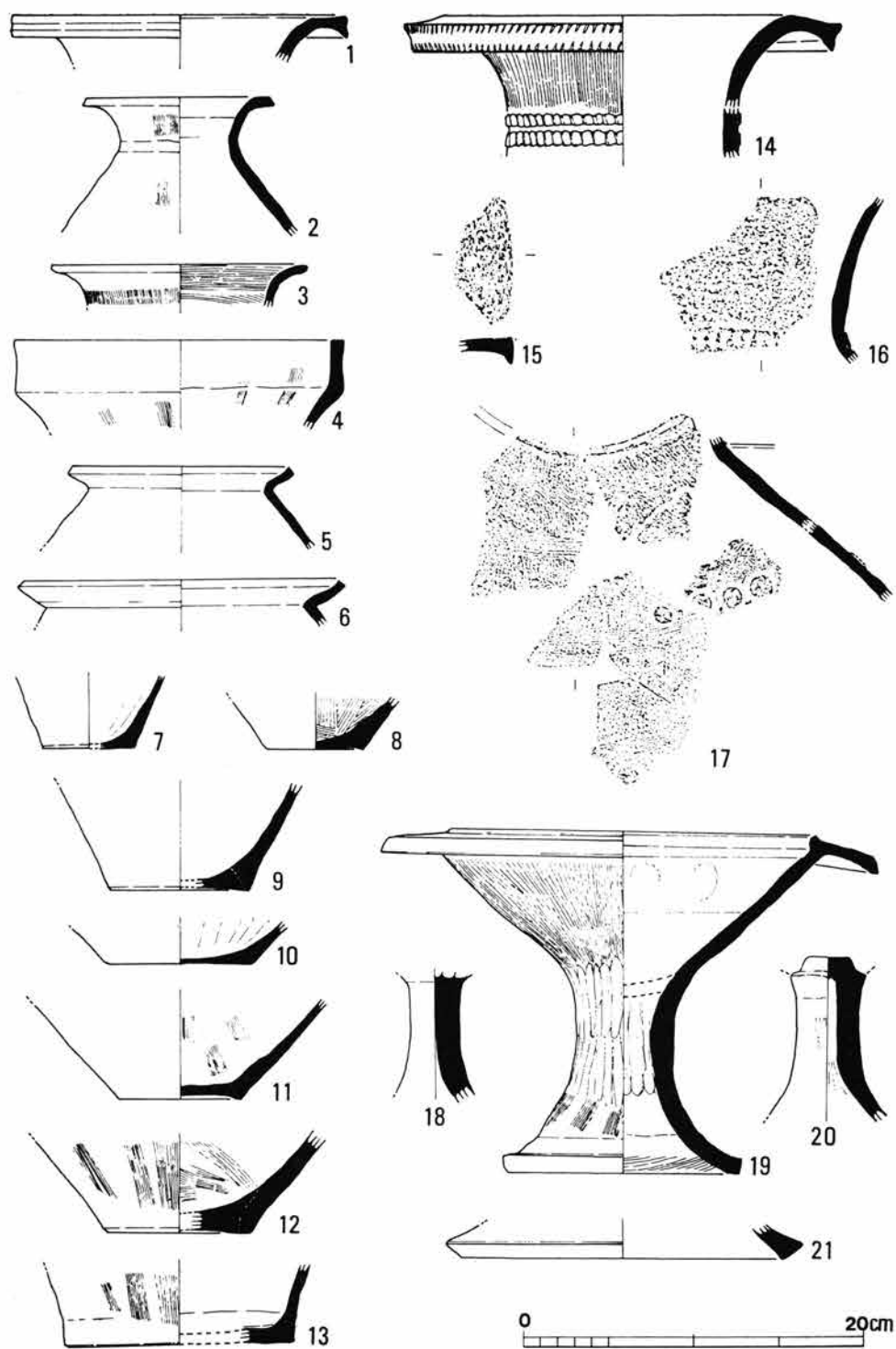
このほか17は、頸部を欠損する壺体部の破片である。頸部との接合部に断面三角形の粘土突帯を貼り付け、それ以下を櫛描きの波状文と直線文を交互に施す。また、この櫛描文の間には円形の粘土浮文を貼る。

**甕** 5・6は体部から短く外上方へのびる。口縁端部は小さな面をなし上端はつまみ上げ稜を形成している。

7~13は底部の破片である。平底ないし若干の凹み底をもつものがある。13は底径の大きいもので、体部は底部から直立気味に立ち上がる。

**高杯**(18・19) 19は杯部から口縁部が斜め上方に広がり、口縁端部は水平に外側に張り出す。端部はやや垂下し狭い面を形成する。口縁部内面には一条の突帯を貼る。器壁外面は、くびれ部付近を縦方向の指ナデ、それ以外の部分は縦ハケを行う。杯部内面は指オサエのあとナデ調整、脚部は下端に横ハケを施す。色調は褐色を呈し、砂粒を比較的多く含む。18は脚柱部の破片である。

2・4・5・11・13・18・19はSD02出土である。その他は各グリッドからの出土である。1はH12地区グリッド、3・16・17はJ9地区グリッド、6・8・12・14はF14地区グリッド、7はF11地区グリッド、9はF12グリッド、15はG13地区グリッド、21はH8地区グリッドからそれぞれ出土した。

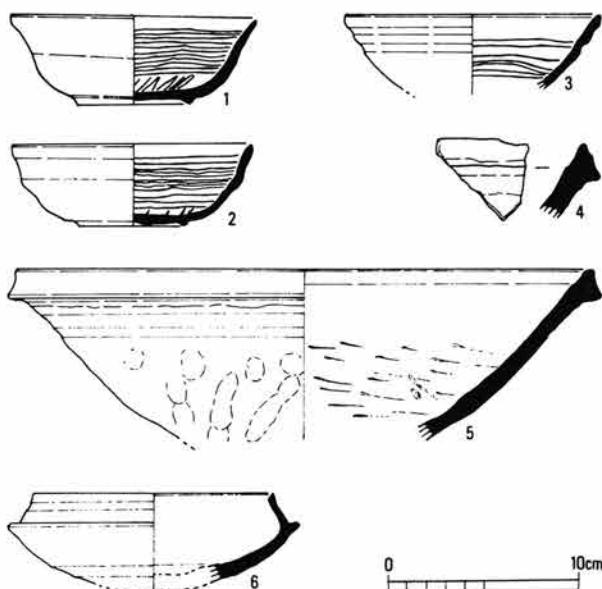


第7図 弥生土器実測図

## その他の土器(第8図)

前述した弥生土器のほか須恵器・瓦器類がある。

**瓦器椀** 1～3は断面三角形の低平な高台を貼り付けたものである。口径に比して深く、ずんぐりした器形を呈している。口縁端部は肥厚させ、強く横ナデする。端部内面の沈線等はない。器壁外面の暗文は不明瞭であり、内面見込み部分に鋸歯文状の暗文、その上半体部に細い渦巻き状の暗文を施す。灰黒色を

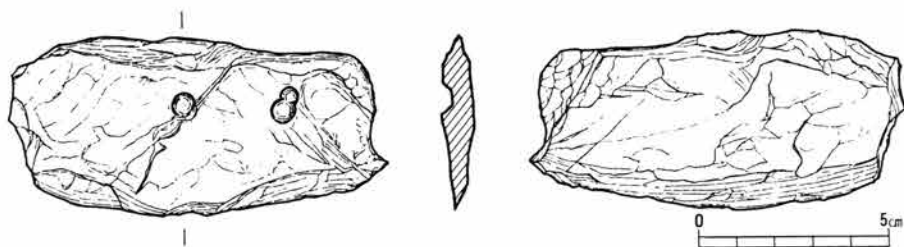


第8図 その他の土器実測図

呈し、胎土は灰白色精良である。全体的に作りは粗雑である。1は口径13cm・底径5.9cm・器高4.6cm。2は口径12.6cm・底径5.6cm・器高4.2cmを測る。

**須恵器** 4・5は須恵器の練鉢の口縁部片である。5は端部を拡張させ段を作ってやや内湾気味に立ち上がるものである。体部は直線的に外上方にのびる。口縁部の周囲は内外面とも横ナデを行い、体部外面の下半部には指圧痕が残る。体部内面は横方向のヘラケズリを施す。色調は青灰色を呈しており、内面にはところどころに靱押痕がみられる。神出窯系の製品と思われる。口縁部は片口状になるものであろう。復原口径約32cmを測る。4も同型式の破片である。口縁端部には黒色の釉が付着する。

6は古墳時代の須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりが高く、端部に段を有する。青灰色を呈しており、胎土には若干の砂粒を含む。陶邑型式編年のⅡ型式1段階ないし2段階に相当するものである。



第9図 石 庖 丁 実 測 図

1・2はE15地区グリッド井戸状遺構, 3・4・5はF14地区グリッド攪乱層, 6はF17地区グリッドからの出土である。

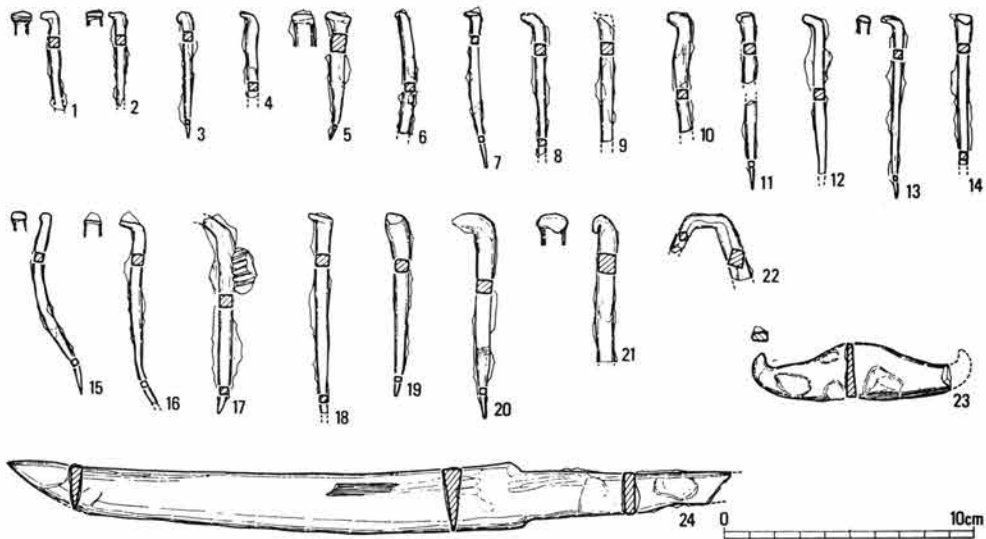
**石器(第9図)** A地点(城ノ尾古墳下層)方形周溝墓内から石庖丁が1点出土している。原岩から剝離した粘板岩の周囲をほぼ方形におおまかに打ち欠いたあと, 若干の研磨を加えるのみの未製品である。刃部は片刃状に成形しており, ゆるやかに外湾する。側面には2か所の紐孔が認められるが, 両方とも途中で穿孔を止めている。同側面には, これ以外にも2か所に小穿孔痕がみられる。長さ10cm・幅4.7cm・厚さ0.9cmを測る。

**SD01出土遺物**

SD01の出土遺物には鉄製品と土器類がある。

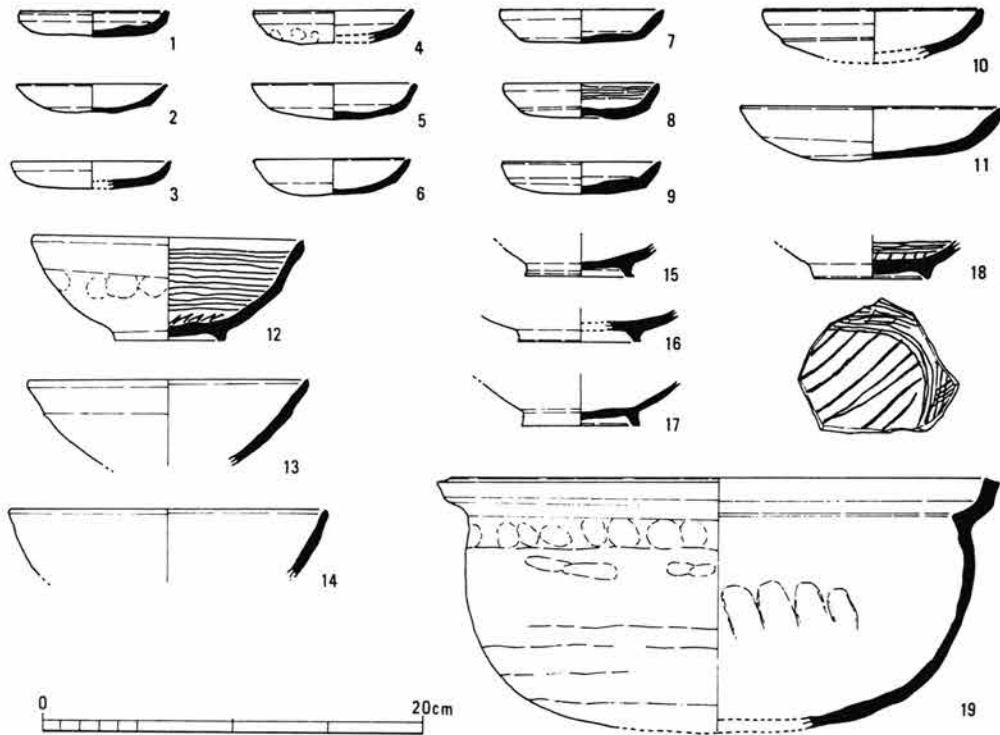
**鉄製品(第10図)** 釘(21点)・鏝(1点)・小刀(1振)・火打ち金(1点)がある。

鉄釘(1~21)は, すべて方形頭の形態をもつもので, 頭部は端を折り曲げている。身部の端面は角に作る。法量の差によって3種に細分される。1~10は, 全長5cm前後(1.5寸釘)・角幅4mm, 11~17は全長7cm(2寸釘)・角幅5mm, 18~21は全長8cm(2.5寸釘)・角幅6mmを測るものである。鏝(22)は破損品である。断面は角に作る。火打ち金(23)は, 両端が鈎手状の突起をなす。断面は方形を呈する。長さ9cm・最大幅2.3cmを測る。小刀(24)は茎端部の一部を欠損する他, ほぼ完形品である。茎部関は両関。目釘孔は錆化のため不明である。刃部は背に向かってゆるやかな反りをもつ。茎部・刃身部とも一部に木質部を遺存する。残存部全長28.8cm・刃身部幅2.4cm・茎部残存長8.4cm・同幅1.7cmを測る。



第10図 S D01出土鉄製品実測図





第11図 S D01出土土器実測図

## 土器類(第11図)

土器類には、土師器・瓦器・瓦質土器等がある。

**土師器** 皿が主体であり、各々法量の違いによりA・B・Cの3種に細分できる。

**皿A** 1～3が相当する。口径8cm・器高1.3cm前後を測るものである。口縁部端部に強い横ナデを施し、端部はやや鋭角気味に終わる。体部は短く、底部から屈曲して立ち上がる。

**皿B** 4～6が含まれる。口径8.5cm・器高1.8cm前後を測る。形態・調整技法等はA類に等しい。

**皿C** 10・11が相当する。口径11cm・器高2.5cm以上を測る大形のものを含む。10は口縁部を二段に強く横ナデしており、体部との境が段を形成する。11は、皿B類を大形化した形態をとるものである。口縁部は肥厚し、端部は比較的丸く仕上げられている。

**瓦器** 皿および碗の器種がある。

**皿(7～9)** 土師器皿B類と法量・形態とも近似する。口縁部の立ち上がりは強く直線的である。遺存状態が悪く詳しい調整方法等不明な部分が多いが、8は内面に細かい暗文を施し、外面は横ナデ調整するものである。

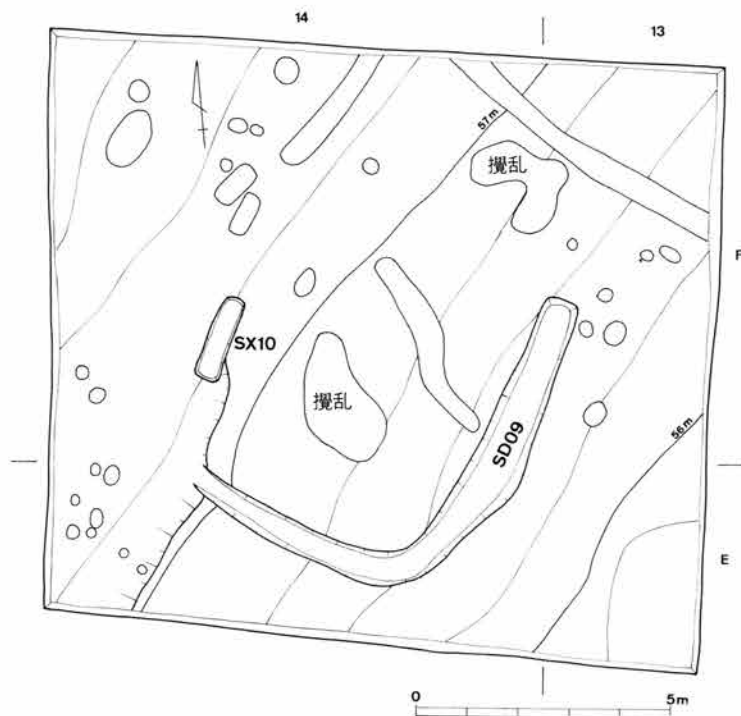
椀(12~18) 比較的ずんぐりした体部をもち、底部に断面台形の高台を貼り付ける。口縁部はやや肥厚させ、端部から下2cm前後を強く横ナデする。口縁端部は小さな面を作るものもみられる。端部内面の沈線はない。暗文の調整については器壁の遺存度が悪く不明確であるが、外面には施されていないもようである。内面は見込み部分に鋸歯文ないし平行線状の暗文、体部には粗く細い渦巻き状の暗文を施している。いわゆる丹波型の瓦器である。法量は、12で口径14.4cm・底径5.8cm・器高5.3cmを測る。

瓦質土器 19は鍋型土器である。溝内火葬墓の覆い蓋に転用されたものである。口縁部は、体部から外上方に短く屈曲し、端部は面をなしている。体部・底部は丸みをもって移行する。口縁部と接する上半部はやや内湾する。内面口縁部は受け口状を呈しており、体部との境は鋭角的な稜をなす。体部外面には指オサエが明瞭に残る。口縁部内外面および体部外面はナデによる調整を行う。底部から体部外面には煤が厚く付着し内面底には炭化物がこびり付く。煮炊き用として実際に用いられたことがわかる。色調は黒灰色を呈し、胎土は若干の砂粒を含む。法量は口径29.5cm・器高13.2cmを測る。

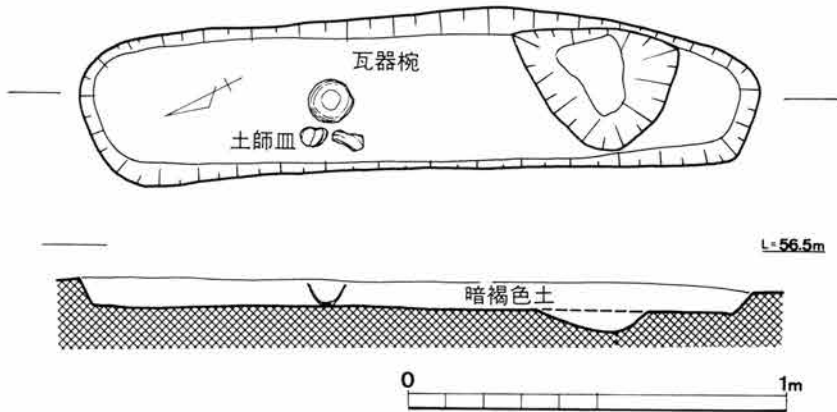
### 5. B・C地点の調査(第12・14図)

B地点は城ノ尾古墳の北西約30mの山腹斜面下方に位置する。昭和55年度の試掘調査により埋土に弥生土器を含む溝状遺構を検出した。このため56年度に、この部分についての面的な拡張調査を行った。

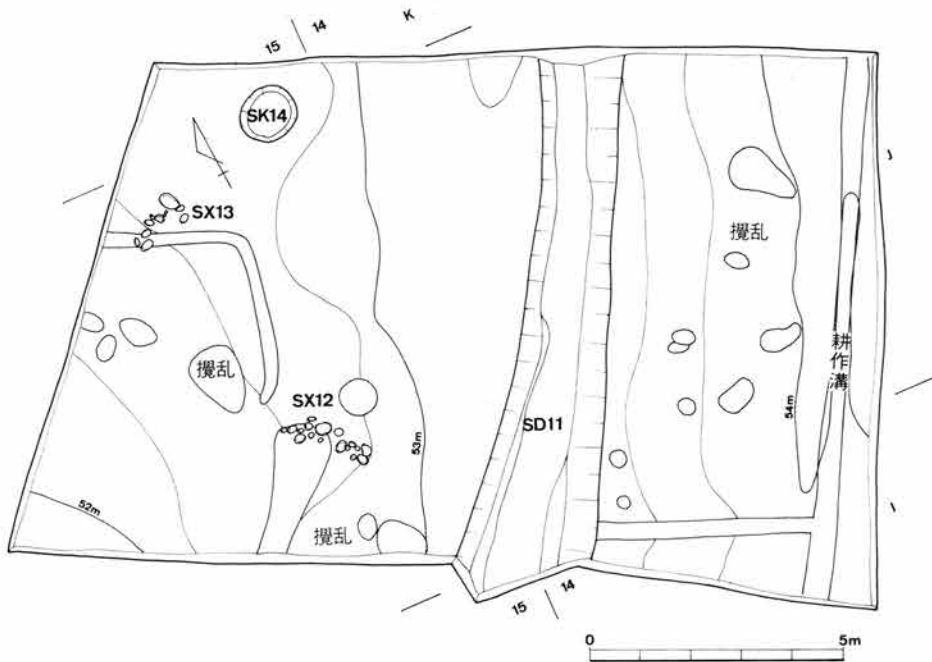
試掘調査時に確認した弥生時代の溝(SD09)は、幅約1m・深



第12図 B地点遺構平面図



第13図 B地点中世墓(SX10)実測図



第14図 C地点遺構平面図

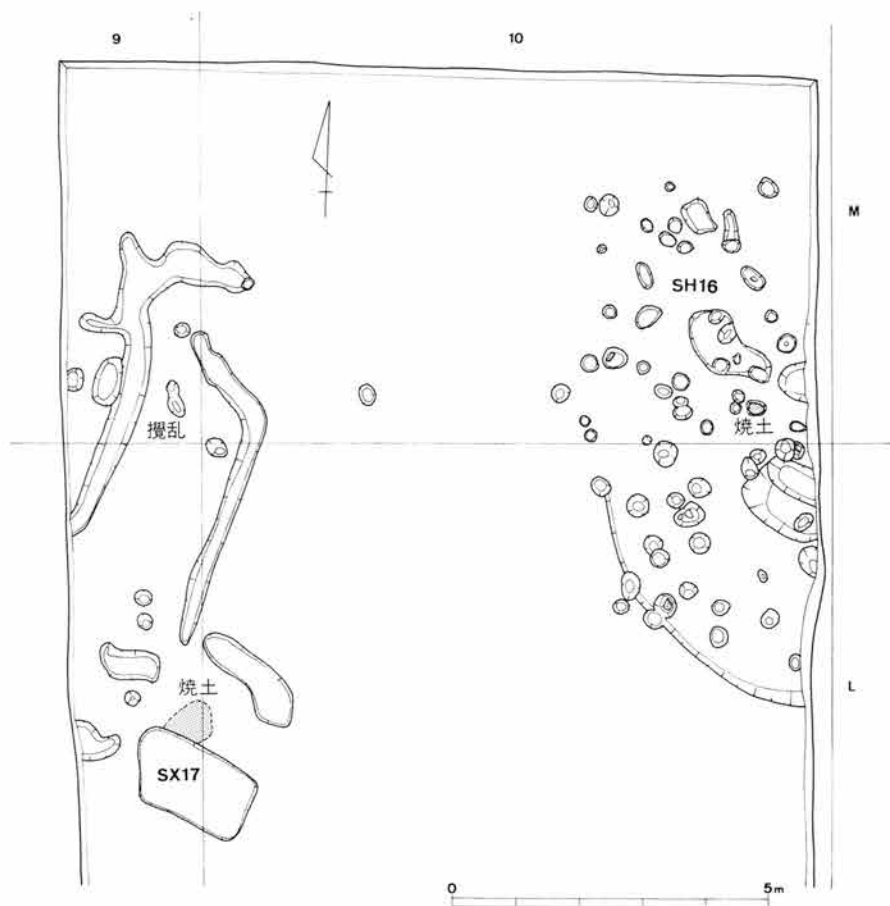
さ50cmを測るもので断面U字形を呈する。平面形状は南西隅に屈曲部をもつL字形を呈しており、西辺の検出長約6.5m、南辺で約5mを測る。西辺部の溝端部は中世頃にあたると思われる攪乱によって削平されている。また北端部についても削平を受けており、全体の規模・形状は明らかでない。溝内から出土した弥生土器はいずれも細片であり、詳細な所属時期等は明らかでない。

このほか調査地西側から土塚墓状遺構(SX10)を1基検出した。土塚墓状遺構は、隅丸方形を呈し、長さ1.2m・幅40cmを測る。長軸は北東から南西方向に置く(N28°E)。上面

は削平を受けており、深さは約8cmを遺存するのみである。底部はほぼ平坦で、内部から最終末に編年される瓦器碗1点と土師器皿片が出土した。いずれも遺存状態は良好でない。骨片等は検出されていないが、中世に属する土葬墓であろう(第13図)。

C地点は、宮遺跡の各調査地点のなかでは最も低い標高値を示す部分に位置する。試掘調査時に瓦器碗を含む円形土坑等を検出したため面的調査を行った。その結果、調査地の南東からほぼ等高線に平行する形で直線的に走る溝1条(SD11)を検出した。溝断面の形状はU字形を呈しており幅約1.8m・深さ60cm前後を測る。溝内の堆積土は暗褐色を呈する粘質土で上面の耕作土と類似する。溝の性格については、溝内から遺物等の出土がなく所属時期等を明らかにすることはできないが、その位置からみて本地点の南西方向約70m離れた地点に所在する、戦国時代の築城とされる仁田城跡に係わる可能性がある。

このほかの検出遺構としては、石組をもつ池状の落ち込み(SX12・13)や耕作溝があるが、いずれも近現代に属するものである。



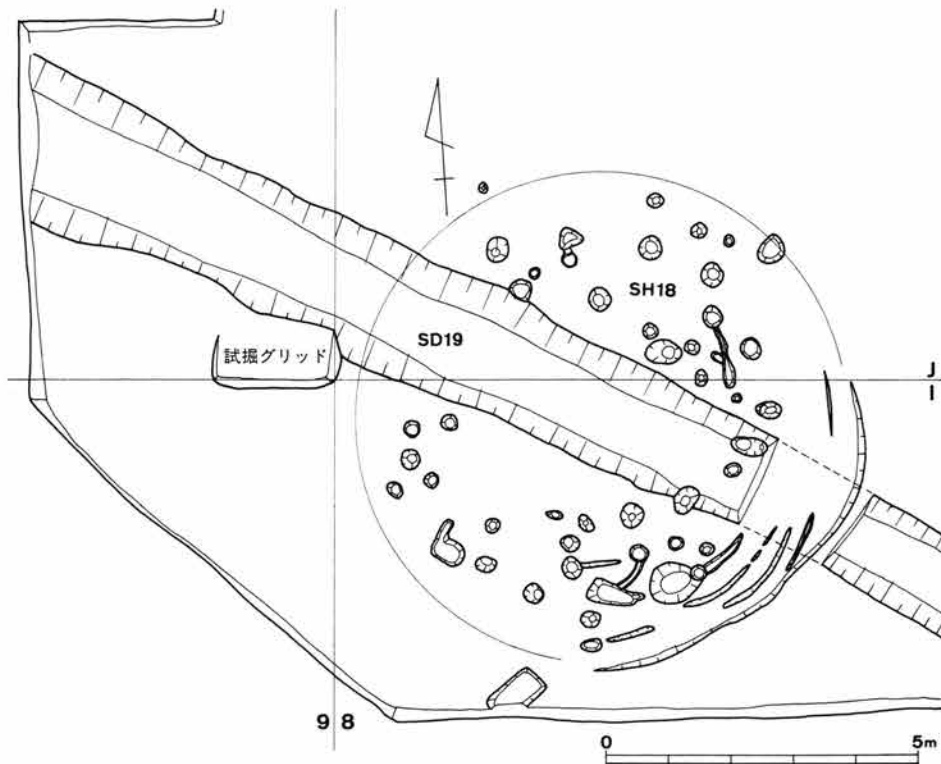
第15図 D地点1号住居跡(SH16)・SX17実測図

## 6. D地点の調査

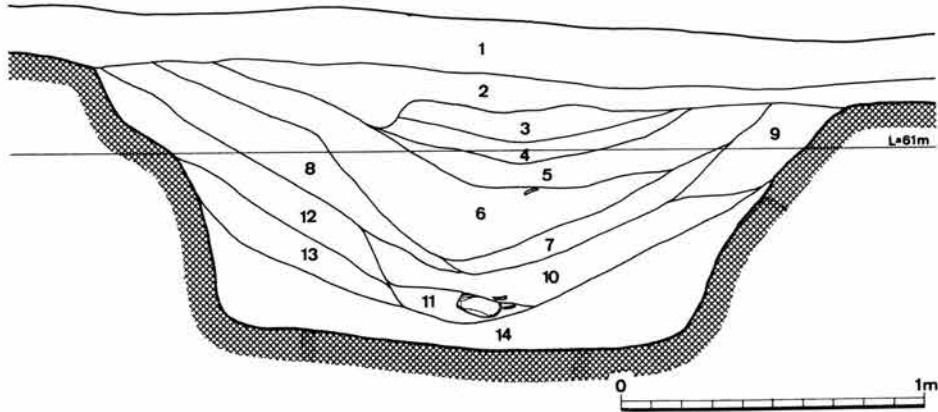
D地点は宮遺跡の推定遺跡範囲のうち北限にあたると思われる地域に属する。調査地は北西に向かってなだらかに下傾する標高65mから60m付近の丘陵斜面に位置する。調査着手以前は栗園として利用されていた。本地点からは弥生時代の円形竪穴式住居跡2基のほか同時期の溝・土坑・ピット多数を検出した。今回検出した遺構はすべて耕作土の下約20cmの地山面で検出した。遺物包含層等については土砂の流失が激しいためか、調査範囲内では確認されなかった。また全体的に後世の開墾による削平、攪乱等が著しい。

## (1) 検出遺構(第15～17図)

1号住居跡(SH16) 調査地北辺(L8区)で検出した弥生時代の円形竪穴式住居跡である。東側半分は調査地外になり、住居壁も斜面高位のほぼ半分が遺存するのみであるため全体の規模等不明であるが、推定直径約6.5mを測る。壁高の最も残りのよい部分で約10cmを測る。中央部に焼土の入るピットがあり、その位置からみて炉跡と思われる。床面および住居周辺には多数のピットが存在するが、柱穴の配置等は明らかでない。同一場所での数次の建て替えが想定される。住居跡埋土から弥生土器片のほか、石鉄・石器の削り屑が出土した。



第16図 D地点2号住居跡(SH18)・溝(SD19)実測図



第17図 溝(SD19)土層断面図

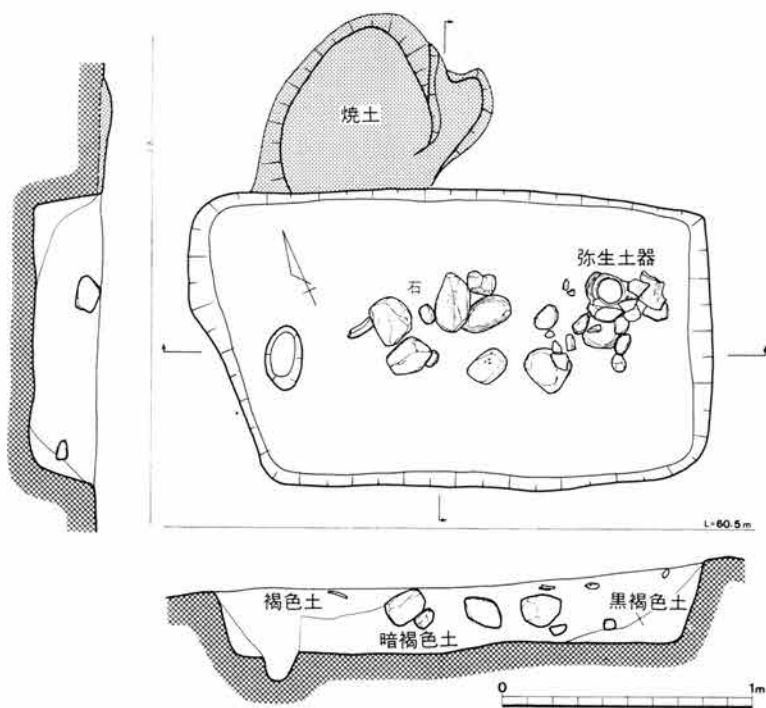
- |             |                    |                 |           |
|-------------|--------------------|-----------------|-----------|
| 1. 暗褐色土(表土) | 2. 黒褐色土            | 3. 暗茶褐色土(以下溝埋土) | 4. 暗黄褐色土  |
| 5. 暗茶褐色土    | 6. 暗茶褐色土(炭・黄色土混じり) | 7. 暗褐色土         | 8. 黄褐色粘質土 |
| 9. 暗褐色土     | 10. 黒褐色土(土器・炭多い)   | 11. 暗褐色土(レキ含む)  |           |
| 12. 暗茶褐色土   | 13. 暗茶褐色土(12に類似)   | 14. 茶褐色土        |           |

**2号住居跡(SH18)** I9区で検出した円形竪穴式住居跡である。溝(SD19)の埋没後に建てられたことが切り合い関係からわかる。前記の住居跡と同様斜面の下位部分は削平され、上方のみ辛うじて周壁の一部が遺存する。住居跡の推定径は7~8m前後を測る。床面には多数のピットが存在し、数次の建て替えが窺われる。

**溝(SD19)** 調査地のI7区からI9区にかけて検出した等高線に対し直交する形で走る溝で、調査地内での確認部分は約25mである。溝最大幅2.2m・深さ約1.3mを測る。溝断面は逆台形を呈し、上方肩部はやや広がる形態をとる。底部は平坦である。溝内には各々厚さ10~20cmを測る縞状の堆積土がみられる。溝は、両肩からの土砂の流入により埋没したものであるが、これらは比較的短期間に行われたものと類推される。溝の北西検出端から直線方向約40mの地点で確認のため試掘トレンチを入れたところ、わずかに溝状の落ち込みが検出され、さらに丘陵下方にのびていくことが判明した。一方、斜面上方については南東端部からすぐ調査地外になるため詳細は明らかでないが、一部で洪積台地の硬い礫層を掘削して形成されている状況が窺われた。溝内部からは、多量の弥生土器の破片のほか、磨製石斧・石庖丁・石鎌等の石器類が出土した。本溝の埋没後、円形竪穴式住居跡(SH18)が造られる。

**方形土坑(SK17)** 調査地L8区で検出した、平面形が方形を呈する土坑である。長辺2.05m・短辺1.8mを測る。南東辺の各隅部は直角に近い角度をもつが、北西側はややいびつな形態をとる。長軸の方位はN66°Wを示す。上面は大きく削平を受けていると考えられるが、現状で深さ24cmを測る。底部はほぼ平坦である。底部の北西端に長径25cm・深

さ10cmの楕円形状を呈するピットが存在するが、土層断面の状態からみて上部からの掘り込みによるものと判断される。また、本土塚の北東辺に接して70cm×90cmの範囲に、硬く焼け締まった焼土面の広がり



第18図 SX17遺構実測図

存在し一部本土塚によって切られている。土塚内の埋土は暗褐色を示す粘質土であり、長径20cm前後を測る10数個の礫石とともに、大型の破片を含む多数の弥生土器片が出土した。本土塚の性格等については埋葬施設、あるいは祭祀関係に伴う施設とも考えられる。築造時期については、溝内から出土した土器類と溝(SD19)出土土器類がほぼ同時に比定されることから、弥生時代中期後半に所属するものと思われる。

調査地からはこのほか、多数のピットや溝状遺構が検出されているが、概ね所属時期等明らかでなく遺存状態も悪い。後世の開墾等によって大きく削平されたことが窺える。

## (2) 出土遺物

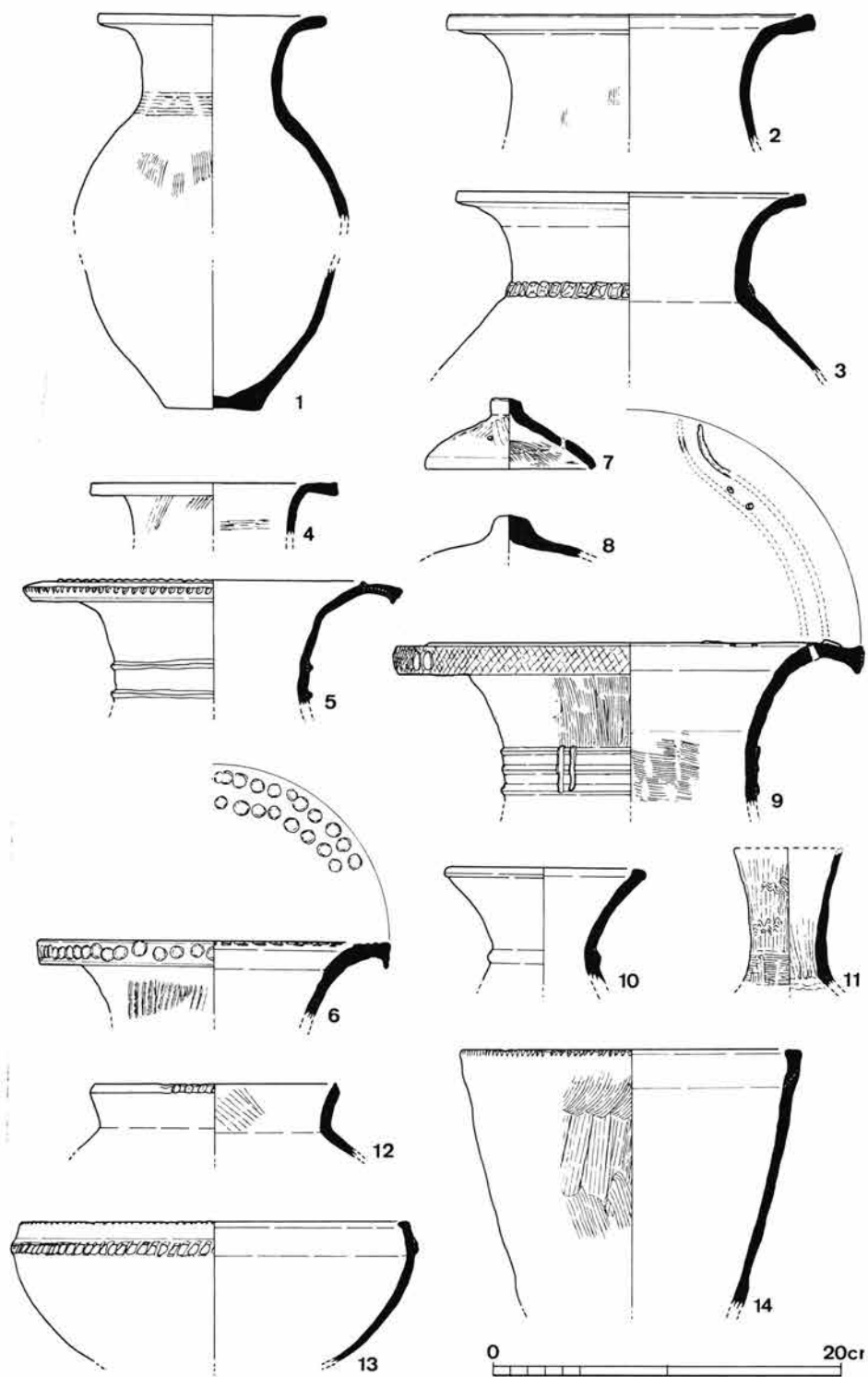
D地点から出土した遺物の大半は弥生時代に属するものであった。調査地は後世の削平が著しく、遺物を伴う遺構としては、SD19およびSX17が主なものである。以下、これらの遺構の出土遺物を中心に記述する。

### ① 弥生土器(SD19出土)(第19～21図)

弥生土器には、壺・甕・鉢・台付鉢・高杯・蓋の各器種がある。

**壺** 口縁部の形態により数種に細分される。

**壺A(1～4)** 口縁部が体部から「く」の字形に屈曲し外上方に大きく外反するもので、口縁端部はわずかな面を形成するが多くは無文である。1は体部以上と底部を図上で復原



第19図 D地点出土弥生土器実測図(1)



した。体部肩と口縁部の境に6～7条のハケメを施す。底部は、中央がわずかに凹む平底である。2は頸部に縦方向のハケメを施す。3は頸部に指頭圧貼り付け凸帯文を巡らしている。4の口縁部は体部から真っすぐ上方に立ち上がった後、水平方向に強く張り出す。頸部はハケメを施す。

**壺B(5・6・9)** A類と同様斜め上方にひらく口縁部をもつものであるが、口縁端部は上下方向に拡張させ面をなす。口縁端部・内面には施文するものが多い。5は口縁端部上縁にキザミメ文を入れ、内面にも粘土凸帯を貼り付けたあとキザミメ文を施す。頸部には2条の貼り付け凸帯を巡らす。6は口縁端部を下方へ拡張するもので、端部および内面の周縁に沿って円形浮文を密に施している。頸部はハケメによる調整を行う。9はやや大型の口縁部をもつものである。口縁端部は上下に拡張する。端部には針状の細い工具によって斜格子文を施文したのち、2個一単位からなる円形浮文を貼り付ける。内面には2条の凸帯を巡らし、その間隙に上下貫通する小孔を2孔穿っている。頸部は、断面三角形の凸帯を3条巡らし2個一単位の棒状浮文を貼り付ける。頸部外面は縦ハケメ、内面の下半部には横方向のハケメ調整を行う。

**壺C(10)** 肩の張りの少ない体部から、斜め上方にのびる口縁部をもつ。口縁端部は内側にやや肥厚させる。体部と頸部の境に粘土凸帯を貼り付ける。

**壺D(11)** 直頸壺に属するものである。上方にやや外反しながら長く立ち上がる口縁部をもつ。頸部に細かい波状文を施した痕跡が認められる。頸部下端部は細かいハケメ調整を施す。

**壺E(12)** 口縁部が短く外反しながら立ち上がるものである。口縁端部は平坦な面をなし、篋状の工具によりキザミメ文を施す。

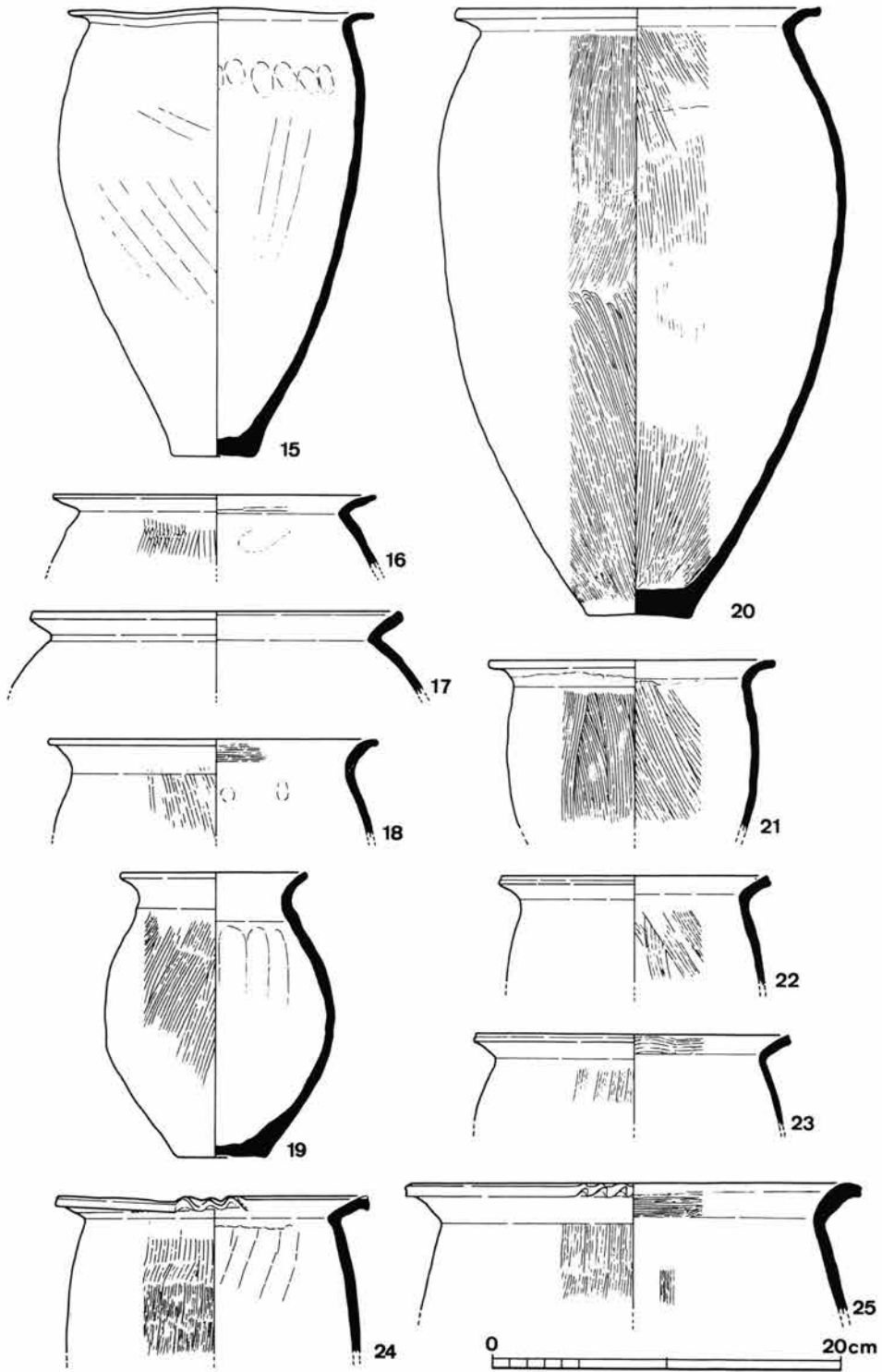
**蓋(7・8)** 笠形にひらく体部にやや突出する把手部をもつ。7の口縁端部は内湾気味に終わる。体部に相対する位置に2孔の小孔を穿つ。把手上部は平坦である。8は体部下方を欠失するが、残存部からみて大型品になるものと思われる。

**鉢A(13)** 内湾気味に立ち上がる口縁部をもつものである。口縁端部は内側に拡張する。端部外縁に沿って3～5mm間隔でキザミメを施す。また、口縁端部の下半に篋状工具によってキザミメを施した粘土凸帯を巡らす。

**鉢B(14)** 砲弾型の器形をもつもので、口縁部は外上方に直線的に立ち上がる。口縁部と体部との境界は明瞭でない。口縁端部上面はやや内側に拡張し平坦面をなし、口縁端部外縁にキザミメ文を施す。器壁外面は細かい縦ハケメ調整を行う。

**甕** 全形の知られるものはないが、口縁端部の形状により数種に細分できる。

**甕A(15～17・20)** 体部から「く」の字状に屈曲する口縁部をもつものである。口縁端



第20图 D地点出土弥生土器实测图(2)

部は丸く仕上げるものと、やや平坦な面を形成するものがある。15はほぼ全形が知られる。口縁部は屈曲ののち水平にのびる。体部は上方約1/3のところを最大径をもつ。体部下半は平底の底部に向かってすぼまり気味に終わる。16は体部肩にハケメ調整の痕跡がみられる。17の口縁端部は上縁をわずかにつまみ上げ気味に仕上げる。20は大型の甕である。口縁端は面をもつ。体部は肩の張りが明瞭でなく長胴形を呈している。底部は平底である。体部外面および内面は縦方向のハケメ調整する。口縁部は内外面とも横ナデする。

**甕B(18・19・21)** 甕Aに比べ口縁部の屈曲は緩やかであり、外上方にのびる。体部の形状が知られるものは少ないが、肩の張りの小さい器形をもつものと想定される。18は体部外面を縦ハケメ、口縁部内面は細かい横ハケメ調整する。19は小型のものではほぼ全形を留めている。体部の中程から少し下方に最大径をもち、全体的にややずんぐりした感じを与える。底部は平底である。21の口縁部径は体部最大径を凌駕する。体部は内外面とも縦ないし斜め方向のハケメ調整を行う。

**甕C(22・23)** 口縁部は体部から「く」の字状に屈曲し、外上方に短く立ち上がる。口縁部端は平坦面を形成しており、強い横ナデを施す。22の体部内面は縦方向のハケメ調整する。23の体部外面にはハケメ単位と思われる工具当て痕がみられる。口縁部にはススが付着する。

**甕D(24・25)** 口縁端部の形状は甕C類に類似しているが、口縁端部に沿って部分的に波状文様を施す。24の波状部は山形3つ一単位からなっており、口縁部周縁に4単位を配置する。体部外面は縦方向のハケメ調整、内面は口縁部の接合部以下、縦方向のヘラケズリを施す。25はやや大型の口縁部をもつ。口縁部と部分的波状文は、24と同様な文様構成からなるものである。体部内外面とも縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメを施す。

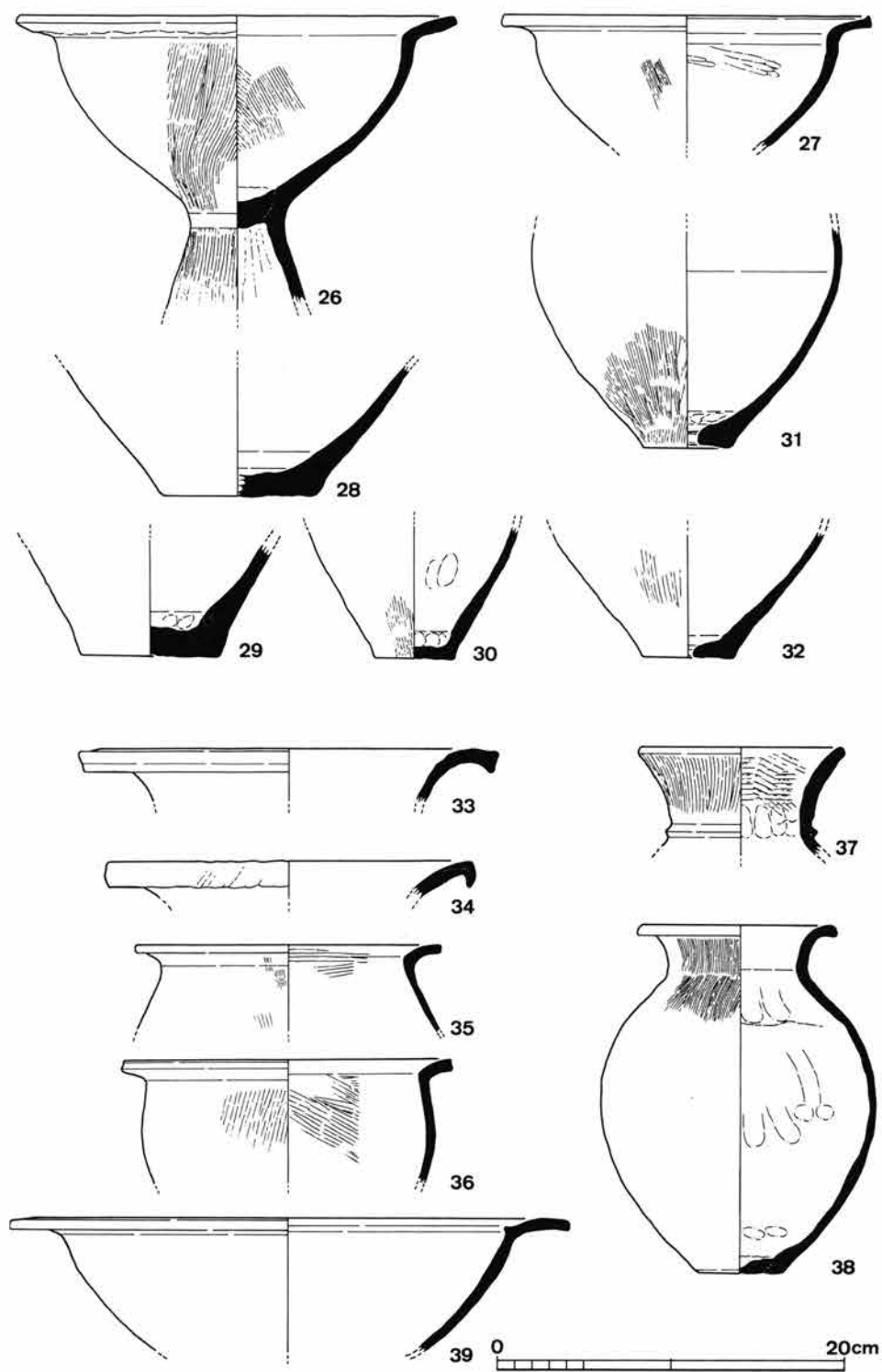
**高杯(26・27)** 内湾気味に立ち上がる半球形の体部から大きく外反して外上方にひらく受け口状の口縁部をもつ。26は体部下半でくびれたのち脚部にいたる。脚部下半は欠失する。体部・脚部外面とも縦ハケメ調整を行う。27は口縁端部上縁をややつまみ上げ気味に仕上げる。

**甗(31・32)** 底部に小孔を穿つ。穿孔は工具で外側から行われており、2例とも底部は少し尖がり気味である。体部下半はハケメ調整する。

**底部(28・29・30)** 外反して立ち上がる体部をもつ。底部は平底である。比較的大型のもの28と小型のもの30がある。28は壺の底部、29・30は甕の底部と思われる。

## ②SK17出土の土器(第21図)

**壺A(38)** 口縁部は体部から短く立ち上がった後、端部で強く外反する。口縁端部は丸く仕上げられており無文である。体部は中程に最大径を置く。底部は平底である。口縁部



第21图 D地点出土弥生土器实测图(3)

から体部肩にかけて細かいハケメ痕が残る。

**壺B(33・34)** 外反する口縁部をもち、口縁端部を拡張する。33は端部を上下に拡張する。端部は無文である。34は口縁端部を下方に折り曲げ拡張するもので、端面は摩滅が著しいが左下がりのキザミメ文を施した痕跡が残る。

**壺C(37)** 体部から頸れた口縁部が外上方にのびるものである。体部と口縁部の境には一条の貼り付け凸帯を巡らす。口縁部外面は縦ハケメ、内面は横方向のハケメ調整する。口縁部と体部接合部の内面には指圧による接合痕が明瞭に残る。

**甕A(35)** 「く」の字形に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は水平方向にのびる。体部外面は縦方向のハケメ、内面は横ハケメ調整する。

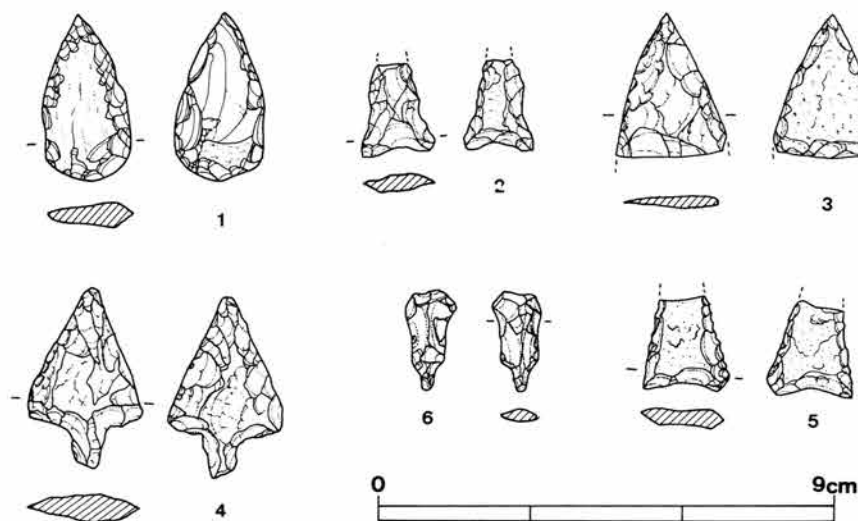
**甕C(36)** 肩の張りの少ない体部から外上方に開く口縁部をもつものである。口縁端部は強いナデが施されている。体部外面は縦ハケメ、口縁部内面は横ナデの後、それ以下を斜め方向のハケメ調整する。

**高杯(39)** 39は高杯杯部の破片である。内湾気味の体部から水平方向に広がる口縁部をもち、口縁部と体部内面の境界に一条の凸帯を設ける。

### ③石器類(第22・23図)

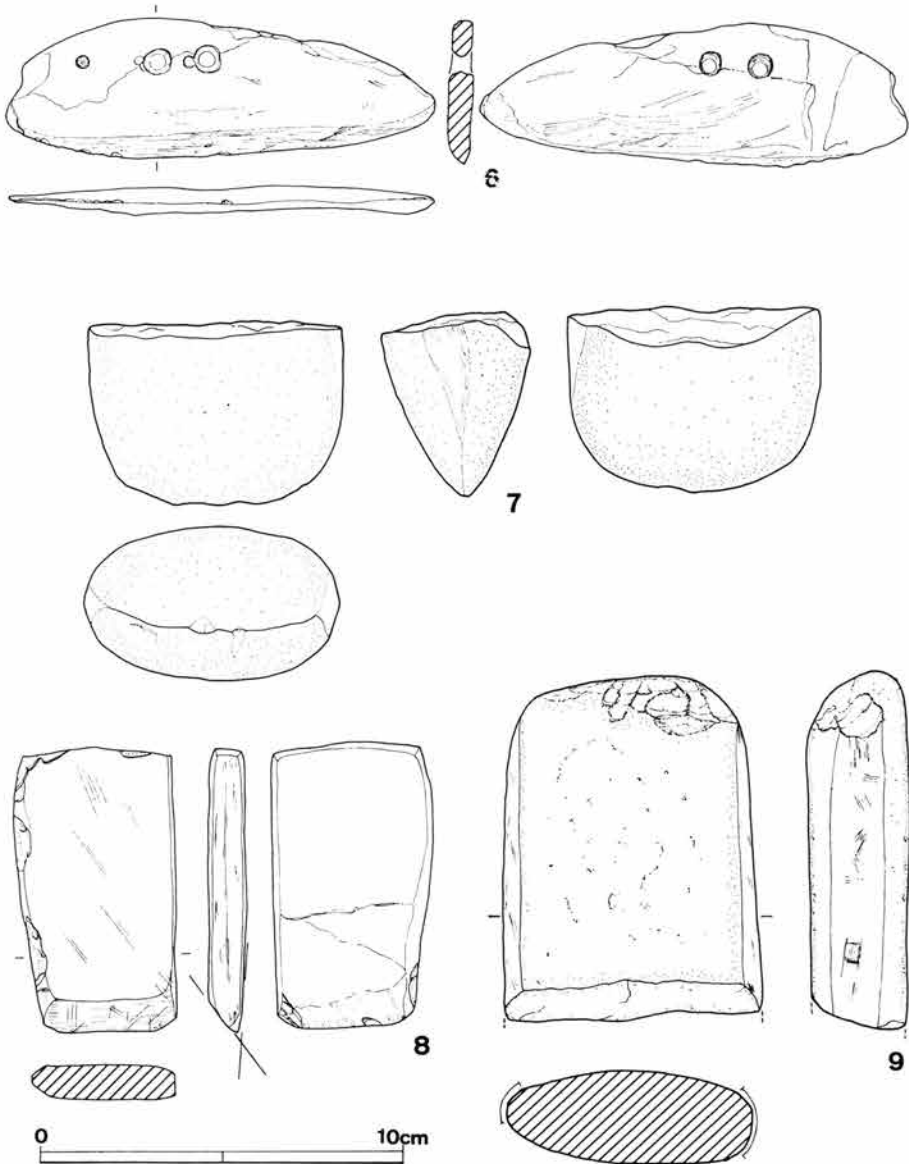
宮遺跡D地点から出土した定型的な石器は総数10点を数える。器種の内訳を示すと、石鏃5点・石錐1点・石庖丁1点・各種石斧類3点である。資料数は少ないが、狩猟・戦闘具・農具・工具の各種の用途をもつものを揃える。

**石鏃(第22図)** 石鏃は形態上、円基式・凹基式・有肩式および不明のものに分類される。



第22図 D地点出土石鏃・石錐実測図

1 は円基式石鏃で、長さ3.2cm・幅1.7cm・厚さ0.5cm・重さ1.9gを測る。大きく自然面を残す。2と5は凹基式石鏃で、2は長さ1.8cm・幅1.4cm・厚さ0.4cm・重さ0.6gを測る。2は片面に、5は両面に大きく自然面を残す。4は有肩式石鏃である。長さ3.7cm・幅2.3cm・厚さ0.6cm・重さ2.7gを測る。表面中央に自然面を残すが、基部は端正な調整加工が施される。3は基部形が不明である。長さ2.8cm・幅2.2cm・厚さ0.2cm・重さ



第23図 D地点出土石庖丁・石斧類実測図

1. 6gを測る。片面は側縁のみ調整加工され、自然面が大きく残る。破損した下半部には再加工を試みた痕跡がある。

**石錐**(第22図6) 石錐は長さ2cm・幅1cm・厚さ0.2cm・重さ0.5gを測る。両面加工で明確な先端部が作られる。1から6の石鏃や石錐の石質については、いずれも無斑晶安山岩(サヌキトイド)を用いる。

**石庖丁**(第23図6) 長軸11.8cm・短軸3.9cm・厚さ0.7cm・重さ48gを測る。紐孔の貫通孔は2つであり、このほか中断した穿孔痕が片面に2か所ある。刃部は片刃に近く、やや湾曲する。石質はやや風化しており、丹波帯または舞鶴帯の珪質頁岩か珪質粘板岩である。

**石斧**(第23図7～9) 8は蛤刃石斧の刃部部分の破片で、残存長5.1cm・幅7cm・厚さ4cm・残存重量190gを測る。石質は分岩である。9は扁平片刃石斧で、長さ7.8cm・幅4.4cm・厚さ1cm・重さ72gを測る。全面は研磨され滑らかな平坦面になる。刃部は40°の角度でつき、長辺方向の条痕がみられる。石質は風化度の強い珪質頁岩か珪質粘板岩である。7は扁平磨製石斧の破損品である。刃部を欠損するが両側面に平坦な磨面をもつ。長さ9.5cm・幅7.1cm・厚さ2.6cm・重さ330gを測る。淡緑色で多孔質の石材を用いており、石質は丹波帯の溶岩に属する軟質の緑色岩類である。

1～3はSH16、6はSH18、4・5・7～10はSD19の出土であり、各遺構の共伴土器からみていずれも弥生時代中期に所属するものである。

本稿は、平野仁佳子・宮本英子2名の協力を得て、黒坪一樹が執筆した。なお、岩質の判定については、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏の御教示による。記して感謝したい。

## 7. 小 結

宮遺跡の調査成果および今後の課題等について、以下各項目毎に整理しておきたい。

①**方形周溝墓**について A地点で検出した2基の方形周溝墓は、東西8m・南北9mの規模をもち、遺存した周溝の状況からみて双方が溝の一辺を共有し南北に並列する平面形態をとるものとみられる。斜面の下位にあたる西側については周溝状の遺構は検出できなかったが、当初から西辺については溝が完周せず、地山を削り出して整形されていたものと思われる。溝内出土の遺物としては、供献土器の高杯と石庖丁があるが、特に石庖丁は紐孔の穿孔を途中で放棄した未製品であり葬送儀礼との係わりについて注意される資料となろう。なお所属時期等不明な要素も多いが、墓域内から検出された焼土塚についてもその性格等、今後類似資料との比較検討を行っていく必要がある。宮遺跡では次稿で述べるようにD地点から同時期の住居跡が検出されている。すなわち、D地点を居住区として、そ

の南側には、試掘調査で確認した谷状の地形を隔てて方形周溝墓からなる墓域が広がっていたものと想定される。

京都府北部地域では、近年になり各地で弥生時代墳墓の調査例が増えつつあるが、由良川中流域の福知山盆地周辺では、綾部市①青野遺跡(中期)・同②久田山遺跡(後期)・同③味方遺跡(中期)・福知山市④宝蔵山遺跡(中期～後期)・同⑤武者ヶ谷遺跡・同⑥豊富谷遺跡(後期～古墳初頭)・同⑦石本遺跡(中期)等が知られている。このほか、由良川下流域にあたる舞鶴市⑧志高遺跡(中期～古墳初頭)では多数の方形周溝墓が検出されており、当地域における弥生時代の墓制を知るうえに重要な調査例が相次いで増加しつつある状況である。これらの調査例によれば、沖積平野に突出する眺望俯瞰に優れた丘陵部の先端ないし稜線上に立地するもの②④⑤⑥と、沖積平野の自然堤防上に立地するもの①③⑦とに大別される。立地環境の相違により、概ね前者は方形台状墓、後者は方形周溝墓の外形を呈するが、宮遺跡や久田山遺跡例のように丘陵上に位置するものでも周溝墓の形態をとるものも存在する。これらについては、所属時期・主体部の構造・単独埋葬か複数埋葬かの相違・棺内遺物の有無等、さまざまな要素についての比較検討が必要であるが、これまで判明している調査資料からみて、概ね、青野遺跡例のような土坑墓群から方形周溝墓さらに丘陵上の台状墓群へと変遷がたどることができる。宮遺跡の方形周溝墓は、共伴土器から弥生時代中期後半(第Ⅲ様式新から第Ⅳ様式並行)に比定されるものであり、由良川流域部におけるこの種の墳墓のなかでは比較的早い段階に所属するものと言える。

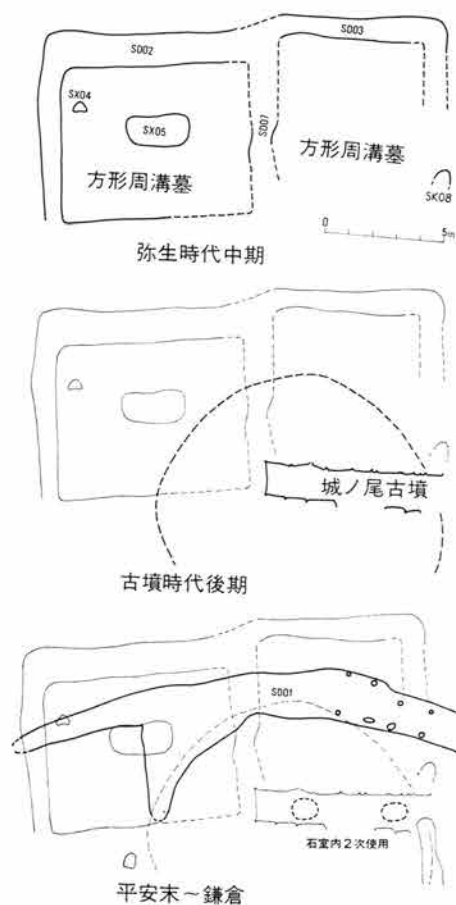
②D地点検出の住居跡と大溝について D地点から2基の円形堅穴式住居跡を検出した。2例とも遺存状態は良好とは言えないが、宮遺跡における集落の様相を知るうえに貴重な資料を提供するものである。住居跡SH16では住居埋土から石器加工時の剥片が出土しており、同地点で石器の製作が行われていたことが知られた。住居跡SH18は、大溝SD19によって切られているが、SD19出土の土器からみても両者の存続時期に、時間的な差は少ないものと思われる。大溝は丘陵斜面に沿ってほぼ真っすぐに掘削されており、その規模から集落を区画する性格を帯びるものと想定される。斜面上方では硬い岩膚からなる地山面を削り込んで形成されており、多くの労働力の投下が窺われる。溝内出土の土器は概ね前稿で述べた時期に並行するものであり、当地域における弥生土器編年に良好な資料を提供するものと思われる。これらの土器群はその特徴から、兵庫県東部(播磨地域)や瀬戸内中部の影響を強く受けたものであり、弥生時代中期における加古川水系と由良川水系の交易路を媒介とした周辺地域との交流が窺うことができる。本溝は伴出土器からみて掘削後、比較的短期間に埋没したものと考えられる。住居跡についても当時期以降のものは検出されておらず、集落の移動が想定される。宮遺跡の所在する同一丘陵の先端部には、今回の



近畿自動車道建設工事によって同じく発掘調査された城ノ尾遺跡がある。この遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居跡の一部が確認されており、同地点への集落の移動が窺われる。

宮遺跡周辺ではケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡・大内城下層遺跡等の弥生時代中期に存続時期を置く集落跡が確認されている。いずれも眼下に沖積平野を望む丘陵上に立地しており、広義の高地性集落に所属するものであるが、石庖丁等の農具を保有しており、農耕に基盤を置くことは明らかである。このうち比較的広い範囲にわたって調査が行われた奥谷西遺跡では多数の住居跡が検出されており、また集落を画する大規模な溝の存在等、当地域における集落群の中核となる遺跡と判断される。しかしながら、宮遺跡で検出した方形周溝墓にみられるような墓域は他の周辺遺跡では確認されておらず、今後の検討が必要である。いずれにせよ大内谷をとりまく弥生時代集落跡群は地理的にまとまった環境に立地しており、弥生時代集落の問題を検討するうえで、今後良好な資料になるものと考えられる。

③A地点検出の中世溝の性格と伴出土器について A地点から検出した中世溝についてはその役割から判断して、前後2時期に分けることができる。1期は溝本来の機能を有する時期で、何らかの施設の区画ないし防御の目的で掘削されたものと想定される。A地点周辺部には仁田城跡や城ノ尾城館跡等の近世初頭に築城時期の比定される山城跡が存在し、それらとの関連が窺われるが、今回溝内から出土した土器類は13世紀代に遡るものであり、時期差がみられる。おそらく本溝の性格については、次の時期に関連して、同丘陵のすぐ上方に分布する宮墳墓群とそれに伴うものとみられる建物施設(墳墓堂)に関する施設とするのが妥当と思われる。次に、2期は埋葬の場として利用される時期である。これによって溝本来の機能は停止する。溝内の集石墓から出土した遺物のうち特に鉄小刀について



第24図 A地点遺構変遷図

では、別稿の宮墳墓群3号墓のほか、京都府北部の丹後・丹波の中世墳墓・経塚等の遺跡に多くの出土例がみられるものであり、魔除けの呪術に伴うものと考えられる。

溝内から出土した瓦器類は、いわゆる丹波型と呼ばれる型式群に属するものである。丹波地域における瓦器の様相については、近年の中世遺跡の調査例の増加によって次第に明らかになりつつあり、型式編年についても試案が提出されている。これによれば、本溝から出土した瓦器碗類は口縁内縁に沈線を持たず、外面に暗文を有さない点等の形態から概ね13世紀初頭の時期に相当するものとされる。これまで京都府北部や兵庫県北部の丹波・丹後・但馬地域においては瓦器出現前の日常雑器として、底部を糸切り調整する黒色土器や土師器類が主流を占めることが判明しているが、丹波地域を除いて他の地域では瓦器の出現以降も同種の土器群が使用されている。一方、丹波地域においては12世紀中頃を境にして従来の在来系とも言うべき土器類にとって代わって織内色の強い瓦器類が主流を占めるようになる。ただし、丹波型と言われる瓦器類に関しても、兵庫県の丹波地域や京都府の丹波地域等にみられるごとく各小盆地毎でも細部において少なからぬ相違点が認められる。これらの点については、丹波地域に広くみられる貴族層や寺社領の荘園の分布とともに、今後伝播経路の問題とも関連して比較検討を行う必要がある。なお、最後にA地点周辺で検出された各時期の遺構の変遷図(第24図)を掲示し、調査成果についての理解の一助としたい。

(辻本 和美)

## (2) 城ノ尾遺跡

### 1. 調査地概要

城ノ尾遺跡は、後述する中世の「城ノ尾城館跡」(318頁以下)の下層に広がる弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡(あるいは遺物散布地)である。

宮遺跡や城ノ尾古墳が立地する丘陵の尾根先端部は、一宮神社の裏山の檜林になっている。尾根先端裾の神社から約80m登った檜林の東半部が調査地である(図版第14-1)。周辺の水田から17mの比高を測る調査地からの眺望は極めてよく、手前の土師川と後方の長田野丘陵の間の一般国道9号線(旧山陰街道)に沿う長田・多保市・岩崎・池田等の集落を一望のもとに見晴らすことができる。

調査地には、東から西へゆるやかに傾斜する南北60m・東西15mのテラス状の平坦地と、それを囲むように土塁状の地形とその内側に沿って空堀状の地形が北・西・南に認められた(図版第123-2)。東部は一段高くなっており、農道となっていた。このような地形から、調査前には中世の城館跡と予想され、また、丘陵上方の宮弥生遺跡の範囲がこの辺りにまで及んでいる可能性も考えられた。調査の結果もこれらを裏付けており、本報告のこの項では、古墳時代以前の遺構・遺物を取り扱い、中世城館については別項(第3章第4節)で報告する。

### 2. 調査の経過(319頁参照)

鎌倉期の掘立柱建物跡SB01の検出面は盛土による整地層上面であり、この盛土と地山との間に厚さ(北端で)50mの黒褐色土層(第273図V)が、溝SD01の壁面で観察される。この層は、南に向かって次第に薄くなり、SB01の中央でなくなり、南には地山層が広がっている。SB01の南東地山面で検出した竪穴式住居跡SH01はかなり削平を受けている。これらの事実から、本来の包含層である黒褐色土層は更に南に広がっていたものが、鎌倉期の城館建造時に地山とともに削平され、北端部の整地に充てられた可能性が高い。

出土遺物として、中・後期の弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器・石製品等があるが、遺構にともなうものはほとんどなく、上記黒褐色土層や中世溝の埋土、及び土中からまとまりなく小片で出土したものが大半である。

### 3. 検出遺溝

#### (1) 竪穴式住居跡SH01(第272図, 図版第14-2)

北半部を削平された方形の竪穴式住居跡である。南辺は4.3mを測り、深さは最もよく

残っている南辺付近で7cmを測る。南東と南西の隅に主柱穴と思われるピットを2個検出したが、北半については詳かではない。周壁溝は認められなかった。埋土からの出土遺物はほとんどないが、わずかな細片から判断して、包含層から多く出土した古式土師器の時期の住居跡と考えられる。

(2) 土坑SX02(第272図)

南北1.3m・東西0.9mを測る土坑で、焼土と炭がおびただしく入っていた。出土遺物は若干の弥生土器ないし古式土師器の細片である。

(3) 土坑SX04(第272図)

南北2.5m・東西2.3mの浅い土坑で、SX02と同様に焼土と炭が多く入っていた。出土遺物もSX02と同様の細片である。鎌倉期の掘立柱建物跡SB02との切り合い関係から、これよりは古い遺構と考えられる。

#### 4. 出土遺物

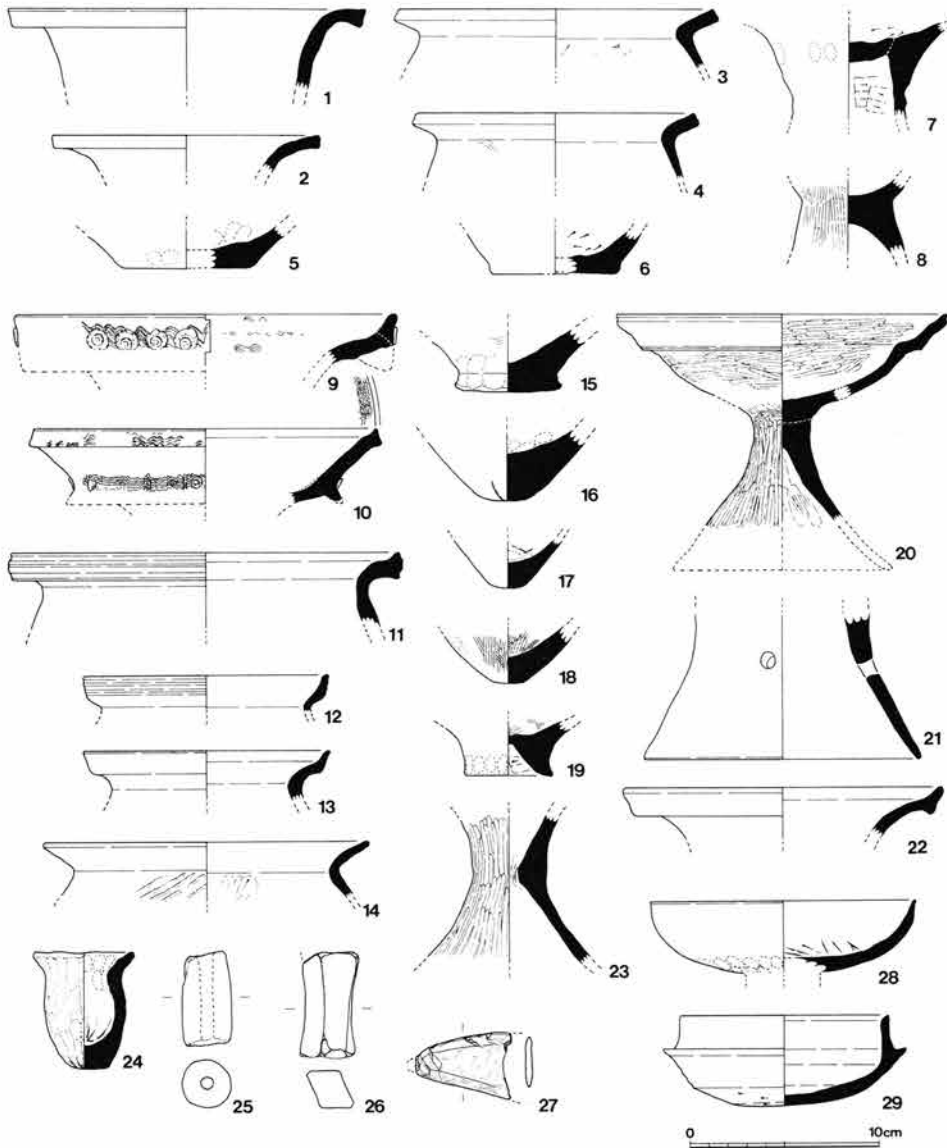
出土した遺物は整理箱4箱分に相当するが、中世の遺物数点と近代以降の瓦片等を除いたすべてが弥生時代から古墳時代の遺物である。しかし、遺構に伴うものは皆無に近く、いずれも表土・整地層・包含層から出土したものである。遺物は、弥生時代中期、弥生時代末期から古墳時代前期初頭、及び古墳時代後期初頭の3時期に分けられる。出土位置や共存関係による分け方は意味をなさないので、上記の時期毎に報告する。

(1) 弥生時代中期の遺物(第25図1～8・27)

実測し得た遺物は、壺2点・甕2点・底部2点・高杯2点・石庖丁1点の各破片9点である。土器はいずれも宮遺跡出土例に類例があるものである。唯一の石器である石庖丁は、淡灰色を呈する粘板岩製である。

(2) 弥生時代末～古墳時代前期初頭の遺物(第25図9～23)

今回の調査で最も多く出土した土器群であるが、小片が多く図示し得たのは16点にとどまる。壺(9)は、広口壺の口縁端部を上下に拡張し、文様帯としたものであるが、下半部が離脱している。外面には櫛描きの波状文の上に円形浮文を並べ、竹管文を施しており、口縁部内面にも2条の波状文を描く、加飾した壺である。壺(10)も、口縁端部に波状文、二重口縁の外面に波状文に竹管文を施した円形浮文を配した非常に装飾的な土器である。甕には4型式見られる。擬凹線を施す甕は11と12の2点があるが、後者は複合口縁化している。また、13は擬凹線を失ったものである。以上の3型式は、弥生時代後期の丹後・北丹波に普遍的な甕で、上述した型式差は時期差と認められている。甕(14)は「く」の字状口縁で、体部にタタキメを残す畿内系の土器である。底部は突出平底が1点(15)あるが、



第25図 城ノ尾遺跡出土遺物実測図

ほとんどは小さな底部を持つ尖底(16~18)である。高杯(20)は、ヘラミガキを多用した精製品で、類例の少ないタイプであるが、弥生後期の擬凹線をもつ複合口縁の高杯が退化したものであろう。21は器台と思われるが、この時期に属するとすれば、やや古い器形を呈している。小形の砥石(26)は、時期不詳であるが、とりあえずこの項で報告しておく。

### (3) 古墳時代後期の遺物(第25図28・29)

包含層から土師器高杯(28)と須恵器蓋杯の身(29)が出土している。後者は、口径11cm・

器高4.8cmを測る。須恵器Ⅰ型式の末かⅡ型式の初頭のものであろう。この時期の遺物は今回他に出土していないので、集落と言うより、削平された古墳からの混入かも知れない。

## 5. 小 結

城ノ尾遺跡は、出土遺物によれば、第1期：弥生時代中期、第2期：弥生時代後期～古墳時代前期初頭、第3期：古墳時代後期前半の3時期に分かれる複合遺跡である。

第1期の弥生時代中期に関しては遺構の検出が見られなかった。しかし、遺物は、細片が多いがかなりの出土量である。土器は、宮遺跡出土例と比較すれば、両者にはほとんど差がなく、弥生時代中期に限って言えば、城ノ尾遺跡は、同一の尾根上に隣接して存在する宮遺跡の範囲に入れてもよいであろう。

第2期の中で弥生時代後期(第Ⅴ様式期)の土器は少なく、多くは「弥生終末」とか「古墳初頭」と言われている土器である。この時期の土器が最もまとまって出土した綾部市の青野西遺跡の整理結果を援用すれば、城ノ尾遺跡の大半の土器は、当地域への畿内の庄内式土器の波及期(青野西式)の後半期に位置づけられよう。布留式土器の波及直前である。加飾した壺や精製の高杯・器台が目立つ点は特筆すべき特徴である。

城ノ尾遺跡の遺構として検出されたのは、竪穴式住居跡1棟と焼土壇2基に限られるが、いずれもこの時期の遺構と判断される。これらの遺構とこの遺跡からの眺望のよさを考え合わせると、遺跡の性格として「高地性集落」が連想される。事実、この時期にほぼ並行する北陸の月影式期前後にいくつか高地性集落が発見されているという。しかし、今はその点を示唆するに止どめ、福知山市あるいは北丹波地方での類例の増加を待ちたい。

第3期には、包含層から出土した土師器と須恵器によって、この地が古墳時代中期末か後期初頭頃に何らかの形で利用されたことが知られるだけである。上記したように、これら2点の遺物は単独で出土しており、集落遺跡を想定することは困難であり、また須恵器は、周辺の遺跡では、後青寺古墳や薬王寺古墳群から出土した当地域における最古式例と同時期(陶邑MT15前後)である。従って、これらの遺物の存在は、後期初頭の古墳が中世の城館造営の際の整地に当たって削平され、その副葬品の一部が包含層に混入したものと推測できるかもしれない。

その後700年の間、人々が遺した痕跡はなく、鎌倉時代に至ってここに城館が営まれるのである。

(小山 雅人)

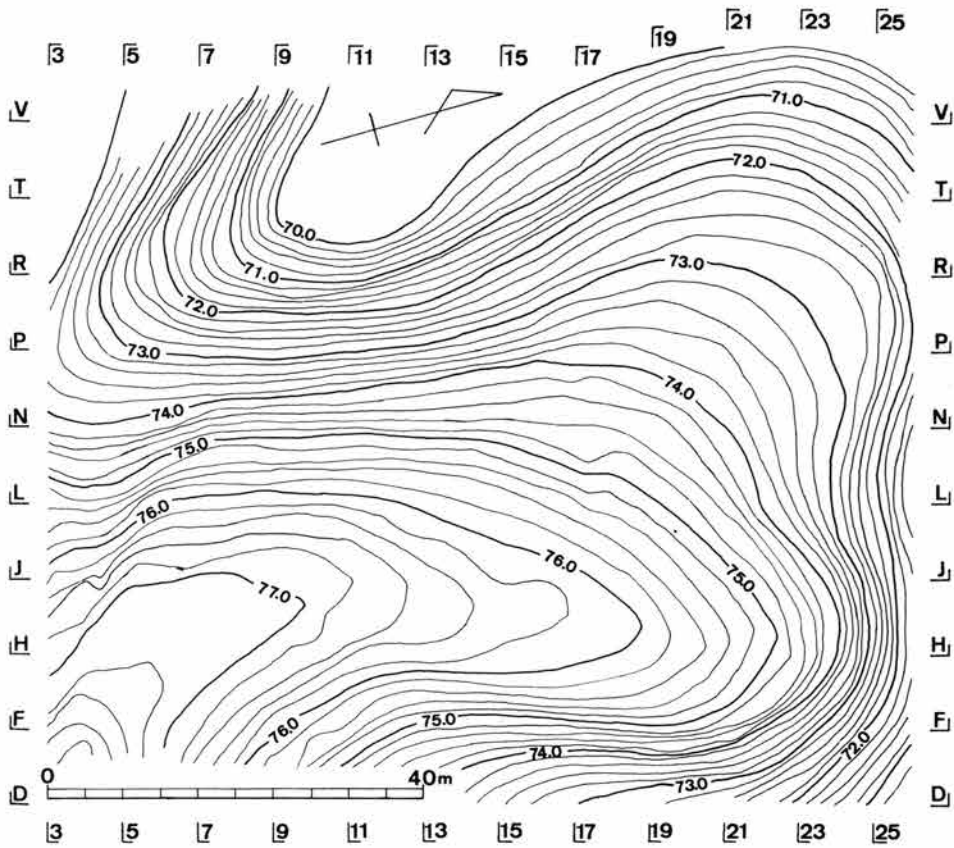
## (3) ケシケ谷遺跡

## 1. はじめに

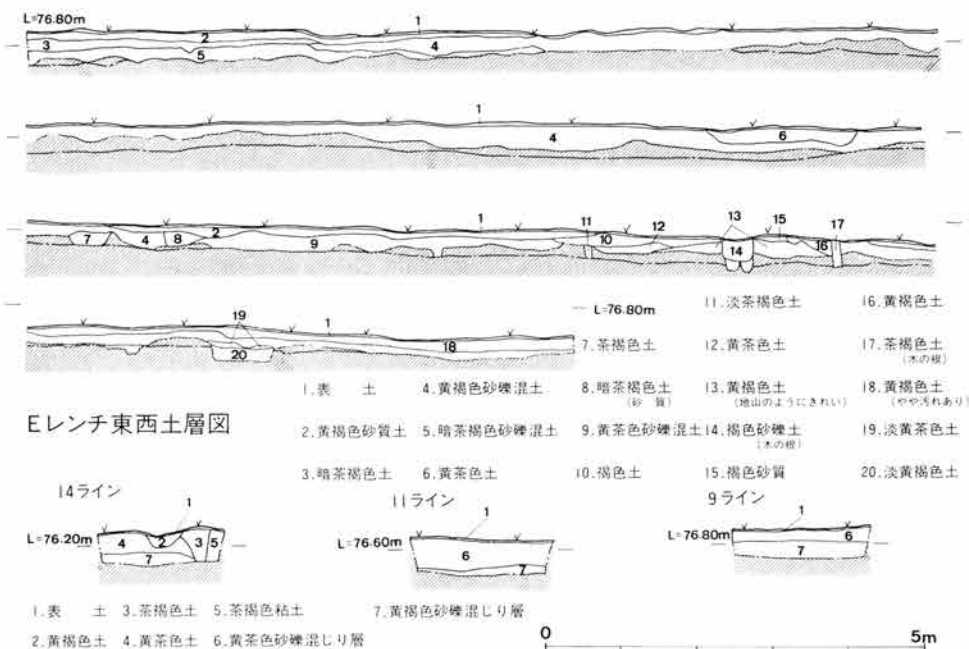
ケシケ谷遺跡は、福知山市大字宮小字ケシケ谷にある。当遺跡は平野部から約30mの比高差をもつ丘陵上(標高75m前後)に立地し、丘陵の尾根筋は北方向にのび、そこから西北方向に平坦な緩傾斜面が広がる(第26図、図版第16-1・2)。背後には標高160m前後の山並みがひかえている。

南には小さな谷を隔てて同程度の高さに奥谷西遺跡が分布し、北には谷を挟んで比高差約20mの低い台地上に宮遺跡が存在する。

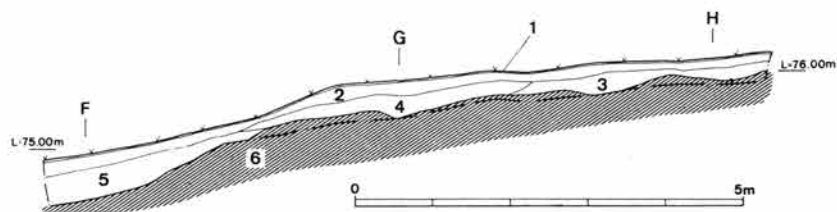
当遺跡は昭和57年度分の分布調査で見つかった遺跡で、表採遺物より、当初は「ケシケ谷城館跡」と報告・紹介されていたものである。しかし、同年度の試掘調査では、竪穴式住居跡の一部と弥生土器を検出したため、遺跡の実態に則して名称を改めている。



第26図 地形測量図



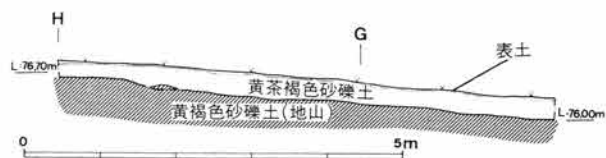
第27図 Eトレンチ西壁土層図



第28図 Iトレンチ南壁土層図

## 2. 調査概要

試掘調査の結果を受け、試掘時のA・Dトレンチを順次拡張して北半は全面的に調査を行い、遺構を検出していった。

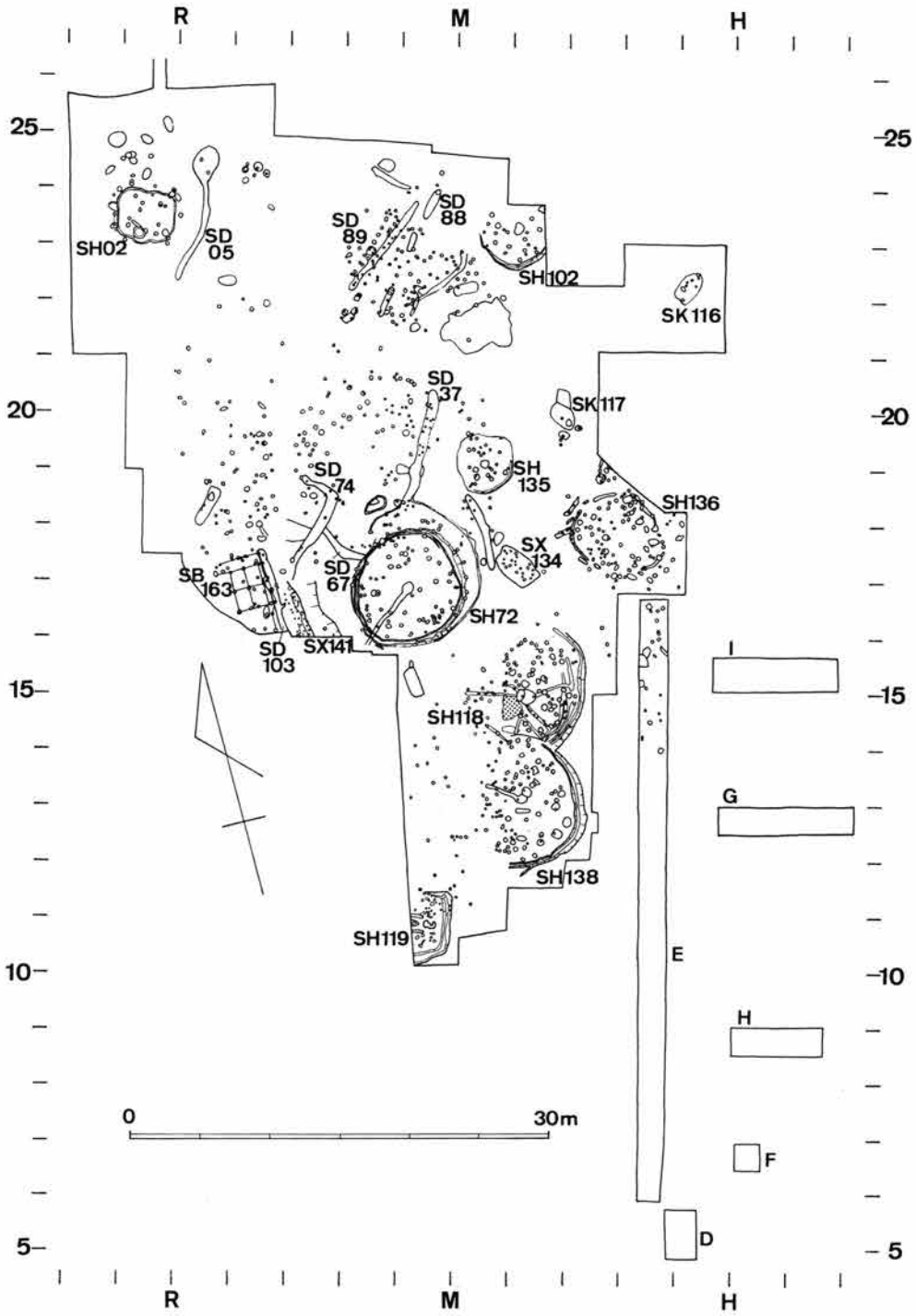


第29図 Hトレンチ北壁東西土層図

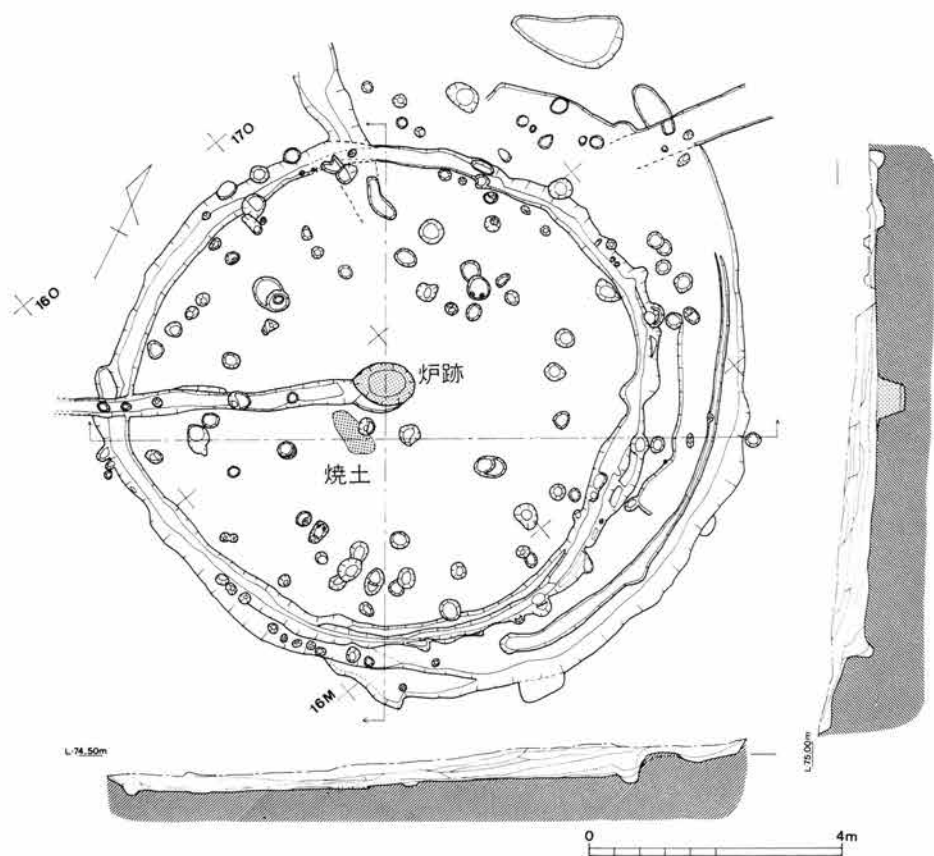
さらに、南・東の傾斜地・平坦地にもトレンチ・グリッドを設けて遺構の有無を確認した。これらのうち遺構を検出したのはEトレンチの北部のみで、他のトレンチ・グリッドでは遺物の出土はみしたが、遺構は検出できなかった(第27～30図、図版第241～244)。

地区割りには4m毎に方眼を組み、南北ラインは東から西にアルファベットを付し、東西





第30図 検出遺構図



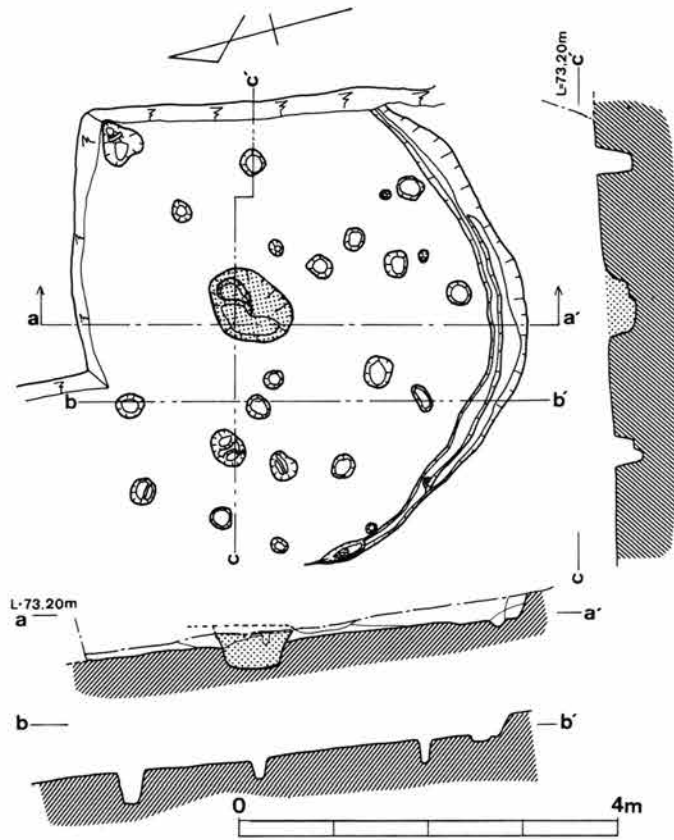
第31図 SH72 実測図

ラインは南から北に数字を付してライン名とした。地区名は、4m×4mで南東隅を作る南北・東西ラインのアルファベットと数字を組み合わせることで表示することとした。

遺構は調査地のほぼ全域で検出し、竪穴式住居跡(弥生時代：SH72, SH102, SH118, SH119, SH135, SH136, SH138, 古墳時代：SH02)、掘立柱建物跡(SB163)、柵列、溝、土坑、ピット等がある。以下、主要な遺構について報告する。

**SH72**(第31図、図版第17-1・18) 調査地のほぼ中央に位置しており、最も残り具合のよい住居跡である。この住居跡の東側に、「棚」状の壇が設けられている。『概報』では、SB96と報告したものである。その後、土層の観察によりSH72と同一の住居跡と考えるに至った。棚の底面には一条の溝が壁に平行して掘られている。棚の設けられている側の竪穴の壁面で多くの柱穴跡を検出した。このうちの一つは、柱を粘土で取りまいていた。(図版第18-3)。この棚は地山を掘り残して、床面からの高さは約30cmである。床面中央には炉跡(0.8m×1.0m・深さ40cm)があり、内部の壁面は熱により赤く焼けていた。また、炉跡に近接して、南の床面が赤く焼けていた。炉跡より西に向けて幅30~40cm・深さ

10cmの「排水溝」が掘られており、住居外にのびる。この「排水溝」の底面には、径約10cm、深さ10cm程度の小ピットが多く穿たれている(図版第18-2)。壁溝は一条を検出し、堅穴内を全周する。堅穴の南壁斜面では小ピット群を検出した。床面からの遺物の出土は少ない。また、棚部からのまとまった遺物の出土はなかった。この住居に伴う遺物は、第45図3・4・6・9～11, 第46図16・20・21がある。平面形は、棚部も含めるとやや崩れた円形をなし、長軸

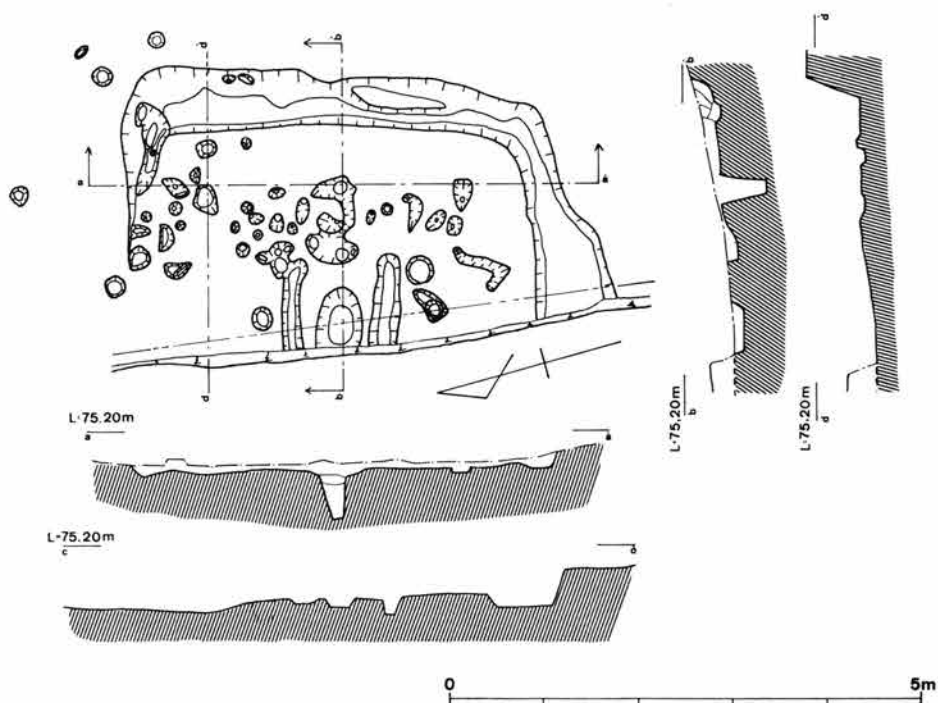


第32図 SH102 実測図

10.25m・短軸9.6mで、棚部を除くと長軸8.8m・短軸8.2mの楕円形をしている。検出高は最大70cmである。

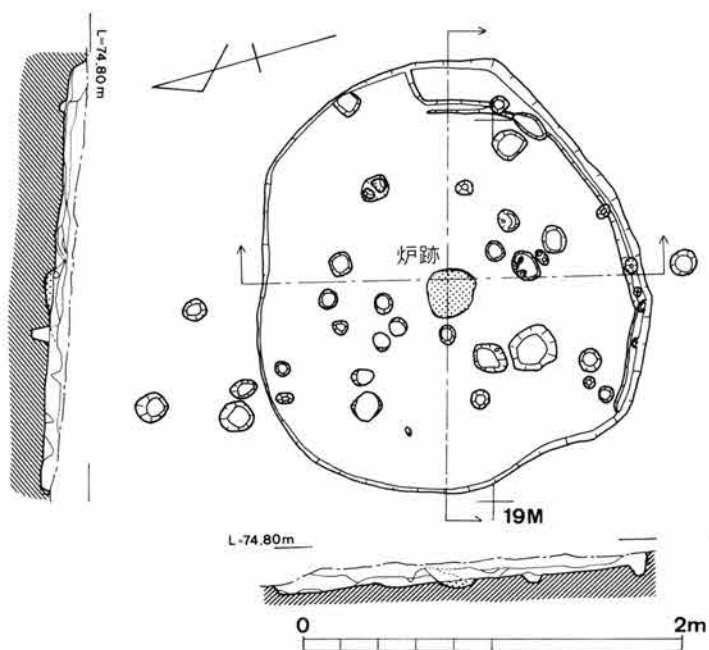
**SH102**(第32図, 図版第20-1) 調査地の北方で検出した。北に下る緩やかな傾斜地で検出したため、北半は削平されていた。炉跡の設けられている層の検討から、北半部は地山の上に整地を行い、床面を設けていたものと復原される。中央に炉跡(70cm×95cm・深さ15cm)を持ち、炉内で炭化物を検出した。壁溝は全周していたと思われるが、北半は削平のため検出できなかった。床面からの遺物は細片のみで、図化したのは埋土中より出土したものに限られた。径5mの円形住居に復原される。検出高は最大で30cmである。

**SH119**(第33図, 図版第21-2) 調査地の南端で検出した。検出したのは東半のみで、西半は調査地外に広がるが、現地地形が急傾斜となり、住居跡はすでに削平されているものと推測された。土層の観察から、SH102と同じく、西半部は盛土を行っている。幅30～70cm・深さ5cmの壁溝を検出した。炉跡は、推定床面中央付近で検出した。炉跡に近接する東

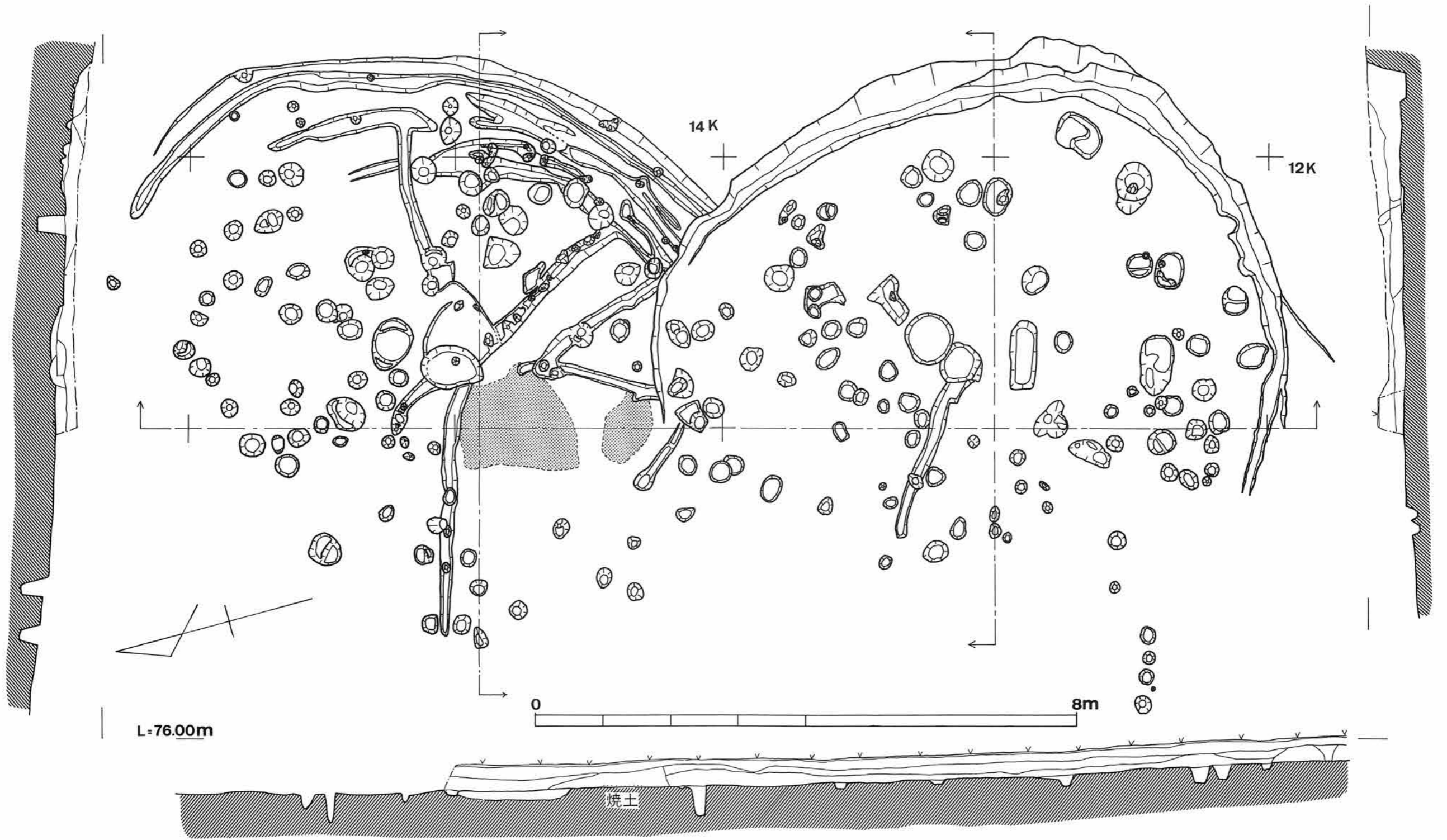


第33図 SH119 実測図

西の2条の溝中には炭化物が埋土中に極めて多量に入っていた。4本柱とすると、その位置には浅いピットしかない。柱穴の規模から推測すると、柱穴と判断できるのは炉跡の東側中央部で検出したものである。2本柱か。遺物の出土は細片のみであった。弥生時代の



第34図 SH135 実測図

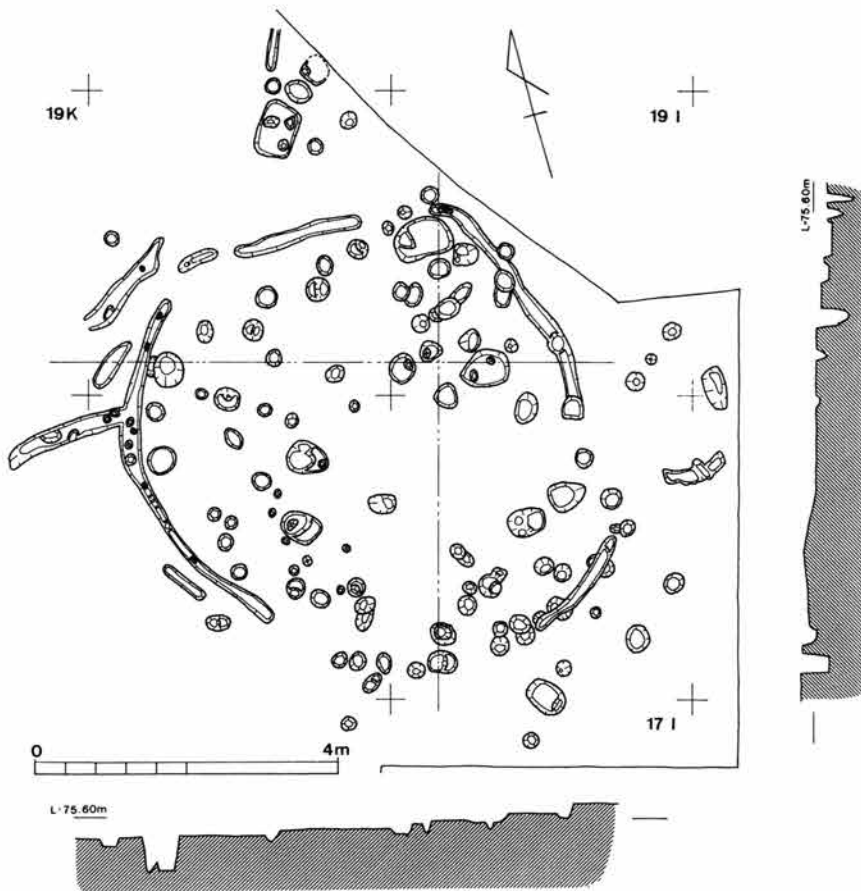


第35图 SH118・SH138 实测图

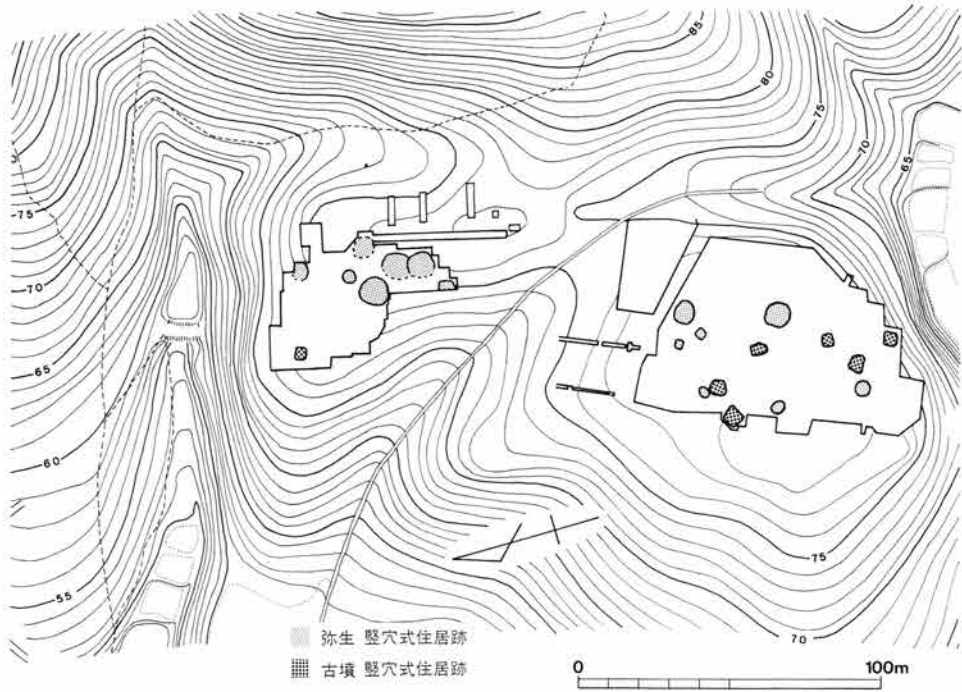
竪穴式住居跡のうち、この住居跡のみ隅丸方形のプランを持つ。南北長4.4~5.0m・検出高は最大で25cmである。

**SH135**(第34図, 図版第20-2) SH72に近接して検出した不整形の円形の竪穴式住居跡である。中央に炉跡(径50cm・深さ14cm)があり、炉跡の壁が赤く焼けており、内部には炭化物が詰まっていた。その西横に隣接するピットにも炭が詰まっていた。東から南壁にかけて周溝が検出できたが、全周しない。東壁には、一部の掘り残しが認められ、床面から約5cmの高さをもつ。床面から出土した遺物は細片のみで、図化したのはすべて埋土中から出土した遺物である。規模は4.0m×4.5mで、検出高は最大で25cmである。

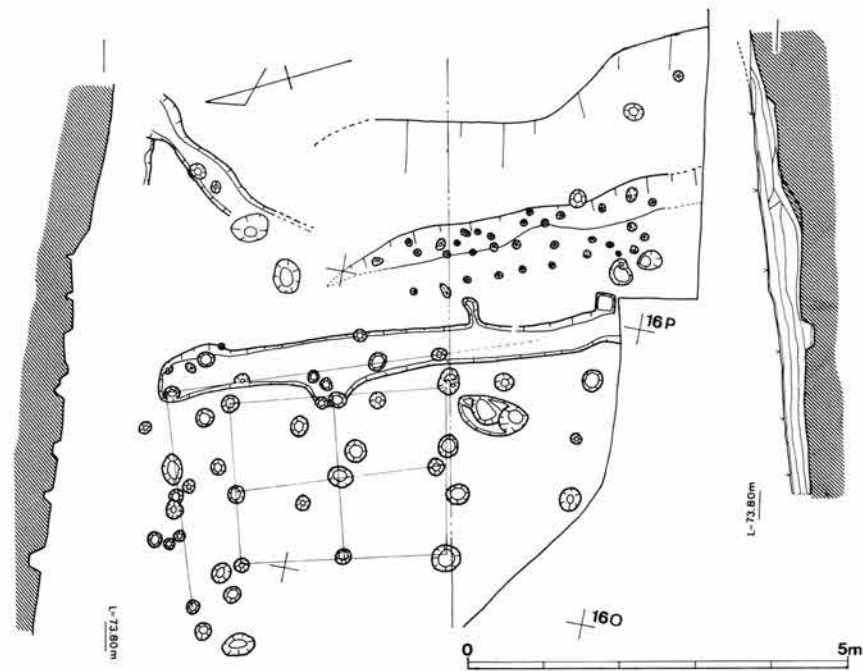
**SH136**(第36図, 図版第21-1) 最も高所で検出した住居跡である。そのため、竪穴の壁は既に削平されており、多くの柱穴と壁溝・排水溝の一部を検出した。焼土・炭化物を伴う炉跡は検出していない。西側の壁溝と考える溝の底面では小ピット列を検出した。壁溝の巡り具合から、2~3棟の住居跡が重複しているものと判断される。



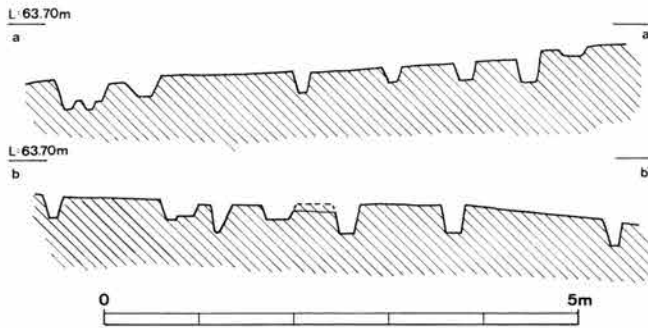
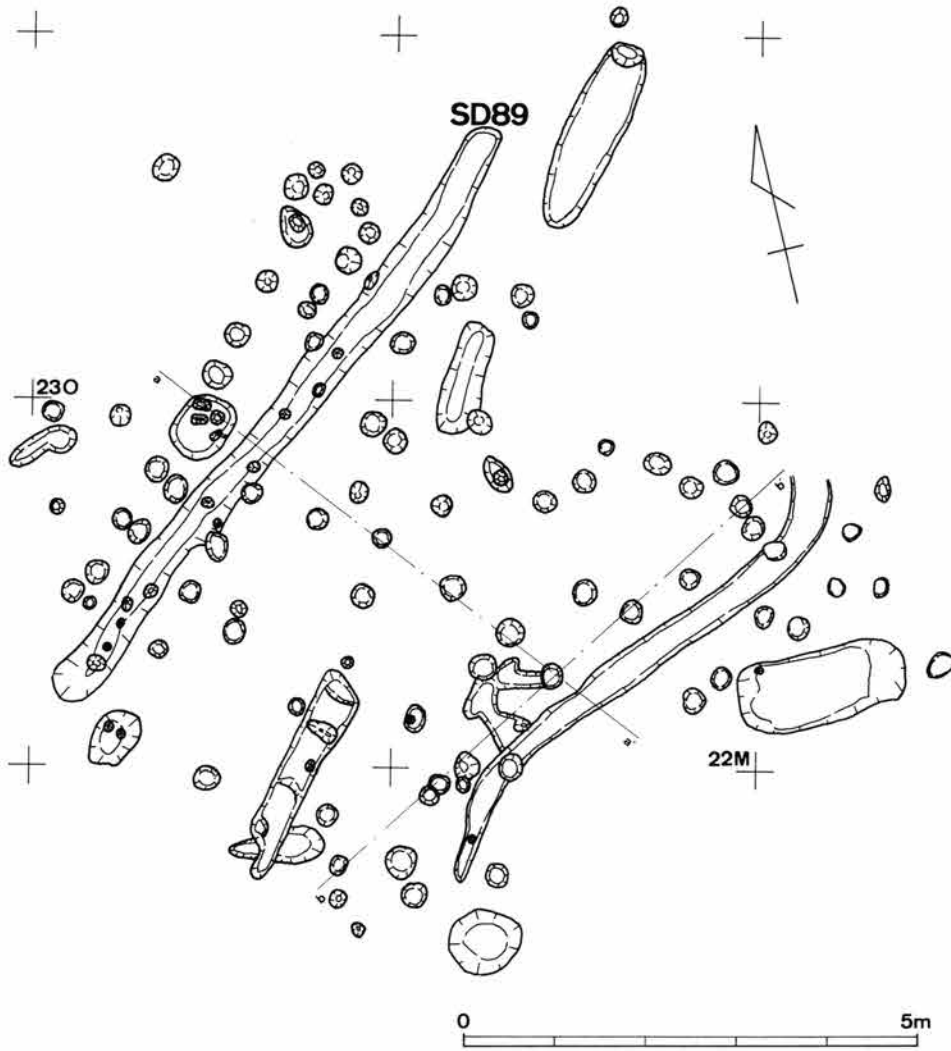
第36図 SH136 実測図



第37図 奥谷西遺跡・ケシケ谷遺跡検出竪穴式住居跡分布図

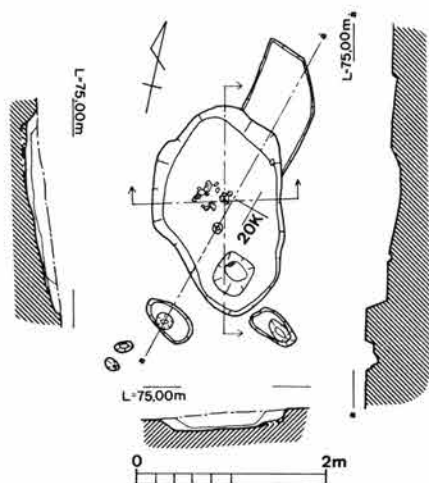


第38図 S B 163 実測図

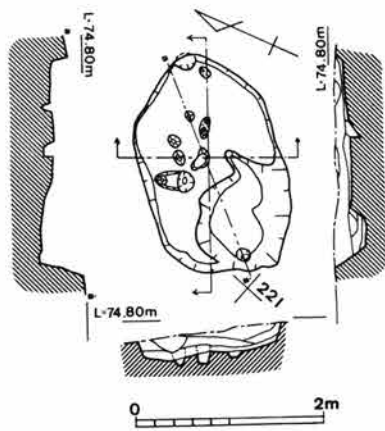


第39図 21~23-M・N区検出遺構平面図

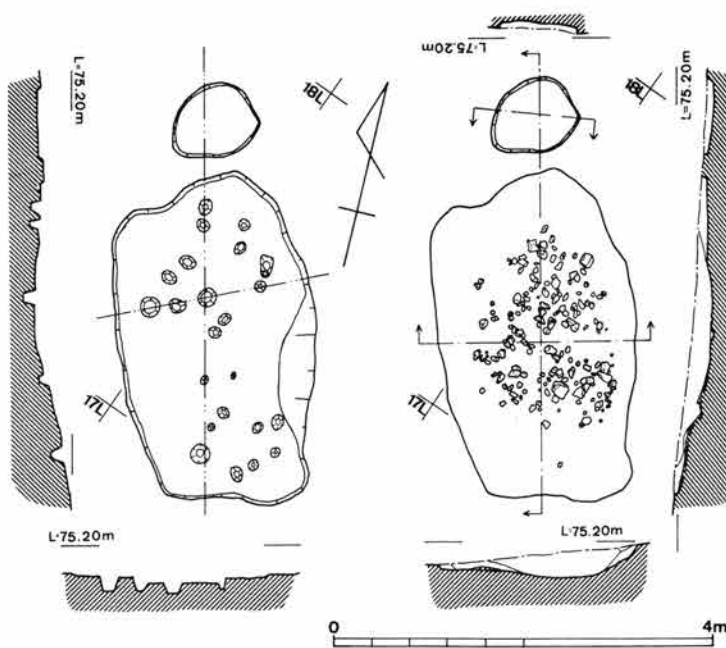




第40図 SK117 実測図



第41図 SK116実測図

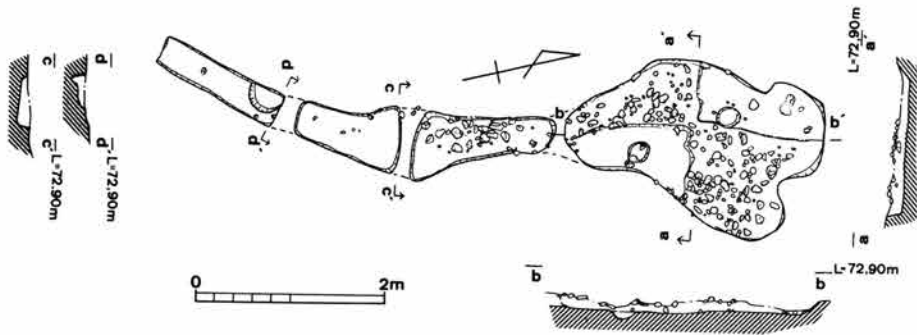


第42図 SX134 実測図

SH118, SH

138(第35図, 図版第17-2・19-1, 2) 調査地の西南で検出した。一部重複して検出し, 先後関係はSH118の後にSH138が造られている。ともに西側が削平されていて, 床面を検出したのはほぼ中央より東のみである。SH

118は, 中央に0.7m×1.0m・深さ10cmの炉跡があり, その西南に2か所の焼土面(1.2m×1.3m : 0.7m×1.0m)が広がっている。壁面に沿って4条の壁溝が平行して巡っている。また, 壁溝から床面中央の炉に向けて4条の「排水溝」が掘られているが, 西半は削平のため, 一部を除いて検出できなかった。本来はすべての「排水溝」が対角をつなぐように掘られていたものと推定される。地形的には東・南側が高いので, 排水を目的としたもの



第43図 SD05 実測図

であれば水が炉の近辺に集まってしまうため、排水のための溝とは考えにくい。また、1条の「排水溝」の底面では小ピット(径約10cm・深さ約5cm)列を検出している。SH72と同じ様相を示す。床面では多くの柱穴跡を検出した。壁溝の数から、最低3回の建て替えを行っているとは推定できる。検出した堅穴の壁は最後の住居のものである。出土土器は床面・壁溝内から、第47図33・37・39・40の土器が出土している。平面形は円形に復原でき、復原径10m・検出高は最大25cmである。SH138はSH118の南で検出した。壁溝は1条が巡り、中央に炉跡を2か所で検出した(70cm×78cm・深さ26cm:径65cm・深さ36cm)。炉跡は重複関係を有することから、同時に2か所で炉を用いたものではないといえる。炉から東に「排水溝」が掘られる。炉跡の内面はともに火を受けて赤化している。炉跡の数と柱穴の数から、最低1回の建て替えを行っているものと考えられる。復原径9m・検出高は最大55cmである。

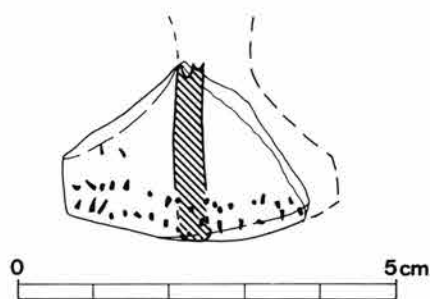
**SH02**(図版第22-1) 調査地の北西隅で検出した、この遺跡唯一の古墳時代後期の堅穴式住居跡である。平面径は東西4.2m・南北3.6mの隅がやや丸い方形を呈する。検出高は約10cmである。北辺の中央にカマドを設ける。主柱4本と貯蔵穴を検出した。

**SD67・SD74** SD67はSH72と重複して検出した。土層の観察から、SD67が古く、SH72が新しいことを確認した。SD67はさらにSD74と重複関係を持ち、SD74が新しいものである。SD67は西下する傾斜を持ち、端に行くに従い幅広くなり、浅くなる。幅0.45~1.6m・深さ5~35cmで、5.2mにわたって検出した。SD74はその埋土中に比較的土器片がまぎらって出土したが、ほとんどが溝底より浮いていた。幅20~80cm・深さ約20cmで、L字形に検出した。

SD67は、その形態と位置から、SH72以前の堅穴式住居から屋外にのびる「排水溝」の可能性はある。

**SX141**(第38図、図版第23)・柱穴群 SH72の西側で検出した人工の段差である。この

付近は地山が西へ向けて緩やかに下る傾斜を持っているが、Oライン付近で地山は約50cmの高低差をもって削平されている。段の下には1~1.5mの平坦面があり、小ピットが南北方向に3列に穿たれている。その西には幅約50cm・深さ10cmの溝(SD103)が掘られており、SD103の西辺に沿って規則的に並ぶ小ピットを検出した。柵列に復原できる。この柵は2間×2間の掘立柱建物跡(SB163)を囲う形で設けられている。倉庫跡と考える。



第44図 分銅型土製品実測図

23N地区を中心として、多くの柱穴・溝を検出している(第39図)。柱穴跡の配置からは建物の復原はできないが、掘立柱建物が数棟重複しているものと判断される。SB163とともに、倉庫跡と考える(図版第22-2)。

**SK117**(第40図) SH135の東北で検出した土塚である。長さ2.2m・幅1.35m・深さ最大25cmで、平面形は長楕円形をなしている。底面の南隅には径約40cm・深さ10cmの土塚が穿たれている。埋土から、弥生時代の遺物が出土している。

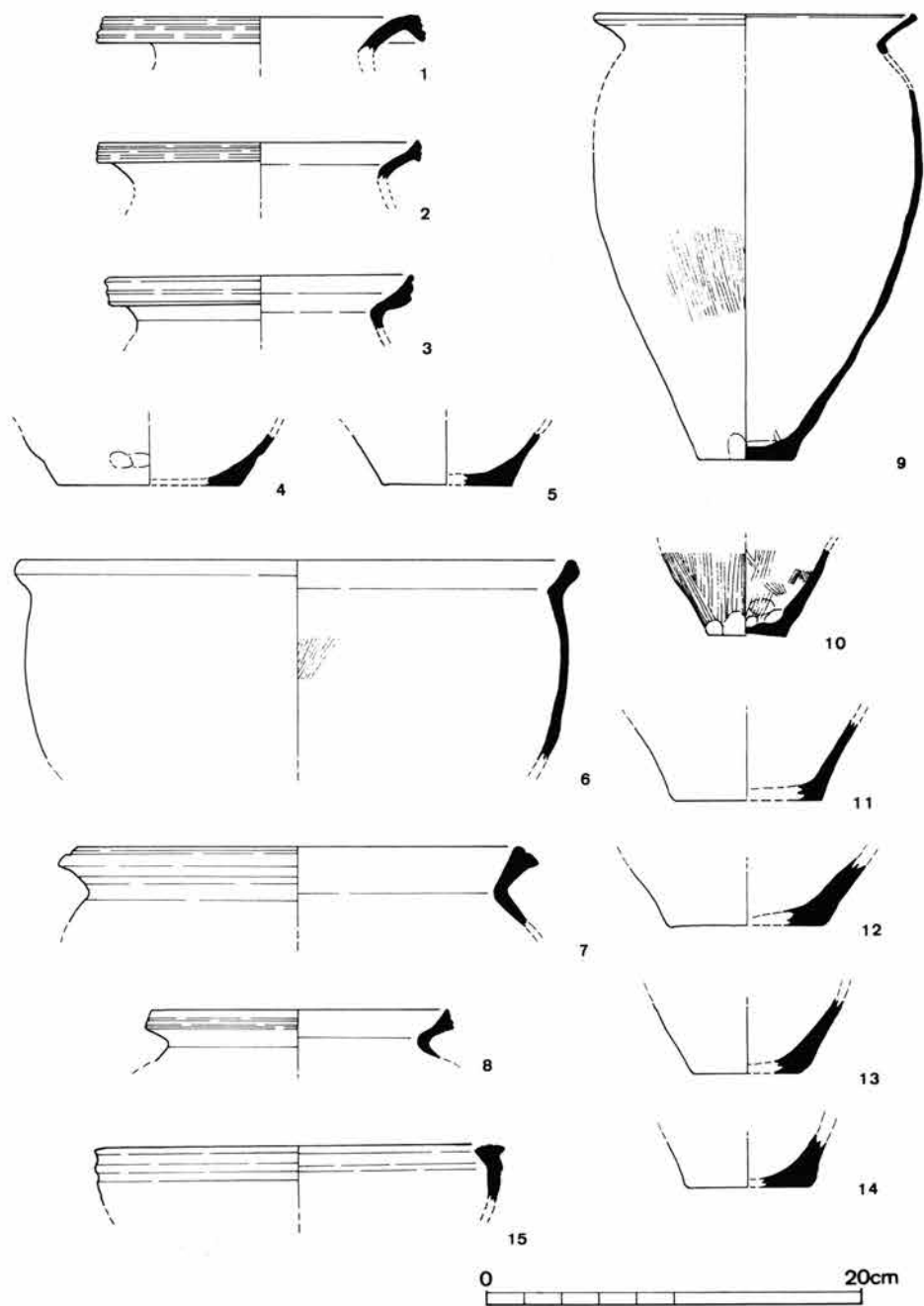
**SK116**(第41図) 調査地の東北部で検出した土塚である。長さ2.3m・幅1.45m・深さ最大15cmで、平面形は長楕円形をなしている。埋土から、弥生時代の遺物が出土している。

**SX134**(第42図) SH72の東側に近接して検出した土塚である。2.05m×3.3m・深さ最大30cmで、平面形は長方形をなしている。底面には二十数個の小ピット(径約15cm、深さ10cm前後)が穿たれている。その性格は不明である。埋土中からは多くの弥生土器が出土している(第50図79~86)。

**SD05**(第43図) SH02の東側で検出した溝状の遺構である。北部に2m×2.5mの土塚状の塚があり、そこから南に向けて幅40~45cmの溝がのびる。第50図の須恵器が出土し、SH02と同時期の遺構である。遺構の内部には、小礫が詰まっており、雨水から住居(SH02)を守る施設かと思われる。

### 3. 出土遺物(第44~68図, 図版第25・26)

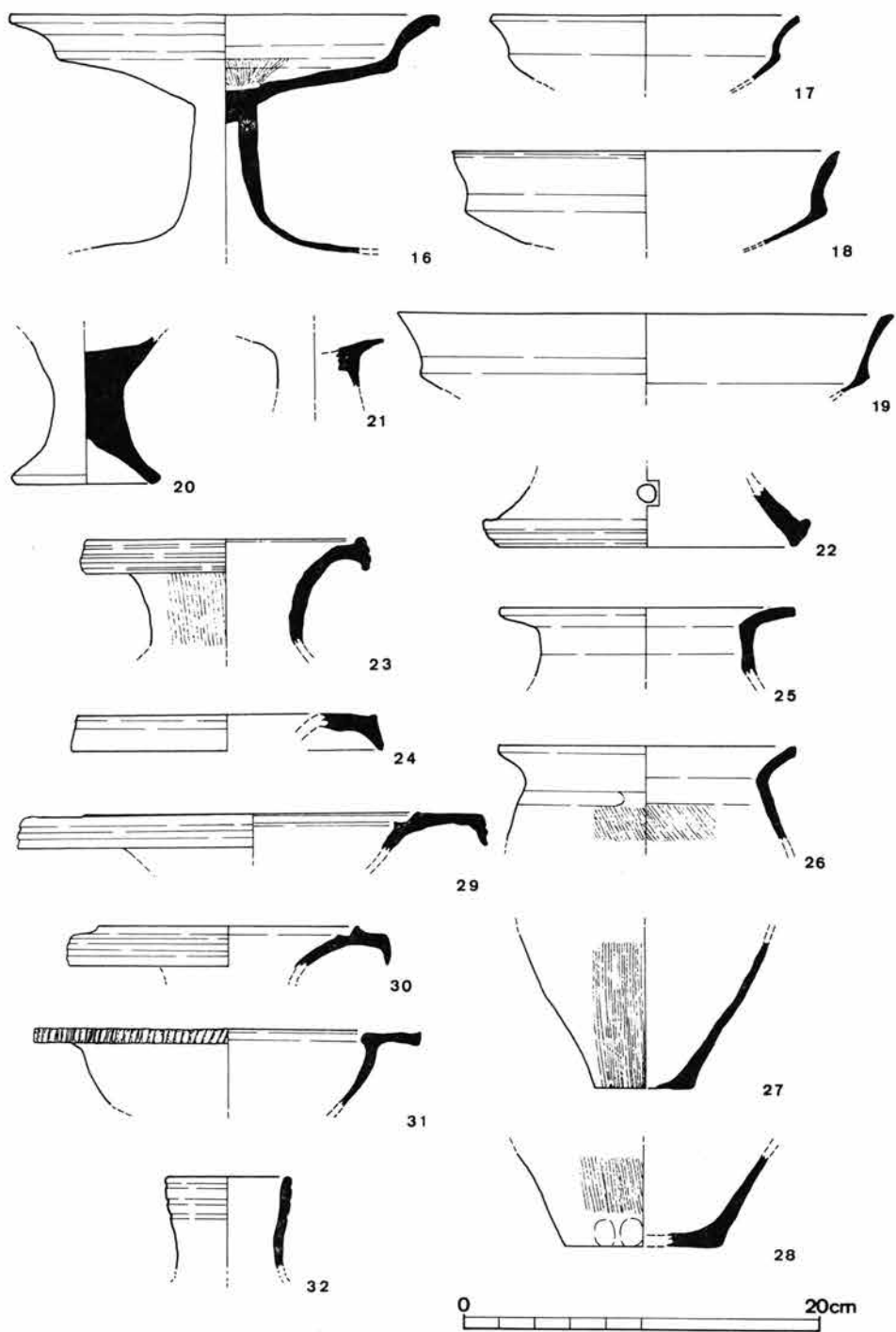
出土遺物は土器が主で、他に石器・鉄器(鉄斧・鉄鏃・鉄釘)がある。土器は細片が多く、完形品に復原できるものは、僅少である。また、図化できる遺物は、ここに掲げた実測図でほぼすべてである。時期は概ね弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)である。土器が特に集中的に出土したのは、25R区を中心とした丘陵の斜面地近辺である。ここが集落のゴミ捨て場であったと考えられる。



第45図 出土遺物実測図 (1)

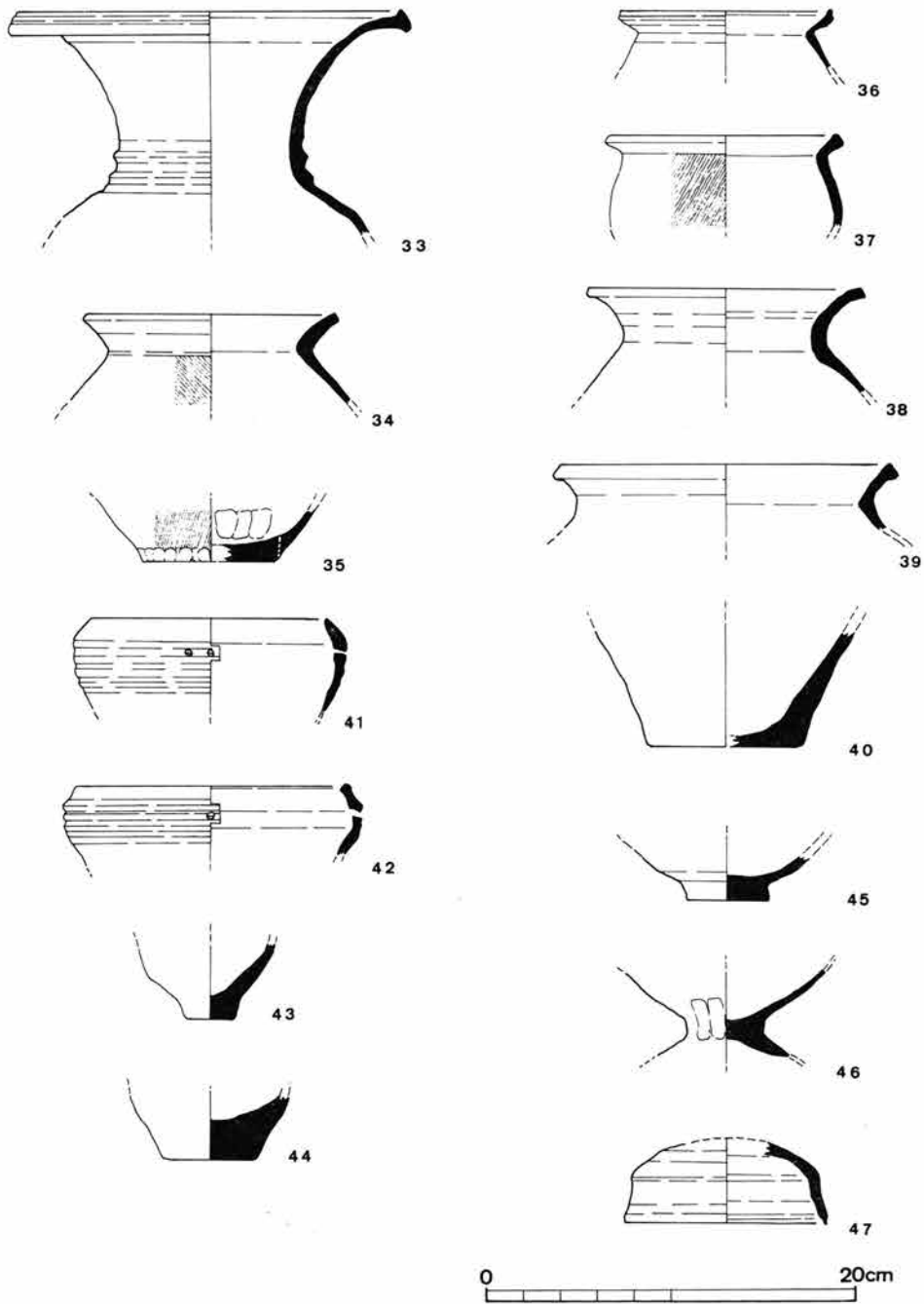
6・10：SH72床面 3・4・9・11：SH72柱穴内

1・2・5・7・8・12～15：SH72埋土



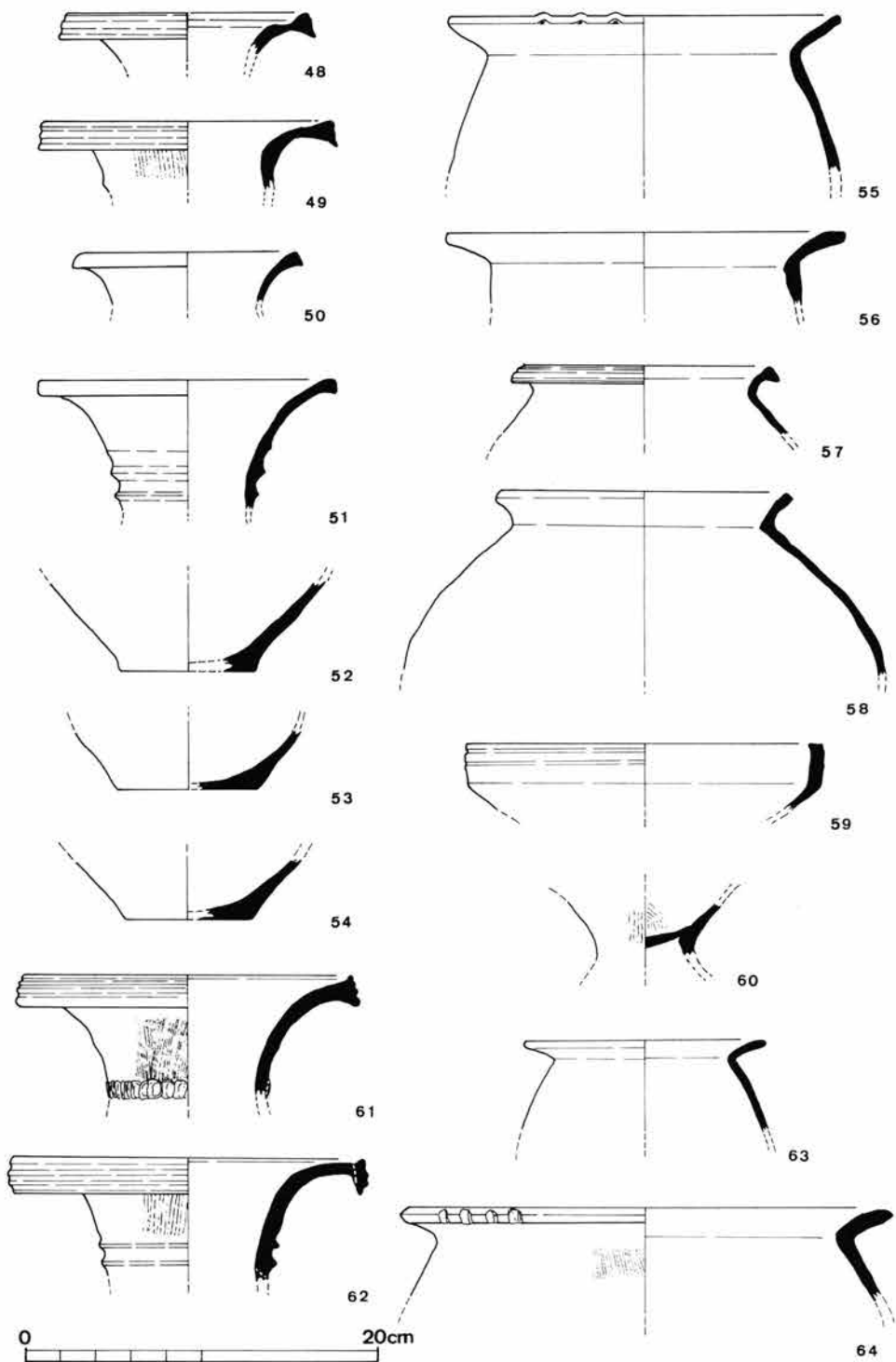
第46図 出土遺物実測図 (2)

16 : S H72壁溝内 20・21 : S H72柱穴内 17・18・19・22 : S H72埋土内  
 23・24・26~32 : S H135埋土内 25 : 包含層

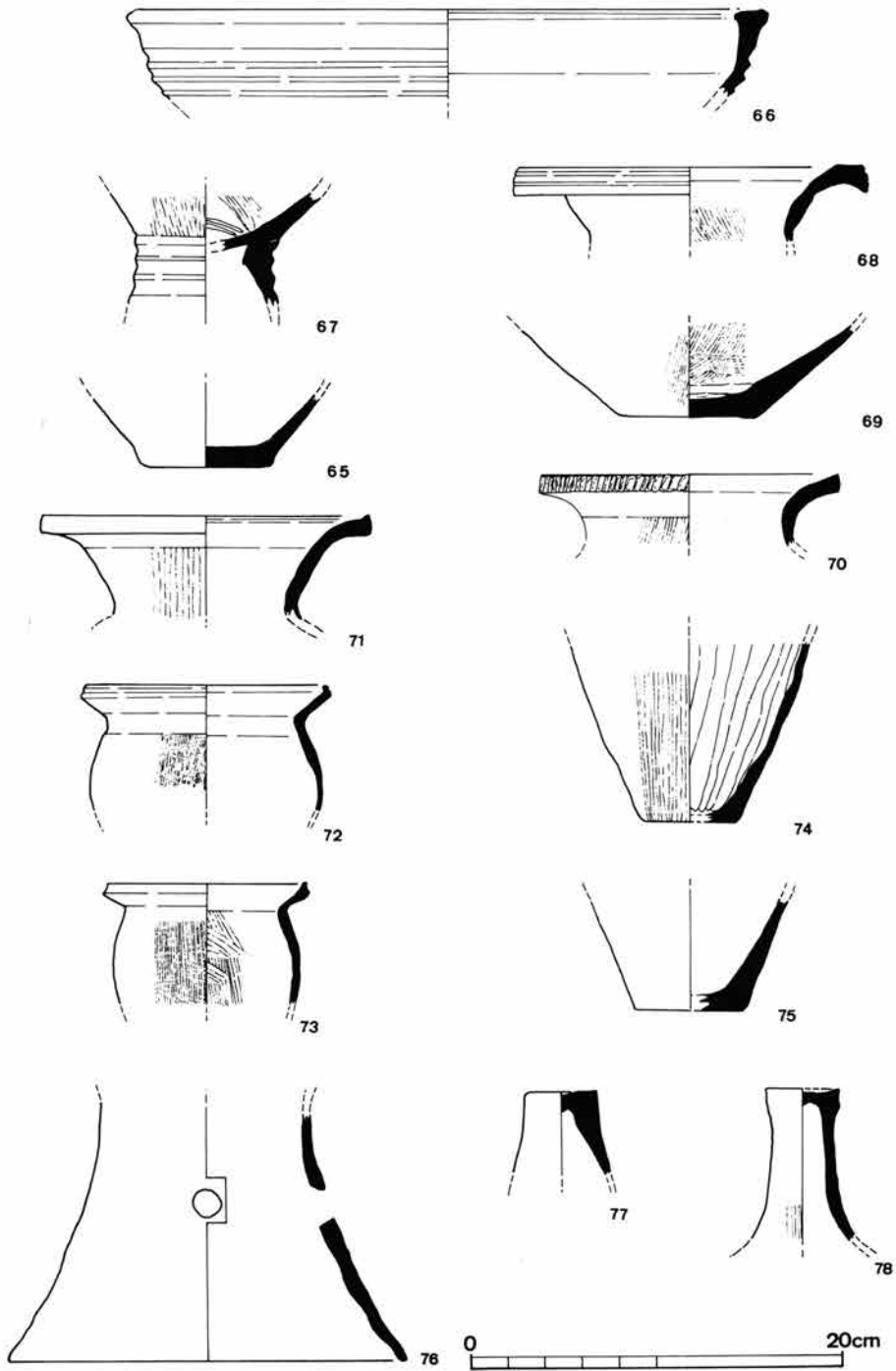


第47図 出土遺物実測図 (3)

33・36・37・39・40 : S H118柱穴・溝内 34・35 : S H118床面 38・41・42 : S H118埋土  
43~46 : S H138床面 47 : S H138埋土



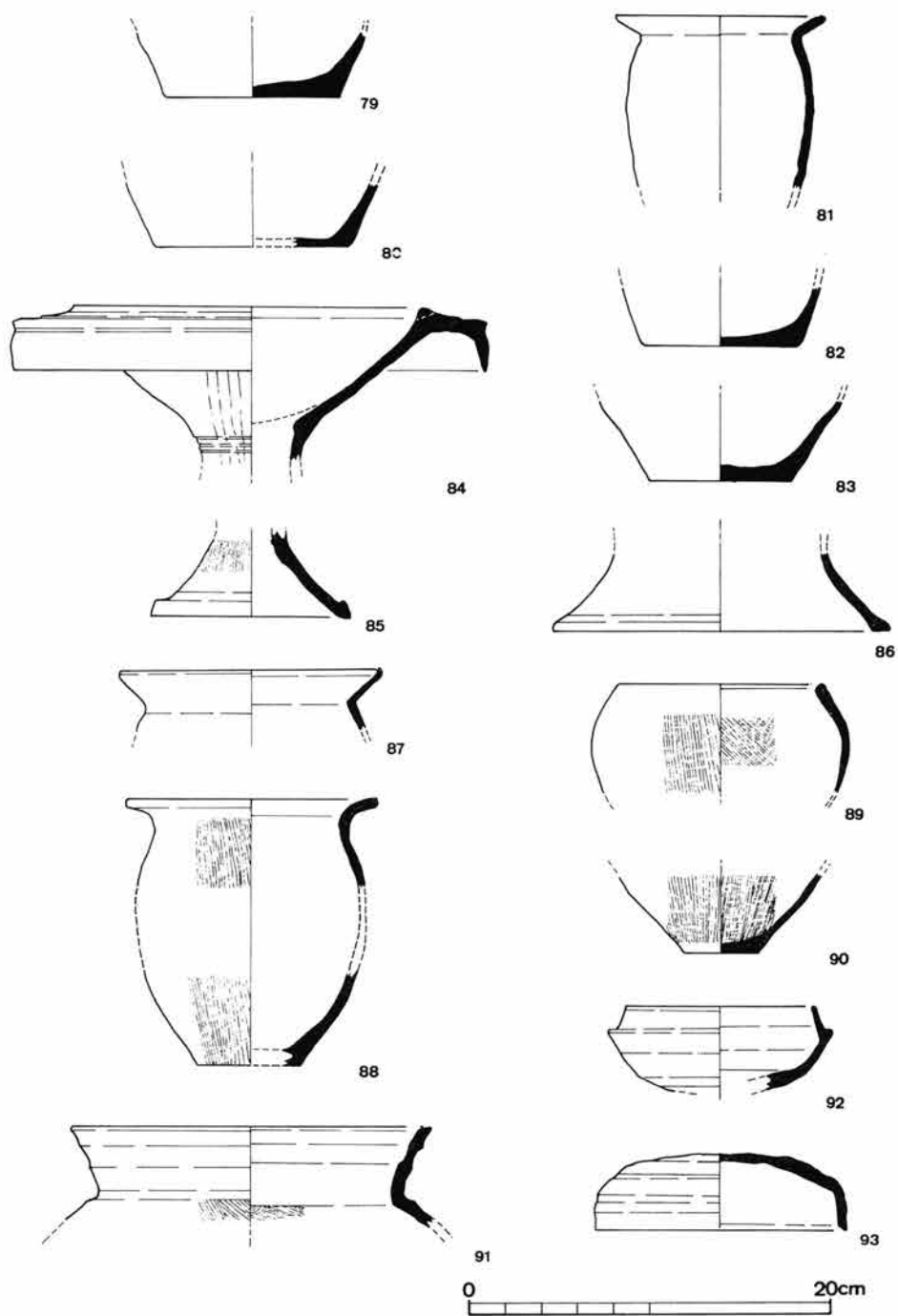
第48図 出土遺物実測図(4)  
48~60 : S H102埋土 61~64 : S D74埋土



第49図 出土遺物実測図 (5)

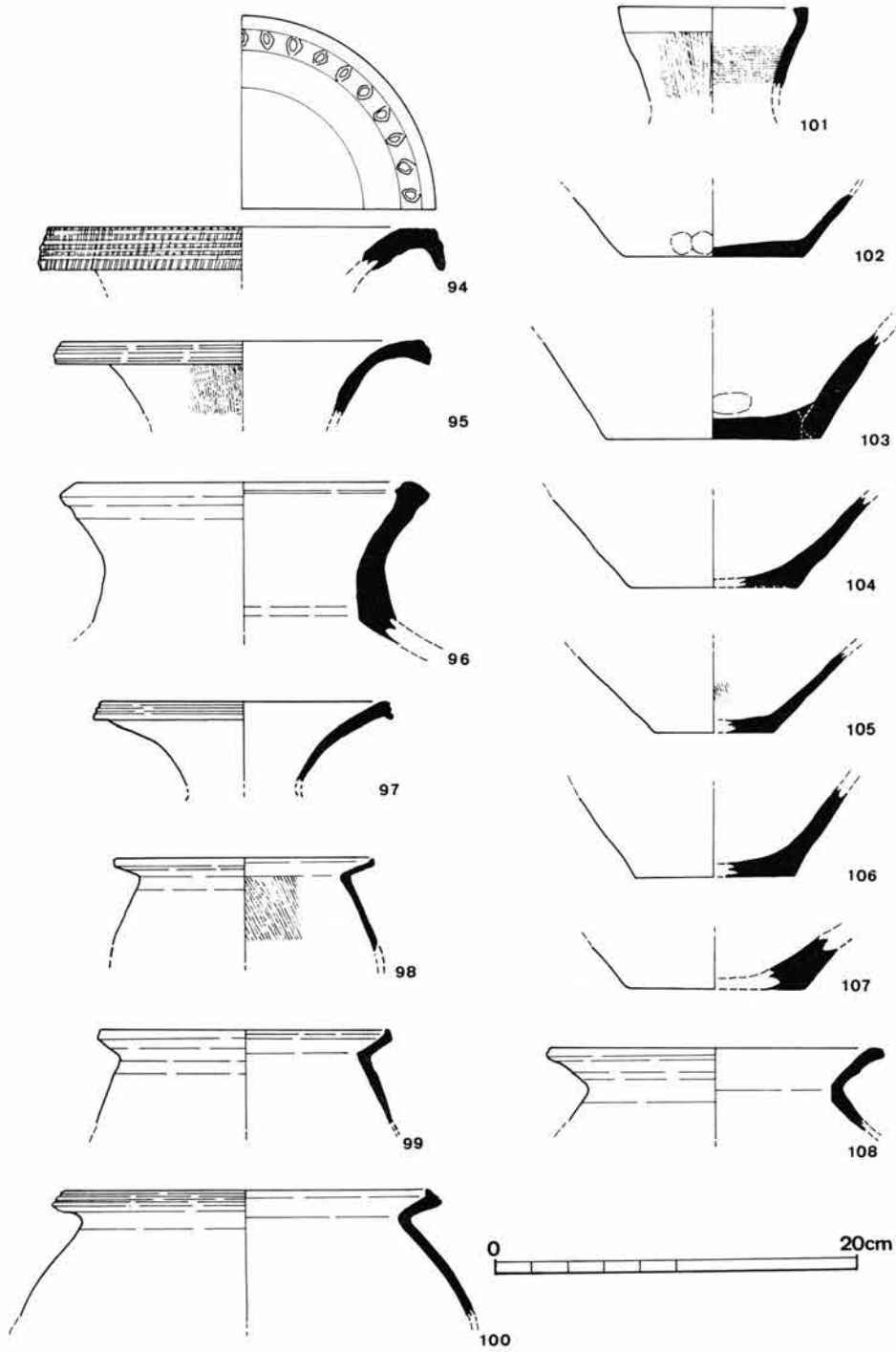
65~67 : S D74埋土 68・69 : S K78 70 : S H102埋土 71~75 : S D103埋土  
76 : S K107 77・78 : S H72埋土





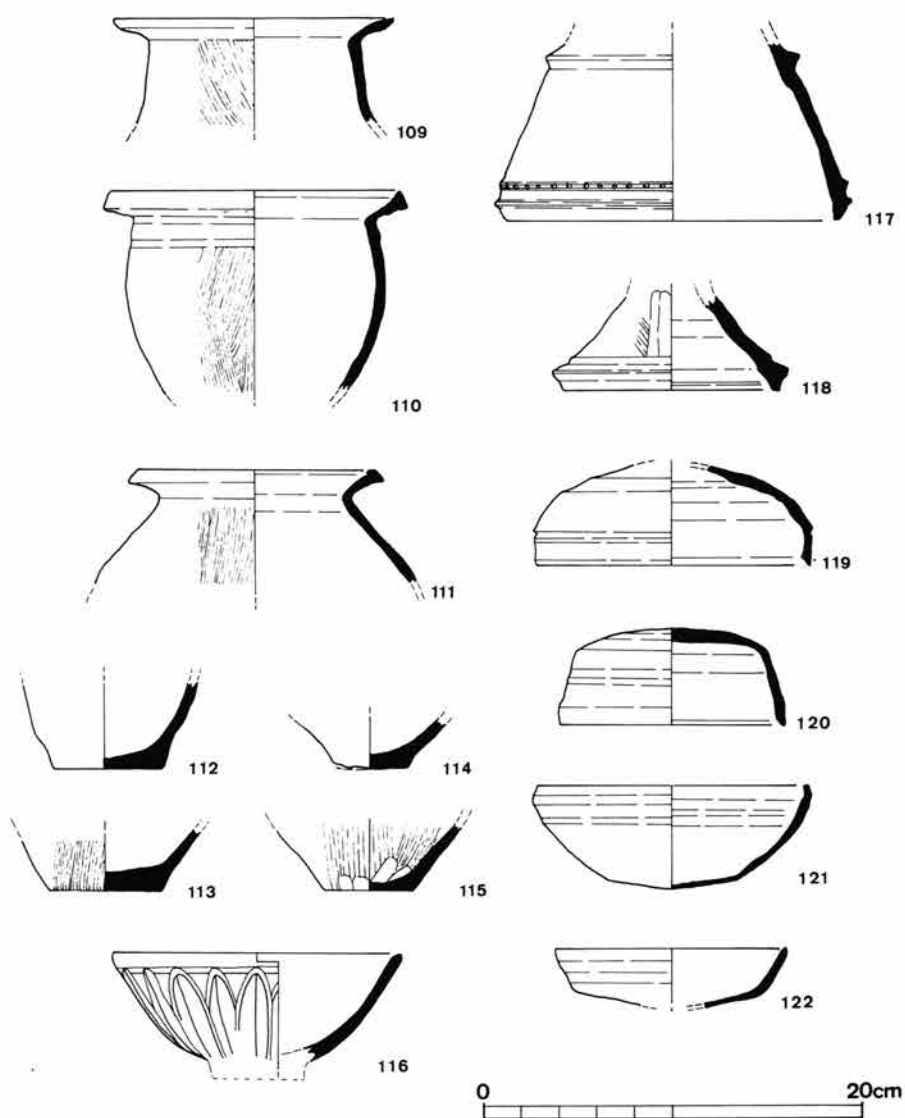
第50図 出土遺物実測図 (6)

79~86 : S X134埋土 87 : S X139埋土 88 : S K137 89・90 : S K153  
91・93 : S H02 92 : S D05



第51図 出土遺物実測図 (7)

94~108: 包含層出土



第52図 出土遺物実測図 (8)

109~120: 包含層出土 121・122: Iトレンチ出土

(1) 土器

特筆すべき出土遺物としては、分銅型土製品がある(第44図, 図版第25)。これは24P区のピットから出土した。表面には2列に楕状工具による刺突があり、裏面は無文である。胎土は極めて精良である。2.6cm×2.9cm・厚さ0.4cmの小片である。

(岩松 保)

## (2) 石器

## ①石器の概要

石器類の出土点数は、合計366点である。これらのうち定形的な石器は、109点を数える。残りは石核・剥片・破片類で、これらの石材ごとの点数と占有率を示すと、チャート41点(15.7%)、安山岩155点(60.7%)、サヌカイト60点(23.3%)となる。ここでの安山岩とは、丹後地方出土の石器によく用いられるもので、二上山産サヌカイトとは異なる。また、金山産サヌカイトとおぼしきものもあるが、ここでは安山岩として一括している。

次に、定形的石器の内訳を点数と占有率でみると、石鏃26点(23.9%)・同未製品8点(7.3%)・尖頭器1点(0.9%)・石錐4点(3.7%)・削器類(削器・石匙・使用及び、加工痕ある剥片)21点(19.3%)・楔形石器1点(0.9%)・槌石2点(1.8%)・磨製石剣1点(0.9%)・同未製品1点(0.9%)・打製石剣1点(0.9%)・石庖丁未製品1点(0.9%)・敲石類(敲石・磨石)28点(25.7%)・大型蛤刃石斧3点(2.8%)・扁平片刃磨製石斧1点(0.9%)・小型磨製石斧1点(0.9%)・環状石斧1点(0.9%)・同未製品1点(0.9%)・大型柱状砥石1点(0.9%)・石皿3点(2.8%)・球形礫3点(2.8%)となる。これらの石器を次の4つの用途別に整理して各用途の点数と占有率を提示しておきたい。

狩猟具・戦闘用具(石鏃・尖頭器・打製石剣)	36点・33%
植物質食糧等の調理具(敲石類・石皿)	31点・28.4%
石器・木・皮革などの加工具(石錐・削器類・楔形石器・槌石・石斧類・砥石)	36点・33%
農具(石庖丁未製品)	1点・0.9%
その他(磨製石剣・同未製品・球形礫)	5点・4.6%

狩猟・調理・加工の各用具がほぼ同数である。日々の生業を営む上から、生活用具の必需品は取り揃えている。また、弥生時代にしては農具の割合が極めて低いが、すでに石器から金属製農具への使用に変わった時期に入っていると考えることもできる。

使用石材について特徴的なところをあげてみると、まず石鏃では、黒曜石1点(2.9%)・チャート7点(20.6%)・安山岩16点(47.1%)・サヌカイト(二上山産)10点(29.4%)の割合である。サヌカイトを含めた安山岩系の石材が最も多く、全体の8割近くを占める。

削器類は、チャート9点(42.9%)・サヌカイト(二上山産)9点(42.9%)・安山岩3点(14.2%)の内訳である。チャートと安山岩系がほぼ半々の割合と言える。

石斧・石剣類には、頁岩・凝灰岩・砂岩が、形態・大きさごとに適切な選択がなされている。蛤刃石斧などの大型の伐採用具には砂岩が、小型の加工具にはきめの細かい良質の頁岩(粘板岩)・凝灰岩が主に使われている。

付表2 出土石器一覧表

挿図 番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 区分	残存状況	出土地点
㊟- 1	石 鏃	2.2	1.5	0.3	0.9	黒曜石	凹基式	完形	16-N
2	石 鏃	(1.4)	1.5	0.4	0.4	サヌカイト	凹基式	先端一部欠	21-P
3	石 鏃	2.2	1.9	0.4	1.5	チャート	凹基式	完形	不明
4	石 鏃	1.9	1.6	0.4	0.4	サヌカイト	凹基式	完形	S H72北壁
5	石 鏃	1.8	(1.3)	0.3	0.5	安山岩	凹基式	片側基部欠	S H72
6	石 鏃	(1.7)	(2)	0.5	1.5	チャート	凹基式	先端・片側基部欠	不明
7	石 鏃	2	1.6	0.3	0.3	安山岩	凹基式	完形	S H135
8	石 鏃	2.3	2.2	0.4	1.5	チャート	凹基式	完形	S H72東南
9	石 鏃	(1.4)	1.7	0.3	0.7	サヌカイト	凹基式	先端欠	24-P
10	石 鏃	(1.8)	1.7	0.3	1	チャート	凹基式	先端欠	S H72
11	石 鏃	(2.6)	1.6	0.3	1.5	サヌカイト	凹基式	先端一部欠	22-L
12	石 鏃	(1.5)	(2.2)	0.4	1.5	チャート	凹基式	先端・両側基部欠	S H72
13	石 鏃	(2.6)	(1.6)	0.5	1.5	チャート	凹基式	先端・片側基部欠	S H72
14	石 鏃	(2.4)	(1.6)	(0.5)	4	サヌカイト	不明	基部欠	S H72
15	石 錐	3.1	1.5	0.4	1.5	サヌカイト	—	完形	S H72
16	石 鏃	(2.9)	1.9	0.4	2.5	安山岩	尖基式	先端部欠	不明
17	石 鏃	2.7	1.6	0.5	1.4	安山岩	平基式	完形	S D67
18	石 鏃	3.4	1.7	0.5	3	安山岩	平基式	完形	21-M
19	石 鏃	2.2	1.6	0.5	1.8	安山岩	平基式	完形	S D74
20	石 鏃	(2.5)	1.7	0.2	0.8	安山岩	不明	基部欠	16-0
21	石 鏃 (未)	2.2	1.6	0.4	2	サヌカイト	—	—	S H72
22	石 鏃	1.9	1.5	0.4	1.1	安山岩	平基式	完形	S D74
23	石 鏃	1.9	1	0.3	0.3	安山岩	円基式	完形	S H135
24	尖頭器	4.3	1.5	0.7	3.5	サヌカイト	—	完形	S H136・柱穴
25	石 鏃 (未)	2.5	1.9	0.5	3	サヌカイト	—	—	24-P
26	石 錐	2.5	1.9	0.4	1.2	チャート	—	完形	17-M
㊟- 1	石 鏃	2.3	1.8	0.4	2.2	安山岩	平基式	完形	16-P
2	石 鏃	2	1.8	0.3	1.2	安山岩	平基式	完形	S H138
3	石 鏃	1.6	1.1	0.3	0.9	安山岩	平基式	完形	S H72
4	石 鏃 (未)	(1.6)	(1.5)	0.2	0.7	安山岩	—	下半折	不明
5	石 鏃 (未)	1.8	1.7	0.4	2	サヌカイト	—	—	不明

( ) 内は残存値, 重量の単位はgを示す。

挿図 番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 区分	残 存 状 況	出 土 地 点
㊦- 6	石 鏃 (未)	(2.6)	(1.2)	(0.3)	1.2	安山岩	—	基部欠	M-17
7	石 鏃	1.4	(1.2)	0.3	1.5	サヌカイト	不明	下半折	不明
8	石 鏃	(1.4)	(1)	0.2	0.3	サヌカイト	不明	斜めに半折	S H72
9	石 鏃 (未)	2.8	1.5	0.5	2.1	安山岩	—	—	S H118
10	石 鏃 (未)	(1.8)	1	0.2	1	安山岩	—	基部欠	不明
11	石 鏃 (未)	2.5	2	0.5	2.9	チャート	—	—	S H72
12	石 錐	3.8	0.8	0.4	1.2	安山岩	—	基部わずかに欠	不明
13	石 錐	6.5	5.1	0.9	27	安山岩	—	完形	S H72
14	削 器	(4.2)	(4)	0.6	11	安山岩	—	両端部欠	19-M
15	削 器	2.1	(2.1)	(0.9)	3	サヌカイト	—	ほぼ半折	S H72
16	削 器	2.3	2.7	0.5	2.5	サヌカイト	—	完形	22-N
㊦- 1	削 器	3.5	4.8	0.9	14.2	サヌカイト	—	完形	S H72
2	削 器	(3.7)	4.4	0.9	18	サヌカイト	—	上半部欠	24-O
3	石 匙	11.7	7	1.4	102	サヌカイト	—	完形	23-Q
㊦- 1	削 器	3.1	6.7	1.5	32	チャート	—	完形	S H72
2	削 器	3.6	6	1.4	32	サヌカイト	—	完形	20-R
3	削 器	(2.8)	1.6	0.4	2	チャート	—	上半部欠	17-M
4	削 器	1.9	5	0.7	7	サヌカイト	—	完形	22-M
5	削 器	2.6	4.2	0.6	8.5	チャート	—	完形	不明
6	削 器	(1.5)	(2.5)	0.6	2.5	安山岩	—	両端部欠	不明
7	削 器	3.3	4.2	0.7	6	サヌカイト	—	完形	S H135
8	使用痕ある剥片	(3.5)	2	0.5	3	チャート	—	上半部欠	24-R
㊦- 1	削 器	3.2	5.5	0.8	14	サヌカイト	—	完形	15-N
2	削 器	1.8	2.6	0.4	1.8	チャート	—	完形	20-R
3	削 器	(3.1)	2.5	0.4	4	チャート	—	上部欠	21-P
4	使用痕ある剥片	(3.1)	(2.7)	0.7	6.5	チャート	—	上・下部欠	不明
5	加工痕ある剥片	3.7	2.8	0.4	4.5	チャート	—	完形	22-L
6	加工痕ある剥片	(3.8)	2	0.7	9.5	チャート	—	上半部1/3欠	19-R
7	楔形石器	2.3	1.7	0.5	1.9	チャート	—	完形	19-P
㊦- 1	削 器	3.6	(4.7)	0.7	15.5	安山岩	—	両端部欠	S H72
2	石 核	4.2	5.5	2.5	65	チャート	—	—	不明

挿図 番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 区分	残存状況	出土地点
㉔- 3	槌石	8.4	4	3.6	175	砂岩	—	上端欠	21-P
4	槌石	8.2	2.6	1.5	42.5	シルト質砂岩	—	完形	24-O
㉔- 1	磨製石剣	6.8	3.4	0.9	28.5	粘板岩	—	基部のみ	S H72
2	打製石剣	6.1	3.7	1.3	36.5	頁岩	—	基部のみ	不明
3	磨製石剣(未)	9	3.7	1.3	62	頁岩	—	縦に完截	17-N
4	石庖丁(未)	3.2	6.4	0.5	10.8	頁岩	—	中央部のみ	18-L
㉕- 1	敲石	10	8	3.8	400	砂岩	Ⅱ	完形	20-M
2	敲石	(11)	9	5.8	850	砂岩	Ⅱ	先端一部欠	不明
3	敲石	10.4	9.6	4.8	640	砂岩	Ⅱ	完形	S D103
4	敲石	6.4	6.8	2.2	125	砂岩	Ⅱ	完形	21-N
5	敲石	11.8	9.5	4.6	750	砂岩	Ⅱ	完形	17-K
㉕- 1	敲石	8.9	7.8	4.4	465	砂岩	Ⅱ	完形	16-L
2	敲石	5.3	8.2	3.1	168	砂岩	I	完形	25-S
3	敲石	(6.2)	7.7	3.5	270	砂岩	Ⅱ	ほぼ1/3欠	S D35
4	敲石	(9.1)	(6.5)	(3.8)	240	砂岩	I	縦横に半割	22-O
5	磨石	9.7	8	4.1	435	花崗岩	Ⅲ	完形	18-M
6	敲石	7.8	8	5.5	475	砂岩	Ⅱ	完形	17-O
7	敲石	12.5	5.6	3.8	318	砂岩	Ⅱ	完形	25-Q
㉕- 1	敲石	(14.8)	5.3	2.8	262	砂岩	Ⅱ	先端一部欠	21-R
2	敲石	10.9	6.3	4	368	砂岩	I	完形	23-R
3	敲石	(10.7)	6.2	6	585	砂岩	I	ほぼ1/3欠	排土中
4	敲石	5.7	8.5	6	318	砂岩	Ⅱ	半割	18-J
5	敲石	(7.6)	5	3.2	185	砂岩	Ⅱ	ほぼ1/3欠	S H138
6	敲石	11.4	5.3	4	262	砂岩	I	完形	19-N
7	敲石	8	9.1	4.3	355	砂岩	Ⅱ	ほぼ半割	不明
㉕- 1	敲石	8.2	7	4.6	385	砂岩	Ⅱ	完形	排土中
2	敲石	(11)	5.1	3	230	砂岩	Ⅱ	先端ほぼ1/4欠	18-L
3	敲石	9.3	8	4.4	465	砂岩	I	完形	23-M
4	敲石	9.2	5.7	3.6	250	砂岩	Ⅱ	ほぼ1/4欠	16-O
5	敲石	8.9	8.2	5	540	砂岩	I	完形	S H72東側
6	敲石	(8.3)	(7.6)	5.4	380	砂岩	I	半割	16-L

挿図 番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 区分	残存状態	出土地点
㊸-7	敲石	14.6	5.3	2.3	270	砂岩	Ⅱ	完形	20-L
㊸-1	敲石	11.4	4.7	4	265	砂岩	I	一部剥落	17-K
2	石皿片	5	3.3	2.4	48	花崗岩	—	細片	S D74
3	敲石	(8.6)	(8.5)	4.1	320	シルト質砂岩	I	ほぼ半割	16-N
4	石皿	(30.9)	(19.2)	11.5	7100	砂岩	—	中央部のみ	20-R
㊸-1	大型柱状砥石	(17.7)	6.2	4.7	810	シルト質砂岩	—	両端一部欠	S H72
2	石皿	20.5	16	7.8	2450	砂岩	—	ほぼ半割	16-L
㊸-1	大型蛤刃石斧	(10.6)	6.2	5	600	凝灰岩	—	下半刃部欠	S D103
2	大型蛤刃石斧	6.7	5	3	135	砂岩	—	刃部欠	S K02
3	大型蛤刃石斧	15.2	8.3	5.2	1030	砂岩	—	上半基部欠	S K30
4	扁平片刃石斧	6.6	4.3	1.2	60	頁岩	—	完形	23-N
5	磨製石斧材	3.4	2.4	0.5	4	凝灰岩	—	—	S H72
6	小型磨製石斧	(4)	(2.6)	(0.6)	10.5	頁岩	—	基部欠	S H72
7	環状石斧	8.8	8	1.4	255	砂岩	—	完形	23-R
8	環状石斧(未)	13.5	10.2	2.4	465	砂岩	—	側縁一部欠	22-O
㊸-1	球形礫	5	4.9	4.2	120	砂岩	—	完形	18-M
2	球形礫	3.6	3.1	2.3	32	砂岩	—	完形	不明
3	球形礫	2.4	2.4	1.9	16	砂岩	—	完形	16-M

敲石類・石皿・槌石・球形礫・砥石などの礫石器は、ほとんどすべて砂岩である。敲石類の中で磨石としたものが1点あり、これについては花崗岩製である。

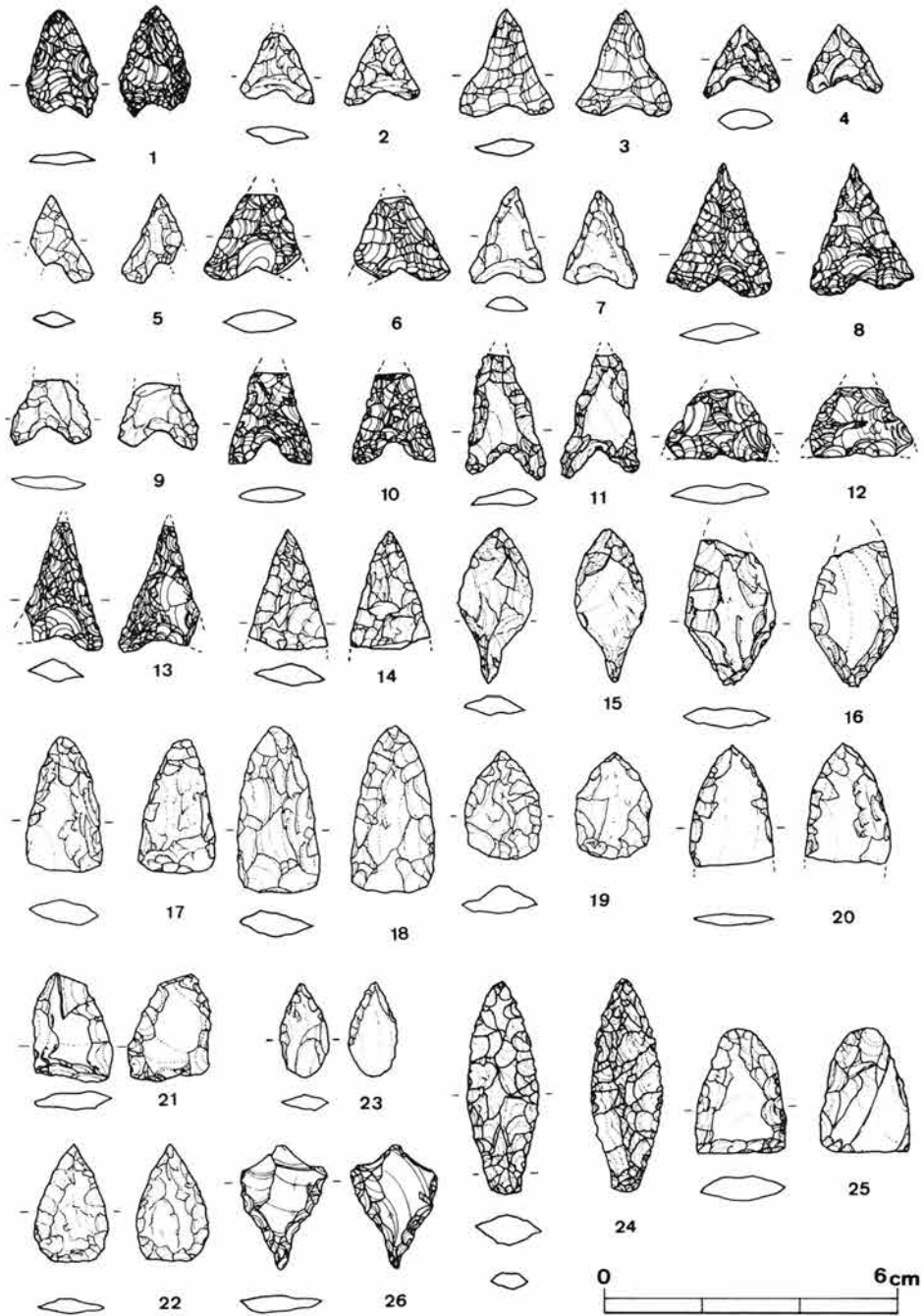
石器の所属時期について考えると、全体に包含層中のものが多くを占めるため、すべてのものについて明確な時期は決められない。弥生時代中期後半(Ⅳ様式段階)の遺構である竪穴式住居跡(SH72・SH135・SH136)や溝(SD74)から出土しているものが比較的まとまっている。したがって本時期を中心とする資料群と考えておきたい。

今回、定形石器はすべて図化した。各石器のデータは、以上の表に記したとおりである。

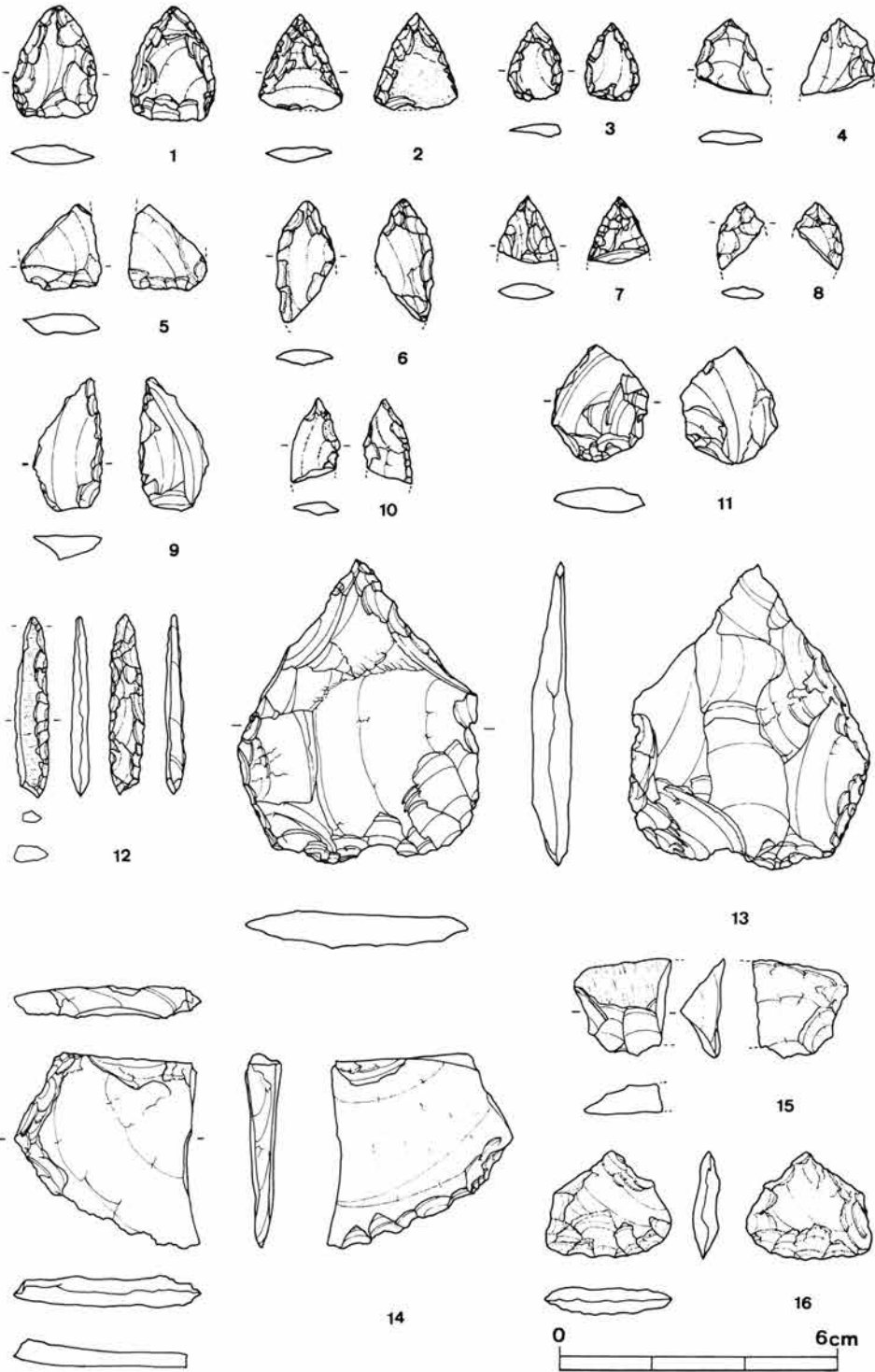
**a. 石鏃・尖頭器** 石鏃を形態別の点数と占有率で示すと、凹基式鏃13点(50%)・平基式鏃7点(27%)・尖基式鏃1点(3.8%)・円基式鏃1点(3.8%)・不明4点(15.4%)の内訳である。凹基式が最も多く、半数以上を占める。抉りの深さの程度は様々である。なお、チャート石材は、凹基式鏃にのみ用いられ、他の形態のものにはみられない。

尖頭器は、1点のみである。戦闘用とするならば、そういった行為が少なくともこの遺

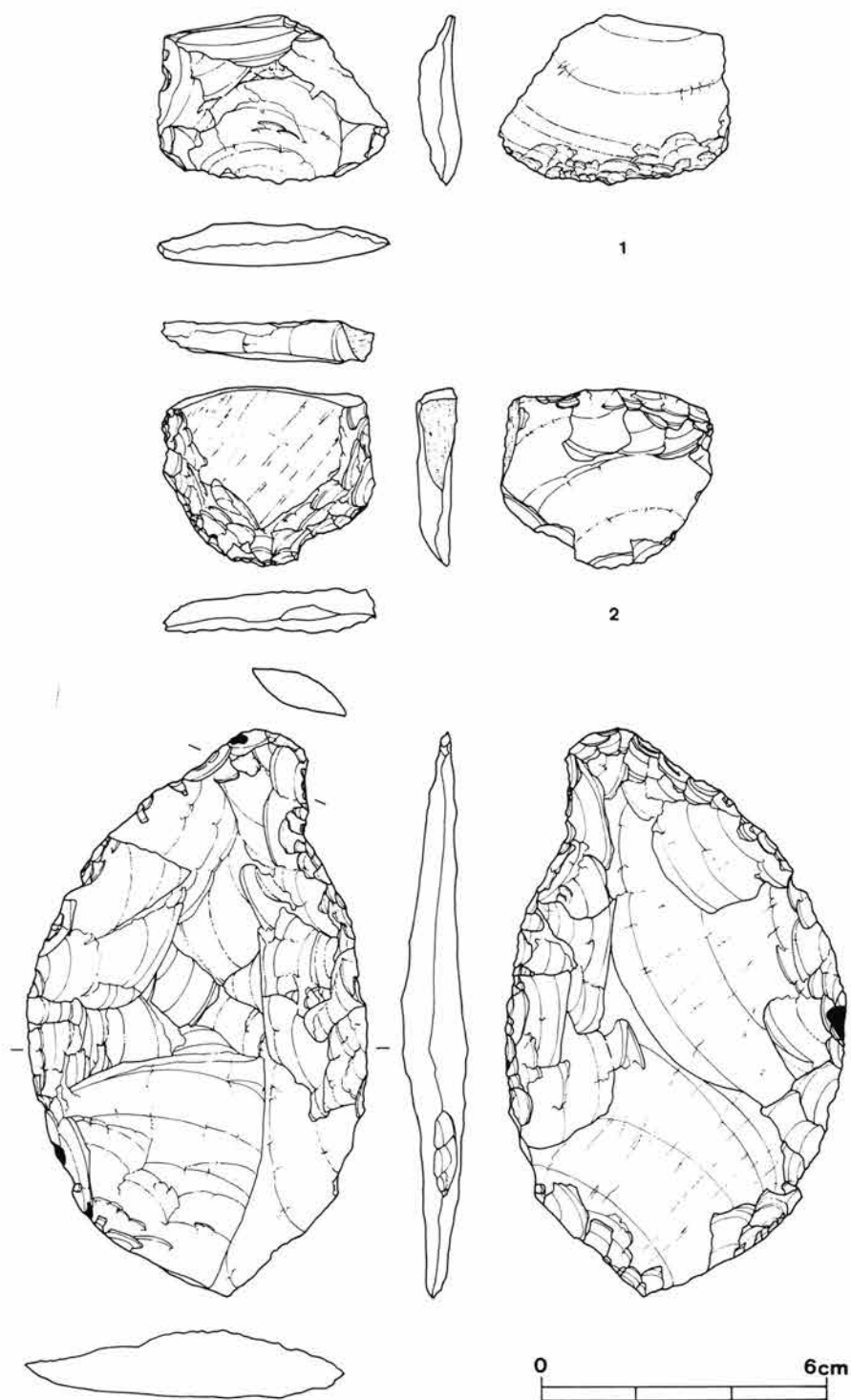




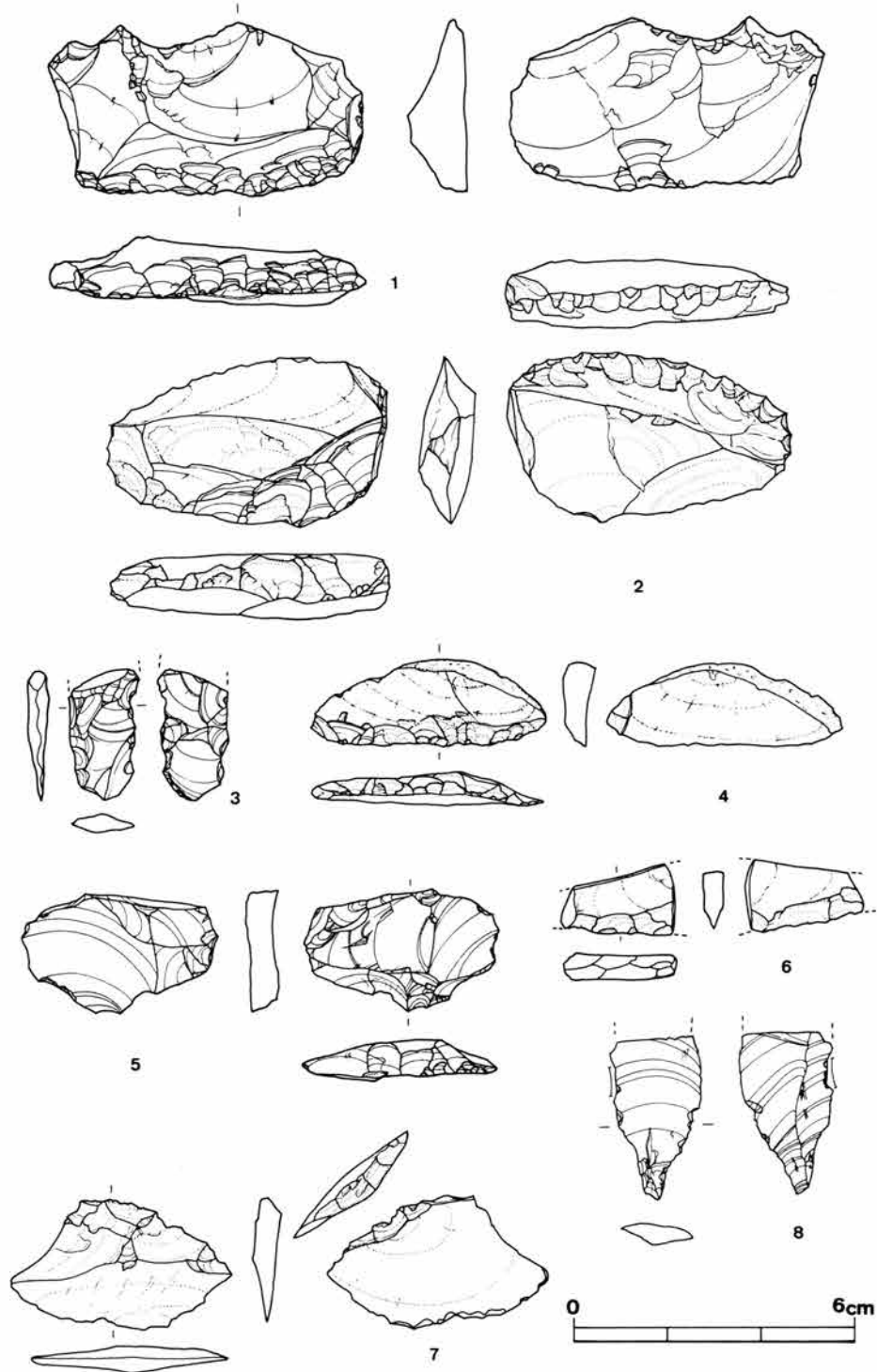
第53図 石器実測図 (1)



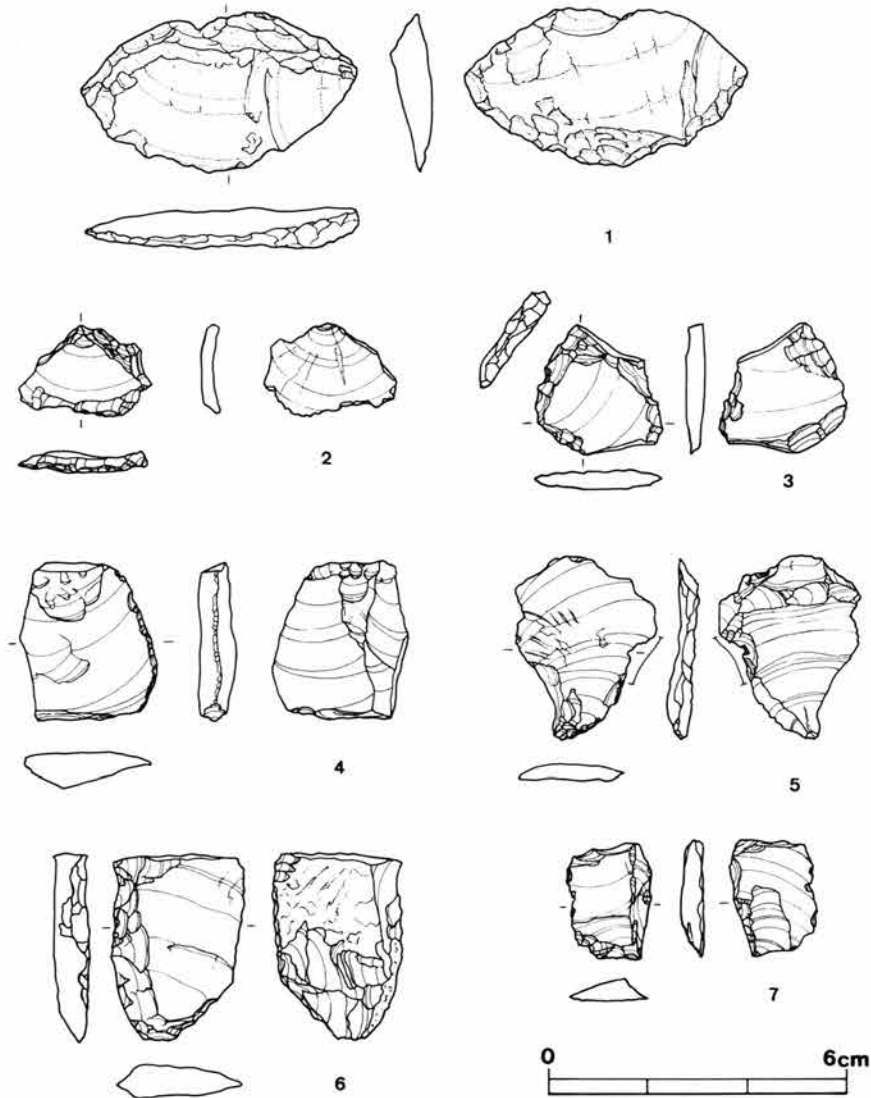
第54図 石器実測図 (2)



第55図 石器実測図(3)



第56図 石器実測図 (4)

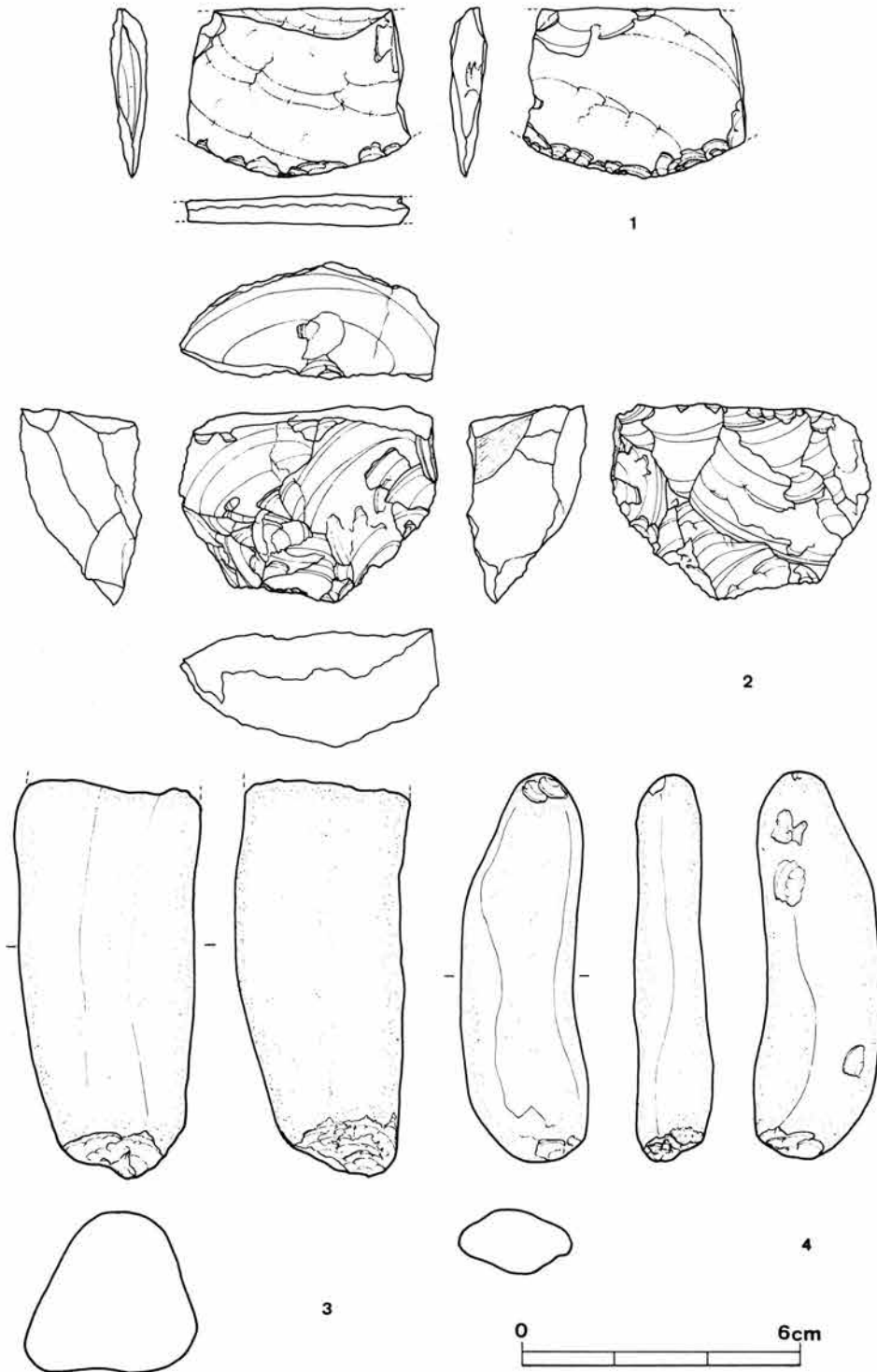


第57図 石器実測図(5)

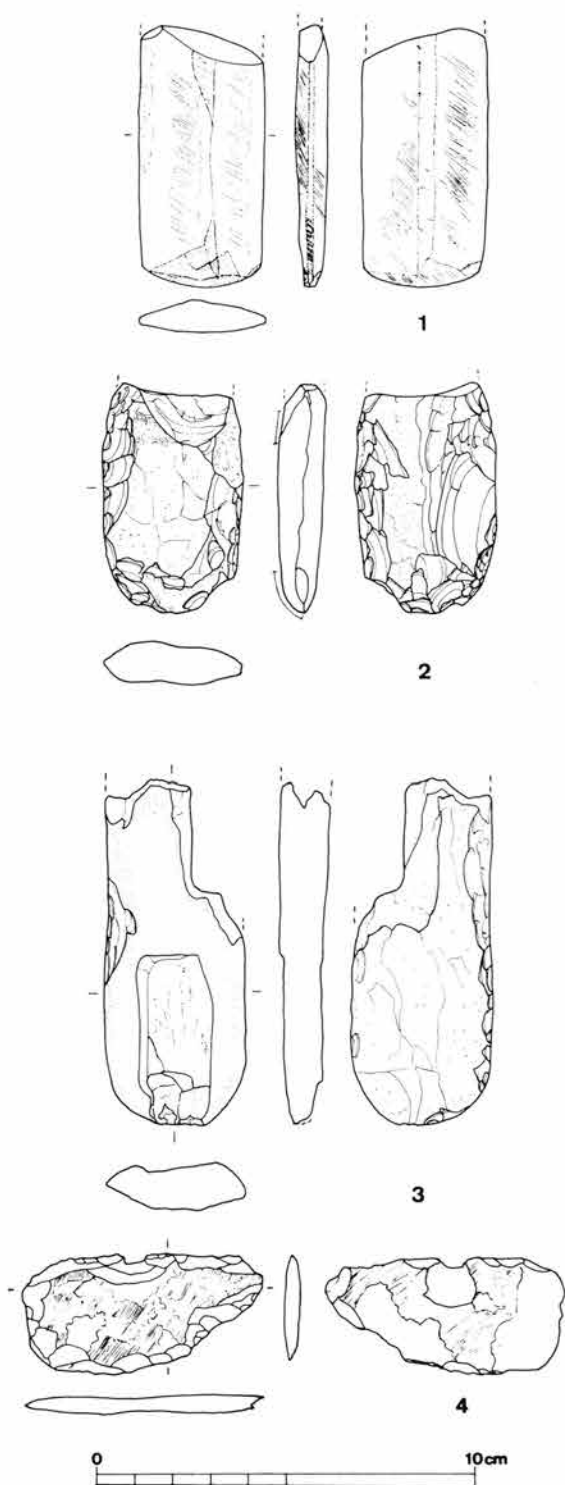
跡では非日常的なものであったことが窺える。両面加工でいいねいに仕上げられている。石材は、安山岩である。

なお、石鏃を完形品・破損品・未製品に区分して、点数と比率をみておきたい。完形品13点(38.2%)・破損品13点(38.2%)・未製品8点(23.6%)で、完形品と破損品が半々の割合となっている。集落外で使用されることの多い遺物であるとともに、製作途上にて集落内で破損する率も高いことを示している。

**b. 石錐** 合計4点の出土である。4点とも形態はまったく異なり、バラエティーに富



第58図 石器実測図(6)



第59図 石器実測図 (7)

む。特に、第54図13は、扁平な両面加工で、先端は、両側からの剥離面によって刃部状となる。これが錐としての刺突効果をさらに高めているといえる。また、基部の中間には挟りが入る。

石庖丁との点数比が問題にされるが、ここでは明確な石庖丁は出土せず、この点は不明である。

**C. 削器類** 削器類の中には削器・石匙・使用及び加工痕のある剥片が含まれる。削器は、素材の長辺縁辺部に鋭利なスクレーピングエッジを有するものである。第55図、第56図1・2・4・7、第57図1・2、第58図1などは完形品及びそれに近いものである。全体的に、刃部の調整加工は、背面にのみ留める例が多いが、第54図16や第56図2などのように、表裏面に調整加工がまわる例もある。石匙は、縄文時代早期を初現として、弥生時代にもわずかに残存する遺物である。本例は安山岩を素材にし、幅広い木葉形を呈する。一端のつまみは、片側にややくびれて作り出されている。調整加工は全体的に粗いが、つまみ部と周縁部は、比較的入念に施されている。使用及び加工痕ある剥片は、大部分がチャート製で、長軸に沿う縁辺部にスクレーパー状の剥離痕や

刃こぼれの痕跡などが観察される。

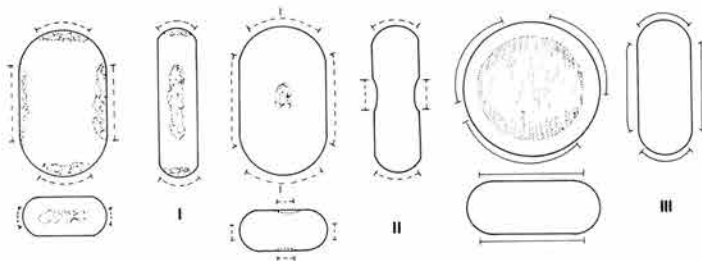
**d. 楔形石器** 1点のみである。長辺の両極から調整加工痕が入り、下端部はやや鋭い角度がつけられている。チャートを石材とする。

**e. 槌石** 2点出土している。細長い礫の先端部に強い打撃による階段状剥離をとどめている。敲石のように、コツコツと敲かれたアバタ痕のみで形成された使用部はない。

**f. 石核** 1点のみの出土である。ポジティブバルブを留めた打面を備えているが、打面調整痕はない。また、下端部には表裏面に階段状剥離・ヒンジクラクチャーが生じるまでに不規則に打ち欠かれ、剝片を取る作業を行っている。片側面に自然面を残す。

**g. 石剣類・石庖丁未製品** 石剣類にも完形品はなく、磨製・打製石斧ともに基部の部分である。第59図1は、良質の粘板岩を素材とし、研磨による精緻なつくりである。中央に稜線が残されている。また、側縁部にもわずかながら平滑面を残している。研磨作業による線条痕は走るが、使用痕は基部ということもあって不明瞭である。同図2は、質の悪い粘板岩製である。表裏面に自然面が大きく残るが、周縁部の調整加工は入念に施している。なお、片側表面の一部には滑らかな面が認められる。自然面としての滑らかさなのか、使用あるいは意図的な研磨によるものか現状では判断しかねる。4は、粘板岩の薄片の表裏面が研磨されている。本来、石庖丁であったと考えられる。周辺部に打撃による割れがあり、破損品ともみえる。

**h. 敲石類** 敲石類には敲石と磨石を含める。敲石類を形態別に分類すると、第60図のように3つに区分される。Ⅰ類は、円礫の周囲(側縁部)に敲打痕を有するものである。Ⅱ類は、円礫の周囲のほか、表裏面にも敲打痕を持つものである。Ⅲ類は、円礫の周囲または表裏面に磨面をもつものである。各類形の点数と占有率を記すと、Ⅰ類10点(35.7%)・Ⅱ類17点(60.7%)・Ⅲ類1点(3.6%)となる。Ⅱ類はいわゆる凹み石で、この形のものが7割近くを占める。Ⅲ類は、磨石である。1点のみで表裏面ともに広い磨面をもつ。周囲の側縁部には使用痕はない。本例のみ花崗岩製である。なお、敲石類の大きさの平均値は、長さ9.5cm・幅7.2cm・厚さ4.1cm・重さ384gとなる。磨石の値に近く、片手持ちによる

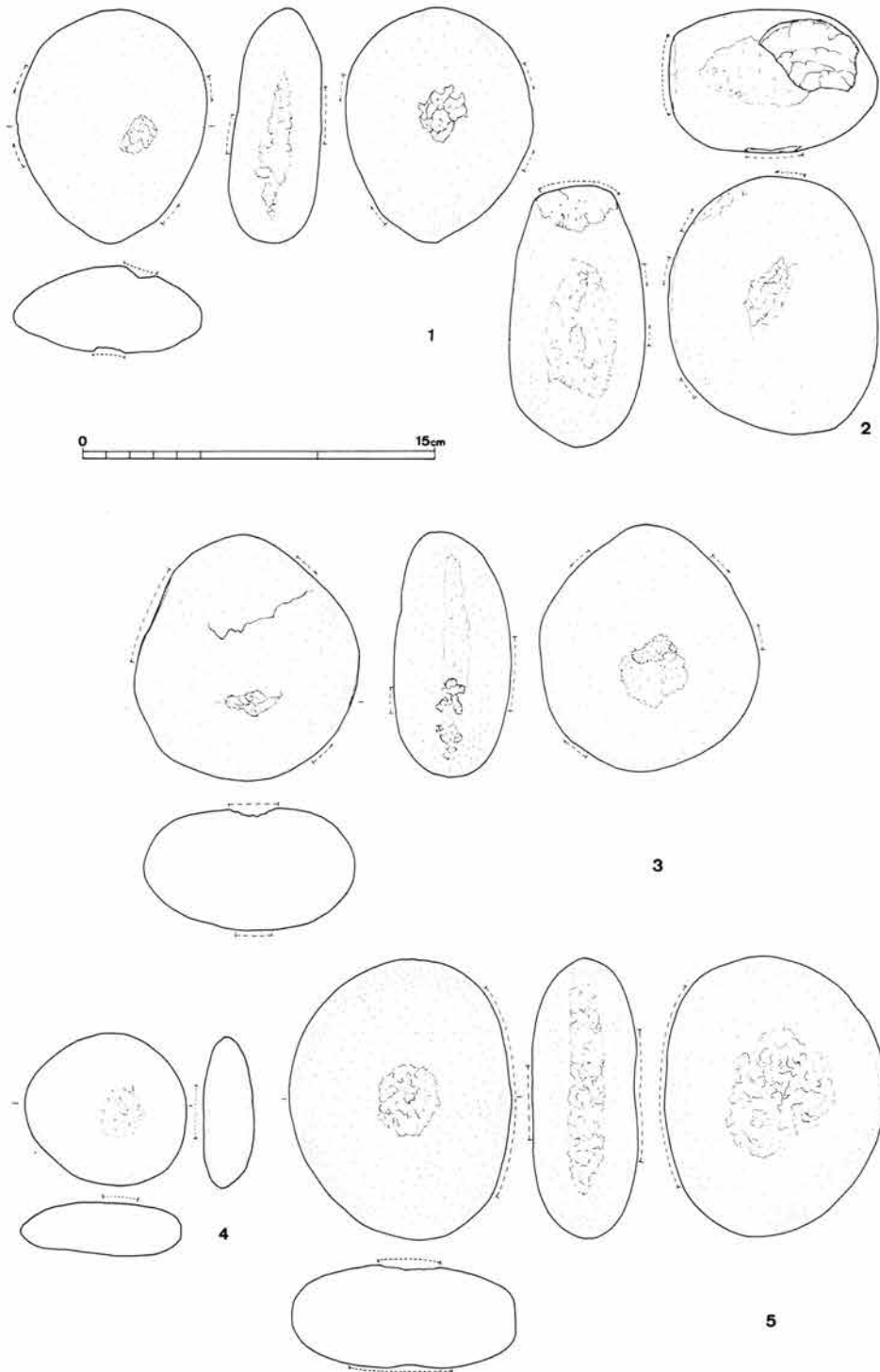


第60図 敲石類形態区分図

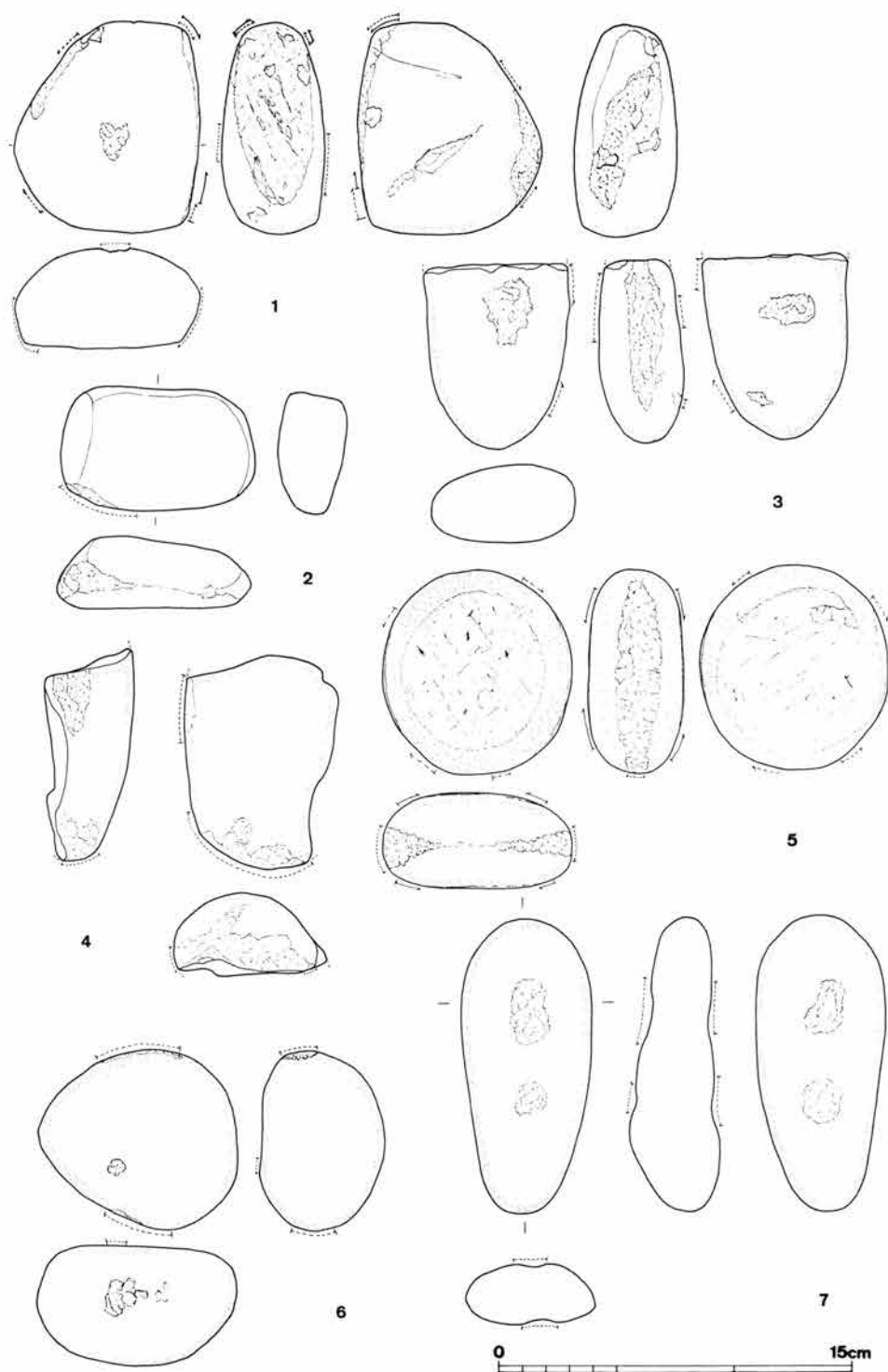
作業にも最適な大きさといえよう。

**i. 石皿** 敲石類とのセットで使われた調理具である。縄文時代では堅果類の粉食利用

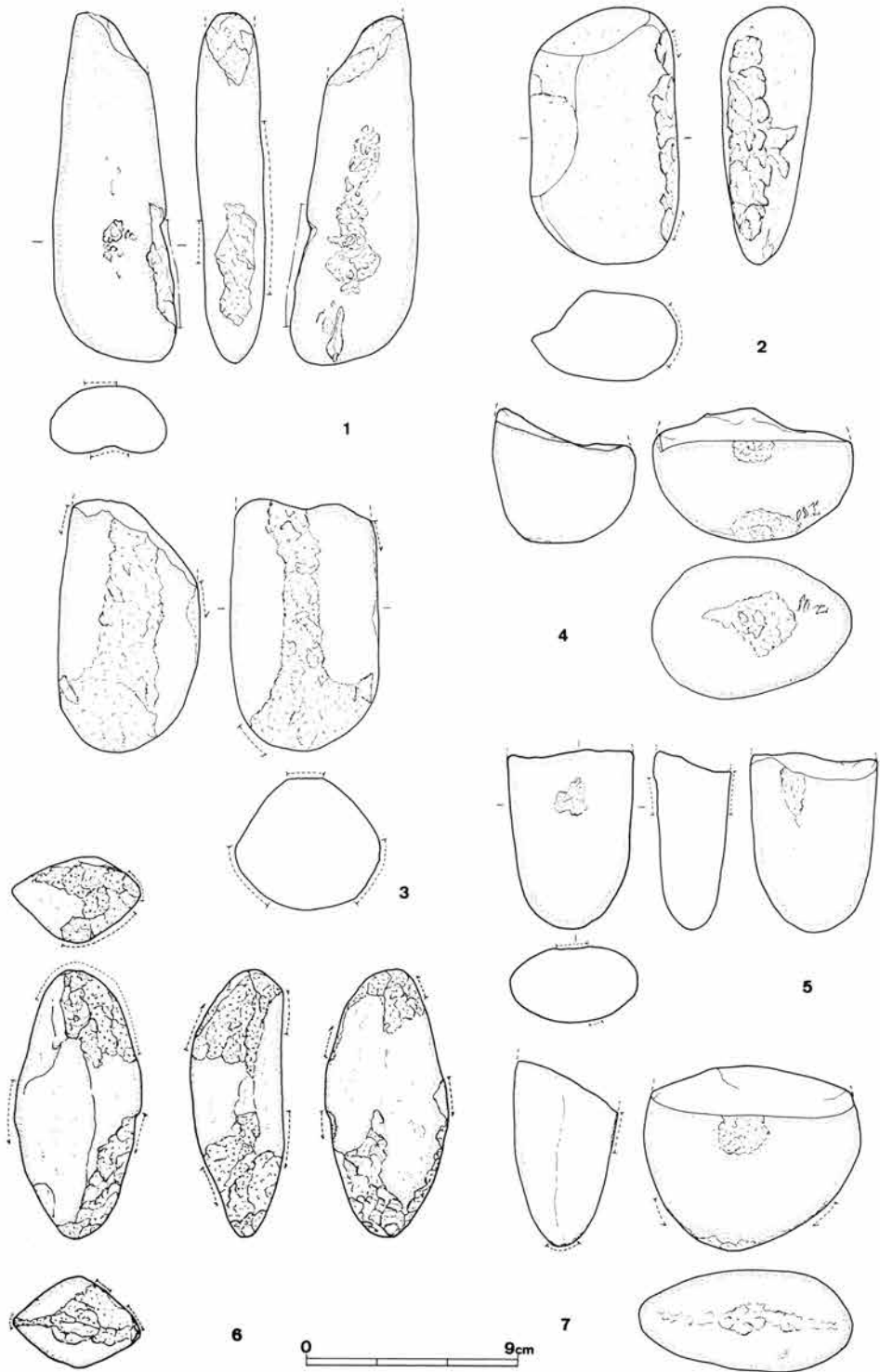




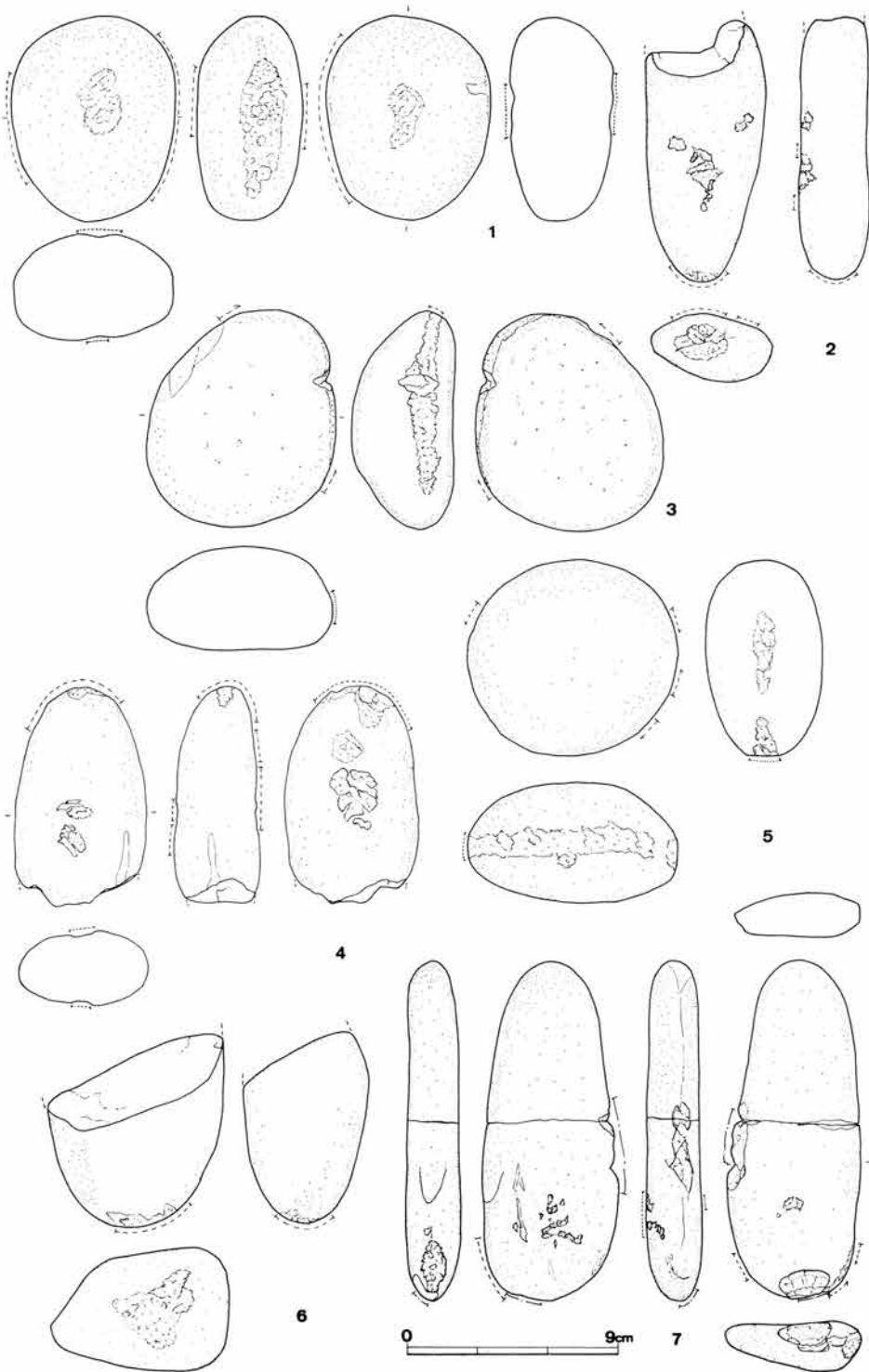
第61図 石器実測図(8)  
破線はタタキ、実線はスレ、一点破線はワレを示す。



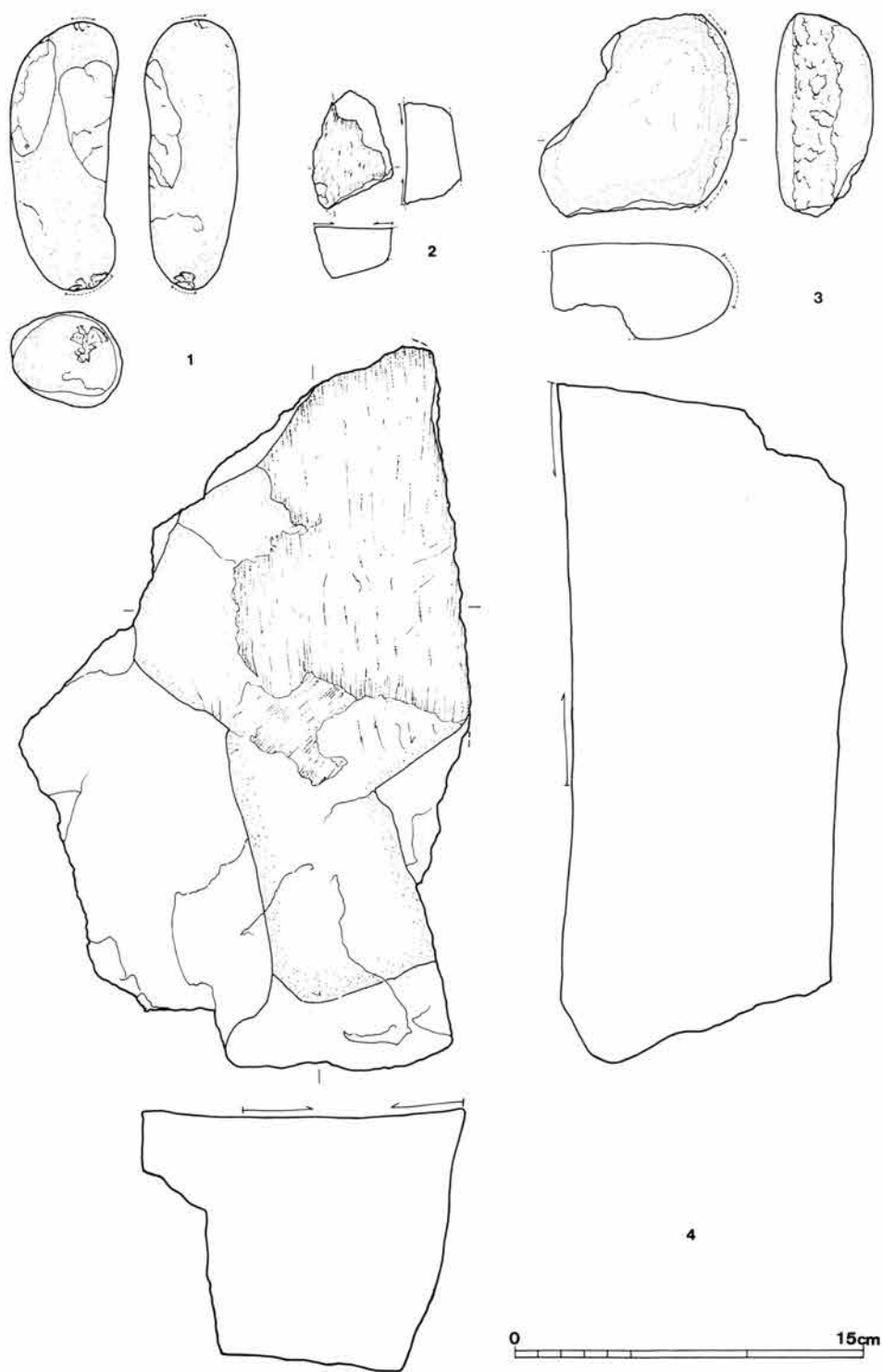
第62図 石器実測図 (9)



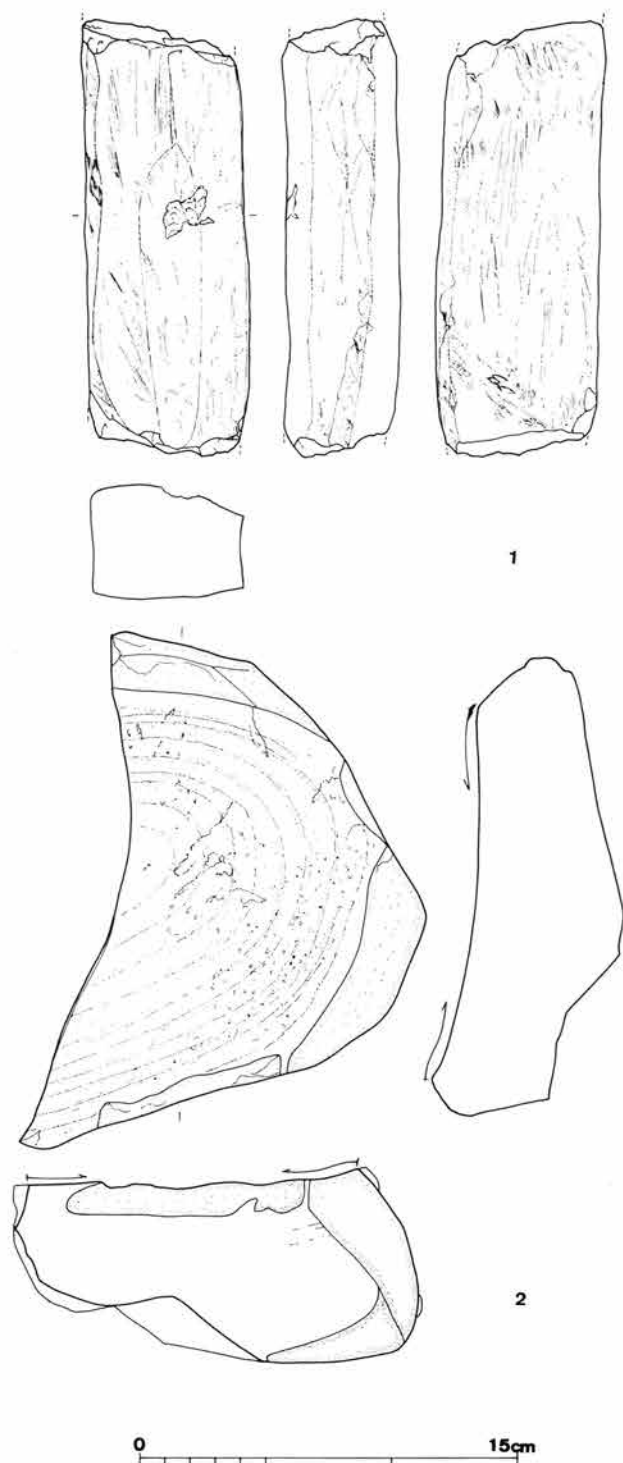
第63図 石器実測図 (10)



第64図 石器実測図 (1)



第65図 石器実測図 (12)



第66図 石器実測図 (3)

と考えられているが、それ以外の作業にも使われたようである。破損して出土する例が多い遺物で、3点とも大きく破損する。表面全体が使用され、滑らかなラインを描いて凹んでいるもの(第65図2, 第66図2)と、凹みはないが滑らかな磨面をもつもの(第65図4)がある。

**j. 大型柱状砥石** 折損した上下端以外は、全面に研磨された滑らかな面で構成される。ほとんど縦方向に面取りによる稜線が走り、使用による線条痕も主に縦方向である。断面形は台形を呈する。砂岩製である。

**k. 大型蛤刃石斧** 合計3点の出土である。第67図1は、刃部を大きく欠損している。全体が研磨されているようで、基部に細かな調整痕がある。同図2・3は、砂岩である。2も刃部を欠損する。側縁部に平坦な磨面が带状に形成されている。基部には整形のための敲打痕がある。なお、表面部の敲打痕は、石斧から敲石への転用を示す。3は、基部を欠損する。側縁部に面はもたない。刃部は比較的鋭く

作り出されている。表面に磨面と敲打痕をとどめているが整形のためのものである。断面形は、1が楕円形、2は隅丸方形、3は楕円形を呈する。

l. 扁平片刃磨製石斧 全体は滑らかに研磨され、先端の刃部は、およそ45°の角度をつけて形成されている。刃部を砥ぎ出した際の加工(擦)痕が、刃部ラインに平行に走っているのが観察される。石材はこの種によく用いられるシルト質頁岩である。

m. 小型磨製石斧 きめの細かな良質のシルト質頁岩を用いている。両刃で艶やかなまでによく研磨されている。刃部の他、表裏面・側縁部にも明確な稜線が形成される。

n. 環状石斧 完成品と未製品が1点ずつ出土している。第67図7は、扁平な正円に近い自然礫の全周に、両側から斜めに研ぎ出された刃部がまわる。表裏面から穿孔作業をすすめ、ちょうど中央部に孔をあけている。同図8は、表裏面に貫通はしていないが、明らかにそれを意図したと思われる凹み痕がある。側縁部の激しい打撃痕の状態から、製作途中で放棄したものであろう。

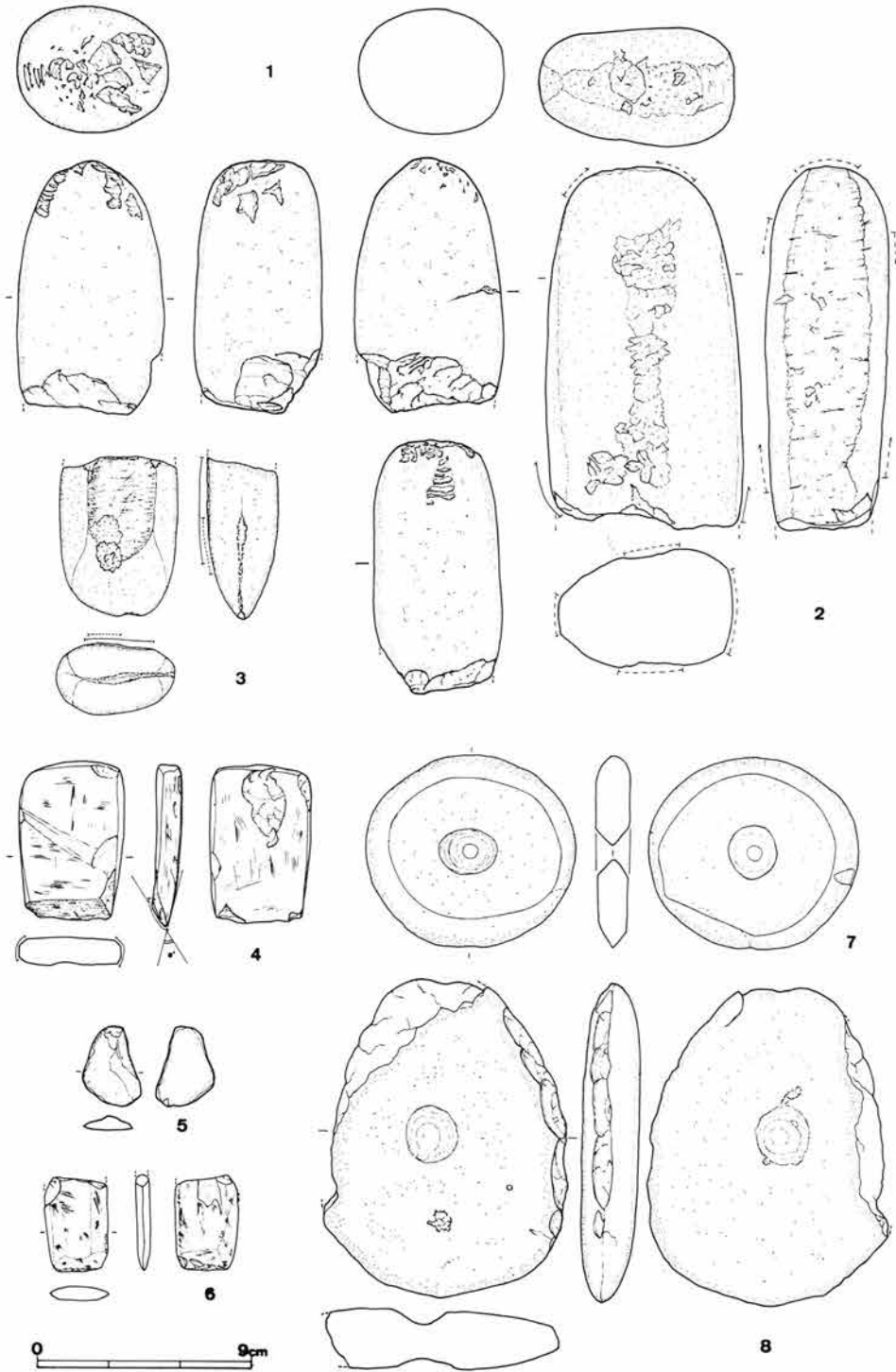
o. 球形礫 3点出土した。加工および使用痕はない。この種の遺物は、出土状況に応じて投弾とか調理具として報告されるが、用途については不明である。第68図2のみは、全体に赤く焼けている。

## ②各石器の分布状況

今回報告した石器類についての分布状況を観察したので、この結果を以下に記して小結にかえたい。また、分布状況から考えられる当集落内の場についても少し触れてみたい。

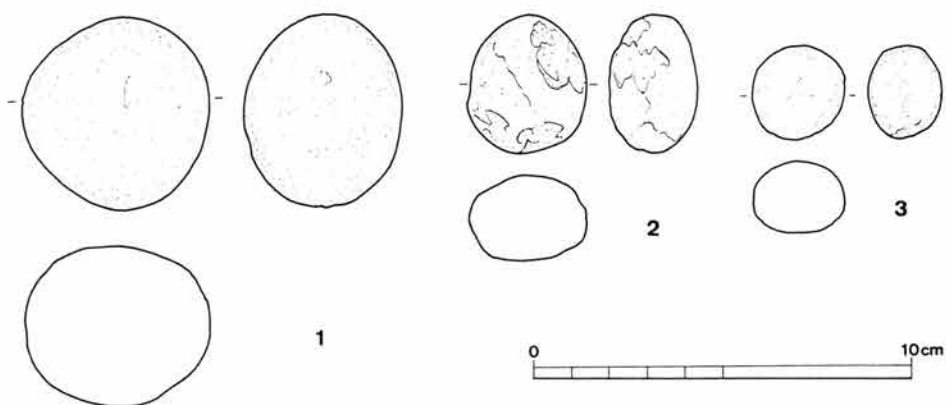
石器類総数は、前述のとおり366点を数える。これらの大部分は包含層中から出土した資料である。時期(弥生時代中期後半)の明確な住居跡・土壇・溝などから取り上げたものは、全体のおよそ4割にも満たない。また、各石器の出土位置は、遺構中のものを除きすべてグリッド(4m四方)単位でおさえられている。1点ごとの正確な出土位置を出すのは望めない状況にある。以上のような問題点はあるものの、本遺跡の立地が沖積地とかではなく、小高い台地上であることから、包含層中の資料群といえども包含層の堆積は比較的薄く、遺構検出面にごく近いレベルで取り上げられているものと考えた。第69図に示した各遺物のドットは、原位置としての定まった点を示すものではなく、当該出土グリッド範囲中から出土したことを示す。敲石についてのみ、ドットではなく、縦縞のスクリーントーンで出土グリッド全体を覆っている。

さて、分布状況について見ていきたい(第69図)。一目で諒解される点は、剥片・碎片類の出土状況が、SH72・SH118・SH135の3住居内に集中してみられることである。3住居からの出土点数は169点で、全体(255点)の7割近くを占める。3住居内出土の剥片・碎片数を全体の剥片・碎片数から差し引いた点数を、出土グリッド数で割ると、1グリッド



第67図 石器実測図 (14)





第68図 石器実測図 (a)

出土点数は2.7点となり、グリッド総数92で割るとわずか0.9点とさらに少なくなる。

このことから、3住居跡内で、石器の製作・使用・破棄がなされた可能性もあるが、野外で作業を行った後、この3つの住居跡内に破片がまとめて片付けられたものとも思える。

また、SH118では、剥片石器の完形品は1点も出土しておらず、SH72およびSH135と比較した場合に際立った性格の差が窺えよう。剥片数と完形品(剥片石器)との比率は、SH72が5.8:1、SH135が8.3:1、SH118が36:0という状況である。住居の建て替えや不慮の事故による、SH118からSH72への移動を示唆するものかもしれない。

石鏃の分布状況は、当然のことながら剥片・破片の多く散らばるSH72・SH135に多い。また、住居跡内のみならず、SH118以北の遺構外にも点々と分布している。集落外で消費されることの多い遺物ながら、集落内への回収率も高かった遺物なのであろう。

削器類の分布は、剥片・破片の密集域に多いが、石鏃と同様、SH118以北の地区に点々と広く分布している。剥片・破片類の出土がほとんどない北西部にも、分布域を広げていることがわかる。

敲石類・石皿・石斧類・砥石などはどうであろうか。まず敲石類は、明らかに石器剥片・破片の分布域とはことごとくその域を異にしている。このことは、剥片・破片の出土点数があわせて7割近くを占める3つの住居跡中に、1点の出土もみられないことで如実に示されている。ごく一般的には、各住居跡内に1~2点の敲石類を保有している状況を考慮したいのだが、敲石を有する住居はSH136・SH138の2基しかない。植物質食糧の調理具とする敲石類が、なぜ屋内炉をもつこれらの住居内から出土しないのか。現状では断言できないが、SH72・118・135をとりまく周囲の空間には敲石類の出土がみられる。1つの考え方として、こうした空間に集落共同の炊事場や火処があり、ここにおいて野外で使用されたと言うこともできる。そうした場合、SH72・118・135の住居は、食糧調理以外の作業、



第69図 石器類分布範囲図

たとえば石器の成形および研磨、木・皮革の加工などの作業に使われた住居跡という意味合いが強くなる。立派な炉をもつことから、作業場兼居住空間であったと言える。

敲石類とセットで使用されたと考える石皿も、すべて住居跡外に分布する。ここで敲石類と近接して出土しているものは、SH72の東側(16L区)の1点(第66図2)のみである。

状況証拠ながら、ともに使用された可能性はあろう。

石剣・石斧類の分布状況は、SH72から出土している砥石との関係で述べる。磨製石剣・磨製石斧の製作上の研磨作業には、砥石の使用を抜きにしては考えられない。この点からすれば、SH72の北半部において、砥石(第66図1)と磨製石剣(第59図1)・小型磨製石斧(第67図)が伴出することは説明しやすい。磨製石器の中でも特に良質の石材が吟味され、加工に相当の手間をかけたと思える両資料である。SH72内においてこの大型柱状砥石(第66図1)によって丹念に仕上げられたものと言えよう。

最後に、石器群の分布密度が極めて稀薄な地区については、さまざまな解釈が考えられるが、剥片・碎片の散らばりがほとんどみられないことから、石器の製作・加工空間ではまずあり得ない。第69図ではほぼOライン以西および18ライン以北の空間を丸く破線で区切ったが、ここには住居跡はなく、出土石器でみると、石鏃3点・削器7点・敲石7点・石皿1点が分布する。その他の特徴的な遺物として、24P区から出土した分銅形土製品(第44図)がある。内実は不明であるが何らかの儀式・祭りに使われたと考えられる分銅形土製品の出土や、中央部を取り囲むように植物質食糧の調理具が存在していることから、集落全体の集会場のような役割をもつ空間ではなかろうか。トレンチ全体を南北に細長くみるならば、この集会場に隣接して東西に倉庫棟が建ち、少し帯状に空間をあけて、南側に居住空間が広がるといった構造をもつ。帯状の空間の機能としては、ここに火熱を受けた土壇が複数存在するのを考慮したい。敲石のところで述べた屋外調理空間の1つかもされない。

単なる状況証拠とも言える石器類の分布から、集落内における場の機能について述べたが、あくまでも可能性の問題としてあげたにとどまる。1つ1つの検証のため、石器間の接合作業・周辺遺跡との組成比較など、取り組むべき課題は多い。(黒坪 一樹)

#### 4. 小 結

当遺跡では、弥生時代中期・古墳時代後期の集落跡を検出した。近舞線及びその周辺の古墳時代後期の集落・古墳については洞楽寺遺跡の項でまとめた。ここでは、弥生時代に限ってまとめを行っておきたい。

当遺跡で検出した遺構・遺物のうち、SH72は棚付きの竪穴式住居跡であるが、このような例としては、兵庫県三田市奈カリ与遺跡<sup>(注4)</sup>・大阪府の東山遺跡<sup>(注5)</sup>で検出例がある。また、分銅型土製品は京都府北部では、熊野郡久美浜町橋爪遺跡<sup>(注6)</sup>の出土例があるのみである。瀬戸内周辺に分布する分銅型土製品が当遺跡で出土したことは、出土土器が播磨地方の影響を受けていることに加えて、その地域との強い結びつきを示す資料として注目される。

また、調査地の東部に限って竪穴式住居跡が分布しており、掘立柱建物跡は遺跡中央の北部と西南部にあり、弥生時代には遺跡の東北部は「住居」の空白地帯をなしている。現地形で最も平坦な位置は調査地東北部であるにもかかわらず、この位置には古墳時代の住居跡を検出したただけである。24P地区において分銅形土製品が出土しているの、いわゆる「祭祀」の広場として利用されていたものと判断される。このことは、3出土遺物(2)石器の項で、石器の分布からも窺えることである。また、生活廃棄物の捨て場としては、25R区周辺の北側の谷部を利用したものと思われる。

当遺跡では弥生時代中期の竪穴式住居跡を7か所で検出したが、これらの住居跡から出土する土器はすべて畿内第Ⅳ様式で、出土遺物からはその先後関係・共存関係は判別しがたい。しかし、SH118とSH138が切り合い関係を有することから、同時に7基の竪穴式住居が建っていたとはいえない。おそらくは、同時には2～3棟の住居があったものと推定される。周辺では、宮遺跡・奥谷西遺跡・大内城下層遺跡で弥生時代中期後半の集落を検出している。その各々の集落は、ケシケ谷遺跡と同じく、同時には2～3棟で一集落を構成していたものと想定される。これらの集落は、その規模・位置関係からそれぞれが独立したものではなく、相互に協力・協業関係を有していたと推測される。

最後に、近舞線関係遺跡のうち弥生土器を検出した遺跡——奥谷西遺跡・宮遺跡・大内城下層遺跡・城ノ尾城館跡下層遺跡・後青寺遺跡・多保市城館跡下層遺跡の弥生集落の消長を付表3にまとめておく。  
(岩松 保)

付表3 近舞線関係遺跡弥生時代遺跡消長表

遺 跡 名 称	I	II	III		IV	V			庄内	概 要
			前	後		前	中	後		
大内城下層遺跡					—					
奥谷西遺跡					—	—	—			
ケシケ谷遺跡					—					
宮遺跡					—					
城ノ尾城館跡下層遺跡					—	—	—			
多保市城館跡下層遺跡					—					
後青寺遺跡					—					遺物散布

#### (4) 奥谷西遺跡

##### 1. はじめに

奥谷西遺跡は、福知山市大字大内小字奥谷に所在する。近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の中で、土師川南部の底位丘陵に広がる遺跡群のほぼ中央部に位置するものである。遺跡は、底位丘陵から張り出した小さな台地上に立地しており、その平坦面は東西80m・南北86m、標高は78m前後を測る。調査地平坦部の東西の比高差は約2mを測り、東側がやや高い。南側に穿たれた谷の水田面と台地との比高差は約20mである。

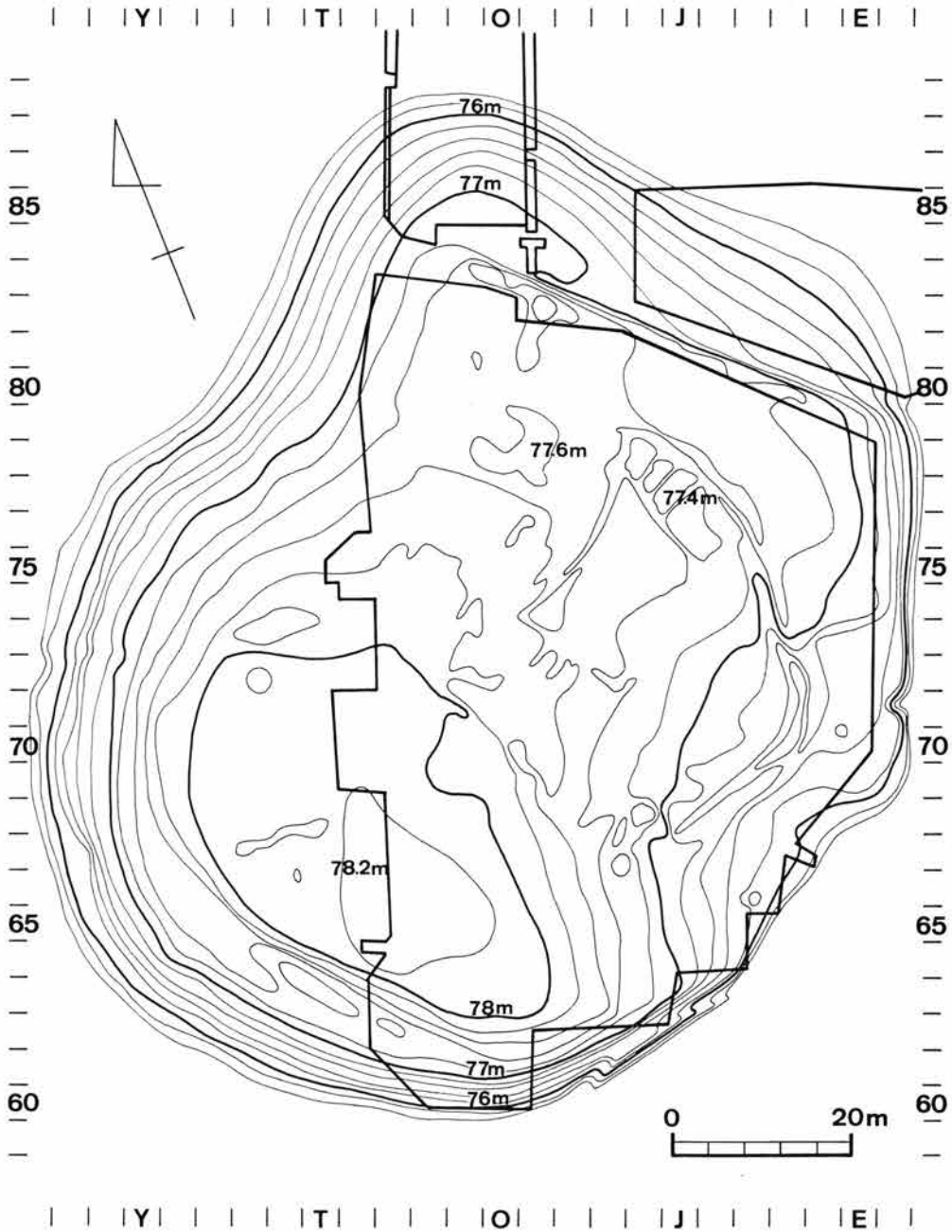
奥谷西遺跡の調査は、昭和58年12月12日～昭和59年3月29日、及び昭和59年5月7日～昭和60年3月15日の2年度にわたり実施した。

調査は、最初に4mごとに地区割りをを行った。この地区割りは、この遺跡が調査前は城館跡という予想もあり、すぐ南側に所在する大内城跡との関連が考えられたので、大内城跡で行った地区割りをそのまま延長して行った。したがって、地区番号が60～80番台という数値になっている。そうして、ここの地形測量を行った。こうした後に、Kライン、73ラインに沿って幅1.5mの試掘坑を設けて、土層の観察、遺構・遺物の確認の作業を行った。

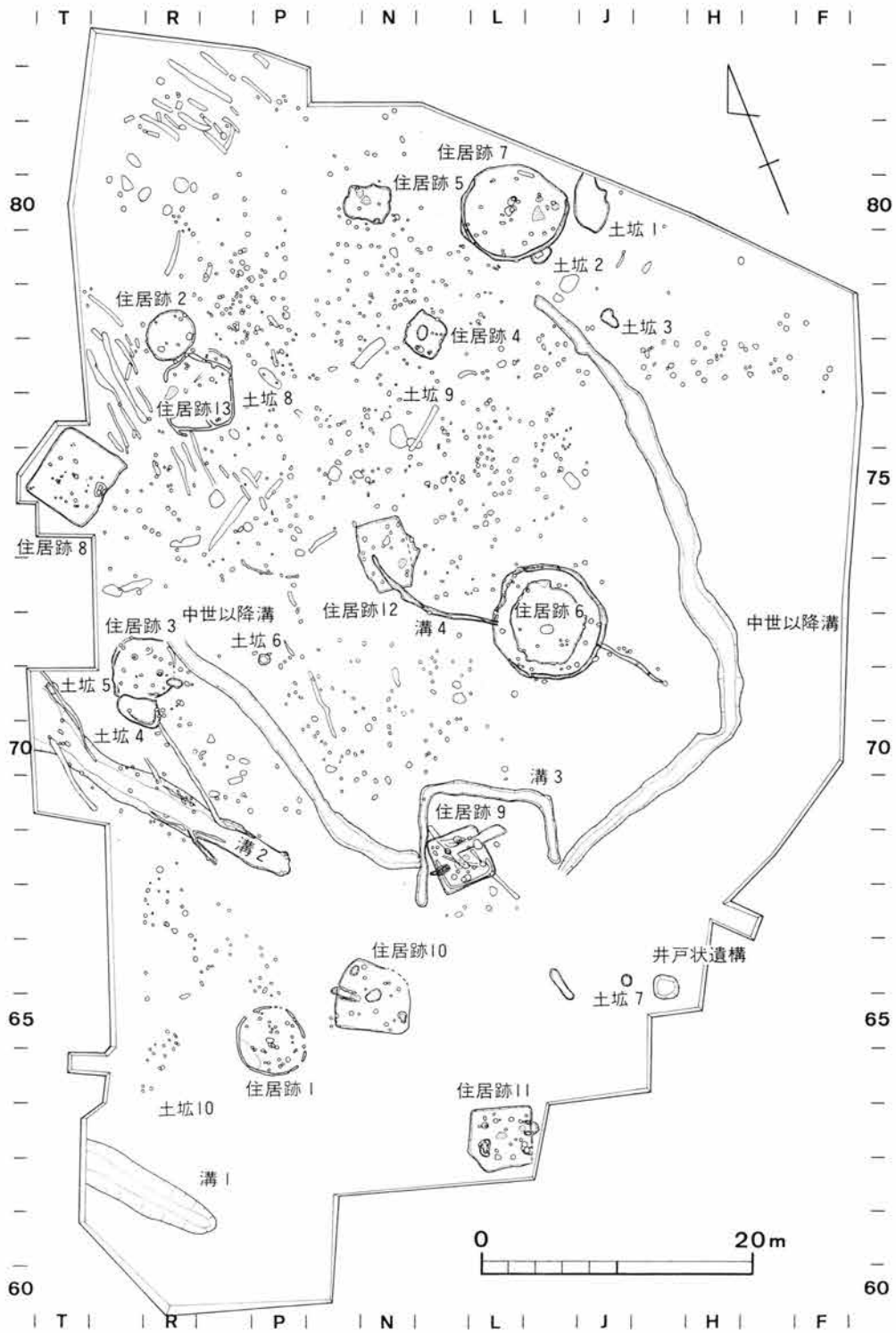
試掘の結果、基本土層は、最上層として表土下5～15cmの厚さで黄褐色土層があり、その下に厚さ10～15cm程度の暗茶褐色土層、続いて厚さ15～20cmの暗黄褐色土層が堆積していた。そして、地山となる黄褐色粘質土及び赤褐色粘質土となる。黄褐色土層は部分的に堆積した土層である。暗茶褐色土層は、弥生時代から中世にかけての遺物を包含していた。暗黄褐色土層内から、弥生土器が出土した。

遺構に関しては、昭和58年度の段階では、最初に設定した試掘坑に加えて同規模な南北方向のものをあと数本設けて遺構の確認をした。その成果によって、弥生時代の溝、弥生時代、古墳時代のそれぞれの堅穴式住居跡などいくつかの遺構が確認できた。この結果を受けて昭和59年度には全面的な発掘調査を実施した。暗茶褐色土層上面においては顕著な遺構の確認はできなかったため機械及び人力で同層の除去を行い、暗黄褐色土層上面において全面的な遺構の検出などの調査に入った。その結果、数多くの遺構・遺物を検出するに至った。弥生時代から古墳時代に属する堅穴式住居跡13基をはじめ、溝、土坑など弥生時代から中世に属する多くの遺構群である。

これらの遺構は、調査地のほぼ中央部及び西側で検出された。東側は、比較的浅い時点で地山が現れる点からみて後世に遺構が削平された可能性もあるが、台地の端にあたる場所なので、やはり大きな遺構は本来存在しなかったと考えられる。



第70图 地形測量图



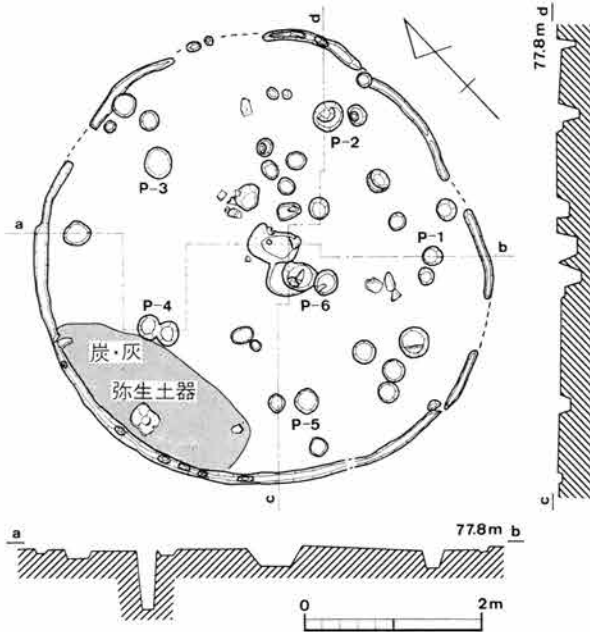
第71図 遺構配置図

## 2. 検出遺構

## (1) 竪穴式住居跡

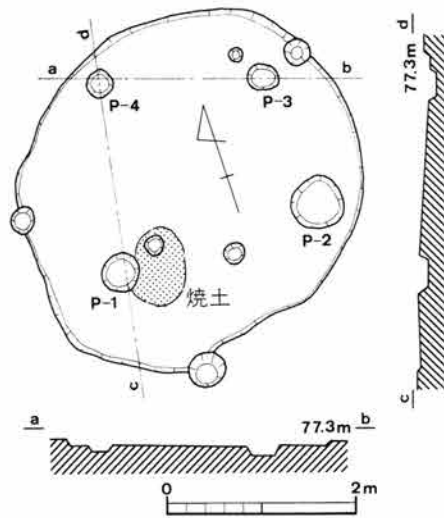
## 竪穴式住居跡 1 &lt;SH393&gt;

調査地の南西部で検出された直径4.8mを測る円形の竪穴式住居跡である。円形とはいうものの東側はやや直線的になっている。この住居跡は、幅15cm前後・深さ約6cmの周溝と柱穴を検出したもので、壁の立ち上がりは残っておらず不明である。周溝の中には直径10cm前後のピットがいくつか点々と穿たれているが、これは杭状のものが打ち込まれていたとも考えられ



第72図 竪穴式住居跡1 実測図

る。支柱穴はP1～5の5つであり、その直径は30cm前後である。この支柱間距離はほぼ2mと等間隔である。住居跡中央部にも柱穴状のピットが2個ある。出入口については不明な点が多いが、東側の周溝が直線的になっており、ここが第一候補であろうと想像される。住居跡内には焼土は検出されなかったものの、炭・灰が混じる黒色土が住居跡西側に大きく広がっていた。しかし、この土は中央のピットの埋土の上にも乗っていたもので、少なくともこの黒色土は中央のピットが埋まった後に生じたものである。床面から出土した



第73図 竪穴式住居跡2 実測図

遺物は、土器類では弥生土器の壺底部以外は細片で形のわかるものはない。その他の遺物としては、チャートの剥片や有孔円板などが出土した。

## 竪穴式住居跡 2 &lt;SH402&gt;

調査地の北西部で検出された円形の竪穴式住居跡である。直径は長軸で3.6m・短軸で3.2

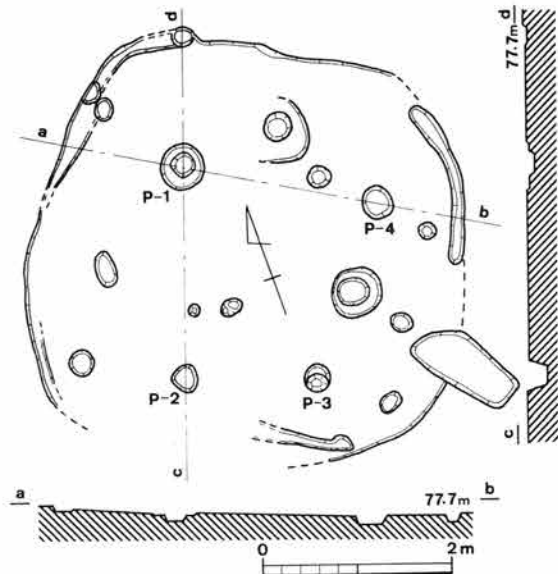


mを測り、正円とはいえない。周溝は検出されなかった。主柱穴はいびつな配置ではあるが、P1～4の4つと考えられる。柱間距離はP1～2が2.2m、P2～3が1.4m、P3～4が1.8m、P4～1が2mを測る。壁の立ち上がりは3cmと遺存状況は不良である。柱穴P1の東側には、長径42cm・短径25cmを測る焼土が広がっており、炉跡と考えられる。出土遺物としては、P2内から弥生土器の底部がある。

竪穴式住居跡 3 <SH409>

調査地中央西側で検出された東西4.4mを測る竪穴式住居跡である。形状は円形というよりも隅丸方形といえる形を呈する。

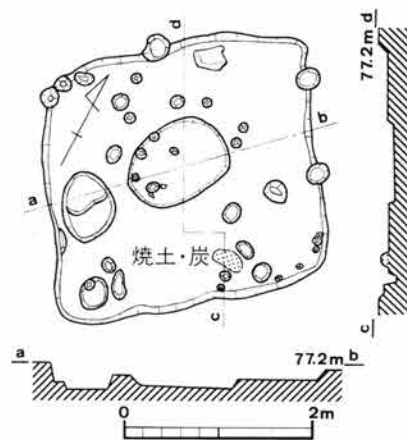
この住居跡は周溝と柱穴を検出したもので壁の立ち上がりは残っておらず非常に遺存状況の悪いものである。周溝の幅は広い部分で20cm程度、深さは5cm前後であり、柱穴の直径は20～30cmである。主柱穴は不等辺四角形状の配置になるがP1～4の4つと考えられる。主柱間距離は、P1～2が2.2m、P2～3が1.4m、P3～4が2m、P4～1が2.1mを測る。出入口については不明である。焼土は検出されなかった。この住居跡内からの出土遺物は、まったくなかった。



第74図 竪穴式住居跡 3 実測図

竪穴式住居跡 4 <SH230>

調査地北側中央部で検出された一辺2.8mの方形を呈する竪穴式住居跡である。周溝は検出されず、主柱穴にあたりと考えられるピットも検出されなかった。壁の立ち上がりは10cmと遺存状態はよいほうである。出入口については不明である。床面には、焼土・炭の広がりが長径30cm・短径15cmの範囲で確認され、中央部には長径105cm・短径80cm・深さ約10cmを測る楕円形をした土坑が検出された。

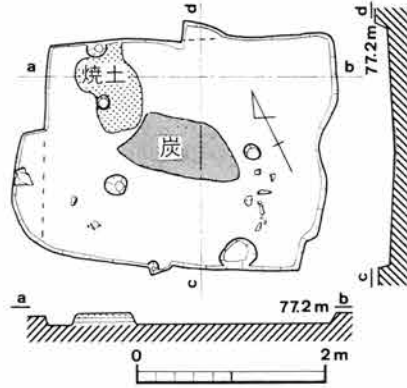


第75図 竪穴式住居跡 4 実測図

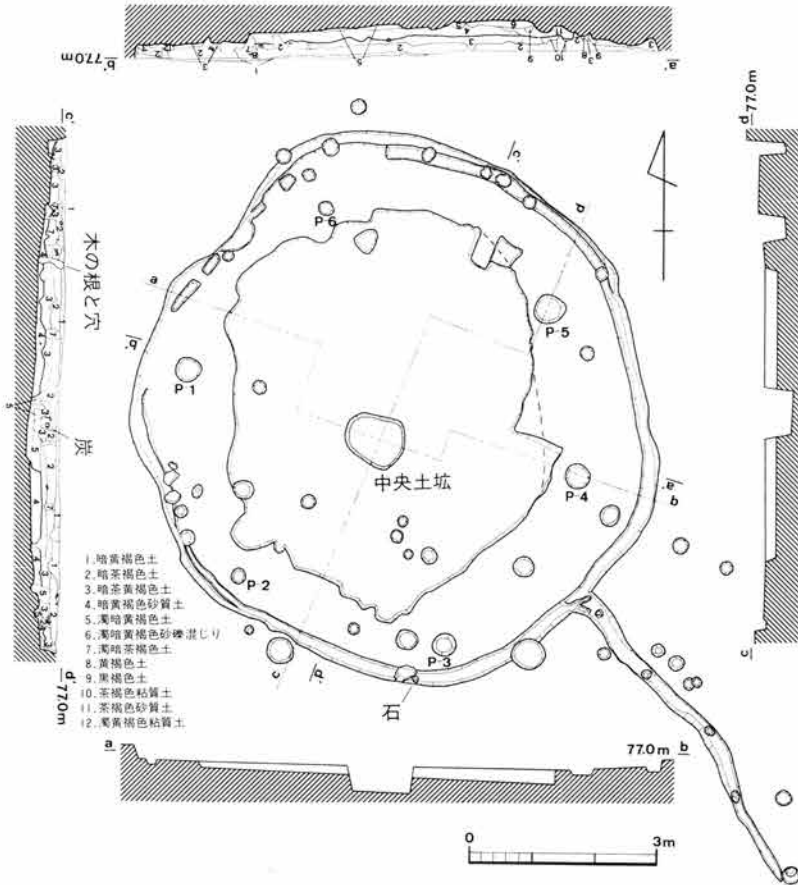
### 竪穴式住居跡 5 <SH231>

調査地北端中央部で検出された、長辺3m・短辺2.4mを測る長方形を呈する竪穴式住居跡である。壁の立ち上がりは10cm程度で遺存状態はよい。周溝や支柱穴にあたると思われるピットは検出されなかった。出入口については不明である。床面中央部には長径約1m・短径約60cmの炭・灰の混じる土の広がりを確認した。住居跡北東隅でも焼土の広がりも検出したが、これは土層の堆積状況を観察すると床面よりかなり

高いか所で焼土部が終わっており、さらに焼土部下層には別の土が堆積していた。従って、この焼土は少なくとも住居跡が廃絶した後に生じたものと推定され、住居とは直接関係は



第76図 竪穴式住居跡 5 実測図

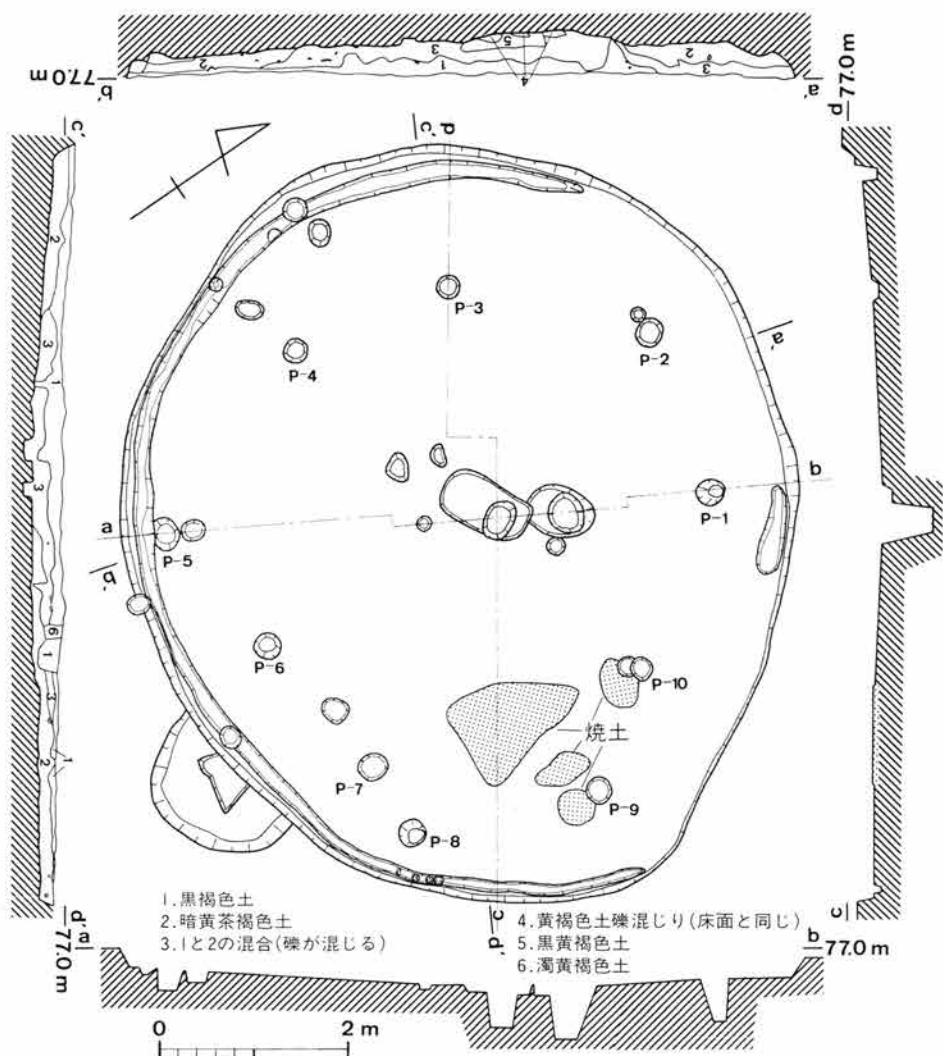


第77図 竪穴式住居跡 6 実測図

ないものと判断される。床面の遺物には、波状文と沈線の巡る弥生土器の破片がある。

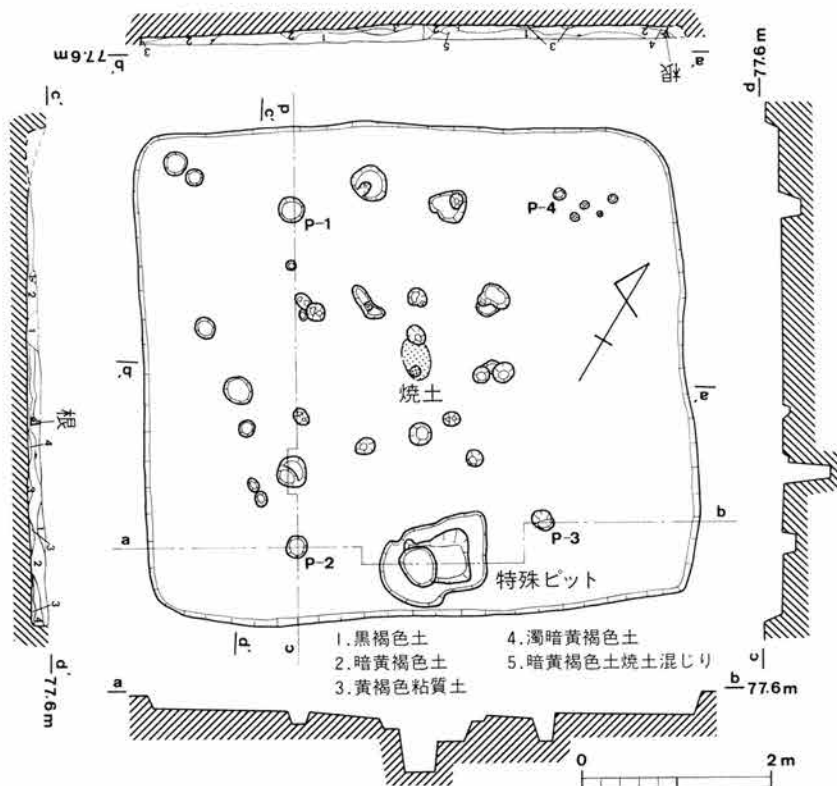
竪穴式住居跡 6 <SH01>

調査地中央部で検出された六角形と考えられる竪穴式住居跡である。一辺3.5~5m, 対角の長軸で約9m, 短軸で8mを測る。壁の立ち上がりは約20cmを測り、非常に残りがよい住居跡である。周溝は幅25cm前後で北東側は検出できなかったが、ほぼ全周していたと考えられる。住居跡南東辺中央からは、幅30cm前後で長さ約5.5mの排水溝と考えられる溝が外へ突き出ている。出入口については不明であるが、あるいは排水溝と考えられる溝が外へ突き出ている辺とは反対側であろうか。この溝の中には、直径20cm前後のピットが



第78図 竪穴式住居跡 7 実測図

4つ穿たれている。支柱穴のほとんどは対角線上にあるといえ、合計6個である。直径は25~40cmであり、柱間距離はP1~2が2.1m, P2~3が4m, P3~4が3.4m, P4~5が2.8m, P5~6が4m, P6~1が3.4mを測る。中央にはいわゆる中央土坑といえる長径1m・短径80cmを測る土坑がある。この土坑の埋土は下層は混礫青灰色粘質土であり、上層は黒褐色土であった。この住居跡からは焼土は確認されなかったが、中央土坑の埋土の上に炭が混じった土が広がっており、中央土坑が炉的なものであった可能性も考えられる。竪穴式住居跡6から出土した遺物は豊富であり、完全な形に近いものも多く出土した。この竪穴式住居跡は、2段の掘形を持っている。床面に、長径約6m・短径約5mの不正円の形に掘り込まれて、床面中央部がもう1段下がるのである。しかし、これはいわゆるベッド状遺構を有する住居跡であるとか、2つの住居跡が切り合っているというものではない。少なくとも、周溝を有する竪穴式住居が使用されている時には、この不正円形をしている土坑は埋められた状態で床面となっていたと考えられる。その理由は、この土坑が非常に不自然な形をしており、また掘り下げた結果も竪穴式住居跡とは考えられないこと、この不正円形の土坑があれば、中央土坑は存在しないことなどによる。しかし、この不正円形をした



第79図 竪穴式住居跡 8 実測図

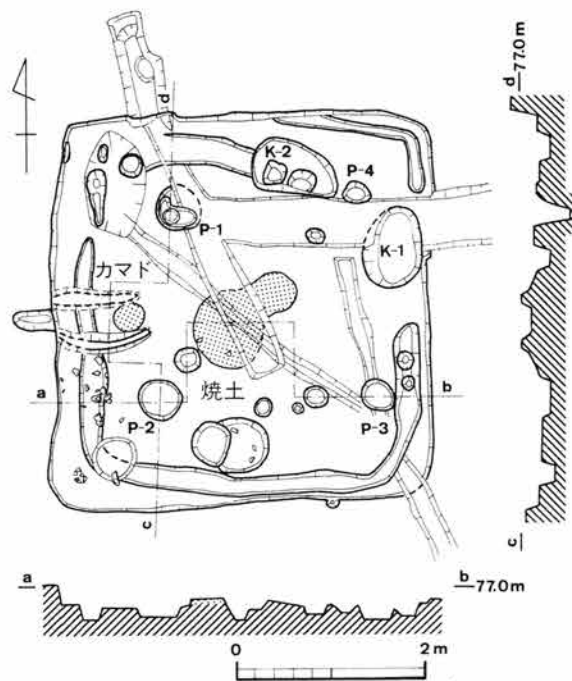
土坑は、住居跡埋土の土層観察の結果、住居跡廃絶の後に掘り込まれたものではなく、また埋土中には土器の細片が混入していたことから自然のものではないと考えられる。

**竪穴式住居跡 7 <SH235>**

調査地の北側中央部で検出された、長径8m・短径7.2mを測る楕円形の竪穴式住居跡である。壁の立ち上がりは30cmと非常に遺存状態のよいものである。幅約20cm程度である周溝が住居跡の北東側を除き3/5程度検出された。支柱穴は深さや位置などからP1～P10のものが考えられるが、東側にP8・P9とつけ足したような配置になっている。支柱間距離は、P1～2が1.8m、P2～3が2.2m、P3～4が1.7m、P4～5が2.3m、P5～6が1.6m、P6～7が1.7m、P7～8が0.7m、P8～9が2m、P9～10が1.4m、P10～1が2mを測る。この住居跡は中央に土坑が切り合って2つあり、その中には直径が40cmを測る柱穴状のピットが2つ穿たれている。この土坑内からは炭化物や焼土は検出されなかった。焼土は住居跡東側の部分に広がっている。出入口については東側の柱穴が張り出したようになっているところと考えられるが、そこには焼土が広がっており、焼土部が炉跡である可能性が考えられる点から出入口部とは考えにくい。焼土部とは反対方向のところ、P4西側に柱穴が2個あるが、これが出入口の施設に関係した柱穴の可能性も推察できる。住居跡内からの出土遺物は他の住居跡に比較すると大変豊富であった。

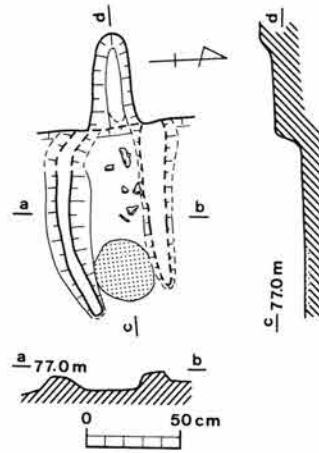
**竪穴式住居跡 8 <SH171>**

調査地の中央部西側で検出された、東西5.8m・南北5mを測る方形の竪穴式住居跡である。壁の立ち上がりは15cmと遺存状態はよいものである。周溝は検出されなかった。支柱穴はP1～4の4本と考えられるが、P1～3の直径が20～25cmに対して、P4は直径10数cmとやや小さいので支柱穴と考えてよいものかは検討の余地があるかもしれない。焼土は狭い範囲ではあるが、住居跡中央部で検出されており、炉跡の可能性が考えられる。住居跡の南辺中央の壁際に、方形

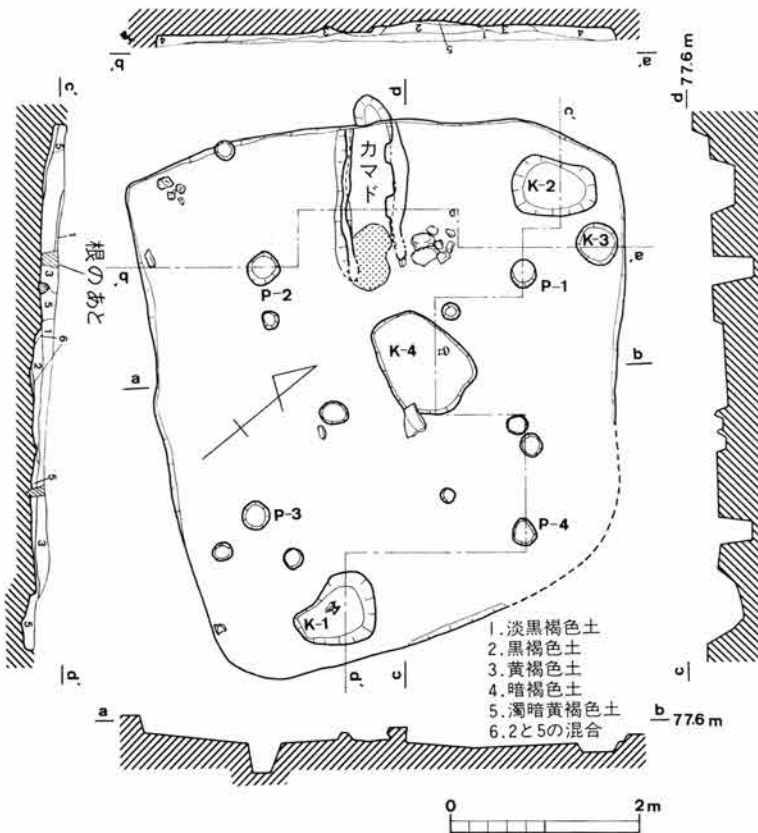


第80図 竪穴式住居跡 9 実測図

に2段に掘られた土坑が検出された。上段は東西110cm・南北80cm, 下段は東西70cm・南北55cmを測り、深さは床面から底まで約40cmである。この土坑内から焼土・炭等は検出されなかった。このピットは、隣接の綾部市の<sup>(注7)</sup>青野遺跡、<sup>(注8)</sup>青野西遺跡でも報告されている「特殊ピット」と称されているものと同様のものと考えられる。特に、<sup>(注9)</sup>青野西遺跡の報告書においては詳しい考察がなされているが、それによると、「全国で普遍的に見られる住居内の施設で、その目的としては胎盤埋納が考えられる。」とされるものである。<sup>(注10)</sup>鳥取県青木遺跡では、こうした特殊ピットについての報告の中で、「床面壁際方形の特殊ピットを有する住居跡はV・VI期(古墳時代初期)から出現する」と考察されている。この住居跡8から出土した遺物は少量の土器の細片であり、



第81図 竪穴式住居跡9  
カマド実測図

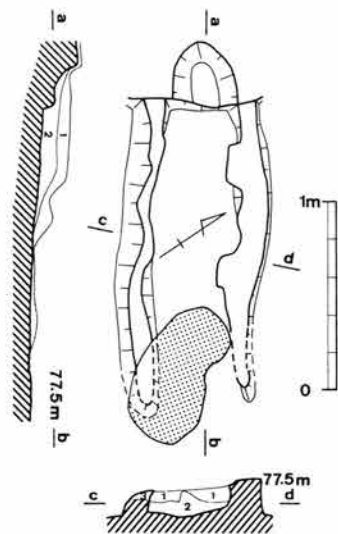


第82図 竪穴式住居跡10実測図

時期を決定できる資料はない。

竪穴式住居跡 9 <SH404>

調査地中央部やや南側寄りのところで検出された、一辺約4mを測る方形の竪穴式住居跡である。壁の立ち上がりは35cmを測り、遺存状態の良好なものである。西辺中央では造り付けのカマドが、床面中央部では炉跡と考えられる焼土が検出され、このほか周溝・主柱穴・土塚も検出された。カマドは、天井部が崩落しており、袖部のみ遺存したものである。平面形は馬蹄形を呈し、幅約60cm、袖部の長さ約1mを測る。煙道部は壁面を切り込む形で壁面から外に向かって、約50cmにわたって設けられている。焚口部には直径30cmの円形を呈する焼土部が検出され、ここが燃焼部と思われる。住居跡中央部の焼土は直径約40cmのもの、直径約70cmのものがダルマ形を呈している。周溝は、北辺及び東辺の一部を除く他の部分で検出された。この周溝の検出に当たり注目されたことは、カマドが周溝を埋めて構築されていたことである。すなわち、住居建造時に全面的に周溝を掘り、その後カマドを設けたと考えられる点である。この住居跡は、このほか周溝以外にも溝が検出された。それは、住居跡廃絶後に掘られたもののほかに、住居跡を北から南へ対角線上に走る溝である。これは住居跡の中央部に検出された焼土部の下を走るもので、中央焼土部が炉跡と考えられることから、少なくともこの炉使用の際には埋められていた溝である。カマドと周溝の構築順でも分かるように、炉跡とこの対角線上の溝も同様の関係があると思われる。住居構築の際に何らかの機能を果たした溝であろうか。主柱穴は、P1～4の4本と考えられる。柱間距離はP1～2が2m、P2～3が2.3m、P3～4が2.2m、P4～1が1.9mをそれぞれ測る。この住居跡に伴う土塚は、K1・K2が考えられる。K1は長径90cm・短径60cm・深さ20cmを測る楕円形を呈する。またK2は長径95cm・短径55cm・深さ約10cmを測る。これらの土塚が住居跡に伴うものかどうかについては、周溝がK1を避けるように、ここで掘るのが途切れて検出されている点から伴うものと判断されるが、K2については、周溝と切り合う形で検出されており、この溝が周溝の続きとも考えられ、住居に伴うものなのかは判断できない。出入口については、周溝が途切れている点で、カマドのある辺の対辺である東辺の可能性が考えられる。土塚K1は、東辺が出入口が



第83図 竪穴式住居跡10  
カマド実測図

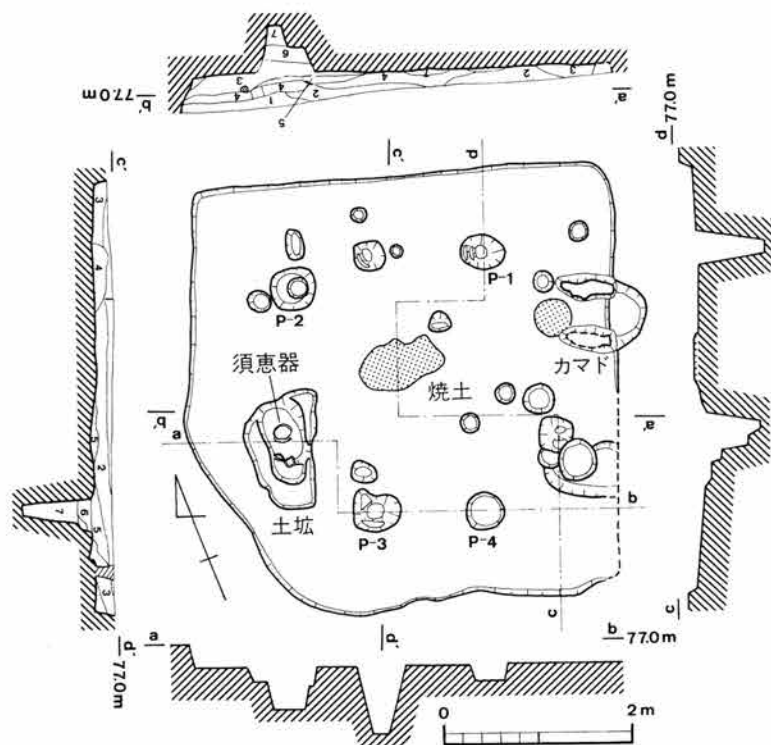
- 1: 焼土(赤黒褐色)
- 2: 流入土(暗黄褐色)
- 3: カマドそで(薄黄褐色)

あったところだとすると、都出比呂志氏説の梯子設置穴等諸説が述べられている土坑と位置的な点において同様のもの<sup>(注12)</sup>の可能性もある。

#### 竪穴式住居跡10<SH144>

調査地の南側中央部のところで検出された、長辺5.4m・短辺2mを測る方形の竪穴式住居跡である。壁の立ち上がりは住居跡の西側では20cmと遺存状態はよいが、東側になるとほとんど削平され、残っていない状態である。西辺中央部では造り付けのカマドが検出されたが天井部が崩落しており、袖部のみ遺存したものである。この平面形は馬蹄形を呈し、袖部の長さは約160cm・幅約80cmを測る。煙道部は、壁面を長さ35cmにわたって切り込むようにして設けられていた。焚口部には直径約30cmの不正円形を呈する焼土が検出され、ここが燃焼部と思われる。この造り付けのカマドは、他のカマドに比べて袖部が非常に長いのが特徴である。こうしたものの一例として、京都府城陽市森山遺跡<sup>(注13)</sup>の竪穴式住居跡SB24の造り付けカマドがある。「これは馬蹄形を呈するタイプのもので、幅80cm・長さ160cm」と報告されているものである。図がないので詳しくはわからないが、規模等同一例とも考えられるもの

である。同じく、竪穴式住居跡SB18には、長さ130cmのカマドがあると報告されている。竪穴式住居跡10には周溝は検出されなかった。この住居跡の支柱穴は、P1～4の4個である。支柱間距離はP1～2が2.7m、P2～3が3.1m、



第84図 竪穴式住居跡11実測図

- 1: 濁黄褐色土 2: 黒褐色土 3: 濁暗黄褐色土 4: 暗茶黄色土  
5: 黄茶色土 6: 混茶褐色土暗黄褐色土 7: 濁黄褐色粘質土



P3～4が2.8m, P4～1が2.9mを測る。その他、この住居跡に伴う土壇としてK1～4の4個を検出した。K1は、平面楕円形を呈するもので、長径85cm・短径75cm・深さ約30cmを測る。この中からは、須恵器の短脚高杯が出土した。K2は、平面楕円形を呈し、長径85cm・短径55cm・深さ約25cmを測る。K3は、平面円形を呈し、直径40cm・深さ約10cmを測る。K4は、住居跡中央部で検出され、平面楕円形を呈し、長径115cm・短径80cm・深さ約10cmを測る土壇である。出入口は、堅穴式住居跡9でカマドの対辺で土壇がある辺の可能性が高いと推察したが、この堅穴式住居跡においても同様にカマドと反対側の東辺にあったと推察する。

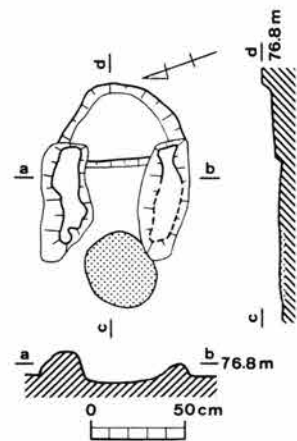
**堅穴式住居跡11<SH145>**

調査地の南側で検出された南北4.6m・東西4.4mを測る方形の堅穴式住居跡である。平面形は方形といっても南西コーナー部を欠くものである。壁の立ち上がりは28cmと遺存状態のよいものである。この住居跡は東辺中央やや北寄りに造り付けのカマドを有し、住居跡中央部には焼土部が検出された。その他、支柱穴・土壇が検出されたが、周溝は検出されなかった。カマドは、天井部は崩落しており袖部のみが検出されたものである。カマドの幅は80cm、袖部の長さは60cmを測る。焚口部には、平面形が円形をした直径40cmの焼土が検出され、ここが燃焼部と思われる。煙道部は直径70cmの半円形を呈している。住居跡中央部の焼土部は炉跡と考えられるが、規模は長径80cm・短径50cmを測る。支柱穴は、配置が台形状を呈するがP1～4の4か所と考えられ、支柱間距離は、P1～2が2m, P2～3が2.6m, P3～4が1.1m, P4～1が2.7mを測る。土壇は住居跡の南西部で検出されたもので、上下2段の掘形を有するものである。上段のものは、不正形な方形を呈し、その規模は長径120cm・短径約70cm・深さは床面から約15cmを測る。

下段のものは楕円形を呈し、その規模は長径80cm・短径40cm・深さは床面から45cmを測る。この土壇内からは須恵器の杯蓋が出土した。出入口については、堅穴式住居跡9・10と同様に考えてカマドがある対辺の西辺の可能性を考えておきたい。

**堅穴式住居跡12<SH252>**

調査地中央部で検出された長辺5.1m・短辺3.6mを測る平面長方形を呈する堅穴式住居跡である。壁の立ち上がりは15cm前後で遺存状態は良好なほうである。床面には、周溝は検出されなかったが、支柱穴と焼土部が検出された。支柱穴はP1～4の4か所と思われるが、P2・P3に関しては



第85図 堅穴式住居跡11  
カマド実測図

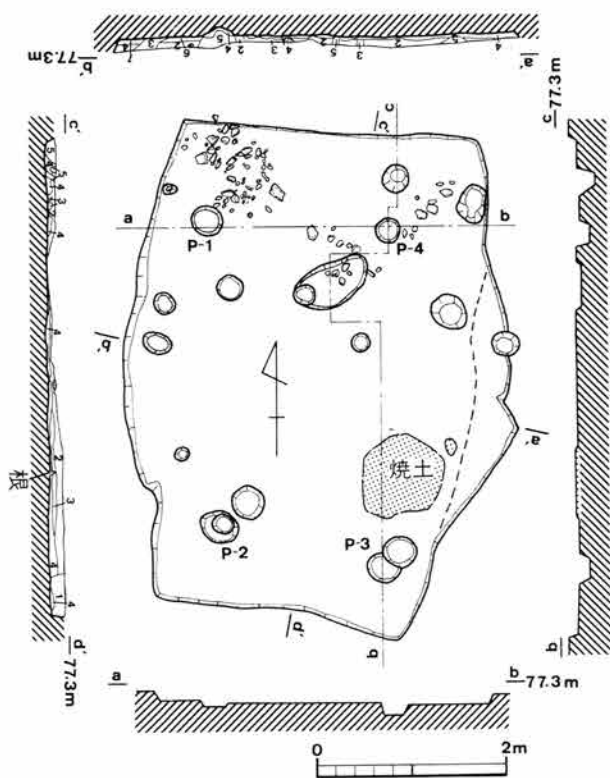
隣接しているピットに建て直された可能性が考えられる。主柱間距離はP1~2が3.2m, P2~3が1.8m, P3~4が3.5m, P4~1が1.9mを測る。P2内からは須恵器の杯蓋が出土している。焼土部は住居跡の南東部に広がっており、直径80cmを測る不正円形を呈している。この焼土部は炉跡とも考えられるが、住居跡の時期を考えると破片等は、全く出土しておらず、想像に留まるが移動式のカマドを使用した痕跡とも推察される。出入口は不明な点が多く明らかではないが、住居跡の北西部には礫片が広がっており、出入口があった可能性が考えられる。

#### 竪穴式住居跡13<SH401>

調査地の北部西側竪穴式住居跡2の南側に隣接した形で検出された方形の竪穴式住居跡である。この住居跡は遺存状態が非常に悪いもので周溝・柱穴・焼土を検出したものである。周溝は幅20cmを測り、方形に巡っている。主柱穴はP1~4の4か所であると考えられる。主柱間距離はP1~2が2.8m, P2~3が2.9m, P3~4が3.3m, P4~1が3.5mを測る。焼土部は東辺中央部に位置し、規模は長径約1m・短径約60cmを測り、あるいは位置や規模などからカマドのあった可能性も考えられるものである。

#### 溝1<SD03>

溝1は、調査地の南西端で検出された幅約3m・深さ1.1mを測るもので断面形は「U」字形を呈する。検出した長さは約11mであるが、さらに調査地域外西側にのびていることが地形観察により推測できる。溝は台地の南西から西側にかけて等高線77.4mを中心に平坦地を取り巻くように掘削されていると推測される。溝の東端は台地の端まで掘り抜かれておらず途中で掘削が中止されている。この溝の埋土は、上層から黒褐色土、暗黄褐色土、



第86図 竪穴式住居跡12実測図

- 1: 黒茶褐色土 2: 暗茶褐色土 3: 黒褐色土混じり暗茶褐色土  
 4: 暗黄褐色粘質土 5: 黒褐色土  
 6: 暗黄褐色粘質土混じりの暗茶褐色土 7: 濁暗黄褐色粘質土

暗褐色土，黒茶褐色土，灰黄褐色土に大別できる。出土遺物は，上層の黒褐色土層内からは須恵器，土師器の土器片が出土した。下層からは，少量の土器片と石斧・石匙などが出土した。

溝2 <SD155>

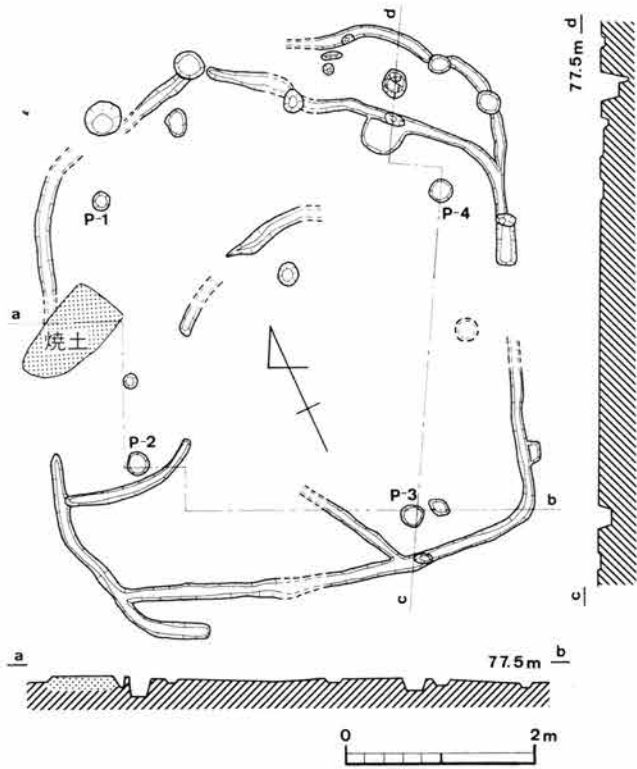
溝2は，調査地西側中央部で検出された上幅1.9～2.6m，下幅1～1.8m，深さ20～60cm，検出長は約22mを測り，断面形は舟底形を呈する溝である。この溝の東端は溝1と同様に台地の途中で掘削が取り止めになっているものと考えられる。西側については調査地

域外にさらにのびていくものと推測される。この溝の埋土は，上層から暗褐色土，黒褐色土，潤暗黄褐色土，淡黄褐色土，灰褐色粘質土に大別できる。溝2からの出土遺物は，上層から下層まで出土しているが，下層からは弥生土器のほかに磨製石剣の破片が出土した。

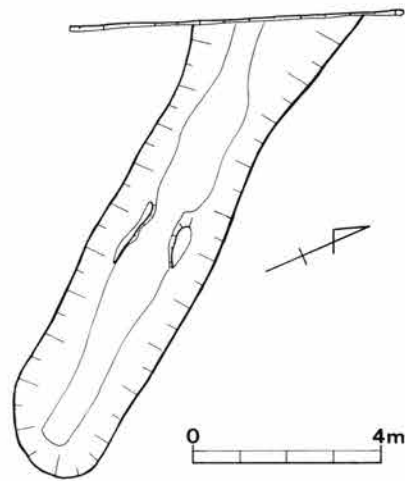
溝3 <SD147>

竪穴式住居跡9 <SH404>の南側を除く三方向を取り巻く形で「コ」の字状に巡る溝で，幅80～90cm，深さは20cm前後を測る。こうした方形に巡る溝は，方墳の周溝または方形周溝墓の周溝であることが考えられるが，残念ながら

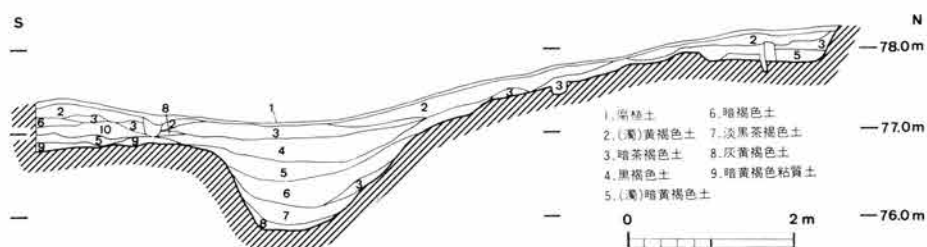
こうした時期に確定できる遺物が溝内からは出土しなかった。また墓であるとしてもこれに伴うであろう主体部を検出しておらず，この溝の時期や性格は不明である。



第87図 竪穴式住居跡13実測図



第88図 溝1実測図



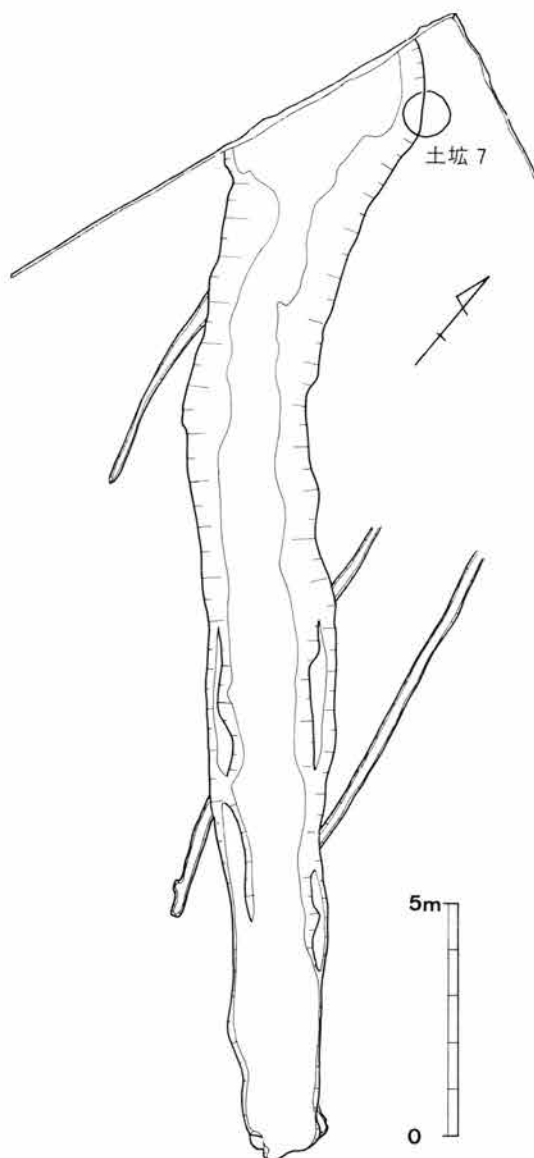
第89図 溝1土層断面図

### その他の溝

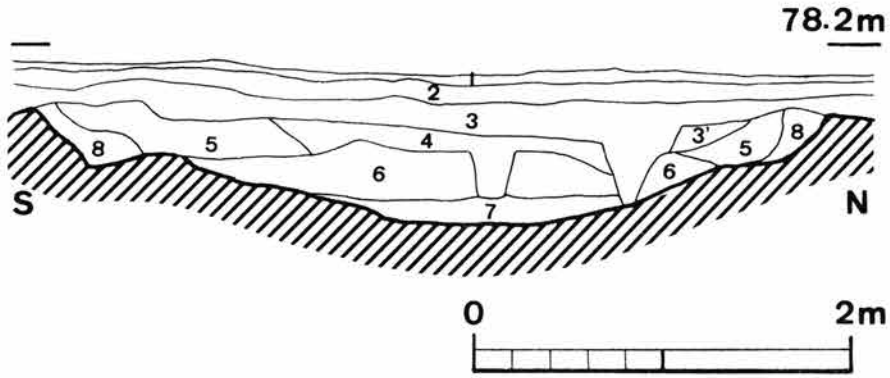
幅約20~40cm・深さ約10~15cm前後の溝で、南北方向または、北東・南西方向に穿たれたものがある。これらの溝は同一方向に何本かまとまって穿たれており、埋土は暗茶褐色土である。暗茶褐色土は基本的には腐植土、黄褐色土の下層の土層で弥生土器をはじめ須恵器・瓦器・土師器などの破片が包含される土層である。これらの溝は穿たれている方向や規模の類似性から同じ時期のもので同様の性格を有した溝と考えられるが、時期や性格を正確に断定できる資料はない。しかし、時期については、先に述べた土層の関係や溝内に包含された土器などから中世の溝と推測される。また、性格については不明であるが、畑などの畝跡という想像もできる。

### 土壇1 <SK347>

竪穴式住居跡5のすぐ東側で検出された短径2.4m・長径は全長ではないが検出長3.8mを測り、深



第90図 溝2実測図



第91図 溝2土層断面図

- 1: 腐植土, 2: 黄褐色土, 3: 暗茶褐色土, 4: 黒褐色土, 5: 濁暗黄褐色土,  
6: 淡黄褐色土, 7: 暗灰褐色粘質土, 8: 黄褐色粘質土

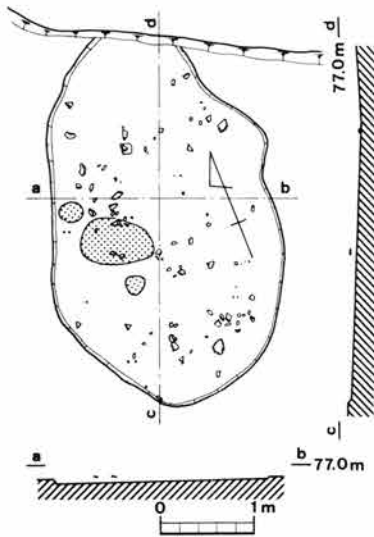
さ10cm前後の楕円形をした土塚である。土塚内には、東西80cm・南北50cmを測る楕円形を呈する焼土をはじめ、この他にもその焼土の両側に2つの焼土が広がり、またこの遺跡では比較的まとまって弥生土器が出土した。

土塚2 <SK375>

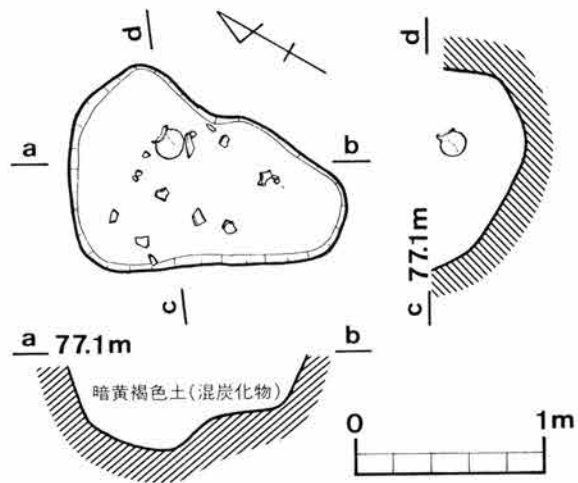
竪穴式住居跡7の南側で検出された、東西160cm・南北110cm・深さ10cmを測る楕円形を呈する土塚である。弥生土器が出土した。

土塚3 <SK374>

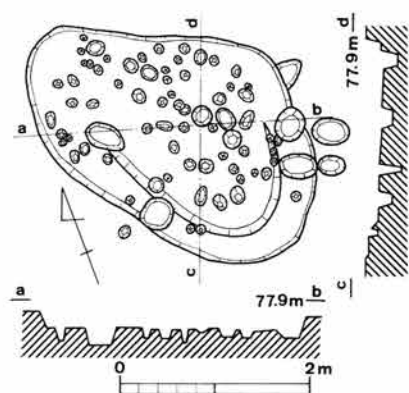
土塚2の南側で検出された長径150cm・短径80cm・深さは50cmを測るものである。平



第92図 土塚1実測図



第93図 土塚3実測図



第94図 土坑4実測図

面形は不正円形を呈し、断面形は舟底形である。埋土は炭を含む暗黄褐色土が一層だけであり、一気に埋め

られたものと思われる。この土坑内からは、土師器が出土した。

#### 土坑4 <SK158>

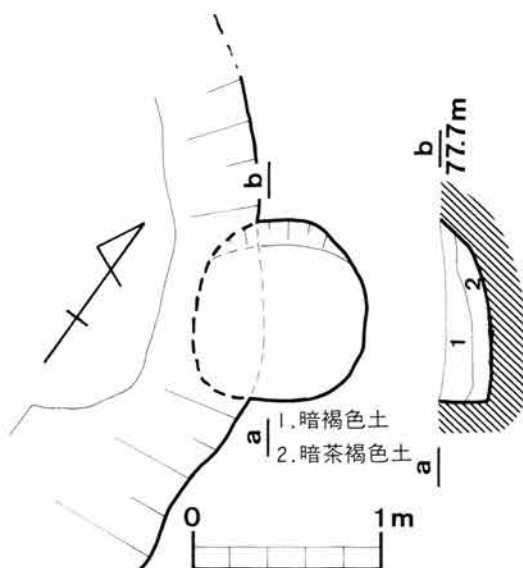
竪穴式住居跡3の南西で接するように検出された長径3.4m・短径2m、深さは20cm前後を測る不正円形を呈するものである。この土坑は底面に更に直径10~20cmの小ピットが数10個穿たれており、土坑内に杭状のものを打ち込んでいたものとも想像されるが性格は不明である。ほとんど遺物は出土しなかったがかなり磨耗した土器の細片と石鏃が出土した。

#### 土坑5 <SK366>

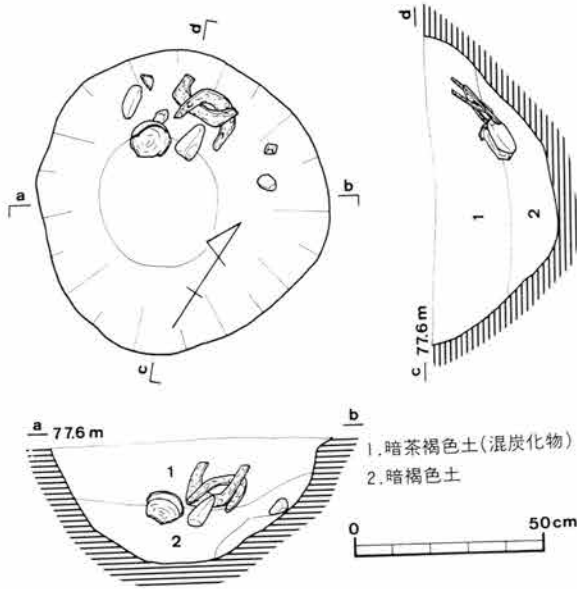
溝2の東側北岸部に切り込む形で掘り込まれた直径90cm・深さ10cmを測り、平面形は円形を呈する土坑である。土坑内からは土師器とともに勾玉が出土した。

#### 土坑6 <SK192>

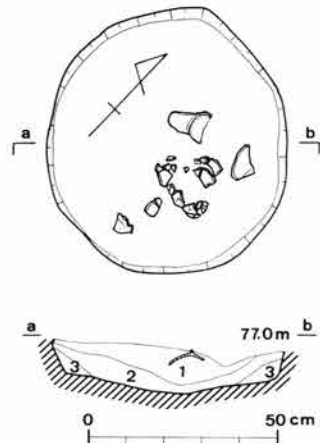
竪穴式住居跡3の東側約6m辺りで検出された円形を呈した土坑である。直径75cm・深さ30cmを測る。断面形は舟底形を呈する。ここからは、須恵器の杯蓋の破片とともに鉄製のU字形の鋤(鍬)先が完全な形で2個出土した。この鋤(鍬)先は一方はU字形であり、もう一方は凹字形を呈しているが、この2個が咬み合うように組み合わせられて出土した。土坑の北側に凹字形のものが刃を下にし、それにU字形のものが刃を上にして咬み合ってやや北に傾いていたが立った状態で出土した。この土坑の埋土は上下2層あり、上層は、炭化物の混入する暗茶褐色土であり、下層が暗褐色土である。遺物はこの2層の分離するあたりで出土しているが、このことは土坑をある程度埋めてから遺物を埋納したとも推測さ



第95図 土坑5実測図

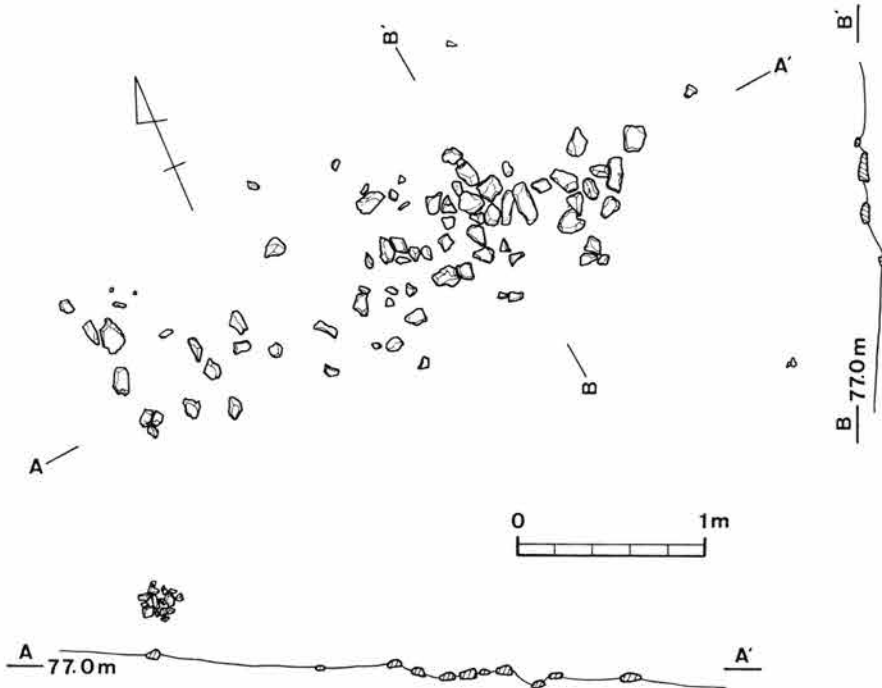


第96図 土坑6実測図



第97図 土坑7実測図

- 1: 暗茶褐色土
- 2: 暗茶褐色土に炭化物混じる
- 3: 濁暗黄褐色土



第98図 集石遺構実測図

れる。

#### 土坑7 <SK363>

竪穴式住居跡9の南側で検出された円形を呈する土坑である。直径は約70cmであり、深さは10cm前後である。この土坑の埋土は上層から暗褐色土、暗褐色土に炭化物が混じる層、濁暗黄褐色土の3層に分層できる。上層内からは、瓦器碗が出土した。

#### 土坑8 <SK410>

竪穴式住居跡13の東側に位置する南北150cm・東西50cmであり、深さは数cmを測る楕円形をした土坑である。

#### 土坑9 <SK301>

竪穴式住居跡12の北側で検出された楕円形をした土坑である。東西125cm・南北75cmを測る。

#### 土坑10 <SK150>

溝1の北側で検出された東西40cm・南北60cmを測る楕円形の土坑である。

#### 集石遺構 <SX06>

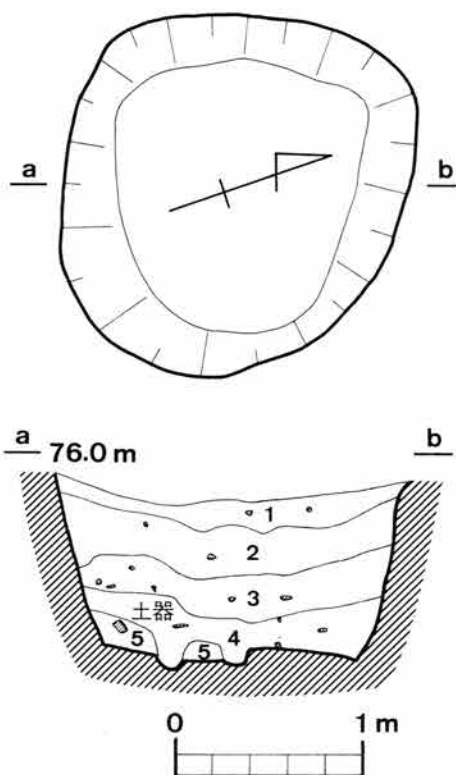
竪穴式住居跡11の上面で検出された集石遺構<sup>(注14)</sup>である。南北1m・東西4mの間に拳大の礫が広がっており、礫とともに須恵器の四耳壺と蓋のセット2組が(第109図148・149・150・151)破片となって散乱していたものである。この須恵器は破片となって散乱していたが、本来は完全な形のものであったのか、否かは不明である。これ以外に遺構と考えられるものではなく、墓や祭祀の跡等の可能性は考えられるが、性格等確認できない。

#### 井戸状遺溝 <SE346>

調査地の南端で検出された井戸状遺溝である。直径約1.8m、隅丸方形を呈する井戸状の遺溝で、深さは約90cmを測る。溜め井戸的なものとして使用されたものと考えられる。

### 3. 出土遺物

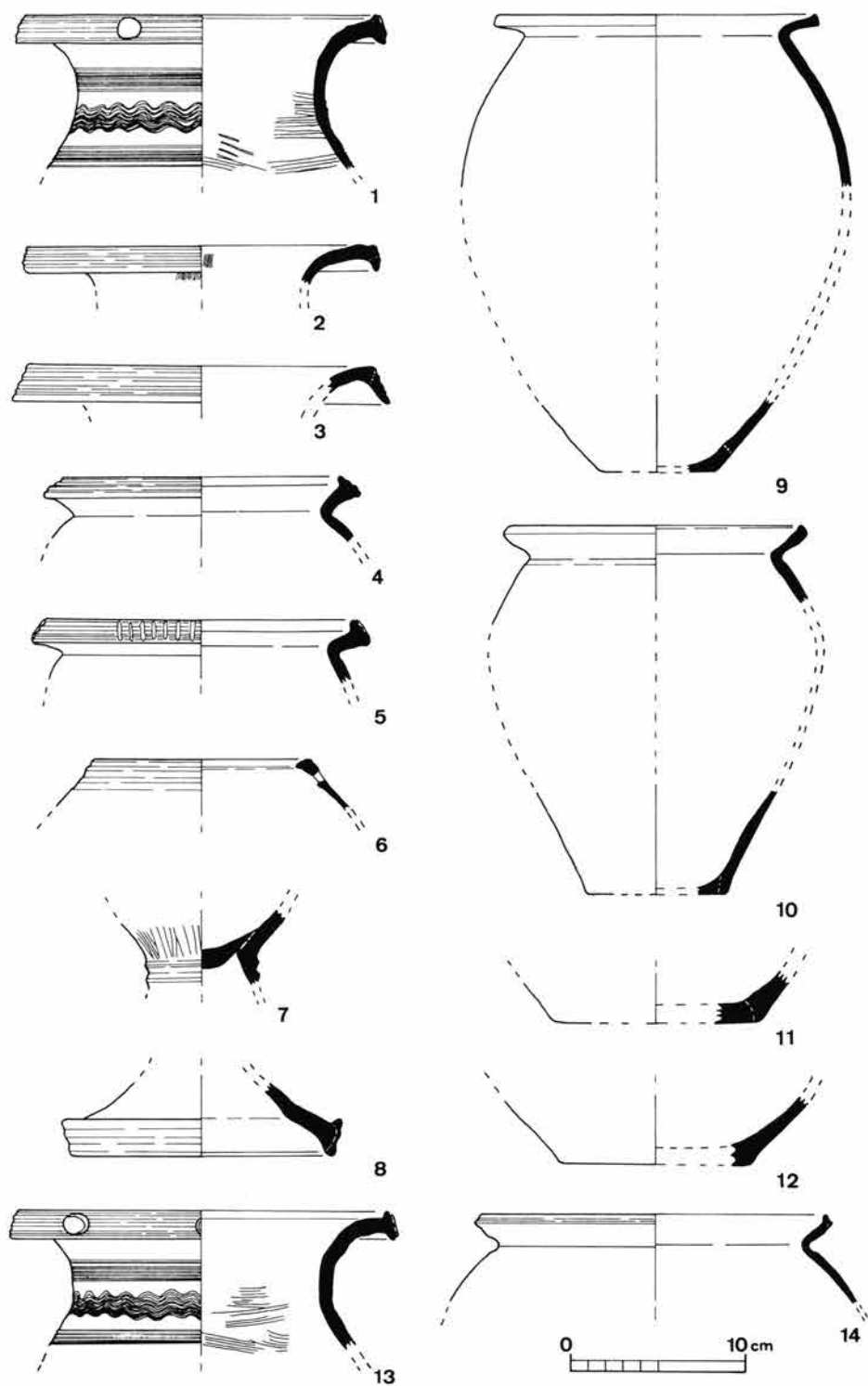
この遺跡からは、弥生土器、須恵器、土師器、陶器、瓦器、石器、鉄器など長い時代にわたり各種の遺物が出土した。しかし、図化できたものはそれ程多くなく、各時期ごとに



第99図 井戸状遺構実測図

1: 暗茶褐色土 2: 暗黄褐色粘質土混じり暗灰褐色土 3: 2と類似するが、混入が少ない  
4: 暗褐色粘質土 5: 濁暗黄褐色粘質土





第100図 各土塚出土遺物実測図

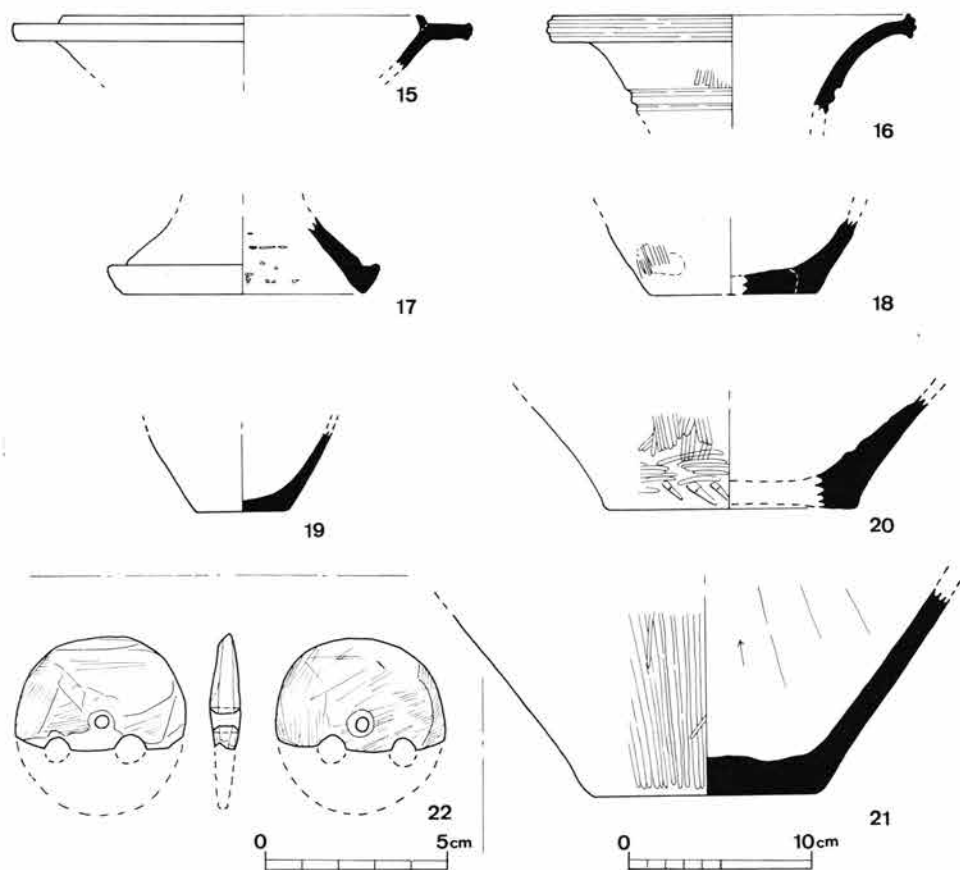
述べていくには質的にも量的にも充分とはいえない。従って、今回は各出土遺構ごとに記述することにした。

#### 土坑1 出土遺物(第100図1～12)

1～5は広口壺形土器である。1は、まっすぐした頸部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部を上下両方に拡張している。端部外面には凹線が4線巡らされ、さらに円形浮文が付く。頸部上半及び体部上半には7条の櫛描直線文が巡り、その間には7条の櫛描波状文が巡る。内面は横ハケ調整されている。2は、1と同様の口縁部であるが、端部は下方のみ拡張する。端部外面には2条の凹線が巡る。広口壺形土器3も2と同様な口縁部を呈するが、端部が下垂する。端部外面には4条の凹線が巡る。4・5は、口縁部が「く」の字状に外反し口縁端部を斜め上方に拡張する。4の口縁端部外面には、凹線状文が3条巡らされている。5の口縁部外面には、3条の凹線文が巡らされ、その上に棒状浮文が配されている。無頸壺形土器6は、口縁部は内側へ肥厚し、外面には3条の凹線文が巡らされている。口縁端部は、内側に少し肥厚しており、紐通し穴が穿たれている。脚部柱状部である。7は、2条の凹線文が確認できる。外面には縦方向のハケ調整が施される。円板充填法。6と同一個体の可能性も考えられる。脚部8は「ハ」の字形に広がり、端部が上下に拡張されている。脚部端部外面には2条の凹線が巡らされている。無頸壺形土器6の脚部になる可能性も考えられる。9・10は甕形土器である。9は、丸く張り気味の胴部からやや開き気味に「く」の字に屈曲して続く口縁部を有する。口縁端部は少しツマンで面を作っている。内外面とも磨耗が激しく調整は不明である。底部は平底である。10は、口縁部が「く」の字に屈曲するもので、端部は上方にツマン気味にして面をつくる。最大腹径は体部中位より上にあるものと考えられる。底部は平底である。調整は不明である。9・10ともに復原したものである。底部11・12は平底である。

#### 土坑2 出土遺物(第100図13～14)

広口壺形土器は、真っすぐな頸部から口縁部が開き気味に外反する口縁部を有し、口縁端部を上下に拡張させて面を作る。端部外面には4条の凹線文が巡り、円形浮文が付く。頸部中央部には7条の沈線文による波状文が巡り、頸部上部及び下部には沈線文による直線文が巡る。上部の直線文は7条であるが下部の直線文は破片のため5条しか確認できない。内面には横方向のハケ調整が確認された。この土器は土坑1で出土した広口壺形土器1ときわめて類似するもので、おそらくは同一個体のものと考えられる。甕形土器14は口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方にツマンで面をなすものである。この面はやや窪んでいる。



第101図 土塚及び竪穴式住居跡1出土遺物実測図

**土塚8出土遺物(第101図15)**

高杯形土器は、直線気味に立ち上がる杯部から水平に張りだす口縁部を有する。突帯が口縁部上端より内方に突出する。内面は横方向のナデ調整を行う。

**土塚9出土遺物(第101図16~18)**

広口壺形土器16は、口縁部は外反してひらき、口縁端部は上下に拡張させ面をなす。端部外面には3条の凹線文が巡る。頸部上部には2条の凹線が巡る。外面はタテハケ調整を行う。脚部17は、下半部のみである。なめらかにひろがる脚から端部を上方に拡張させ面をつくる。内面は横方向のヘラケズリ。底部18は平底の底部である。外面タテハケ調整。

**竪穴式住居跡2出土遺物(第101図19)**

底部19は平底の底部である。調整は不明である。

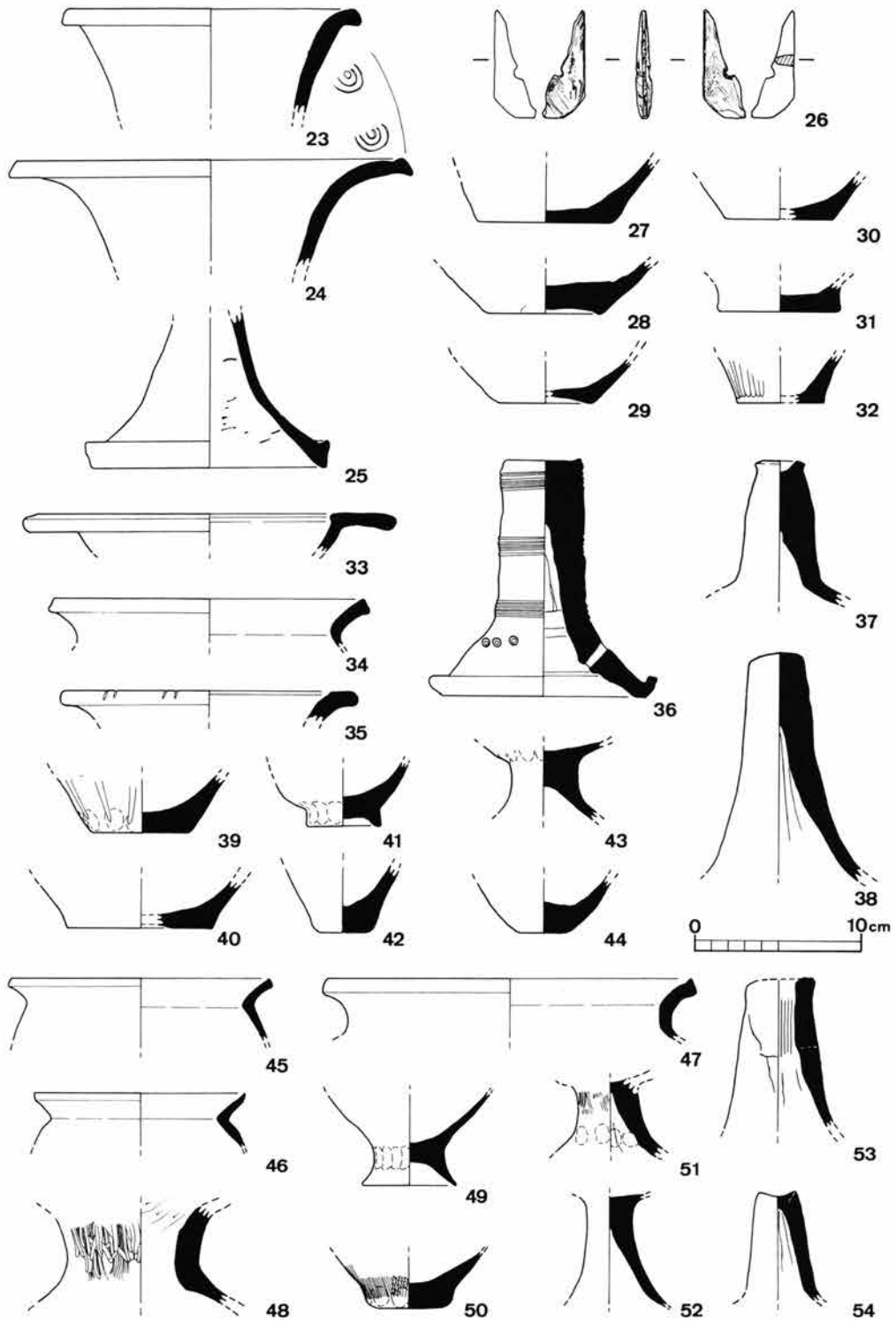
**竪穴式住居跡1出土遺物(第101図20~22)**

底部20・21は平底の底部である。20は外面不定方向のヘラミガキ調整を行う。21は内面

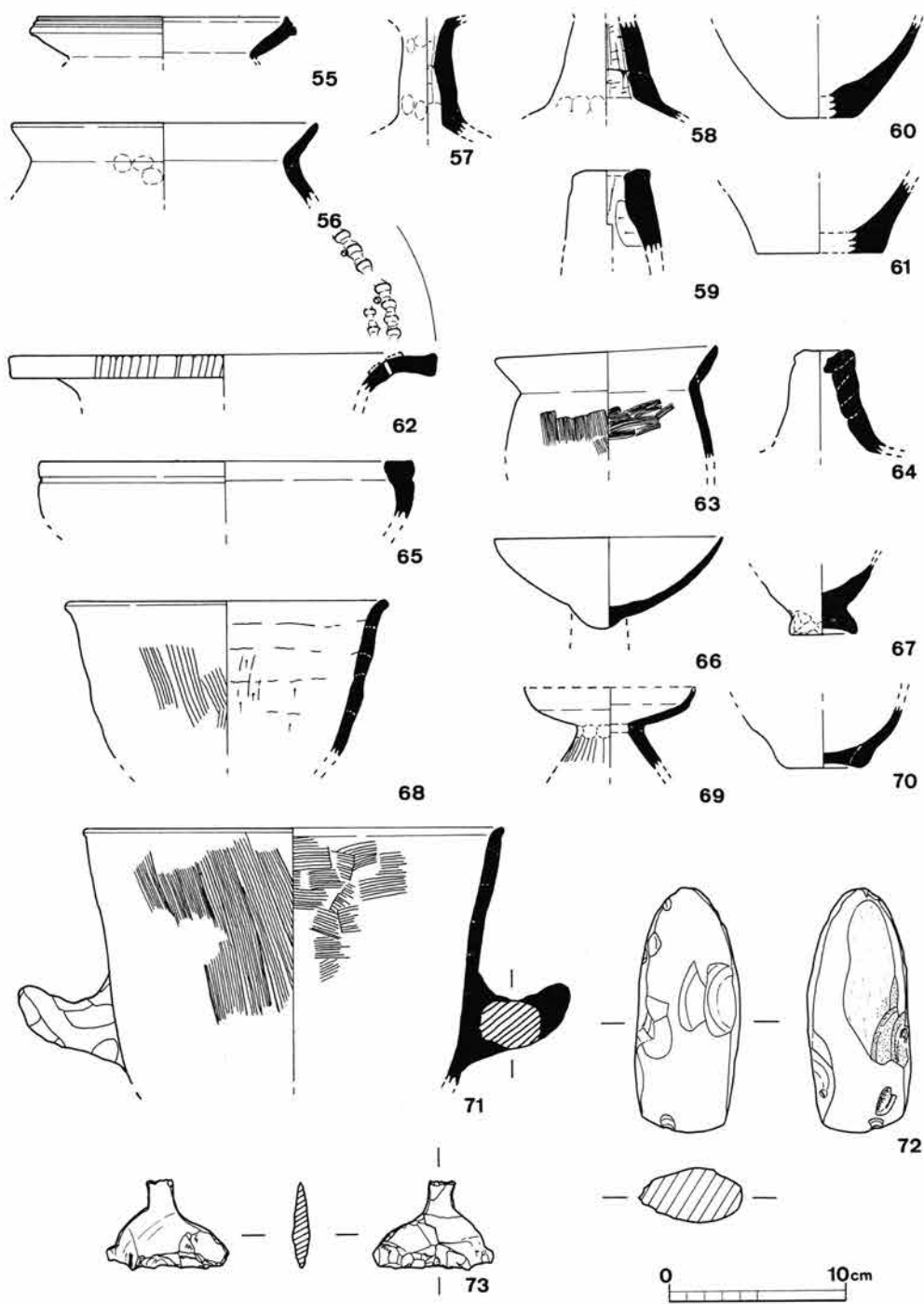
が縦方向のヘラケズリ、外面は縦方向のヘラミガキの調整を施す。黒斑も観察できる。石器22は有孔円板である。中央の孔を一つの頂角に三角形に孔が穿たれている。両面とも研磨痕が観察できる。

#### 溝2 出土遺物(第102図23～54・第103図55～61)

23・24は広口壺形土器である。23は、頸部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部を横に屈曲させて面をつくる。24は、頸部から斜め上方に立ち上がる口縁部が水平に開いて口縁端部にいたる。口縁端部は上下に肥厚させ面をつくっている。口縁部内面には半円状の3重の同心円文がめぐらされている。脚部25は、ラッパ状にひろがるもので、脚端部を上方に拡張して面をつくる。この面はややへこみ気味である。内面はヘラケズリ調整する。石剣26は、鉄剣形石剣である。27～32は弥生土器の底部である。27・30・32は平底のものである。28・29は中央がくぼんであげ底状のものである。31はとがり底状のものである。これらの遺物は下層の暗灰褐色粘質土層から出土したものである。高杯形土器33は碗状の杯部から口縁部が水平にひろくものである。口縁内面も肥厚気味で、やや突出する。外面はヘラミガキ調整する。34・35は甕形土器である。34は口縁部が「く」の字に屈曲するものである。口縁端部を下方にややツマミ気味にして面をつくる。35は口縁部が斜め上方に立ち上がるもので、口縁端部を水平にひらき気味にしている。端部外面には2本1組のキザミメ文がめぐる。脚36は、円筒形の柱状部から「ハ」の字形にひろがる脚裾部を持つものである。脚端部は上方に拡張され、面をなしている。柱状部には、6条1組の凹線が上部・中部・下部と3段めぐらされている。柱状部内面はシボリ痕が観察される。脚裾部には3個一組のスカシ孔が3か所穿たれている。これは外から穿孔されたものである。脚部37は脚柱部から裾部が屈曲して広がるものである。脚部38はゆるやかに外反するものである。39～42・44は底部である。39・40は平底のものである。39は外面ヘラミガキ調整で、指頭圧痕のこる。41はひねり出しにより台をつけるものである。42・44はともに平底であるが、狭いものである。43は脚台部である。これらの遺物は淡黄褐色土層から出土したものである。45～47は甕形土器である。45・46は「く」の字に屈曲する口縁部を呈するもので、口縁端部はツマンで面をなしている。47は真っすぐ立ち上がってから屈曲する口縁部を呈するもので、口縁端部はツマンで面をなす。48は器種不明土器である。鉢形土器49は内湾してひろく碗形体部に脚台がつくものである。底部50はやや突出気味の平底である。51～54は脚部である。51・52はゆるやかに外反するものである。53・54は脚柱部から裾部が屈曲するものである。これらの遺物は黒褐色土層から出土したものである。広口壺形土器55は、口縁部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端部を上下に少し拡張して面をつくる。この外面には2条の凹線文がめぐる。甕形土器56は「く」の字に屈曲する口縁部を呈するものである。



第102図 溝 2 出土遺物実測図



第103図 溝1・2出土遺物実測図

57～59は脚部である。60～61は平底の底部である。

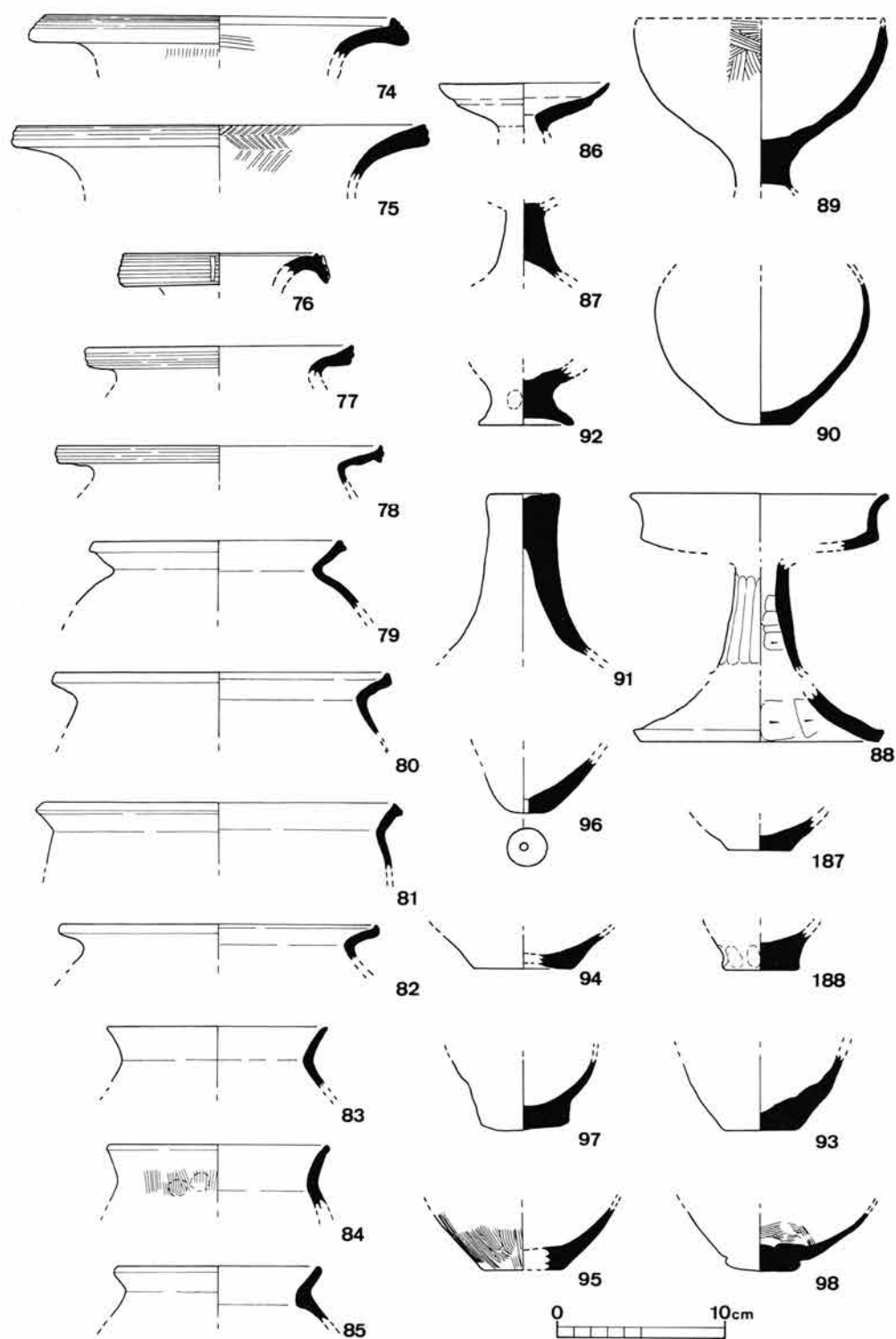
**溝1 出土遺物(第103図62～73)**

広口壺形土器は大きく外反して水平に開く口縁部を呈するもので、端部外面にはキザミメ文がめぐり、内面には指頭圧痕文が2条めぐり。鉢形土器65は内湾しながら立ち上がるもので段状の口縁端部を呈する。この2点が溝下層より出土した土器である。63は単純に「く」の字に外反する甕形土器である。外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整である。

66は内湾しながら立ち上がる高杯形土器の杯部である。底部は突出する。69は小型器台である。受け部はしっかりと立ち上がり、脚部は直線的に広がる。64は屈曲して広がる脚部である。67・70は土器底部である。68は上方に立ち上がる鉢形土器である。口縁端部は開き気味に屈曲させる。成形のときの粘土紐の痕が観察される。外面縦ハケ。甌形土器71は口縁部が直口し、口縁端部がツマミ気味につくられている。体部中位に1対の把手がつく。外面は縦ハケ・内面は横ハケ調整する。石器72は石斧である。石器73は石匙である。

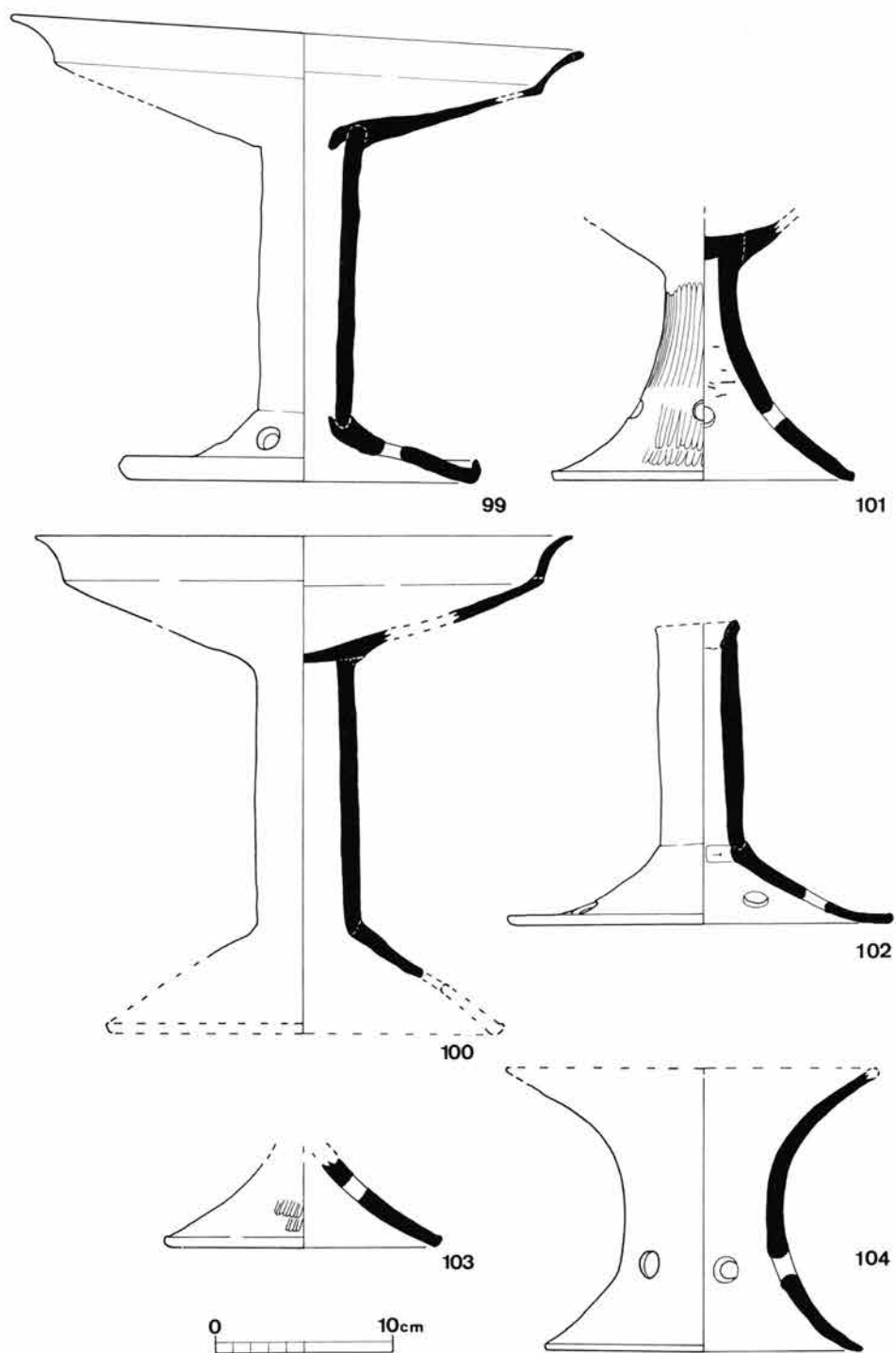
**竪穴式住居跡6 出土遺物(第104・105図74～104)**

広口壺形土器74・75は大きく開きながら外反する口縁部を呈するものである。74は端部を内上方に拡張するもので、端部外面には3条以上の凹線がめぐり。75は端部を拡張しないもので、外面には凹線が3条まで確認できる。76は口径の小さい広口壺形土器である。外反する口縁部を呈し、端部を下方に拡張し、外面には、4本の凹線がめぐり、その上部に棒状浮文がつく。77～78は「く」の字に屈曲する口縁部を有する甕形土器で、端部を上方、または上下両方に拡張し、そこに凹線文を巡らせる。79～82は「く」の字に屈曲する口縁部を有する甕形土器で、端部を拡張して面をもつものである。83～85は斜め上方に緩やかに立ち上がる口縁部を呈する甕形土器で、口縁端部はややツマミ気味にされている。84は外面にハケ調整と指頭圧痕が観察される。86はいわゆる小型器台である。受け部が斜めに立ち上がるものである。87は小型器台の脚部である。88・91は高杯形土器脚部である。89は深い碗状の杯部を呈する高杯形土器である。口縁端部および脚は欠けており、不明である。杯部外面には不定方向のハケ調整が見られる。90は楕円形状の体部である。92～98・187・188は各種の底部である。92は台状のものである。93～95は平底のものである。96は底部に穿孔があるものである。97・98は底部が突出するものである。高杯形土器99・100は、斜めに立ち上がる杯部が稜をなし、口縁部が外反するものである。脚部は筒状のものである。裾部はやや扁平なもので、端部を折り返すもの(99)と「ハ」の字に広がるもの(100)がある。99は3か所の穿孔がある。101～103は高杯形土器の脚部である。101は「ハ」の字に広がるものである。穿孔は4か所ある。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリ調整である。102は筒状の脚部でやや扁平な裾部を呈するものである。穿孔は4か所である。

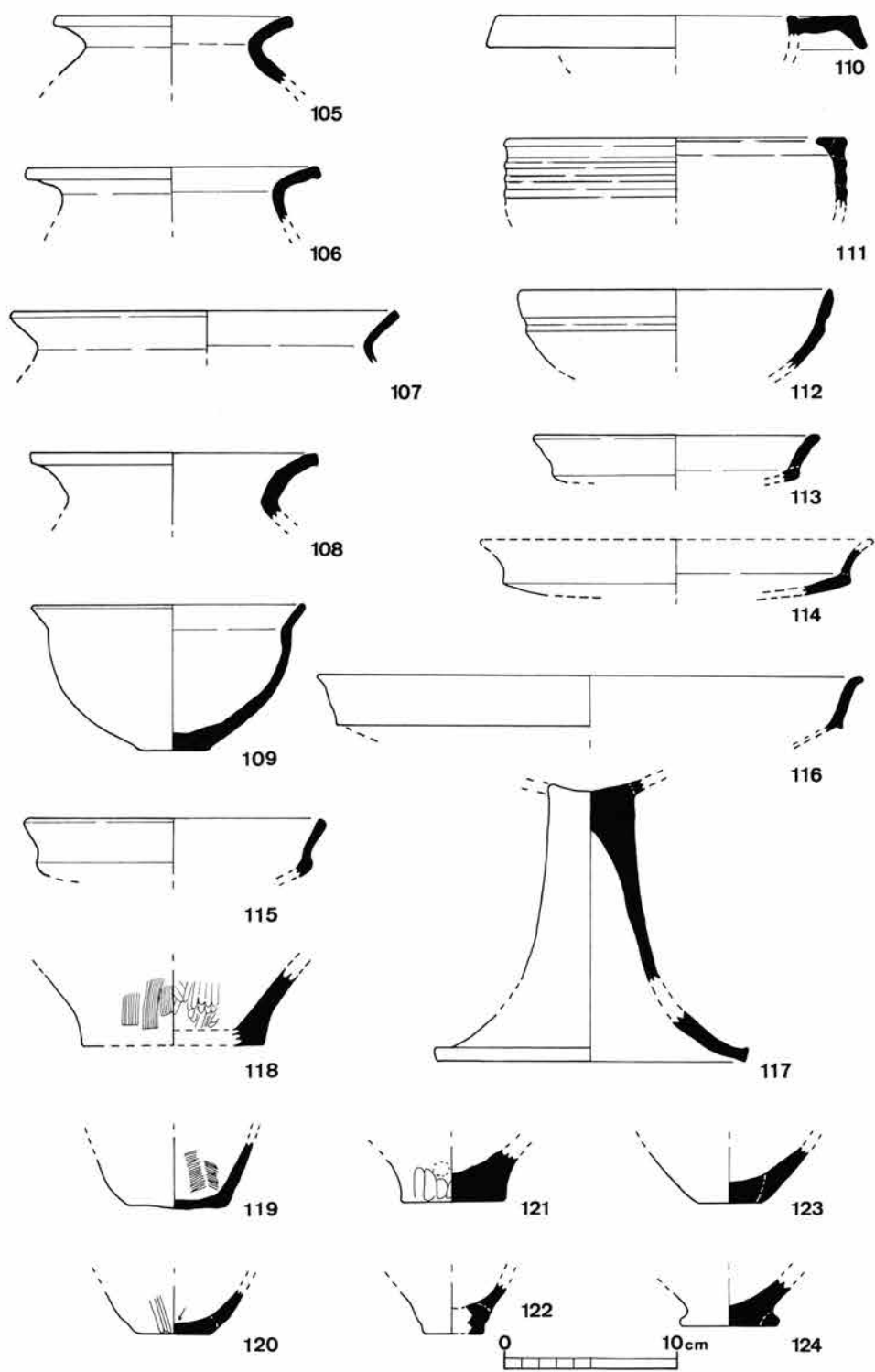


第104图 竖穴式住居跡6出土遺物実測図(1)





第105図 竪穴式住居跡6出土遺物実測図(2)



第106图 竖穴式住居跡7出土遺物实测图

裾部内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。103は外面をヘラミガキ調整する。器台形土器104は上下が開き、中央部が狭い鼓形を呈し、中空のものである。4か所に穿孔を有する。

**竪穴式住居跡7出土遺物(第106図105～124)**

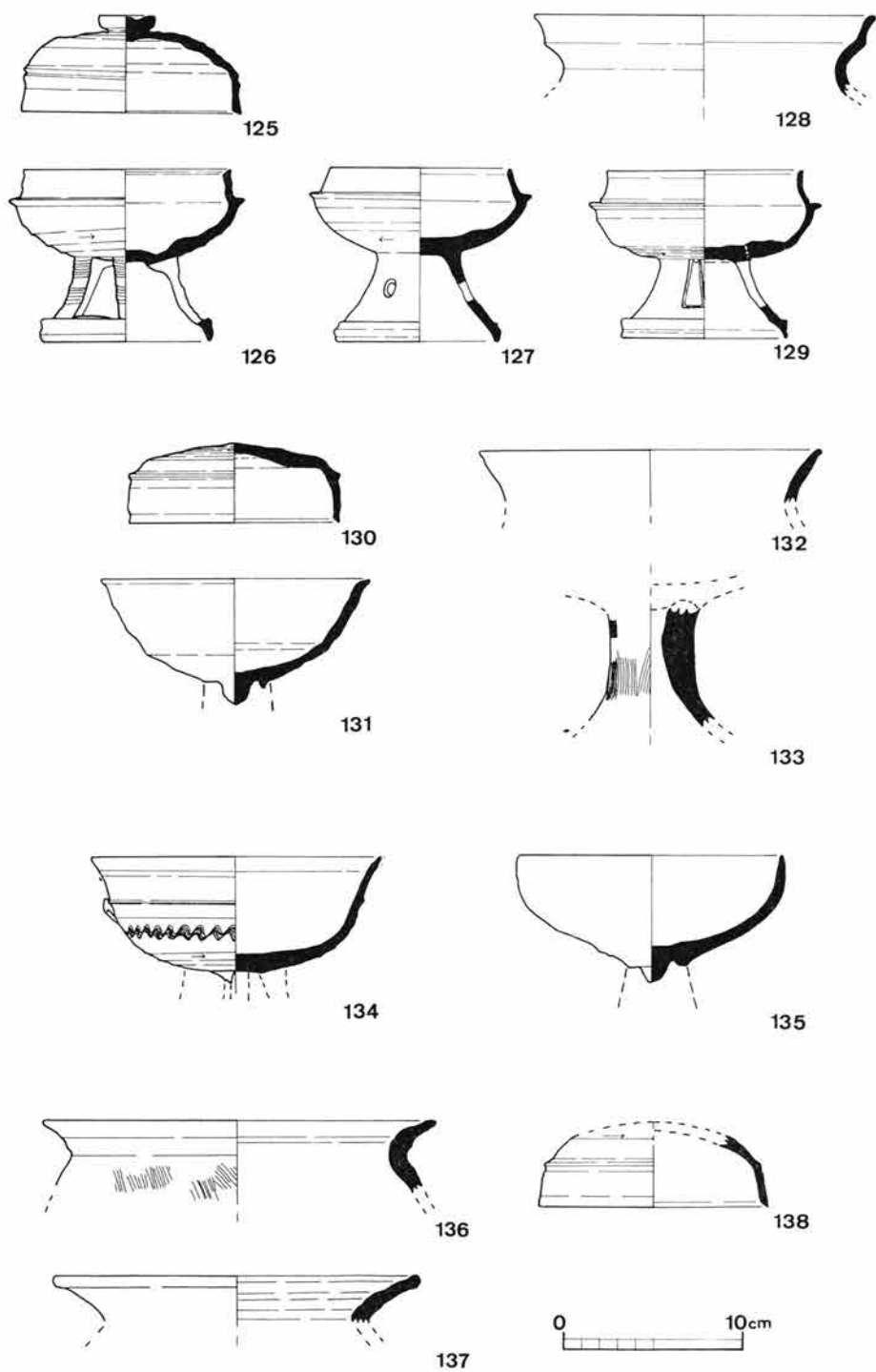
105～108は甕形土器である。105・106・108は「く」の字に外反する口縁部の端部に面を有するものである。106・108は端部を下方にややツマミ気味にしている。107は「く」の字状に外反する口縁部である。端部は上方へわずかにツマミ気味にしている。鉢形土器109は、深い碗状を呈する体部から口縁部が緩やかに外反するものである。平底の底部がつく。110～115は高杯形土器である。110は水平に張り出す口縁部の端部を垂下させるものである。111・112は体部が内湾しながら立ち上がる杯部を呈するものである。111は口縁部から杯部にかけて4条の凹線文が巡らされ、端部は内方に拡張されている。112は杯部に1条の凹線文が巡らされ、端部は丸くおさまられている。113～116は杯部が稜をなし、口縁部が外反するものである。117は「ハ」の字形にひらく脚部である。脚端部をやや拡張気味にして面を持たせる。118～124は土器底部である。118～120・123は平底の底部である。118は外面タテ方向のハケ、内面はタテ方向のミガキ調整である。119は内面に横ハケ調整、120は外面に縦方向のミガキ調整が観察される。121・122は突出気味の底部である。124は脚がつく底部である。

**竪穴式住居跡9出土遺物(第107図134・135)**

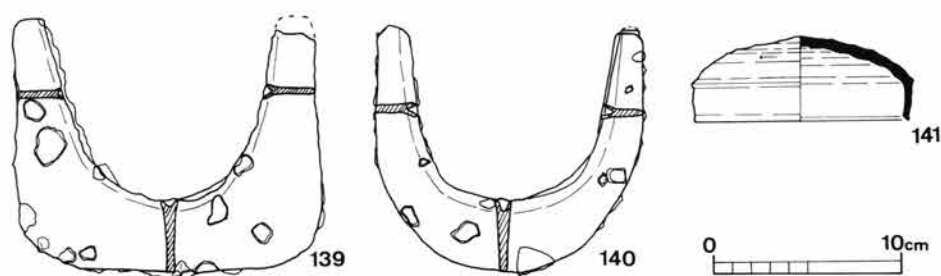
134は須恵器の無蓋高杯である。丸く立ち上がり、杯部から口縁部は外反する。その端部は丸くおさまる。杯部中央には稜線が2本巡り、その下に7本からなる櫛描きの波状文が巡る。稜線上には粘土を長形状にしたものを折り曲げて貼り付けた飾りツマミが1つ付く。脚部はないが長方形の透かし窓を四方に持つものである。135は土師器の高杯形土器の杯部である。丸い杯部の口縁部は真っすぐ立ち上がる。底部中央部には突起部がある。

**竪穴式住居跡10出土遺物(第107図125～129)**

125は有蓋高杯の蓋である。天井部が丸くふくらみ、天井部中央に中くぼみのツマミが付く。天井部と体部の境にある稜線は低く、鋭さに欠ける。体部は天井部より短く、端部は内傾する。126・127・129は有蓋高杯である。126は、立ち上がりがわずかに内傾し、端部が内傾する段を持つ。受け部は水平にのびており、この端部は丸い。体部は丸く、体部の下半部は回転ヘラケズリされる。脚部は、「ハ」の字形に外反し、この端部は外方に屈曲して、さらに下方にカギ形に曲がり面をなす。この端面はわずかにくぼむ。この脚部は三角形の透かし窓が三方向より穿たれ、外面はカキメ調整されている。127は、立ち上がりは内傾し、端部は内方に傾斜する。受け部は水平にのび、端部は丸い。体部は丸いが全体的に扁平である。体部下半部は回転ヘラケズリ。脚部は「ハ」の字形に外反しそのまま端



第107图 竖穴式住居跡9・10・11・12出土遺物実測图



第108図 土塚6出土遺物実測図

部にいたるが、端面を作り出している。円形の透かし窓が三方より穿たれる。129は立ち上がりは内湾してから垂直に立ち上がり、端部はわずかに内傾する。受け部は水平にのび、先端は鋭い。体部は、平らな底部から丸く立ち上がる。脚部は、128とよく似たものであるが、端面の稜が鋭くくぼむ。透かし窓は台形のものが「T」の字方向に三方から穿たれる。

**竪穴式住居跡11出土遺物(第107図130～133)**

130は、有蓋高杯の蓋である。天井部は比較的丸く、体部は真っすぐのびる。天井部と体部間の稜線は比較的明瞭である。端部は内傾する面をもつ。天井部上半は回転ヘラケズリする。土師器131は高杯形土器の杯部である。杯部は斜め上方へ広がり、その口縁部は外反する。端部は狭い面を持ち稜となる。底部中央には突起部がある。内外面は横ナデ調整する。132は土師器の甕の口縁部である。「く」の字に外反するものである。133は脚部である。外面タテハケ調整する。

**竪穴式住居跡12出土遺物(第107図136～138)**

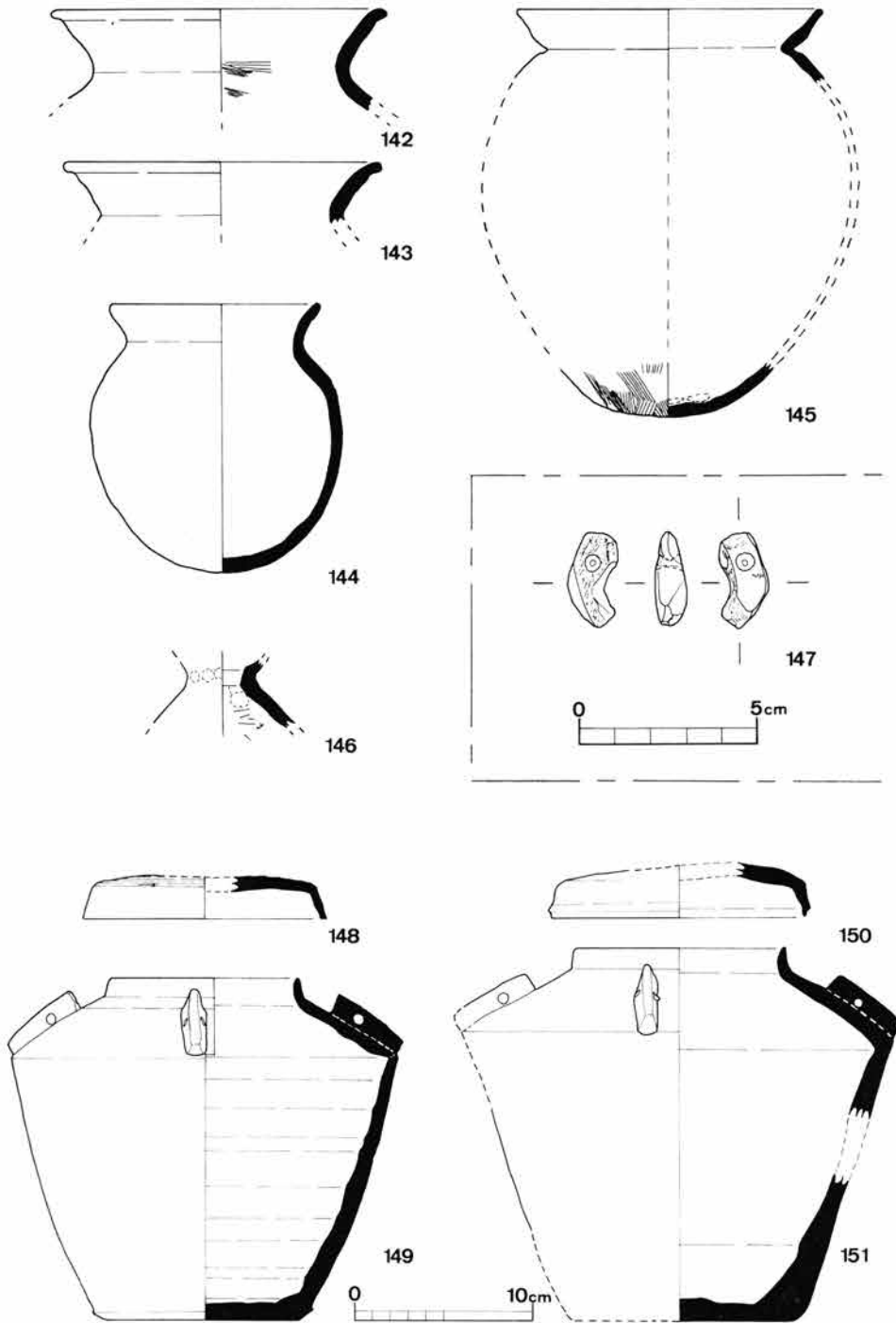
136・137は土師器の甕である。136は「く」の字に外湾し、口縁部には段がある。端部は丸くおさまる。外面はタテハケ調整する。137は「く」の字に外反する口縁部である。口縁部は段状を呈する。端部は丸く面をなす。138は須恵器の杯蓋である。天井部は欠損しており、体部は真っすぐのびる。端部の内傾は急である。

**土塚6出土遺物(第108図139～141)**

139・140は鉄製の「U」字形の鋤(鍬)先である。139は「凹」字形を呈するもので、長さ12.4cm・幅16cm・刃幅3.8cmである。140は「U」字形を呈するもので、長さ12.9cm・幅16cm・刃幅3.8cmである。141は須恵器の杯蓋である。立ち上がりは内に傾き、端部は内傾する。天井部と体部の境をなす稜線は鋭さを欠く。天井部上半は回転ヘラケズリ調整する。

**土塚10出土遺物(第109図142・143)**

142・143とも土師器の甕である。「く」の字に外反する口縁部の端部を丸く肥厚気味にしたものである。内面にハケ調整がみられる。



第109図 各土坑等出土遺物実測図

**土塚 3 出土遺物(第109図144)**

144は土師器の甕である。口縁部は外反し、端部を丸くする。体部は縦長の楕円形を呈する。外面にハケ調整が施される。

**溝 4 出土遺物(第109図145)**

溝 4 は竪穴式住居跡 6 を切る溝であり、またこの溝を切る形で竪穴式住居跡12が構築されている。145は「く」の字に屈曲する口縁部と丸底の底部を有する。底部外面に縦ハケ調整が見られる。

**土塚 5 出土遺物(第109図146・147)**

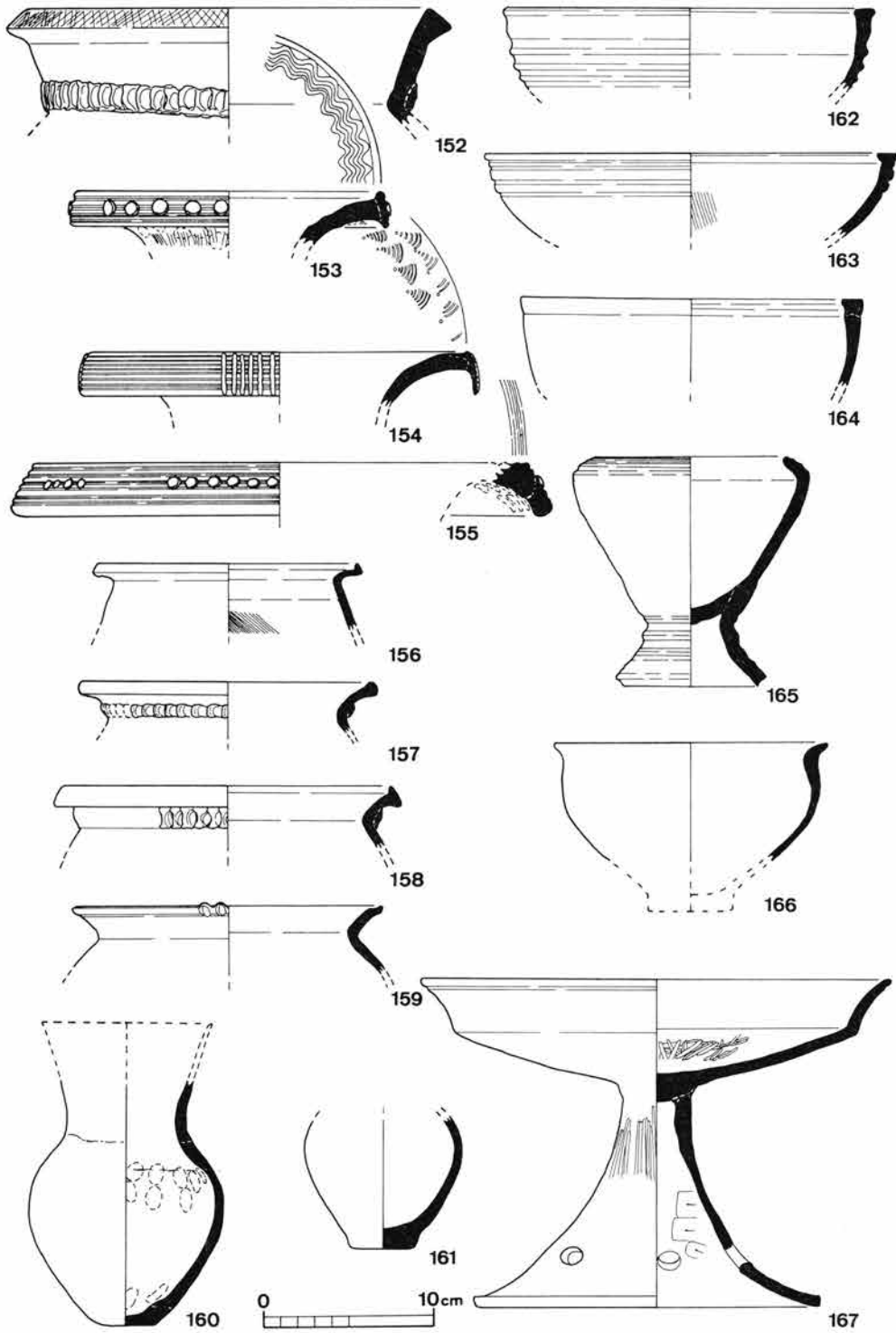
146は小型器台の脚部である。「ハ」の字形に真っすぐのびるものである。147は緑色凝灰岩の勾玉である。糸通し穴は両面穿孔である。まだ多くの面を残すものである。

**集石遺構 1 出土遺物(第109図148～151)**

148・150は須恵器の蓋である。平らな天井部からやや斜めに体部がのびる。端部は平らなもの(148)と段状のもの(150)がある。149・151は須恵器の四耳壺である。平らな底部から体部が斜めに立ち上がり、肩部で鋭く屈曲する。口縁部は真っすぐに立ち上がり、端部は丸く終わる。肩部には四方に、中央に円孔がある長方形の耳が付く。内外面ともにナデ調整する。

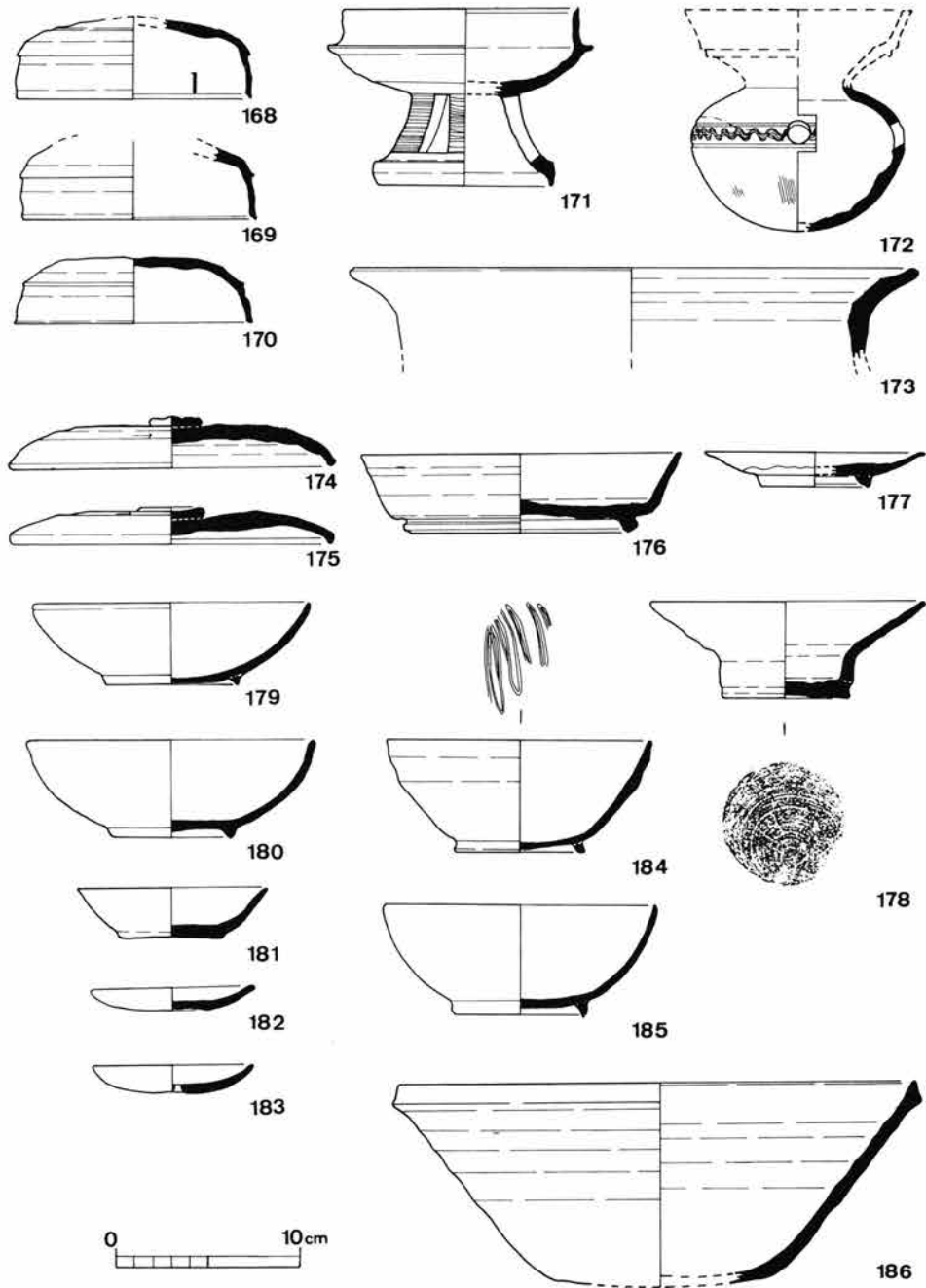
**柱穴状遺構・包含層出土遺物(第110・111図152～186)**

152～155は広口壺である。152は斜め上方に口縁部が開き、端部が断面三角形を呈するものである。口縁端部外面には斜格子文が刻まれ、頸部には指頭圧痕突帯文が巡る。153は、外湾する口縁部の端部を上下に拡張するものである。端部外面には4条の凹線文とその上に直径1cmの円形浮文が付されている。口縁内面には6条の波状文が巡る。頸部外面に縦ハケ調整が施される。154・155は外湾する口縁部の端部を垂下させるものである。154は口縁部端面に8条の凹線文が巡り、その上に棒状浮文が付く。口縁内面には扇形文を2帯巡らす。155は口縁部端面に6条の凹線文が巡り、その上に直径7～8mmの円形浮文が付く。口縁内面にも凹線文が巡る。156～159は甕形土器である。156は口縁部が鋭く屈曲するもので、端部を上方にツマミ上げる。157・158は「く」の字に外反する口縁部の端部を拡張して面を作ったものである。頸部に指頭圧痕突帯文が巡る。159は「く」の字に屈曲する口縁部の端部をツマンでいるものである。口縁端部には指押さえによる波状部がある。160・161は長頸壺である。両方とも口縁部を欠いているが、楕円形の体部から斜めに立ち上がる口縁部を有するものと考えられる。底部は平底である。162～166は鉢形土器である。162～164は、体部が内湾しながら立ち上がるもので、端部を拡張させる。162・163は凹線文が4条巡る。同様の形をした杯部に脚がつく高杯の可能性もあるが、破片のため鉢に分



第110图 包含層出土遺物実測図





第111図 柱穴及び包含層出土遺物実測図

類した。台付き鉢165は斜めに立ち上がる体部から口縁部が内方に屈曲するものである。口縁部には凹線文が2条巡る。脚部は「ハ」の字に開き、3条の凹線文が巡る。166は椀状の体部から口縁部が短く屈曲するものである。高杯形土器167は斜めに立ち上がる杯部が稜

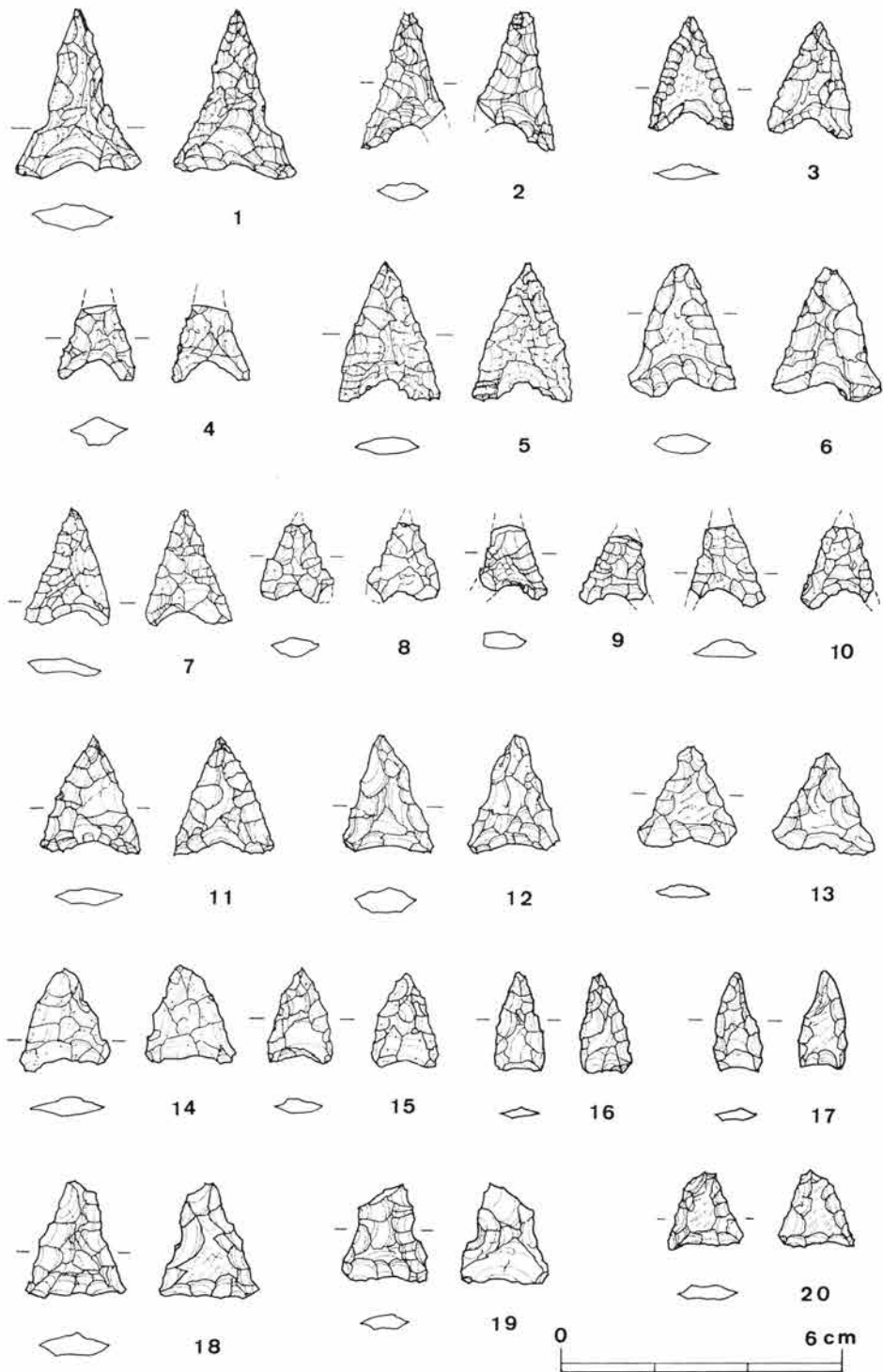
をなし口縁部が外反するものである。脚部はなだらかに外反する。円形の穿孔がある。外面及び杯部内面はていねいなヘラミガキが施される。脚部内面はヘラケズリする。168～170は須恵器の有蓋高杯の蓋である。170は体部がやや斜めにのびる。天井部回転ヘラケズリする。171は有蓋高杯である。体部は斜めに立ち上がり、受け部は水平に開く。立ち上がりは垂直であり、端部は鋭く内傾する。脚部は「ハ」の字形にひらき端部を屈曲させる。外面にはカキメが施される。172は須恵器の甗である。やや扁平ではあるが球形の体部で、中央部に2本の沈線によって囲まれた波状文からなる文様帯が巡る。その文様帯に円孔が1個穿たれている。外面にはハケメが残る。土師器の甕形土器173は、外反する口縁が段状をなすものである。174・175は、須恵器の杯蓋である。天井部は丸みがあり、中央に扁平な擬宝珠様ツマミが付く。天井部は回転ヘラケズリ。176は須恵器の杯身である。体部は外反し底部に「ハ」の字に開く高台が付く。177は陶器の緑釉皿である。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は横に折れてのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部には高台が付き、高台端部は斜めに段を持つ。178は土師器の皿である。底部には回転糸切り痕が観察される。179・180・184・185は瓦器碗である。182・183は体部が緩やかに内湾する。184・185は斜め上方に直線的に立ち上がる体部のものである。184の内底面にはジグザグの暗文が残る。181～183は土師器の皿である。181の底部には回転糸切り痕が観察される。186は須恵器のすり鉢である。

#### 4. 石器(第112～121図)

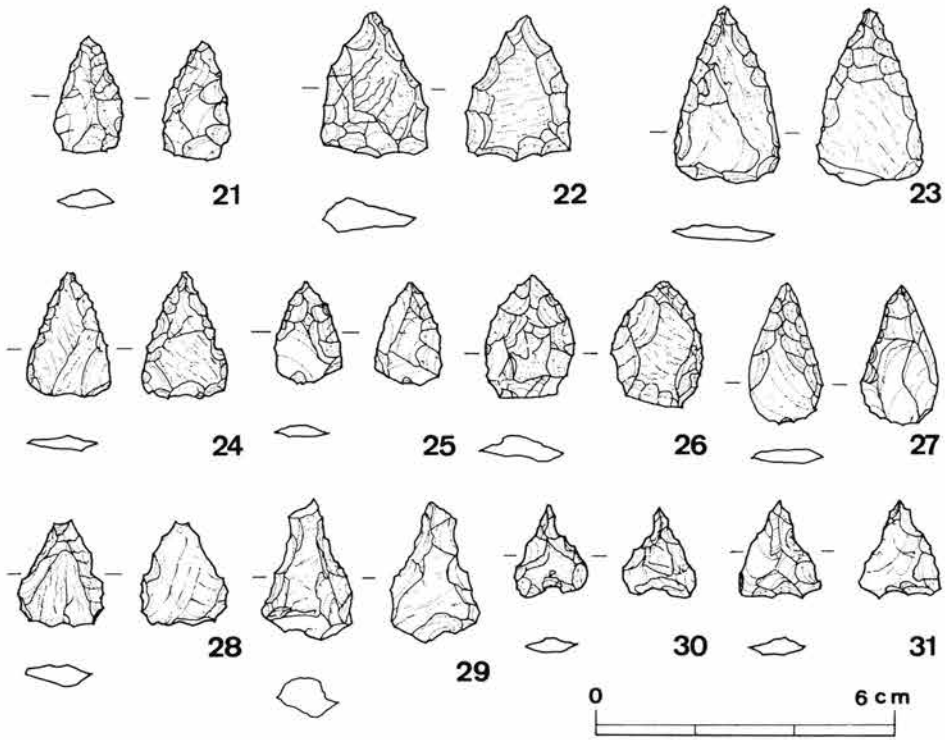
この遺跡で出土した石器は、一部例外はあるが、遺構出土のものも、包含層出土のものも石器の項でまとめて記述する。<sup>(註15)</sup>

##### 打製石鏃(第112・113図1～31)

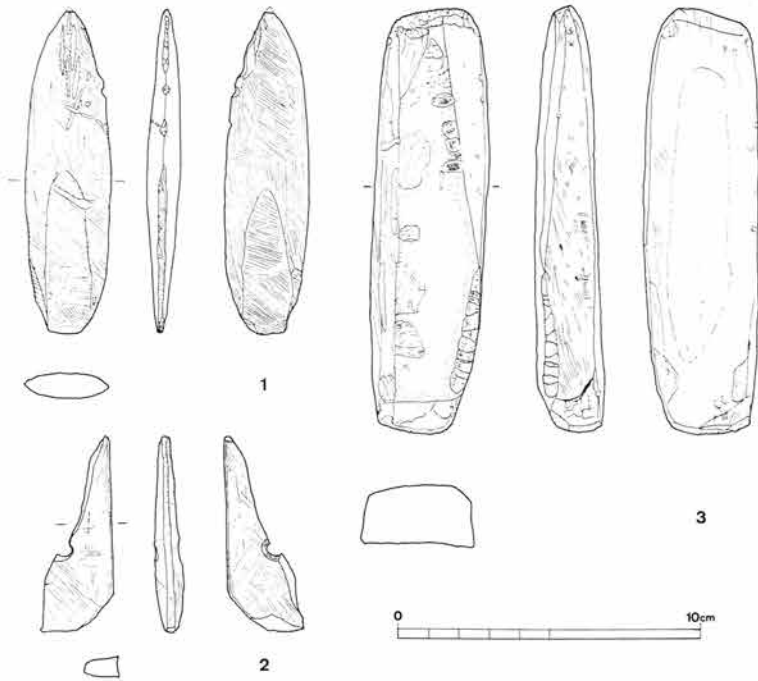
これらの石鏃は茎を持つものではなく、基辺の形状によって大きく3種類に分類することにする。つまり、基辺の形状がくぼむもの(凹基式)、基辺が直線的なもの(平基式)、基辺に丸みのあるもの(円基式)である。凹基式石鏃に分類されるものは、1～15である。側辺がやや内湾気味のもの(1・2・4・9・10)と、外湾気味のものがある。これらの石鏃の最大幅は、すべて基辺にある。平基式石鏃に分類されるものは、16～21である。側辺は直線的なものが少なく、外湾、あるいは内湾するものが多い。これらの石鏃の最大幅は、すべて基辺にある。円基式石鏃に分類されるものは、22～27である。基辺が明らかに丸くなっているものは少ない(27)。側辺は外湾気味である。石鏃の最大幅は、26を除いてすべて基辺にある。26の最大幅は中央部にある。28～31は未製品、または粗略品と考えられるものである。特に、29は両面に細かな剥離面が少なく、中央部には自然面が残るものである。



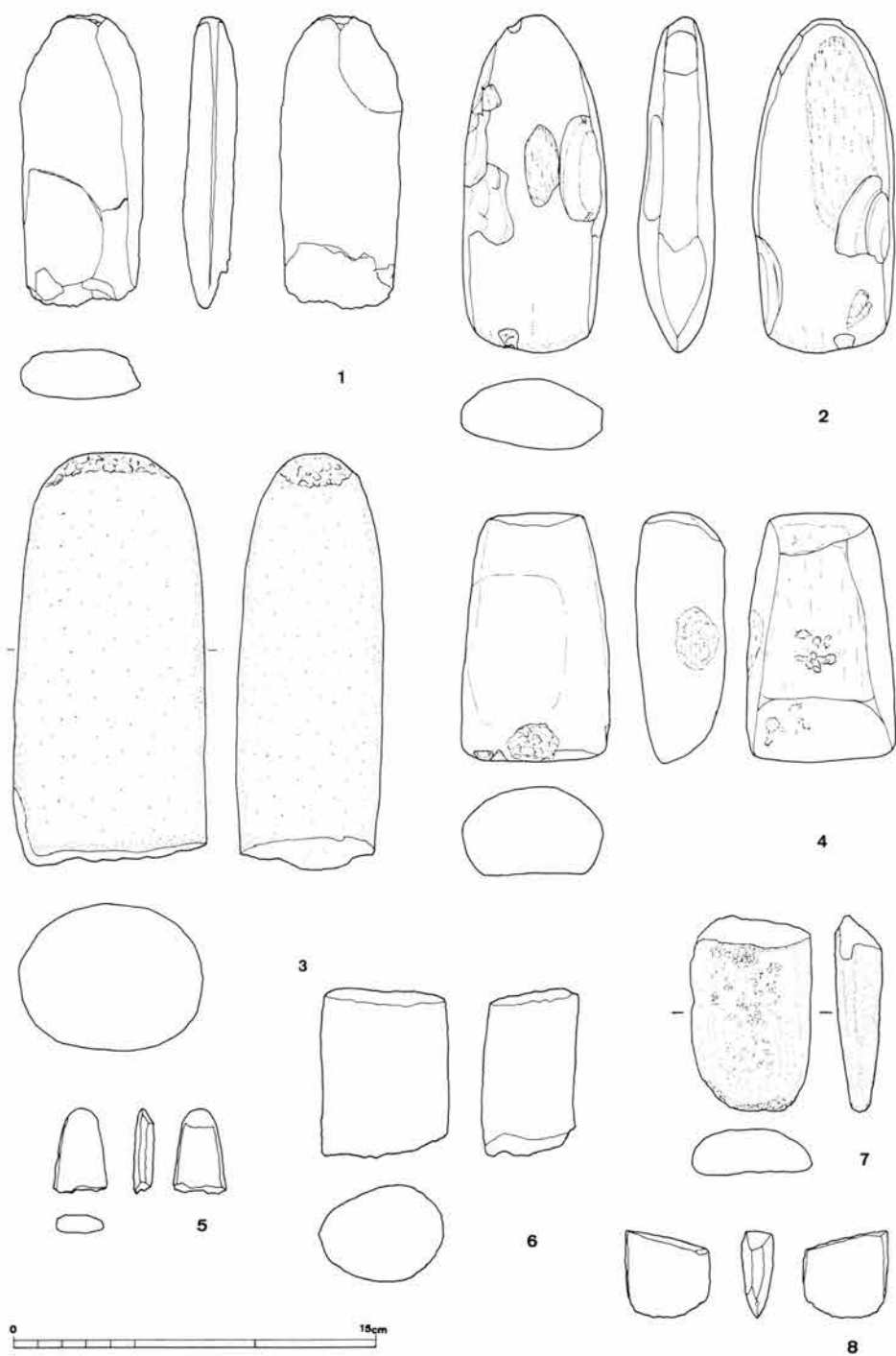
第112図 石 鏃 実 測 図 (1)



第113図 石鏃実測図 (2)



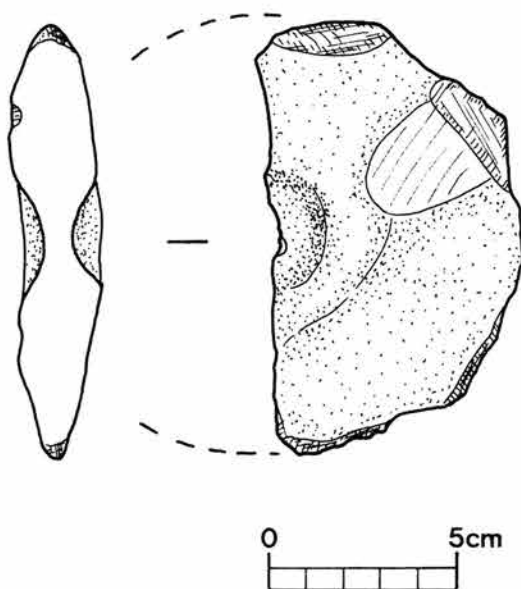
第114図 磨製石器類実測図



第115図 石斧類実測図

**磨製石器類(第114図1~3, 第115図8)**

1・3は磨製の石剣である。石剣1は鉄剣形石剣である。石材は粘板岩と考えられる。先端部が欠損しているが、全体にいいねいに研磨されている。刃部は刃が落ちていて鋭利でない部分がある。また中央部から下の周縁部は、刃を落とすように鋭利な部分をなくしている。また平坦な両面も下半部は面取りをしている。石剣3は細片であるが、恐らく鉄剣形石剣と考えられるものである。3は全面のかなりの部分を研磨されたものである。形態から砥石の可能性もあるが、端部に剝離痕



第116図 環状石斧実測図

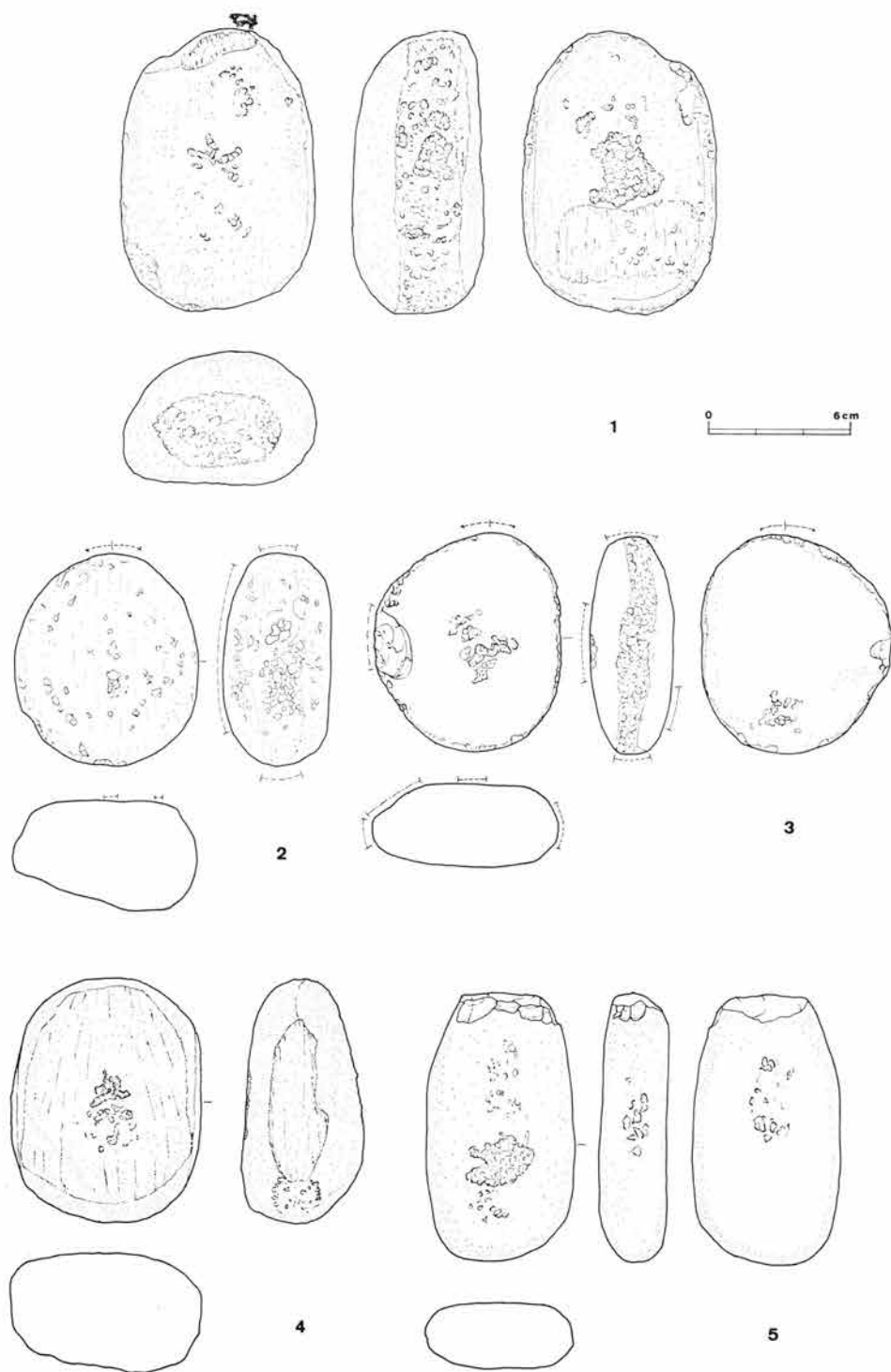
が見られることを考え、磨製石製品の未製品と考える。第115図の8は細片であり、詳細は不明であるが、石剣または磨製石鏃の茎の可能性が考えられる。

**磨製石斧(第115図1~4・6~8, 第116図)**

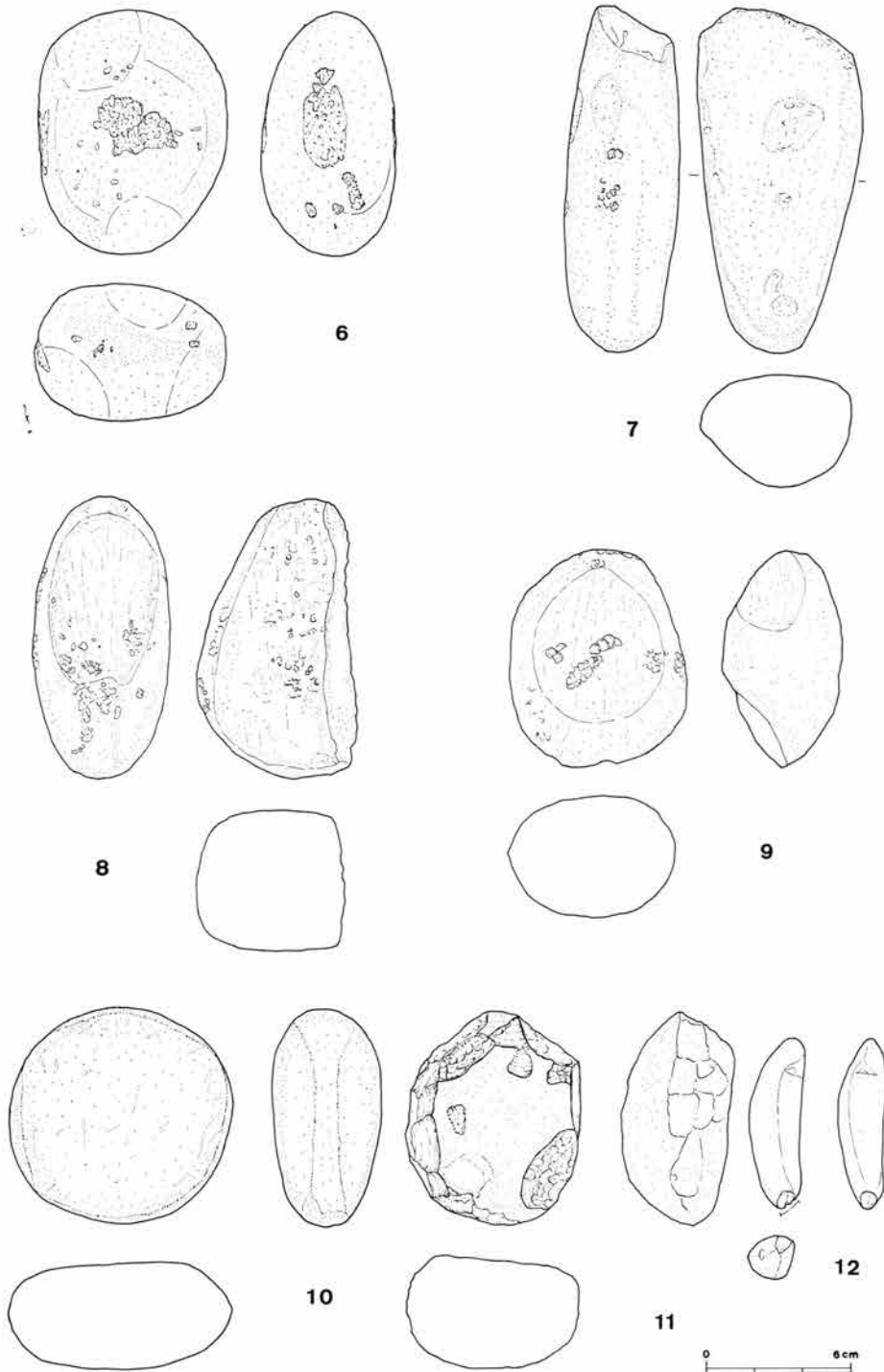
磨製石斧には、太型蛤刃石斧(3・6)、柱状片刃石斧(4)、扁平両刃石斧(1・2・7・8)、環状石斧(第116図)がある。扁平両刃石斧2は、断面楕円形のもので、やや扁平な柱状を呈するものである。側面からみると中央部が内湾気味なのがわかる。太型蛤刃石斧3・6は断面円形のものである。3は、刃部を欠くが非常に大型のものである。頂部には敲打痕がある。6は頂部・刃部とも欠くが、石斧と推測されるものである。柱状片刃石斧4は、方形に近い断面形をもった身に片刃をつけたものである。刃部には剝離痕が認められる。扁平両刃石斧1は刃部が破損しており、頂部にも欠損部分が見られる。扁平両刃石斧7は、断面扁平な円形を呈するもので刃部は鋭利な状態ではない。刃部は使用痕が認められる。8は、小型の扁平両刃石斧である。刃部は蛤刃状である。環状石斧(第116図)は製作途上で半截したものか、未製品である。刃部もでき上がっておらず、中央部の円孔も貫通していない。両面からの穿孔途中である。

**敲石類石製品(第117図1~5, 第118図6~12, 第119図13~18, 第120図19~23)**

これらの敲石類は、砂岩などの転礫を素材としたものと思われる。握り拳大の球形のものや板状のものがある。剝離面やあばた痕が認められる。敲石として使用したもの他に、線条痕状の使用痕が認められ、磨石として使用したものも認められる。

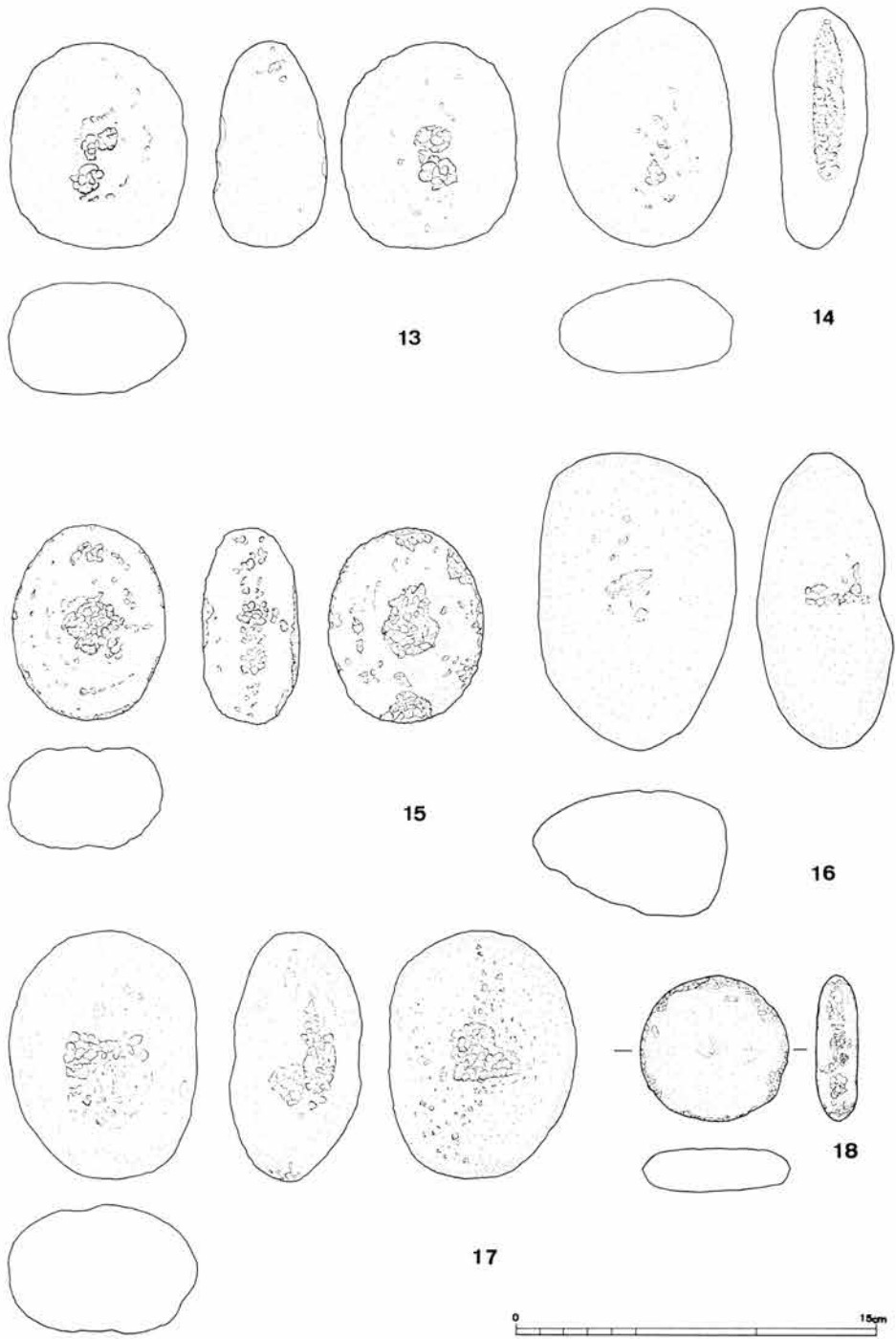


第117図 敲石類実測図 (1)

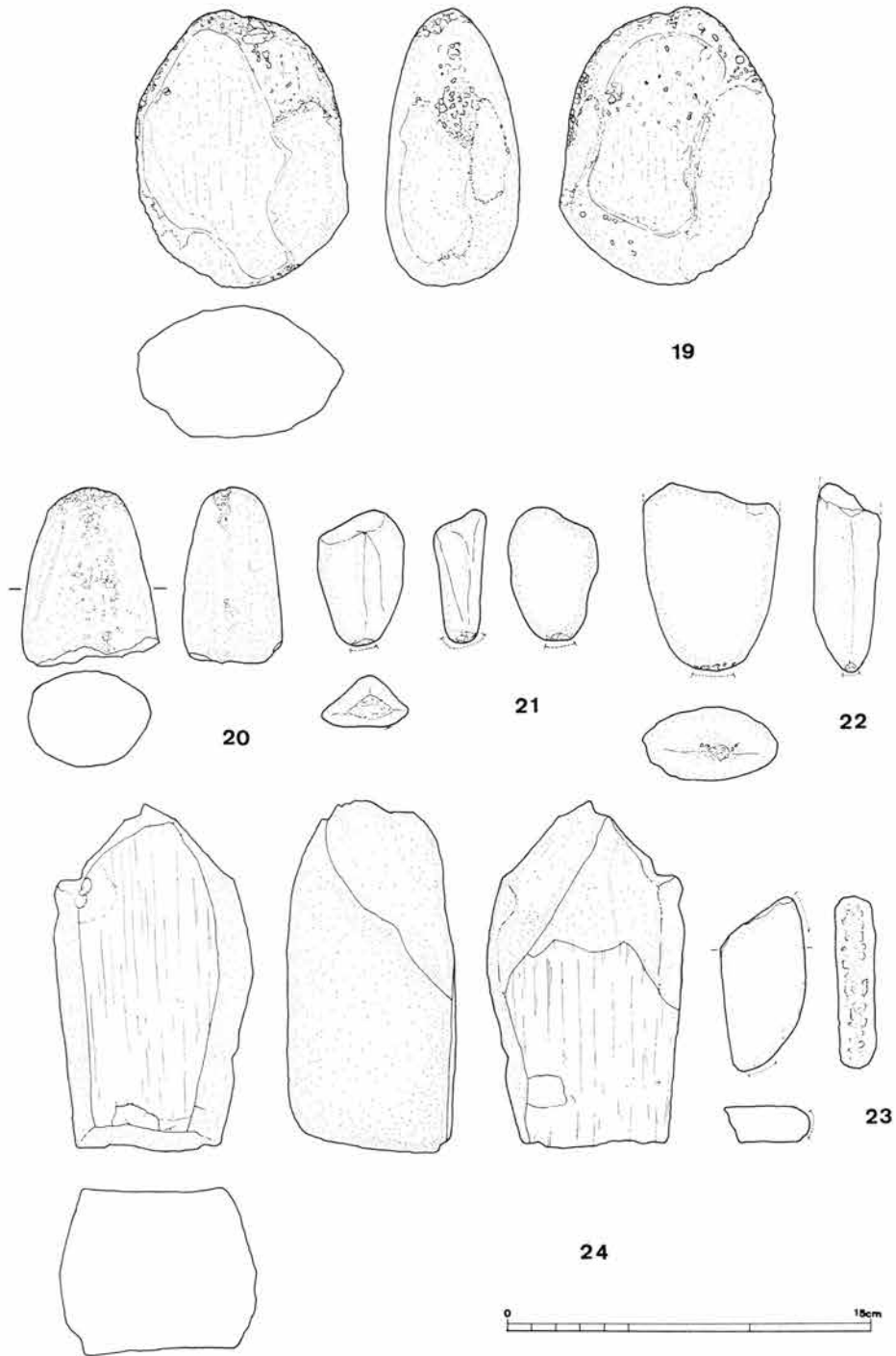


第118圖 敲石類實測圖(2)

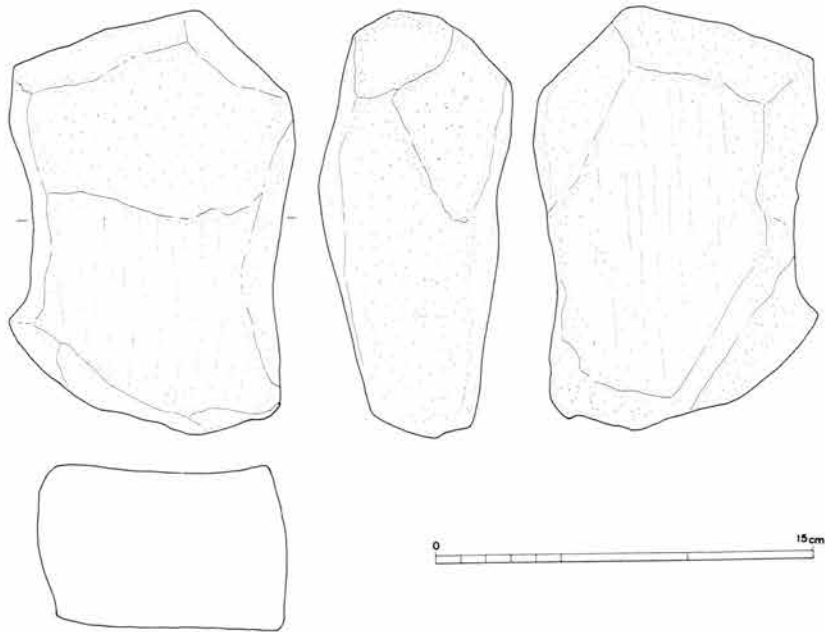




第119図 敲石類実測図(3)



第120図 敲石類実測図(4)



第121図 石皿実測図

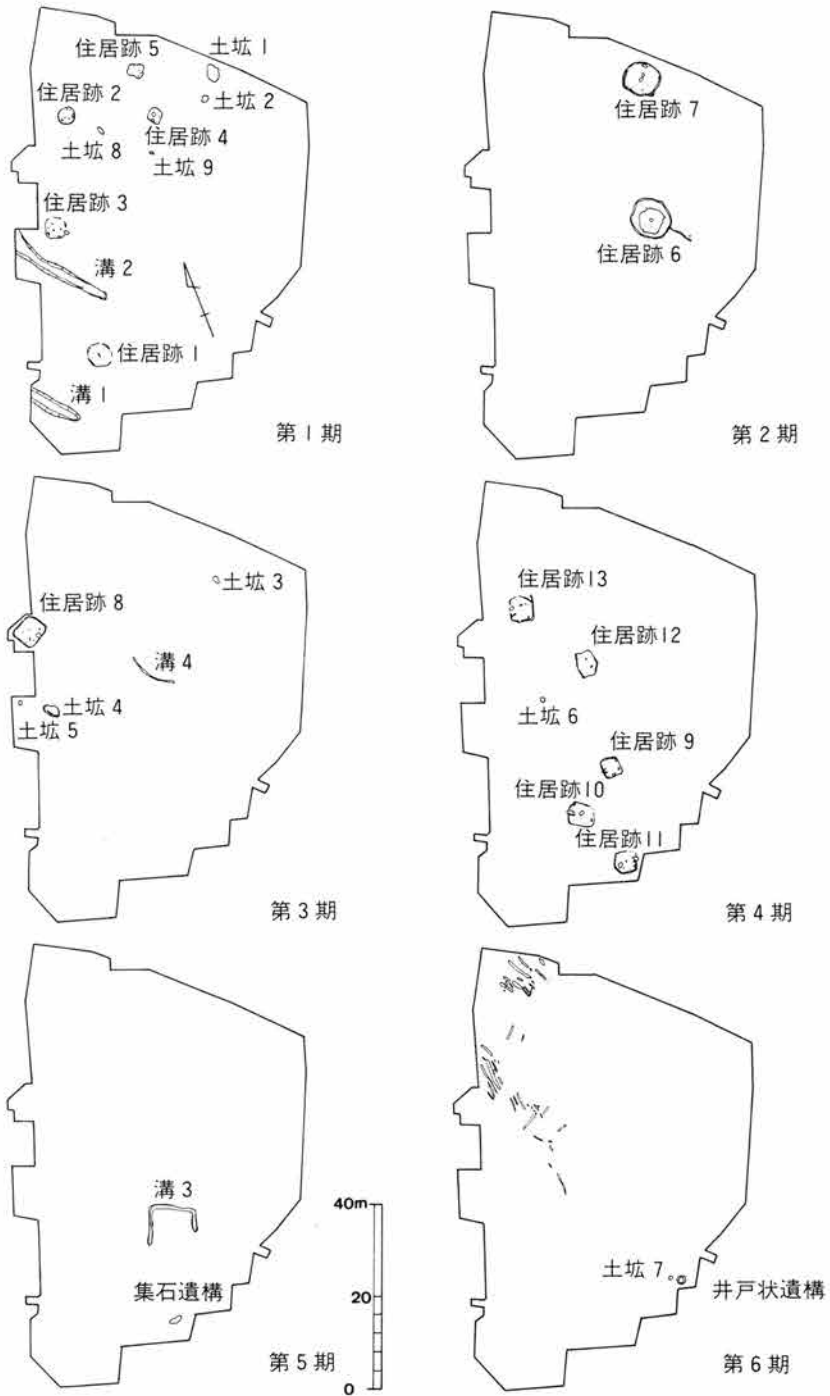
石皿(第120図24, 第121図)

平面形が五角形の角礫を研磨台に使用したものである。両面を使用しており、両面ともくぼんでいる。線條痕状の使用痕が観察される。第121図のものも平面形が五角形の角礫を研磨台に使用したものである。広い面の両面が非常によく使用されたものである。

5. 小 結—奥谷西遺跡の変遷

今回の調査では、弥生時代から中・近世に至る複数の時期の遺構・遺物が検出され、非常に大きな成果があったといえる。この成果は、一連の近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査と同様に、福知山市は勿論のこと、京都府北部における研究に大きな寄与を果たすものといえる。特に、広い範囲にわたる集落跡のまとまった調査は、これまで少なかっただけに、貴重なものであろう。しかし、各資料は多くの示唆を含むものだけに検討課題も多い。今後、各方面から検討されることを期待して、この報告では、遺跡の変遷を追いつながり問題点を指摘しつつ整理して、小結にかえたい。

以下、時期幅はそれぞれ不釣合いではあるが、奥谷西遺跡の変遷を大きく6期に分けて述べていきたい。



第122図 遺構変遷図

### 第1期(弥生時代中期後半・第Ⅳ様式併行期)

当地の本格的な利用が始まる時期で、これ以前(弥生時代中期前半)に属する遺構は当地周辺では見つかっていない。この時期に当たるものには、溝1・2、竪穴式住居跡1～5、土坑1・2・9等である。

#### 溝について

この遺跡からは、大溝が2条検出されたが、いずれもこの第1期に属するものである。溝1は、台地の南西端部に穿たれたものである。調査範囲の関係から溝の西端については不明ではあるが、おおむね77mの等高線を中心に、台地を取り巻くように溝が東側にのびて行くことが、地形観察から確認される。このことから、この溝はいわゆる弥生時代の集落において集落を囲む形で掘削される環濠と同様のものと考えられる。ただし、この溝の場合は、溝の東端は台地の端まで至らず、途中で掘削が終えられている。また、遺跡の東側から北側にかけては溝は掘削されておらず、環状を全く呈していない。その原因については、この遺跡の立地条件が大きく作用したのと考えられる。この遺跡の東側は、この台地が派生する丘陵がそびえている。また北側は小さな地形の窪みを経てケシケ谷遺跡に至る。こうした要因が、溝を穿って全周を区画する必要性を認めなかったからと考えられる。こうしたことから、あるいは条溝としたほうがよいのかもしれない。溝1と平行に穿たれる溝2の性格については、まず第1に内濠という可能性も考えられるが、調査地外西側が全く未確認のため不明である。さらに、溝と同時期に比定できる竪穴式住居跡が、溝1と溝2の間で検出されており、単純に考えるなら内濠とはいえない。第2には、溝が時期的に変遷した結果とも考えられるが、溝1からは出土資料が少なく、細かく時期差を決定できないのでこれについても不明である。しかし、どちらの溝も弥生時代中期には属すると思われる、時期差を考えるとともごくわずかの期間と思われる。従って時期差は余り考える余地がないかも知れない。従って、第3の可能性が高いと思われるが、今後の検討が要される。

#### 竪穴式住居跡について

竪穴式住居跡1～5が、この時期に比定できる住居跡である。この時期のものは大変遺存状況が悪い。住居跡から出土する遺物も非常に少ない。従って、確実に時期を決定できないものもある。特に、竪穴式住居跡4・5は以前報告した概報では弥生時代後期の可能性が大きいものとしていたが、今回は住居内から出土した弥生土器の体部片や石鏃を見直し第1期に改めるものである。しかし、確定的根拠は乏しい。竪穴式住居跡4・5の性格については、住居跡としては極めて床面積が狭いもので、一般的な竪穴式住居跡とは異なるものであろう。奈良県「六条山遺跡」<sup>(注17)</sup>で報告された「方形竪穴遺構」とされるものと類似

したものとも考えられる。六条山遺跡の場合、柱穴・周溝を有するものであるが、床面積がきわめて狭いものであるので、上屋はきわめて簡素な造りの小屋のようなものであったと考えられている。本遺跡のものは、六条山遺跡のものより古い時期のもので、柱穴・周溝は検出されなかった。性格については、不明であるが、六条山同様簡素な上屋をもつ建物の遺構であったと思われる。竪穴式住居跡3も同様に出土遺物が乏しいが、土層等検出状況が竪穴式住居跡1等と同じであったため第1期とした。なお、京都府北部における弥生時代中期後半の方形を呈する竪穴式住居跡は、宮津市「日置遺跡」<sup>(注18)</sup>において検出されている。

#### 土塚について

この遺跡では柱穴状の土塚を含めると、非常に数多くの土塚が検出された。しかし、遺物が出土したものはごくわずかである。この時期に比定されるものには、土塚1・2・8・9がある。土塚1はいわゆる焼土塚である。この台地の平坦面北端部に位置するものである。高地性集落と関連して「のろし台」と捉えられることも考えられるものである。しかし、こうした土塚については種々の仮説があり、本例も比較的多くの土器片が出土した以外全く用途を決定させるものはない。土塚2・8・9については、性格は不明であるが、土塚墓である可能性が想像される。この他にも、調査地の北部を中心に、直径1m前後の楕円形を呈する土塚がいくつかある。これらは、全く遺物が出土しないものがほとんどで、またこの時期以外のものである可能性も当然あり、性格については全く不明であるが、上述の土塚と同様なものの可能性が想像できる。

#### 遺物について

この時期の遺物は、畿内第Ⅲ様式新から第Ⅳ様式併行期のものである。しかも、兵庫県播磨地方の土器と類似するものである。これまでに指摘されているように、加古川一竹田川一土師川ルートという水系が交流に大きな役割を果たしたことが窺える資料である。また、敲石類や石斧・石鏃など石器類もこの時期の所産のものが大多数と考えられる。

### 第2期(弥生時代後期・第Ⅴ様式併行期)

#### 竪穴式住居跡について

竪穴式住居跡6・7がこの時期に属するものである。この時期の竪穴式住居跡は、第1期の住居跡と比較して大型化する。竪穴式住居跡6は、平面形が六角形のもので、周溝から突き出るように排水溝が南東方向にのびるものである。中央部には楕円形の土塚を有する。このようにこの住居跡6は他のものに比べ特徴的であるが、さらに興味深いのは床面のかかなりの部分が不正形に一端掘り窪めてあったことである。これは、中央土塚があるこ

とても明らかのように、住居跡を使用中には埋めもどされていたもので、いわゆるベッド状の様相を呈しているものではないと考えられる。このような特徴的な遺構は、静岡県富士宮市「滝戸遺跡」<sup>(注20)</sup>の概報に「弥生期に遡る住居址床面の二重構造」という報告があり、また神奈川県平塚市「向原遺跡」<sup>(注21)</sup>の報告の中で「住居址の掘り方」という項目で、比較的まとまって触れられている。「向原遺跡」の報告では、こうした掘形を持つものが、関東・東海地方を中心に多くの遺跡で複数の時期にまたがって検出されていることが紹介され、性格については、「住居跡を構築する際掘り方を掘って貼り床行う工程」と考えられている。また掘形は、5種に形態分類されている。さらに、静岡県南伊豆町「日詰遺跡」<sup>(注22)</sup>の概報には、「床面下の住居掘り方とも呼ぶべき掘り方」と称し、大きく3種あることを指摘されている。それは、「1住居平面の大きさそのままに掘り込んでいるもの、2住居の縁に近い部分のある程度の幅で掘り込んでいるもの、3住居の中央部のみを円形に掘り込んでいるもの等」である。性格については、「建築するべき住居の平面形に合わせ最初に深く掘り込んだ後、炭・焼土等を混えて埋め戻し、その上に床を作るものである」とある。またこれらの形態の差が何に基づくものかは、「不明」とされる。この竪穴式住居跡6の場合も、これらで述べられているものと同様の性格のものと考えられる。住居跡の「掘形」という呼称からも窺えるように、住居跡構築の際の竪穴掘削時に掘り込んだ跡と考えられる。この掘形は、建築工程の結果生まれただけのものなのか、何か用途があったのかは不明である。しかし、用途があったとしたら、以下のことと思われる。それは削り出された床面が粘土質であるのに対して、埋め戻されたところは砂質土であるので、こうすることで床面の水はけがよくなるということだと思われる。竪穴式住居跡7も大型の円形を呈するものである。中央部では円形の土壇が2個検出された。こうした土壇は、鳥取県青木遺跡<sup>(注23)</sup>で「特殊ピット」と報告されているものと同様のものであろう。性格については「青木遺跡Ⅲ」においては祭祀の遺構である可能性が指摘されている。しかし、形状から推定すると支柱を埋め込んだ柱穴の可能性が高い。また、東側の柱穴が平行に2本拡張されている。

#### 遺物について

第2期の遺物は、畿内第V様式併行期のものである。さらに細分して考えるなら、第V様式後半期に併行するものと思われる。福知山市内における弥生時代後期の遺跡は、近舞線関係遺跡以外には、牧川・由良川流域に位置する、豊富谷遺跡<sup>(注24)</sup>・半田遺跡<sup>(注25)</sup>・茶臼山遺跡<sup>(注26)</sup>・石本遺跡<sup>(注27)</sup>などが知られる。この内、半田遺跡<sup>(注28)</sup>・石本遺跡<sup>(注29)</sup>の報告を見ると、この時期の土器様相には、いずれもいわゆる丹後系土器とされるものが含まれている。(代表的なものには、頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁部を複合口縁形にし、その外面に擬凹線を巡らせる甕がある。)しかし、本遺跡のこの時期には、あまりに少ない土器数ではあるが、全

くこうした丹後系といえる土器が含まれていないことは注目される。また、タタキメを持つ甕も全く出土しなかった。

### 第3期(古墳時代前期・庄内式～布留式併行期)

第3期に属する遺構は、竪穴式住居跡8・土塚3～5・溝4などがある。

#### 竪穴式住居跡について

竪穴式住居跡8は方形のものである。この住居跡からは時期決定できる良好な遺物が全く出土せず、正確には第3期に区分できない。しかし、この住居跡の特徴的なものに住居跡の南辺の壁際に設けられていたいわゆる「特殊ピット(方形で二段)」がある。この「特殊ピット」については、福知山市に隣接する綾部市青野西遺跡<sup>(注30)</sup>の報告において若干触られている。その報告によると、青野西遺跡においても鳥取県青木遺跡<sup>(注31)</sup>において報告された「特殊ピット」の変遷とはほぼ完璧に一致することが確認されている。すなわち、「特殊ピット」は、床面中央楕円形(弥生中期～後期前半)→中央方形二段(弥生後期後半～終末)→壁際方形二段(古墳初頭・報告書のV・VI期)と時期的にだいたい一致するということである。また、竪穴式住居跡の形態の変遷についても述べられているが、この形態変遷も奥谷西遺跡の竪穴式住居跡6・7から8への変遷に合致している。こうしたことから、奥谷西遺跡の竪穴式住居跡8のような方形で「特殊ピット」を有するものは、当地の住居跡の形態変遷も近隣の青野西遺跡<sup>(注32)</sup>と大差はないものと推測され、この住居跡8は庄内式併行期にあたるものと考えられる。

#### 土塚について

この時期に属する主な土塚は3遺構である。この内、土塚4については、時期を明確にできる遺物がなく、検出状況からの推定である。これらの土塚の性格についても、第1期の土塚のところで述べたように明らかなことは不明である。ただし、土塚3は一気に埋められたという点や土塚5では、小型器台の脚とともに勾玉が出土しており、より祭祀的なまたは埋葬施設の性格を有した可能性があるとも考えられる。

#### 遺物について

遺物の数は非常に少量である。また明らかに庄内式併行期と考えられるものは全く出土していない。

### 第4期(古墳時代後期・陶邑TK47前後)<sup>(注33) (注34)</sup>

第4期に属する主な遺構は、竪穴式住居跡9・10・11・12・13、土塚などである。



### 竪穴式住居跡について

この時期は再度この地が積極的に利用される時である。古墳時代後期の住居は、造り付けのカマドを有しているものも多い。当地においても、遺存状況のよい4基(住居跡13以外)のうち3基までが、造り付けのカマドを有していた。さらに注目されるのは、これら3基の竪穴式住居跡は、すべて住居跡中央部に焼土部があることである。この焼土部は炉跡と考えられ、カマドとは別に炉により暖房や明かりの確保をしていたものであろう。カマドの造り付けられた位置はすべて壁際中央付近であるが、置かれた辺は東辺1・西辺2の内訳である。また、この3基は、カマドのある対辺にいずれも土壇を有している。以上見てきたように、この3基は極めて似かよった構造をしており、同様な時期に同様の技術を持って構築されたと考えられる(ただし、竪穴式住居跡9は、周溝を有する)。これらに比較して、竪穴式住居跡12は造り付けのカマドを有していない。だが、床面南東部には焼土部がある。この住居跡のみカマドを有さないことから単純に考えると、造り付けのカマドに代わって移動式の竈が使用され、その使用跡が東南部の焼土とも推察される。これまで京都府北部では、移動式の竈については断片的に知られるのみの状況であったが、移動式竈の土器片が福知山市の石本遺跡<sup>(注35)</sup>において比較的まとまって出土した。その時期は6世紀後半とされ、この地方においては比較的早い段階の導入期と総括されている。したがって、6世紀の前半に属する住居跡12が、竈の破片も出土していない状況で、移動式竈の使用を推測することは憶測にすぎないが、今後類例の増加を待って検討したい。また、住居跡の形態は長方形を呈しており、他のものとは異なる。竪穴式住居跡13については詳細は不明であり、この時期にしたのは、住居跡の形態が方形であること、焼土の位置がカマドを推察させることから第4期とした。

### 遺物について

福知山市においては、この時期の遺物はこれまであまり出土しておらず、特に住居跡からの出土は管見では初めての例と思われる。中でも比較的時期が明らかにされている須恵器とともに土師器が出土しており貴重な例となろう。当地は兵庫県丹波地域との交流を述べてきたが、この時期においても同様であると思われる。なお、加古川流域とはいえないが、兵庫県三田市・青野ダム建設に伴う発掘調査におけるAN-88(窯跡)<sup>(注37)</sup>から出土した須恵器は、同様な時期のものと思われるものがある。奥谷西遺跡近辺では同時期の窯跡は検出されておらず、単なる憶測ではあるが、こうした武庫川・篠山川地域からの交流の結果である可能性もまた考えてみる必要がある。

### 第5期(奈良時代～平安時代)

第5期に属する主な遺構は、溝3・集石遺構がある。

#### 溝について

遺構のところでも述べたように、この溝の性格や時期については不明である。時期に関しては第5期にしたが、堅穴式住居跡9の廃絶以降ではあるが、古墳時代後期の可能性も充分考えられる。溝の最下層からは、土師器・須恵器の細片が出土している。包含層からは、これらの遺物に加えて、緑釉陶器・瓦器の細片も出土している。

#### 遺物について

この時期の遺物は数点である。しかも、遺構にかかわる遺物は集石遺構の須恵器の壺と四耳壺だけである。9世紀の所産のものであろう。

### 第6期(中世)

この時期の主な遺構は土塚7・井戸状遺構である。また、いくつかの柱穴の中からも瓦器・土師器等の破片が出土している。この時期の出土遺物は12世紀後葉～13世紀前葉(大内城跡編年Ⅲ～Ⅳ期)の瓦器碗に代表される時期である。当地では遺跡の南側の台地に中世の当地方を代表する大内城跡が所在するが、すぐ隣の当地も深い関連があったものと推察される。特に、この時期は大内城が最も隆盛を極めた時期である。また同じく近舞線関係遺跡である宮遺跡<sup>(21.38)</sup>からも同時期の瓦器碗が出土しており、12世紀後葉～13世紀後葉は再び当遺跡周辺が活発に利用されたと考えられる。

(藤原 敏晃)

## (5) 洞楽寺北遺跡

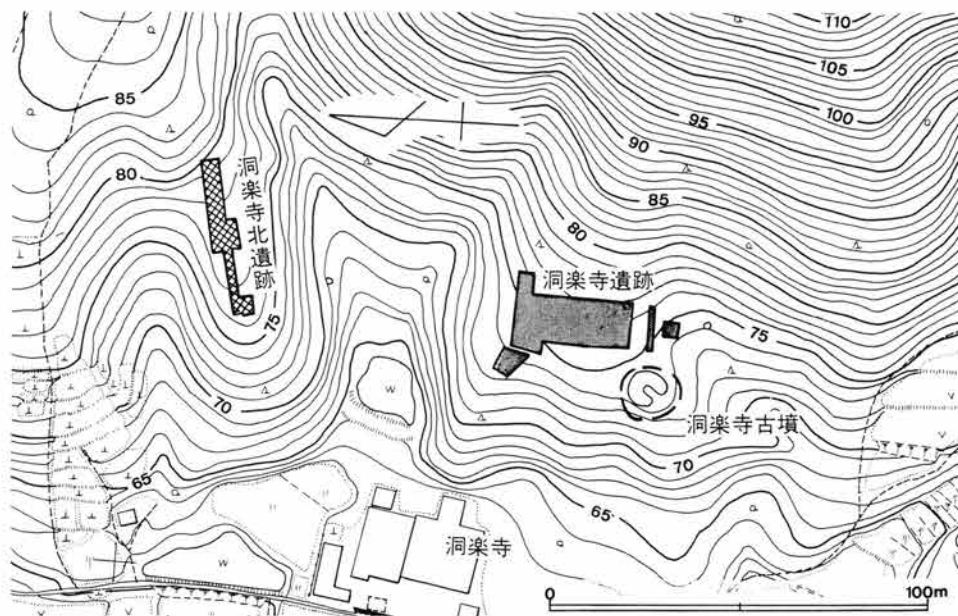
### 1. はじめに

洞楽寺北遺跡は、福知山市字大内小字坪田に所在し、洞楽寺古墳・洞楽寺遺跡のある台地と谷を一つ隔てた北側の丘陵上に位置する(第123図)。調査対象地の東側には平坦な丘陵地が広く開けており、そこからのびる舌状の細い丘陵が東から西へ緩やかに傾斜している(第124図)。この舌状にのびる丘陵の上の尾根筋には、幅10m程度の細い平坦面があり、その先端部に10m×10m程度の平坦地が階段状に形成されている(図版第46-1)。調査着手前には、封土の低い古墳、もしくは福知山市近辺の丹波地方や丹後地方に分布する方形台状墓が包蔵されているものと判断された。

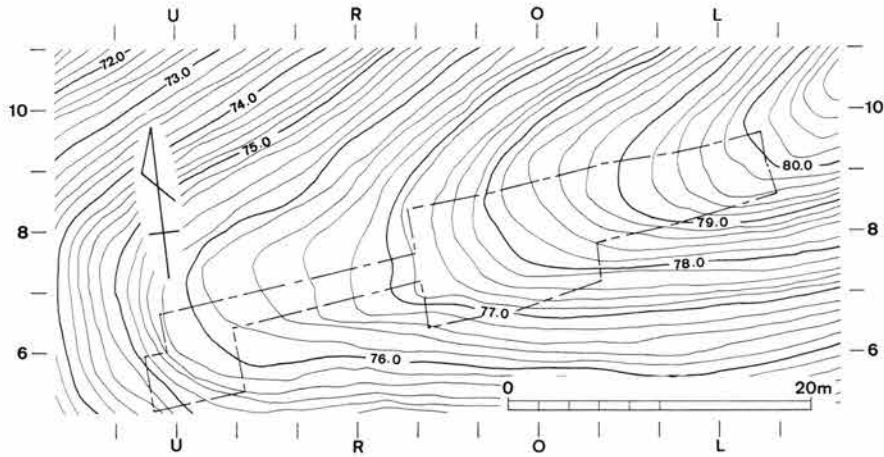
### 2. 調査経過

当遺跡は、洞楽寺遺跡やケンケ谷遺跡と同じく、昭和57年度の分布調査により発見された遺跡で、<sup>(注39)</sup>同年度内の試掘調査の後58年度に本調査を実施した。試掘時の尾根筋に設けたトレンチをもとにして、遺構の有無を確認しつつ、徐々にその調査範囲を広げた。

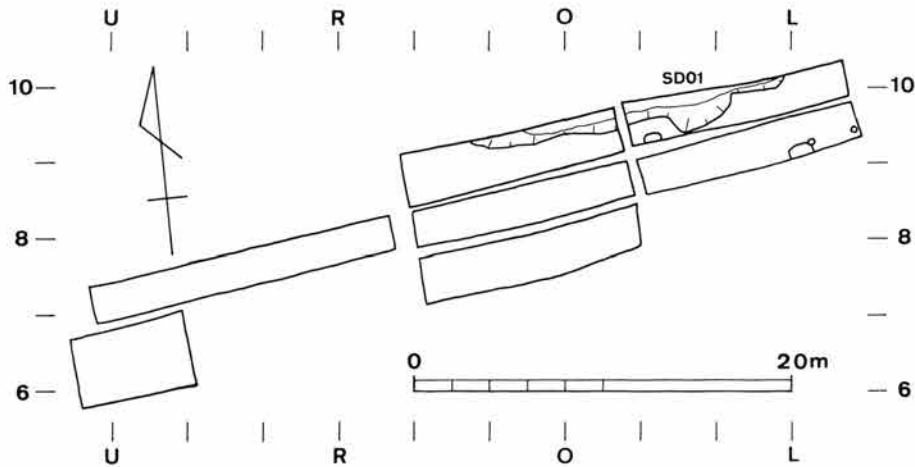
調査の地区割りは、洞楽寺古墳・洞楽寺遺跡の軸線を援用し、洞楽寺遺跡より北方位に約100mの距離を隔てる。



第123図 洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡トレンチ配置図



第124図 洞楽寺北遺跡地形図

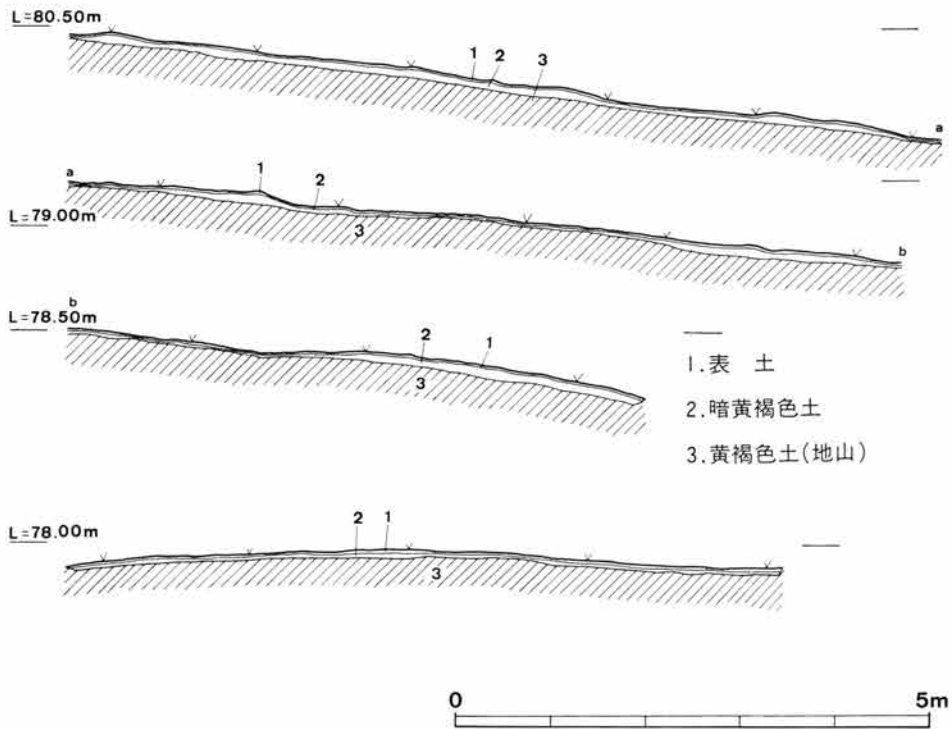


第125図 検出遺構平面図

### 3. 調査概要(第125・126図, 図版第46-2)

本遺跡の土層の層序は、表土—暗黄褐色土—黄褐色土(地山)で、表土下約10cmで地山に達する。遺構は調査地の東半部でのみ検出できた。墳丘墓と想定した丘陵先端部の段差は自然地形であった。検出遺構は、調査地東側で、東西方向の溝状遺構1条、ピット・土坑各2基を検出した。遺物は西端の平坦面の包含層で土師器2点が出土したのみである。遺構に伴う遺物の出土はない。出土遺物は小片であり、その時期・器形等は全くわからない。

検出遺構について、唯一推測できるのはSD01のみである。この溝は、埋土が黄褐色砂質土で排水を目的としたものと考えにくいこと、尾根筋に沿って検出したこと、調査対象地の東側に緩傾斜地が開けていることから、そこに至る「古道」と考えたい。その他に検出した土坑・ピットに関しては、全く不明である。



第126図 調査地土層図(上:東西方向,下:南北方向)

#### 4. 小 結

今回の調査では、遺跡の性格がわかる遺構・遺物は検出できなかった。先に触れたように、調査で検出したSD01は、限られた範囲の調査であるので、確言はできないが、東に広がる平坦地へ至る「道」と捉えられる。いわば、遺跡の西端に発掘調査の手を入れたものと解せられる。

(岩松 保)

## (6) 洞楽寺遺跡

## 1. はじめに

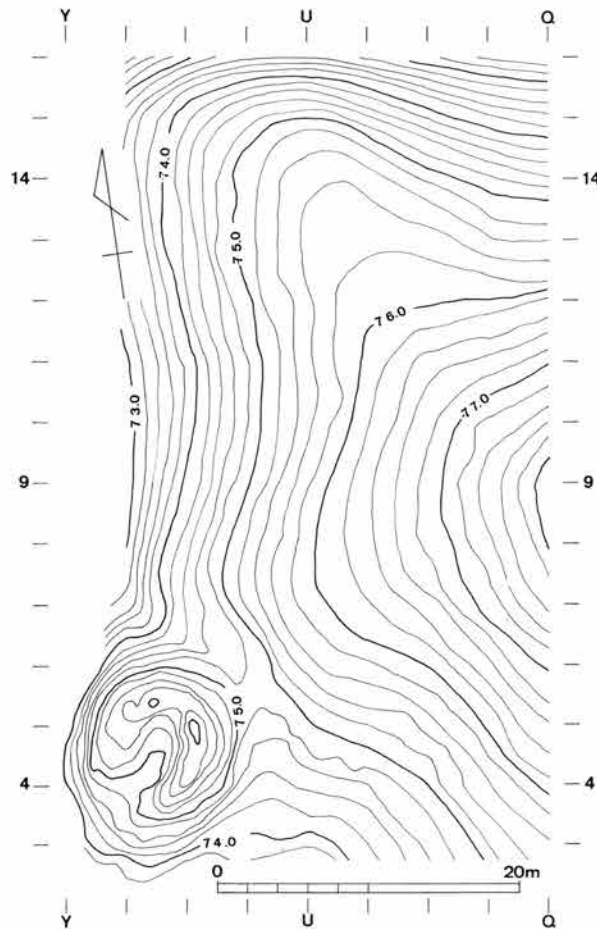
当遺跡は福知山市字大内小字坪田に所在する。竹田川とその支流である大内川との合流地点から大内川の約1km上流に位置する。大内川はその両側に狭隘な平野と河岸段丘を形成しており、大内川右岸の段丘より山手の丘陵上にある。この遺跡の下には、この遺跡名の由来となった曹洞宗洞楽寺が所在する。

当遺跡は東から西へ緩傾斜する東西約20m・南北約50mの丘陵上にある。同丘陵は西北と西南の2方向に尾根筋がのびているが、南の尾根筋の先端には径約15mの洞楽寺古墳(円墳)が築かれている(第127図、図版第47-1)。

## 2. 調査経過

当遺跡も洞楽寺北遺跡と同じく、昭和57年度の分布調査<sup>(注40)</sup>で発見された遺跡である。当初は、洞楽寺古墳と同じく古墳と推察されたが、同年度内の試掘調査の結果、集落跡と判明した。その結果を受け、58年度に本調査を実施した。

地区割りは、洞楽寺古墳の調査の際の方眼を援用し、4mの方形区画で地区割りした。東西のラインは数字、南北のラインはアルファベットでライン名を表示し、地区名は方眼の南東隅を構成する南北・東西ラインを用いて表わすものとした。調査の都合により、洞楽寺古墳の調査時の2



第127図 洞楽寺遺跡地形測量図

ラインを3ラインに、  
AラインをSラインと  
名称を変更して用い  
た。

検出した遺構は、堅  
穴式住居跡2、土壇7、  
溝状遺構1、落ち込み  
2である。調査面積  
は、約370m<sup>2</sup>である。

### 3. 調査概要

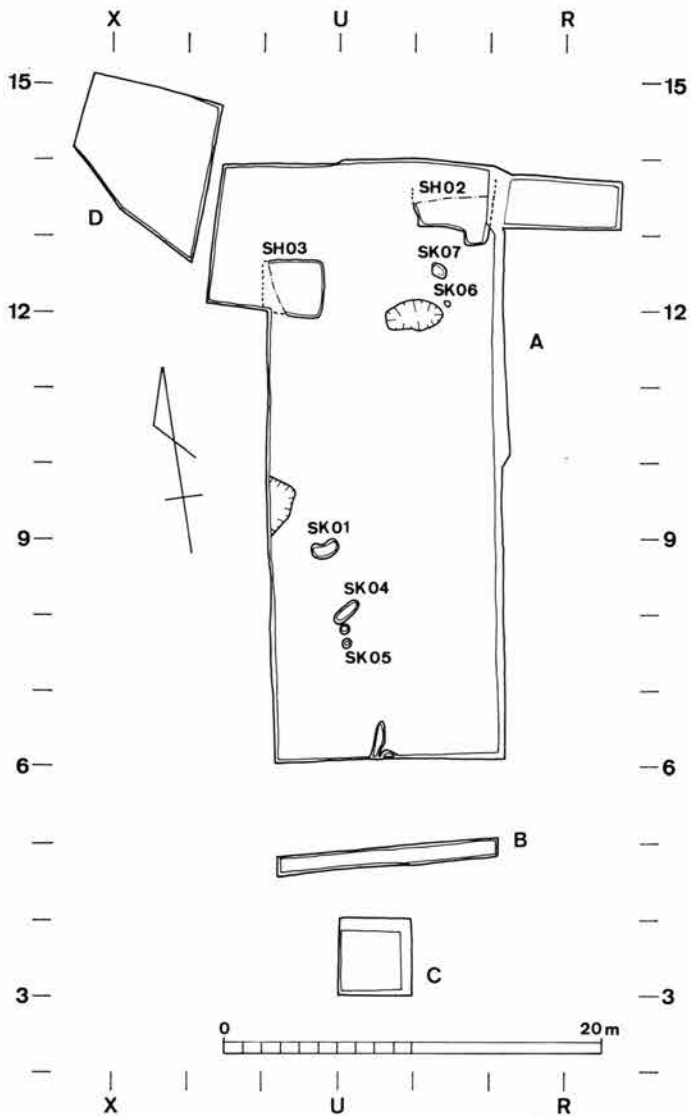
(第128～133図)

調査は4区に分けて  
行い、それぞれA～D  
のトレンチ名を付し  
た。A区は台地中央の  
平坦部に設けた。B区  
は洞楽寺古墳の東、C  
区はその南で、南側の  
尾根の傾斜がきつくな  
るところに設置した。  
D区は北側の尾根筋の  
傾斜が強く下り始める  
ところにある。

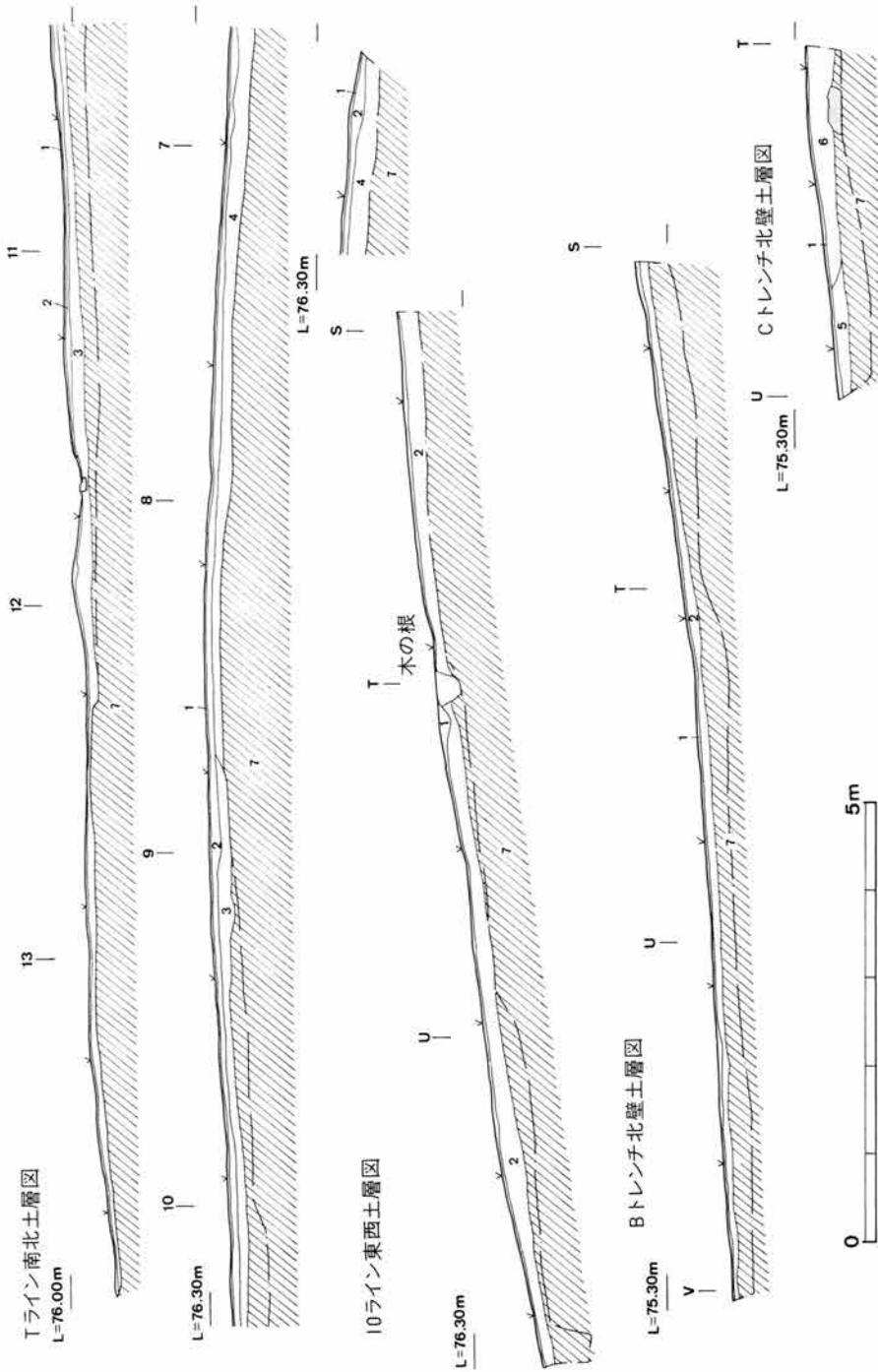
基本土層(A・D区)

は、表土(数cm)―暗黄褐色土(10～20cm)―黄褐色土(地山)であるが、B・C区では暗黄褐色土の下が砂礫層となる(第129図)。この層からの遺物の出土が全くないことから、地山の一種と考えた。遺構を検出したのはA区のみで、B・C区では遺構・遺物ともに検出しなかった(第128図)。D区は傾斜がやや急になることもあり、削平されたためか、遺物の出土はみだが、遺構はなかった。A区で検出した遺構をみていきたい。

SH02・03は、A区の北側で検出した。両住居跡の間隔は約6mで、住居の軸は一致している。ともに削平を受け、遺存状況は悪い。



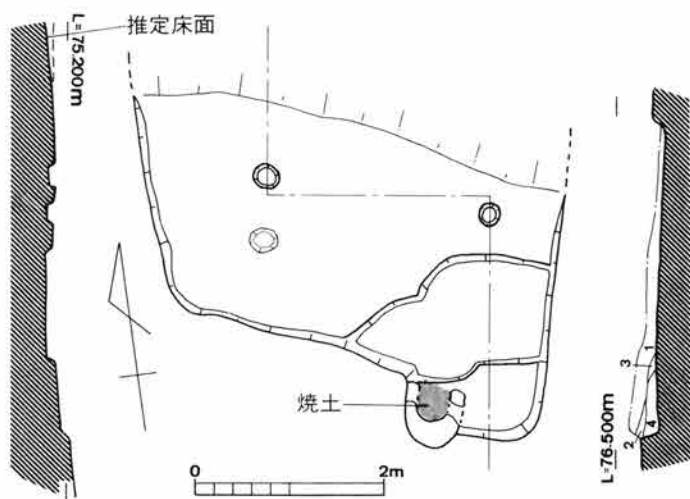
第128図 調査地検出遺構図



第129図 調査トレンチ土層実測図

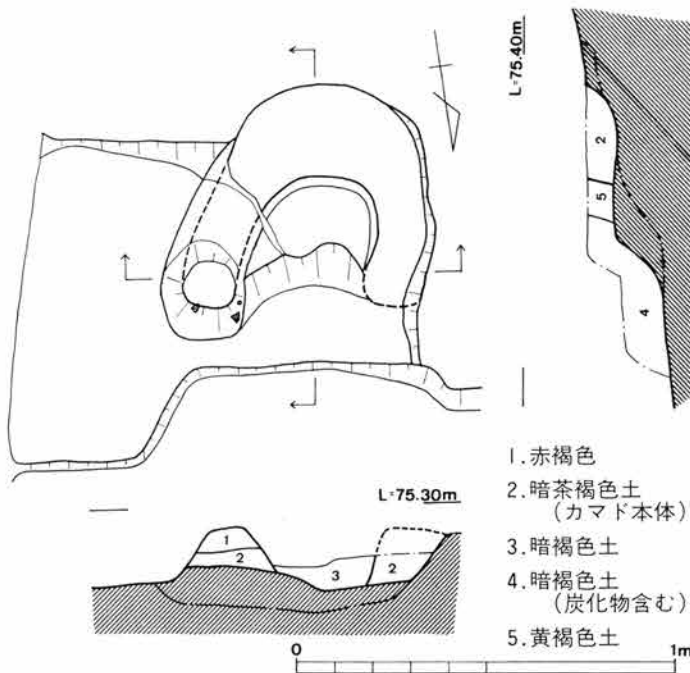
1: 表土, 2: 暗黄褐色土, 3: 暗褐色土, 4: 黄褐色土, 5: 褐色砂礫, 6: 黄褐色砂礫, 7: 地山





第130図 SH02 実測図

1: 暗茶褐色土 2: 黒褐色土 3: 暗褐色土 4: 黄褐色土  
(土層図は東辺付近の南北土層)



第131図 SH02カマド実測図

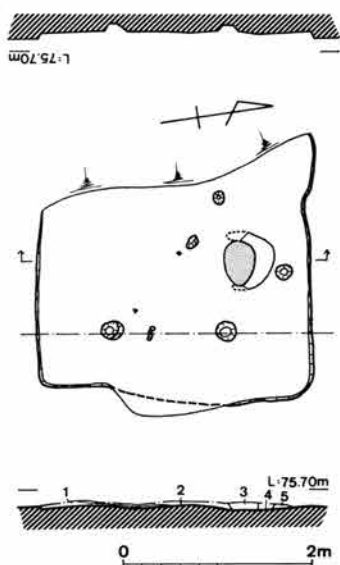
1. 赤褐色  
2. 暗茶褐色土 (カマド本体)  
3. 暗褐色土  
4. 暗褐色土 (炭化物含む)  
5. 黄褐色土

SH02は13S区で検出したもので、平面形は方形を呈する(第130図, 図版第48)。北半は削平を受けており、南北長は不明で、東西長は約4.5mを測る。検出高は最大で15cmを測る程度である。この住居の東南部には0.8m×1.4mの「張り出し」があり、この位置に竈を設けている。竈の焚き口部付近は、1m×2mにわたって、床面より約10cm深く掘り下げられている。柱穴は3か所で検出したが、いずれも径20cm・深さ10cm程度の小規模のものである。

SH03は西半が削平されているが、一辺2.9mの方形住居に復原できる(第132図, 図版第49)。検出高は最大で5cmと残り具合は極めて悪い。住居中央北部で竈跡と考える焼土の

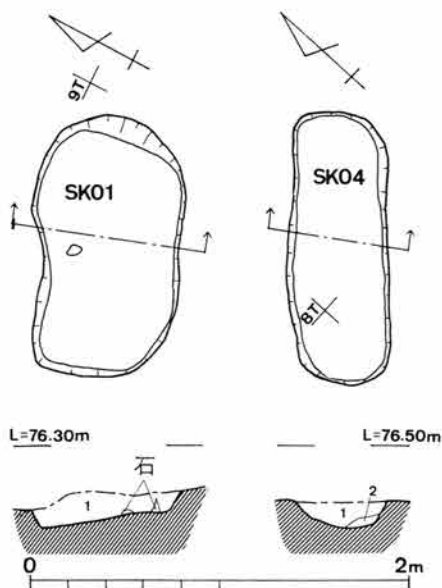
広がりを検出した。

SK01は8T区にあり、長辺136cm・短辺70cmの楕円形をしており、深さ25cmである。SK04は7T区で検出したもので、長辺145cm・短辺50cmの楕円形をしている。SK05は径40cm



第132図 SH03実測図

- 1: 暗黄褐色土 2: 暗褐色土  
3: 暗褐色土 4: 黄褐色土  
5: 淡褐色土



第133図 SK01・SK04 実測図

- 1: 暗黄褐色土 2: 黄褐色土

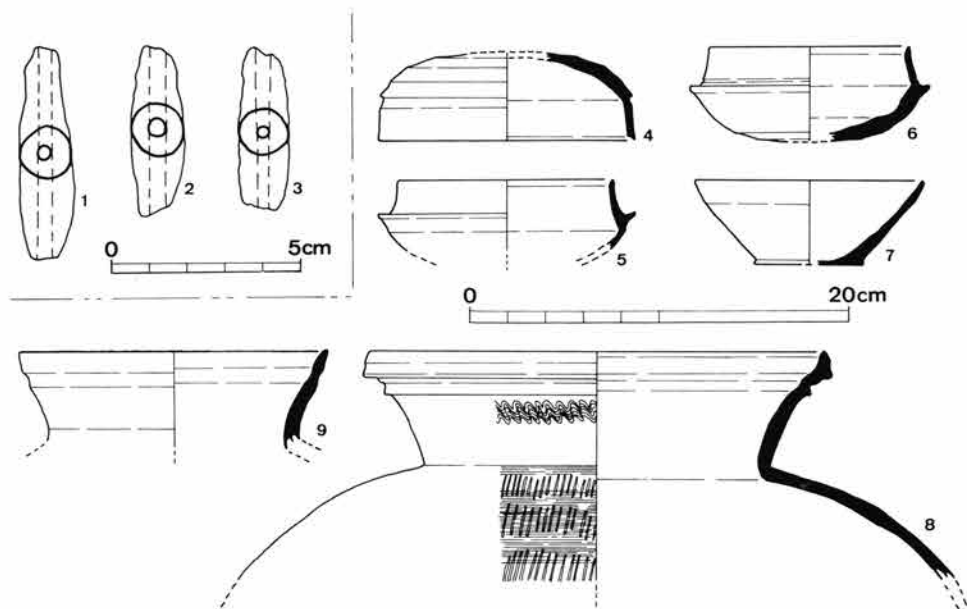
・深さ12cmで円形をしている。これらの土坑からは須恵器片が出土し、それらの遺物から、竪穴式住居跡と同じ時期のものと判断される(第133図)。

SK06は12S区で検出した。径20cmの円形をしており、検出した深さは5cmと浅い。坑内には炭化物が多く詰まっていた。時期を決定しうる遺物の出土はない。SK07は長辺85cm

・短辺60cm・深さ3cmの楕円形をしている。遺物の出土はない。

#### 4. 出土遺物(第134・135図, 図版第50)

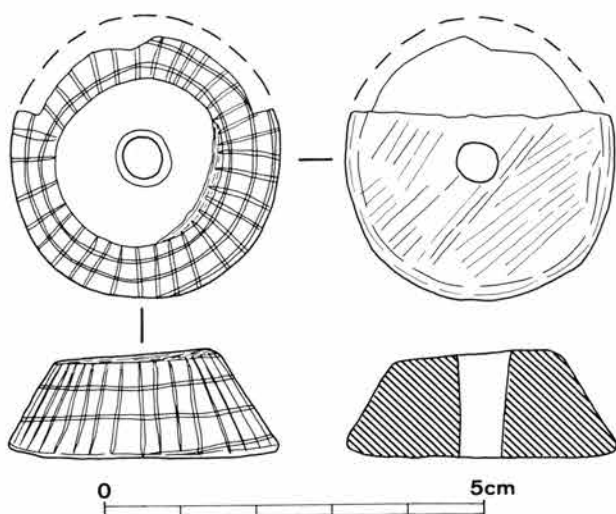
当遺跡の出土遺物には、須恵器・土師器・紡錘車・土錘がある。総数は整理用コンテナ・バットにして約5箱分である。第134図1～3は土錘で、長さ4.2～5.6cm、径1.3cmである。13T区を中心にみつがっている。4はSH02埋土中より出土した須恵器杯蓋で、復原口径13.5cm・同器高4.6cmである。色調は青灰色を呈している。天井部の約1/2を回転ヘラ削りで調整をしており、天井端部を強くナデて明瞭な稜をつくっている。SH02の床面で検出した杯身は小片で図化しえなかったが、この土器と同様の焼成・胎土をしている。5・6は須恵器杯身で、ともに立ち上がり部は比較的長く、やや内傾して上方にのび、端部はつまみ上げられ、内面に段を有する。受け部端は丸く終えている。5はSH03の埋土中から出土し、6は9U区の落ち込みより検出した。5はやや薄手のつくりで、復原口径11.4cm・器高(現存)3.8cmである。6は復原口径が10.5cm・同器高5.9cmである。7は須恵器の椀



第134図 洞楽寺遺跡出土遺物実測図

で、11・12S区の包含層より出土している。復原口径12.0cm・器高4.3cmで、底部は糸切り痕が見られる。8は須恵器甕で、復原口径24.2cmである。口縁に突帯が一条巡り、その下方に波状文が施文されている。体部外面は平行タタキメの上に横方向のカキメを施している。9は土師器甕で、復原口径16.4cmを測る。口縁部下方を内外面ともに強く横方向にナデているのが観察できるが、摩滅が著しく細かな調整は見て取れない。第135図はSH02床

面出土の紡錘車で、下部の約1/5が欠けている。上部径2.2cm・下部径3.6cm・高さ1.4cmで、外面には稚拙な印象を受ける格子文が刻まれている。滑石製である。



第135図 SH02内出土紡錘車実測図

### 5. 小 結

洞楽寺遺跡では古墳時代後期の集落跡が検出された。同台地上にある洞楽寺古墳と関連する遺構はなく、出

	杯 蓋	杯 身	
I	1	2	
II	3	4	
III	5	6	
IV	7	8	
V	9	10	
VI	11	12	13
VII	14	15	16
VIII	17	18	19
IX	20	21	22
X	23		

第136図 出土須恵器分類案

土遺物から見ても時期差が認められた。ここでは、近舞線関係遺跡で調査された古墳時代後期の遺跡・古墳に関して整理をしておきたい。

近舞線関係遺跡ではケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡で、洞楽寺遺跡とほぼ同時期の竪穴式住居跡を確認している。また、古墳は城ノ尾古墳・後青寺古墳・小屋ケ谷古墳・洞楽寺古墳

付表4 近舞線関係遺跡古墳時代遺跡消長表

		0	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
古墳	後青寺古墳		●									
	薬王寺古墳			●11 ●13 ●22								
	小屋ヶ谷古墳				— I —		— — —		— III —			
	洞楽寺古墳					— — —						
	城ノ尾古墳								— — —			
	男塚古墳				— — —							
集落	奥谷西遺跡	— — —										
	洞楽寺遺跡		— — —									
	ケシヶ谷遺跡			— — —								

・薬王寺古墳(群)の5か所が調査された。これらの遺跡・古墳から出土した須恵器の杯身・杯蓋を型的に並べたのが第136図である。分類基準については付表5にまとめた。この分類は純粋に型式学的な立場のものであり、一片の土器の出土で遺構・遺跡の先後関係を論じるものではない。実際の土器の使用にあっては、複数の型式にわたる場合があるので、どの範囲の型式が出土するかを見極めた上で、遺跡・遺構の先後関係をみていく必要がある。そうすることによって、この分類案が編年的な意義付けをもつものと理解する。この立場で、各遺跡から出土した杯身・杯蓋で集落・古墳の消長をまとめたのが、(付表4)である。また、六人部地域唯一の前方後円墳である男塚古墳(全長28m)で表採された須恵器が紹介されているので、併せて掲載する。<sup>(注41)</sup>男塚古墳は、ケシヶ谷遺跡の丘陵の先端に築かれており、ケシヶ谷遺跡の西方約100m、標高差で約15m下方に位置している。

まず古墳築造の先後関係を見てみよう。築造時期を古→新に並べると、後青寺古墳→薬王寺古墳(群)→男塚古墳・小屋ヶ谷古墳→洞楽寺古墳→城ノ尾古墳となる。後青寺古墳・薬王寺古墳は、埋葬主体が木棺直葬ないし箱式石棺を内部主体とするので、埋葬主体個々の副葬品に見る土器型式の差異はほとんどない。しかし、男塚古墳築造以降は、各古墳が横穴式石室を内部主体とし、各古墳の追葬が長期間にわたるため、多くの型式の須恵器が出土している。木棺直葬・箱式石棺の内部主体と横穴式石室墳とは時期的に重複して造られていない。

集落跡については、奥谷西遺跡が複数の型式にわたる土器が出土するほかは、丘陵上の後期の集落は短期間にその活動を終えている。すべて、丘陵上に立地し、2～3棟以下の少ない竪穴式住居で集落を形成している。先後関係でみると、奥谷西遺跡の廃絶の直後に、すぐ隣のケシヶ谷遺跡で竪穴式住居が作られている。いわば、人間の移住が見て取れる。しかし、奥谷西遺跡の全家族が移住したものではなく、そのうちの一家族のみが移り住み、

他は低位の地に居を構えたものといえる。

この要因として、集落と古墳の位置関係の間に、「集落は古墳よりも低位に位置しなければならぬ」という原理が働いていたのではないか。ケンケ谷遺跡と男塚古墳との位置関係については先述したが、集落の途絶後に男塚古墳が造られている。また、洞楽寺遺跡と後青寺古墳は同型式の須恵器が出土するが、洞楽寺遺跡ではⅠ型式に続く須恵器が出土しないので、おそらくは、後青寺古墳の築営を契機として集落が廃絶したのであろう。しかも、これらの古墳を築造し追葬している時期には、再び丘陵の上に住居を構えることがなかった。古墳築造に際しては墓域の選定が行われるが、それはとりもなおさず、集落立地の制限を伴っていたといえる。そのため、このような現象が見られるのであろう。しかし、後青寺古墳と奥谷西遺跡の立地は同程度の高さであるにも関わらず、時期的に重なるので、古墳といっても横穴式石室を採用したものに限って、さきの原則が守られたのではないか。

近舞線関係遺跡では同時代の低地の集落を調査していないので、これらの丘陵の小集落の性格はよくわからない。綾部市の久田山遺跡と青野遺跡は、当時はどちらも由良川右岸に位置しており、前者が丘陵上、後者が沖積地に立地している。久田山遺跡N地区ではⅨ型式頃の須恵器が出土する堅穴式住居跡を4基<sup>(註42)</sup>、青野遺跡では同時期以降のものを100基以上<sup>(註43)</sup>を確認している。いわば、青野遺跡は大規模かつ継続的に集落が営まれる「拠点」的な様相を示す。福知山市域にあっては、時期的には後出するが、牧に所在する石本遺跡が「拠点」的な集落と位置づけられる<sup>(註44)</sup>。この遺跡は由良川の支流である牧川の合流点付近の沖積地に所在する。ここでは、古墳時代後期(Ⅲ型式以降の須恵器出土)の堅穴式住居跡15基を確認している。この遺跡の背後の山腹には、牧正一古墳(前方後円墳 全長35m)を盟主とする牧古墳群が分布し、この形成時期と集落の時期とが一部重複する。中六人部地域にあって中核的な「拠点」の集落が低地に存在したものと推察される。この「拠点」集落が、社会的要因等による情勢の変化に対応した丘陵上の小集落の成立・廃絶の中心を担ったものと推察される。

昭和62年度には、福知山市教育委員会により広峯遺跡で発掘調査がなされ、古墳時代後期の集落跡が検出された<sup>(註45)</sup>。この集落跡も丘陵上に立地し、堅穴式住居と掘立柱建物とからなる小集落である。この時期に何故、低地の「拠点」的な集落と丘陵上の小集落が分立したかは、よくわからない。マクロ的に見ると、Ⅲ型式の段階に丘陵上の小集落が廃絶するのに対応して、古墳の内部主体に横穴式石室が採用されるようになる。「横穴式石室文化」の受容に対する地域社会の混乱が、集落立地の変遷に表われているのかもしれない。

(岩松 保)

付表5 須恵器杯・蓋分類案

	器形	実測 番号	口径	器高	器形	調整	備考
I	杯蓋	1	13.5 } 5.2	4.6	天井部端に明瞭な稜がつくられており、口縁は下方に長く直立、端部に段を有する。	天井部のほぼ全体にわたって回転ヘラケズリを施す。	後青寺古墳 第1主体部
	杯身	2	10.5 } 11.4	5.2 } 5.9	立ち上がりやや内傾気味に上方に長くのび、端部は内傾する段をなしている。	底部外面の約1/2にわたって回転ヘラケズリ。	〃
II	杯蓋	3			天井部端の稜が鈍化する。口縁部端内面に段。口縁から天井にかけてやや丸味をもつ。	天井部のほぼ全体にヘラケズリ。	葉王寺1号 墳 第3主体部
	杯身	4			立ち上がり部が上に比してやや短い。	底部外面1/2にわたってヘラケズリ。	〃
III	杯蓋	5	4.2	14.0	天井部端の稜は形骸化し、強くナデルことで代用、口縁は短く、下方にのびる。端部に内傾する段を有する。	天井部の回転ヘラケズリの範囲は約1/2。	ケシケ谷遺 跡 S H02
	杯身	6	4.8	12.8	立ち上がりはやや短く直立する。底部は丸く、全体に深い。	底部外面は約1/2にわたって回転ヘラケズリで調整。	小屋ケ谷古 墳 第I面
IV	杯蓋	7	4.2 } 5.0	14.3 } 15.2	天井部端と口縁部の稜がなくなり、丸く仕上げられている。端部内面の段は見えてとれない。	天井部の約1/2にわたってヘラケズリをする。	〃
	杯身	8	4.5 } 4.8	12.9 } 13.9	立ち上がりは短くやや内傾する。IIIのものと比べて、口径のわりに器高が低く、扁平となる。	底部外面の1/2弱にわたって回転ヘラケズリを行う。	〃
V	杯蓋	9	3.7 } 4.3	14.0 } 15.0	天井部から口縁部へはなだらかに移行し丸味を帯びている。口縁部はやや外反気味である。	天井部約1/2にわたって回転ヘラケズリを行っている。	〃
	杯身	10	4.0 } 4.2	12.6 } 14.8	器形は、IVのものとかわりがないが、口径が小さくなり、ますます扁平となる。	底部外面約1/2にわたって回転ヘラケズリで調整する。	〃
VI	杯蓋	11	3.6 } 4.2	12.8 } 14.6	やや扁平で、器形は小型化する。形態はVのものとはほぼ同じ。	天井部は回転ヘラケズリ調整を加えているが、ほとんど削らずに簡単に仕上げている。	小屋ケ谷古 墳 第III面
	杯身(A)	12	4.0	12.2	立ち上がり部はVのものとかわりないが、体部から底部にかけてふくらみもち、全体に深い印象を与える。	底部中央付近は、ヘラ切り痕が残り、その周辺をかすかにヘラケズリを行う。	洞楽寺古墳 第1次埋葬 面
	杯身(B)	13	3.4 } 3.8	11.6 } 12.8	器高は低くなり、ますます浅いものとなる。	底部中央部のみをヘラケズリして、中央をやや丸く仕上げている。	小屋ケ谷古 墳 第III面
VII	杯蓋	14	3.6 } 3.7	10.9 } 12.8	口径は11.5cm前後となり天井部は丸く仕上げている。口縁はやや外反する。	天井部のヘラケズリ調整は省略されている。	城ノ尾古墳
	杯身(A)	15	2.6 } 4.4	11.0 } 14.9	立ち上がりが短く内傾し、器形が深い。	底部中心部は未調整で、その周囲を簡単にヘラケズリする。	城ノ尾古墳

器形	実測 番号	口径	器高	器形	調整	備考	
Ⅶ	杯身 (B)	16	3.4 3.7	11.5 12.6	底部は、ヘラケズリを簡単に すますためか、やや平坦化し てくる。	底部中心部は未調整で、その 周囲を簡単にヘラケズリす る。	小屋ヶ谷古 墳 第Ⅲ面
	杯蓋	17	3.6 3.7	11.5 12.0	天井部から口縁にかけては半 円形を呈している。	ヘラケズリは全く省略されて おり、ロクロのみで成形。	〃
Ⅷ	杯身 (A)	18	3.6 4.0	10.2 10.6	口縁部の立ち上がりは極めて 小さくつくられ、内傾してい る。底部は平たく、ほぼ直線 的に受け部に至る。	ヘラケズリは全く省略されて おり、ロクロのみで成形。	洞楽寺古墳 第1次埋葬 面
	杯身 (B)	19	3.6	11.4	口径は小さくなり、内傾する 短い立ち上がりがつく。底部 はやや平らにつくられる。	〃	城ノ尾古墳
	杯蓋	20	3.5 3.8	10.2 11.5	口径11cm、器高3.5cm程度ま で小型化している。	〃	〃
Ⅸ	杯身 (A)	21	3.5	10.5	立ち上がりは最大限省略化さ れ、受け部と同等の高さま でのものを付す。	〃	〃
	杯身 (B)	22	3.9	10.5	〃	〃	〃
X	杯蓋	23	7.8 9.3	2.6 3.4	蓋に宝珠つまみとかえりが付 されている。	天井部はヘラケズリを施す。	小屋ヶ谷古 墳 第Ⅲ面



## (7) 多保市城跡・同下層遺跡

## 1. 遺跡の立地

多保市城跡・同下層遺跡は、多保市の現集落からやや谷に入り込んだ地にある。上層は中世の城館で、下層は弥生時代と奈良時代の集落跡である。多保市城跡の南端は眺望のよい丘陵地で、そこからは竹田川と土師川とが合流する様を眼下に見下すことができる。

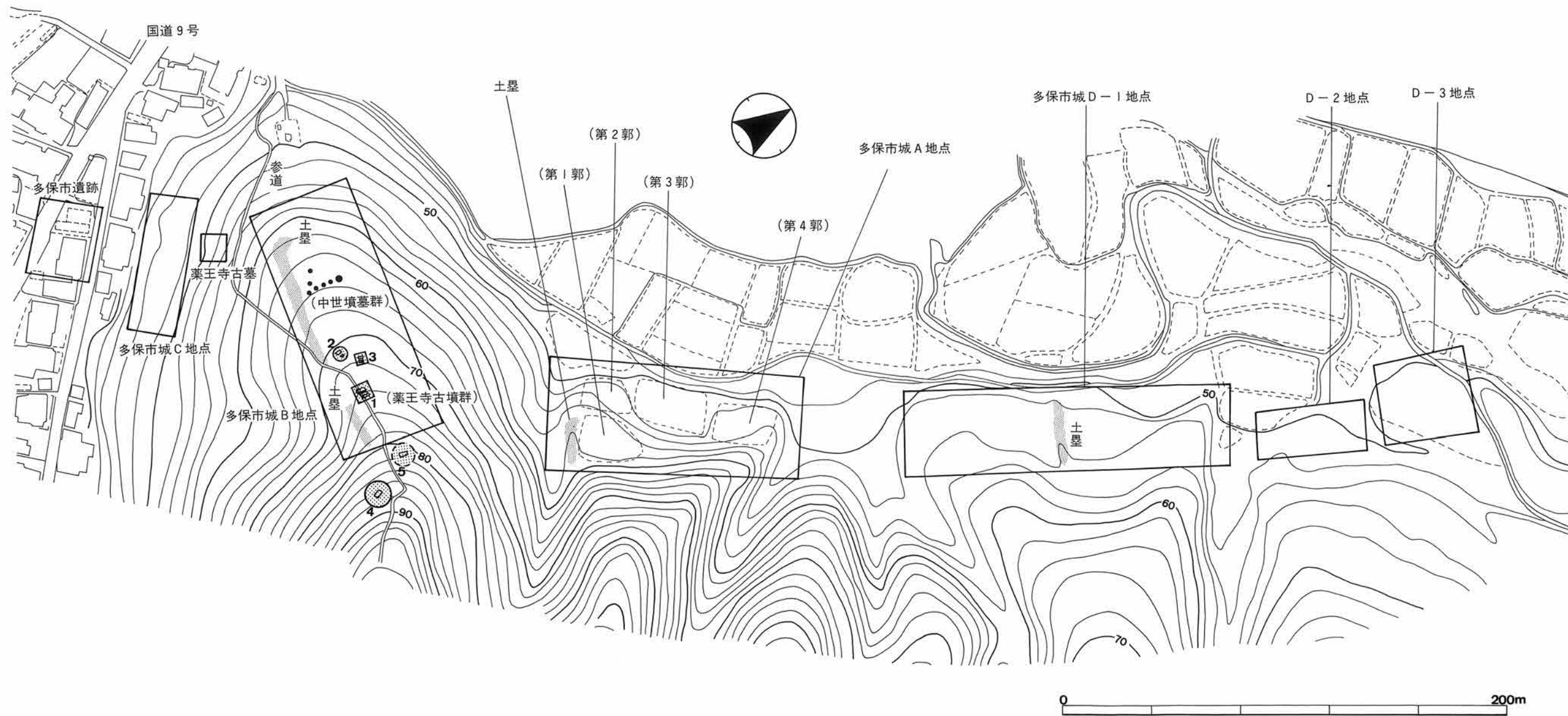
土師川を挟んだ南側には、鎌倉時代の城ノ尾城館跡や、その奥には弥生時代の宮遺跡や城ノ尾古墳などがある。

城跡の本体部分は、上記二河川によって形成された平野に口を開けた谷に面している。特に、田畑を隔てた向かいには大池があり、生活の基点となるべき地を占めている。

現在、確認できる城跡は、大きく2つに分けることができる。ひとつは高所にある詰城で、今ひとつは低所にある居館である。詰城は、居館から約100mほど上がった丘陵尾根上にあり、2郭によって構成されている。後ろには高さ2~3mの土塁があり、さらに後ろには丘陵を切断した幅約3mの空堀がある。郭は10~15mぐらいの狭いもので、その2mほど下にも同様の郭があり、戦乱の際の逃げ城としてのみ使用されたと思われる。居館は、現田畑より5~10mほど上がった台地上にあり、4郭が集合した中心部分と、この両側にそれぞれ土塁のある平坦地とによって構成されている。今回発掘調査をしたのは、この居館部分である。まず、中心部分をA地点と仮称し、その南面にあるもっとも見晴らしのよい部分をB地点とし、このB地点から土師川方面へ降りたところにある平坦地をC地点とした。C地点は発掘調査の結果、城跡及びいづれの遺構も確認されなかったため、今回の本報告では割愛した。内容については概報を参照されたい。なお、A地点の北東にある広い台地部分をD地点とした。

## 2. 調査経過

調査をしたのは、路線内部分のみであるが、それでも居館部分のほとんどが対象となった。調査方法としては、便宜的にA・D地点は道路公団の中心杭STA385+20を調査地区表示で7M区とし、それを基点として磁北で4m方眼に割り付けた。なお、杭高は50.924mである。地区表示は南北軸を数字で、東西軸をアルファベットで表示することとした。B・C地点は、薬王寺古墳の調査杭を援用して全体を4m方眼で割り付けた。前述したA~D地点で試掘調査をした結果、A地点は全面調査、B地点は平坦地を中心に、C地点は平坦地の半分を、D地点はほぼ平坦地全面を調査することにした。調査地の基本的層序は、腐植土・黄褐色土・黄褐色粘質や礫質の地山となっている。ほとんどの場合、地表面から10~



第137图 多保市地区調査範囲图

20cmぐらいで遺構面及び地山に到達したが、A地点では腐植土直下の場合や、反対に盛土のため1m以上掘っても地山に到達しないところもあった。発掘作業は、ほとんど人力によったが、D地点では遺構面まで土木機械を使用した。

遺構面を精査した結果、A地点では建物跡を2か所で検出した。遺物は14～16世紀のものがほとんどである。B地点は調査前の状況では平坦地にいくつかの土饅頭を認めることができたが、腐植土を除くと礫石で上部を被った墓であることが判明した。最終的には14基の墓を確認した。遺物は僅少であったが、13世紀後半から14世紀前半にかけてのものが出土した。D地点は、小さな谷水田によって台地が3か所に分割されており、南から北へD-1・D-2・D-3地点とそれぞれ仮称することにした。

D-1地点は、丘陵の上部をカットして平坦地を造っており、その中心部に土塁状隆起があった。さらに南側(A地点の対岸)でも土塁状の高まりがあり、A地点を中心として、B地点とD-1地点に土塁を築き、防御を固めていたと推定できる。土塁周辺の下層からは、弥生時代の住居跡や奈良時代の柱穴、土坑、住居跡を検出した。D-2・D-3地点からは、遺構は検出できなかったが、多量の奈良時代の土器を発見することができた。

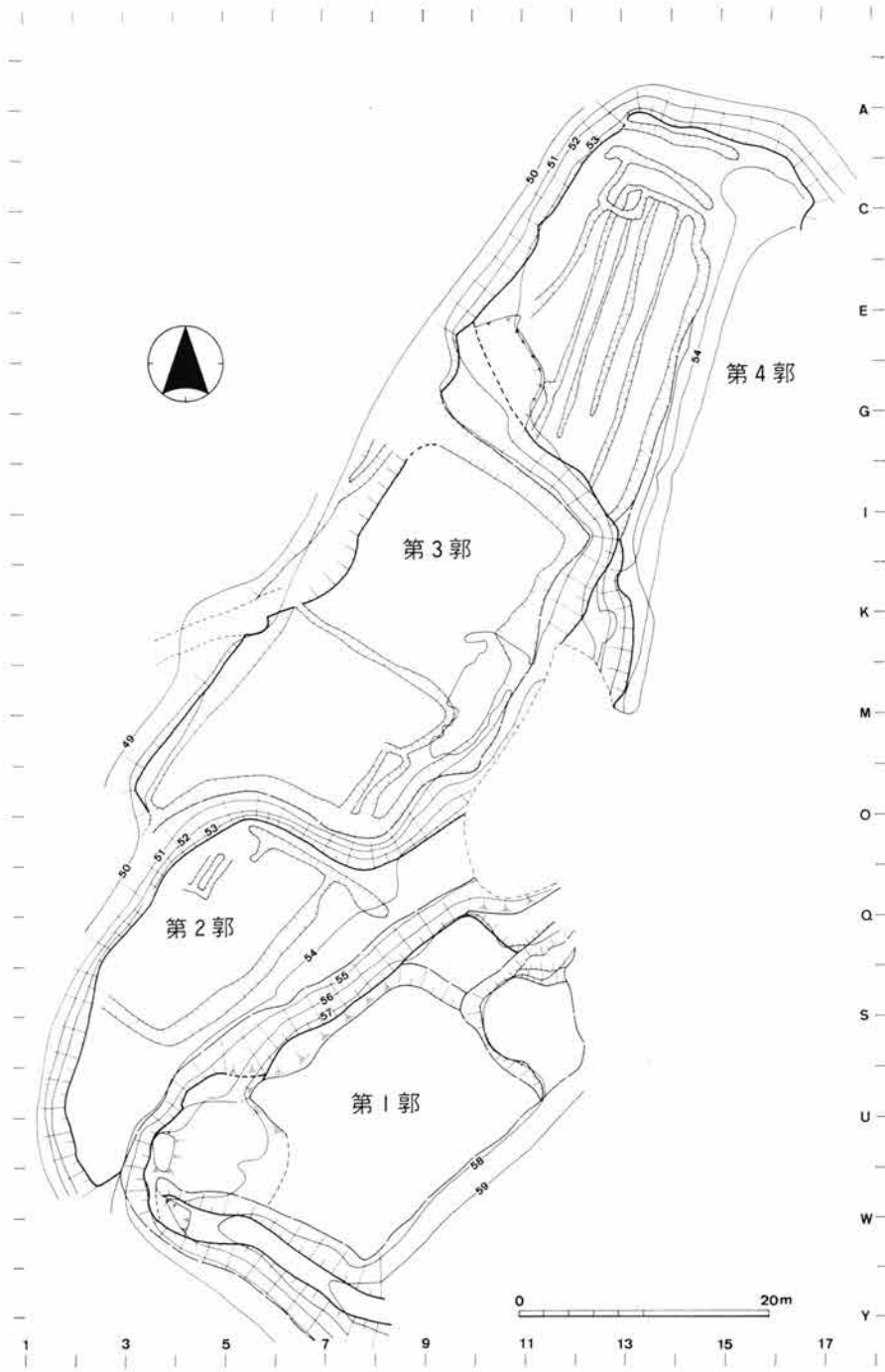
### 3. 各地点の成果

#### 〔A地点〕

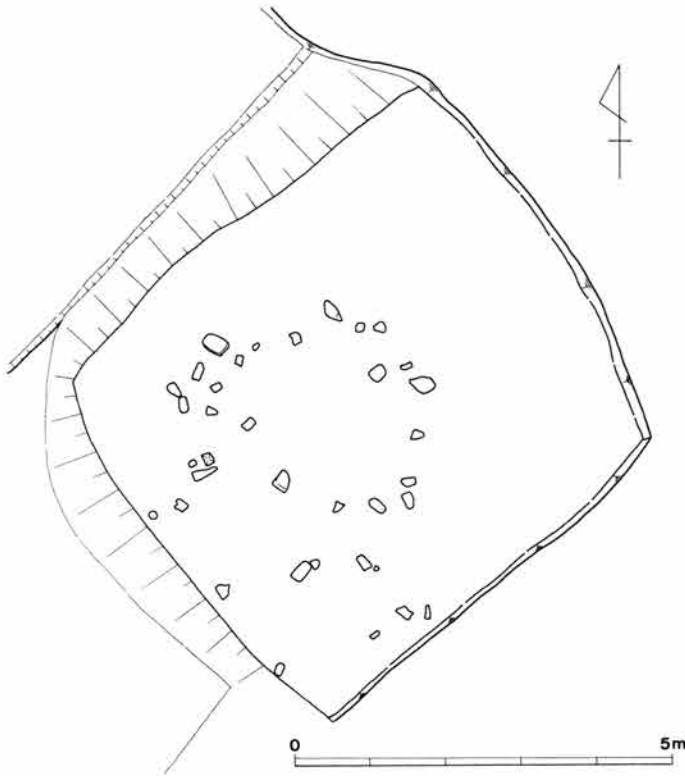
居館部分であるA地点は、前述したように4郭によって構成されている。郭は、もっとも高いところにあるのを第1郭として、その北西にあるのを第2郭、北にあるのを第3郭、更に北を第4郭とした。郭から大池に向かって左右両側は、切り込んだ谷が自然の空堀となっており、さらに左側には土塁を築き、特に南からの攻撃に対して防御を固めている。つまり、南から北にかけての築造状況は、谷(自然の空堀)―土塁―郭―谷(自然の空堀)となっている。

では、それぞれの郭について説明を加える。

まず、第1郭についていえば、規模は北東―南西が約30m、北西―南東が約20mで、北東隅が一段高くなっており、この部分は調査前の地上観察でも矢倉(櫓)台と推定できたが、調査によって自然石を礎石として使用した建物のあったことが判明した。この西側は約1m低くなっており、第1郭の中でも使用目的の違いにより高さを変化させていたと思われる。主たる平坦地部分には、平らな石が点在しており、建物が存在したらしいが、礎石等が動いていたため、規模は確定できない。南端には土塁が築かれており、上辺幅で約1.5m、郭内からの高さは1～2mである。この土塁は詰城へ続く丘陵部から第1郭、さらには第2郭までも続いていたらしい。南方の丘陵(B地点)が10m以上高いので、この方面から



第138図 A 地点全体図



第139図 第1郭推定矢倉台部分実測図

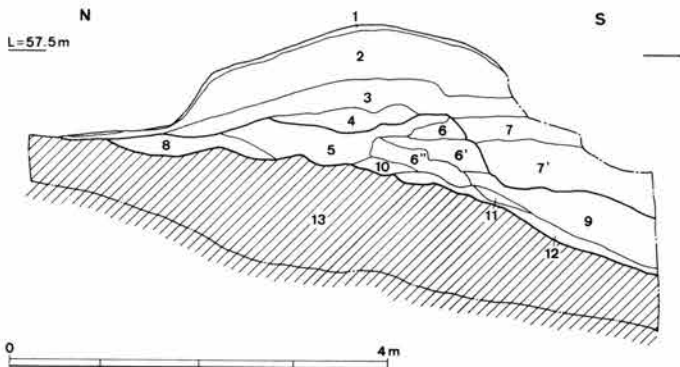
の攻撃を防ぐためのものである。

第1郭の西端部は削平されており、不明部分が多いが、土塁は続いていたようで、やや北側に折れ曲がっていたようである。

第2郭は、第1郭より2mほど下がったところにあり、規模は北東-南西が約23m、北西-南東が約15mで、東辺がやや長い方形をしている。いくつかのピットは認められたが、

建物として把握できるものはない。全体に幅狭い溝があるが、これは新しいものである。

遺物は近世・近代の染付等を発見したが、これは、居館が廃絶した後のものである。第138図のとおり、土塁は認められない。

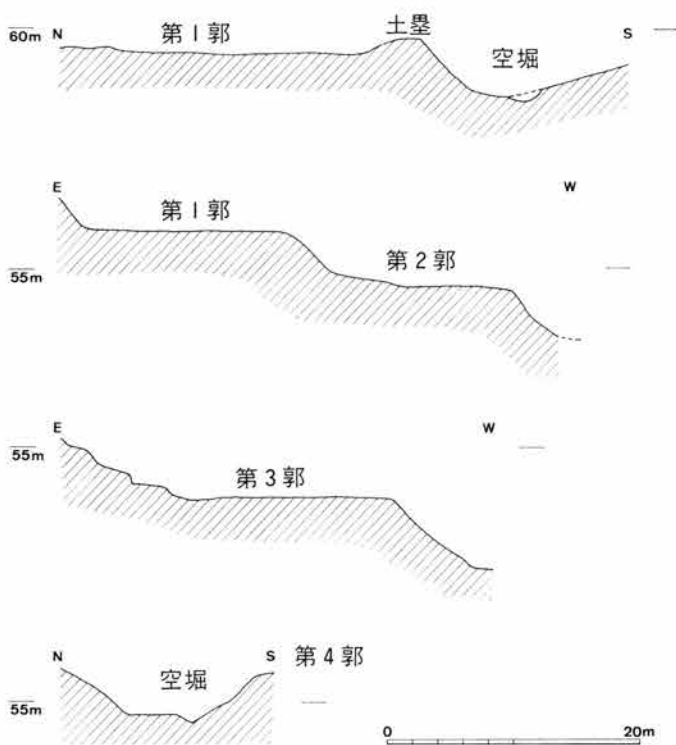


第140図 第1郭土塁断面図

- 1. 表土層 2. 明黄褐色土層 3. 暗褐色礫混じり土層
- 4. 灰褐色土層(黄色礫混じり) 5. 灰褐色砂質土
- 6・6'・6''. 黄褐色土層(徐々に色が淡くなる) 7. 暗褐色礫土層
- 7'. 7よりやや黒い 8. 茶褐色礫混じり土層 9. 灰黄褐色土層
- 10. 淡灰褐色土層(小さい礫混じり) 11. 9に類似
- 12. 黒灰色土層(小さい礫混じり) 13. 黄褐色礫土層

第3郭は、第2郭より約2.5m下がったところにあり、規模は北東-南西が約32m、北西-南東が約19mで、長方形を呈する。遺物

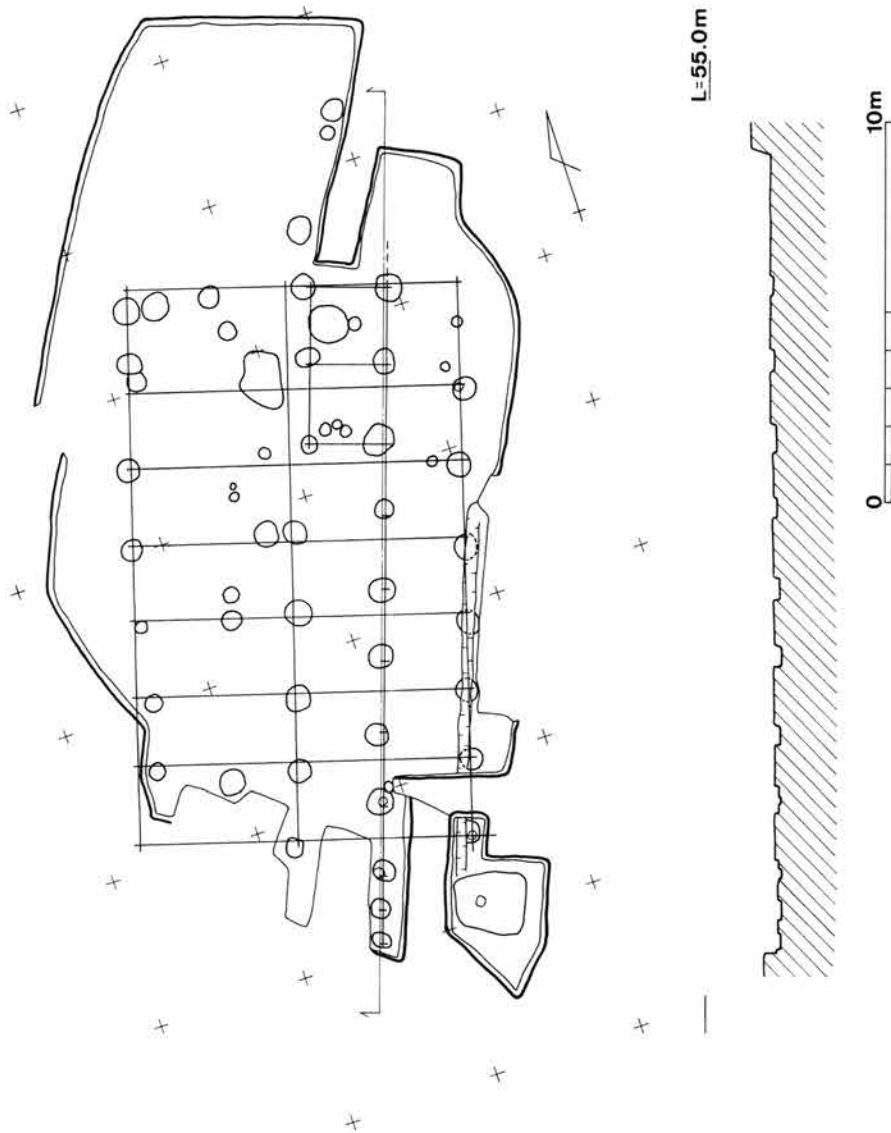
は僅少であり、また遺構も不明確である。それは第1郭・第2郭がかって山林地であったのに対して、この郭に大正時代まで人家があり、そのため、礎石等が削平されたことによる。しかし、調査終了時に土層確認のための断ち割りを実施したところ丘陵の一部を削り、その土を丘陵下部に運び埋め立てていたことが判明した。郭の北西部で確認した埋め立ては厚さ約1.4mに及ぶ。



第141図 A地点断面図

第4郭は、第3郭より約1.5m高いところにあり、規模は北東—南西が約22m、北西—南東が約14mで長方形を呈する。第138図は、掘削前の状態を示したものだが、全面に畑の畝跡が認められた。おそらく近代以降と思われる。調査を進めていくと、郭の中央部から南部にかけてピットを検出した。これらは少なくとも1棟以上の掘立柱建物を構成していたと思われるが、確実なのは南北方向に長い1棟(2間×7間)のみである。柱間は西柱列から中央柱列までが約4.2m、中央柱列から東柱列までが約4.5mある。間があきすぎるので、あるいはその中間に柱があったかも知れない。北第1柱列から第2柱列までは約2.7mあり、第2柱列から第6柱列までは、それぞれ約2mある。次の第7柱列までは約1.8mで、第8柱列までは約2mである。この建物は以上のように5種類の柱間を採用しており、また1尺を30cmと仮定しても、これに則らない柱間もあるので、あまり厳密でない尺度、及びそれを採用した段階のものと推定できよう。ピット内の埋土は茶褐色混礫土で、瓦器片や鉄釘などが出土した。

前述したように、厳密でない尺度や出土した瓦器片などから、この建物は中世前期に属すると言えよう。

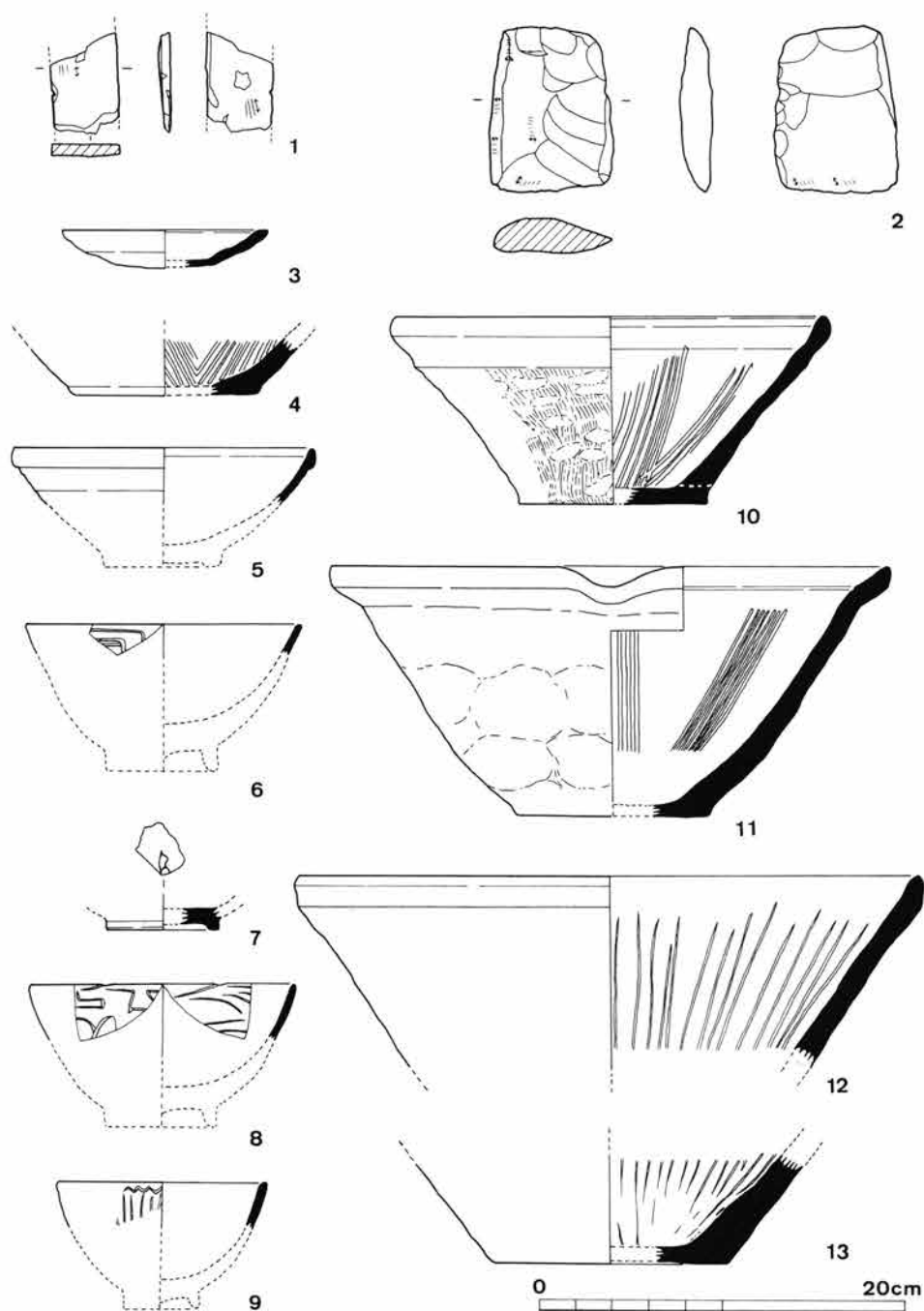


第142図 A 地点 第 4 郭

### 出土遺物

個々の遺物についての概要は観察表に譲る。今回の調査で出土した遺物は整理箱3箱分である。数量としては決して多いとは言えない。種類としては、弥生時代に属する可能性がある磨製石斧の他は、中世に属する砥石・土師器皿・瓦器すり鉢・丹波焼すり鉢・中国製白磁碗・同青磁鉢・宋銭などがある。

昭和59年度の概報でも記述したように、主たる年代は15・16世紀と思われる。瓦器すり鉢は、口縁部の形態から2種類に分類できる。第143図10は丹波焼すり鉢の形態に類似して



第143図 A 地点出土遺物

第1郭SK01:12・13. 丹波鉢, 整地層:3. 土師器皿, 4. 瓦器すり鉢, 10. 瓦器鉢,  
包含層:1. 砥石, 5. 白磁碗, 11. 瓦器鉢

第3郭包含層:7. 青磁鉢

第4郭包含層:2. 石斧, 6・8. 青磁碗 包含層:9. 青磁碗



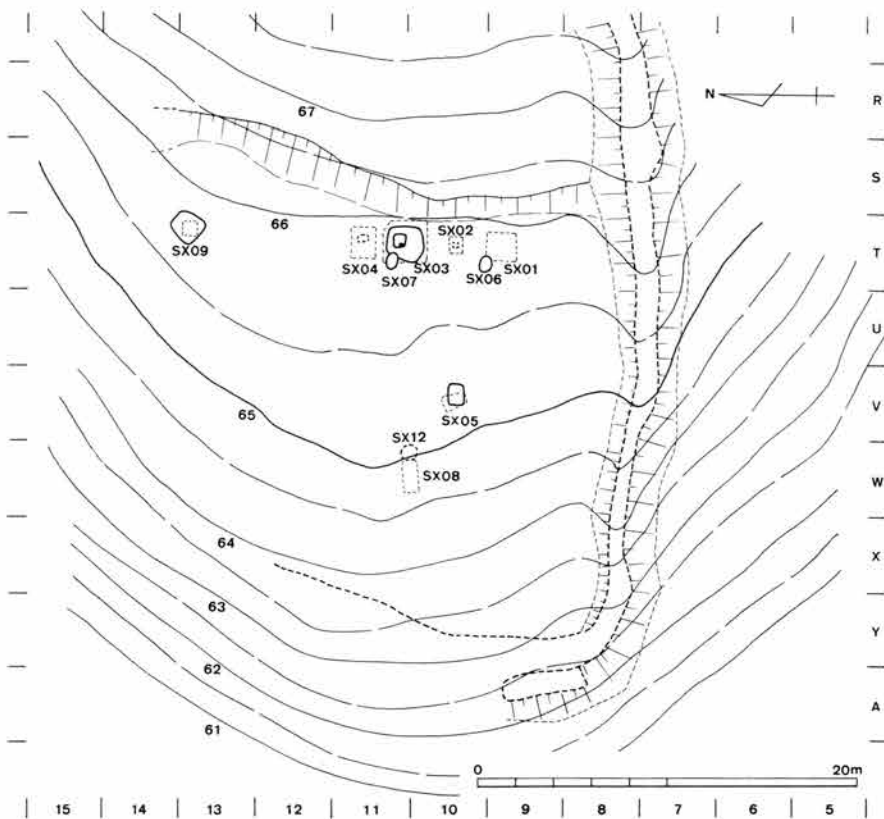
おり、同11は口縁部が外反し独特なものである。したがって、同一の焼成方法は執るが、土器作り集団の系譜は相違していよう。

白磁碗(第143図5)は、口縁部に注目すれば12世紀前半に比定しうるものである。青磁碗(第143図9)は龍泉窯系で、16世紀前半のものである。土師器皿(第143図3)は、平安京での編年に則るならば16世紀末である。

#### 〔B地点〕

B地点は、調査対象となった多保市城跡の中でもっとも高所にあり、眺望のよく利く地点である。かつて防御に努めたことは、土師川寄りの丘陵端に造営された土塁で知ることができる。幅約3m・高さ約1mあり、その形状は後述するD-1地点や、川を隔てた宮遺跡などの土塁と類似している。これは、低い土塁である点と、断面を観察すると黄褐色砂質土のほぼ単一層によって形成されている点を挙げて指摘することができる。この遺構の年代を示す遺物は出土していないが、近辺で出土する遺物は13~14世紀に属する。

この土塁の北側に墳墓が発見された。一般的であるのは、10~30cm大の円礫(河原石)を



第144図 B地点全体図

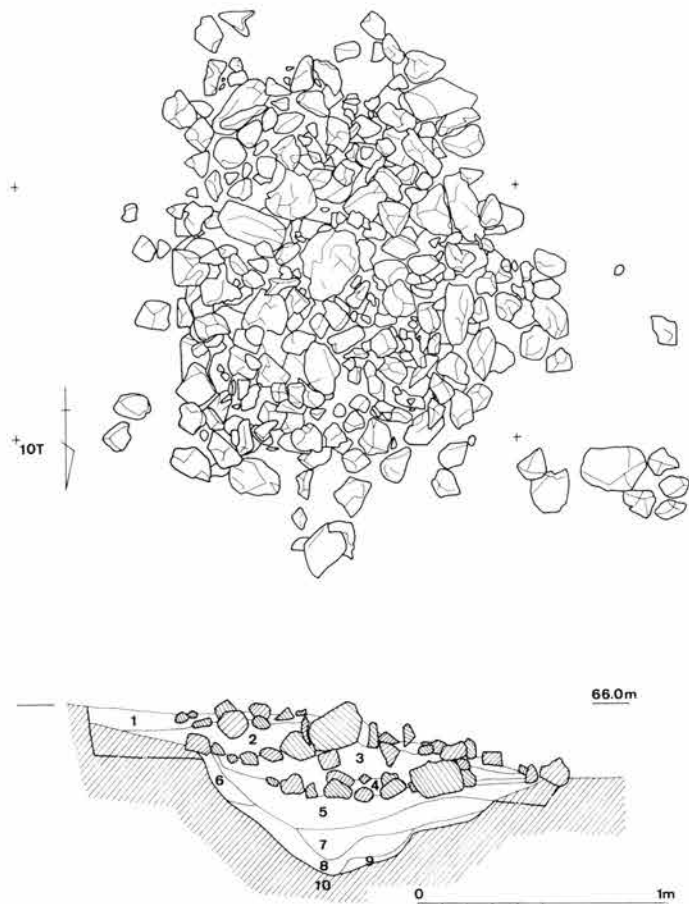
方形に並べ、高さ20~30cmにしたもので、地上観察では2~3基を確認しただけであった。ところが、腐植土を取り除いたところ15基を確認するに至った。では、いくつかの例を以下に紹介することにした。

**SX01** もっとも南にある墳墓である。平面は方形を呈する。南北は約1.5m、東西は約1.2mである。やや大振りの石を中央に配し、縁辺にはそれより小さい石を配しており区画を意識した配列となっている。石は上層のみで、下層は円形の土塚の中に土がつまっていたのみである。第145図をみると、北西部で石の配列の乱れがあるが、これはSX01と重複したSX06があるからである。

**SX03** 4つの墳墓が重複している。SX03がもっとも高い位置にあり、もっとも新しい。

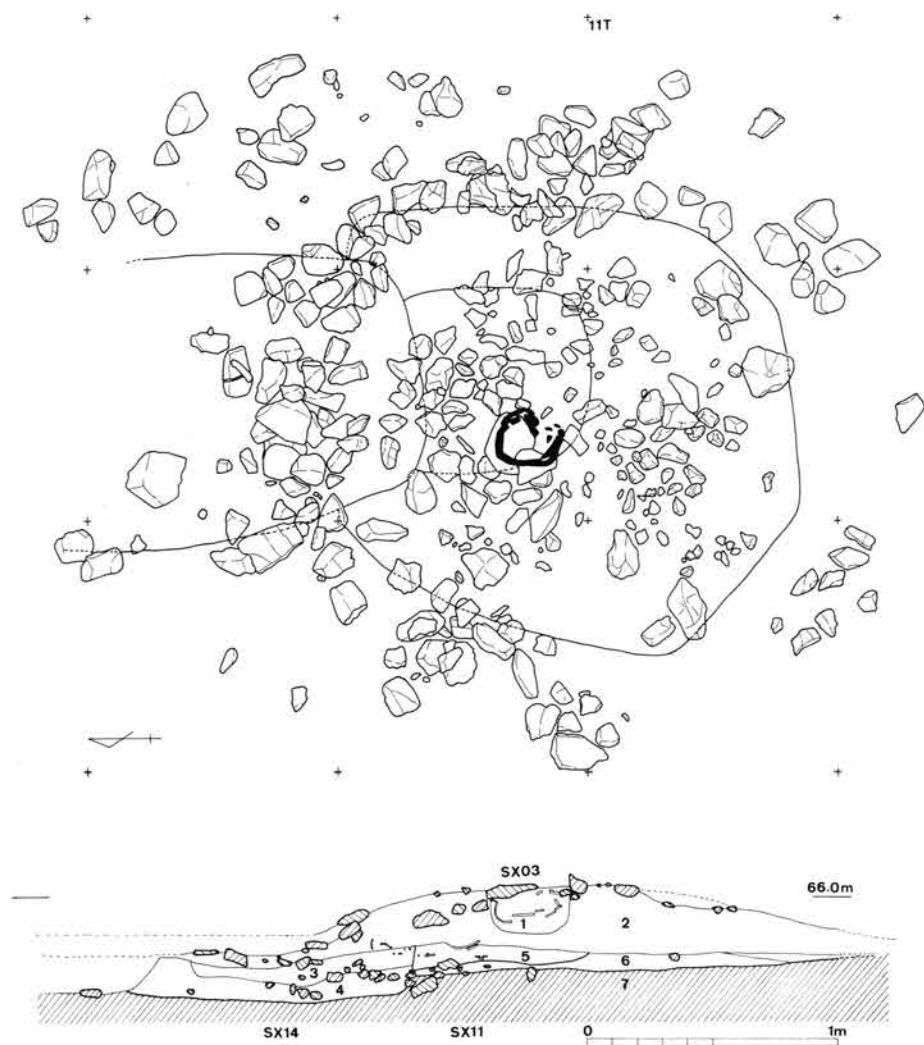
これは土師器鍋を蔵骨器としたもので、中に骨が埋納されていた。また土師器皿3点もあった。墳墓の輪郭としては、隅丸方形に近い形をしており、南北約1.9m・東西約1.8mである。高さは0.3mである。他に重複しているのはSX07・SX11・14である。規模はこの墳墓がもっとも大きく、位置も中心的である。

**SX04** SX03のすぐ北にある。河原石が集まった範囲は約1.5mの方形を呈しているが、石自体はかなり動いており、点在した状態である。中央部分には骨片が集中しておりその上に大振りの石を



第145図 B地点墳墓SX01実測図

- 1. 暗黄褐色土    2. 暗黄褐色砂質土    3. 暗黄褐色土
- 4. 暗褐色土    5. 暗黄褐色土    6. 暗褐色土    7. 暗褐色土
- 8. 暗黄褐色(砂混じり)土    9. 黒色粘質土    10. 黄褐色(砂混じり)土



第146図 B地点墳墓SX11等実測図

1. 暗黄褐色土 2. 暗褐色粘質土 3. 黄褐色土(骨片含む) 4. 暗茶褐色土  
5. 明茶褐色土(骨片含む) 6. 黒褐色土 7. 暗黄褐色土

配している。第147図には方形土塚の輪郭を描いているが、断面図を見てもわかるように、わずかに傾斜の変換点を認める程度である。

土塚の上端は暗灰色礫質土や黄褐色土まであったかも知れないが、土層の識別は困難な状態であり、確認することはできなかった。

**SX06** SX01と重複して検出された。7個程度の石が置かれてあり、その下に深さ10cmほどの楕円形を呈する土塚がある。今回調査した中では、もっとも小規模である。

**SX09** 北端で検出した墳墓である。集石部分は90cmの方形を呈しているが、その下に

ある土坑は南北1.4m・東西1mの楕円形を呈している。土層の断面に注目すれば、3基の土坑が重複しているように見えるが、上面で見た石の配列に乱れはなく、やはり、1基のみであったと思われる。

**SX11** SX03の下層で検出された墳墓である。北部はSX14と重複し、削平されている。平面は隅丸方形を呈し、東西0.7mで、南北は0.7m以上である。

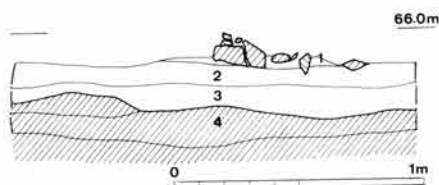
**SX14** 平面は隅丸方形を呈し、東西1.1mで、南北は1.2m以上である。現存の深さは0.2mである。他の墳墓との新旧関係は、SX11がもっとも古く、次いでSX14で、もっとも新しいのがSX03である。墳墓としての盛り上がりは、SX03の段階に形成されたもので、集石は全面に認められるけれども、特に盛り上がりの縁辺は意図的に配列しているようである。石はこの盛り上がり以外にも点在して

おり、かつてはSX11・14にもそれぞれ集石があったのではなかろうか。それを、SX03築造時に改変したものと推定できよう。

以上のように、河原石を置いた墳墓の概要を記したが、これを位置的に見てみると、大きく3グループにまとめることができる。では、A～Cグループと呼称して以下記述を進める。

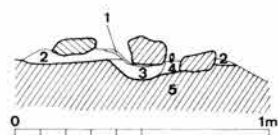
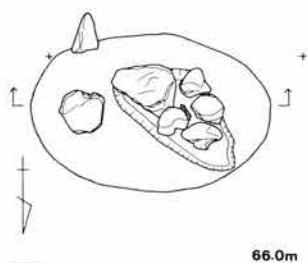
AグループはSX01・02・03・04・06・07の6基で、この内、前4基が南北方向に一列に並んで築かれている。平面規模は、もっとも小さいSX02で一辺約90cmであり、もっとも大きいSX03で一辺約240cmである。SX06・07は、それぞれSX01・03の北西に築かれており、規模も小さく従属的である。

Bグループは、SX09の単独墳墓だけで、Aグループとは



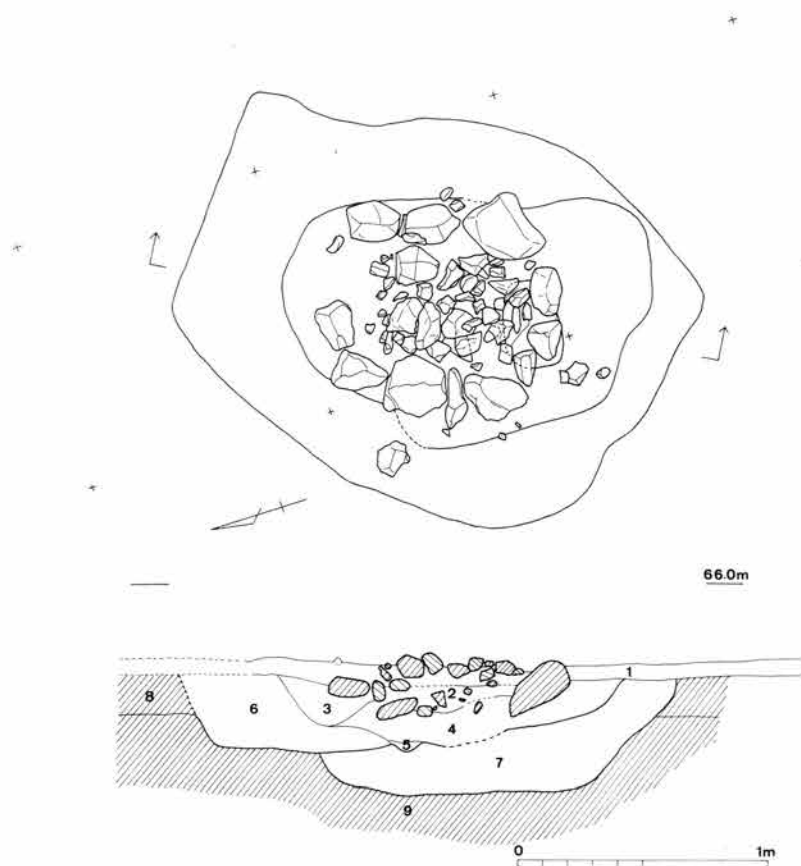
第147図 B地点墳墓 S X04実測図

- 1. 黄褐色土
- 2. 黄褐色土(骨片含む)
- 3. 暗灰色礫質土
- 4. 黄褐色礫質土(地山)



第148図 B地点墳墓 S X06実測図

- 1. 褐色腐植土
- 2. 暗黄褐色粘質土
- 3. 暗黄灰色粘質土
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 黄褐色土(地山)



第149図 B地点墳墓SX09実測図

- |         |                |          |            |         |
|---------|----------------|----------|------------|---------|
| 1. 黄褐色土 | 2. 灰褐色土(小礫を含む) | 3. 暗黄褐色土 | 4. 2よりやや黄色 |         |
| 5. 黒褐色土 | 6. 黒褐色土        | 7. 黒褐色土  | 8. 黒褐色土    | 9. 黄色粘土 |

8mほど離れているが、延長線上にある。

Cグループは、SX05・08・12の3基で構成されている。Aグループの西6～12mの地点にあり、特にSX12は円礫を置かず、骨片を散らしたような状態であった。他のグループとは違い、集石の輪郭は長方形を呈している。

これらのほか、離れた地点でSX13・14がそれぞれ単独で築造されていた。SX13は、薬王寺2号墳の墳丘裾にあり、SX15は、同古墳から南へ100mほど下がったところにある。いずれも一辺0.8～1mほどの方形の集石墓である。

これらの墳墓の築造方法は、まず方形土坑(隅丸方形が多い、まれに楕円形のものもある)を掘り、土を充填しながら骨を埋め、20～30cmほどの土壇を形成した後、最後に石を貼りつけるというものである。蔵骨器が明確であるのはSX03のみであるが、SX09では鉄釘が遺存しており、木製蔵骨器を使用した場合のあることが知られる。なお、卒塔婆等の木製

標示物があった可能性は否定できないが、五輪塔等の石造物があった可能性はほとんどない。今回の調査地内の墳墓で骨片が確認されたのは、SX02・03・04・12の4か所である。

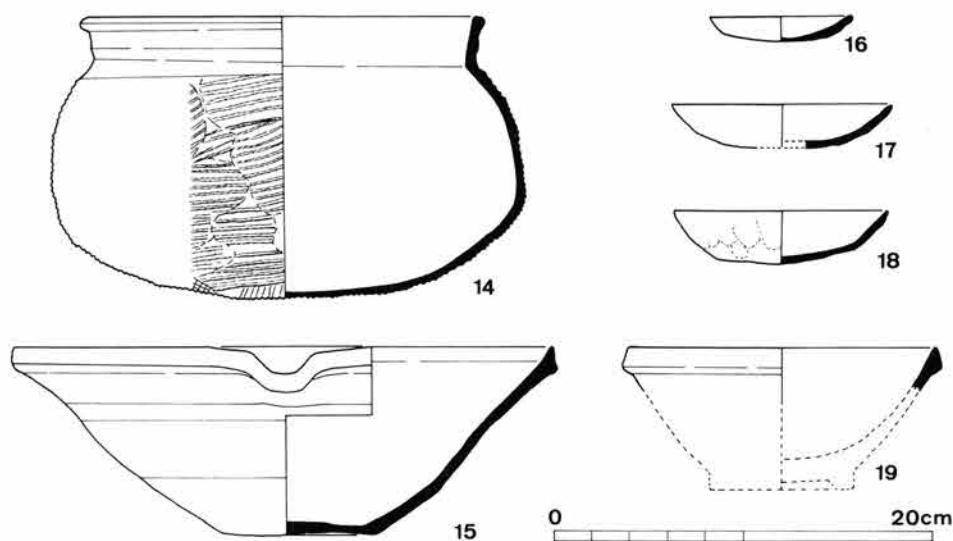
### 出土遺物

墳墓から出土した遺物は、SX03から出土した土師器鍋1点と土師器皿3点のみである。図示した須恵器鉢(第150図15)と白磁碗(同19)は薬王寺2号墳の周濠で発見された。これは周濠がほぼ埋没した段階のものである。

土師器鍋(第150図14)は、いわゆる「丹波型」である。口縁部に注目すれば、大内城跡報告<sup>(注46)</sup>での編年案のⅧ期に相当し、14世紀前半に属すると思われる。共伴した土師器皿も同様な年代を与えることができる。須恵器鉢は、いわゆる東播系で、魚住窯産と思われる。年代は大内城跡報告のⅣ期に相当し、12世紀末～13世紀初に属すると思われる。白磁碗は横田・森田分類<sup>(注47)</sup>のⅣ類で、年代は12世紀後半と思われる。

### 〔D地点〕

この項ではD-1地点から記述を始めることにする。D-1地点は、D地点の中でもっとも広い平坦地で、南北約100m・東西約30mの広さがある。この内、南北80m・東西22mの範囲を調査した。中央には土塁があり、これは丘陵斜面の途中から台地の端まで、等高線に直交して築かれている。第152図は土塁の中央部の土層断面であるが、これによれば黄色砂礫土層(厚さ55cm)によって造成されている。その下には黒褐色砂質土層(厚さ15cm)があるが、この層も土塁の造成に伴う。中世の遺物包含層は暗褐色粘質土層(厚さ10cm)で、そ



第150図 B 地点 出土 遺物

SX03: 14. 土師器鍋, 16~18. 土師器皿, 包含層: 15. 須恵器鉢, 19. 白磁碗



第151図 D 地点全体図

の下には奈良時代相当層である茶褐色粘質土層(厚さ25cm)があり,更に下に弥生時代遺構検出面である黄褐色粘質土層がある。

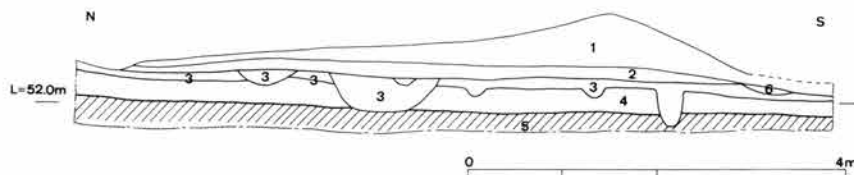
遺構は特に土塁の南側に集中していたが,時期的には弥生時代と奈良時代とがあり,鎌倉時代と推定している土塁とは直接関連はしない。堅穴式住居跡7基,一列に並ぶピット群,内側が焼けた土坑4基,溝5条の他,多数の土坑が発見された。土坑の中には50個ほどの土錘を埋めたSK132もあった。弥生時代に属する遺構は51か所,奈良時代は17か所,鎌倉時代～室町時代は6か所である。

堅穴式住居跡は,SH116が奈良時代の可能性があるほかは,弥生時代に属する。平面形態に注目すると,台形と隅丸方形と楕円形の3種に分けることができる。台形は3基(SH116・117・120),隅丸方形は2基(SH127・136),楕円形は2基(SH100・101)ある。規模については,台形のSH116の場合は南辺が5.2m,北辺が4.8mで,南北は4.5mである。南西コーナーに焼土や炭が集中して認められたことから,あるいはカマドがあったのかもしれない。図示したSK137は下層にある弥生時代の土坑である。またSK126は丹波焼甕が埋没してあったことから,中世に属することが判明した。この住居跡の主柱穴は不明である。他の2基の住居跡はやや小型で,主柱穴は不分明だが,おそらく4本柱を主体とし,副次的に周辺に柱を立てていたと思われる。

隅丸方形のSH136は北東-南西方向に長いもので,規模は4m×3.3mである。主柱穴は判然としない。SH127の北辺は弧状を呈しており,厳密には隅丸方形とは言えないが,一応ここに分類した。南北は3.5m,東西は2.9mであり,台形の一群よりは小規模である。

楕円形のSH100は3.2m×2.8mで,東西方向に長い。柱穴は判然としない。SH101は一辺が角張っており,厳密には楕円形とは言えないが,一応ここに分類した。中央に焼土があり,これがおそらく炉跡と思われるが,そこから西へ,つまり傾斜の低い方にかけて幅30cm,深さ10cmの溝が走っていた。同様な施設はケンケ谷遺跡のSH72にある。

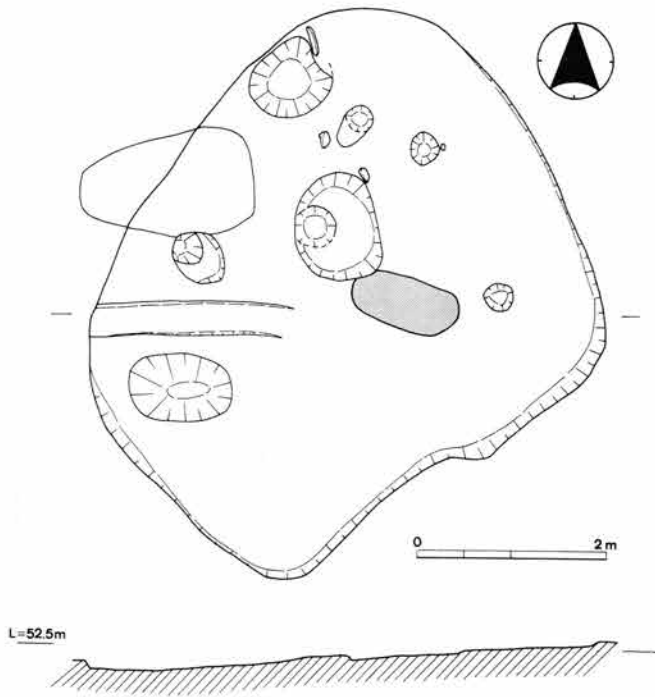
一列に並ぶピット群は,調査地南部で検出された。8E区付近にあるSK56を含めて,4個ほど一列に並ぶが,これが掘立柱建物的一部分として把握するには対応するピットが足ら



第152図 D-1地点土塁付近土層断面図

- |               |                |                   |
|---------------|----------------|-------------------|
| 1. 黄色砂礫土層(土塁) | 2. 黒褐色砂質土層(土塁) | 3. 暗褐色粘質土層(遺物包含層) |
| 4. 茶褐色粘質土層    | 5. 黄褐色粘質土層(地山) | 6. 淡灰褐色砂質土層       |





第153図 SH101 実測図

北側に集中していた。一辺約70cm×110cmの長方形で、深さ約30cmである。土坑の壁は焼けており、かなり高熱であったことがわかる。いずれの焼土坑も炭が入っているのみである。時代を決める根拠はあまりないが、少なくとも、検出された面を考えれば奈良時代以降である。

奈良時代の土坑の中には、須恵器などの遺物を廃棄したのがある。SK87やSK137がそうである。完形品もしくはそれに近いのがあり、使用できるのにもかかわらず廃棄されたことがしられる。この他にはSX129・130がある。

SD48は土塁の南で発見された溝であるが、層位的には土塁より古く、奈良時代に相当するものと思われる。

鎌倉～室町時代に属するものとしてSX126がある。ここには丹波焼の甕が廃棄されていた。また、SX125も同様である。

以上のような点を踏まえて、遺構の状況を把握したい。

まず、弥生時代について言えば、調査地の中央部から南部にかけて竪穴式住居跡が認められる。点在していると把握することもできるが、微視的にみれば北端にSH127とSH136、その南にSH120、やや間を置いてSH117、もっとも南にSH100とSH101というように、4グループに分けることもできる。

ない。柵列とするにはあまりにも短いので、結局、掘立柱建物1棟があった可能性を指摘するに止めたい。なおピット群は、奈良時代に属する。

SK132は前述したように、土錘が多数出土した土坑である。あとの出土遺物の項を参照していただきたいが、ほぼ同じ大きさの土錘である。一網分を埋めてあったのだろうか。

焼土坑(SX128・131・139など)は、特に土塁の

奈良時代の遺構は弥生時代と同様の分布を示すが、遺構数の少なさからも知られるように分布密度は低くなっている。また、生活に密着した建物がほとんど確認されておらず、あるいは地面に痕跡を残さない簡単な建物であったのかもしれない。

中世については、土塁の他は目立った施設はなく、活発に利用されていたとは言い難い状況である。

D-2地点は、D-1地点から幅20m弱の谷を隔てた北にある、南北約40m・東西約20mの半円形をした台地である。D-1地点よりは2mほど低い。表土を除去すると、すぐに円礫を多量に含む暗褐色土となり、この層の中から多量の奈良時代の須恵器が出土したが、ベースとなる土層は円礫が多く、遺構は検出されなかった。

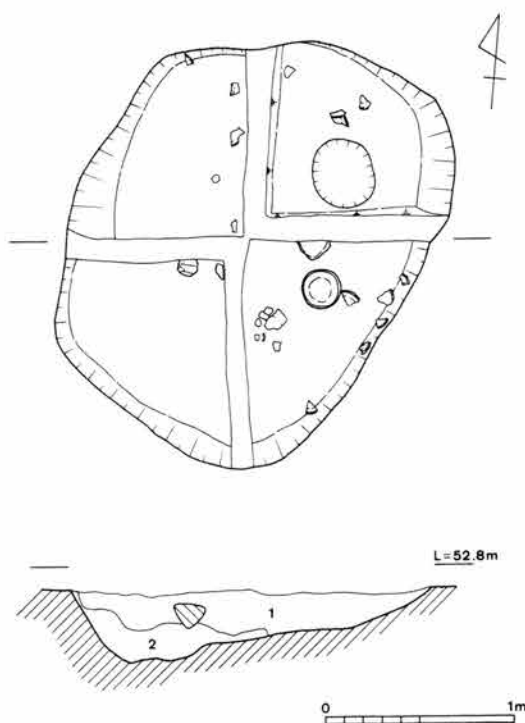
D-3地点は、D-2地点から幅約15mの谷を隔てた北にある。南北約30m・東西約30mの台地で、ここでも表土の直下から多量の円礫を含む暗褐色土となり、遺構は検出されなかった。

#### 出土遺物

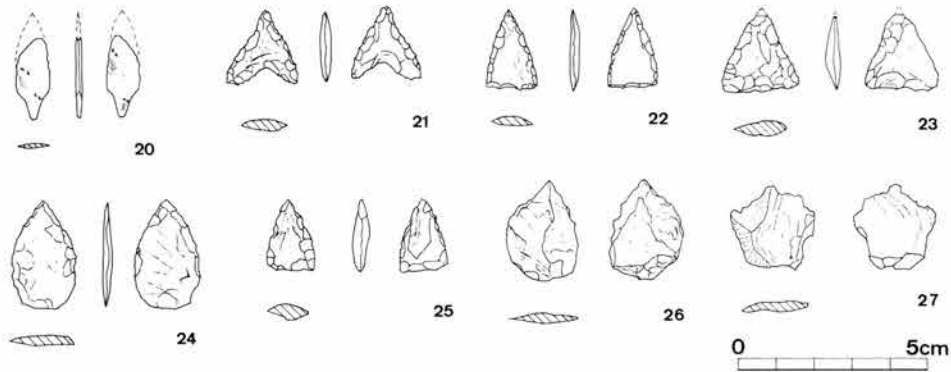
多保市城跡D地点で出土した遺物は、D-1地点が整理箱で11箱、D-2地点が整理箱5箱、D-3地点が整理箱1箱である。種類は磨製石鏃・打製石鏃などの石器類、弥生土器、土師器、須恵器、青磁、瓦器、黒色土器、土錘、瀬戸・美濃、青花磁器などがある。

個々の遺物については観察表を参照して頂くとして、ここではいくつかの注目すべき遺物について略述したい。

D-1地点で出土した磨製石鏃(第155図20)は、土塁の南にあるSD48から出土した。材質は粘板岩系である。弥生土器は、SH101出土の壺が畿内第Ⅳ様式と考えられる他は、ほとんど第Ⅴ様式の後半に比定されるものである。奈良時代の土器については、当該地域での編年作業は進んでおらず、他地域との関連で考えるしかない。亀岡市の篠窯跡で行われた



第154図 S K 137実測図  
1: 暗灰褐色土, 2: 暗黄褐色土



第155図 D-1地点出土石器実測図

<sup>(注49)</sup> 編年に則するならば、石原畑3号窯段階か、やや後出した時期と考えられ、8世紀後半というのが妥当な時期ではなかろうか。

須恵器杯身(第157図50)の外底面には墨書が施されているが、文字は判読できない。51の内底面には漆様の付着物がある。塗っていたかどうかは不明である。66は土製の鏡模造品と思われる。56は香炉であるが、おそらく中世のものであろう。

中世の遺物としては、龍泉窯青磁(98~100)がある。上田秀夫氏の<sup>(注50)</sup>編年観によれば、15世紀末~16世紀初と言えよう。他の丹波焼すり鉢も15~16世紀と思われる。

D-2地点は、D-1地点と同様の8世紀後半の須恵器のほか、弥生時代の甕が出土した。色調は茶褐色である。

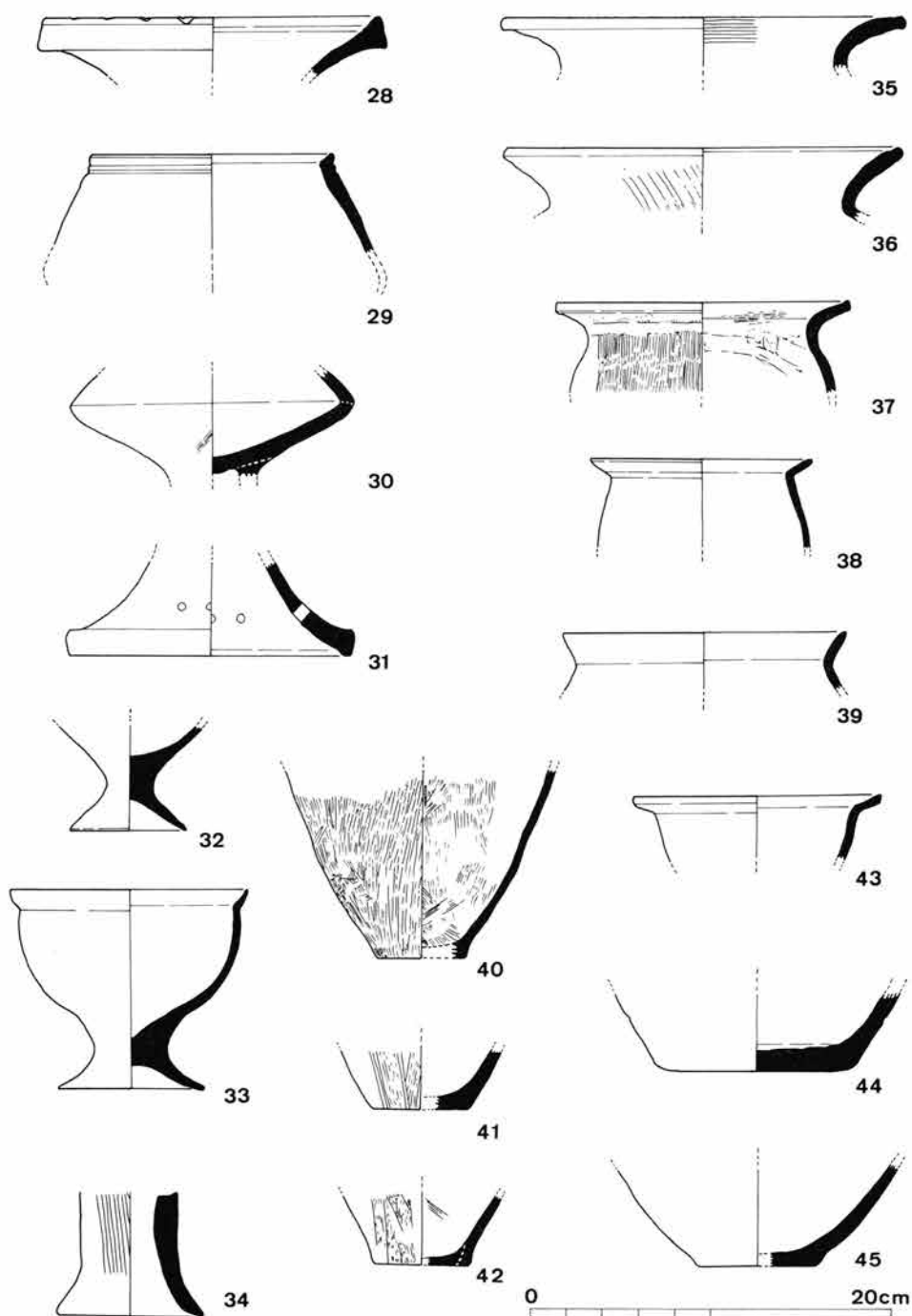
D-3地点は、8世紀後半から9世紀前半にかけての須恵器杯蓋が出土した。また、龍泉窯青磁は鑄蓮弁文がはっきりとしたタイプで、13世紀後半から14世紀にかけてのものである。

#### 4. 小 結

それでは、ここで各地点の成果をまとめておきたい。

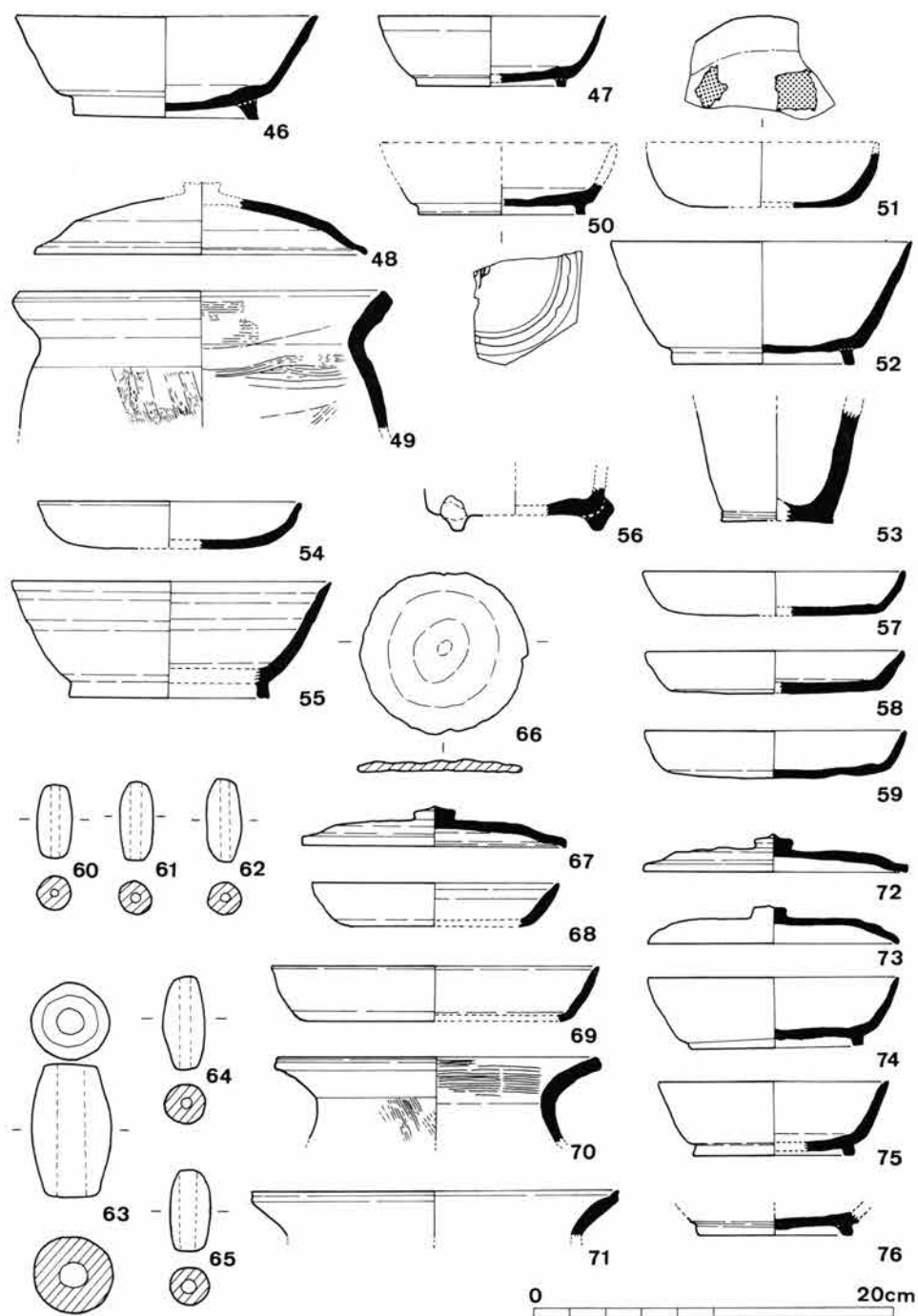
##### [A地点]

多保市城跡の居館部分と推定されるが、常時ここで生活していたのかと考えると、遺物の絶対量が少なく、否定的である。城は丘陵上部にある詰め城と、下部にある居館部分とに分かれる。福知山地域で同様の例を探してみると、字観音寺の観音寺城跡<sup>(注51)</sup>がある。これは詰め城が標高100mほどの地点にあり、三つの曲輪はそれぞれ30~40mの規模である。居館部分は標高50mほどの地点にあり、東西約80m・南北約35mの規模である。『丹波志』によると、「観音寺山城 古城主大槻將監ト云子孫不知 家老大槻勢之丞ト云」とあり、大槻氏の城であったことが知られる。今回調査した多保市城跡は『丹波志』によると、「古城打



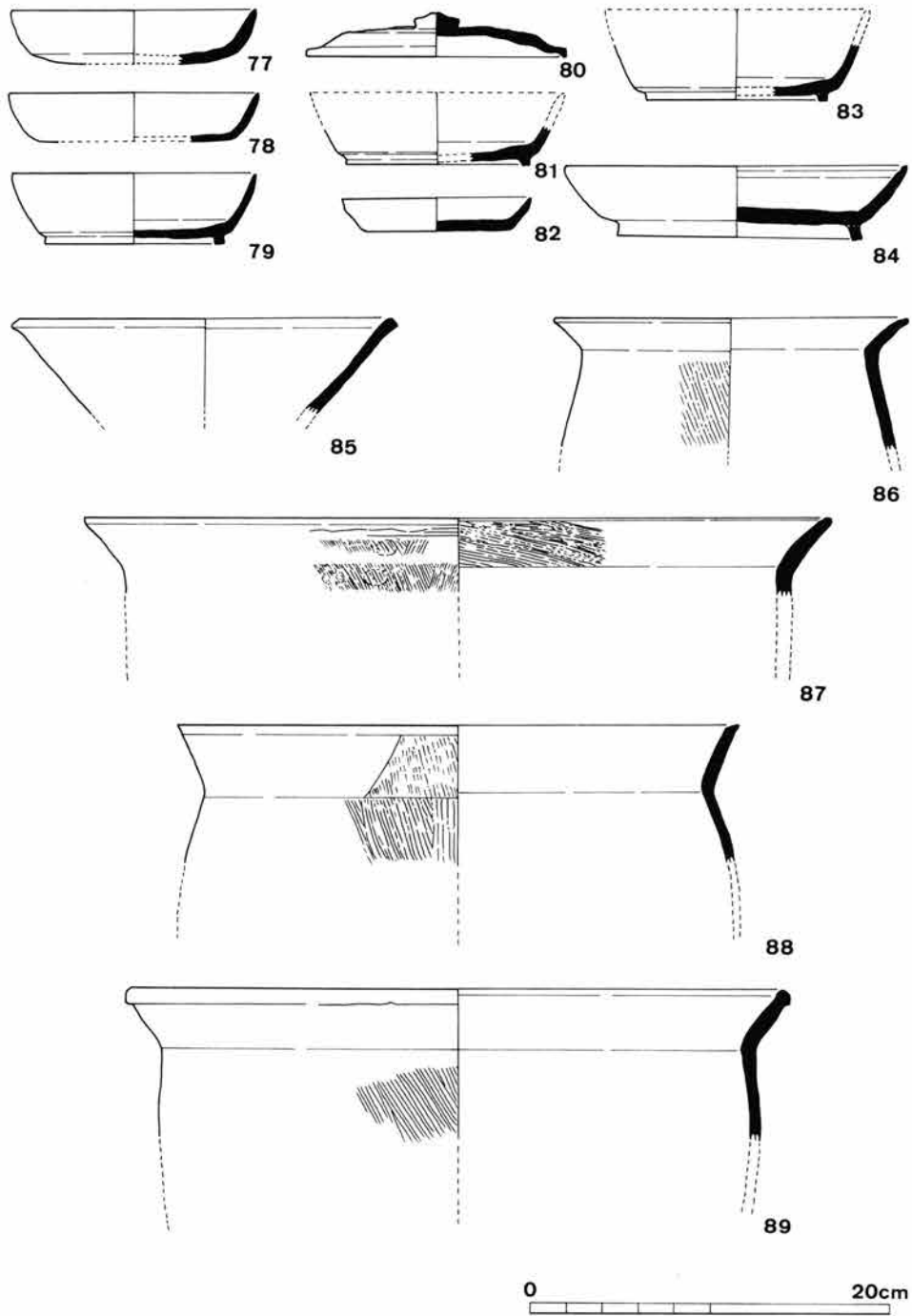
第156図 D-1地点出土遺物(弥生時代)

S X03 : 40・41. 甕, S K77 : 45. 甕, S D84 : 29. 無頸壺, S X87 : 36・37. 甕,  
 S H101 : 28. 壺, 38・39. 甕, S K110 : 34. 高杯, S H117 : 42. 甕, S H120 : 33. 台付鉢  
 S H136 : 30. 台付長頸壺, S X137 : 43. 小型鉢, S K165 : 35. 甕, 包含層 : 31. 器台,  
 32. 脚付碗, 44. 甕



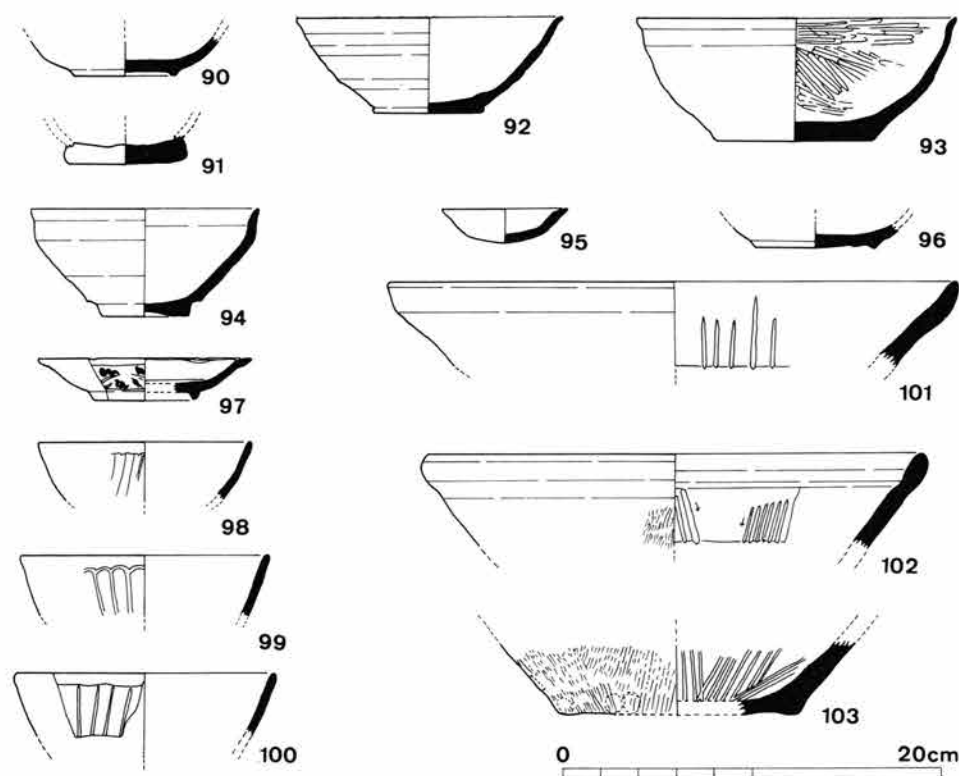
第157図 D-1地点出土遺物(奈良時代)(1)

S K 55 : 46・47. 須惠器杯, S K 56 : 48. 須惠器蓋, 49. 土師器甕 S X 87 : 66. 鏡,  
68・69. 土師器皿, 70・71. 土師器甕, 73. 須惠器蓋, 74~76. 須惠器杯  
S K 87 : 67・72. 須惠器杯蓋 S H 116 : 54. 土師器皿, 55. 須惠器杯 S K 117 : 51. 土師器皿  
S H 117 : 52. 須惠器杯 S K 124 : 57~59. 土師器皿, S D 125 : 56. 土師器香炉,  
包含層 : 50. 須惠器杯, 53. 須惠器壺, 60~65. 土錘



第158図 D-1地点出土遺物(奈良時代)(2)

S K 53 : 89. 土師器甕 S D 84 : 85. 土師器高杯 包含層 : 77・78. 土師器皿,  
79・81・83・84. 須恵器杯, 80. 須恵器杯蓋, 82. 須恵器皿, 86~88. 土師器甕



第159図 D-1地点出土遺物(平安時代以降)

SX125: 95. 土師器皿, 102: 瓦器鉢 SK164: 93. 黒色土器碗 包含層: 90. 土師器碗, 91. 土師器杯平高台, 92. 土師器杯, 94. 天目茶碗, 96. 瀬戸灰釉皿, 97. 青花皿, 98~100. 青磁碗, 101. 須恵器すり鉢, 103. 瓦器すり鉢

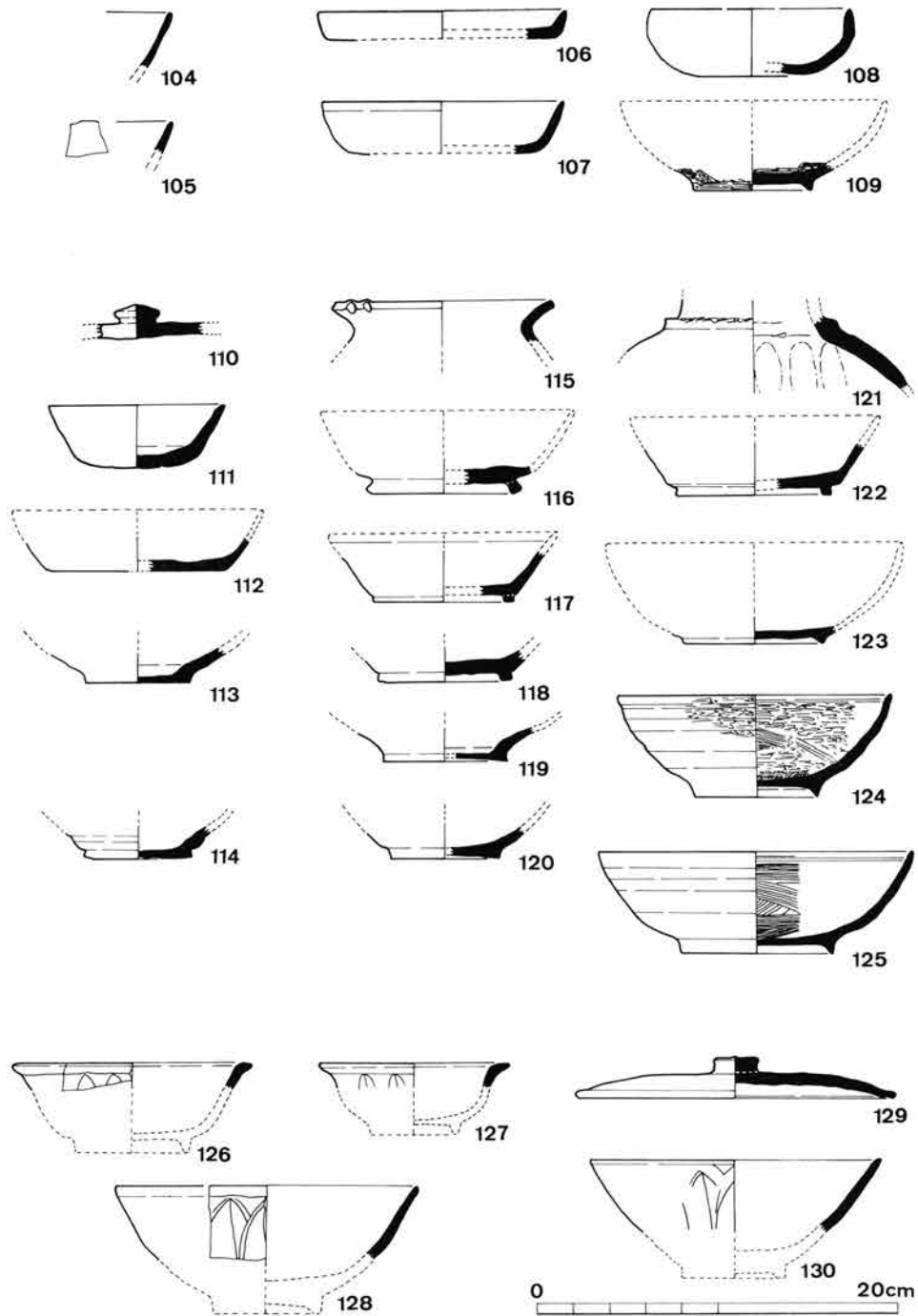
越山ト云 多保市村 大池谷奥也 古城主大槻阿多之助」とあり、ここも大槻氏の城であったことが知られる。藤井善布氏は、高津に勢力をもった大槻氏の支族が広範囲に広がっていたようだと推定している。

遺物から言えば、12世紀前半の白磁碗を別にすると、主たる年代は15・16世紀であり、調査前の居館はその時代に機能していたことは確かである。城を造営した年代は今ひとつ判然としないが、やはり南北朝の動乱を契機としたのではなかろうか。城の構造は大内城跡ほど古くはなく、後青寺跡(城館)ほど新しくはないことは示唆的である。

## 〔B地点〕

墳墓群の年代は、土師器鍋に注目すれば14世紀前半である。昭和59年度の概報では、墳墓の配置に注目し、8尺方眼を基準として造営されたと推測した。今改めて墳墓について考えてみよう。

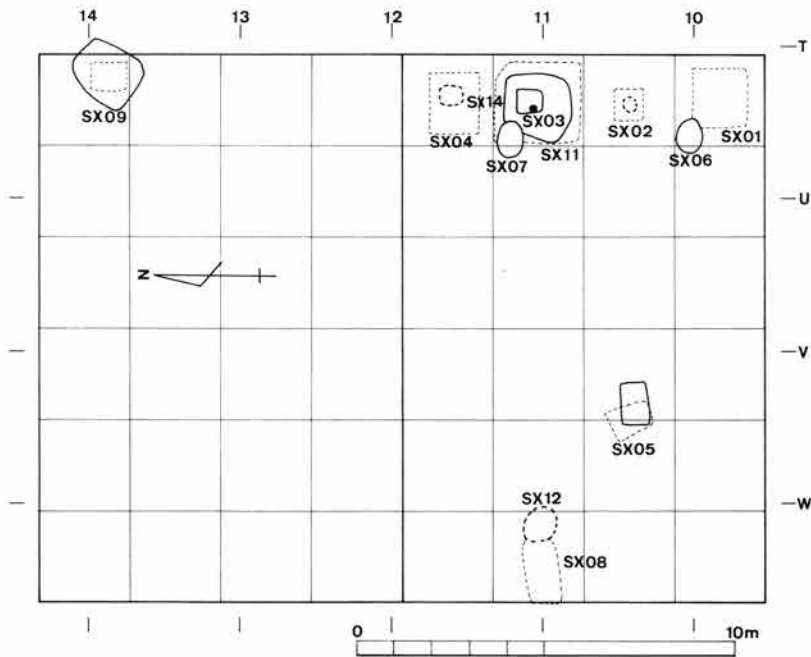
第161図によればSX01などのAグループは、SX01とSX06, SX03とSX07に重複関係が



第160図 D-1・D-2・D-3地点出土遺物

D-1地点(104~109), D-2地点(110~125), D-3地点(126~130)  
 SK01: 124・125. 黒色土器碗 SF85: 105. 青磁碗 SH117: 106. 土師器皿,  
 包含層: 104・126・128・130. 青磁碗, 107・108. 土師器皿, 109. 土師器碗,  
 110・129. 須惠器杯蓋, 111~114・116~118・122. 須惠器杯, 115. 弥生土器甕,  
 119・120. 土師器杯, 121. 弥生土器壺, 123. 黒色土器碗





第161図 墳墓と区画面

実線：土塚の輪郭，破線：集石の範囲，太い破線：骨の集中範囲

あり、おおむね8尺の墓域の中に収めていることから、縁者(二世代か)が同じ墓域に葬られたと推測できよう。Aグループは、これら近親者とひじょうに近い者達の墓域(4ブロック)といえ、Bグループ(SX09)やCグループ(SX05など)もまた、血縁集団の墓域と把握できるのではなからうか。この墳墓群は地縁的な関係をもつ3つの血縁集団が、8尺の枠の中に計画的に造墓した結果といえる。そして、Aグループの西に墓道が推定できよう。

この墳墓群は、SX03が土師器鍋を蔵骨器として使用した他は、土塚墓(いくつかは木製蔵骨器か)である。墳墓の大きさから言えば、火葬骨を埋納していたと思われる。このように火葬骨を埋納し、しかも等質的な墳墓の例は、山田館跡で検出した墳墓群がある。荘官クラスの墓は大内城跡墳墓で確認されているが、それは墓域を区画する溝があり、蔵骨器も丹波焼大甕を使用したり、和鏡を埋納したりしている。次のクラス(おそらく村の長)の墓は、芦田 弘氏発見の墓で、<sup>(注52)</sup>礫石で盛り上がった5m四方の中に、丹波焼壺や須恵器甕を蔵骨器としていた。結界のための溝はなく、墓の構造からすれば大内城跡墳墓よりやや簡便である。荘官クラスや次のクラスの墓は数人程度を埋納したのみで、墳墓の形態も単独的である。これに対してB地点の墳墓や山田館跡の墳墓は集中して造営されており、<sup>(注53)</sup>集団墓といえる。クラスとしては第3となるが、おそらく村長に準ずる農民層が相当するのではないか。

これらの墳墓は13～14世紀前半まで造営するが、それ以降は断絶する。造墓が行われた地点は、当時は山林地であり、おそらく村の共同入会地であったと思われる。その地を個人の墓地として使用するには、一定の論理が必要である。当時は六人部荘に属していたが、荘官の屋敷跡とも言える大内城跡での考察にもあるように、平安時代末期～鎌倉時代初期を頂点として、徐々に本家や領家の力は衰退していき、この際に乗じて有力農民達が自分達の墓を、村ごとに場所は限定しながらも、造営を開始したと考えられよう。しかし南北朝時代を迎えると、本家は天龍寺となる。天龍寺は暦応2(1339)年に夢窓疎石のすすめで足利尊氏が立願したものである。このような強力な後盾があったため、天龍寺は在地の有力農民層の造墓活動を規制したのではなかろうか。墳墓が断絶するのは以上のような事情があったのではなかろうか。

#### 〔D地点〕

発掘調査によって、弥生時代後期の集落跡が発見された。出土遺物から畿内第Ⅴ様式後半に対応するとみられる。堅穴式住居跡の形態は円形はなく、楕円形・隅丸方形・台形の3種類である。前項で指摘したように、住居跡は4グループに分けることができるが、これらが同時に存在していたかどうかについては検討を要し、断定的なことは言えない。しかし、少なくとも100年以上継続した集落ではなく、せいぜい二世代程度であっただろう。

ほぼ同時期の例としては奥谷西遺跡<sup>(注54)</sup>がある。大型住居は円形で、小型住居は方形である。この場合は大型住居に小型住居がとりまき、調査者は一集団内での一家族から分かれたものを推測している。D地点の場合もSH120とSH127・136との関係や、SH101とSH100との関係を抽出できなくもない。また台形1に円形的2という関係でも把えることができる。現段階では、位置的には4グループに分かれ、更にSH120(台形)とSH127・136(円形的)、SH117(台形)とSH100・101(円形的)の2グループに分けることができる、という指摘に止めたい。2つの血縁グループが集落を形成していたというのが、その内容である。

奈良時代は、多量の遺物が出土したにもかかわらず、住居跡は1基のみであった。この遺跡のある谷の奥には奈良時代の多保市廃寺があり、おそらく同時に存在していたと思われる。この多保市廃寺については、塔の心礎と考えられる石材や採集品である瓦<sup>(注55)</sup>が紹介されているが、断片的であり詳細は不明である。奈良時代の天田郡にはもうひとつ和久寺があった。六人部の地が奈良時代に有力な地であったことは認められよう。

今回の調査地で墨書土器や土製の鏡模造品があったことは、一般的な集落跡(?)ではなく、官衙的あるいは祭祀的な色彩を強く持っていたと推測できる。したがって、現段階では、多保市廃寺と関連した遺跡で、内実は祭祀なども執行した地として把握しておきたい。

(伊野 近富)

## (8) 大内城跡下層遺跡

## 1. 調査概要

大内城跡下層遺跡は、館から城への変遷がわかる中世の城館である大内城跡の調査中に発見された。城跡は、東から西へのびる丘陵地の南北200m・東西400mにわたって造営されており、発掘調査が実施された主郭のほか、2郭が認められた。主郭は平安時代末期に造営されたが、他の2郭は外形観察によれば、戦国時代と思われる。

下層の発掘調査は、保存された東北隅の墳墓以外の部分と、墳墓の南側に設定された跨線橋取り付け部分について実施した。

この調査の結果、遺構の存在状況はよくなかったが、弥生時代の竪穴式住居跡の周溝部と平安時代末から鎌倉時代にかけてと考えられる柱穴、建物跡と推測される方形の窪地(SX03)などが検出された。以下主な遺構の概略を説明する。

**SH01** 南北に長い楕円状を呈した竪穴式住居跡である。幅約20cmの周溝のみが遺存したもので、南北径5m・東西径3.5mを測る。中央部南寄りに焼土を検出した。炉跡と考えられる。住居に伴う良好な遺物はないが、周辺で出土した遺物などから推定して、弥生時代中期のものと考えられる。

**SH02** やや不整な円形を呈した竪穴式住居跡である。幅約20cmの周溝のみ検出した。径は3.5mを測る。焼土等は確認されなかった。SH01と同時代のものとして推定しておきたい。

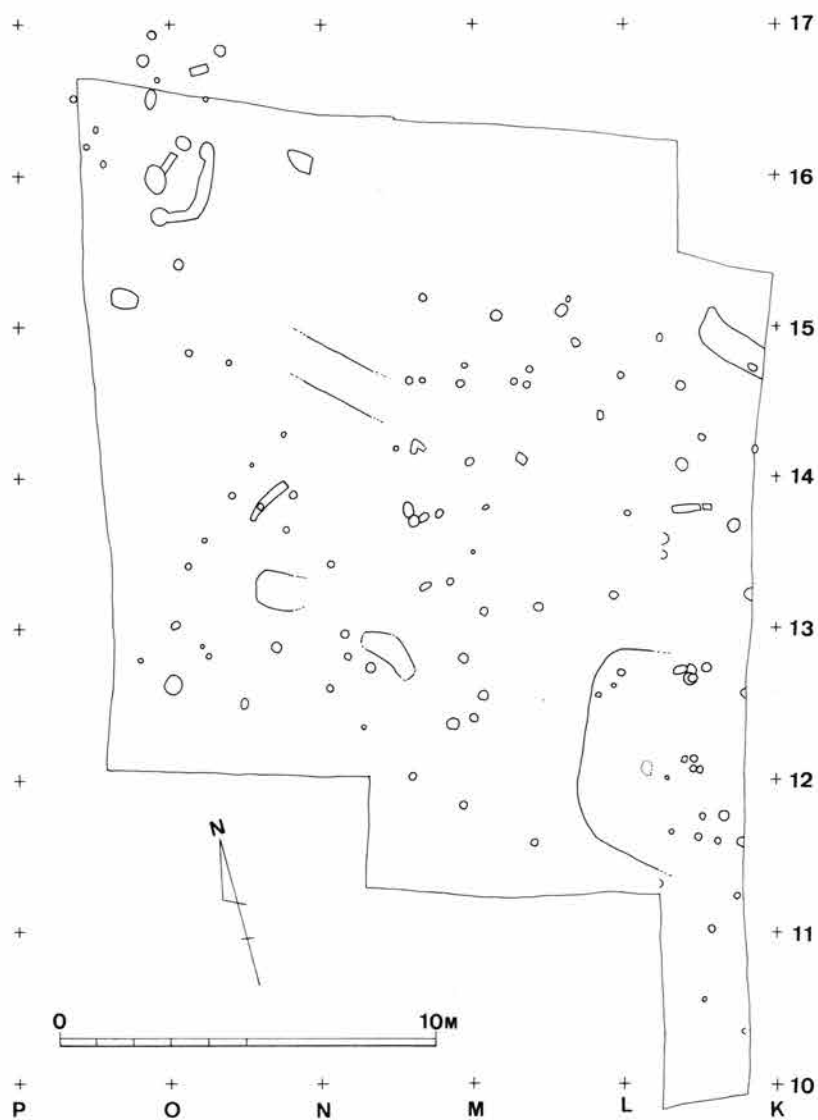
**SX03** 南北3m・東西2.5mのやや不整な方形を呈する。中央部を幅約50cmの溝が斜めに横切り、この溝に向かって床面が傾斜する。床面から瓦器・土師器の破片が出土しており、これらの遺物から大内城跡の建物群と同時期のものであろう。北側にある井戸2との関連も考えられる建物跡と推定しておきたい。

**SH04** 東部は削平されているが、隅丸方形を呈した竪穴式住居跡である。一辺は5.7mである。主柱穴や周溝は確認されなかった。遺物もなく詳細は不明である。

その他、以上述べた遺構のほか、多くの柱穴を検出した。これらのいくつかは、前回の発掘調査で判明した掘立柱建物の柱穴となるものもあるが、その他は、性格が不明である。大内城跡にかかわる遺物以外に、弥生土器の破片が若干出土した。遺物は磨耗が激しく遺存状態は不良である。

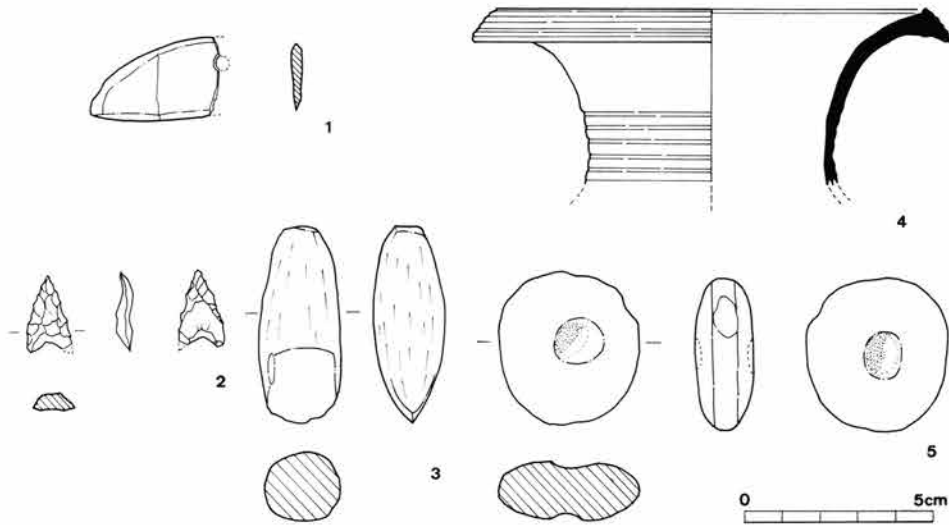
## 2. 出土遺物

大内城跡下層遺跡に伴う遺物は整理箱で1箱分出土した。この内、弥生時代のものはタキ石や石鏃、石庖丁、及び土器である。



第162図 大内城跡下層遺跡遺構配置図

石庖丁(第163図1)は包含層から出土したものである。2片が接合したので図示した刃部には横方向の擦痕があるが、これは、使用時ではなく刃を低ぎ直した際のものと思われる。石鏃(2)は中世の遺構から出土したもので、長さ2cm・幅1.2cmである。石質はグレーチャートで、暗灰色を呈する。石斧(3)は、太型蛤刃タイプである。刃部にはほぼ長軸に沿って条痕がある。石質は凝灰岩?で、新鮮な面は、やや青味がかかった灰白色である。タタキ石(5)は中央部に1か所の窪みがあるタイプで、これは両面ともある。側面は磨った痕や敲いた痕が明瞭にある。ほぼ完形品である。土器(4)は壺の口縁部である。SX112



第163図 出土遺物実測図

から出土した。胎土は粗く、灰色・青色・白色砂を含んでいる。色調は外面が赤褐色で内面は黄色である。

### 3. 小 結

今回の調査によって、中世の城館の下層には弥生時代の集落があったことが判明した。近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査により、当地周辺では、弥生時代の集落跡は比較的まとまって確認されてきた。宮遺跡・ケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡・城ノ尾城館跡下層遺跡・多保市城跡下層遺跡などである。これに、当該地が加わる。

これらの遺跡は、沖積地を見おろす台地上で、土師川北岸の多保市城跡下層遺跡を別にすれば、すべて周辺の水田との比高差が20m前後あるという、同じような立地条件であり広義の高地性集落と言えなくもない。しかし、このように点々と遺跡が発見されるということは、これが普通の集落の姿であった可能性もある。しかし、低地で磨製石斧が採集されていることを考えると、やはり、母胎となる集落は低地(現水田面近く)にあり、台地上で見つかったこれらの集落は支村(集落)である可能性の方が蓋然性がある。

(藤原 敏晃・伊野 近富)

## (9) 多保市遺跡

## 1. 調査の概要

当遺跡は、福知山市の南東部、竹田川と土師川の合流点から北東約1kmの地にあり、土師川右岸の薬王寺古墳群が所在する丘陵の裾部に位置する。土師川がこの丘陵にぶつかって流れを大きく東へ変えるところであり、国道9号線を経て約35mで川に面している。標高は約39mを測り、川面との比高差は5～6mである。

周辺の遺跡をみてみると、薬王寺古墳群が所在する丘陵の北側の谷に多保市廃寺が知られている。多保市という地名も、この寺院の塔に由来するともいわれ、礎石をはじめとして瓦など遺構、遺物が確認されている。

多保市の遺跡の調査は、当地での橋脚部工事に際しての立会調査であった。始めに、工事により掘削されていた土層断面の観察を行った。この観察によって、中世以降に造成されたと考えられる民家敷地の盛土約1mの下に遺構面があることを確認した。そこで、排土置場や水道管が走る部分を除いた可能な範囲の盛土を機械力により除去した後、人力によって遺構・遺物の検出に努めた。調査の範囲は、東西12m・南北27mで、調査面積は324m<sup>2</sup>であり、調査によって弥生時代及び奈良時代の竪穴式住居跡を合わせて4基や、土壇・柱穴などを検出したほか、近世以降の土壇・遺物も検出した。

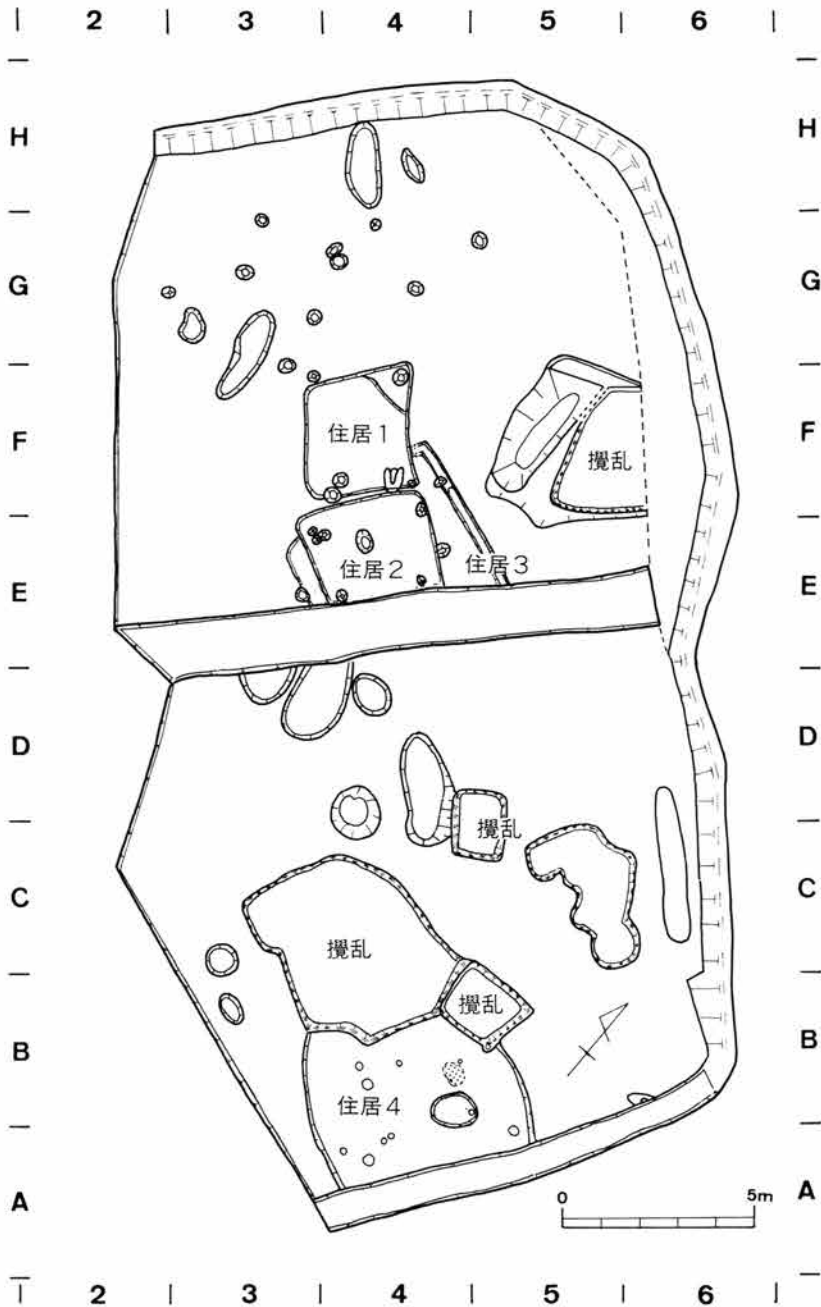
## 2. 検出遺構

調査により、弥生時代から近世以降までの遺構・遺物を確認した。以下、検出遺構の一部の概略を説明して、今回の報告としたい。

**住居1** 南北3m・東西3.4mを測る方形の竪穴式住居跡である。検出面から床面までの深さが約20cmと残りのよいものであった。東隅に造り付けのカマドを有していた。このカマドは、造り変えた可能性がある。柱穴に関しては、図中のものが竪穴式住居跡に伴うものかどうかは現時点では不明である。

住居1は、唯一まとまって遺物が出土した竪穴式住居跡である(第165図)。須惠器杯蓋1、須惠器杯身3、土師器杯6・7がカマド部南側で集中して出土した。須惠器杯身5は、住居跡北隅を掘り残して造ったと思われる壇の上から出土した。その外、須惠器杯身4は、南コーナーで住居跡を切り込んだ形のピットから出土した。土師器甕8は、西隅の西側のピット内から出土した。

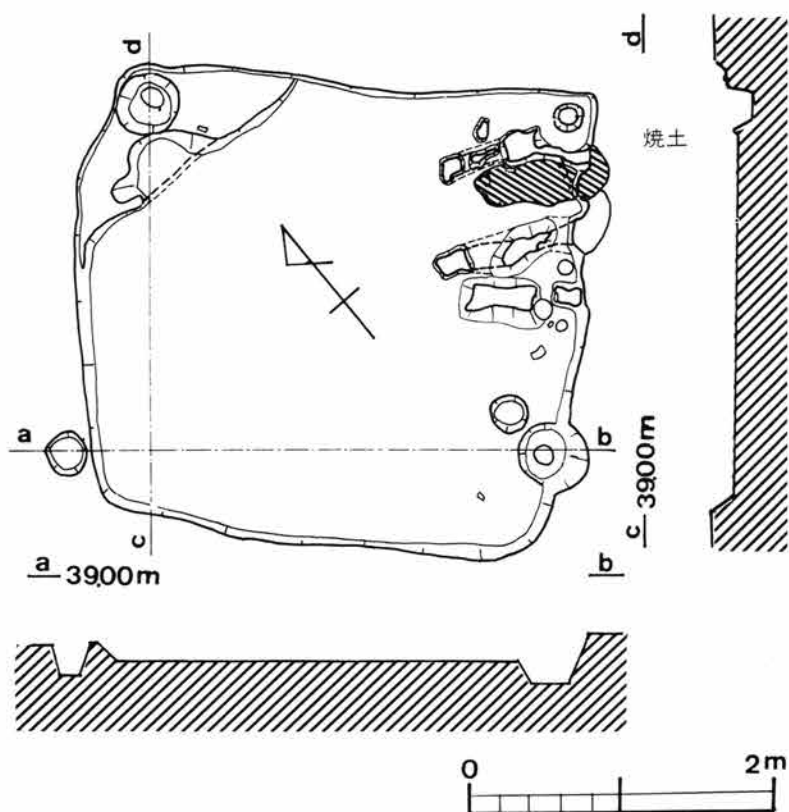
**住居2** 東西3.2mを測り、方形を呈する竪穴式住居跡である。東辺部については、明らかではなく、カマドや焼土は検出できなかった。柱穴に関しては、検討中である。



第164図 多保市遺跡遺構配置図

**住居3** 住居1・2に切られた形のもので、方形を呈した竪穴式住居跡である。南北5mを測る。幅30cmの周溝が検出された。

住居2・3については、出土した遺物に良好な資料がなく、時代決定が困難ではあるが



第165図 住居1 実測図

切り合い関係や平面プランなどから住居1と相前後した時代の竪穴式住居跡と推定される。

**住居4** ややいびつな円形を呈する竪穴式住居跡である。最大径5.7mを測る。中央やや北東よりに楕円形をした土壇を検出し、その西側で焼土部を確認した。出土遺物などから弥生時代のものであると考えられる。

**土壇** 10数個の土壇を検出した。時代・性格等は不明である。

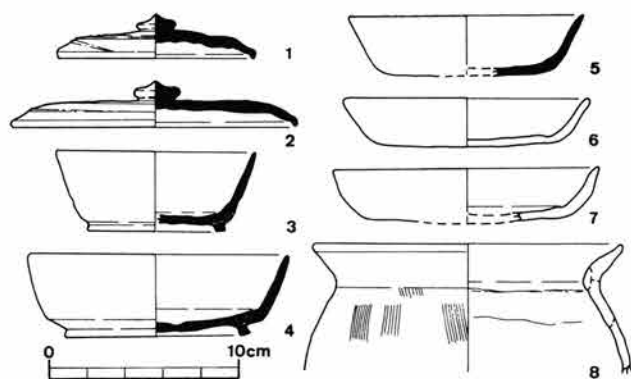
**ピット** 10数個のピットを検出したが、埋土中から出土した遺物には時代差があり、埋土の土色も異なり、現時点では掘立柱等の建物にまつまるものはない。

### 3. 小 結

以下、若干の課題を述べてまとめにかえたい。

中丹地域においては、7世紀の竪穴式住居跡は、これまで綾部市を中心に比較的まとめて検出されている。しかし、今回、多保市遺跡で調査した竪穴式住居跡のように奈良時代と考えられるものは、明確には確認されていなかった。このことは、当地における奈良





第166図 住居1出土遺物実測図

時代を考える上でも非常に貴重な成果といえる。

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査において、奈良時代に関連するものとして、これまで、多保市城跡D地点で検出された、一辺約1mの方形の掘形をもつ柱列(掘立柱建物?)や土壇が明確な例で、その他は明らか

なものはない。

この多保市城跡D地点は、当遺跡が接する丘陵の北西側に広がる谷の一段高くなった平坦地の一部である。この遺跡が丘陵をはさんだ位置にある多保市遺跡と同一集落とするとは、不明な点も多く今後の課題であるが、少なくとも近接した時期に近接したところで掘立柱建物と竪穴式住居が存在したといえることができる。この様相が、奈良時代におけるこの地域の一般的な状況であるならば、7世紀には掘立柱建物のみからなる集落が一般化するであろう畿内地域と比較して、非常に興味深い点といえる。

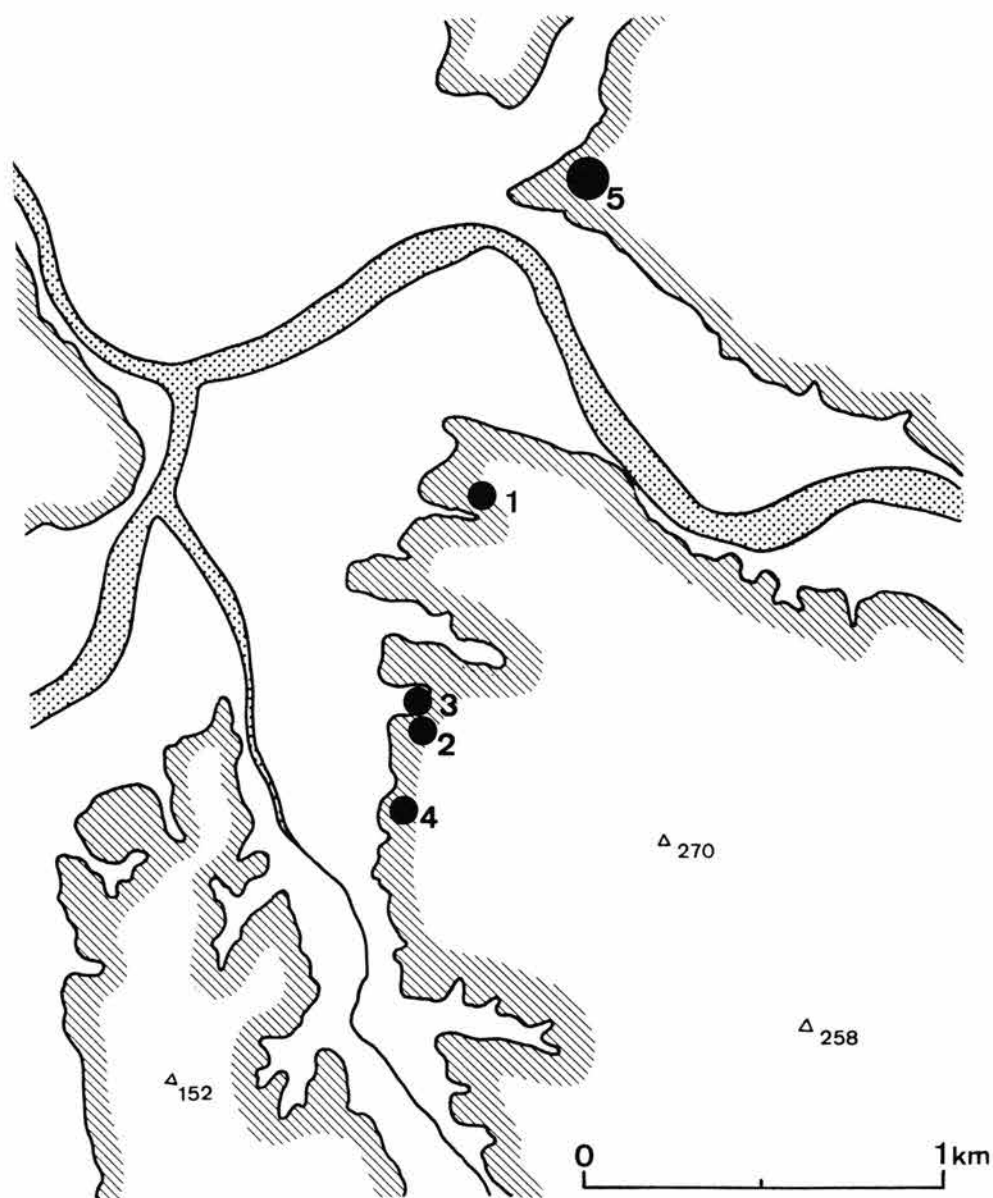
ただし、福知山市北部の石本遺跡では、奈良時代になると掘立柱建物2棟が検出されており、竪穴式住居跡は検出されていない。この石本遺跡が、掘立柱建物のみからなる集落であるかどうかは、更に検討が必要であろう。しかし、仮にそうであるならば、福知山地域の中で、掘立柱建物のみからなる集落と、先に仮定した竪穴式住居跡が併存する集落という違いも今後の検討課題であろう。

また、奈良時代の竪穴式住居跡の性格という点についても検討を加えなければならない。

以上のように、当地域における奈良時代について、調査を踏まえて若干の課題を述べた。狭小な調査面積でもあり、全体的な把握は困難な面もあるが、今後更に細かな検討を行うとともに周辺の調査を踏まえて考えていかなければならない課題は多い。

(藤原 敏晃)

第2節 古墳



第167図 本文掲載古墳分布図

1：城ノ尾古墳 2：後青寺古墳 3：小屋ヶ谷古墳 4：洞楽寺古墳 5：薬王寺古墳

## (1) 城ノ尾古墳

## 1. 位置と外形

城ノ尾古墳は、由良川の支流である土師川と竹田川の形成した狭小な谷底平野に向かって北方向に派生する丘陵先端部に位置する。古墳は、標高64～66m付近のやや緩やかな西下りの丘陵斜面に営まれており、周囲からの眺望は優れている。

調査着手前は、横穴式石室の天井石と思われる大形の石材が動かされた状況で墳丘頂部に遺存しており、その南北にすり鉢状の既掘孔が存在するといった状況であった。墳丘は大幅に削平を受けており、斜面下方の西側の遺存状況を除けば、古墳としての特に顕著な外形は留めていなかった。

外形測定の結果、南北約12m・東西約10.5mのいびつな円形状を呈していることが判明した。古墳の東側とそれに続く丘陵部との間には、幅3mの馬蹄形の平坦面が巡っており、古墳を丘陵地形から分かつための溝等の施設が存在することが考えられた。

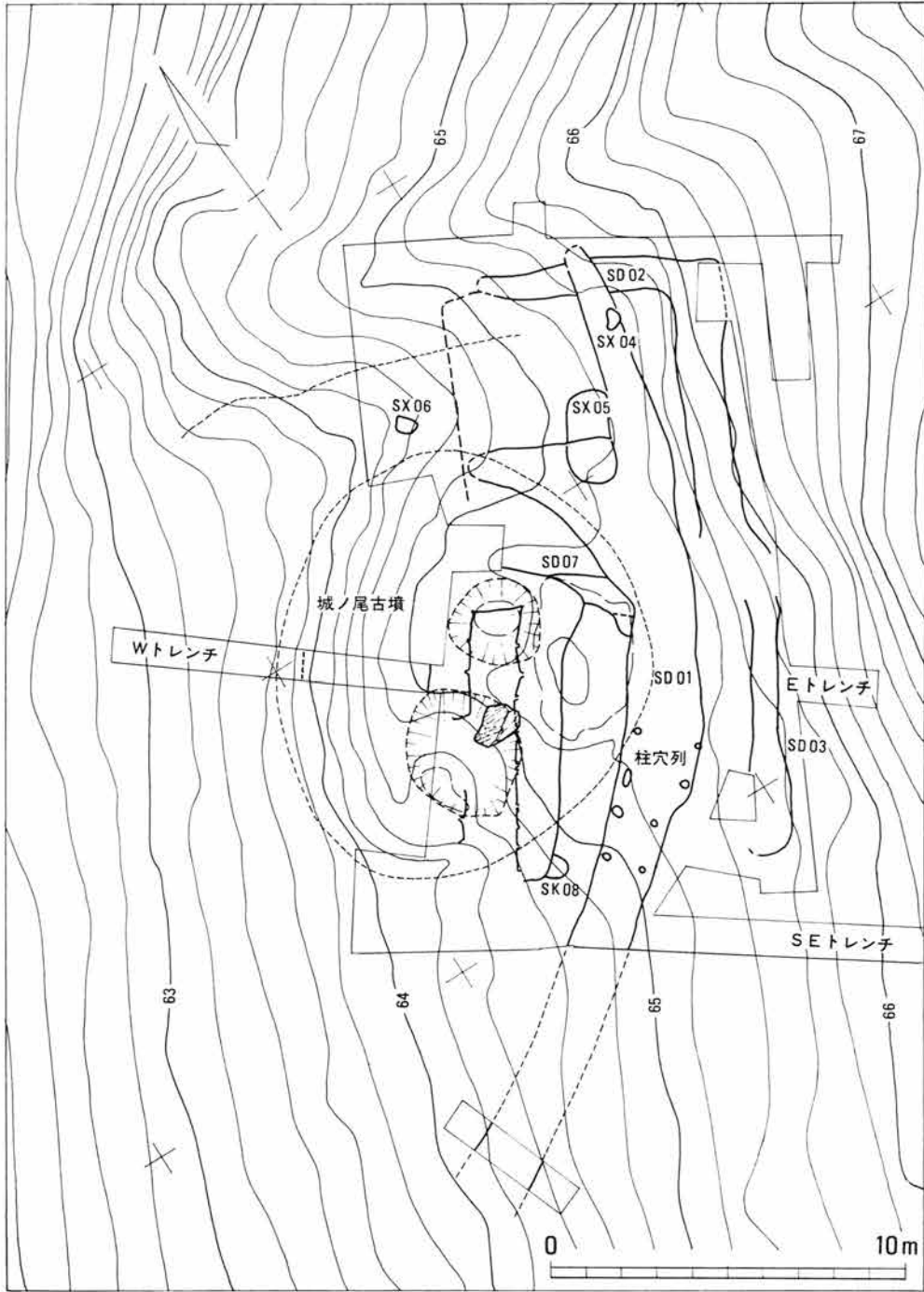
なお、北側には土塁状の高まりが上方からのびているが、この部分については、中世以降に山側から押し出された土砂の堆積であることがトレンチ調査の結果判明した。

## 2. 墳 丘

墳丘については、まず盛土の築成状況を知るため墳丘頂部を中心にトレンチを各所に入れた(第126図)。この結果、Eトレンチでは、墳丘の中心から東に約3.5mのところ幅約2.3m・深さ約0.6mの断面U字状を呈する溝(SD01)を検出した。当初、古墳に伴う周溝と思われたが、古墳盛土の上面から掘り込まれていることや、溝内から瓦器等が出土すること等からみて、古墳以降の時期に所属することが判明した。このSD01の延長と思われる溝状遺構は、墳丘北裾に入れたトレンチにおいても検出されている。また、SD01の東から(山側)では、弥生土器を含む、幅約1m・深さ0.2mの溝(SD02)が検出された。これらの遺構は、本古墳とは直接関係するものではないので、宮遺跡のところで取り上げることにしたい。

各遺跡トレンチの調査結果によれば、盛土と思われる土層は墳丘を中心にして周囲約5.6mの範囲に広がっており、これにより古墳の規模は径約11～12m前後を測るものと推定される。高さについては正確には不明であるが、現存の最高地点よりさらに2m前後高かったものと想像される。





第169図 調査地周辺地形図

### 3. 石 室

本古墳は横穴式石室を内部主体とする。石室の残存状況は悪く、奥壁・東側壁および入口部付近では、石室の基底石を残すのみであった。側壁の石組みが最もよく残るところでも3ないし4段程度である(第170図)。

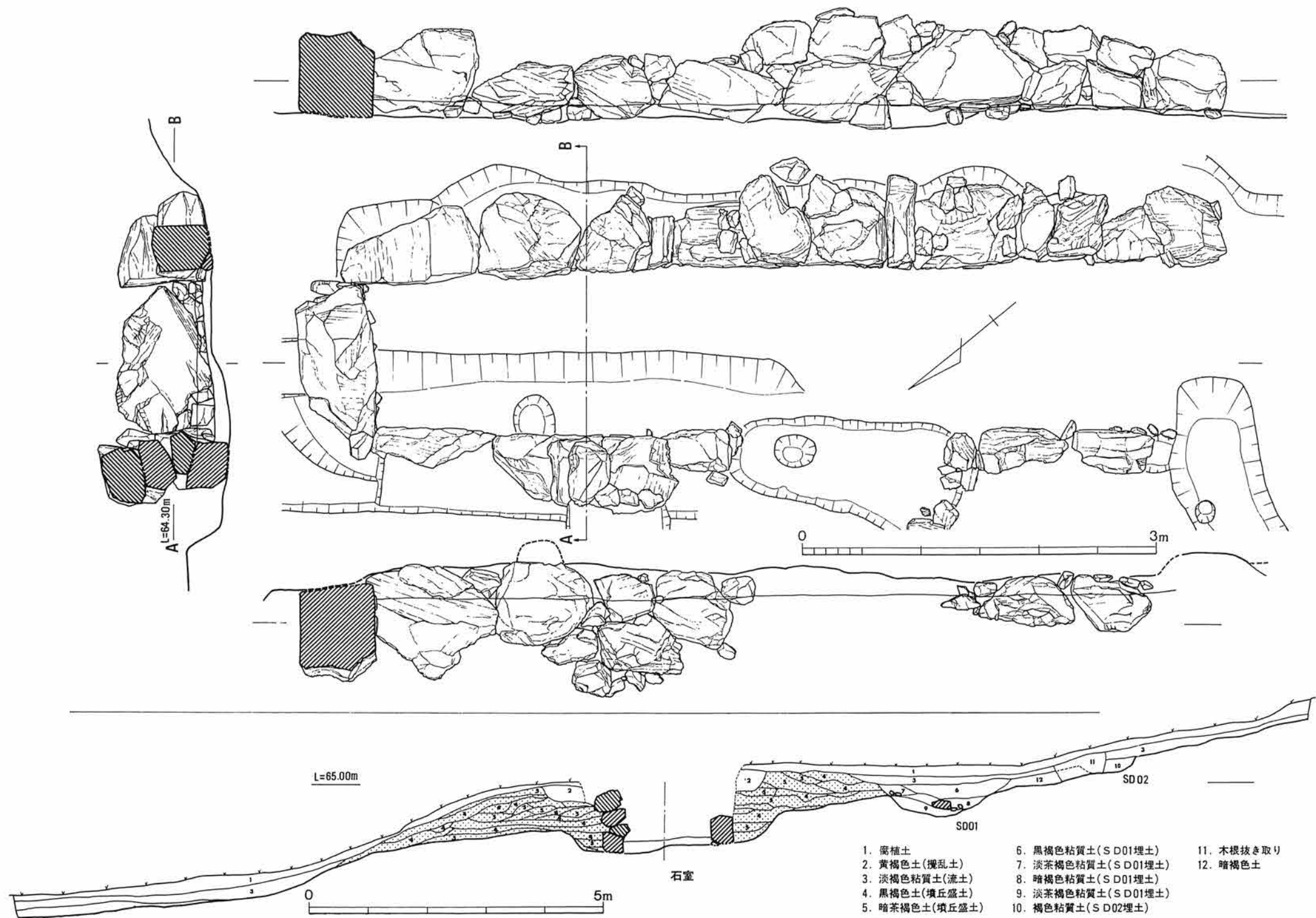
石室の平面形は狭長な長方形プランを持ち、現存長7.53m・石室奥壁幅1.2m・同開口部幅1.42mを測る。石室は南西から北東方向、すなわち丘陵のコンターラインに並行する形に主軸を置く。石室の中軸線はN39°30′Eを示す。

石室は比較的大きな自然石の平滑面を利用して構築されており、特に奥壁部は長径1.2mを測る一個の石材を基底石として据える。側壁第一段目の基底石は横長に据え、二段目からは横積みと小口積みを併用して構築されている。前述のように、遺存状態が悪く壁面上部の構築状況は明らかでないが、残存部の石積みのあり方からみて持ち送り等は少なかったものと思われる。石室平面形については、右側壁の袖位置に当たる部分の石材が抜かれており、現状では不明とせざるを得ないが、基底石の掘形の形状からみて無袖式石室と判断した。なお、石室内中央部には一部、石材が集積する部分があり、或いはこの範囲から奥半が玄室として意識されていたことも考えられる。石室開口部には閉塞石と思われる80cm大の石材が遺存していた。

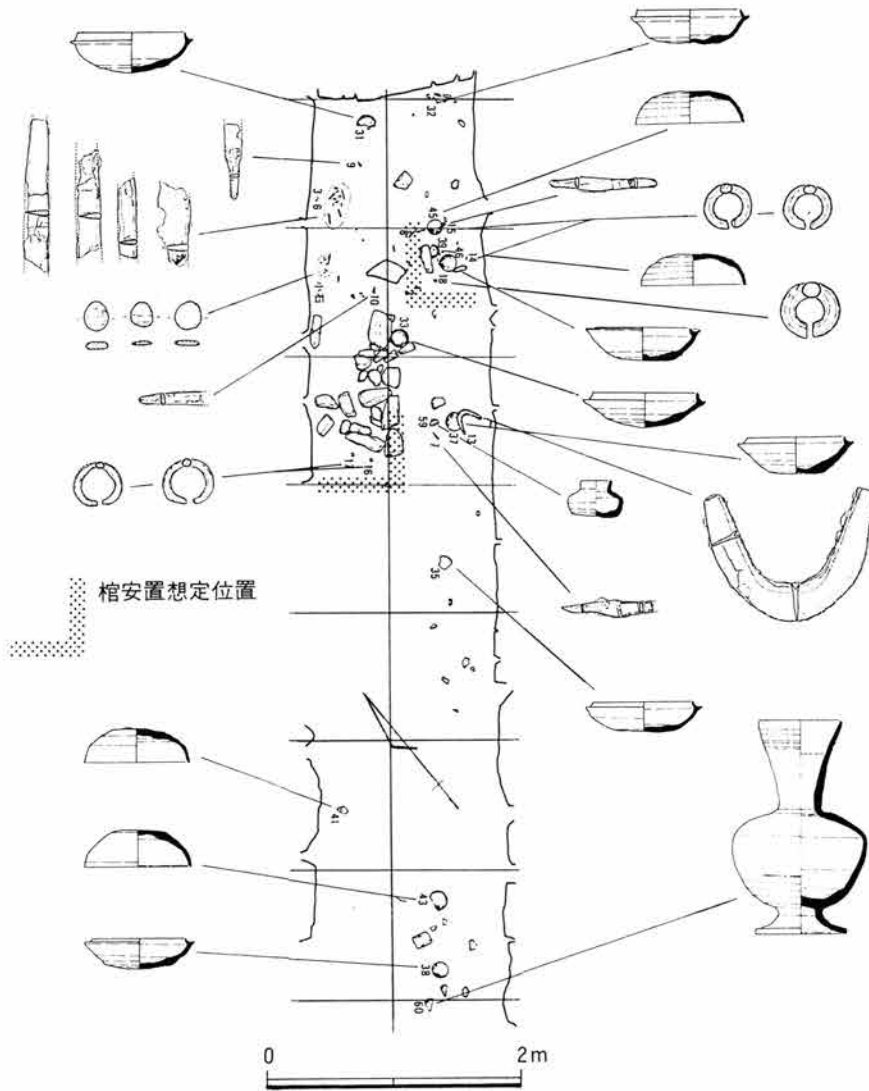
(石室の構築方法) 石室を構築するに当たっては、まず丘陵斜面に長さ8.5m・幅員3.7m前後の墓壇を掘り込む。墓壇の深さは、この地形が西下がり傾斜面に位置するために西側で深さ約30cm、東側では約55cmを測る。墓壇の底は石室の中軸線を境に、西側では一段深く掘り込まれ幅60cm程の溝状を呈している。西側壁(左側壁)の基底石上端は、掘形の上肩部と高さが揃っており、この溝状の一段下げは基底石の据え付けに係わりをもつものと考えられる。また、溝の底部からは径35cm・深さ29cmのピットが検出されている。ピットの埋土には炭が含まれており、石室構築に際しての何らかの祭祀行為に係わるものではないかと思われる。基底石と墓壇の間には、黒褐色土と暗褐色土を交互に置いて裏込めとし、さらに壁面の構築に並行して墳丘の盛土を行っている。盛土は黒褐色土と暗茶褐色土を厚さ15cm程度の互層として形成している。石室内部は、地山面に厚さ20cm程の暗褐色土を置いて床面としている。

### 4. 遺物の出土状況

石室内部は土砂の流入により完全に埋没していた。遺物の多くは破片となって石室開口部の方へ掻き出された状態で検出された(第171図)。石室床面近くで検出された遺物についても、攪乱が激しく原位置を保つものは少ない。このうち、奥壁付近で出土した遺物に



第170図 石室実測図及び墳丘断面図

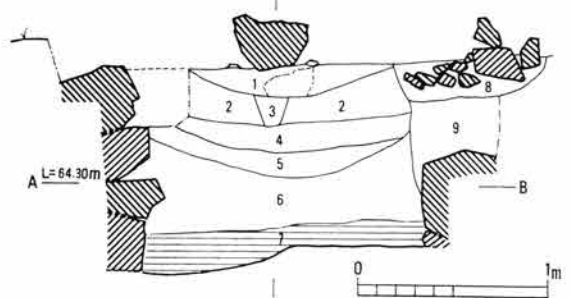
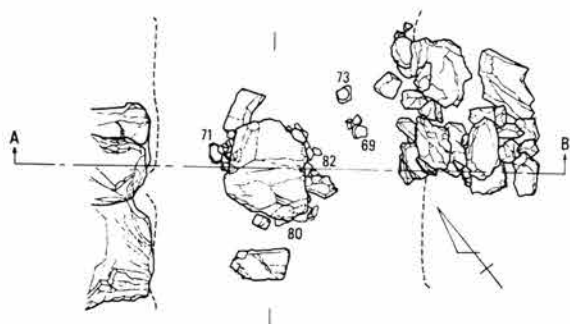


第171図 石室床面遺物出土位置図

については比較的埋葬当初の位置を留めるものと思われる。奥壁から1m程離れた右側壁の壁際からは鉄器小刀の破片が固まって出土した。その他の鉄器類は石室の各所から散乱した状態で見つがっている。耳飾類は、先の鉄小刀破片と反対側の左側壁寄りから出土した。金環一対・銀環一対が組み合っており、このすぐ北側から須恵器杯蓋が2点並んだ状態で出土した。原位置からの移動はないものとすれば、これらの土器は、耳環の出土位置から考えて、埋葬者の枕としての用途が想定される。石室中央の西側壁側からは、基石状の小丸石が固まって出土した。奥壁から入口部に向かって2~3mの範囲では床面から若干深い



た位置から石材が固まって検出された。石材が置かれている方向について規則的なものは見い出せないが、扁平な面を上にして高さを揃えており、明らかに落石とは区別される。この集石の下部からは本古墳では最も古い時期に属すると思われる須恵器の杯身が出土しており、状況からみて追葬時における棺の台石等の用途が考えられる。石室内からは、鉄釘類は一切出土しておらず、埋葬に際してはすべて組合式の木棺を用いたものと思われる。



- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色粘質土(平安時代土器出土) | 6. 明褐色粘質土         |
| 2. 黄褐色粘質土           | 7. 暗褐色土(石室置土)     |
| 3. 暗褐色粘質土           | 8. 暗茶褐色土(石材抜き取り)  |
| 4. 暗黄褐色粘質土          | 9. 黒灰色粘質土(石材抜き取り) |
| 5. 淡黒褐色粘質土          |                   |

第172図 石室2次使用面平面図(上)  
及び石室埋土土層断面図(下)

(石室2次使用面) (第172図)  
墳頂部直下から平安時代末期頃の土師器・黒色土器の一群が出土した。これらの土器群は、石

室の石材を転用した50cm大の割り石を中心にしてその周囲に配された状態で検出されており、碗類は天地を逆、すなわち伏せた状態のものが見られる。同様な土器の出土状況は石室の開口部付近でも認められた。これらの土器検出面の周辺には薄く灰層が広がっており、類例から判断して石室を再利用した埋葬施設(火葬墓)あるいは祭祀に係わる遺構と考えられる。

これらの石室2次使用面から石室床面までは約80cmを測る。石室床面までの堆積土中には、先に述べたように須恵器の破片等が多数含まれていた。特に石室の開口部から前庭部付近にかけて割り石片とともに多数の遺物破片が散乱した状態で出土しており、石室の石材抜き取りの際に内部の土砂と一緒に掻き出されたものである。

## 5. 出土遺物

城ノ尾古墳から出土した遺物は以下の通りである。

武器 鉄小刀 4以上

- 鉄刀子 4 枚
- 鉄鏃 2 枚
- 農工具 鉄製U字形鋤先 1
- 装身具 金環 1 対
- 銀環 2 対
- (基石状小丸石) 11
- 土器類 須恵器(杯11・杯蓋11・高杯1・甕3・埴5・台付長頸壺1・長頸壺1・直口壺1・提瓶3・平瓶2・甕片多数・不明器種1)
- 土師器(高杯・杯片)

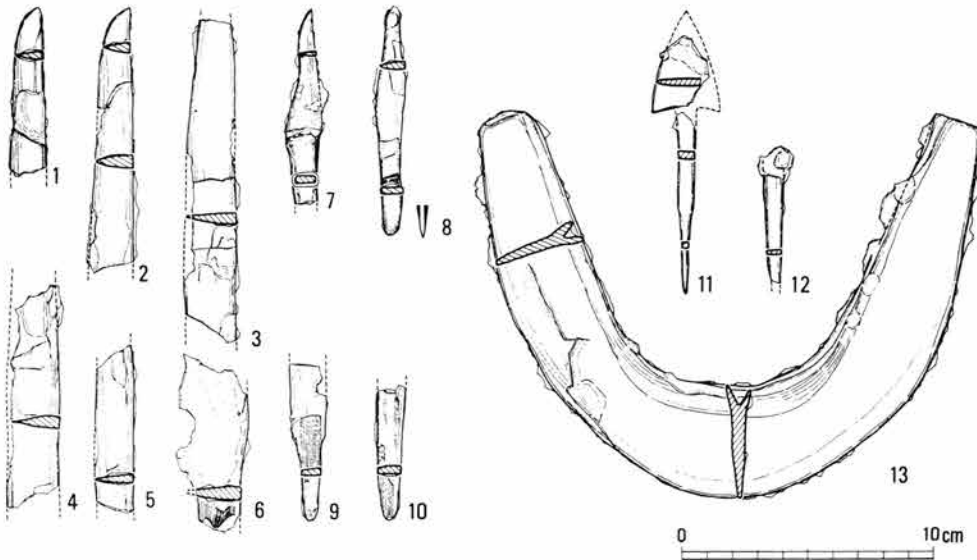
(石室2次使用面)

- 土器類 黒色土器 (碗10以上)
- 土師器 (碗15・皿3・鉢1・甕片)
- 陶器破片

鉄製品(第173図)

鉄小刀 刀子と直刀の中間位の長さをもつものを呼ぶ。1は刃幅1.2cm, 2は同1.7cmを測る, 鈍の破片である。3~5は刀身部の破片である。3は刃幅2cmを測る。6は茎部を含むもので, 一部に木質が残る。

鉄刀子 7は残存長7.7cm・刃幅1.2cm・茎幅1cmを測る。刀身部は中央部でやや内湾し, 茎部には, 樹皮状のものを巻く。8は全長9cm・刃幅1cm・茎部長3cmを測る。刃部は鈍が



第173図 鉄製品実測図

すはまる形態をもつ。9・10は刀子茎部の破片で、先端部に木質が残る。

鉄鏃 11は刃部が三角形を呈する平根式の形態をもつものである。全長(復原)11.2cmを測る。12は茎部の破片である。

農工具 鉄製U字形鋤鍬先(13)は比較的残りがよいものである。全幅20cm・長さ15.5cm・刃幅4.5cmを測る。刃部内縁には木質部本体をはめ込むためのV字形の切り込み溝

を作る。刃部両端部は、やや方形を呈している。

装身具(第174図)

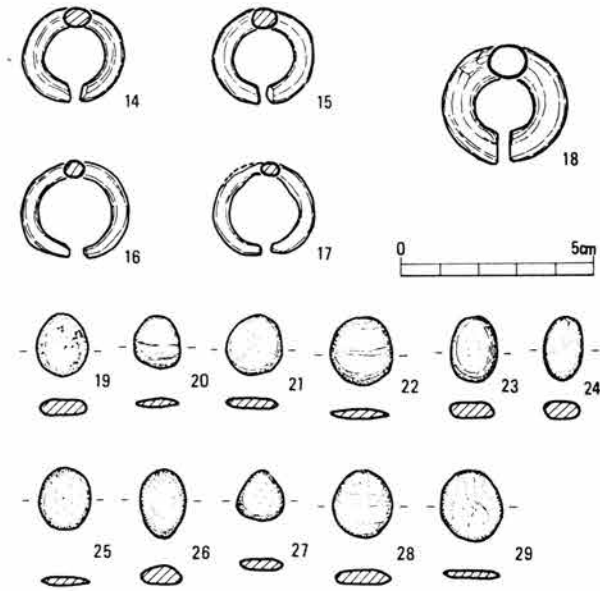
金環 14・15は一对のものである。銅地に鍍金し、発色は良好である。断面形は扁平な円形を呈する。14は長径2.7cm・短径2.4cm, 15は長径2.7cm・短径2.5cmを測る。

銀環 16・17も一对のものである。表面の銀箔が剝離し、環心のみみうじて留める。風化のためか全体に白色化する。16も同様、銀環であるが中空のものである。大型品で、断面形は楕円形を呈する。円環の端部は円板状のもので蓋をしている。長径3.3cm・短径3cmを測る。これに対応するものが破片のみ出土している。

碁石状小丸石(19~29) 長径(最大1.8cm)(最小1.3cm)・短径(最大1.6cm)(最小0.95cm)を測る扁平な円形の小石である。石の材質は、砂岩ないし粘板岩であり、色調は暗灰白色ないし暗緑灰色を呈する。河床に産出する自然礫を用いたものであるが、23は石の側面を人為的に磨かれた痕跡を残している。石室内から固まって出土しているので、明らかに副葬品として捉えることができる。用途については明らかでないが、装飾品または鎮魂石等として被葬者の衣服に付けられていた可能性がある。

土器類(第175・176図)

土器は須恵器がそのほとんどを占める。土師器については、出土数も少なく、破片のため器種の不明なものが多い。



第174図 装身具類実測図

## (1) 須恵器

須恵器には、杯・杯蓋・高杯・甕・埴・埴・台付長頸壺・長頸瓶・直口壺・提瓶・平瓶・甕等の器種がある。

杯(30~39) 杯は形態上3種に分類できる。

杯A 30~33が含まれる。口縁部の立ち上がりがあり、後述する2種に比べて高く、口径・器高とも大きい。底部は丸みを持ち、外面1/2前後まで回転ヘラ削りを行う。30・31は、内面が立ち上がり部で屈曲を持たずにそのまま底部に移行する。口径は11.2~12.1cm、器高は3.7~4.5cmの法量をもつ。

杯B 34~37がある。口縁部の立ち上がりは杯Aに比べやや内傾する。口縁端部は丸く収める。36は、蓋受け部の平坦面に一条の沈線を巡らしている。37は、平坦な底部をもつ。口径は11~12.3cm、器高は3.5~4.1cmの法量をもつ。

杯C 38・39である。口縁の立ち上がり、口径の法量とも矮小化の傾向をもつ。蓋受け部はU字形を呈している。口径は10.5cm、器高は3.5cm前後を測る。

杯蓋(40~50) 杯と同じく形態上3種に分ける。

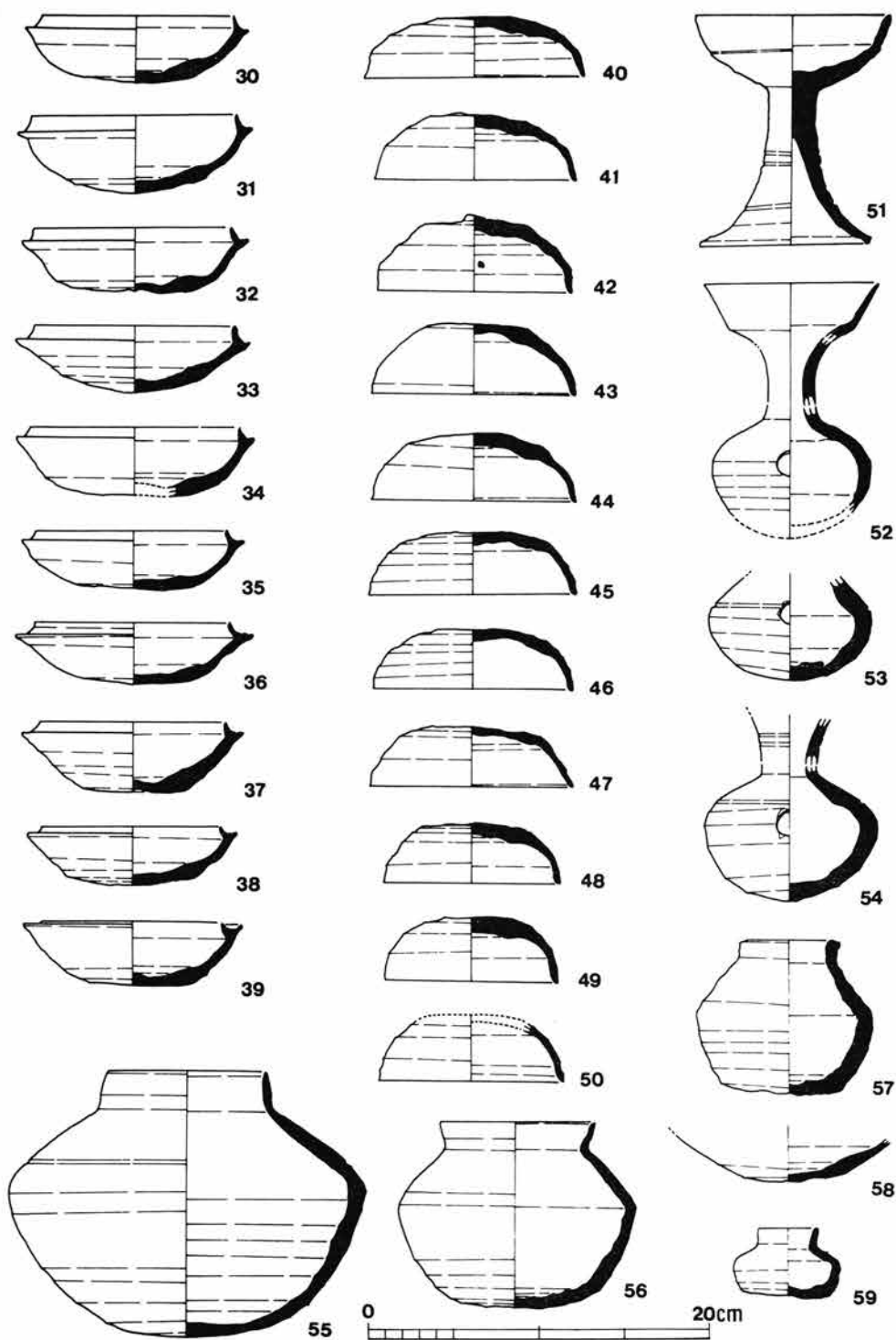
杯蓋A 40は大型のもので、天井部の作りは扁平である。口縁端部まではなだらかに移行する。天井部の回転ヘラ削りは約1/2の範囲に及ぶ。今回出土した須恵器のほとんどが軟質で、色調も通常の灰色ないし青灰色を呈しているのに対し、40は表面が黒褐色を帯び焼成も良好であるのが特徴である。

杯蓋B 41~47が含まれる。口径に比べて器高が大きい特徴をもつ。42の天井部は回転ヘラ切りの後、未調整のままである。45・46は軟質・灰白色を呈しよく似た要素をもつ。同一窯で焼かれたものと考えられる。法量は口径11.3~12.2cm、器高3.5~4.5cmの範囲に含まれる。

杯蓋C 48~50が含まれる。口径の法量はBよりさらに小さくなる。口縁端部はやや肥厚し内湾気味である。天井部はヘラ切りの後、未調整のままである。本類は形態からみて、埴類の蓋として用いられた可能性もある。口径は10.2~10.8cm、器高は3.5~3.8cmの範囲である。

高杯(51) 長脚の無蓋高杯で小形のものである。口縁部は体部から屈曲した後、直線的に立ち上がる。脚部には中央に2条の沈線が巡り、上下を二分する。透かし孔は施されていない。口径11.5cm、器高13.4cmを測る。

甕(52~54) 52は球形の胴部から細くのびた頸部が大きく屈曲し、口縁部に向かって外上方に広がってゆくものである。口径(復原)10.2cm・胴部径9.3cm・器高14.8cmを測る。53は胴部の破片である。胴部内面の底部には、上部から先の丸い棒で押した凹凸痕が残る。



第175図 須恵器実測図 (1)

胴部最大径9.5cmを測る。54は口縁頸部に2条の沈線をもつものである。底部端はやや突出気味である。53と同じく胴部にも1条の沈線をおく。53は墳丘北側の中世溝(SD01)から出土したもので、石室攪乱時に混入したものと思われる。

卮(55~59) 卮は容積・口縁部の形態の差異により4種に分けられる。

55は、緩やかな丸みをもつ丸底の体部に、やや内傾する短い口縁部をもつものである。体部上半の肩の線は直線的である。口径9.4cm・胴部径2cm・器高15.8cmを測る。

56は、短く外反する口縁部をもつものである。口縁端部は丸く収める。体部中央はやや角張り稜をなしている。口径9.1cm・胴部径14cm・器高11cmを測る。

57は、口縁部が直立し、口縁端部は厚く、面を作る。体部肩の線は上方にかけてやや外反気味の傾向をもつ。底部は平坦で、全体に小ぶりであるが安定感を与える。器壁の調整は他の例に比べ粗雑である。口径5.9cm・胴部径10.1cm・器高9cmを測る。58は底部の破片である。

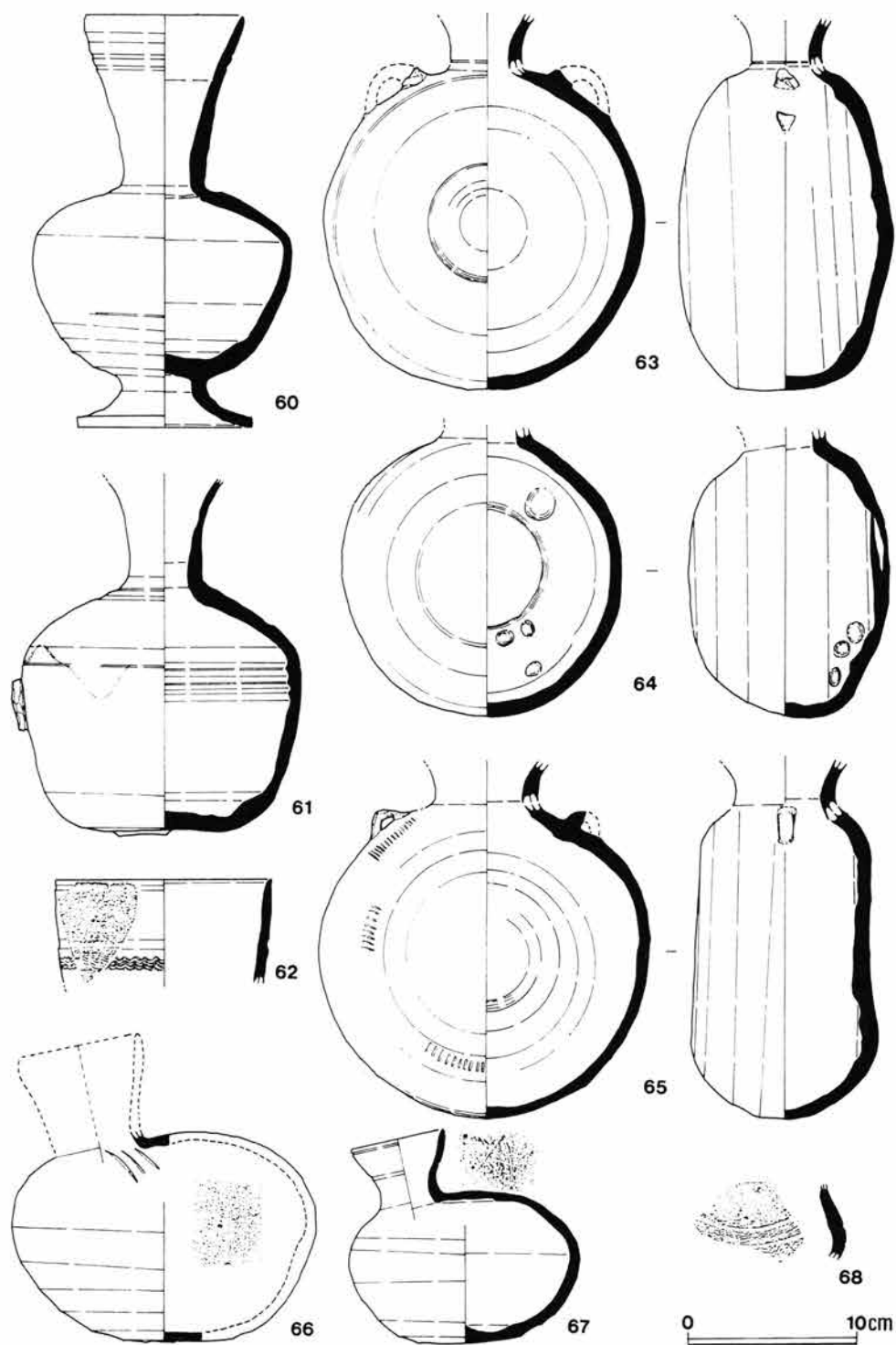
59はミニチュア壺に属する。短く直口する口縁部をもつ。端部には面を作る。胴部は扁平で断面は箱形に近い。本例と同種の器形をもつものは、子持壺あるいは子持高杯等の装飾付須恵器に付属する器物にみられるが、独立した個体として用いられるのは珍しいものである。口径3.5cm・胴部径6.3cm・器高4cmを測る。

台付長頸壺 60は口縁部が外上方へゆるく外反し上半に2条の凹線を巡らす。口縁端部は鋭角的に終わる。体部は下半部が丸みを帯びるが、上半部は肩部にかけて大きく張り出す。脚部は低平で外側へ大きく広がっている。口径9.4cm・胴部径15.2cm・器高24.2cmを測る。

長頸瓶 61は口縁端部のみ欠失する。緩やかに外上方にのびる頸部をもち、頸部から体部肩部へはなだらかに移行する。体部は円筒形を呈しており、底部は平底で安定する。肩部のやや下に1条の細い沈線を施しているが全周しない。器壁には、緑色の自然釉が掛かり、体部には須恵器小片が溶着する。他の壺類に比べ器形に特色をもち、周辺の古墳では福知山市向野西12号墳や綾部市高谷4号墳等で同種の須恵器が出土している。胴部径16.3cm・残存高20.5cmを測る。

直口壺 62は口頸部の破片である。頸部下半部に4条のクシ描き波状文を施している。

提瓶(63~65) 提瓶は全形の不明な64を除いてすべて環状の把手を有するものである。このうち、63は胴部側面の張りが少ないもので、欠落部分の形状からみて比較的大きな環状把手をもつものとおもわれる。胴部最大径19cmを測る。64は前者に比べ体部の側面の張りが大きい。胴部最大径は16.5cmを測る。65は大型品である。体部側面は扁平で、中央部が皿状にやや凹む形状をもつ。体部の表面には同心円形に施された平行タタキメ痕が残る。



第176図 須恵器実測図 (2)

胴部最大径19.5cmを測る。

平瓶 平瓶には2種類認められる。66は扁平な体部をもつ大型品である。口頸部は胴部との接合位置から欠落している。体部の上面には「III」のカマ印を入れている。胴部最大径18cmを測る。67は小形のもので、体部は卵形を呈している。口頸部は外反気味に立ち上がり、中段で角度を変え口縁端部に向かって内湾気味にのびている。口縁端部の直下と中程に2条の浅い沈線を施し、また、胴部上面に「X」状のカマ印を入れる。口径5.6cm・胴部最大径13.7cm・全高12.8cmを測る。

その他 68は胴部の小片で、器壁に楕円描きの波状文を施す。器種は不明である。

## (2) 土師器

土師器については、量的にも乏しく、器種等不明なものが多い。わずかに高杯・杯等が掲げられる。

高杯は、脚柱部の破片が出土している。中空のもので、上部に杯部への挿入部を残す。本例は石室外前庭部の攪乱層から出土したものであるが、当古墳に伴うものと考えられる。杯類には小片であるが、内面に細かい暗文を施すものがみられる。

## (石室2次使用面出土の土器)(第177図)

石室埋積土の上半部から出土した土器群は、石室を再利用した埋葬施設に係わるものである。土器類には、土師器・黒色土器・陶器がある。

### (1) 土師器

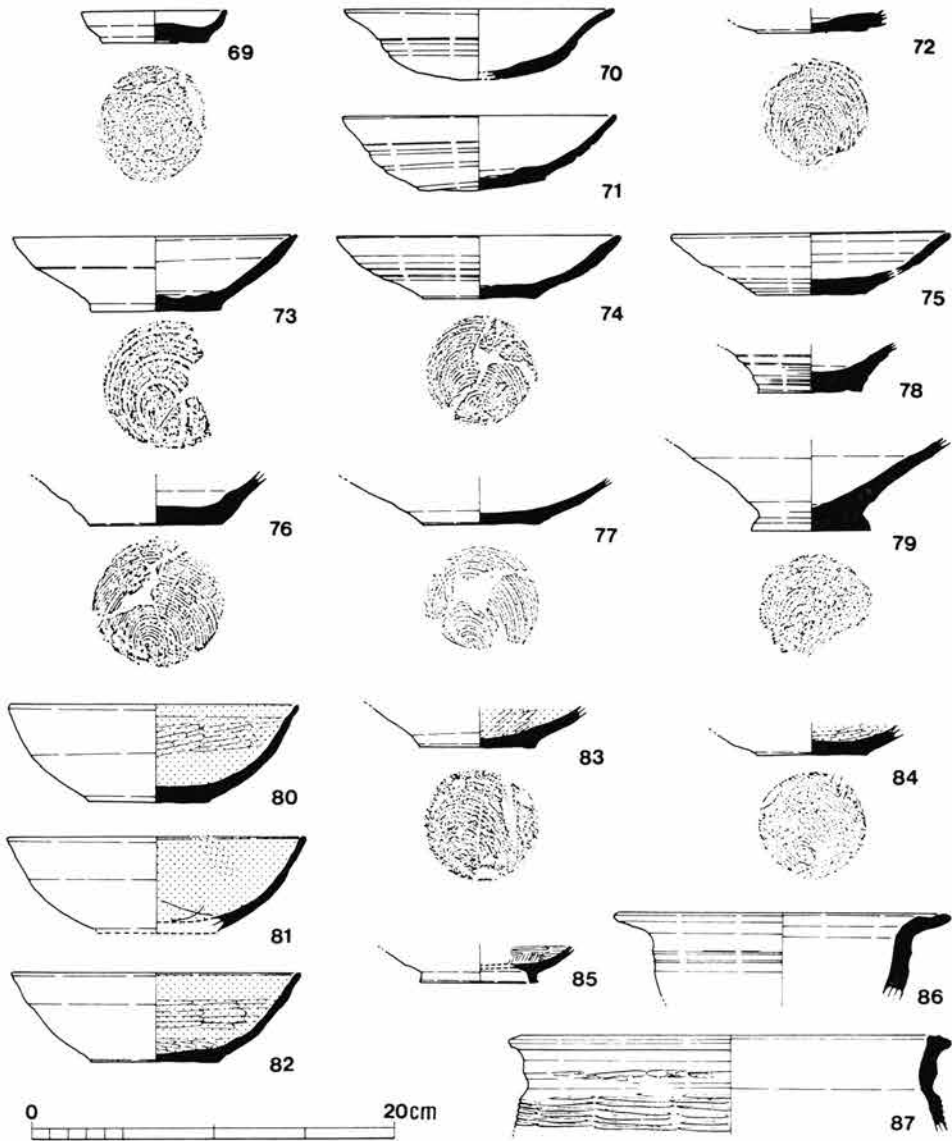
土師器には、皿(A・B)、椀(A・B・C)、甕等の器種がみられる。

皿A 69が含まれる。小型品である。ロクロによって成形されており、底部には回転糸切り痕を残している。口縁部は短く立ち上がる。底部はわずかに高台風を呈している。色調は褐色で、胎土に少量の砂粒を含む。口径8cm・器高1.8cmを測る。

皿B 70・71が含まれる。ロクロ成形になるものである。底部は丸みを帯び、ヘラ切りによる切り難しと思われるが、摩滅のため不明な部分が多い。70の口縁部は、体部の中程から屈曲し斜め上方にのびる。71は底部が低い高台状を呈する。体部には2条の沈線を巡らす。色調は褐色を呈する。70は口径14.8cm・器高3.8cm、71は口径15.1cm・器高4cmを測る。

椀A 72～77が含まれる。ロクロ成形になるもので、底部には回転糸切り痕を残す。平底であるが、わずかに高台状をなすもの(73・74)もある。73・74の体部は、底部から直線状に外上方にのびる。口縁部の下半はやや肥厚する。内外面はともにナデ調整である。74は体部に2条の細い沈線を巡らす。いずれも色調は淡褐色を呈し、胎土には若干の砂粒を





第177図 石室2次使用面出土土器実測図

含む。口径は15.5~15.7cm、器高3.5~4.1cmを測る。

碗B 78がある。碗Aに比べ、底部の器壁が厚く、高い高台状をなす。体部の立ち上がりは前者より急である。

碗C 79は外に強く張り出す高台をもつ。底部は回転糸切りである。体部はまっすぐに外上方にのび、鉢状の器形になる可能性がある。色調は褐色を呈し、胎土には粗い砂粒を含む。

甕 86は口縁部が外側に水平に張り出すもので、口縁端部は丸く仕上げている。体部は下方ですばまり、やや小型の部類に属する。内外面ともナデ調整で、体部上半部には2条の細い沈線を巡らしている。復原口径は13.6cmを測る。

## (2) 黒色土器

黒色土器には碗(A・B)の二種がみられる。いずれもいわゆる黒色土器A類(内黒)に属するものである。

碗A 80~84が含まれる。内面全体に炭素を付着させ黒色化したものである。炭素の付着面は口縁端部の外面にも一部及ぶ。底部はすべて回転糸切りによる切り離しを行う。体部は若干内湾気味に外上方にのび口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。底部と体部との境はナデを行い高台状をなしている。内面はていねいなヘラミガキを施すが、外面はナデによる調整を行う。81の内面底部付近には「×」状のヘラ描きをもつ。全般に色調は暗褐色ないし褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。先に述べた土師器碗A類に比較し全体に容量が大きく、口径16.0~16.5cm・器高5.0~5.3cmを測る。

碗B 85は、張り付けの輪高台をもつもの。内面は細かいヘラミガキ、外面はナデによる調整を行う。内面は黒色、外面は褐色を呈している。胎土は精良である。

## (3) 陶器

中世陶器に属する甕(87)が1点ある。口縁部は断面三角形状を呈し、端部はL字状に強く外側に張り出す。頸部の中央には稜をもつ凸帯が巡る。体部の外面には平行線状のタタキメ(3~4条/cm)を施している。器壁外面は光沢をもつ暗紫色、同じく内面は淡灰色である。酸化焰焼成により比較的堅く焼き締められている。復原口径24.4cmを測る。

## 6. 小 結

### (1) 築造時期

城ノ尾古墳は今回調査の結果、全長7.35mを測る無袖式横穴式石室を内部主体とすることが明らかとなった。墳丘については、削平が著しく墳形等明らかでない部分が多いが、盛土状況から概ね径12mの円墳であったものと想定される。石室内は後世に墓として利用されており、また石材の抜き取りにより大幅な攪乱を受けていた。このうち石室奥半部から出土した副葬品については、比較的埋葬時の位置を留めるものと判断された。副葬品のうち鉄製U字形鋤先農具や碁石状小丸石は、同種古墳からの出土例に乏しいものと思われる。前者は比較的大形品で、古墳築造に使用されたものか。後者については呪術的な性格を帯びるものと考えられる。耳飾類は金環1対・銀環2対が検出されており、耳飾類の遺存数からみれば少なくとも3体以上の埋葬があったことが窺われる。

出土した須恵器杯・杯蓋類は、形態上大きく3種に分類した。和泉陶邑窯跡群の編年を適用すると、杯A・杯蓋A類はⅡ型式4段階から5段階、杯B・杯蓋B類は同5段階、杯C・杯蓋C類は同6段階にそれぞれ相当するものと考えられる。畿内における古墳時代末期の須恵器の型式編年に実年代を与える作業については今なお議論の対象である。特に隣接する型式相互の重複時間幅については考慮に入れる必要があるが、これまでの編年観からみて城ノ尾古墳の築造時期は、概ね6世紀後半から末頃に比定され、その後、7世紀前半頃まで2～3回の追葬が行われたものと考えられる。

当地域においては今回の近畿自動車道関係遺跡の事前調査によっていくつかの古墳が発掘調査されている。城ノ尾古墳は、これらの調査の古墳のなかでは最も築造時期の遅れるものと考えられ、当地域の古墳時代終末の様相を知る上に貴重な資料となるものである。

石室は破壊の進行とともに内部は土砂によって埋没するが、後世に再度利用されたことが明らかとなった。墳丘中央部直下の石室埋土上面から出土した土器類は、底部糸切りを施す土師器および黒色土器からなるものであった。これらの土器類は、京都北部地域では畿内の瓦器に代わる日常什器として盛んに使用されたものである。今回出土した土器類は、同種土器の型式編年からみておよそ12世紀後半から13世紀前半に所属するものと想定される。黒色土器と土師器の出土比率は、ほぼ同じ程度であるが、黒色土器が碗のみで構成されるのに対して、土師器は器種・法量とも変化に富んでいる。また、黒色土器碗の器形等は畿内における初期の瓦器碗に類似する。本例のように、横穴式石室から瓦器等後世の遺物が検出される例は多数報告されており、埋葬または仏事に関する祭祀の場として再利用されたものと考えられている。

(辻本 和美)

## (2) 後青寺古墳

## 1. 位置

後青寺古墳は、大内川と呼ばれる山間の一小河川が形成した狭小な谷平野を囲む丘陵上に位置する。この丘陵は、谷平野に向かって東から西方向に派生する幾本かの丘陵支脈の一つで、古墳は、その尾根先端部に近い、標高約80m付近に立地する。古墳の立地する部分では、幅5m前後の痩せ尾根状を呈しており、現在その稜線を山道が通っている。尾根筋から両側の斜面は急傾斜を示しており、調査以前の外形観察によっても、後で述べるように古墳の存在を想定することはできなかった。この古墳は、同じ丘陵上に位置する城館跡の調査によって検出されたものであり、付近の小字名をとって後青寺古墳と呼称することにした。

## 2. 外形と規模

後青寺城館跡の調査の項で述べるように、城館背後の丘陵尾根部に寺跡に付随する墓地跡等の存在を想定してトレンチをのぼしたところ、2基の古墳埋葬主体部を検出した。調査前の状況では、古墳の存在を示すような顕著な高まりは確認することはできなかった。

トレンチ調査で検出した埋葬主体部は、腐植土直下の地山面で検出され、棺内の副葬品である須恵器がすぐ現われたことわかるように、古墳上面は大幅な削平を受けていた。ただし、尾根筋の斜面下方部においては、一部で盛土の痕跡が認められた。このように、地形の改変が著しく、古墳の正確な規模・形状等不明な部分が多いが、現地地形を仔細に観



第178図 調査地位置図

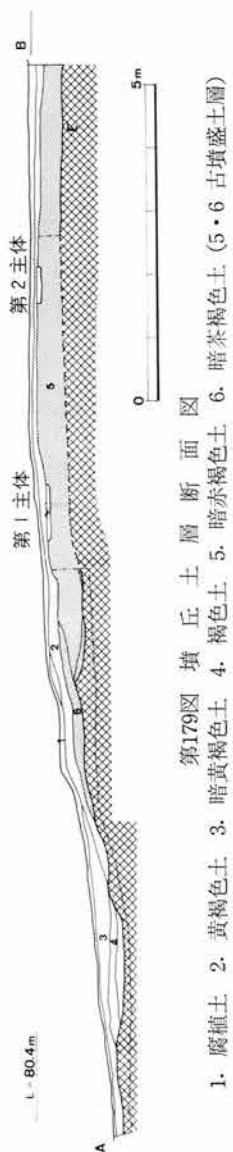
察すると、尾根の南斜面側にわずかに段状の傾斜変換点が認められ、これがもとの墳丘の痕跡を示すものと仮定すると、長軸が約13m前後の規模を有するものに復原される。墳形については、特に北側の地形の崩れが激しく断定するのは難しいが、尾根筋の形状や幅、南斜面の現況からみて、通常の円墳とするより方墳の可能性を考えておきたい。尾根斜面の下方に入れたトレンチ部では、浅い堀割り状の落ち込みを検出した。この堀割り状遺構から、古墳主体部検出位置までは、約10mの距離をもつ。掘り込み状遺構の埋土は、墳丘の流失土と思われるものであり、城館跡に伴う施設とするよりも古墳に係わる可能性が高い。この堀割り状遺構を古墳裾の周溝と仮定して規模の復原を行うと、一辺20m近くになり、先に想定した古墳規模に比べかなり大きくなる。しかし、この掘り込み状遺構については、尾根下方の一部で検出されたのみであり、周囲の状況からみても古墳の周囲を巡るものにはなりそうにない。おそらく、この遺構の性格については、古墳と丘陵部とを区画するための施設として掘られたものと想定される。なお、調査範囲からは、葦石・埴輪等の外部施設は認められなかった。

### 3. 埋葬施設

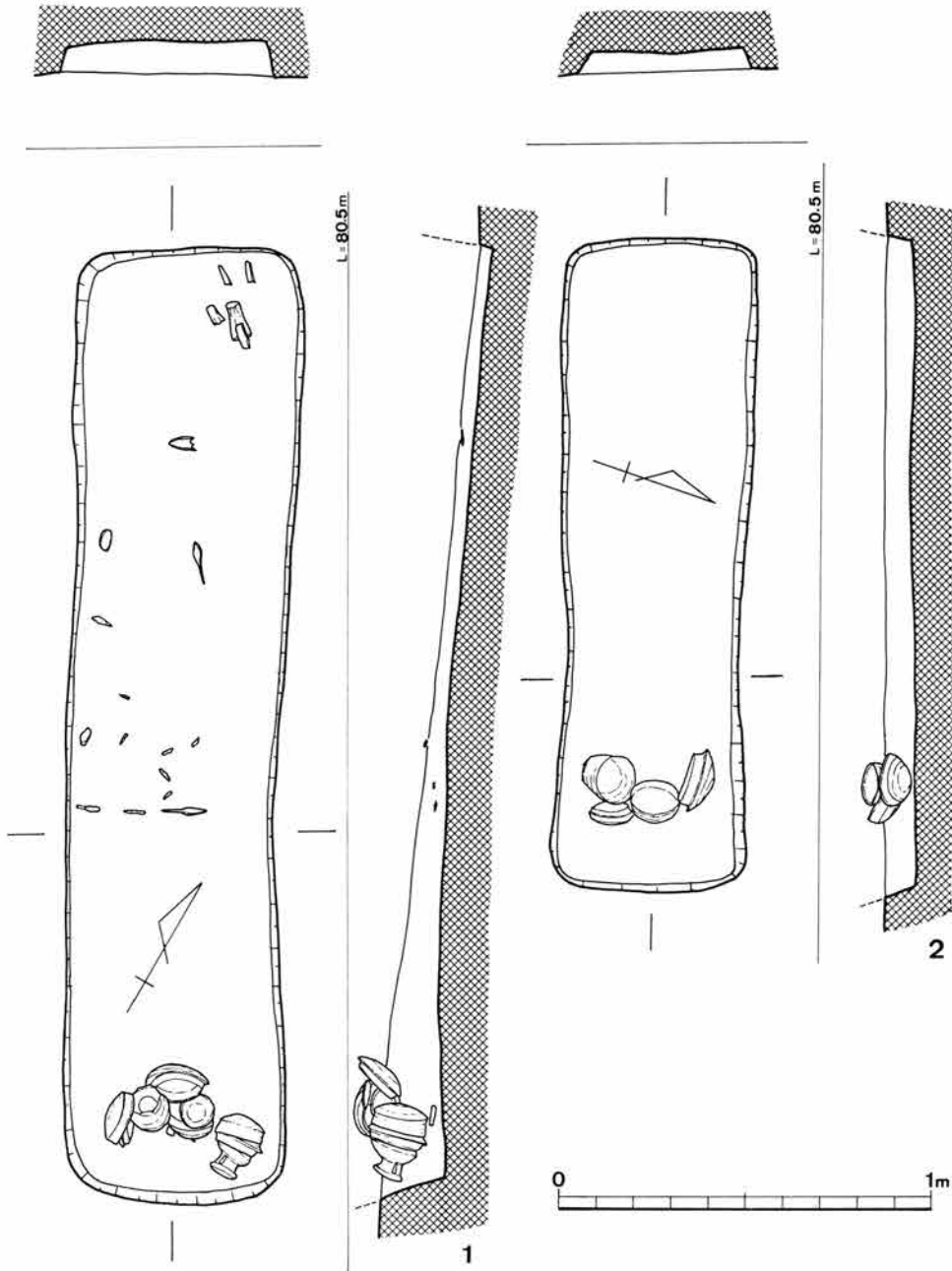
今回検出した埋葬施設は2基であり、いずれも木棺を直葬する構造をもつものである。丘陵尾根線に並行するものを第1主体部、その南東に位置し、尾根線にやや直交するものを第2主体部と呼ぶ。

#### 第1主体部

形状・規模 丘陵尾根筋のやや下方で検出したもので、尾根線にほぼ並行して長軸を置いている。上面は大きく削平を受けており、表土の腐植土をはずした段階で、棺内遺物である須恵器の上縁が現われた。棺を安置する土壇の平面形は、長方形を呈しており、長軸を北西から南東の方向(N31°W)に置く。本来の棺の規模は土壇に相応するものと思われ、全長2.5m、幅は北辺で0.58m、南辺で0.55mを測る。深さについては前述の理由により、約10cmが遺存するにすぎない。棺の底部は平坦で、東端が高く、西側にむかって緩やかに傾斜する。形状から推測して組合式の箱形木棺が安置されていたものと思われる。棺外の墓



第179図 墳丘土層断面図  
1. 腐植土 2. 黄褐色土 3. 暗黄褐色土 4. 褐色土 5. 暗赤褐色土 6. 古墳盛土層



第180図 主体部 実測図

1. 第1主体部, 2. 第2主体部

坛施設の有無等については明らかでない。棺内の埋土は、暗褐色を呈する粘質土であり、粘土塊・朱等の痕跡は特に認められなかった。

遺物の出土状況 棺内の副葬品としては、須恵器等の土器類と鉄器類がある。須恵器は、

杯(3)・杯蓋(3)・台付長頸壺(1)・同蓋(1)・臬(1)がある。鉄器類には、鉄鎌(平根式2・尖根式7以上)等の武器類のほか、鉄斧(1)・鉄鎌(1)・鉄刀子(3以上)等の農具・工具類がある。

須恵器は、棺の東端で固まって検出された。杯は身・蓋一組の3つのセットがあるが、出土の状況では、必ずしも上下組み合わせさせておらず、一見乱雑な配置であった。棺の南東隅にある台付長頸壺は、杯身が蓋状にかぶさっており、さらにその杯身の底部に杯蓋がかぶさる状態で出土した。これらの須恵器群は、いずれも棺底から若干浮いた状態で検出され、また、不安定な状態で出土していることなどから考えて、本来棺上に置かれていたものが、棺の腐朽により内部に落ち込んだものと推定される。

須恵器類に対し、鉄器類は、棺内の北辺部にかけて出土した。鉄斧および刀子類は、棺の北端に近い部分から出土しており、原位置をほぼ留めるものと思われる。しかし鉄鎌については、棺の中央やや南寄りから北側にかけて散乱した状態で出土しており、また、破損の状態を考慮に入れると、本来の位置からは、かなり動かされているものと思われる。

## 第2主体部(第180図)

形状・規模 前述した第1主体部北東側、やや高い位置で検出したものである。第1主体部が丘陵尾根筋に並行して長軸を置くのに対し、本主体部は、直交する形に長軸を置く。これも遺存状況が悪く、棺底に近い部分を確認できたにとどまった。棺の平面形状は、長方形を呈しており、全長1.73m・幅0.52mを測る。棺の壁高は、約9cm程度が遺存する。主軸の方位は、N72°Eを示し、第1主体部の棺北端と本主体部の棺西端とは、約1.2mの距離をもつ。棺底はほぼ平坦であり、棺の形状は箱形木棺が考えられる。棺外の墓坑施設の有無については不明である。また、棺内からは、粘土塊や朱等は検出されなかった。

遺物の出土状況 棺内の副葬品としては、須恵器と土師器がある。これらは、棺の東端部に一括して置かれていた。須恵器は、杯(1)・杯蓋(2)がある。土師器は、把手付鉢(1)が

付表6 出土遺物一覧表

主体部	土器類		鉄器類		
	須恵器	土師器	農具	工具	武器
第1主体部	杯蓋 3 杯身 3 台付短頸壺 1 つまみ付蓋 1 臬 1		斧 1 鎌 1	刀子状 3 以上 (破片)	鉄鎌 2 平根式 2 尖根式 7 (破片)
第2主体部	杯蓋 1 杯身 2	把手付鉢 1			

ある。鉄器類については、出土していない。

副葬品の土器類が出土したか所と棺の東端部までは、約18cm程の空間をもっている。土師器の把手付鉢は一群の南端にあり口縁を上に向けた正立した状態で出土しているが、須恵器類は、棺の内側へ傾くようなやや不安定な状態で出土した。これらについては、第1主体部の出土土器と同様、棺上に置かれていたものと考えられる。

#### 4. 出土遺物

##### 鉄器類(第181図)

##### 鉄鏃(1～5)

完全な形で遺存するものはないが、型式上、平根式と尖根式の二種に大別される。平根式(1・2)は、鏃身の広い柳葉式を呈し、三角形の逆刺をもつ。1は身部に矢柄の木質が遺存しており、無茎または茎の短いものであったと思われる。2はやや大型のもので、欠損するが短い茎をもつ。1は鏃身長4.8cm、2は6.1cm(復原長)を測る。尖根式(3～5)は柳葉形の鏃身を呈し、3・4は小さい逆刺をもつ。5は関をもたず、篋被にそのまま移行する。いわゆる長茎鏃であるが、篋被から先の茎部は欠損し全容は明らかでない。4・5の篋被端にはわずかに木質が遺存しており、篋被の長さは約5cm程のものであったと思われる。3は鏃身長4cm、4は鏃身長3.8cm・篋被現存長5cm、5は鏃身長3.3cm・篋被部5.7cmを測る。

鉄斧(6) 無肩式のもので、刃部は左右に張りだし、正面の形状はクサビ形を呈している。木柄挿入の袋穂部を作るが、端部を左右から折り曲げた状況が明らかでなく、あるいは鑄造によることも考えられる。全長7.5cm・刃幅4.6cm・袋穂部の長さ4.8cm・同幅3.1cm・厚さ3cmを測る。小型であり、ミニチュアあるいは手斧の類になるものと思われる。

鉄鎌(7) 曲刃の鎌で、先端部は下方に曲がる。端部は片側に折り曲げている。全長14.2cm・刃幅1.7cmを測る。

##### 須恵器(第182図)

須恵器には、杯蓋・杯身・台付短頸壺・つまみ付蓋・甕の各器種がある。

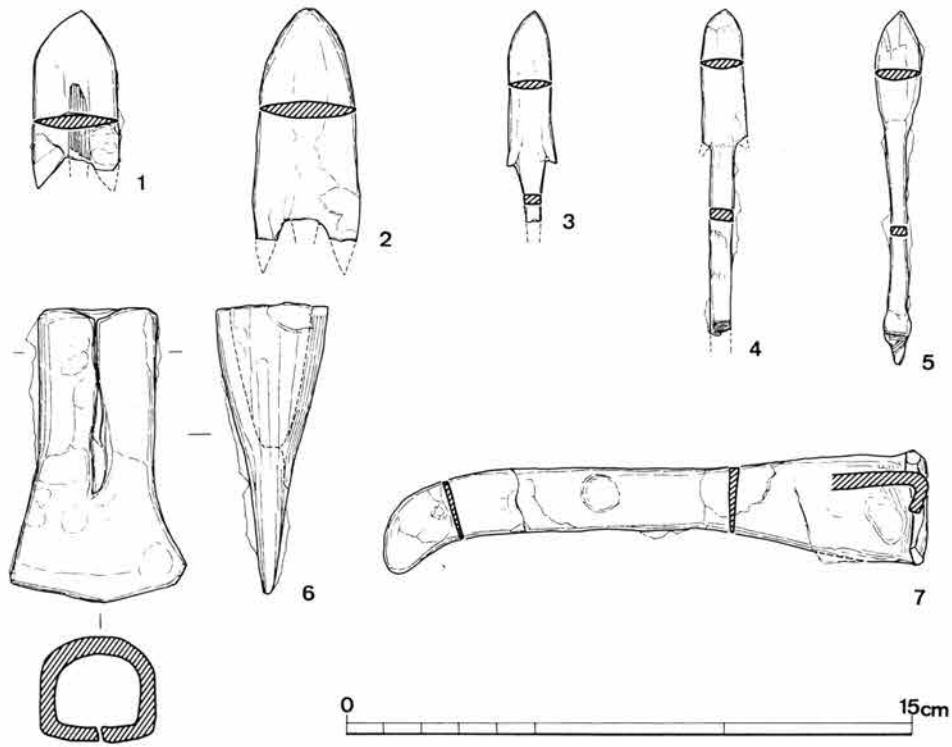
##### 杯蓋(1～3・10)

いずれも天井部と口縁部との境にわずかに段を残すもので、口縁部端面は内傾し、段を形成する。口縁部は下端に向かってやや外反する。天井部は丸味を帯びており、回転ヘラケズリ調整を施す。

##### 杯身(4～6・11・12・14・15)

立ち上がり部は内傾し、端部には内傾する段をもつ。4・5のように底部が丸味を帯び





第181図 第1主体部出土鉄器実測図

るものもみられるが、概ね平坦な作りである。底部の調整は、回転ヘラケズリを施す。14・15の2例は、後青寺城館跡の東辺土塁断ち割りの際出土したものである。

台付短頸壺(8)

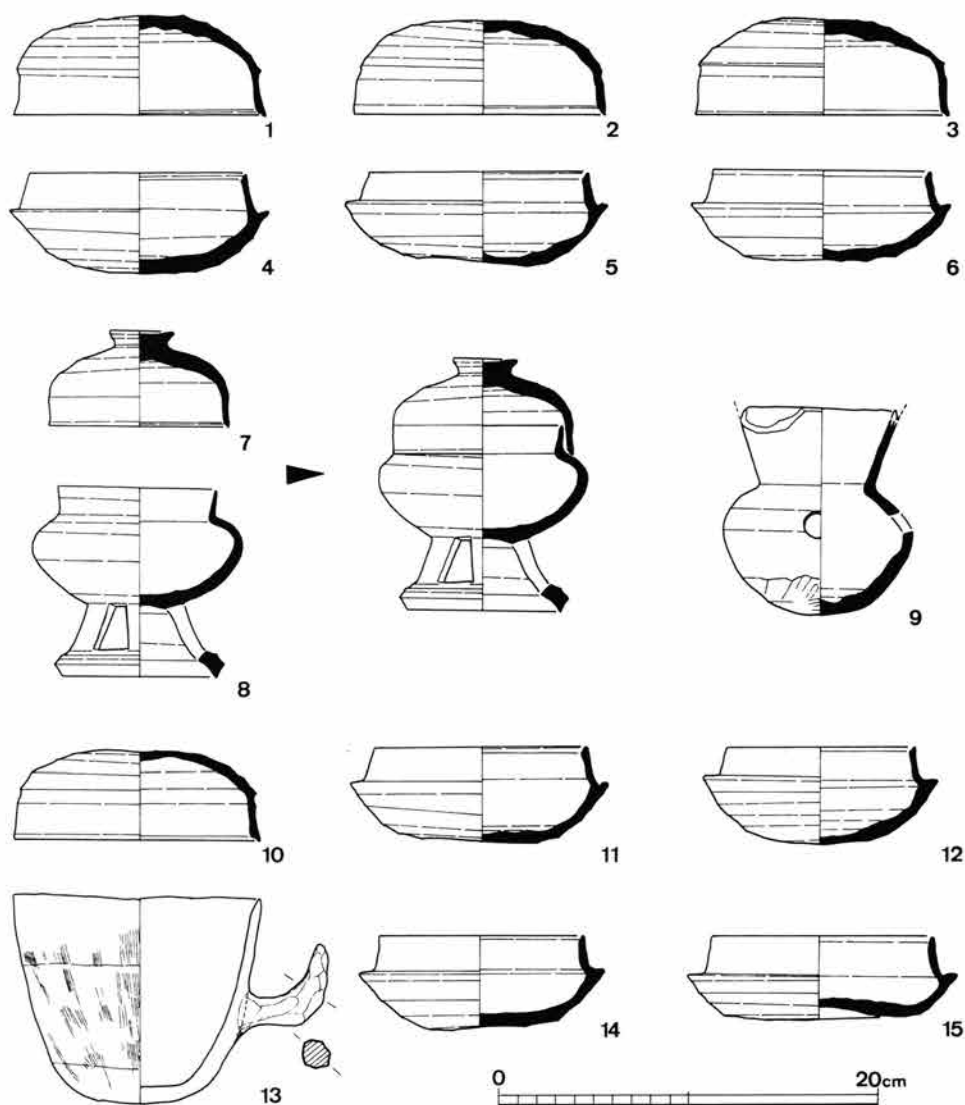
小型の短頸壺に脚部を付けたものである。壺体部は上半に最大径をもつ肩の張る形態をとり、そこから直に口縁部が立ち上がる。脚部には外面から三方向の台形透かしを施す。脚端部は外側に張り出す稜を境に屈曲し、その部分の断面形は三角形状を呈する。屈曲部下端は内湾気味である。つまみ付蓋(9)とセットになる。

つまみ付蓋(9)

有蓋高杯の蓋に類似するが、それより小型である。つまみの上部は浅い凹みをもつ。天井部は丸味を帯び、口縁部にかけてなだらかに移行する。口縁端部は内傾し、小さな段を形成する。8・9とも暗灰色を呈し、焼成・胎土とも良好である。全体的に作りはていねいである。

臬(10)

口縁部上半部はていねいに打ち欠かれている。口頸基部は比較的太い。体部は球形に近く、上半でやや肩が残る。体部中央には径22mmの円孔を穿孔する。底部は手持ちにより



第182図 出土土器実測図

ヘラケズリを行う。

### 土師器

#### 把手付鉢(11)

口縁部はまっすぐ外上方に開き、口縁端部は薄く仕上げる。底部は丸味をもち全体の形は砲弾形を呈する。体部のほぼ中位に角状の把手が付く。把手は器壁に挿入されており、中程から上方に強く屈曲する。器壁が荒れており、調整等不明な部分が多いが、概ね口縁部端部は横ナデ、以下は縦方向のハケメを施している。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや甘い。

## 5. 小 結

後青寺古墳の検出は、当初予想もしなかったもので、後青寺城館跡調査の副産物とでもいえるものである。古墳は、城館の造営により大きく削平を受けており、外形・規模とも不明な部分が多いが、一辺約13m前後の方墳に復原した。外部施設は特に確認されていないが、自然地形の丘陵部と古墳とを区画する切り離し溝とも呼ぶべき施設が設けられている。古墳の主体部は2基確認され、各々削平が著しいが、棺の規模・形状等が判明した。両棺とも、組合式の箱形木棺を直接土塚に埋葬する木棺直葬の形態をとるものである。

第1主体部では、須恵器等の土器類のほか、鎌・斧・刀子等の鉄製農・工具類や鉄鏃等の武器類が、第2主体部では、須恵器・土師器等の土器類のみが副葬されていた。副葬品の量・質とも、当該時期のものとしては平均的なあり方を示しているが、刀等の鉄製の大型武器が見当たらないのが一つの特徴とでも言えそうである。

出土した須恵器杯類は、和泉陶邑窯の型式編年によるⅠ型式5段階もしくはⅡ型式1段階に所属するものであり、概ね6世紀初頭頃の古墳築造時期が考えられる。また、2基の主体部の構築順序については、それぞれの須恵器に型式差が見られず不明であるが、主体部の占地から判断すると、第1主体部が先に造られた可能性がある。

大内谷の周辺では、現在までのところ木棺直葬を内部主体とする古墳としては、同じく近畿自動車道関連の調査によって確認された薬王寺古墳群がある。群内に箱式石棺墓を含む3基(円墳1・方墳2)の小古墳で構成されており、築造時期は、6世紀初頭から前半に比定されている。群内に木棺・石棺という異なる埋葬施設をもち、木棺墳の主体部のうち特に中心となる主体部の棺内部には、木口部を固定するために礫混じりの粘土塊を配するという構造差をもつ。また、副葬品の保有についても、各主体部毎に優劣が見られるなど、小古墳内と言えども各被葬者には階層差が認められる。後青寺古墳の埋葬施設や副葬品のあり方は、薬王寺古墳群にみられるような各古墳を構成する諸類型のうちの一つの具体例として捉えることができるものであり、被葬者像を考えるうえに何らかの手掛かりを与えてくれるものと思われる。

福知山盆地周辺では、横穴式石室導入以降の6世紀末から7世紀初頭段階頃まで木棺直葬墳を主体とする群集墳が造営されている。今回の近舞線の調査では、後青寺古墳の所在する大内谷周辺においては、6世紀中頃に横穴式石室墳が出現し、それ以降木棺直葬墳は築かれなくなることがうかがわれる。このように同一地域内で墓制の変遷をたどることが可能であり、今後より細かい各古墳間の比較検討を行うことにより、古墳時代のこの地域の様相が明らかになるものと思われる。

(辻本 和美)

## (3) 小屋ヶ谷古墳（付 後正寺古墓）

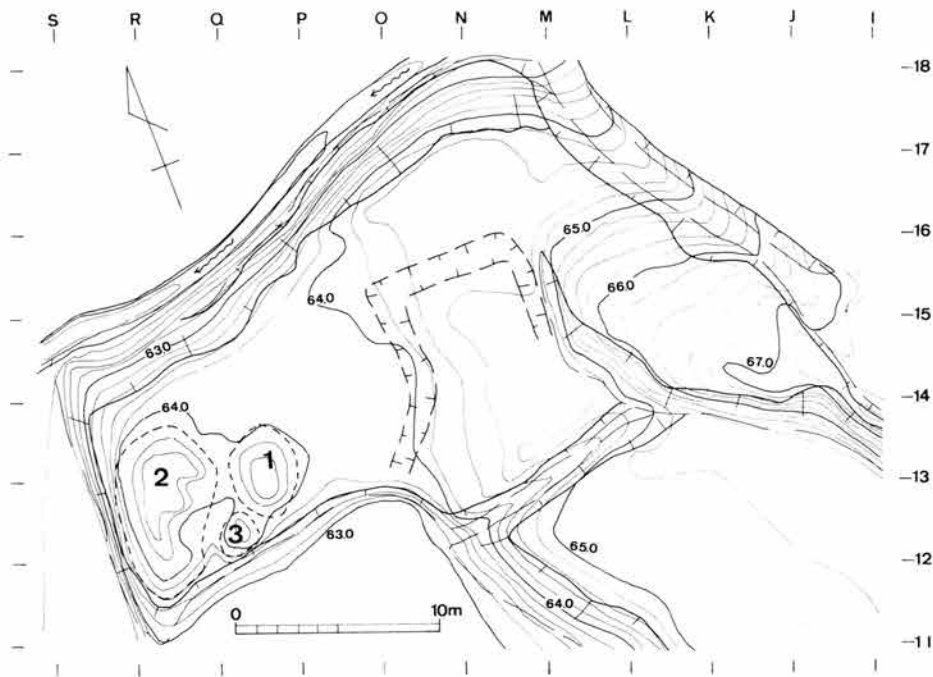
## 1. はじめに

後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳は福知山市大字大内小字後正寺に所在する。当遺跡は、北と南が比高差約10mの台地に挟まれ、西に開口した谷部に位置している。北の台地上には大内城跡(平城)があり、南の台地上には後青寺跡・後青寺古墳が所在する。

当遺跡は、谷部内の東から張りだした丘陵先端部の微高地上に立地する。現地調査着手前の状況は、尾根の先端部に高さ50cmの塚が3基認められ(第183図、図版第74-1, 2)、表土の腐植土の間から礫石が散見された。また、狭いながらも平坦地が開け、周囲には大内城跡や後青寺城館跡などの中世城館跡が分布していることから、当遺跡でも中世に遡る遺構が検出されるものと判断された。

## 2. 調査経過

調査はまず、3基の塚の表土を剥ぐことと、周囲の平坦地の掘削を平行して行った。塚は、礫石の検出・遺構の有無を確認しつつ順次掘り下げていった。塚の盛土内より古墳時代の須恵器が出土したため、下層に古墳があるものと推定された。盛土をすべて除去した



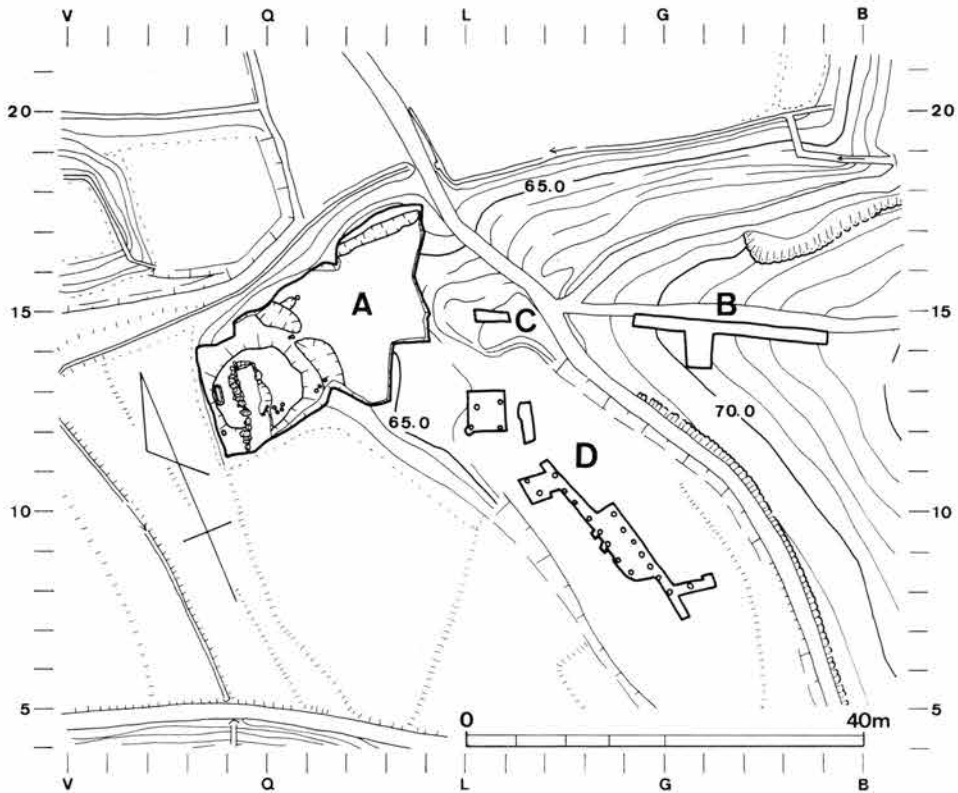
第183図 調査地測量図

段階で石室の石組みが検出されたので、併せてこの古墳の内部主体と墳丘の調査を実施した。本来ならば、「後正寺古墳」とするところであるが、近辺に「後青寺古墳」があり、どちらも読みが「ごせいじこふん」となって混同するため、この古墳の名称は付近の谷の名前をとり、「小屋ヶ谷古墳」とした。この古墳が確認され、周辺に他の古墳が存在する可能性が生じたので、C・B地区にトレンチを設けて古墳の有無を確認した。

D地区は狭いながらも平坦地が開けており、城館に関する遺構の有無を確認するために調査した。このトレンチでは掘立柱建物跡を検出している(第184図)。

### 3. 調査概要

上層で検出した塚を始めとする土壇群を後正寺古墓、下層で検出した古墳を小屋ヶ谷古墳と便宜的に分けて報告する。塚群と古墳の間には、基本的には淡褐色土が挟まっており、層位的に分離される。石室及び墳丘は外地形からは、全くその存在すら分からないほどに埋もれていた。



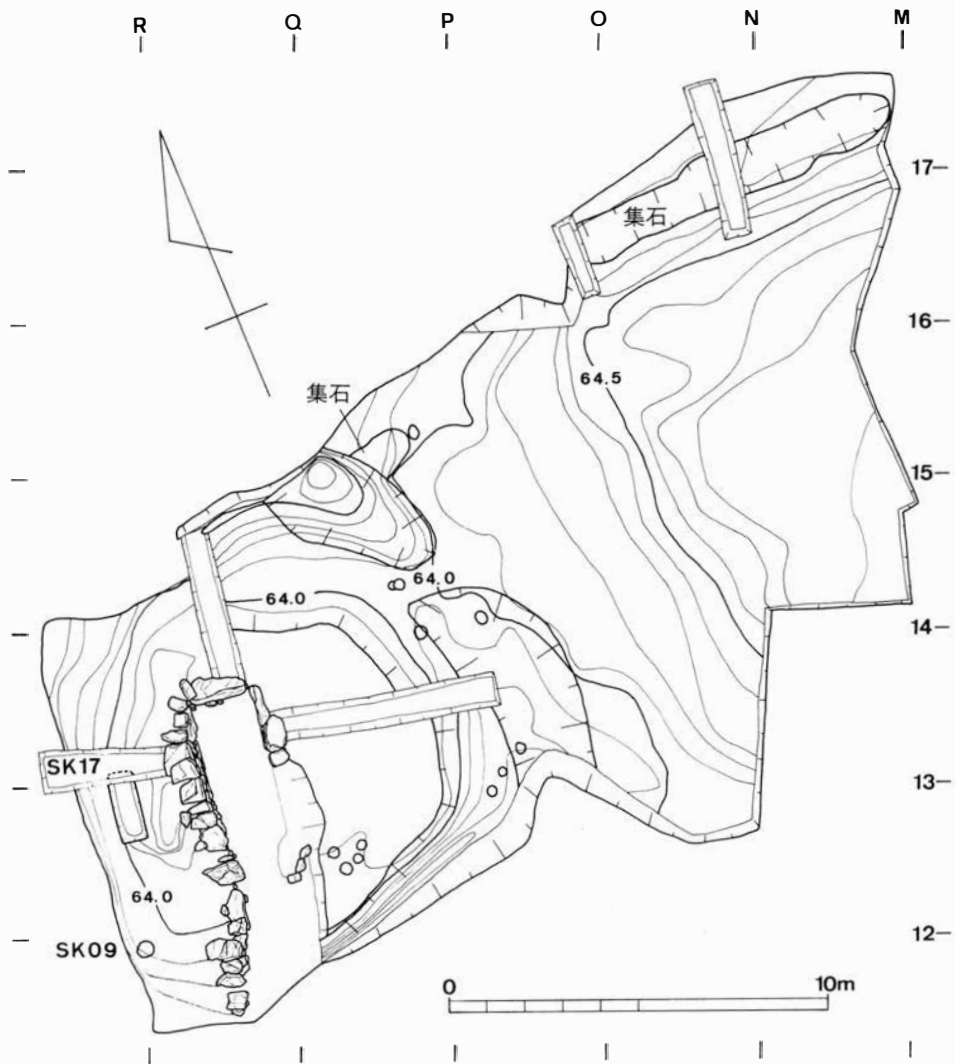
第184図 調査トレンチ配置図

まず、小屋ヶ谷古墳に関して報告した後、上層遺跡の後正寺古墓の各トレンチで検出した遺構を報告する。

(1) 小屋ヶ谷古墳(第185～187図, 図版第75～79)

この古墳の標高は、石室内奥壁部地山面で約63mを測り、現在の集落との比高差は約20mである。

①下部構造 古墳は自然丘陵が東から西に緩やかに傾斜するその先端に築造されている。そのため、石室付近での丘陵の南北幅はかなり狭まっており、羨道は丘陵の南斜面に盛土を行って、その上に構築している。



第185図 A区検出遺構配置図

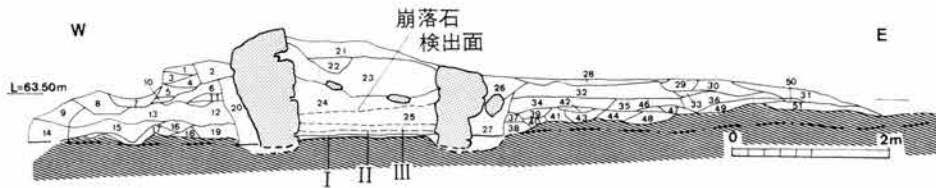
玄室部分は丘陵上の地山を4m×4mにわたり、約10cm掘り窪めて平坦にしている。基底石部分は更に20cm程度の深さで坂を穿ち、石がすわり易いように造作を行っている。

羨道部はさきに述べたように盛土を行った後に石を積み上げているが、最下段には石組の重量で造成地が窪まないように、小振りの石を敷いている。

②墳丘 墳丘の残りは悪く約50cmの封土しか残っていなかった。西・南側は田畑の開墾・耕作により、北側は水路のために削平を受けて原形を留めていない。そのため、墳丘裾と周濠を確認できたのは東側のみであった。周濠は、幅約2m・深さ約50cmで地山を掘り窪めて作られており、東北部はやや浅くなって陸橋をなしている。

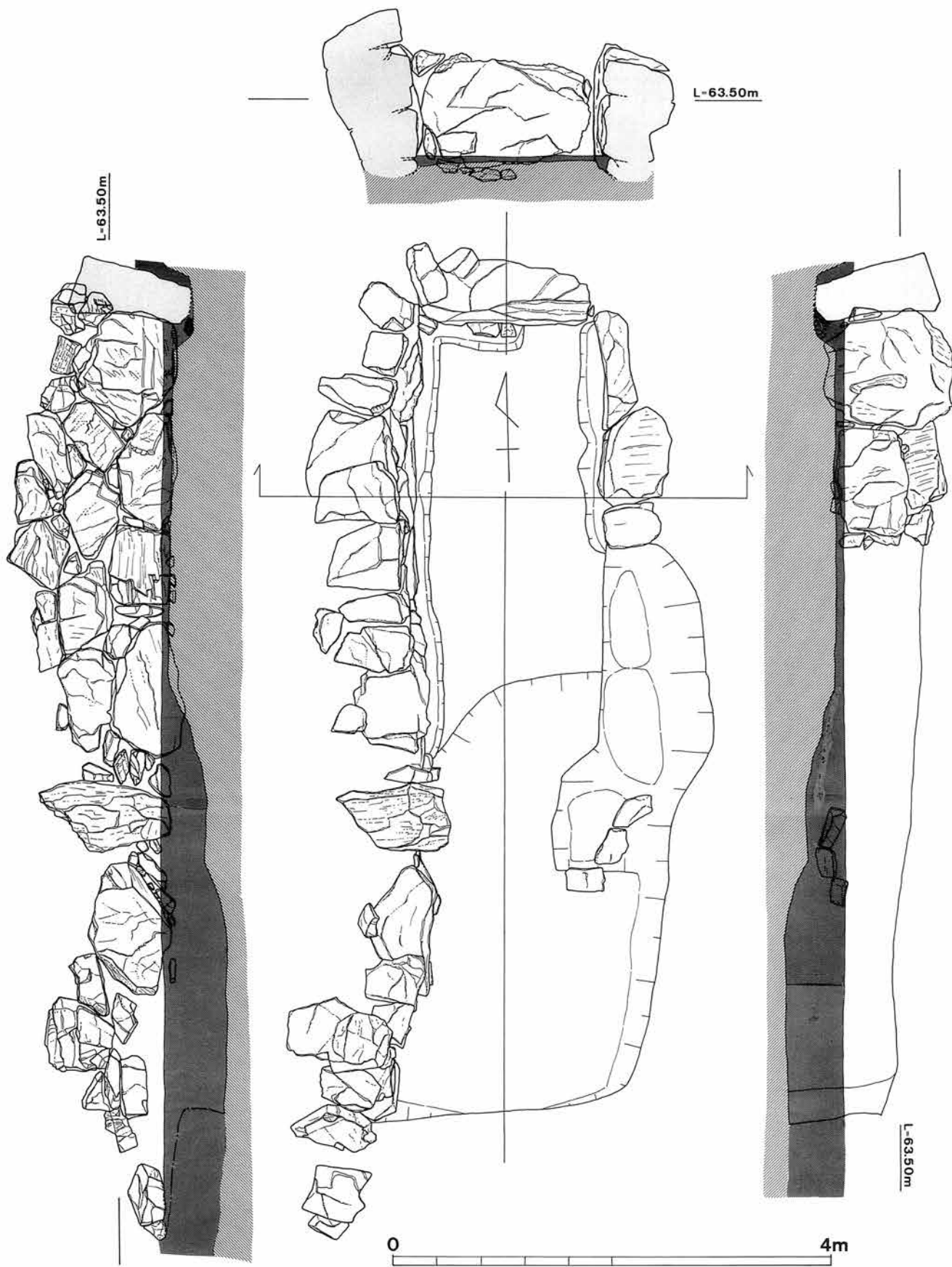
東側で検出した墳丘裾周りの曲線より復原すると、約13mの規模に復原できる。外護列石等の外部施設は検出できなかった。

③内部施設 この古墳の内部主体は横穴式石室で、後世の石の抜き取りや崩落のため残り具合は悪い。天井石は全くなく、側壁も原形を留めているところはない。特に、左側壁の羨道部は基底石までの石が抜き取られていた。この抜き取り跡の埋土より寛永通宝が出土した。石の抜き取りのため石室のバランスが崩れたのか、石室内に積石が落ち込んでいる面があった(崩落石検出面)。最上面の埋葬面(=攪乱を受けていない遺物の出土面)より、約15cm上位であった。崩落石中には天井石や奥壁に相当する大振りの石はなく、側壁の石ばかりであった。このことから、天井石や奥壁の石は後世に抜き取られ、持ち帰られたと考えられる。石室の崩壊の契機は自然によるものではなく、人為的なものであった。石室



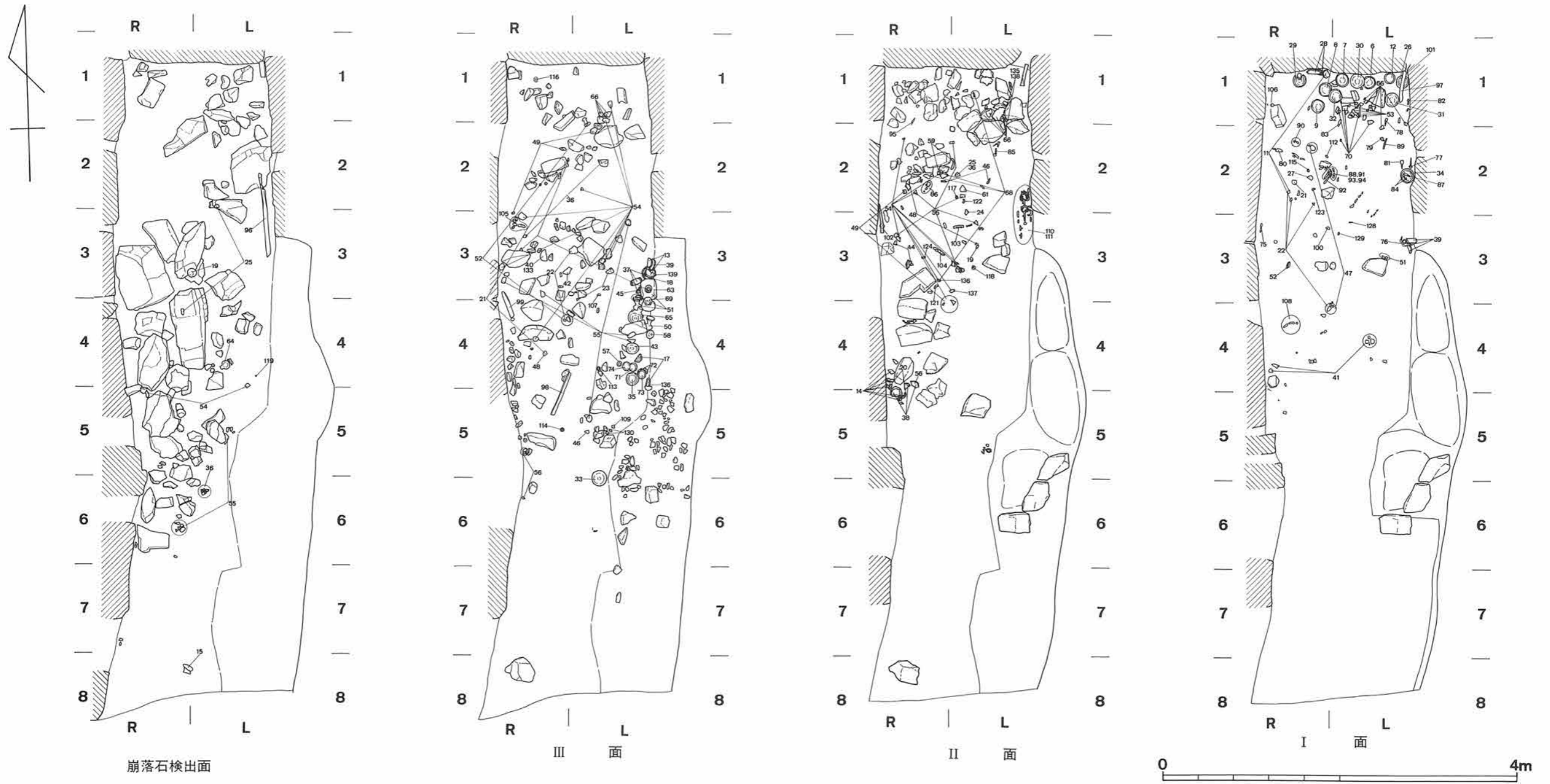
第186図 墳丘土層実測図

1. 暗褐色粘質土
2. 茶褐色土(やや黄色)
3. 黄褐色土
4. 茶褐色土
5. 茶褐色土(やや汚れている)
6. 淡黄褐色土(砂っぽい)
7. 淡黄褐色土
8. 暗褐色砂質土
9. 茶褐色砂質土(やや赤色)
10. 茶褐色土
11. 黄褐色砂質土
12. 淡黄褐色土
13. 黄褐色土
14. 茶褐色砂質土
15. 黄茶色土
16. 暗茶色土
17. 褐色土
18. 淡黄褐色土
19. 黄褐色砂質土
20. 黄褐色粘質土(礫を多く含む)
21. 褐色土(やや黄色)
22. 茶褐色土
23. 褐色土(粘質)
24. 褐色土
25. 褐色粘質土(貼り土)
26. 暗黄褐色粘質土
27. 暗淡色土
28. 黄褐色土(やや赤色)
29. 暗黄褐色土
30. 暗黄褐色粘質土
31. 暗褐色土
32. 黄褐色土
33. 暗黄褐色土(やや赤色)
34. 黄褐色土(砂っぽい)
35. 黄褐色土(やや茶色)
36. 黄褐色土
37. 淡黄褐色土
38. 淡黄褐色土(やや赤色)
39. 淡黄褐色土
40. 黄褐色土(砂っぽい)
41. 淡褐色土
42. 黄褐色土
43. 黄褐色土(砂っぽい)
44. 黄褐色土(やや汚れている)
45. 黄褐色土
46. 黄茶色土
47. 茶褐色土(砂粒多)
48. 茶褐色土(砂っぽい)
49. 茶褐色砂質土
50. 暗茶褐色土
51. 黄褐色土

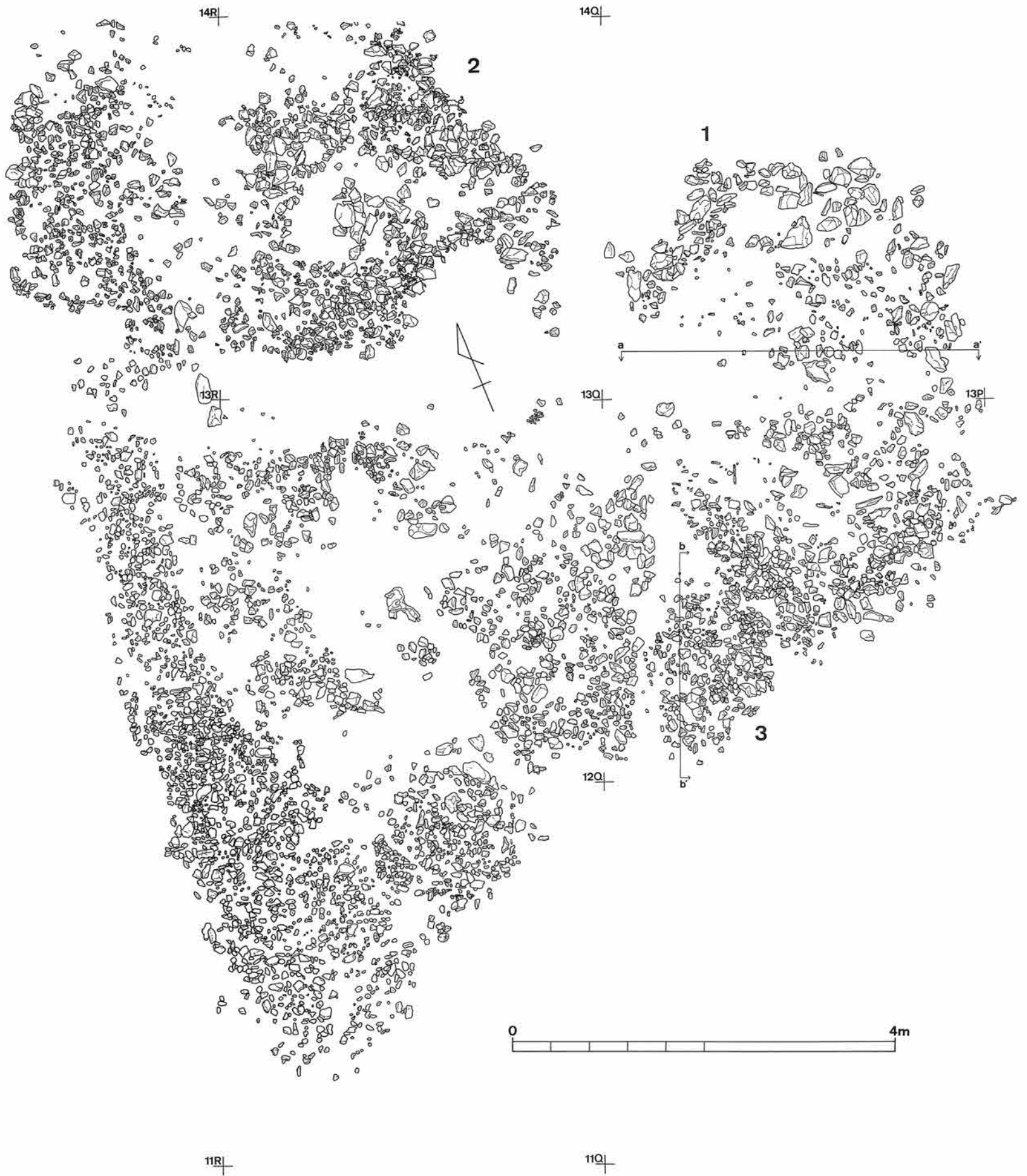


第187图 石 室 实 测 图





第188図 遺物出土状況図



第189図 後正寺古墳平面図

の石は、すべてチャートで、この近辺で産出するものである。

石室の平面形は、右側壁のうち長辺を縦にして据えている石が一石のみであるが、ここが玄室と羨道の境に相当すると判断される。この石は玄室の西辺よりわずかながら内側に出ており、袖を意識したことは間違いない。一方、左側壁は、右側壁でみた玄室と羨道の境に相当するところで、石の抜き取り痕が約30cmの段を持って検出できた。右側壁の袖については不安が残るが、石室平面形は両袖式と考える。また、古墳自体の南側の残りが悪いので、検出した石室南端が羨門であるか否かは確認できなかった。

各部長を掲げておく。玄室長4.36m・玄室奥壁部幅1.38m・同玄門部幅1.07m(推定)・羨道長3.0m(現存)・羨門玄門部幅1.07m(推定)・同羨門付近幅1.27m(推定)・玄室高1.30m以上・羨道高1.07m以上である。

#### ④石室内遺物出土状況(第188図、図版第77-2・78・79)

上述のように石室自体の残りは悪かったが、遺物の遺存状況は比較的よかった。出土遺物は、須恵器・土師器の土器を中心に刀・鏃・馬具等の鉄器、金環・勾玉・管玉等の装身具類がある。骨は全く出土しなかった。大多数の遺物は石室内の4面にわたって検出し、一部は、上層遺構の後正寺古墳の塚の盛土内や墳丘裾付近から出土した。

遺物は玄室のほぼ全域にわたって検出したが、完形品もしくはそれに近いものの、出土地点は大きく4大別できる。

- I I面で検出した、奥壁に近接して出土したもの。
- II II面で検出した、玄室右側壁棺台周辺のもの。
- III II面で検出した、玄室左側壁中央部のもの。
- IV III面で検出した、玄室左側壁に沿ったもの。

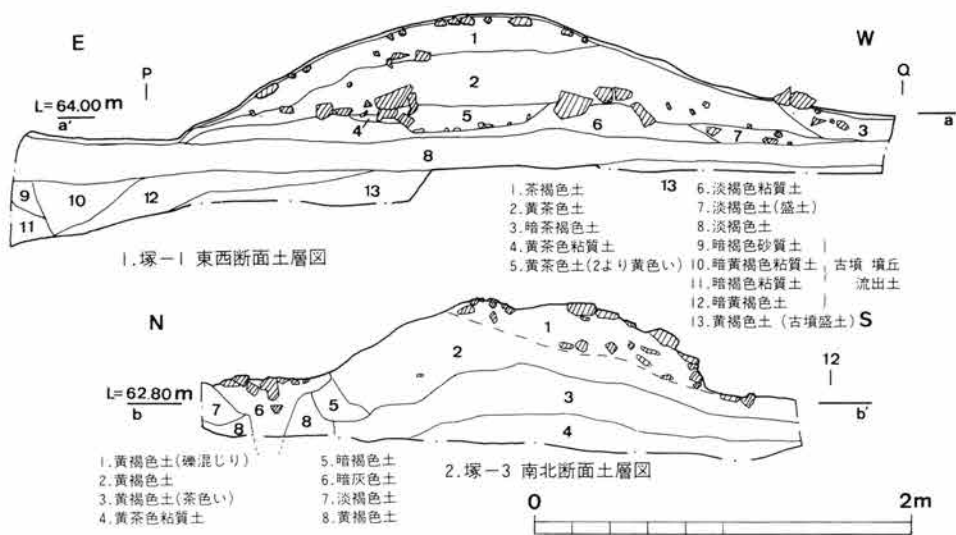
石室崩落面でも遺物の出土を見たが、一部の遺物が崩落石の上に載った状態で検出したことから、石室が壊された後に動かされたものと判断した。

## (2) Aトレンチ

後正寺古墳の塚の周囲にある平坦地では、集石遺構や古墳の周濠を検出したのみである。便宜上、古墳以外のものをすべて後正寺古墳とする。

### ①塚群・土壇群

現地形で観察された3基の塚には1～3の番号を付した。塚1は南北4.6m・東西3.8m・高さ68cmで、南北に長い楕円形をしている。表土を剥ぐと、ほぼ全面に10～40cmの自然石が葺かれていた(第190図)。造営に際しては10～40cmの石を3m×4mに置いた後に盛土して塚を作り、表面に葺き石を行っている。盛土内・塚下面には明確な施設は認められ



第190図 後正寺古墳 塚1・3土層図

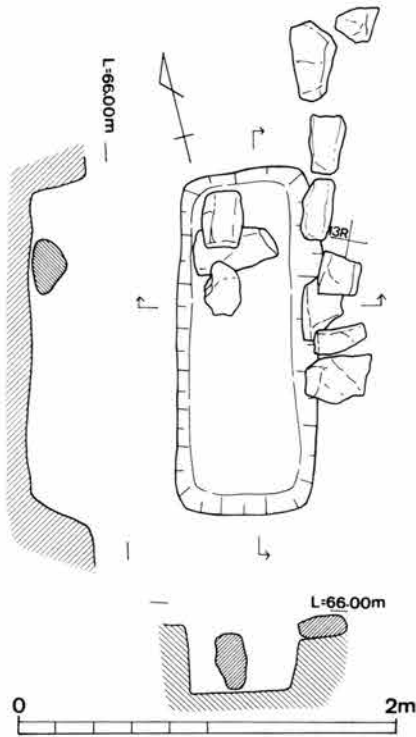
なかったが、第190図にみえるように5の黄茶色土が落ち込んでいた。平面的には検出できなかったが、内部施設の可能性がある。盛土中からの骨片や埋納された遺物の出土はなく、葺き石の間や表土中から寛永通宝が出土したのみである。また、下層の小屋ヶ谷古墳の副葬品の須恵器片が盛土中から出土した。

塚1はA区の西端にあり、南北8.8m・東西4.8m・高さ60cmのものである。塚1と同じく、表土下には自然石を葺いているのを検出した。この塚は、下層の小屋ヶ谷古墳の石室西側壁に沿って盛土されたものである。この塚に伴う内部施設はない。盛土内から寛永通宝と葺き石の間から中世陶器片が出土した。

塚3は塚1と一部重なっており、塚1より新しく作られている。南北20m・東西1.8m・高さ60cmで最も規模の小さいものである。表面には石が葺かれていたが、塚1とは異なり内部に石が混じらない。他と同じく盛土内から寛永通宝が出土した。

塚1・3と塚2の間の凹地と塚2の東斜面の12Q区で計6基の土坑を検出した。これらは、後述の埋納土器に近接して検出した。大きく2群に分かれる。第192図はSK14~16・18の実測図で、SK15がSK16を切る。これらの上部には礫が敷き詰められ、土坑内部にも多くの礫が詰まっていた。SK15は40cm×1.5m、SK16は30~65cm×1.4m、SK18は50cm×90cmである。他の一群はSK11~13で、互いに重複している。SK11が55cm×40cm、SK12が85cm×55cm以上、SK13は50cm×1.3mの規模をもつ土坑である。SK11から寛永通宝が出土したので、これらは、近世の造営になるものと判断される。

以上の3基の塚と6基の土坑はいずれも近世に築かれたものである。その性格はよくわ



第191図 SK17 実測図

銭貨13枚を検出した(図版第80-2)。出土した地点の周辺は、塚2の盛土がちょうど削平を受けており、地表下数cmで遺物を認めたため、掘形は確認できなかった。後世の削平を受けながらも比較的まとまって出土したことから、本来は1か所に埋納されていたと判断する。

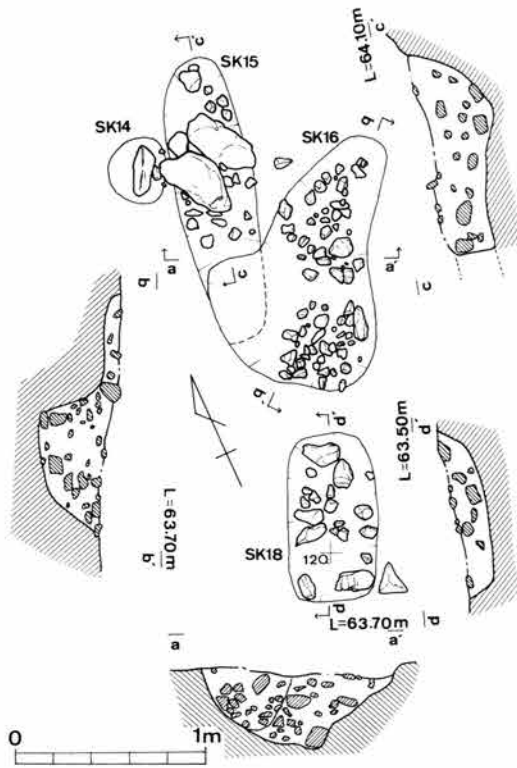
この埋納土器はSK17と約2mを隔てているが、この土坑以外に埋納の対象がない。SK17の土坑墓に対する埋納土器と考える。埋納土器の年代観から平安時代後期頃の遺構である。

からないが、銭を置いたり埋納したりしているので、後者は埋葬のための土坑で、前者は参る対象物として築かれたものと推定される。

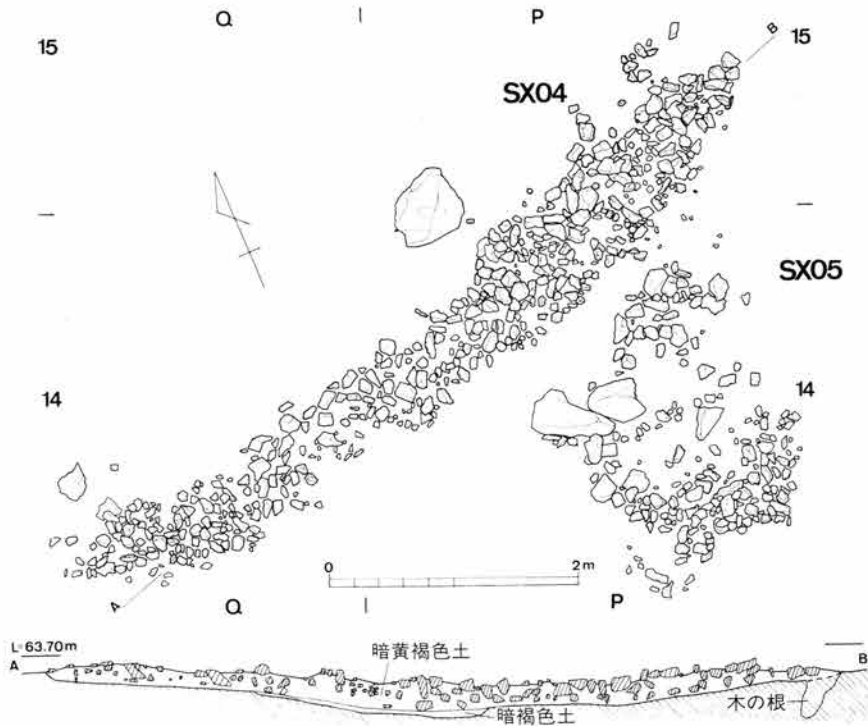
### ②SK17土器埋納

塚2の下層、小屋ヶ谷古墳墳丘上で土坑を検出した。規模は0.78m×1.8m・深さ28cmである。この土坑の東辺に沿って20cm×30cmの石が6個立て並べてあった。また、土坑内の北には石が3個入っていた。時期を決定しうる遺物の出土はなく、埋土中に炭化物と焼土が混じっていた。上部構造の列石や焼土・炭化物の出土から土坑墓と判断する(図版第80-1)。

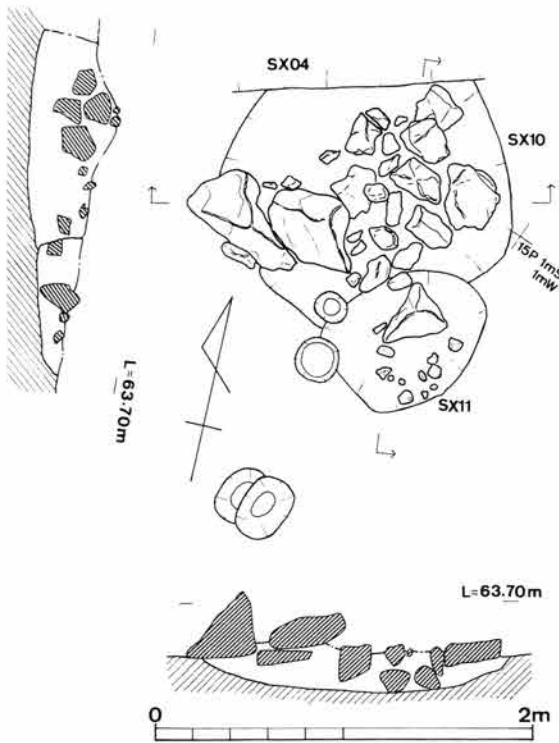
塚2の東側斜面地の12Q区では、瓦器碗2・黒色土器1・須恵器ねり鉢2・皇末通宝などの



第192図 SK14~16・18 実測図



第193図 集石遺構(SX04・05)実測図



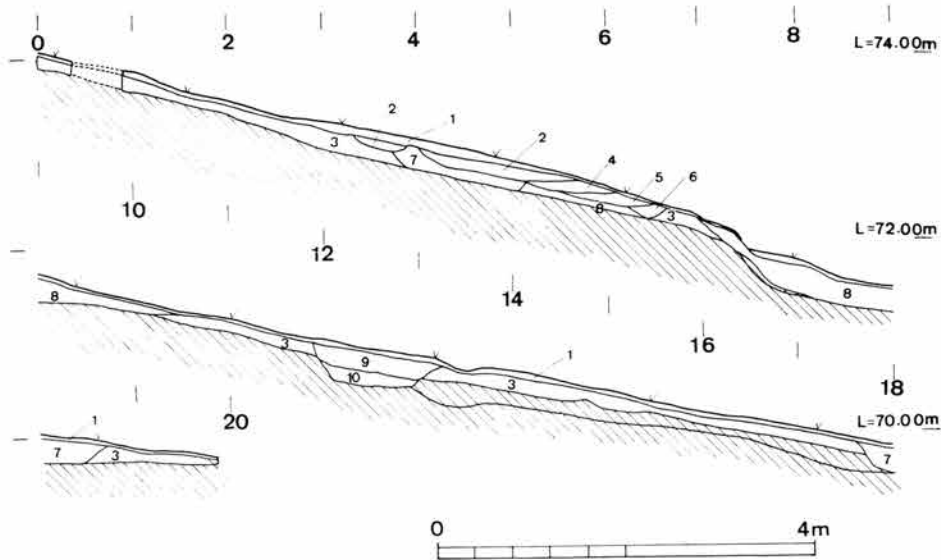
第194図 SX05下層検出遺構(SX10・11)実測図

### ③集石遺構

3か所以上の集石遺構を検出した。

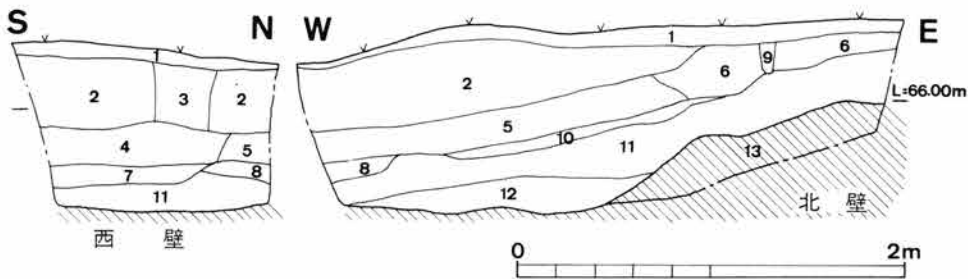
第193図は15・14-P・Q区で検出した2基の集石遺構である(図版第81-1)。SX04は、長さ6.8m・幅35~45cmの細長いものである。断面を見ると、浅く掘りくぼめた溝状の掘形の中に石が集められている。底の一部をさらに6cm程度掘り下げているが、他に顕著な施設はない。SX05は1.9m×2.3mの楕円形をした範囲に石が集められている。上面の石を取り除くと2基の土壇を検出した(第194図)。

SX10とSX11は切り合い関係を有



第195図 Bトレンチ西壁土層実測図

- |          |          |         |          |          |
|----------|----------|---------|----------|----------|
| 1: 表土    | 2: 淡黄褐色土 | 3: 黄褐色土 | 4: 黄茶色土  | 5: 茶褐色土  |
| 6: 暗茶褐色土 | 7: 暗褐色土  | 8: 淡褐色土 | 9: 暗茶褐色土 | 10: 黒褐色土 |



第196図 Cトレンチ土層実測図

- |           |                     |                |                  |
|-----------|---------------------|----------------|------------------|
| 1: 表土     | 2: 茶褐色土             | 3: 炭化物         | 4: 黒灰色土(焼土・炭混じり) |
| 5: 黒褐色粘質土 | 6: 暗茶褐色土(1cm程度の礫含む) | 7: 茶褐色土(炭が混じる) |                  |
| 8: 暗茶褐色土  | 9: 茶褐色土(木の根)        | 10: 暗褐色土       | 11: 黄茶褐色土        |
| 12: 黄茶色土  | 13: 地山              |                |                  |

し、SX11が切り勝つ。さらにSX10はSX04に切られている。SX10は1.35m×1.1m(現存)、SX11は65cm×85cmの規模である。これらは浅い掘形を持つ土坑中に石が落ち込んだものと推定される。16・17-M・N区でも細長い溝状の掘形をもつ集石を検出している。石の間から検出した土器片と土層との関係から中世の時期の造営となろう。これらの遺構中からは骨の出土を見なかったが、SX04は、洞楽寺古墳の墳丘裾で検出した同様の集石遺構から骨片が出土している。また、SX10とSX11は、大内山田館跡などで検出した集石遺構に類似する。これらの集石遺構は埋葬に関わる施設と考えられる。

④その他

古墳の墳丘西南部でピット(SX09 径40cm・深さ30cm)を検出している。この塚には多くの土師器皿(第206図137)が埋納されていた。南北朝期頃である。

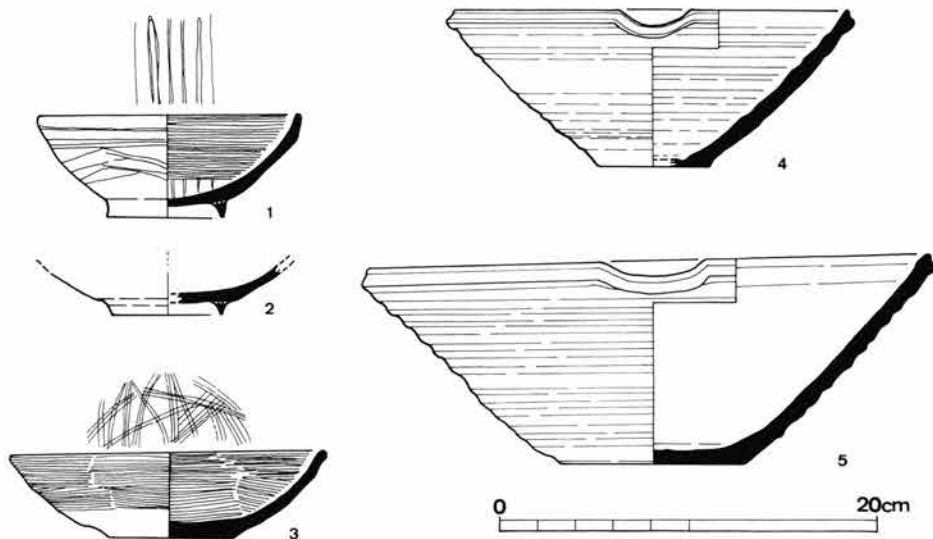
周溝内や石室東側にピットを検出したが、その時期・性格については不明である。

(3) Bトレンチ(第195図)

遺跡東側の尾根筋に1.5m×20mのトレンチを設け、一部東側に2.5m×3.5mの拡張を行った。基本土層は表土—黄褐色土—地山である。東西方向のトレンチの最東部で須恵器片を検出したが、それに関連する遺構はなかった。また、拡張部では、配石状の石の広がりやピット8基を検出した。ここでは、中国製陶磁器片(第206図132)と、鉄釘・炭化物・焼土を検出した。なんらかの建物が建っていたと考えるが、詳細は不明である。

(4) Cグリッド(第196図)

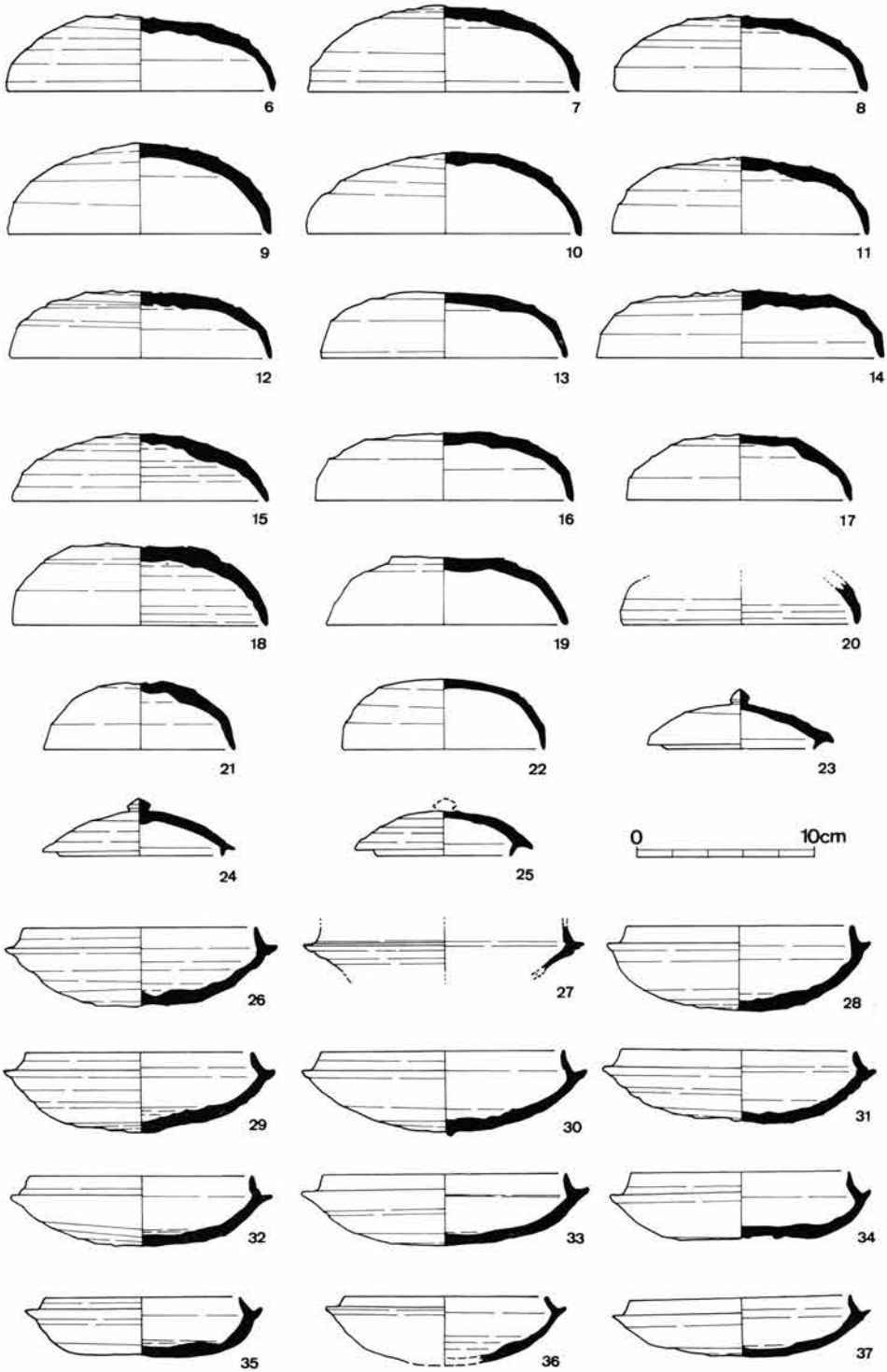
Aトレンチの東側の丘陵先端部の高まりは、Aトレンチ西端で古墳を検出したため、古墳である可能性が生じた。この位置に1.4m×3.1mのグリッドを設定し、古墳の有無を確認した。高まりのうち、地表下0.5~1mが後世の堆積で、地山は東側の尾根から西側の平坦地へと連なる傾斜と一致していた。トレンチ内より須恵器・土師器などの数点の土器片が出土したが、古墳の封土ではなく、また遺構もなかった。



第197図 出土遺物実測図(1)S K17埋納土器

1・2：瓦器，3：黒色土器，4・5：須恵器





第198図 出土遺物実測図(2)  
1~25: 須恵器杯蓋, 26~37: 須恵器杯身

(5) D トレンチ(図版第81-2)

遺跡東南部の平坦地のトレンチである。掘立柱建物跡2棟を検出した。SB01は3間×9間(8m×16.5m)、SB02は1間×1間(3.2m×3.2m)である。柱穴内より、鉄鏃1・龍泉窯青磁片・鉄砲玉の出土を見た。中世(末)～近世に属する。

4. 出土遺物

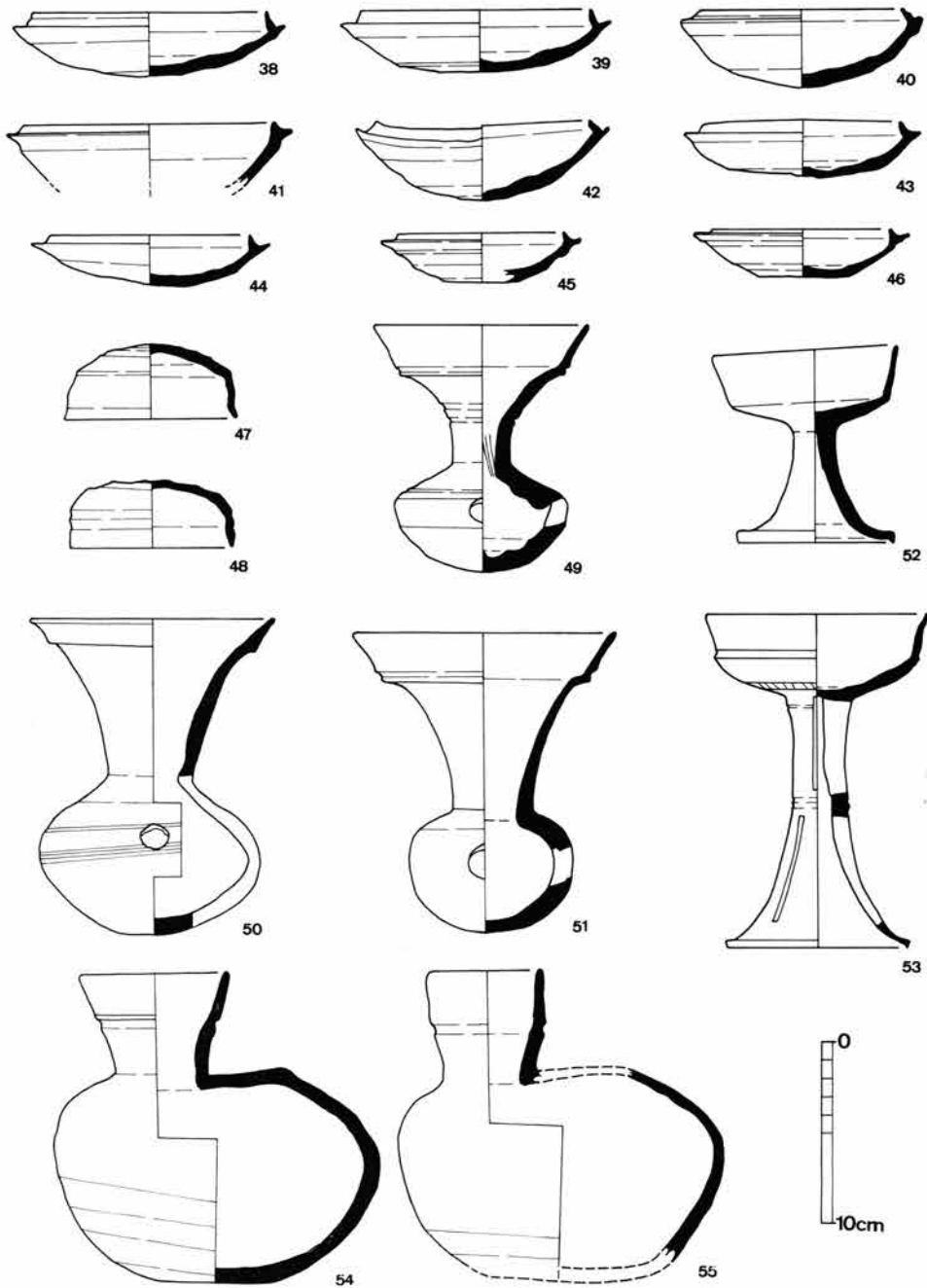
出土遺物は古墳時代後期以降、近世にいたる各時代のものである。概要のみの説明とし、個々の遺物に関しては観察表を参照されたい。

第197図1～5はSK17に対する埋納遺物で、一括遺物として扱える資料である。1・2は瓦器碗で、1は口縁部が肉厚な丹波型のもので、高台は比較的しっかりしている。外面は粗く磨きが施され、内面はていねいに磨いている。3は黒色土器碗で、底部には回転糸切り痕が見て取れる。内面から外面の体部中央付近にかけては、ていねいな磨きがなされている。4・5は須恵器ねり鉢で、ともに東播系のものである。口縁部はともに断面四角形で、口縁端面が横ナデにより浅く凹む。

小屋ヶ谷古墳の関係遺物は比較的豊富で、須恵器・土師器などの土器類、勾玉・耳環などの装身具類、馬具などの鉄器がある。各個体数を見ると、須恵器は杯身(21)・杯蓋(20)・高杯(2)・甕(3)・平瓶(2)・横瓮(1)・提瓶(4)・小型無頸壺(1)・同蓋(1)・甕(4)・蓋(2)・長頸壺(1)、土師器は長頸壺(1)・高杯(1)・碗(4)・杯身型土師器(1)がある。鉄鏃は21本以上、鉄刀(4振以上)・鏢(1)・鉄矛(1)・小刀(3以上)、馬具関係として轡(2)・鉸具(3)・革金具(1)がある。装身具類は耳環(7)・勾玉(3)・管玉(6)・小玉(2)を確認している。副葬品の残りが比較的よいのは、先述のように追葬後の早い段階で石室が壊れ石室内に土が厚く堆積し、その後、墓域として散発的にしか利用されなかったためと考えられる。

杯身・杯蓋の分類は、それぞれ6タイプ・8タイプに分類される。第198図の6～9は、天井部の約1/2にわたってヘラ削りを施し丸く調整されている。口径に比して器高が高く、全体に「深い」印象を与える。10～13は、先のものに比して天井部の丸みがなくなり、平坦なものとなり、やや浅い形をとる。14・15は10～13と手法的には同じだが、口径が大きいものである。17・18・19は口径が小さくなり、天井部がやや丸く、天井部の狭い範囲をヘラ削りで調整を行っている。21・22は天井部のヘラ削りが省略されたもので、平坦に仕上げられている。23～25は蓋につまみ・かえりがつくものである。

26～30は立ち上がり部が斜め上方に突出し、しかも器高が深いものである。底部はていねいにヘラ削りを行っている。31～33は立ち上がり部がやや短くなり、器高が浅いものである。34・35は31～33に比して、底部が平坦である。36は器高が深い。37～39は一段と浅



第199図 出土遺物実測図(3)

38~46：須恵器杯身，47・48：須恵器蓋，49~51：須恵器甕，52・53：高杯，  
54・55：須恵器平瓶

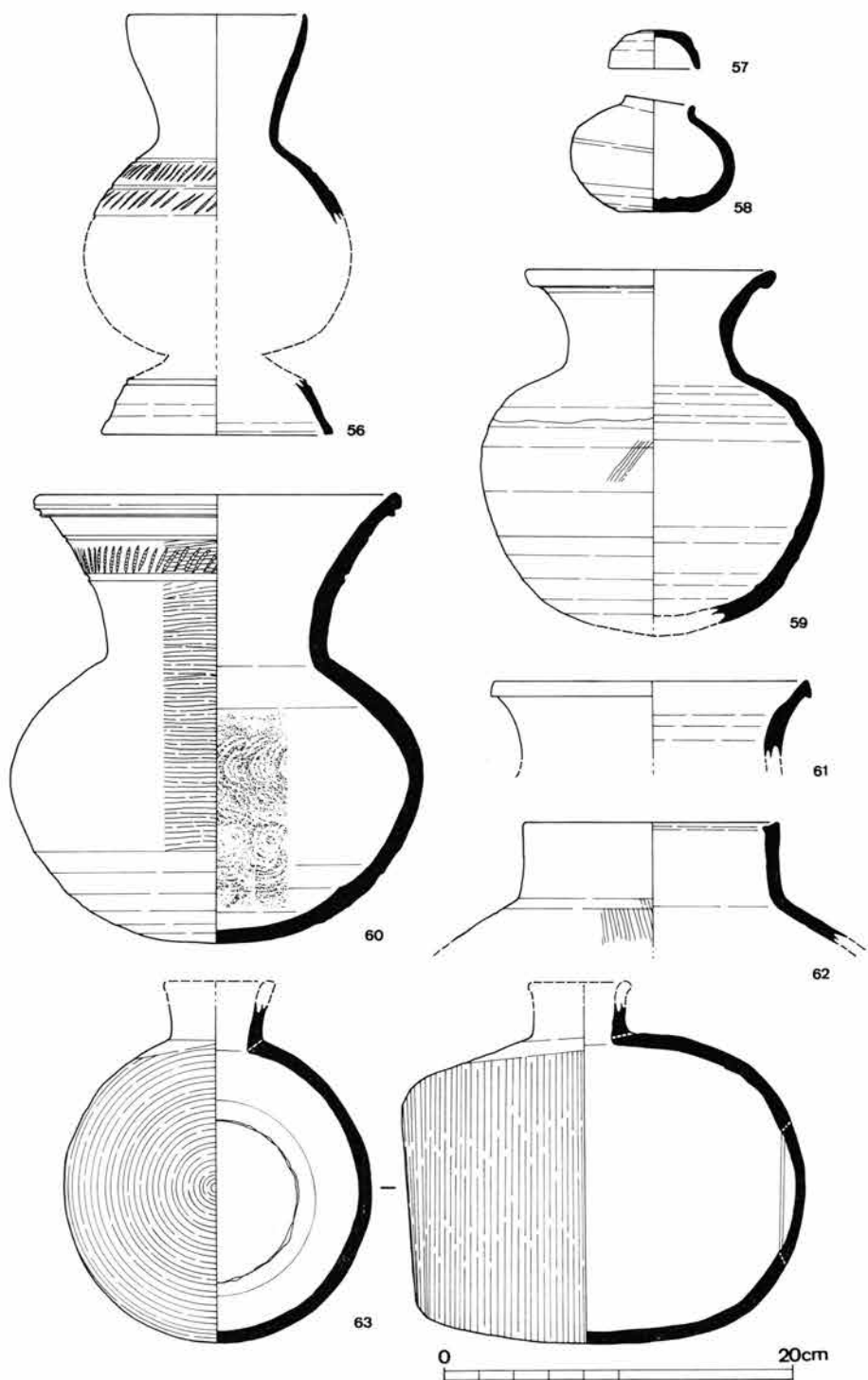
くなったもので、底面のわずかな範囲にヘラ削りを行っている。40～42は、口径は37～39にかわらないが、器高の深いものである。底部のヘラ削りは省略されている。43・44は、立ち上がり部が短く、器高の浅いものである。底部のヘラ削りは省略されている。45・46は口径がさらに小さくなり、立ち上がり部もほんのわずかにつくものである。

第199図47・48は一応蓋と考えているが、23～25の杯蓋に対応する杯身であるのかもしれない。49～51は甕で、49は頸部が直立し口縁に向けて大きく開くもので、頸部内面にはしほり痕が見てとれる。50は口頸部が体部からすぐに大きく開き、腹部が張りだして口縁部とはほぼ同じ径を有する。体部外面に横方向のカキメが見られ、その上をナデで消している。51は体部下半をヘラ状のもので、不定方向に削って丸く仕上げている。52・53は高杯であるが、小屋ヶ谷古墳の調査で出土した高杯はこの2点のみである。有蓋のタイプは出土していない。低脚と長脚二段スカシがそれぞれ一点ずつである。54・55は平瓶で、石室内の各面にわたり出土した。56は脚付き長頸壺で、体部下半が欠ける。57・58は小型無頸壺とその蓋である。これらは、検出した際には組み合わせあって出土はしなかったが、焼成・胎土・色調が同じである。また、壺の頸部には蓋を重ねて焼いたため、赤褐色の帯状の輪が巡っている。59は須恵器甕であるが、この土器は墳丘東側裾の包含層中から出土した。64は生焼けの灰白色を呈するもので、完形品である。第203図96の鉄刀などとともに石室内崩落石検出面で出土した。68は土師器の杯身形の土器である。色調は茶褐色で、内外面ともにナデ調整をしており、立ち上がり部の一部に指でつまみ上げた痕跡がある。土師器は少なく、68を入れて、7点のみの出土である。

88～95は細根式のものである。他に鉄鏃残欠が数点ある。

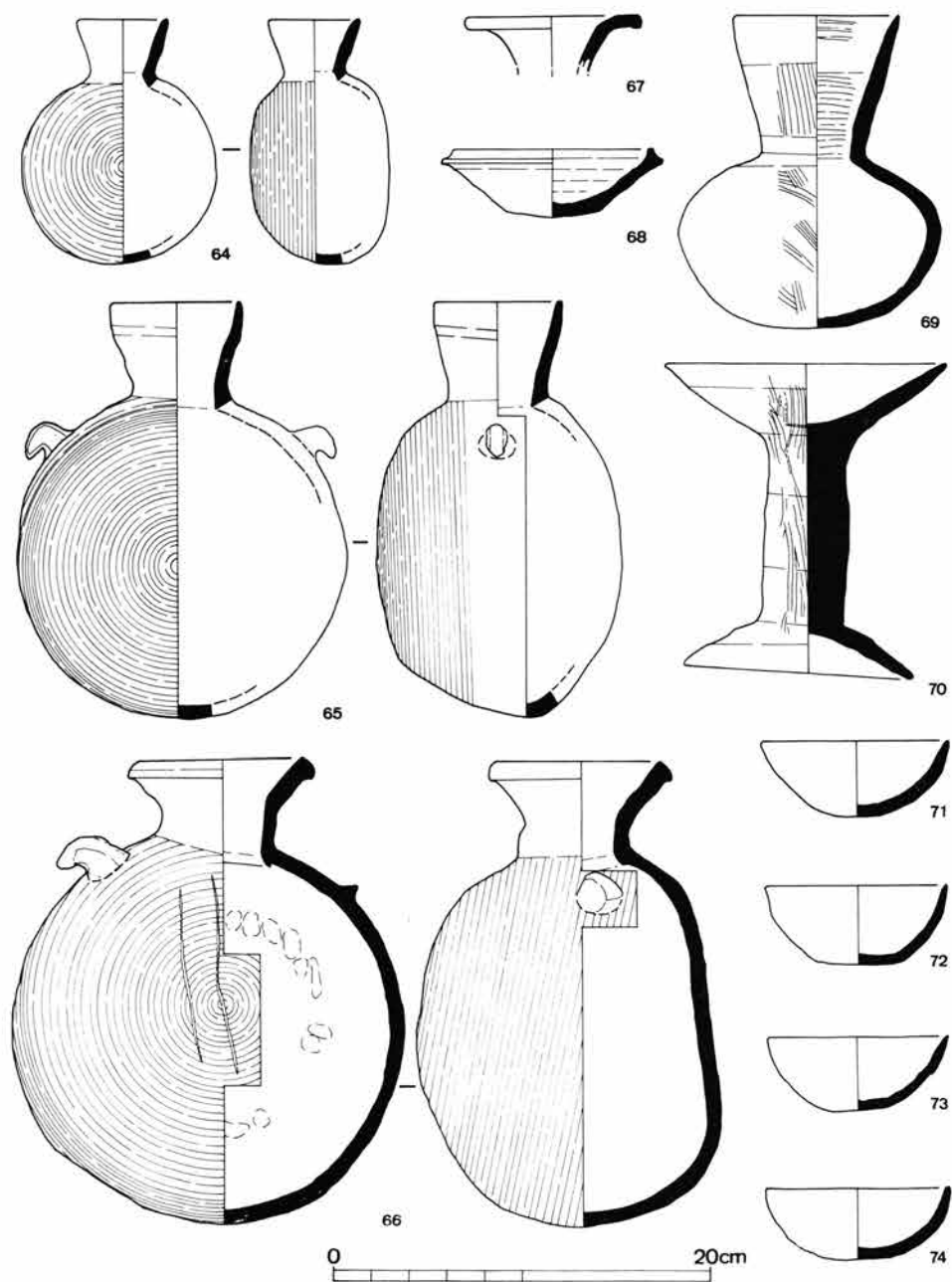
第203図は武器・利器類で、96～100は鉄刀である。96の鉄刀は、崩落石検出面で出土し、その一端が崩落石上に載っていた(図版第77-2)。97は奥壁東隅に立てかけられていたもので、第Ⅲ面上でその下端を検出した。101は、97に近接して出土した鏝で、97と対になる。103～105は刀子・小刀である。

第204図110・111は轡で、ともに鉄製素環鏡板で、ほぼ完存している。ともに錆化しており、使用痕は観察できない。皮・布・木等の付着は見られない。坂本美夫<sup>(註56)</sup>の分類によると、110は板状立聞素環鏡板付轡で長径7.5cm・短径6.6cmの楕円形の鏡板に、1.7cm×3.6cmの立聞が付く。立聞の断面は内側に向かって三角形をなしている。衡は中央の環で連結された二連式であり、他方は鏡板と引手に環で連結されている。引手の長さ16.3cmを測る。111は瓢形素環鏡板付轡で、素環を瓢形に大小の環をつくり小さい環を立聞にするものである。衡の連結や鏡板・引手と衡の連結は、110のものと同じである。引手における環はコイル状にその端を巻くものである。鏡板の長径7.5cm・短径5.5cm、立聞の長さ4.5cm・最大幅



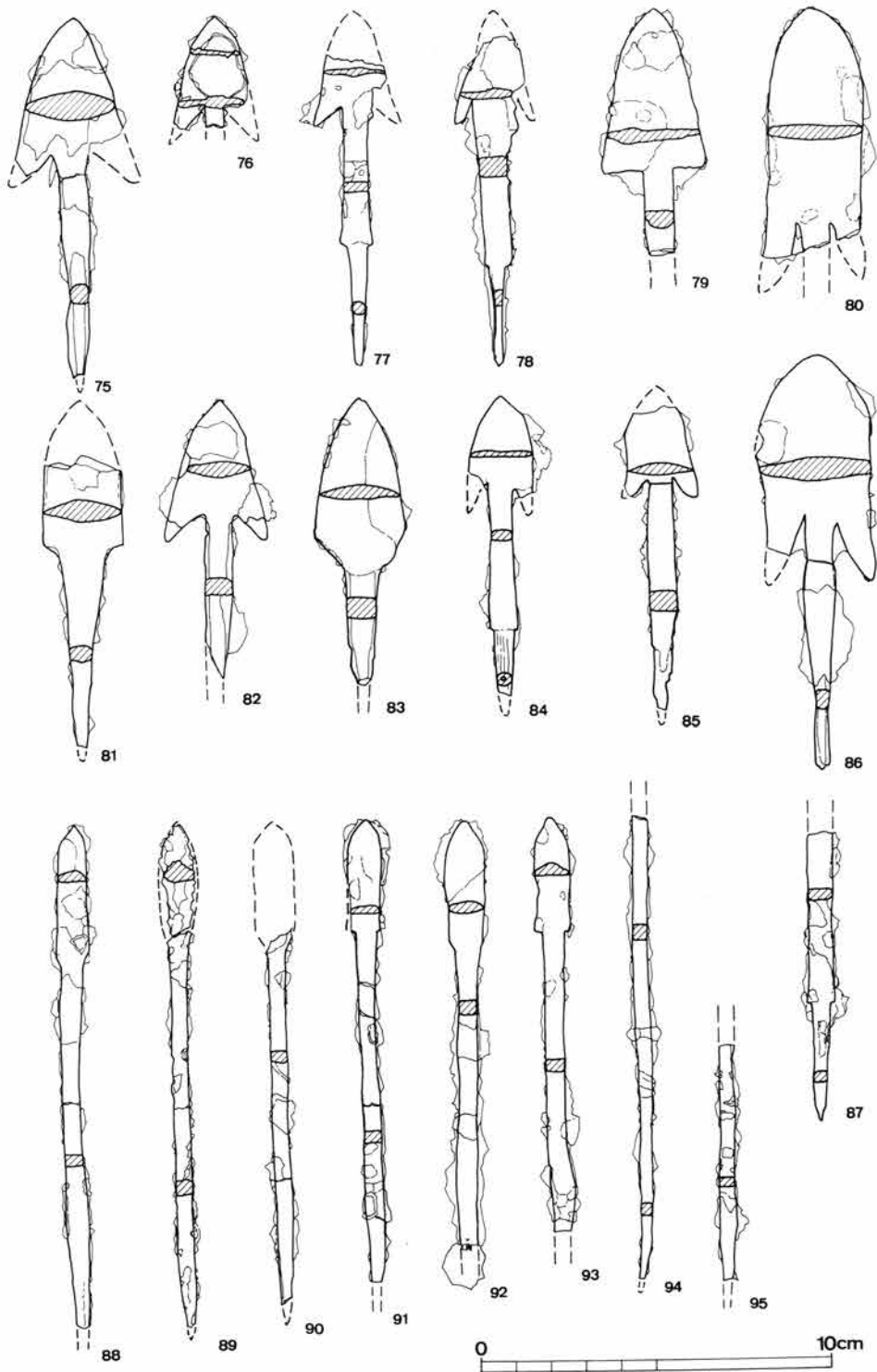
第200図 出土遺物実測図(4)

56：須恵器台付長頸壺，57・58：小型無頸壺・同蓋，59～62：須恵器甕，63：須恵器横瓶

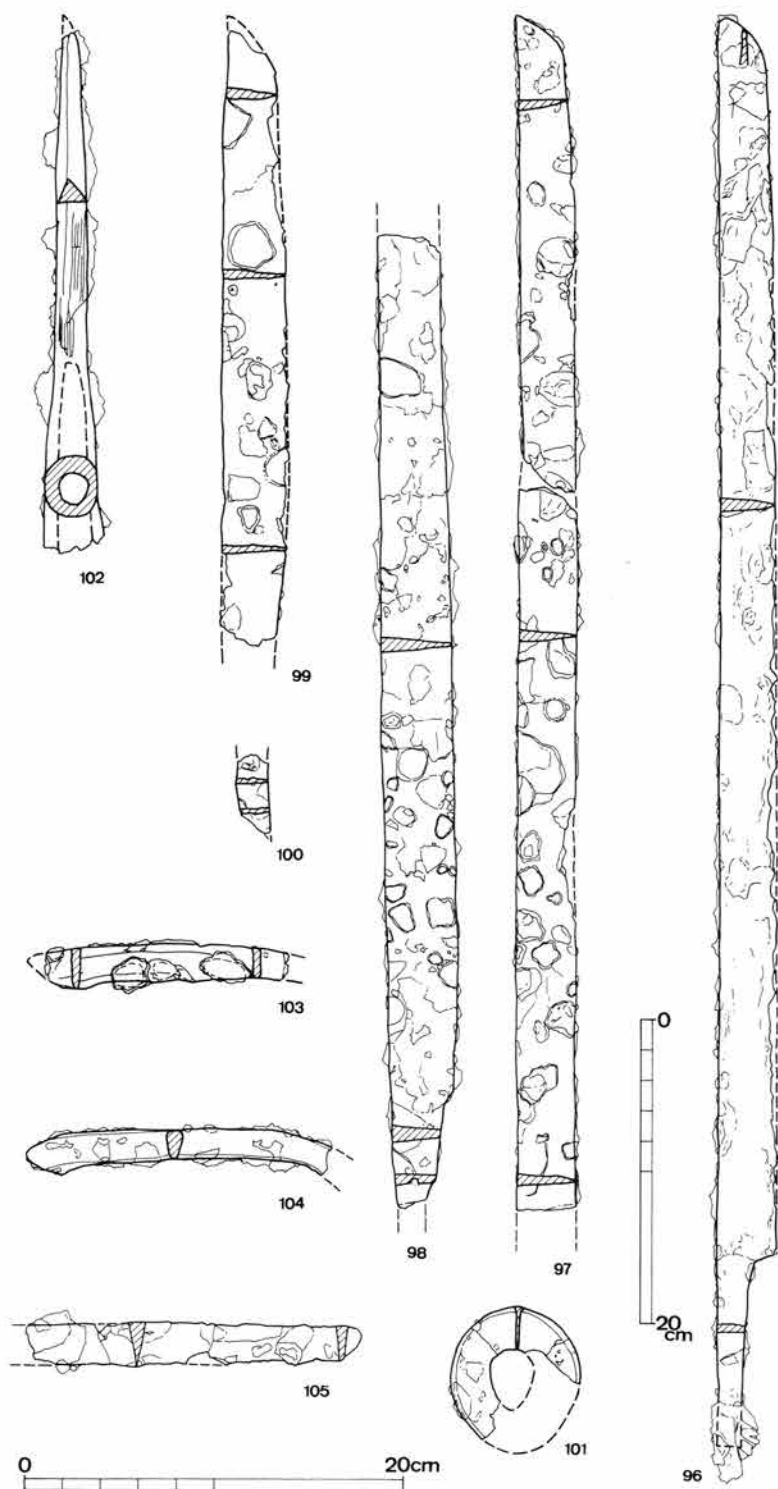


第201図 出土遺物実測図(5)

64~67: 須恵器提瓶, 68: 土師器杯身, 69: 土師器長頸壺, 70: 土師器高杯,  
71~74: 土師器碗

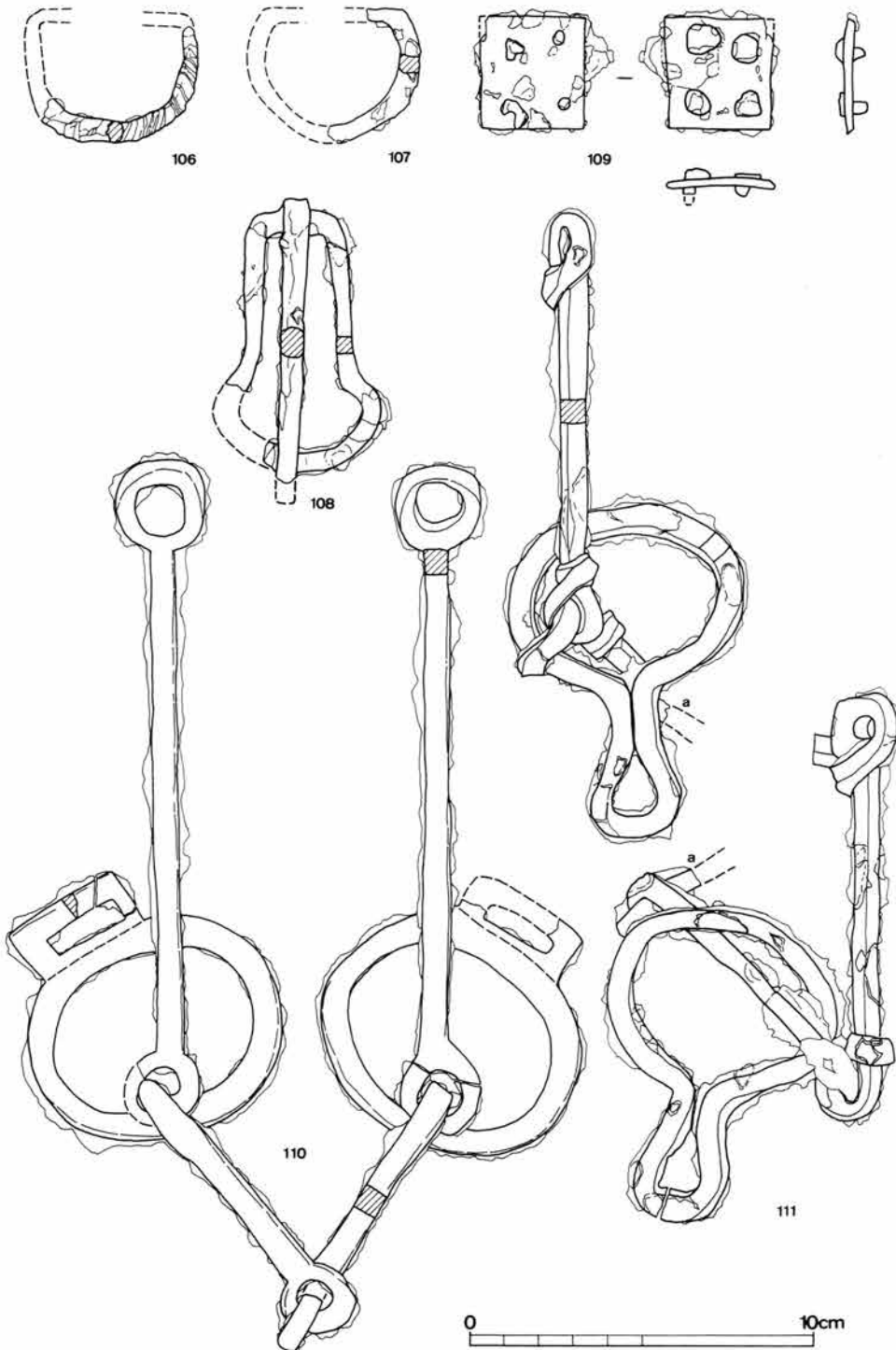


第202図 出土遺物実測図(6) 鉄鉄



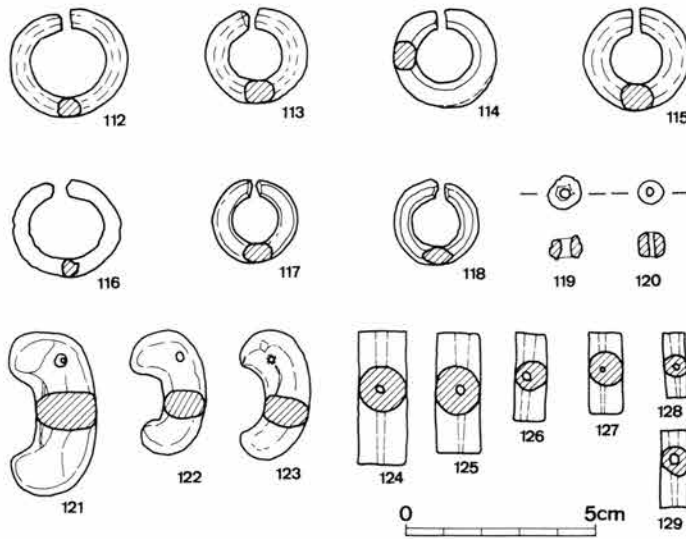
第203図 出土遺物実測図(7) 鉄器  
96~100 : 鉄刀, 101 : 鐙, 102 : 鉄鉾, 103~105 : 刀子





第204図 出土遺物実測図(8) 鉄器馬具

106~108: 鉸具, 109: 革金具, 110・111: 轡



第205図 出土遺物実測図(9) 装身具

112～118：耳環，119・120：小玉，121～123：勾玉，124～129：管玉

り，すべて碧玉製である。

第206・207図は，その他の遺物である。130・131・135・136は，塚群の石の間から出土した。132は中国製磁器で，B区で出土した。平安時代後期のものである。133はD区掘立柱建物の柱穴跡から出土した。龍泉窯の青磁片である。およそ15世紀代のものである。137はSK09から出土した土師器皿で，口径10.9cm・器高3.2cmで，およそ南北朝頃のものである。138・139は瀬戸灰釉瓶子片で，SX04の直上で出土した。139のものは，大内城跡で出土したものに類似する。

第207図は調査で出土した貨幣の拓本である。平安時代後期の埋納土器に伴って出土した宋銭は，結着していてその種類は不明である。

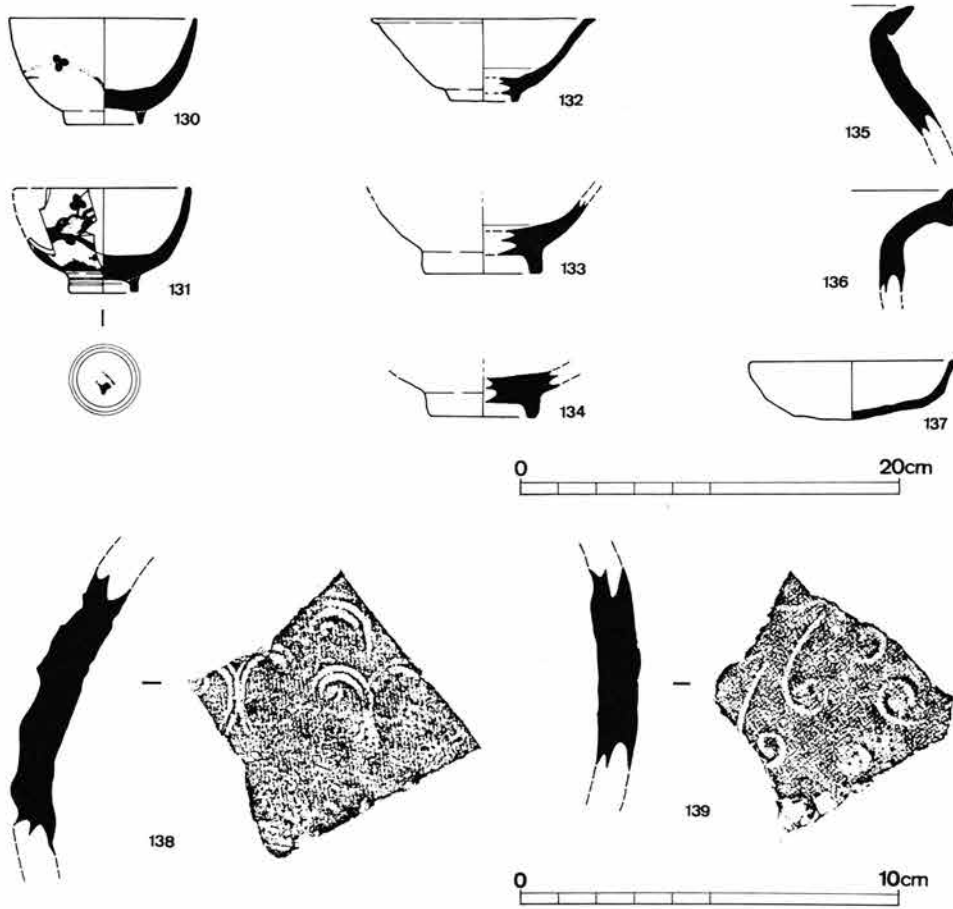
## 5. 小 結

当遺跡の変遷をまとめておきたい。

本遺跡中には，小屋ヶ谷古墳造営以前の年代観の遺物の出土はなく，古墳造営がこの地を人的に利用した最初といえよう。古墳は6世紀中頃に造られ，その後7世紀前半頃まで追葬が行われた。石室内埋土上面には，12世紀後半の土器が埋納されていたので，少なくともこれ以前に石室が埋没している。天井石が石室内に落ち込んでいないこと，崩落石検出面が第Ⅲ面から大きなレベル差がないことなどから，最終の追葬から大きく隔たりのない時期に，天井石のすべてと側壁の一部の抜き取りを契機に石室内への土砂の流入が進ん

2.6cm，衡の長さ8.3cm，引手長12.7cmである。また，馬具に伴う鉸具(106～108)・革金具(109)が出土している。

第205図は装身具類である。112～118の耳環はすべて金環である。小玉は2個あり，119はガラス製である。121～123の勾玉はメノウ製である。管玉は6個あ



第206図 出土遺物実測図(0)

130・131：国内産磁器 132～134：中国製磁器 135・136：陶器 137：土師器皿  
138・139：瀬戸灰釉瓶子

だといえる。

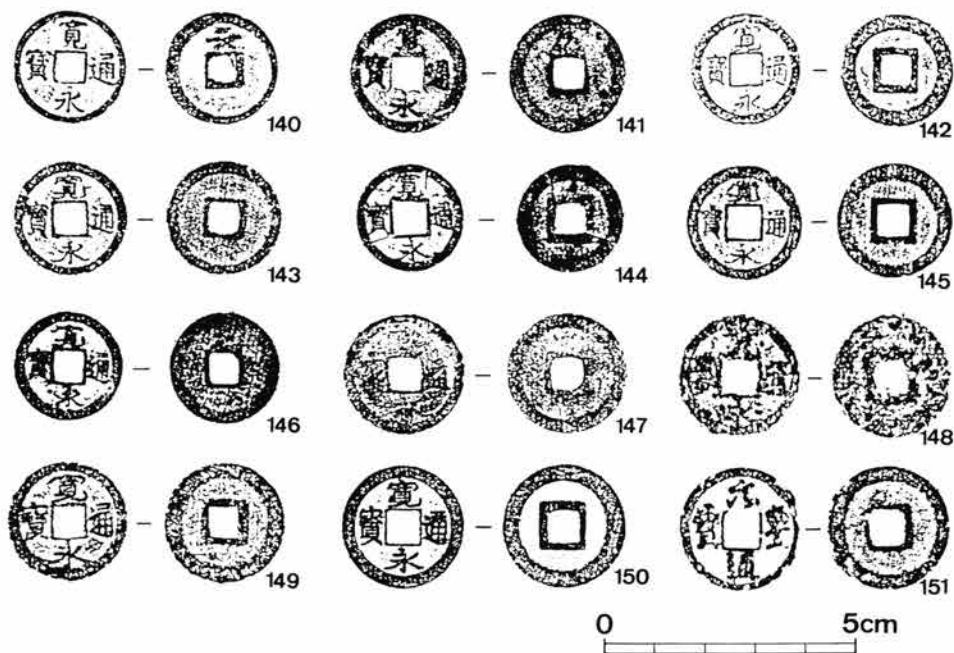
平安時代後期には、墳丘の西側に墓が造られ、土器の埋納が行われている。

南北朝～室町頃には、北縁に集石がなされ、埋葬が行われている。また、それに対する埋納のためか、小土塚を墳丘南西に穿ち、土師器皿を埋めている。

中世(末)～近世(初)には、遺跡の東南地区に掘立柱建物が建ち並んでいた。大内城跡や後青寺跡との関連から、「山城」の一部を構成する建物群と考えられる。

江戸時代になると、再び石室の破壊が行われ、特に左側壁の羨道部の基底石まで抜き取るものであった。そして、当初見られた塚と土塚を設け、墓所として利用した。

(岩松 保)



第207図 出土遺物拓本 銭貨

付表7 出土遺物観察表

小屋ヶ谷古墳 後正寺古墳  
土器

挿図 番号	器種 器形	法量(cm)		残存率	出土地・ 層位	胎土	焼成	色調	調整		備考
		口径	器高						外面	内面	
1	瓦器 椀	14.0	5.4	完形	12Q	良	堅	黒灰色	指ナデ 粗いミガキ	指ナデ	
2		5.8	2.3	1:3		良	良	黒褐色	摩滅	摩滅	
3	黒色 土器椀	16.8	4.9	完形		精良	軟	黒色	ロクロナデ ミガキ	摩滅	
4	須恵器 ねり鉢	20.8	7.2	1:4		良	良	淡黄褐色	指圧痕 横ナデ	指圧痕 ロクロナデ 横ナデ	外面スス付 着
5		30.0	10.4	ほぼ完形		良	良	青灰色 口縁・黒 灰色	ロクロナデ 横ナデ	ロクロナデ 横ナデ	
6	須恵器 杯蓋	15.2	4.2	完形	L1-III	良	良	青灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	
7		15.3	4.8	ほぼ完形		精良	良	青灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	
8		14.3	4.2	ほぼ完形	R1-III	良	良	外・青灰 内・淡黄 灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	

## (3) 小屋ヶ谷古墳

挿図 番号	器種 器形	法量(cm)		残存率	出土地・ 層位	胎土	焼成	色調	調整		備考	
		口径	器高						外面	内面		
9	須恵器 杯蓋	13.9	5.0	完形	R1-Ⅲ	良	軟	青灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	若干いびつ 器壁が厚い	
10		14.9										
11		15.8	4.4	3:4	13P 1号墓盛土 内	良	良	青灰色	ナデ ヘラケズリ	ナデ	外・沈線消 滅 焼けひずみ	
12		14.6	4.3	完形	R1・2 L1-Ⅲ	良	堅	青灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		
13		15.0	4.0	完形	L1-Ⅲ	良	良	青灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	若干いびつ	
14		14.0	3.7	ほぼ完形	L3-Ⅰ	良	良	濃紺	ナデ ヘラケズリ	ナデ		
15		16.2	3.7	4:5	R4・5-Ⅱ	良	軟	淡灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		
16		14.6	3.8	2:5	R8-崩落面	良	良	青灰色	ヘラケズリ 一部ナデ	ナデ		
17		14.5	3.8	ほぼ完形	中央2, L2・ 3, R3-Ⅰ	良	良	青灰色	回転ヘラ ロクロナデ	ナデ	外面約半分 に自然釉付 着	
18		12.8	3.7	完形	L4-Ⅰ	精良	堅	青灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		
19		14.6	4.6	完形	L3-Ⅰ	良	良	青灰色	ロクロ ヘラオコシ	ロクロ		
20		14.1	3.8	ほぼ完形	中央3-崩落 面 L3-Ⅱ	精良	良	青灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	外底部未調 整	
21		13.4	2.4	1:4	R4・5-Ⅱ	良	軟	灰白色		ナデ	瓦器に似る	
22		10.9	3.7	4:5	R2-Ⅲ 中央2, R4- Ⅰ	精良	良	青灰色	ロクロナデ 一部未調整	ロクロナデ		
23		11.5	3.9	ほぼ完形	中央3, R4- Ⅰ R2・4-Ⅲ	良	堅	青灰色	ロクロ	ロクロ		
24		8.5	3.4	3:4	L2・3 中央4-Ⅰ	良	良	外・淡黄 褐色 内・青灰 色	ヘラケズリ	布, 皮状の ものでナデ		
25		9.3	3.2	1:2	R2・3 (中央)-Ⅱ	良	良	青灰色	ロクロナデ	ロクロナデ		
26		7.8	2.6	ほぼ完形	R4, L2-崩 落 L2-Ⅱ	良	良	青灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	宝珠つまみ を欠く	
26		須恵器 杯身	13.4	4.5	完形	L1-Ⅲ	良	堅	外・黄灰 内・青灰 色	ロクロ ケズリ	ロクロ	

挿図 番号	器種 器形	法 量(cm)		残存率	出土地・ 層位	胎土	焼成	色 調	調 整		備 考
		口径	器高						外 面	内 面	
27	須恵器 杯身	14.0	2.4	1:4	R2-Ⅲ	良	良	青灰色	ナデ	ナデ	
28		12.8	4.8	完形	R1-Ⅲ	精良	良堅	外・青灰 内・淡黄 灰色	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ 指圧痕	
29		12.8	4.5	ほぼ完形		良	良	青灰色	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	
30		13.9	4.6	完形	L1-Ⅲ	良	堅	青灰色	ロクロナデ 底ヘラ削り	ロクロナデ	
31		13.4	4.1	完形		良	良	青灰色	ロクロナデ 底ヘラ削り	ロクロナデ	口縁いびつ
32		12.6	4.0	完形		精良	良	青灰色	ロクロ 一部ケズリ	ロクロ	
33		14.8	4.2	完形	L5・6 (中央)-I	良	良	淡青灰色	ロクロナデ 底ヘラ削り	ロクロナデ	
34		11.5 12.5	3.9	ほぼ完形	L2-Ⅲ	良	良	青灰色	ロクロナデ 一部未調整 ヘラオコシ	ロクロナデ	若干いびつ
35		11.3	3.3	完形	L4-I	良	良	青灰色	ロクロ 底ヘラ削り	ロクロ	外・自然釉 有, 内・渦 巻状の右廻 り沈線有
36		9.8	4.0	ほぼ完形	L6-崩落面 L2, R3-I L1・2-II	良	軟	白色	摩滅	ナデ	
37	12.4	3.4	完形	L3-I	良	堅	濃青灰色	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	若干いびつ	
38	12.8	3.5	ほぼ完形	R4・5-II	良	堅	外・黒灰 内・濃青 灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	若干いびつ	
39	12.5	3.4	完形	L3-I L3-Ⅲ	精良	良	青灰色	ロクロナデ 一部未調整 ヘラケズリ	ロクロナデ		
40	11.0	4.3	1:2	R3-I	良	良	青灰色	ロクロナデ 底部荒い ヘラケズリ	ロクロナデ		
41	土師器 杯身	13.8	3.5	1:5	R4, L4-Ⅲ	良	軟	乳白色 褐色斑点 含む	ロクロナデ 横ナデ	横ナデ	
42	須恵器 杯身	13.9 14.9	4.4	ほぼ完形	R3-I	良	良	外・青灰 内・灰褐 色	ロクロナデ	ロクロナデ	外面に焼成 時の触着痕 あり極めて いびつ
43		10.1 10.9	4.1	完形	L4-I	良	良	青灰色	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	極めていび つ

## (3) 小屋ヶ谷古墳

挿図 番号	器種 器形	法 量(cm)		残存率	出土地・ 層位	胎土	焼成	色 調	調 整		備 考
		口径	器高						外 面	内 面	
44	須恵器 杯身	10.9	2.3	7:10	R3-II R3-III	良	良	青灰色, 外面一部 黒灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	若干いびつ
45		9.0	2.7	1:4	L3-I	良	良	青灰色	ナデ 底へラ削り	ナデ	
46		9.8	2.6	1:5	R2, L2-II R2-III L5-I	良	良	青灰色	ナデ 底部へラオ コシ末調整	ナデ	
47	須恵器 蓋か身	9.4	4.0	8:10	R2, 中央4- III	良	良	青灰色	ロクロナデ へラミガキ	ロクロナデ	
48	須恵器 蓋か身	8.9	4.6	3:5	R4-I L3, R2-II	良	良	青灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	外面凹線1 条
49	須恵器 甕	11.8 腹 9.6	13.5	ほぼ完形	L2, R2-I R3-I 中央4, R2- II	良	良	青灰色 外一部黒 灰色	ナデ へラケズリ	しぼり ロクロナデ	自然釉付着 外・凹線3 条
50		13.4 腹12.1	17.1	完形	L4-I	良	良	青灰色 一部黒灰 色	カキメ, ナ デ ロクロ痕	ロクロ痕	
51		14.6 腹 9.1	10.3	ほぼ完形	L3, L4-I L3-II	良	軟	灰白色	ロクロナデ	しぼり へラ削り	有孔
52	須恵器 高杯	10.2	10.5	7:10	R4, L1・2 (中央)-I R3-III	良	良	青灰色	ロクロ	ロクロ	外・自然釉 付着
53		12.2	18.2		L1-III	良	堅	黒灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	3方に透か し
54	須恵器 平瓶	17.8 腹 8.0	17.1	ほぼ完形	L4, R5-崩 落面 L1・2・3-I R3・4-I 中央4, R2・ 3, L3-II	良	良	淡灰色	ロクロ へラケズリ	ロクロ	外面沈線 1本 凹線1条 器表の一部 に自然釉付 着
55		6.0 腹18.0	11.5	3:4	R6, L5-崩 落面 L3・4・5-I R3・4-I L2・3, R2・ 3, 中央2-II	良	良	青灰色	へラケズリ	ナデ	
56	須恵器 脚付長 頸壺	10.4 脚13.4		1:3	R4-II	良	良	灰色(脚)	壺 カキメ 脚 ナデ	壺 横ナデ 脚 ナデ	壺, 脚とも 外面に凹線 文
57	須恵器 無頸壺 蓋	5.3	2.1	完形	L4-I	良	良	黒灰色	ロクロ へラケズリ	ロクロ	

挿図 番号	器種 器形	法量(cm)		残存率	出土地・ 層位	胎土	焼成	色調	調整		備考
		口径	器高						外面	内面	
58	須恵器 無頸壺	4.0 9.7	6.1 6.6	完形	L4-I	良	良	暗灰色 底・赤褐色	ロクロ 底部へラ削	ロクロ へラオサエ	
59	須恵器 甕	16.0	5.4	1:3	R2-II	良	良	青灰色	ナデ, カキ メ部分的に タタキ, ナ デ, ケズリ あり	ナデ	自然釉あり
60		20.6 中12.9 大23.8	25.9	1:2	12O区 淡褐色土 13P区 暗褐色土 13O区 黒褐色土	精良	良	青灰色	横ナデ カキメ ケズリ	横ナデ 底部カキメ	外・凹線3 条 列点文 スタンプ
61		18.0	4.4	1:8	L2-II	良	良	灰褐色	ナデ	ナデ	
62		14.7	6.5	2:5	石室羨門部 掘削	良	ヤヤ 軟	明褐色	ロクロナデ カキメナデ	ロクロナデ	外面上部に 自然釉付着 ・緑
63	須恵器 横盆	18.0 長23.6	14.7	ほぼ完形	L3-I	良	堅	青灰色	ロクロ カキメ	ナデ	
64	須恵器 提瓶	口4.8 腹10.5 腹巾 7.5	13.1	完形	L4-崩落面	粗	軟	灰白色	カキメ ケズリ ロクロナデ	ナデ	
65		腹16.1	22.3	完形	L4-III	良	良	外一部灰 黒色	カキメ タタキ痕	ナデ	
66		8.8 大20.6	24.8	ほぼ完形	L1-I L1-II L1-III	良	良	青灰色	ロクロ 一部タタキ	指ナデ	外・へラ記 号
67		9.2	3.0	1:4		良	良	青灰色	ナデ	ナデ	
68	土師器 杯身	10.6	3.6	1:5	L1・2・3-II	良	良	茶褐色	ナデ	ナデ	
69	土師器 長頸壺	8.7 腹13.9	16.6	ほぼ完形	L4-I	良	良	赤褐色	ナデ 縦方向ハケ	ナデ 横方向ハケ	腹部に黒斑 有
70	土師器 高杯	高15.1 中4.5 低12.4	16.5	7:10	L1・2-III	良	良	茶褐色	横ナデ 荒いハケ 指圧痕		
71	土師器 椀	9.8	4.0	ほぼ完形	L4-I	良	良	黄褐色	摩滅	摩滅	口縁に黒斑 有 若干いびつ
72		9.7	4.3	4:5		良	良	黄褐色	摩滅	摩滅	
73		9.7	5.0	ほぼ完形		精良	良	黄褐色	手づくね		内面スス付 着
74		9.8	3.8	完形		良	良	黄褐色	摩滅へラ痕	摩滅指頭痕	



鉄 器 ( ) は現存長

挿図番号	器種器形	出土地点	法 量 (cm)			残存率	備 考
			長 さ	幅	厚 み		
75	鉄 製 鏃	R3-Ⅲ	10.2	上 2.6 下 0.5	上 0.9 下 0.6		かえり, 欠損
76		L3-Ⅲ	3.1	上 1.5 下 2.0	上 0.1 下 0.4		かえり茎, 欠損
77		L2-Ⅲ	10.1 (8.7)	上 1.7 中 0.7 下 0.4	上 0.2 中 0.3 下 0.3		刃部中央より欠損
78		L1-Ⅲ	10.2 (9.3)	上 1.5 中 0.7 下 0.5	上 0.2 中 0.6 下 0.5		刃部の先, 欠損
79		L2-Ⅲ	(7.0)	上 2.7 下 0.9	上 0.35 下 0.5		茎, 中央部より欠損
80		R2-Ⅲ	(6.8)	2.7	0.4		かえり茎, 欠損
81		L2-Ⅲ	9.8 (8.2)	上 2.1 下 0.7	上 0.7 下 0.5		刃部の先 1/3 程欠損, 茎端欠損
82		L1-Ⅲ	8.0	上 1.9 下 0.8	上 0.4 下 0.5		茎端欠損
83		L1-Ⅲ	8.2	上 2.3 下 0.9	上 0.4 下 0.6		
84		L2-Ⅲ	8.5	上 1.8 中 0.6 下 0.5	上 0.2 中 0.35 下 0.4		かえり, 欠損 茎部欠損
85		L2-Ⅱ	9.3 (8.6)	上 1.9 下 0.3	上 0.3 下 0.6		先端部欠損 茎端欠損
86		R2-Ⅱ	11.7	上 3.1 下 0.5	上 0.7 下 0.5	ほぼ完形	
87		L2-Ⅱ	8.3	上 0.7 下 0.4	上 2.3 下 0.35		刃部, 茎一部欠損
88		中央2-Ⅲ	14.5	上 0.8 下 0.5	上 0.3 下 0.3		茎部欠損
89		L2-Ⅲ	14.9 (14.4)	上 0.9 下 0.5	上 0.6 下 0.5	ほぼ完形	茎部少し欠損
90		R2-Ⅲ	14.5 (10.4)		0.35		茎端少し欠損 刃部欠損
91	中央2-Ⅲ	13.3	上 0.9 下 0.6	上 0.2 下 0.35		茎部欠損	

挿図番号	器種器形	出土地点	法 量 (cm)			残存率	備 考
			長 さ	幅	厚 み		
92	鉄製 鎌	R2-Ⅲ	13.5	上 1.0 下 0.6	上 0.4 下 0.5		
93		中央2-Ⅲ	11.9	上 1.0 下 0.5	上 0.4 下 0.4		茎部欠損
94		中央2-Ⅲ	13.3	上 0.4 下 0.3	上 0.4 下 0.3		刃部欠損
95		R1-Ⅱ	6.8	0.5	0.3		刃部欠損 茎端欠損
96	鉄製直刀	L2・3 一崩落面	92.8 81.8 (刃渡)	3.6	0.8 (みね部)	ほぼ完形	
97		L1-Ⅲ	63.0 (刃渡)	3.0			一部欠損
98		R5-Ⅰ	51.6	0.9			一部欠損
99		R4-Ⅰ	32.4	3.5			一部欠損
100	鉄製(?)	R3-Ⅲ	4.1	1.8			
101	鉄製ツバ	L1-Ⅲ	長 7.6 短 7.0		1.5mm 3.0mm	2:3	
102	鉄製矛先	R3-Ⅱ	27.5	3.2			先端欠損
103	鉄製刀子	L3-Ⅱ	12.9	2.6			
104		R3-Ⅱ	16.2	1.55	0.9		
105		R3-Ⅰ	17.9	3.4			
106	鉄製鉸具	R1-Ⅲ					
107		L3-Ⅰ					
108		R4-Ⅲ					
109	鉄製革金具	L5-Ⅰ					
110	鉄製轡	L2-Ⅱ					
111		L2-Ⅱ					

## 装身具

挿図番号	器種器形	出土地点	法 量 (cm)			残存率	備 考
			長 さ	幅	厚 み		
112	金 環	R2-Ⅲ	径 3.1	0.6	0.5	完 形	全体の金箔がとれ丸味をおびて磨かれた本体が出ている。
113		L4-1	径 2.7	0.8	0.6	〃	残存良好全体に薄い金箔あり所々はがれて銅の心が緑青をふいている。
114		R5-Ⅰ	径 2.7	0.6	0.8	〃	内面金の残存良好
115		R2-Ⅲ	径 2.8	0.8	0.7	〃	内面に金残存
116		R1-Ⅰ	径 2.8	0.4	0.5	〃	摩滅著しくサビが全体に付着
117		L2-Ⅱ	径 2.2	0.7	0.5	〃	
118		L3-Ⅱ	径 2.2	0.8	0.45	〃	
119		小 玉	L4崩落面	径 0.9	0.85	0.5	〃
120	排土中		径 0.6	0.7	0.7	〃	
121	勾 玉	R3-Ⅱ	4.4	1.1		〃	
122		L2-Ⅱ	3.25	0.85		〃	
123		R2-Ⅲ	3.4	0.8		〃	
124	管 玉	R3-Ⅱ	3.5 径 1.2				色・濃緑色 碧玉製
125		R1-Ⅰ	3.2 径 1.2				色・深緑色 碧玉製一部欠損2度 穿孔失敗し反対側より穿孔
126		排土中	2.35 径 0.75				色・濃緑色 碧玉製
127		L1-Ⅰ	2.2 径 0.95			完 形	色・濃緑色 碧玉製
128		L3-Ⅲ	1.7 径 0.6				色・濃緑色 碧玉製
129		L3-Ⅲ	2.05 径 0.75				色・濃緑色 碧玉製

銭貨

番号	種別	径(cm)	出土地点	備考
140	銭貨	2.20	12Q SK11	寛永通宝 裏に刻印あり
141		2.35	塚1盛土内	寛永通宝 裏に刻印あり
142		2.25	表採 12P	寛永通宝
143		2.20	塚と周辺表土除去	寛永通宝
144		2.10	東側壁石抜きとり掘形内	寛永通宝
145		2.25	13P塚1盛土内	寛永通宝
146		2.15	13P塚1盛土内	寛永通宝
147		2.35	13P塚1盛土内	寛永通宝
148		2.35	13P塚と周辺表土除去	寛永通宝
149		2.35	12Q塚2盛土内	寛永通宝
150		2.45	12Q塚1盛土内	寛永通宝
151		2.40	12Q塚2盛土内	元豊通宝

陶磁器

挿図 番号	器種	法量(cm)		残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整		備考
		口径	器高						外面	内面	
130	磁器 椀	10.2	5.5	1:4		良	良				日本製
		高 6.2									
131		9.6	5.5			良	良	乳白色			外面底釉なし 日本製
		高 3.8									
132	青磁 椀	12.0	4.3	1:3	Bトレンチ 拡張	良	堅	青白磁			外面施釉・ 中国製
133		6.2	3.8	1:4		良	良	明緑色			外面施釉 蓮弁文・中 国製
134		5.6	2.5	1:4		良	良	明緑色			外面底釉なし 中国製
135	丹波焼 甕	33.2	6.5	1:8		良	良	茶褐色	ナデ	ナデ	
136	越前焼 壺	29.4	5.4	1:11		良	良	茶褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	
137	土師器 皿	10.9	3.2	完形	SK09		軟	黄褐色	手づくね	指ナデ	極めていび つ
138	瀬戸焼										瀬戸灰釉
139	瓶子										瀬戸灰釉

## (4) 洞楽寺古墳

## 1. 調査経過

洞楽寺古墳は、水田面より20～30m上がった台地端にある古墳時代後期の古墳である。洞楽寺のすぐ裏にあるため、この古墳名がついた。調査前の地形測量では南北16m・東西14m、墳頂部と西端部の比高差は2.5m、同じく東端部との比高差は1.5mであった。墳丘の中央部には北東から南西方向に幅4m・長さ7mの盗掘坑が大きくあいていた。

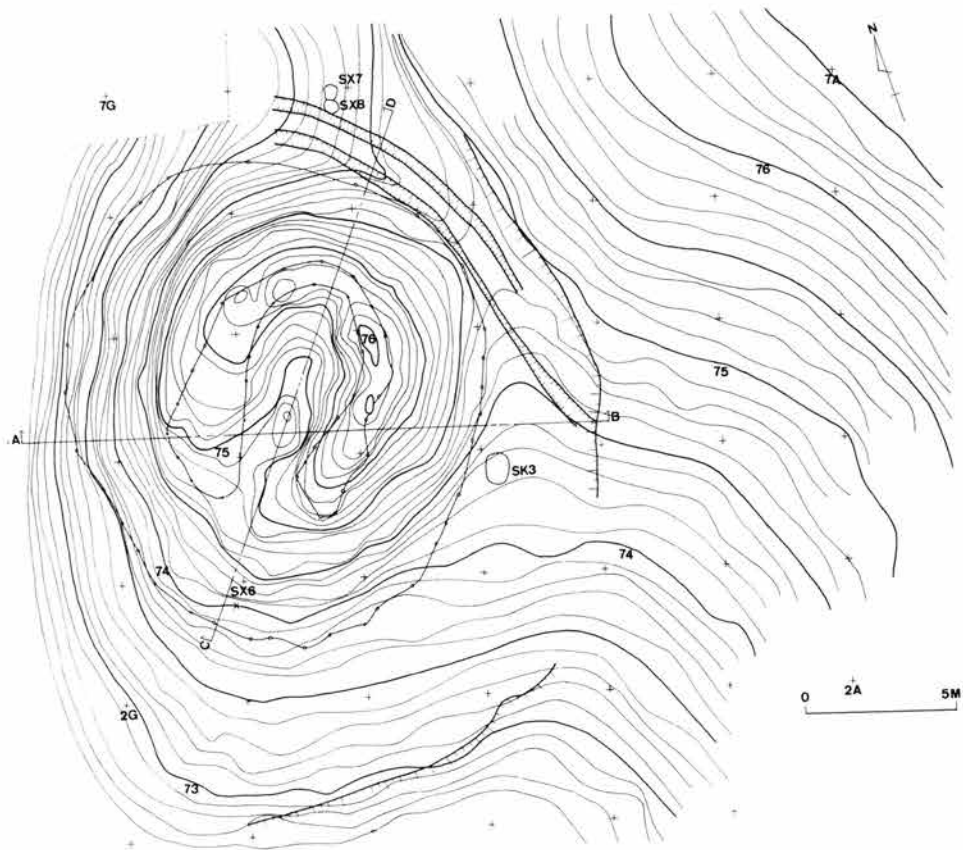
まず、道路基準杭の内の2点(STA365+00とSTA365+20)を軸とし、4mの方形区画を設定した。この軸線は磁北に対して8度東に偏している。南北軸をアルファベット、東西軸を数字で標示し、4m方形区画の南東隅でもって地区名とすることにした。この後、墳丘とその周辺の測量を行った。完了した後、墳丘の腐植土を除去し、石室内部の崩落土も除去し始めた。この段階で、墳頂部から須恵器高杯(第215図6)が出土したが、古墳造営以前に比定されるものであり、近隣から土砂を持ってきた際に混じったと思われる。また、石室前庭部東から銀環(第215図18)や須恵器片が出土した。さらに石室内部の崩落土には13・14世紀頃の土師器鍋片が包含されていることが判明し、崩落土中からそれ以外の土器が出土しなかったことから、盗掘坑(実際に盗掘したかは不明)は少なくとも中世以降の所産であることが判明した。横穴式石室の石材はわずかに奥壁下部1石、東側壁の下段2石、西側壁の下段1石が遺存していたのみであった。なお、棺台と思われる石が並んだ形で検出され、奥壁沿いに須恵器杯身と蓋が原位置のまま発見されたことにより、初期の葬法については一定の情報を得ることができた。

墳丘周辺の調査では、南部で五輪塔の一部や骨片を発見し、南から西にかけて古墳の裾を巡る形で石列も発見した。東側から北側にかけては周濠を確認したが、この埋土上面で時期不明の道を検出した。道は墳丘東部から山へ登り、約50m離れた湧水地点へ続いていることが判明した。道の形状は幅1.2mほどで両端に灰色粘土を埋めた幅30cmほどの溝を掘り、その上に山石(チャート)を敷き並べていた。これは村人が湧水を求めるために造作した道であろう。

墳丘の東側、周濠がある程度埋まった段階に造作された中世の焼土壇1基、同北側で中世の墓2基を確認した。

## 2. 検出遺構

まず、古墳について述べる。横穴式石室は前述のとおり、ほとんど破壊されていた。 कारणじて奥壁の幅が1.2mで、壁は2石程度を積んで構築していたことが確認できた。この



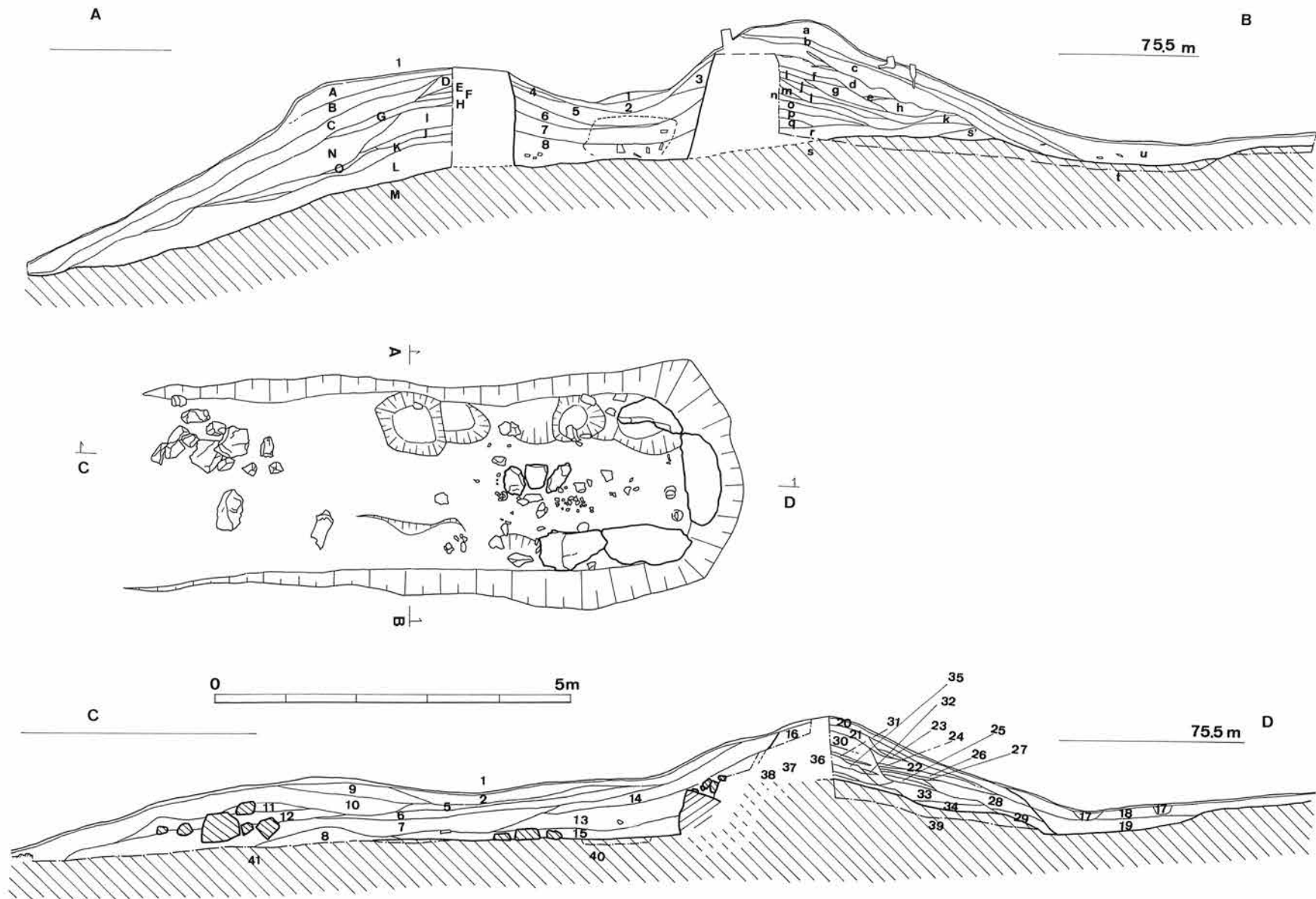
第208図 墳丘測量図

ように遺存状態はよくなかったが、墳丘が高く遺存しており、古墳の構築についてはある程度の推測が可能となった。

古墳は西へ5度傾く緩傾斜地に石室部分と墳丘東部を設定し、墳丘西部は10度傾く地点(台地縁辺)にまでのび、下から見上げると、少ない土量で大きく見える造作を行っている。奥壁部分は元来若干高かったようで、地山を約80cmほど掘り下げている。前庭部付近はあまり削っていないようである。

地山は一定ではなくシルト質や粘質土が玄室部分にあり、硬い砂質土が羨道部で認められた。以上のように墓地の選定は台地端の若干高まったところに決められていたことが知られる。そして、横穴式石室設定部分は若干削平され、最初の石を据えるため、穴を掘り埋めたことが確認できる。但し、これらの穴は玄室部分のみで、羨道部分は地山の関係から識別が難しかった。

一段目の石を据えた後、封土が外側に盛られた。大体15cm程度の厚さずつ土をつき固めており、石の裏側から墳丘外の方で土は盛られた。特に石室付近はしっかりと土を固め



第209図 東西方向断面図(1)

A—B断面

黄褐色粘質土：A・B(粘性弱)・C(もっとも粘性弱)・a・c・d(白っぽい)・f・h・i, 淡褐色粘質土：E・F(桃色斑)・G(粘性弱)・H(白っぽい)・I・L・N(ザラつく), b・g・k・l・n, 淡桃色土：D, 赤褐色粘質土：J(灰白色粘土斑)・P, e・j・m, 淡褐色粘土：K(桃色斑), 赤褐色混礫土：M(粘質), 暗褐色土：O, 淡赤褐色砂質粘土：O, 淡赤褐色砂質粘土：O, 淡褐色砂質粘土：P・t(地山), 青白色粘土：q, 赤褐色砂質土：Y, 青白色砂質土：S

C—D断面

腐植土：1, 暗褐色土：2・12・16・19・20・29, 淡褐色粘質土：3~6・14・22(白色土・褐色土斑)・23(やや明るい)・24(褐色土斑)・25(赤褐色土斑)・26・27(白色粘土斑)・28・30・34(白色粘土斑)・36・38(白色粘土斑), 黄褐色粘土：7, 淡褐色砂質粘土：3・8・15(粘性強), 暗黄褐色土：9, 黄褐色土：10, 黒褐色土：11, 灰色粘土：17, 淡暗褐色粘質土：18, 明褐色粘質土：21, 灰褐色粘質土：31・32, 淡褐色粘土：33, 桃褐色粘土：35・37, 赤褐色シルト質粘土：39, 青白色粘土：40, 赤褐色砂質土：41

たようであるが、天井石を載せた位置より上は、比較的簡便に土を盛っており、このため周濠が早い時期に埋没したようである。なお墳丘の東部での断ち割りによって、天井石を載せた段階で墳丘の一部に穴を掘り、須恵器甕(完形ではない)を埋納したことが確認できた。これは、石室造作終了時に行われた祭祀遺構(SX10)と言えよう。その後墳頂部まで土を盛り上げたが、この時点で祭祀が行われたかどうかは不明である。前述した墳頂で発見した須恵器高杯は、中村 浩氏編年のⅠ-4・5段階で、古墳内遺物とは大きな開きがある。<sup>(注57)</sup>この土器をもって祭祀の執行を言うことはできないが、古墳築造時に土を得るために破壊した先行の遺構があり、これを鎮めるために破壊した遺構の土器を使用した可能性は否定できない。これは盛土に不純物(石や土器など)を一切含んでいないことと、古墳の北方20m地点で竪穴式住居跡を検出し、その付近から出土した須恵器は中村編年のⅠ-5～Ⅱ-1段階のもので、古墳に先行してこの地に生活していたことが判明したことによる。これについては洞楽寺遺跡の調査の項を参照されたい。

古墳の外形が完成し、いよいよ遺体が安置される。遺物が集中する高さの相違から少なくとも2回の埋葬があったと思われる。

#### (1) 第1次埋葬

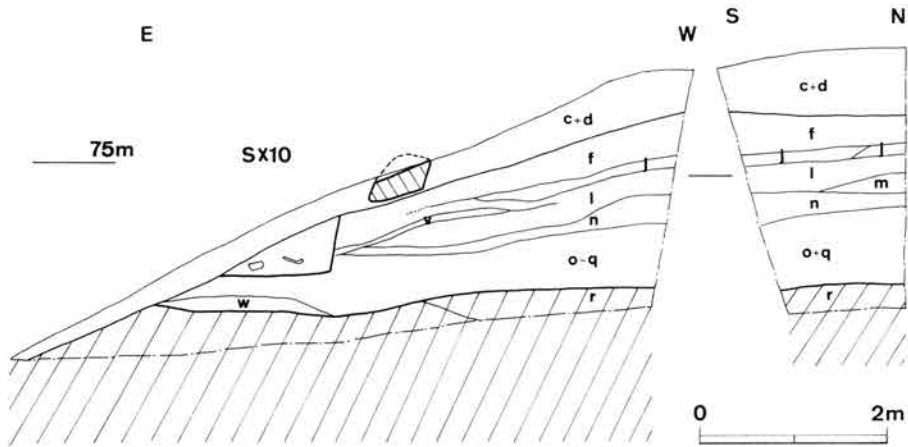
奥壁東部で完形の須恵器杯身が蓋を被せた状態で2個体(第215図5・6)検出された。これは地山直上であり、原位置を保った状態でもあり、第1次埋葬の際の供膳具と考えられる。この同一レベルに棺台と思われる石が3個置かれていた。数が少ないので、かつては奥壁付近にまであったと思われる。棺の東側にも原位置を保った須恵器杯身が1個体発見された。また、棺寄りのところでは土師器高杯が2個体(第215図8・9)がバラバラになった状態で発見された。これらは位置的に見て棺の中もしくは上に置かれていたものであろう。つまり第1次埋葬は奥壁から2.6mの範囲で行われ、棺の北側と東側に須恵器杯身を配し、棺の中、もしくは上には土師器高杯を置き、供膳具としていたことが判明した。なお棺台の南側で銀環1個、前述した土師器高杯の辺りでも1個検出した(第215図15・17)。靱に入れていたかどうかは不明である。さらに西側でも鉄鏃1本、鉄刀子等が発見された。

#### (2) 第2次埋葬

棺台の上面から上が第2次埋葬面である。奥壁に近い淡褐色砂質粘土層(第209図土層13)のみがこれに対応する。これより上は中世以降の土層である。出土遺物は原位置を保ったものではなく、第1次埋葬に伴う棺台の南西上面で銀環1個(第215図16)を検出し、奥壁の西南で鉄刀子4片(2振り)を検出した。上記の銀環と対となるものが前庭部東側の表土層から見つかったことから、ほとんどすべてにわたって攪乱されたことが判明した。

以上のように、第1次埋葬については若干ではあるが原状を復原することができたが、





第210図 東西方向断面図(2)

第2次埋葬については、ほとんど原状を知ることができなかった。なお、いずれも骨は断片を拾うことができたのみであった。

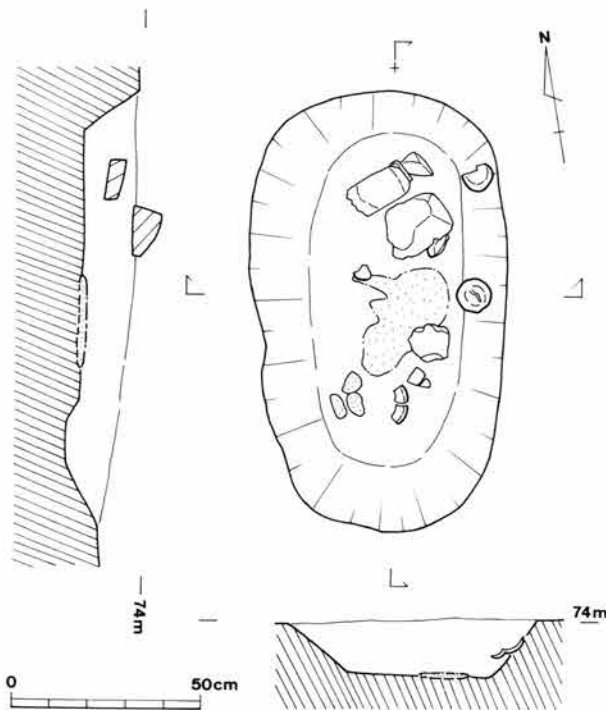
(3) 前庭部

前庭部には石室から扇状に遺物が散乱していた。特に東側に多く集まっていた。これは、

石室を破壊した際に内部から投げ出されたものと思われる。特に前庭部において祭祀を行ったというものではない。

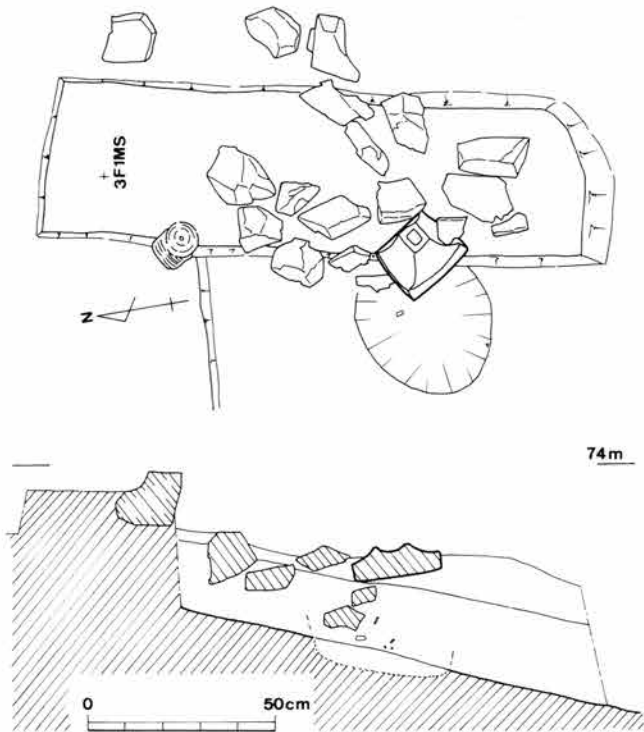
(4) 墳丘内

墳丘の東部で検出された祭祀遺構SX10は、図示した断ち割り部の南側50cmにある。土壇は墳頂部で深さ30cm、水平な底面なので周濠側は深さをもたない。埋土は、暗褐色土で、中央に須恵器甕を埋納していた。これは石室の天井石を置いた段階の土層から切り込んでおり、横穴式石室を組み上げた時の所産と言えよう。つまり、この段階で祭祀



第211図 SX3 実測図

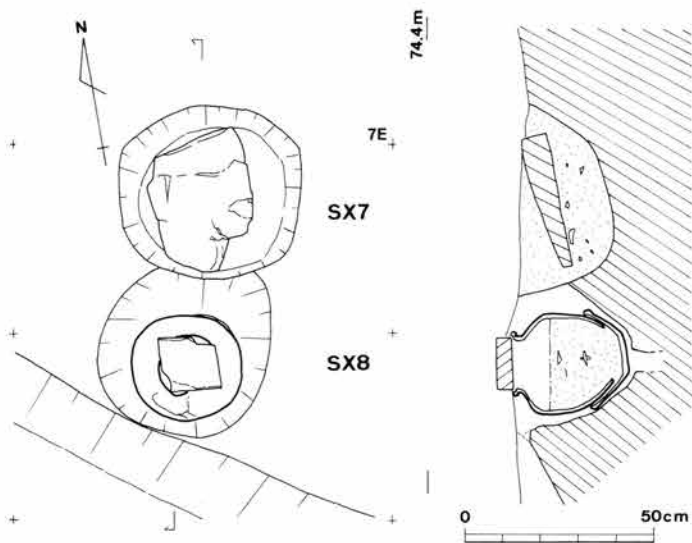
を行っているのである。概報で推定したように、これは直接には古墳被葬者及びその家族に関係はなく、石室を組み上げた人々の行為に帰因するものであろう。したがって石の技術者集団の祭り跡と考えられよう。墳丘の最終封土を盛る段階で、SX10の10cm上でチャート質の石(30cm×15cm)を埋置しているのがわかった。この石の頂部は墳丘より突出しており、外から見える状態であった。したがって古墳が完成した後も何んらかの祭りの対象物となった可能性も考えられる。



第212図 SX6 実測図

以上が古墳時代に属する遺構の概要である。次に中世に属する遺構について述べる。

**焼土壇SX3** 墳丘の東周濠内で検出した隅丸長方形土壇である。長径115cm・短径65cm・深さ13cmを測る。土壇北部に石2個を置き、この付近に土師器小皿2枚を据える。中央には焼土塊3の付近に土師器小皿2枚を置く。南部には小焼土塊3のほか土師器大皿4片(1個体)を置く。土

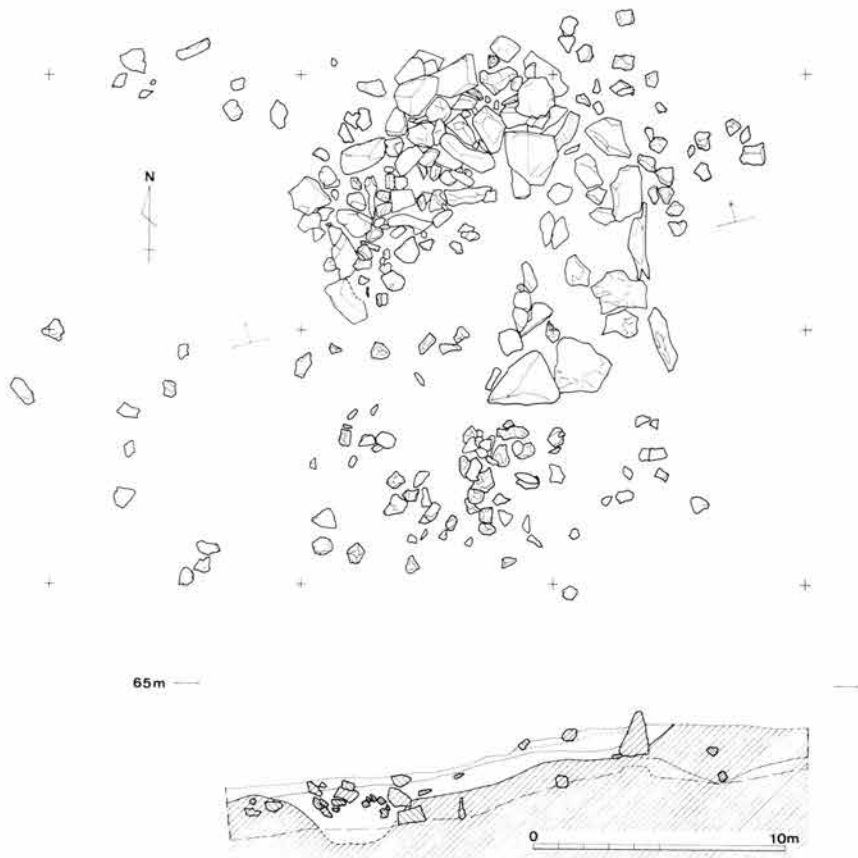


第213図 中世墓SX7・8 実測図

師器皿は雑なつくりのものばかりである。焼土坑はあるいは遺物を焼いたものか、もしくは墓に伴う祭祀跡であろうか。

**墓SX6** 前庭部にある墓である。古墳時代の面より30cm上で五輪塔の火輪が、同大のチャート質の石とともに集められており、この下から骨片が検出された。骨片は径37cmの穴を掘り(埋土は灰褐色土)、その中に埋めていた。この火輪に伴うものはSX6の西方2mで見つかった空風輪であるが、他の部分は発見できなかった。五輪塔は小ぶりで、およそ室町時代に属すると思われる付近から須恵器鉢も検出された。

**墓SX7・8** 図面では表現していないが、この遺構の上面で20~30cm大の石が腐植土を除いた時点で検出された。SX7は円形土坑で、径は45cm・深さ25cmである。埋土は淡褐色土(やや暗褐色気味)で、南下がりに平石を据えていた。この上下に骨(火葬骨であろう)が埋納されていた。北側の地山は黄褐色土、南側のそれは赤褐色土であった。SX8はSX7のすぐ南にある墓で、断面観察によりSX8が古いことが確認できた。楕円形土坑で、長径



第214図 SX9 実測図

50cm弱・短径45cm・深さ30cmである。断面はすり鉢状を呈する。須恵器壺が蔵骨器で、底部が欠損しているものを転用したため、下に須恵器鉢を据えている。なお蓋は正方形の平石を使用していた。埋土は淡褐色である。

**墓SX9** 先述した墓SX6から西側に広がる石列である。墓SX6を起点とし、ほぼ西へ3mほど石列が続き、ここで北に屈折して4m続き、また北西に折れ4m続いて終わる。幅1mを測る。散骨がみられる。

時期は遺物の項で述べるが、おおむね鎌倉時代後期から南北朝時代にかけてのものである。

### 3. 出土遺物

古墳時代に属する遺物は土師器・須恵器・銀環・鉄製利器で、器種は土師器が高杯、須恵器が杯(身と蓋)・高杯・甕、鉄製利器が刀子・鏃である。中世に属する遺物は、土師器・須恵器・石製品である。種類は須恵器が甕・鉢、土師器は皿、石製品は五輪塔の空風輪と火輪である。

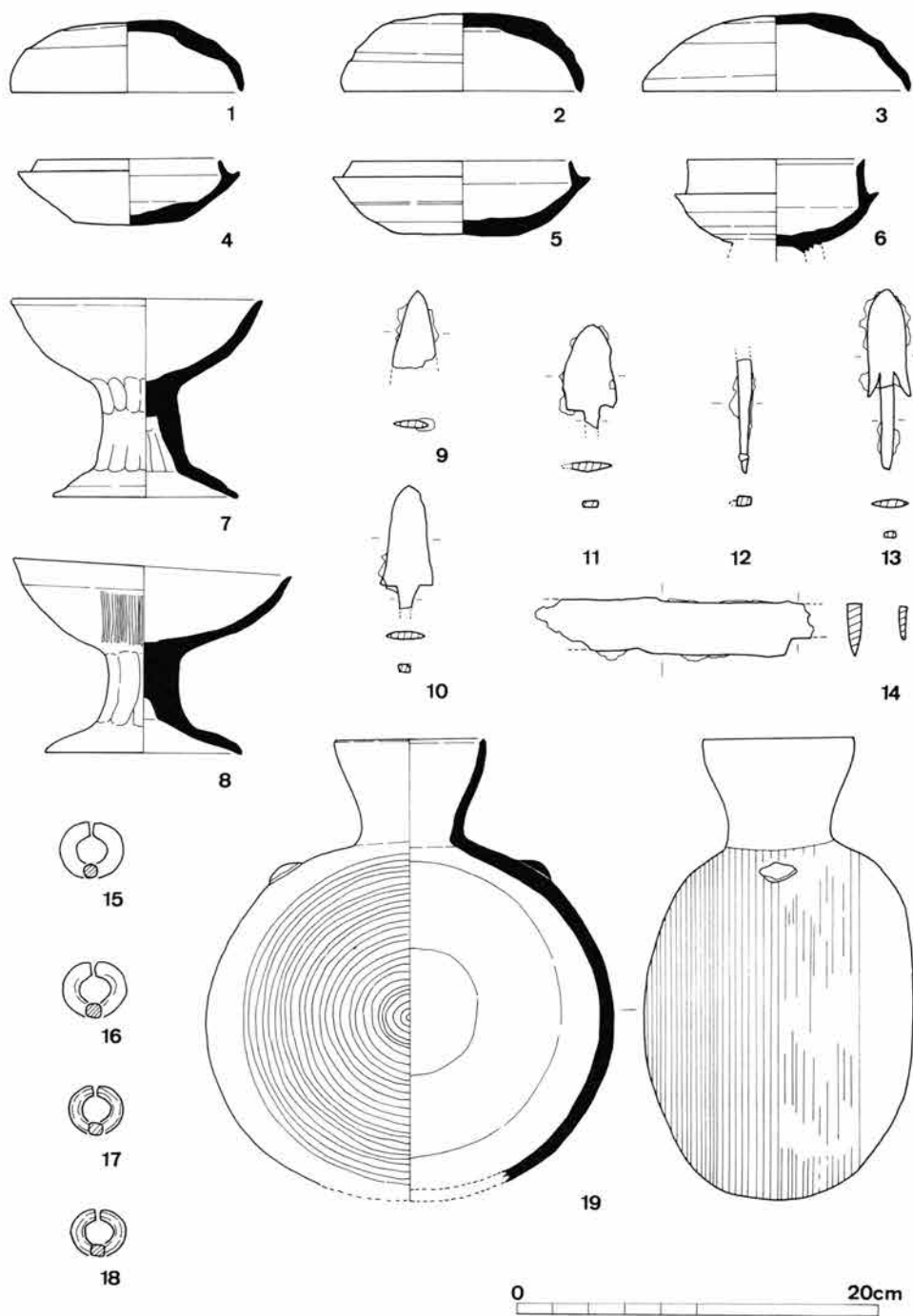
個々の遺物の概要については観察表に譲るとして、ここでは特徴的なものについて略述したい。

まず、古墳時代に属する遺物について述べよう。第1次埋葬に伴うものの内、3と5はセットで検出された。3は器高4.2cm・口径13.2cm、胎土はザラついた粘土で、焼成はあまい。色調は褐色である。生焼けの製品である。5は器高4cm・口径12.2cm、胎土は1mm大の白色砂を少し含む。焼成はあまい。色調は光沢のない褐色を呈する。これらはいずれも生焼けのもので、同時にセットで焼かれたものであろう。中村編年のⅡ-6段階に相当する。

第2次埋葬に伴うもののうち1は、器高3.7cm・口径12.8cm、胎土は1mmの白色砂をかなり含んでいる。焼成良、色調は青灰色(外面は黒灰色に近いところも半分ある)。外面には点々と窪みがあり、荒れている。銀環は錆化が著しく、外面の銀がほとんどとれている。

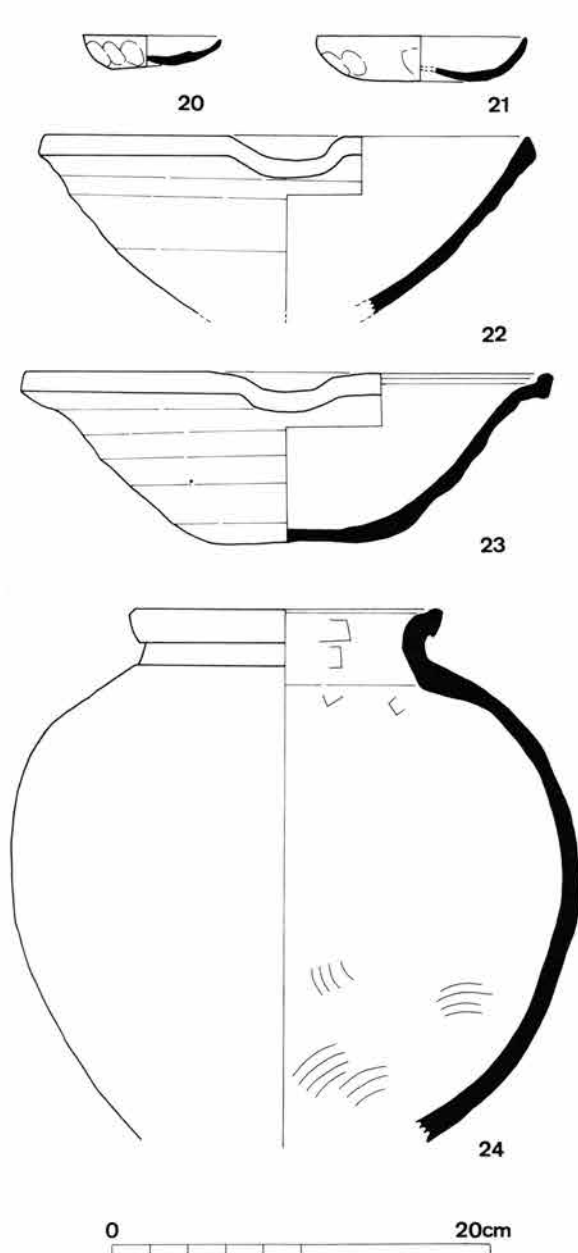
概して、古墳時代に属する遺物は遺存度が悪く、破片で発見された。破片数は須恵器杯身272・壺16・提瓶46・甕387・高杯13、土師器高杯99・甕42、銀環4、鉄鏃4、鉄刀子2である。

次いで、中世に属する遺物について述べよう。焼土塚SX3に伴う土師器皿は手づくね痕が明瞭にわかる雑な製品である。20は口径7cm・器高1.6cm、胎土は良質であるが、焼成はあまい。色調は淡褐色(所々黒色及び赤褐色)を呈する。21は口径11cm・器高2.3cm、胎土は1~2mmの石を含む。焼成ふつう。色調は淡褐色。底部が盛り上がっているのは焼成の具合か。これらはいずれも指おさえ痕が顕著である。法量が小さく、しかも雑に作られて



第215図 洞楽寺古墳出土遺物実測図(1)

包含層：1～3. 須恵器杯蓋，4・5. 須恵器杯，6. 須恵器高杯，7・8. 土師器高杯，  
9～11・13. 鉄器鏃，12. 鉄器基部，14. 鉄器刀，15～18. 鉄器銀環，19. 須恵器提瓶



第216図 洞楽寺古墳出土遺物実測図(2)

SX8: 23. 須恵器すり鉢, 24. 須恵器壺, 包  
含層: 20・21. 土師器皿, 22. 須恵器すり鉢

いることから、平安京の編年観<sup>(注58)</sup>によれば14世紀に属すると言えよう。

墓SX6付近で検出した須恵器鉢は底部を欠いている。口径25.6cm・器高(8.2cm)、胎土は1~2mm大の白色砂を含む。1.5cm×0.5cmの粘板岩片が1点含まれている。焼成良好で、色調は灰色を呈する。口縁部のごく一部が黒灰色を呈する。調整技法は内外面ともロクロナデを施す。内面の下半部は磨滅している。兵庫県魚住窯系の製品であろうか。口縁部の形態から言えば、京大作成の『中世土器様式』<sup>(注59)</sup>編年案によれば13世紀後半代と言えよう。この鉢は出土地点から、墓の蓋として使用された可能性がある。

墓SX8の蔵骨器である須恵器甕は、口径16cm・現存高27.6cm、胎土は精良、焼成堅緻、色調は黒灰色である。体部外面はいわゆる綾杉状のタタキメがあり、内面は同心円文をほとんどナデ消している。口縁端部内側には凹線が巡る。底部は蔵骨器に転用する以前に破損したものと思

われる。この製品と同種のものは、兵庫県三木市与呂木7号窯、跡部1・2号窯で確認されている。また京都府夜久野町の矢谷経塚では、甕の内部に木製の円板が入れられており、<sup>(注60)</sup>これには「応永……」の年号があって1,400年前後を下限とする製品であることがわかる。

本品は型式的に先行するもので14世紀前半代と思われる。

須恵器鉢は、口径28cm・器高9cm、胎土は若干の砂粒を含む。焼成は堅緻である。色調は灰色を呈する。口縁端部の一部が黒変している。内外面ともロクロナデする。内底面が磨滅している。完形である。魚住窯系か。口縁端部の屈曲が大きく、先述したSX6の鉢より後行するので、14世紀代の産物と思われる。

#### 4. ま と め

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の古墳調査は、城ノ尾古墳、後青寺古墳、小屋ヶ谷古墳、薬王寺古墳群と、当古墳の都合5件である。築造年代の古いのは薬王寺古墳群で、5世紀代に遡ると思われる。主体部は箱式石棺と木棺直葬の2種がある。次いで後青寺古墳で、5世紀末～6世紀末で、木棺直葬墳である。それ以外の古墳は横穴式石室である。遺物の観察によれば、本墳→小屋ヶ谷古墳→城ノ尾古墳と重複しながら築造、経営されたようである。これは少数の有力家族墓の変遷とみることができよう。

竹田川を挟んだ対岸にある庵戸山古墳群は10数基で構成されており、これらがおそらく横穴式石室墳である現況を示しているので、6世紀～7世紀初頭には1か所に群集するタイプと、1丘陵に1基程度が散在するタイプの2タイプがある。これは、やはり家父長層内部に優劣を認める必要性を示しているのではないか。

副葬品については、薬王寺古墳群から洞楽寺古墳までの時期は、鉄鏃などの武器が主体で、小屋ヶ谷古墳は馬具と武器、城ノ尾古墳は武器と農工具というように、変遷をたどることができる。

中世の墓造構については、(1)須恵器壺を蔵骨器としたもの、(2)穴に直接骨を埋納したもの、(3)石列を設け、その付近に骨を散らせたもの、(4)五輪塔を設け、その下に穴を掘り骨を埋納したもの、というように4種類の形態が認められた。(1)については大内城跡墳墓に類例がある。(2)は多保市城跡B地点や山田館跡などの墳墓に類例がある。(3)については、後正寺古墳に類例がある。

これらの墳墓は、14世紀代に造営されたもので、多保市城跡B地点の項で推定したように、有力名主層がその被葬者と思われる。この地で、鎌倉時代後期になって墳墓が増えるのは、有力名主層が搦頭し、おそらく荘園や国衙によって把握されていた土地を、私有化していった結果であろう。それが14世紀のある段階で、築造が絶えてしまうのは、これらの私有化を抑える強い規制が行われたことを示す。それは、天龍寺領となったことと、決して無関係ではなく、究極的には天龍寺のバックにある足利幕府の規制によると見ることも充分可能である。

(伊野 近富)

## (5) 薬王寺古墳群

### 1. 遺跡の立地

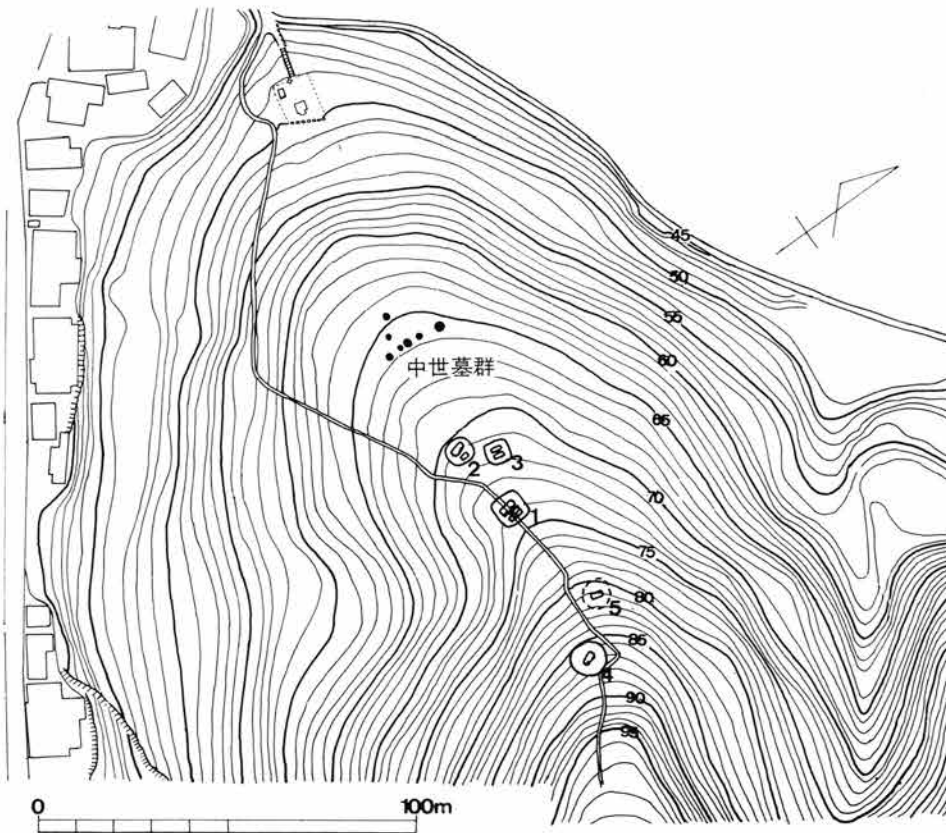
薬王寺古墳群は、由良川の一支流である土師川と兵庫県側から流れる竹田川とが合流する付近の丘陵上に立地する。この古墳群は東から西へ傾斜する丘陵の、標高70~75m付近に築造されている。なお、10m以下では中世墓(多保市城跡B地点)を検出した。

この古墳群のある丘陵からは、両河川の合流付近に発達した平野を一望することができる。特に現在の多保市・岩崎の集落への眺めがよい。

この古墳群の北西150mの位置は、中世の城跡である多保市城跡(A地点)があり、その関連施設と思われる土塁状隆起が、丘陵の傾斜方向に平行して存在していた。

### 2. 調査の経過

調査は、樹木の伐採・撤去の後、地形測量から開始した。その際に古墳状隆起が5か所



第217図 薬王寺古墳群分布図



で確認されたため、古墳の存在を予想して標高の高い方から順に古墳の番号を与えた。

掘削は、1号墳から開始し、墳丘中央部に試掘坑を入れた。その結果、墳丘の東側で溝を、中央部西寄りでは須恵器や土師器を含む土坑2基(1m×0.4m, 1.5m×0.6m)を検出した。当初、この2基の土坑を主体部と考えていたが、墳丘を東西・南北に断ち割ったところ、この土坑2基を含むかたちで、その下に大きな掘形が3基存在することが、土層観察から確認された。そのためさらに平面的な追求を行った結果、南北方向に主軸をもつ主体部3基(木棺直葬)を検出した。また、墳丘の東側で検出した溝も、墳丘の周囲をめぐるていることがわかった。

2号墳は、表土を剥いだ段階で、墳丘の東側で溝、墳丘中央部に置かれた須恵器甕を確認したものの、主体部の輪郭は今一つははっきりとしなかった。そのため1号墳同様に東西・南北方向にサブトレンチを入れて土層観察を行ったところ、2つの掘形が存在することがわかった。平面的な追求の結果、南北方向に主軸をもつ主体部2基(木棺直葬)を検出した。当初確認していた須恵器甕は、この中の第2主体部を意識して置かれていることがわかった。ほかに墳丘の北裾では、中世の須恵器鉢が出土した。

3号墳は、表土を剥いだ段階で、墳丘を画する溝と石棺2基を検出した。石棺は扁平な板石を組み合わせた箱式石棺で、墳丘の中央部に2基並んで存在した。主軸は、ともに南北方向にある。石棺は、側石・底石・蓋石から構成されるものと思われ、蓋石の大部分はすでに消失していた。遺物は、周溝内から土師器壺・碗が、墳丘西裾から須恵器甕が出土した。なお、棺内からは出土しなかった。

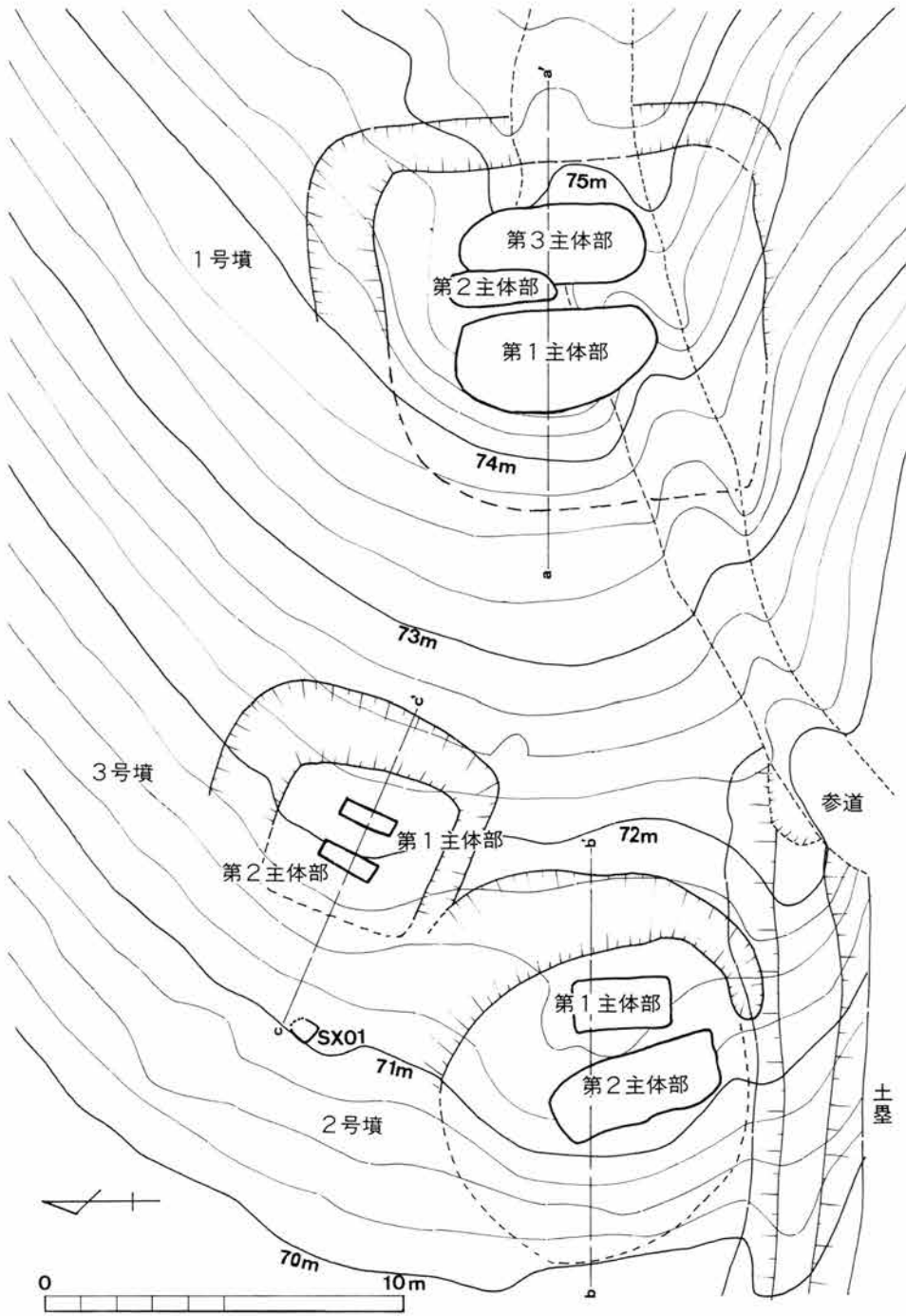
4・5号墳は、1号墳の東方30~40mの地点にあり、傾斜角20度前後という急傾斜地に立地している。この両墳については、工事に付随して発見されたため、調査前の旧状はほとんど失われていたので、主体部(箱式石棺)を中心とした調査となった。

### 3. 検出遺構

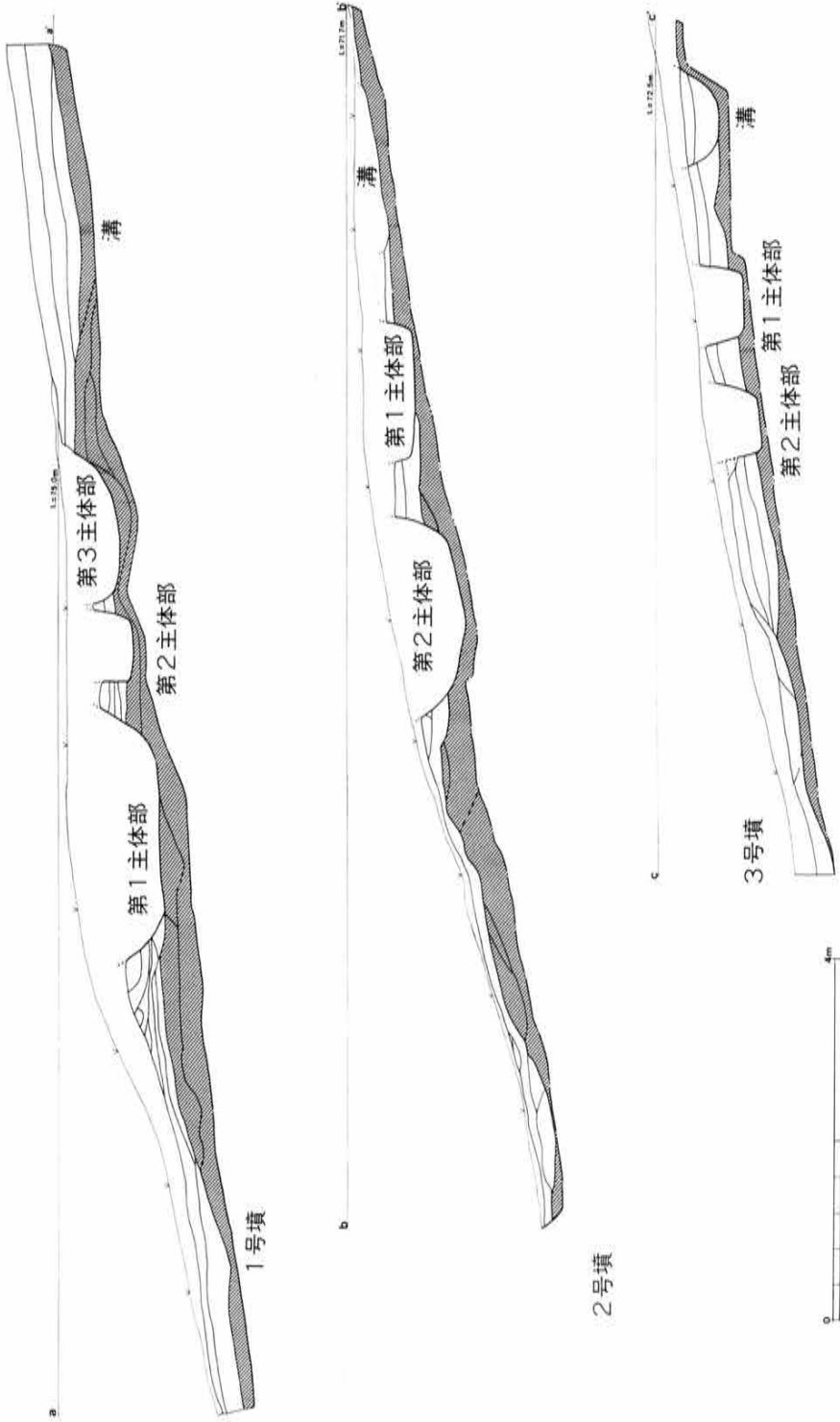
#### ①1号墳

**墳丘** 1号墳は、標高75m付近の緩やかな傾斜をもつ丘陵上に位置する。墳丘は、尾根の背後に溝を掘りめぐらすことによって整形しており、墳丘の南側については裾部が明確ではないが、一辺10m前後の方形を呈する古墳と考える。

**主体部** 主体部は、3基の木棺墓よりなる。その位置関係は、墳丘のほぼ中央に第1主体部があり、その東側に第2・第3主体部がある。いずれも南北方向に主軸をもち、尾根筋に直交する。第2主体部は、第3主体部の墓坑を削り込んで形成されており、他のものに比べ規模も小さい。



第218図 薬王寺古墳群地形測量図



第219図 墳丘断面図

第1主体部は、長辺5.6m・短辺2.8m・深さ0.5mほどの墓壇をもち、墓壇内の棺の両木口に当る部分に礫混じり粘土塊を配する。粘土塊は、土圧・自重のために両方とも北側に若干傾くが、棺の木口部にあたる部分は平坦である。そのことから両木口間は、2.6m、木口幅は、0.85mを測り、木棺も同規模と推定できる。また、墓壇床面が平坦であることから組合式木棺と考える。

遺物は、当初主体部と考えていた土壇および棺内から出土した。双方から出土した遺物の中には接合するものがあり、棺上あるいは墳頂部に置かれていたものが、木棺の腐朽によって落ち込んだと考える。土壇からは、須恵器杯・高杯・壺、土師器甕が出土した。棺内からは、直刀・鏃・刀子・馬具(轡)などの鉄製品が出土した。直刀は、棺内南木口付近の東寄り出土し、刀先は北に、刃部は棺外側に向ける。棺内中央付近から北寄りにかけては、鏃・刀子・馬具が出土したが、方向やレベルがまちまちである。棺内で出土したこれらの遺物は、レベル差が最大で約20cmあり、その間に不規則に散乱しているという状況を示しており、木棺内に初めから置かれていたというよりも、棺直上に置かれていたものが落下したのかもしれない。

第2主体部は、素掘りの土壇で、ほぼ南北方向にその主軸をもつ。木棺の痕跡はうかがえなかった。墓壇の規模は、長辺1.45m・短辺0.55m・深さ0.3mを測る。出土遺物はない。

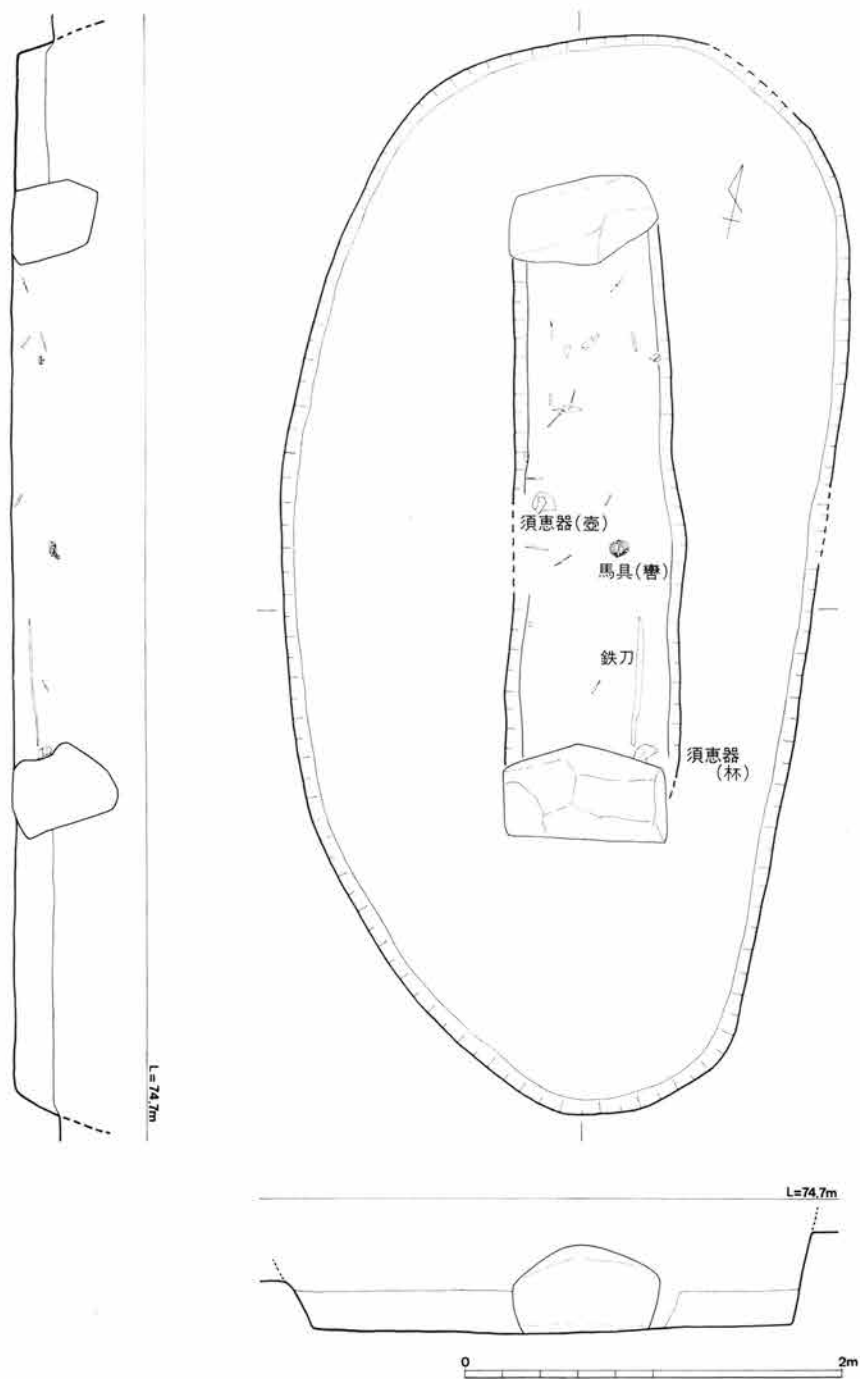
第3主体部は、墳丘の東側に位置する。墓壇は2段の輪郭をもち、その規模は、1段目で長辺5.1m・短辺2.2mである。2段目は長辺3.9m・短辺1.1mを測り、検出面からの深さは0.4mを測る。墓壇の2段目に木棺を置いたものとする。棺底が平坦なことから、組合式箱形木棺が想定される。主軸は、ほぼ南北方向にある。

遺物は、墓壇の埋土の上層で須恵器杯蓋が出土した。その出土状態から棺上に置かれていたものと思われる。墓壇の2段目(棺内)からは、須恵器杯・鉄鏃・礫が出土した。須恵器杯は、棺南寄り身と蓋がそれぞれふせた状態で2個出土した。棺底に並べた状態で置かれていたことから、枕として転用された可能性がある。鉄鏃は、棺中央部から南寄りで棺底から幾分浮いた状態で出土した。一束にかためられており、刀先は北を向く。計16本出土している。棺中央から北寄りにかけては、10~30cm前後の礫が出土しているが、平らな面を上に向けているわけではなく、用途は不明である。

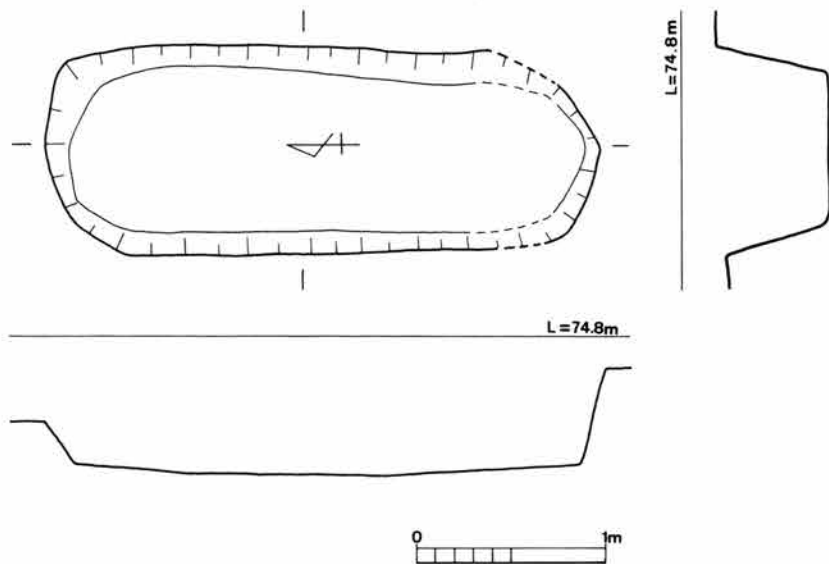
## ② 2号墳

**墳丘** 2号墳は、標高71m付近に位置し、その南側には多保市城跡の関連施設と考えられる土塁が認められる。墳丘は、丘尾切断の溝を周囲にめぐらせることで整形する。南側の裾が明確にできなかったが、直径8m前後の円墳と考える。

**主体部** 主体部は、木棺墓2基である。その位置関係は、墳丘のほぼ中央部に第2主体



第220図 1号墳第1主体部実測図



第221図 1号墳第2主体部実測図

部があり、その東側に第1主体部がある。ともに尾根筋に直交するかたちで主体部を形成しているが、2つの主体部の主軸方向は若干異なる。

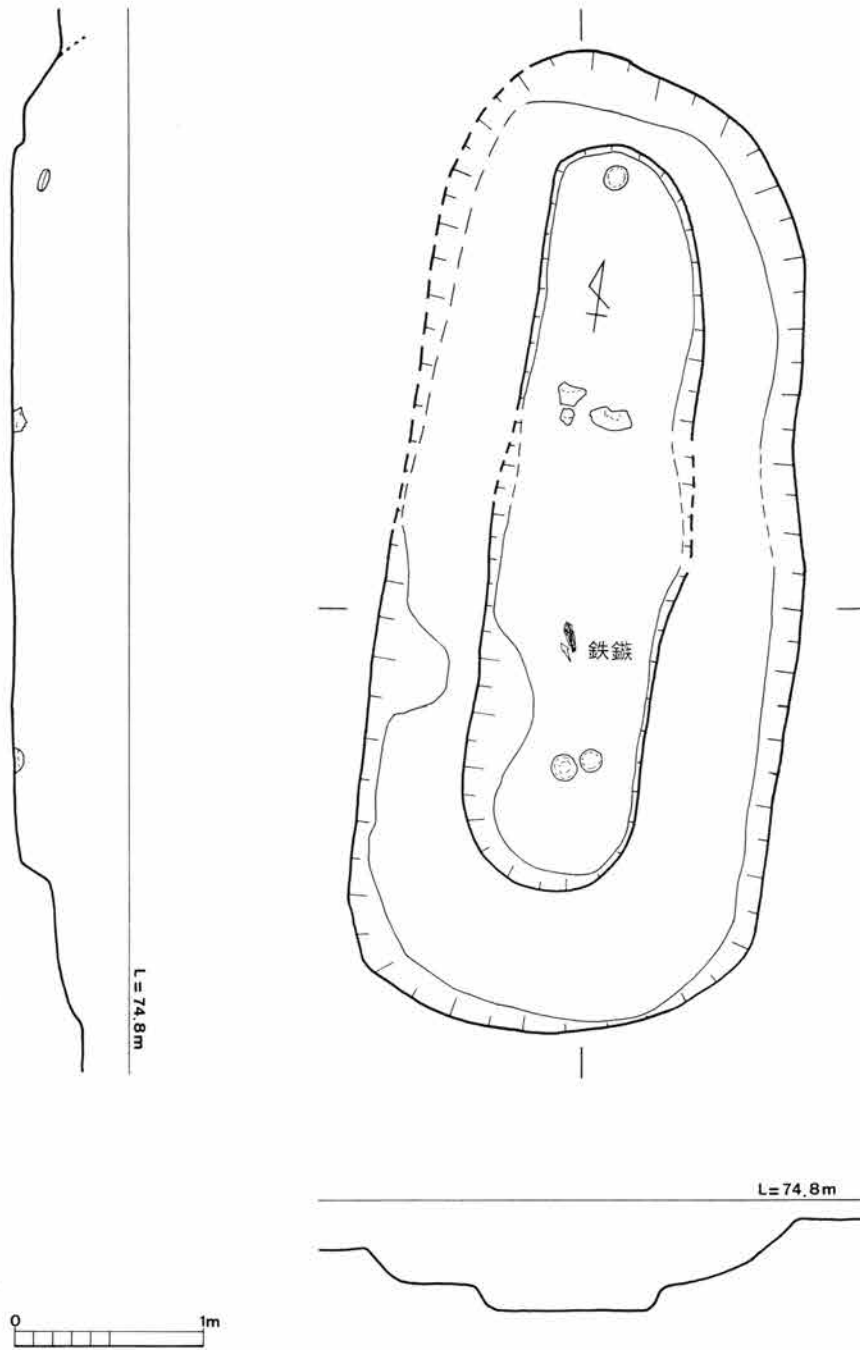
第1主体部は、墓壇が長方形を呈し、主軸は、ほぼ南北方向を指す。規模は、長辺2.65m・短辺1.45m・深さ0.3mを測る。木棺の痕跡は窺えず、その規模は不明である。墓壇の北寄り付近で、須恵器甕が横たわった状態で出土した。棺上に置かれていたものが、落ち込んだと考える。

第2主体部は、墳丘の中央部に位置する。埋葬施設は、長辺4.9m・短辺1.8m・深さ0.5mの墓壇の中に木棺を置き、両木口部礫混じり粘土塊を配するものである。主軸は南北にあり、N32°Wである。粘土塊は、木棺の木口板のあたる部分が平坦であるが、ともに棺中央に向かって内傾する。両木口間は2.6m、木口幅は北木口で0.4m、南木口で0.5mを測り、礫の規模も同様のものが想定できる。棺底が平坦であることから、組合式木棺と思われる。

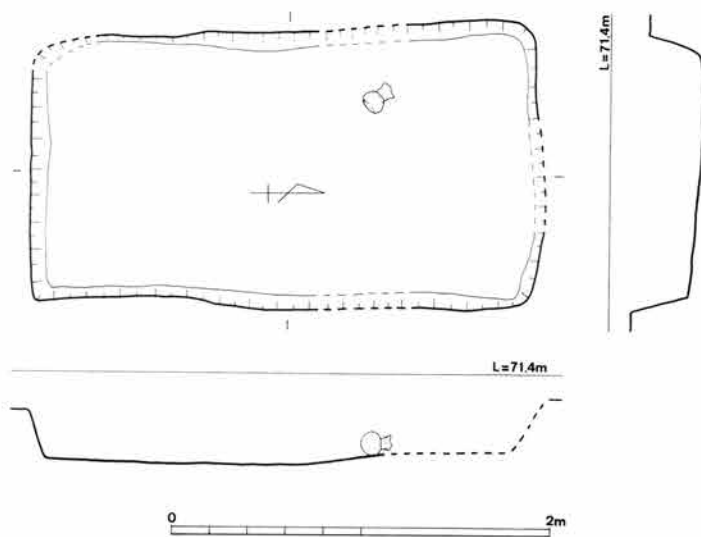
遺物は、棺上で須恵器甕が出土した。また、墓壇内からは南木口の粘土塊の南側で、須恵器杯身・蓋(3セット)、刀子(1本)が出土し、北木口の粘土塊付近では須恵器杯蓋が上を向いた状態で出土した。棺内からは、棺中央から南寄りで管玉が出土した。南木口付近の遺物群は、その出土状況から木棺の安置後に、墓壇埋土の面に置かれていたものと考えられる。他に墓壇を掘り下げる際にも、須恵器杯片が出土した。

### ③ 3号墳

**墳丘** 3号墳は、標高72m付近に位置する。尾根の上方に溝を設け、墳丘を整形する。



第222図 1号墳第3主体部実測図



第223図 2号墳第1主体部実測図

盛土はほとんど認められず、表土(腐植土と明黄褐色土)直下の黄灰色土の面から、墓坑、周溝が掘り込まれていた。墳形は方形で、一辺約5mを測る。2号墳の周溝に3号墳の周溝は切られていた。なお、墳丘西裾で須恵器甕を埋納する土坑(SX01)を検出した。

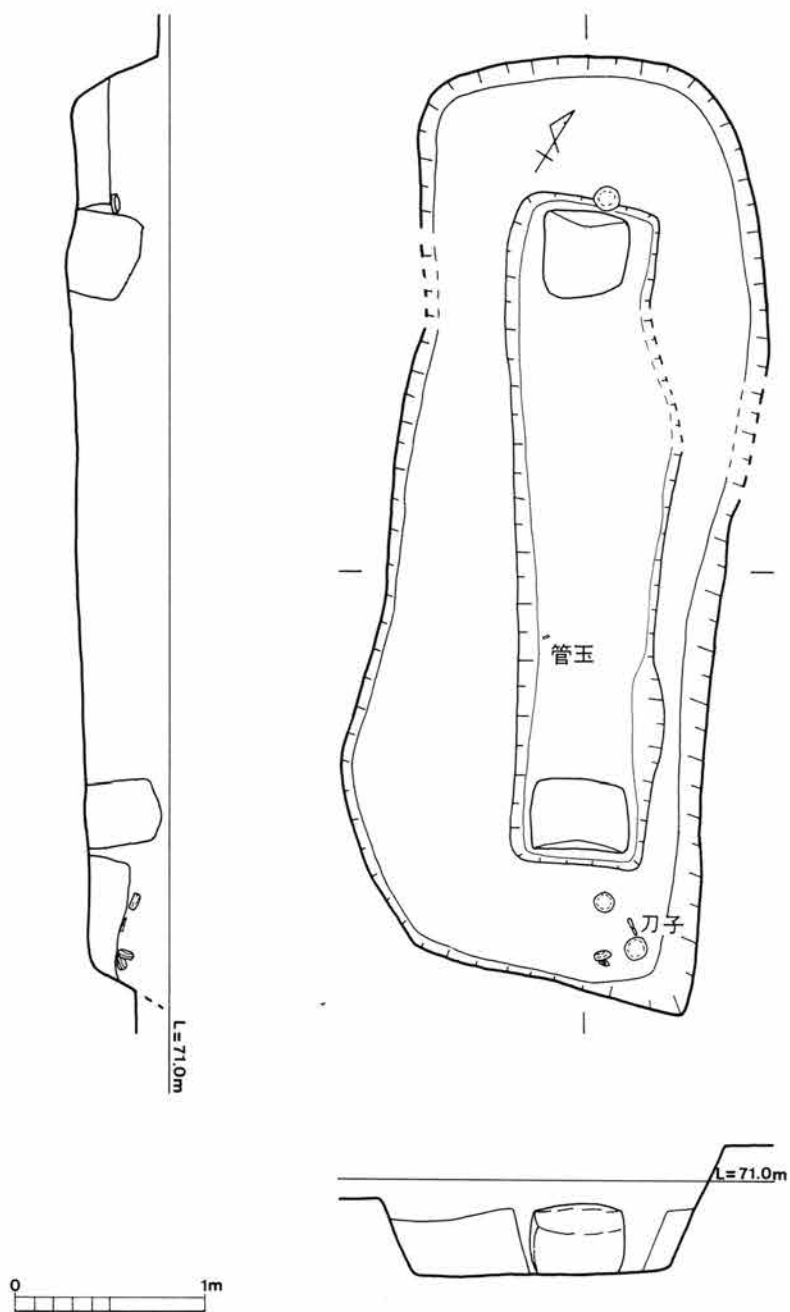
**主体部** 主体部は、尾根筋に直交する形で、2つの墓坑が平行してあり、埋葬施設は、組合式の箱式石棺である。両者の墓坑の切り合いはない。東から第1・第2主体部と呼ぶ。

第1主体部は、墳丘中央東寄りに位置する。埋葬施設は、長辺2.2m・短辺0.6~0.7m・深さ0.4mの墓坑の中に、板石を組み合わせた箱式石棺を設置していた。石棺は、板石を墓坑底に直接立て並べて側壁をなし、その組み合わせ方は、長辺側石の内側に短辺側石をはさみ込んでいる。墓坑底には、黄褐色土を5~10cmほど入れ、その上に板石を敷いて床面をなす。蓋石は側石の一部に残るが、側石全体を構築した状態では検出できていない。側石は、長辺各3枚、短辺各1枚で構成されるが、底石は、大きめの板石4枚を配した後、その隙間に小さめの石を埋める。棺材の板石には、加工痕は認められず、また石棺の継ぎ目を粘土等で目貼りする工夫も窺えない。石棺の内法は、長さ1.6m・幅0.4m・北端高0.3m・南端高0.35mを測る。石棺は、南北方向に主軸をもち、N17°Eである。

遺物は、棺内、墓坑内のいずれからも出土しなかった。

第2主体部は、第1主体部の西側に平行してある。墓坑は、長辺2.1m・短辺0.7~0.9m・深さ0.5mの規模をもち、その中に箱式石棺を納める。石棺は、第1主体部と同じく蓋石・側石(長辺・短辺)・底石から構成される。側石は、長辺各3枚、短辺各1枚の板石からなり、その組み方は、第1主体部と同じで、いわゆる「H」字に組む。棺床は側石を組んだ後、黄褐色土を敷き、その上に板石を配することで形成している。底石の石材は第1主体部に比べて小さく、その数も多い。蓋石は同様に一部に残るのみである。石棺の内法は、長さ1.6m・幅0.4m・北端高0.25m・南端高0.37mを測る。



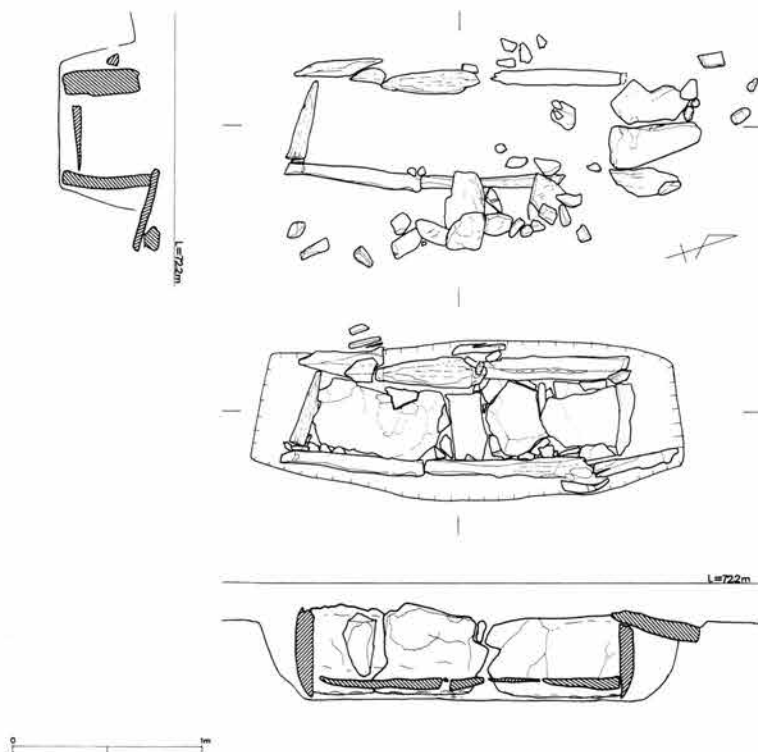


第224図 2号墳第2主体部実測図

遺物は、棺内・墓坑内のいずれからも出土しなかった。

④ 4号墳

墳丘と立地 標高86m付近に位置する。発見された時は、墓坑の西半分が削り取られ、

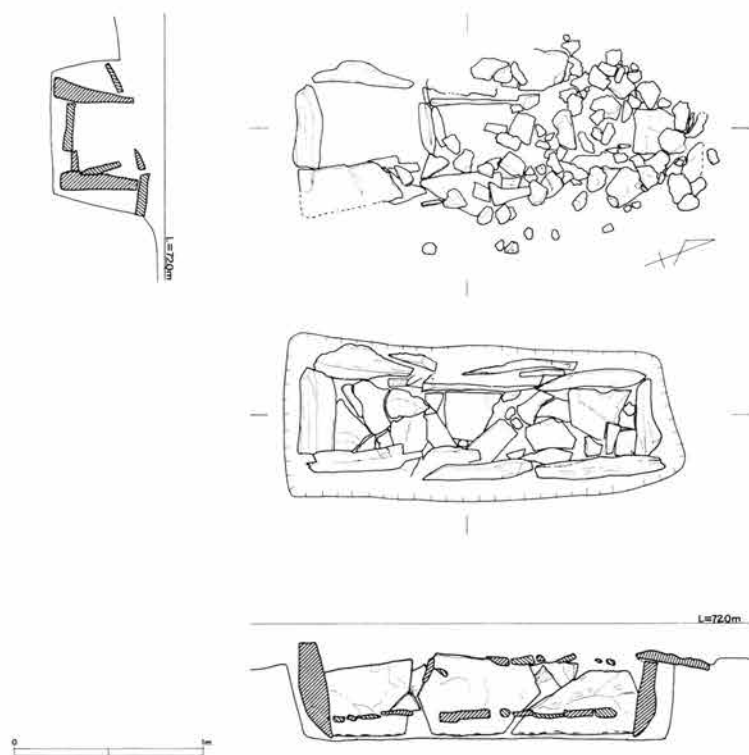


第225図 3号墳第1主体部実測図

棺材が露出し、石棺の東側にも一部掘削が入り、その土砂がつまれていた。そのため墳丘や外表施設に関して不明な点が多いが、石棺の南東側で石棺を囲むように走る溝を検出した。この溝は、幅0.8~1.0m・深さ0.2~0.4mを測り、溝内からは須恵器甕が破砕された状態で出土した。墳丘部を画する溝と思われるが、一部しか検出できず、墳丘の形・規模は不明である。また墳丘は、石棺長軸ラインの土の堆積状態から若干の盛土を行って築造されていることがわかった。

**埋葬施設** 墓壇は墳丘の西半分が工事で削り取られていたため不明な点が多い。その規模は、長さ3.3m・幅1.6m(現存幅)以上・深さ0.75mを測る。

石棺は、この墓壇の中に直接棺材を立て並べた上に蓋石を架ける箱式石棺である。主軸は南北方向にあり、方位はN16°Wである。棺材は、暗褐色を呈する小片で、両長側石各4枚、両木口石各1枚、蓋石5枚で構成される。東側石は、土圧等により内傾しており、棺内に倒れ込んでいるものも見られる。西側石は、ほぼ垂直に立つ。南木口石は、側石の内側にはさみ込まれるのに対し、北木口石は側石の外側に据えられていた。蓋石間の接合面には、同様の板石を数枚配置したり、また粘土で目貼りを行うことによって、蓋石の安定・棺の密封を図っている。蓋石は、北から順に架けていき南端に一番大きな板石(長さ1.1m×幅



第226図 3号墳第2主体部実測図

0.4~0.75m, 厚さ0.15m)を配置している。

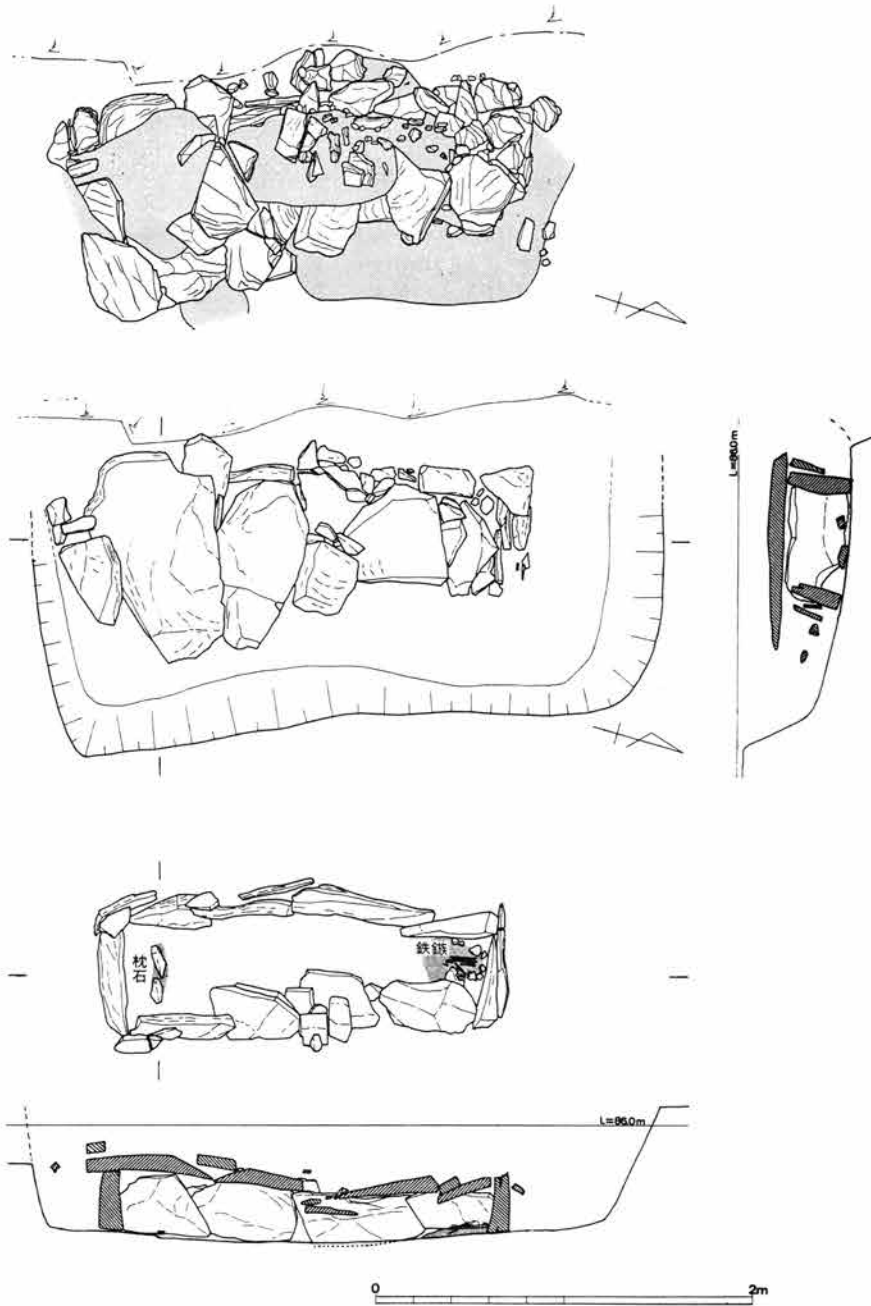
棺底には、板石・粘土等による床の形成は認められない。ただ北木口石とそれに接する東西の両側石の計3枚で画された部分には、棺底に2~5cm程の河原石と黄白色粘土で一種の床面を作り、その上に鉄鏃(19本か)が刀先を北木口に向けてまとめて置かれていた。また南木口石側には、2個の自然石があり、黄白色粘土で安定されていた。棺の構造・規模から頭位が南と考えられるため、この石は枕石と推定される。

棺の内法は、棺底で長さ1.92m・木口幅0.52m・南木口幅0.60m, 上端から棺底までの深さは0.3~0.4mを測る。

#### ⑤ 5号墳

**墳丘と立地** 標高81m付近に位置する。石棺のみが残り、周辺は工事のため削平されていたので、墳丘・外表施設に関しては不明である。ただ1~4号墳に見られた墳丘を画する溝が検出できなかったことから、無墳丘の可能性が高い。

**埋葬施設** 埋葬施設は、4号墳よりも小規模な箱式石棺である。墓壇は、長さ2.0m, 中央部幅0.64m, 確認面から深さ0.15~0.25mの規模を持つ。壇底においては、さらに南木口石及びそれと接する西側石の2枚の棺材を据え置くためのL字型の溝を穿っている。



第227図 4号墳 石棺実測図

石棺は、南北方向に主軸をもち、方位はN35°Eである。棺材は、4号墳と同様の片岩で、加工痕はみられない。蓋石は、4～5枚の板石を北から順に据え、南端に一番大きな板石を配することは、4号墳と同じである。ただ、粘土による目貼りはみられない。棺の側壁

をなす木口石・側石は、前者は1枚ずつであるが、後者は一部しか検出できず、その石の配置・組み方は今一つ明らかでない。ただ蓋石を除去した段階で、棺内に倒れこんでいた側石は少なく、もともと四周に完全に板石を立て並べて組んでいた可能性は少ない。

棺の規模は、推定値をとるが、内法は棺底で長さ1.65m、北木口幅0.4m、南木口幅0.5m、また上端からの深さ0.2mを測る。

頭位は、棺の構造から南と考えられる。

棺内・墓塚から遺物は出土しなかった。

⑥土塚SX01 墳丘の西裾で検出した土塚である。一部にサブトレンチが入るためその平面形ははっきりしないが、南北0.75m・東西0.65m・深さ0.3~0.35mの規模をもつ。坩底は、舟底状を呈する。坩底にはほぼ接した状態で、須恵器甕が出土した。この甕は、口縁部を打ち欠いており、その出土位置から3号墳のなんらかの祭祀に使用されたと考える。

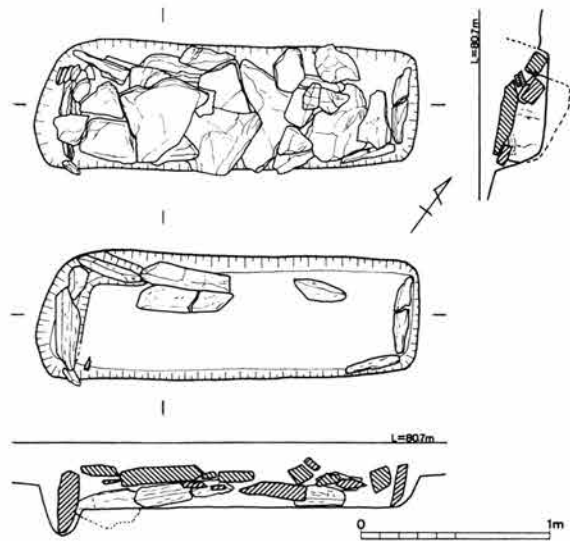
その他、3号墳の周溝内(墳丘東裾)では、土師器壺・碗(2個体)が出土した。これらの遺物は、周溝の内に一括で捨てられたものと考えられ、SX01同様3号墳の祭祀に使用されたものと思われる。

#### 4. 出土遺物(第229~231図)

出土遺物には次のものがある。

##### 1号墳第1主体部

- |     |    |      |              |
|-----|----|------|--------------|
| 須恵器 | 杯身 | 2点以上 | (第230図-5, 6) |
|     | 杯蓋 | 2点以上 | (同 -3, 4)    |
|     | 蓋  | 2点   | (同 -1, 2)    |
|     | 高杯 | 1点   |              |
|     | 壺  | 1点   | (第230図-7)    |
| 土師器 | 甕  | 1点   |              |



第228図 5号墳石棺実測図

- 鉄製品 直刀 1本  
 鎌(尖根式)<sup>(注61)</sup> 10本(第231図-1~10)  
 (平根式) 4本(同 -11, 13~15)  
 刀子 1本 (同 -16)  
 馬具(轡) 1点

1号墳第2主体部 なし

1号墳第3主体部

- 須恵器 杯身 1点 (第230図-10)  
 杯蓋 2点 (同 -8, 9)

- 鉄製品 鎌(鎌根式) 9本  
 (平根式) 1本(第231図-12)

2号墳第1主体部

- 須恵器 甕 1点 (第230図-19)

2号墳第2主体部

- 須恵器 杯身 3点 (第230図-13, 15, 17)  
 杯蓋 4点 (同 -12, 14, 16, 18)  
 甕 1点

- 鉄製品 刀子 1本 (第231図-17)

- 管玉 1点

3号墳

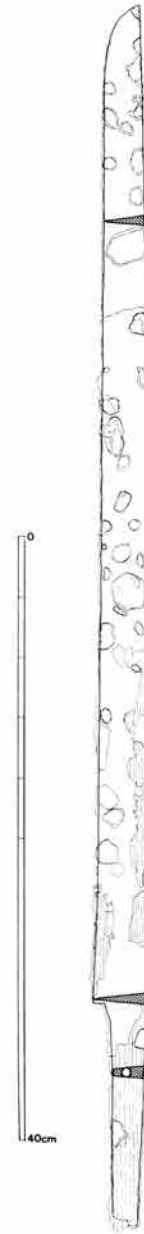
- 須恵器 甕 1点 (第230図-23)

- 土師器 椀 2点 (同 -21, 22)

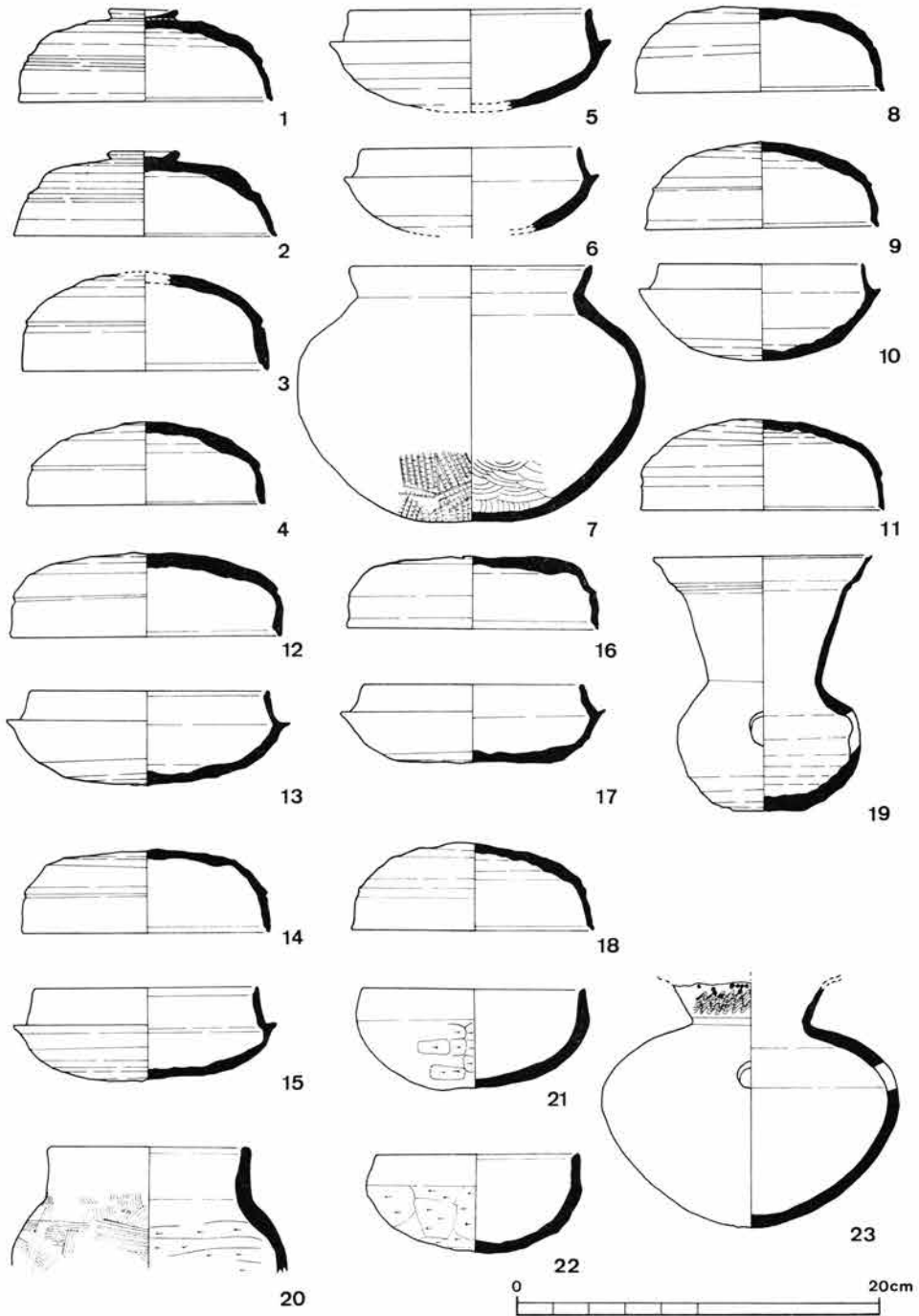
- 壺 1点 (同 -20)

これらについて少し説明を加えると、須恵器杯身は、立ち上がりは内傾気味で、底部のへら削りの範囲は、底部全体の1/2~2/3近くに及ぶ。杯蓋は、天井部と口縁部とを分ける稜線はにぶく、凹線を設けるものも見られる。9・10は、1号墳第3主体部棺内出土の遺物で、とも

に棺底に伏せた状態で置かれていた。12~17は、2号墳第2主体部の墓坑内(南木口付近)から出土し、それぞれでセットになる。須恵器は、概ね田辺昭三氏の変遷観に従えば、MT15型式に対応する。ただ甕の19・23を比べた場合、明らかに型式差が認められ、23は一型式ほど古い様相を呈する。<sup>(注62)</sup>他に鉄製品が多数出土しており、刀・馬具・鎌・刀子がある。

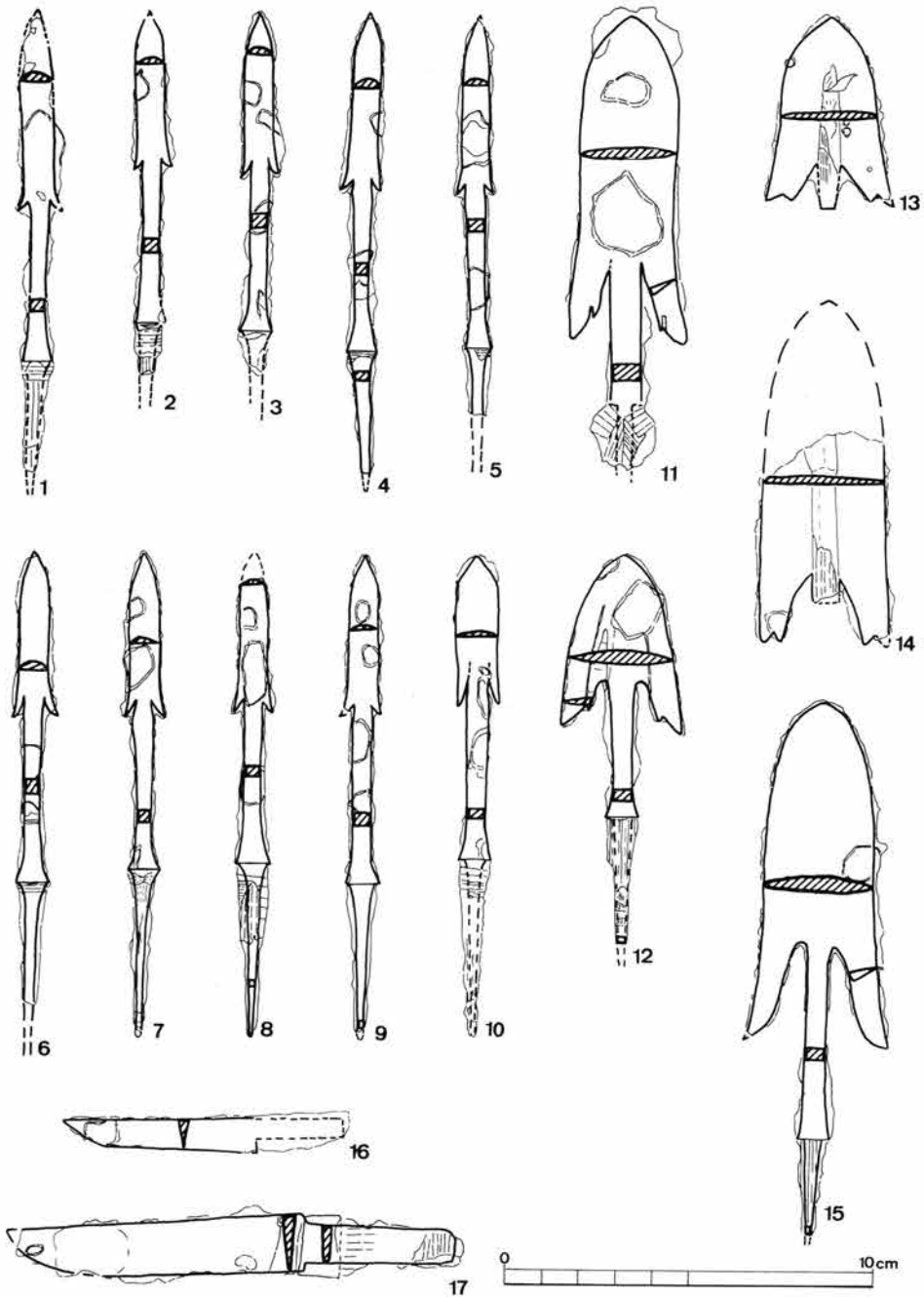


第229図 刀実測図



第230図 出土土器実測図

1~7: 1号墳第1主体部(棺上), 8: 1号墳第3主体部(墓坛内), 9・10: 1号墳第3主体部(棺内), 11: 1号墳墳丘, 12~17: 2号墳第2主体部(墓坛内南木口付近一括), 18: 2号墳第2主体部(墓坛内), 19: 2号墳第1主体部(墓坛内), 20~22: 3号墳(周溝内), 23: 3号墳(S X 01)



第231図 出土鉄製品実測図

1~11・13~16：1号墳第1主体部，12(一部のみ)：1号墳第3主体部，  
17：2号墳第2主体部



## 5. 小 結

薬王寺古墳群の調査の成果を簡単に整理してまとめとしたい。

①薬王寺古墳群は、5基(以上か)の古墳・埋葬施設から構成され、出土遺物から6世紀初頭から前半代の短い期間にまとめて築造された古墳である。

②墳形は、方形のもの(1・3号墳)、円形のもの(2・4・5号墳)に分けられる。

③墳丘は、丘尾切断の溝をめぐるせ、若干の盛土を行うことで形成しており、その規模は6~10mと小さなものである。

④主体部は、石棺・木棺という埋葬施設は異なるものであるが、いずれも一墳丘複数埋葬である。

⑤1号墳第1主体部・2号墳第2主体部は、組合式の木棺が想定されるもので、両木口部には、礫混じり粘土塊を配していた。この型式の木棺は、福知山市内では、由良川流域の稲葉山古墳群、中坂古墳群などの主体部の中に認められるものである。

⑥3・4・5号墳は、主体部に箱式石棺を採用していたが、3号墳のみ底石をもつ。また4号墳石棺は、長さ1.92m・幅0.52~0.60mと規模もひとまわり大きく、棺内には鉄鏃を副葬する床を形成していた。

⑦3号墳の主体部は、組み合わせ式の箱式石棺であった。棺内からは遺物が出土していないため時期が決め難いが、墳丘裾出土の須恵器(甗)は、6世紀初頭の様相をもつものである。

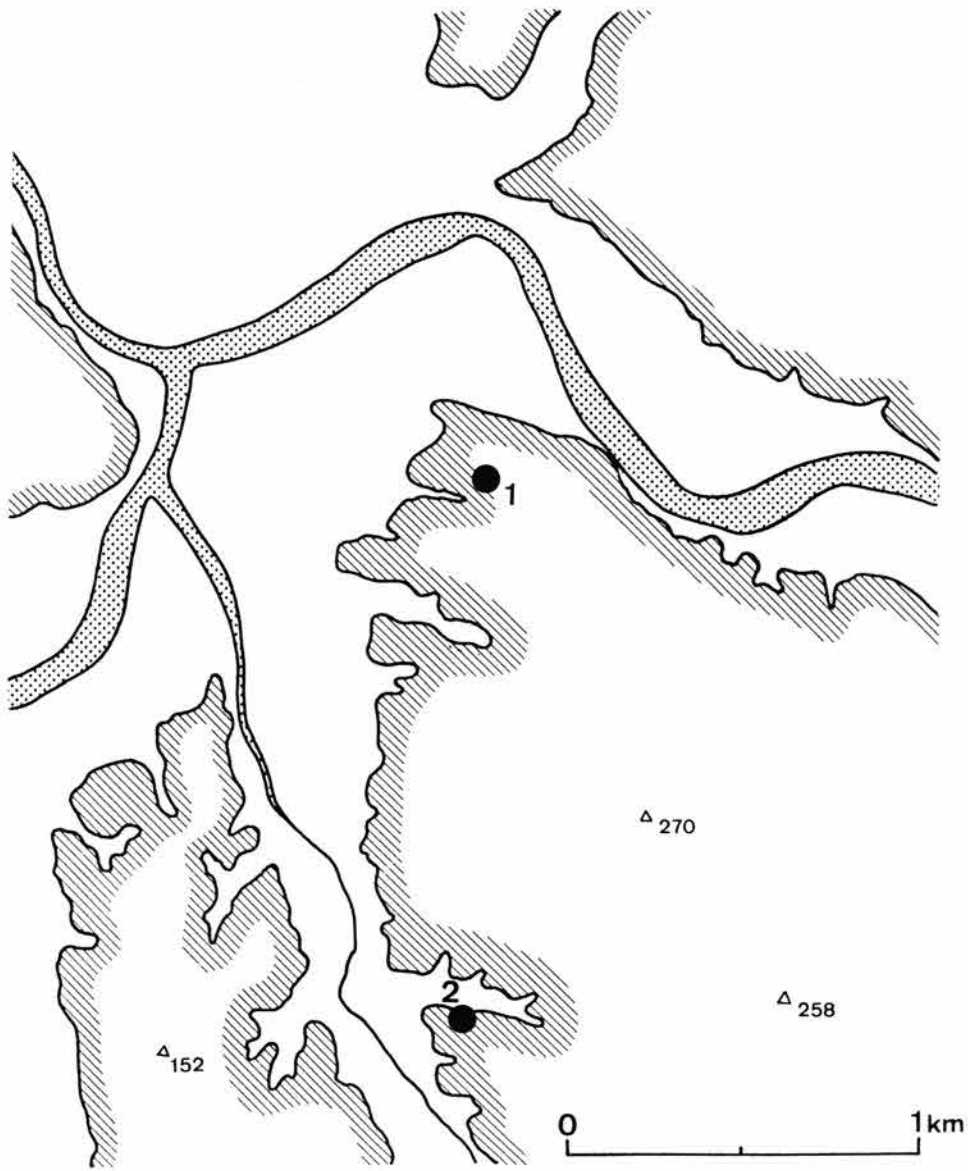
福知山市内での箱式石棺は、稲葉山9号墳、八ヶ谷古墳、宝蔵山4号墳(第3主体部)で知られているが、いずれも4世紀末から5世紀前半代と古い時期のものである。京都府北部で同様の時期の箱式石棺として知られているものには、網野町岡3・4号墳、同勝山古墳、同新浜2・3号墳がある。

⑧墳丘の規模・立地、副葬品の量・質から1号墳第1主体部の優位性がうかがえる。当主体部には、多数の土器類とともに鉄製馬具・直刀・鏃・刀子が副葬されていた。

⑨当古墳群は、出土した遺物から6世紀初頭から前半代に築造されたものと思われ、主体部では石棺→木棺、墳形では方形→円形という推移が認められる。

(山下 正)

第3節 古 墓



第232図 本文掲載古墓分布図

1: 宮墳墓群, 2: 山田館跡

## (1) 宮 墳 墓 群

### 1. 位 置

宮墳墓群は、南東から北西方向にのびる丘陵の端部に近い、標高70m付近に分布する。同丘陵部には、城ノ尾古墳が立地し、さらにそれらを含む形で、弥生時代から中世に係る集落遺跡である宮遺跡が所在する。昭和54・55年度に行った城ノ尾古墳の発掘調査の際、古墳周辺部から中世の溝が検出され、溝内から火葬墓と考えられる多量の礫石を集積する遺構が検出された。また、横穴式石室の石室埋土上層からも墓に利用されたと思われる石組みが検出されており、当地域が、永く墳墓の地として利用されていたことが明らかになった。

今回の宮墳墓群の発掘調査は、城ノ尾古墳の斜面上方の樹木伐採が行われた際、関連する遺跡がないか注意を払っていたところ、古墳のすぐ上手で建物跡らしき平坦面と古墓状の小隆起が3か所で確認されたためその性格を明らかにするための調査を実施したものである。

以下、墳墓と建物遺構に分けて説明する。

### 2. 墳 墓

山腹斜面に位置する3か所の小隆起は、調査の結果、中世の墳墓であることが明らかになった。北側に位置するものから順に、1から3の番号で呼ぶことにする。

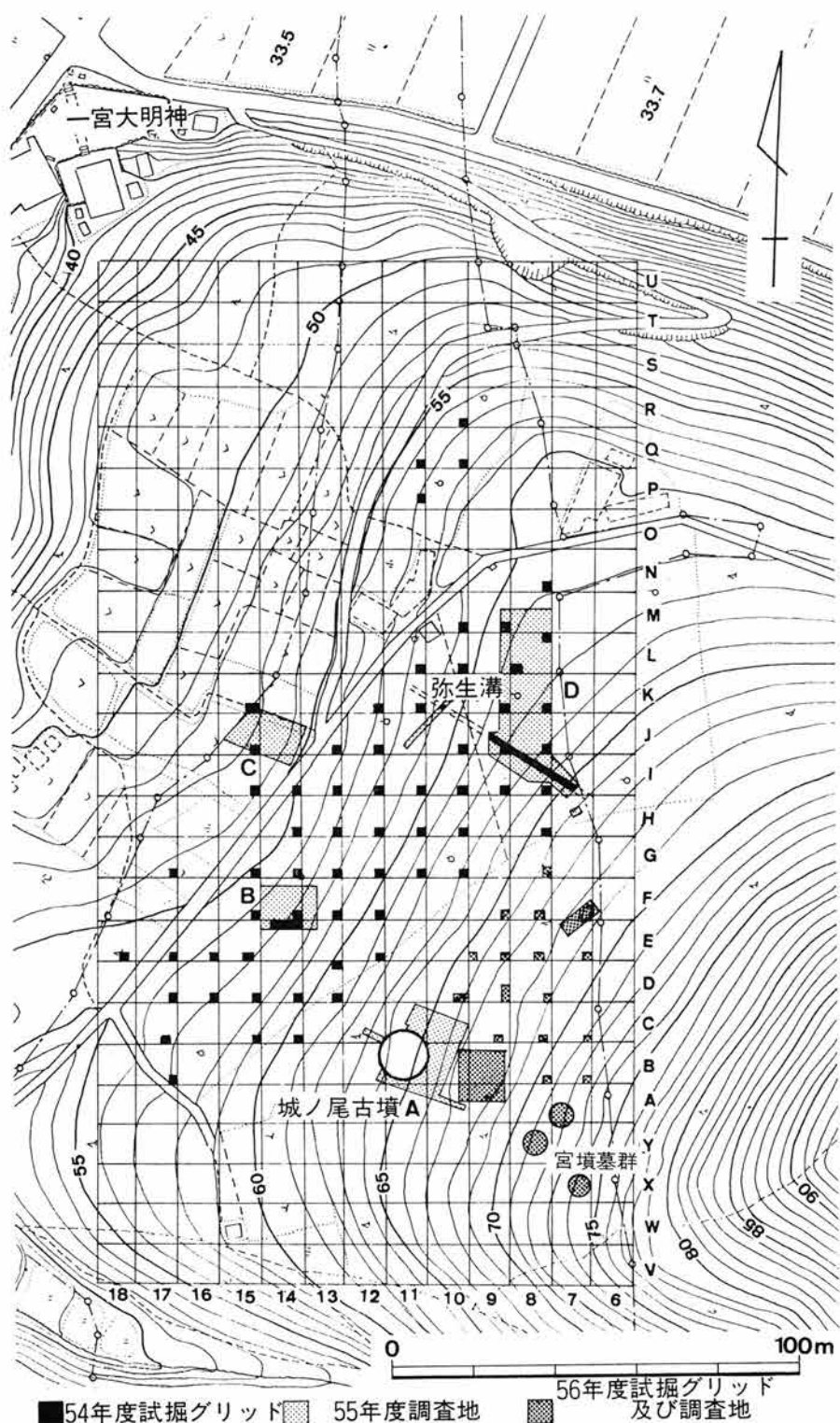
#### (1) 1号墓(第235図)

①**外形** 直径6~7mを測り、外形はややいびつな円形状を呈している。斜面下方にあたる西側では、裾が不明瞭で明確な範囲を押さえることができないが、反対の斜面高位の東側では、丘陵部を削って幅2m前後の浅い平坦面を巡らし、墳墓を区画している。現状での高さは、西側で約70cmを測る。土層断面の観察結果では、地山面に若干整形を加えた後、層状に盛土されていることがわかった。頂部は、土砂流出のために平坦になっている。調査開始後、すぐ頂部の表土直下で2か所の河原石集積を認めた。その各々の下方から埋葬施設と思われる土塚を検出した。

また、1号墳の南西裾からは、火葬骨を収めたものと推定される円形石組遺構が2か所で検出された。なお、墳墓群の周辺は表土の流失が激しく、そのため現地地形上においても地山面の礫層が露出するか所が所々で観察される。

②**埋葬施設** 2基の土塚は、南北に並んで検出された。土塚間の間隔は、約80cmを測る。北側土塚は、主軸をN52°30'Wに置き、平面形は、西端部が膨らむ隅丸形状を呈してい

(1) 宮墳墓群



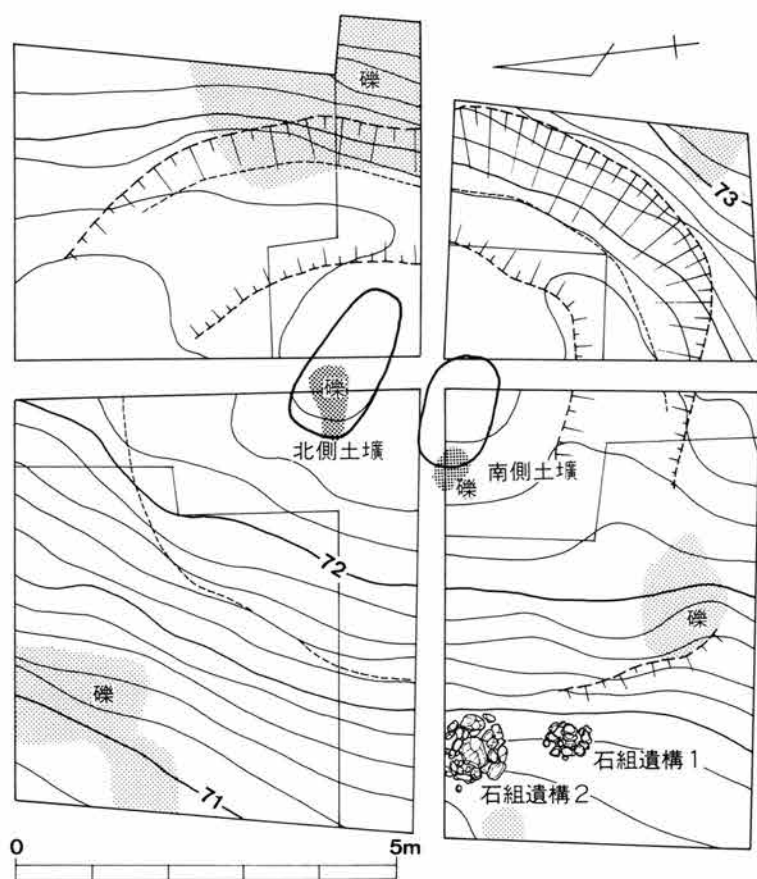
第233図 宮墳墓群位置図



第234図 調査地周辺地形図

る。全長1.9m、幅は北西端で44cm、南東端で30cmを測る。土坑の底は、南端から北端に向かって傾斜し、特に北端部には、土坑底をさらに一段深く掘り込んだピット状の施設が付設されている。この二段目部の掘り込みの深さは、一段目の土坑底から約40cmを測り、下方に行くにしたがって逆円錐状に狭くなる。底部の大きさは、19cm×11cm程である。

この二段目土坑で特に注意されるのは、北西端を除く三方の土坑壁上縁部に石囲い状の

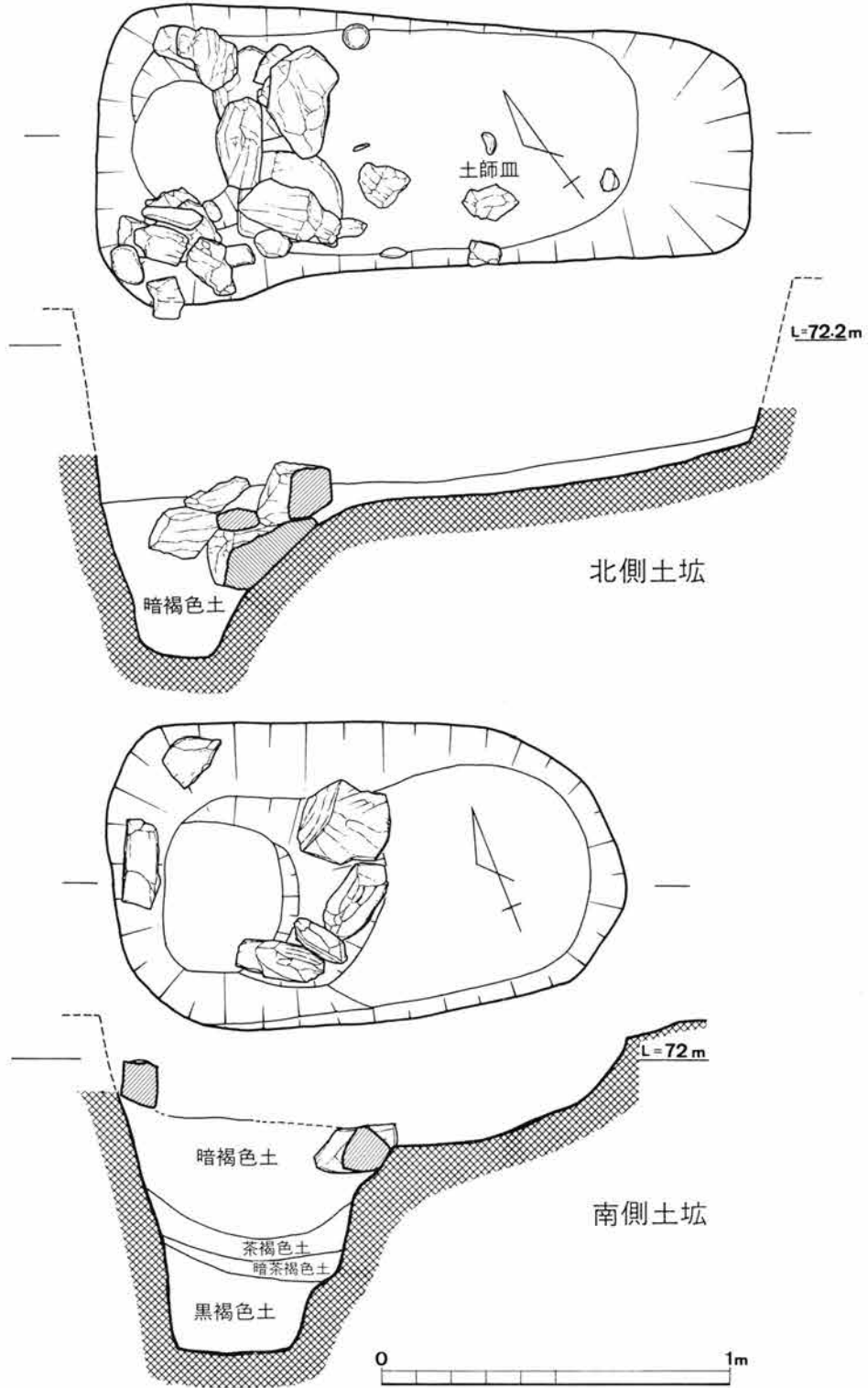


第235図 1号墓外形実測図

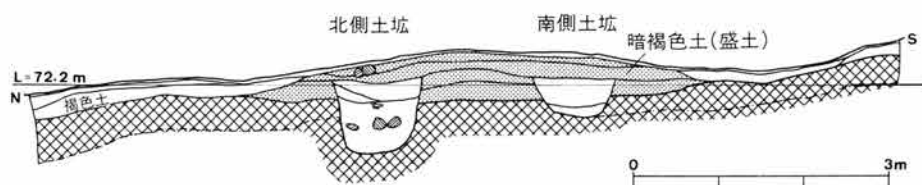
石組遺構が設けられていることである。石組の方法は、穴の上縁部にあたるところに小さな段を設け、そこに長径10～20cm程の割り石を用いて2～3段積み上げるもので、上半分は一種の小石室状を呈している。石材の積み方は乱雑で整ったものとはいえないが、間隙部には小礫を充填しており、土塚内部の保護を目的としたものと思われる。一段目・二段目土塚の埋土については、両土塚共通して全体に灰混じりの暗褐色土が入っており、層位的に区分することはできなかった。

本土塚は、盛土と土塚内の土との判別が難しく、頂部からかなり下げた状況で土塚の輪郭を検出するという誤りを犯したが、本来は、頂部直下の盛土途中から掘削されているものと考えられ、土塚の掘り込み肩部から一段目土塚の底部までの深さは、約60cm前後に復原される。

南側土塚は、全長1.5m・幅0.8mを測り、こちらの方は、長楕円形に近い隅丸長方形の平面形を呈している。主軸はN67°30'Wを示す。北側土塚と同じく北端部に、さらに一段



第236図 1号墓埋葬施設実測図



第237図 1号墓土層断面図

深く掘り下げた副室状の付属施設をもつ。北側土坑に比べ用いられた石材数は少ないが、この二段目土坑の上縁部にも同じく石組状の施設がなされている。二段目土坑の形状は、北側土坑部に比べ、壁面が垂直に近く整形されており箱形を呈している。

南北両土坑の性格については、木棺等を安置する埋葬施設と考えるが、空間からみて、それらは一段目の土坑内に収められたものと思われる。二段目土坑についても、その内部に何らかのものを収めたものと思われるが、詳細は不明である。

③遺物の出土状況 北側土坑からは、土師器小皿5枚・大皿1枚が出土した。土師器皿類は、前記の一段目の土坑部から検出したが、検出位置の深さは各々不規則であった。すなわち、土坑の底部にかためて置かれたという状況ではなく、棺上蓋上面に置かれていたものが、木質部の腐朽により落下したものと考えられる。また、出土位置についても、その多くが、土坑の左右の壁に接して出土しており、それらの状況から大胆に推察して、土師器類は、棺上蓋の両側縁に寄せて供献されていたとも考えられる。このほか、土師器以外に遺物は出土していないが、土坑埋土中に若干の骨片が認められた。

なお、南側土坑については、遺物は一切出土していない。

## (2) 2号墓(第238図)

①外形 1号墓の南西、約5m離れて位置する。今回調査した3基の墳墓の中では最も低い位置に立地する。

発掘調査前に頂部に大きな松根があったため、残存状態はあまり良好でない。外形は、不整な円形状を呈しており、径約5m前後を測る。現状では、高さ30cm程のわずかな盛り上がりを見る。斜面上方では、自然地形と区画する堀割り状の浅い平坦地を巡らす。調査着手前から、隆起部周辺に拳大の円礫が散乱していることが観察されていたが、表土の腐植土をはずした結果、ほぼ全面を覆うように円礫が葺かれていることが判明した。葺石の一部か所では、列状・方形状に石列が並ぶところが観察される。これらの葺石は、地山上に約20cmの盛土を行った後置かれていることが、断ち割り調査の結果、明らかとなった。

②埋葬施設 隆起部の中央やや北寄りから、丹波系の大甕を転用した蔵骨器を1基検出した(第239図)。蔵骨器は、甕の上半部を打ち欠き、胴部以下の部分を使用するもので、径





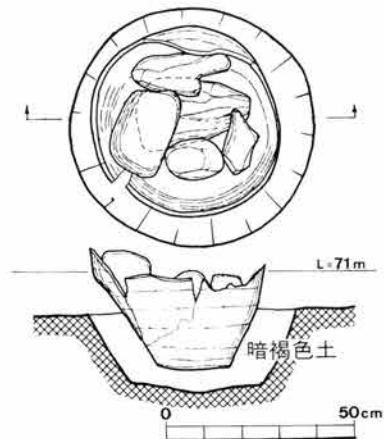
第238図 2号墓検出遺構実測図

約55cm・深さ20cm程度の掘形内に据えられている。掘形の周辺や甕埋土の上面には、拳大の河原石を置く。内部は、上端まで火葬骨と思われる骨片で満たされており、この上面を覆うように長径30cm前後の角礫が置かれていた。底部には、水抜きのための小孔が穿たれている。

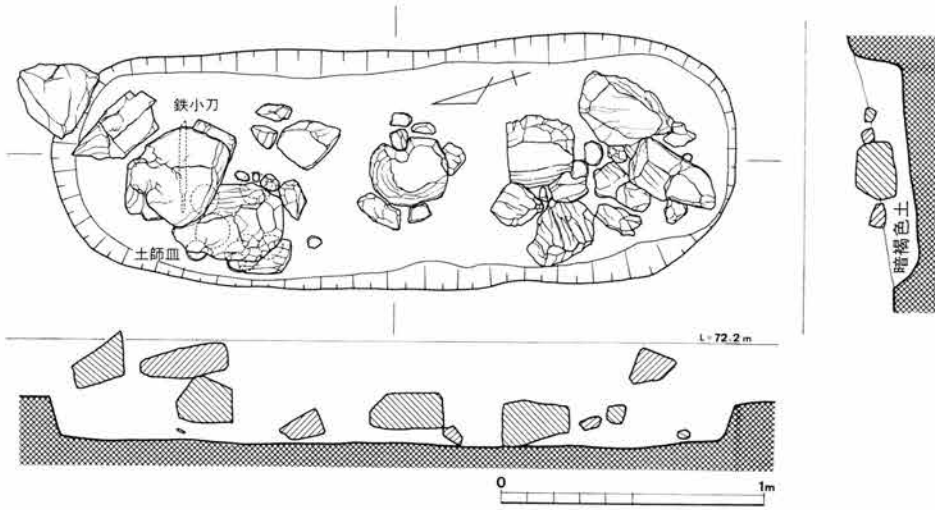
2号墓からは、この蔵骨器1基のほかには、埋葬施設は確認できなかった。ただ、葺石の清掃作業時に間隙部から少量の骨片が検出されており、明確な容器を持たない埋葬施設が他に存在した可能性がある。

### (3) 3号墓

①外形 調査地南端部の標高74m前後に位置し、今回調査した墳墓群の中では、最も高い地点に占地する。1号墓からは、南東方向に約12m程離れ



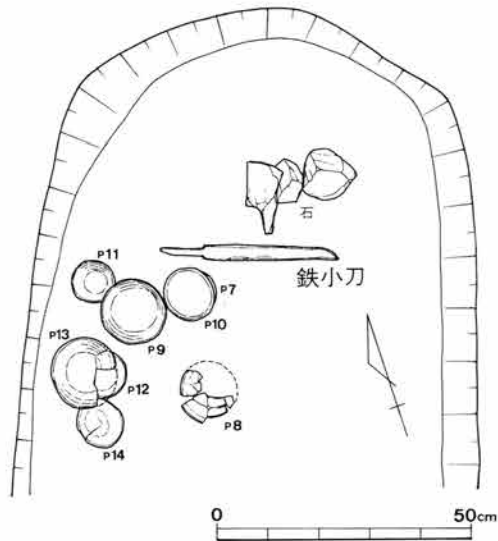
第239図 2号墓蔵骨器検出状況図



第240図 3号墓埋葬施設実測図

ている。外形は、約長径5mの南北に長い不整な楕円形状を呈している。わずかな盛り上がりをもち、斜面高位の東側には掘割り状の平坦面を巡らしている。

②埋葬施設(第240図) 頂部のすぐ下から、南北に長軸を置く土坑を1基検出した。土坑平面の形状は、隅丸方形ないし長楕円形状を呈しており、全長2.5m、中央の幅0.9mを測る。土坑底部は平坦で、深さは約15cm程度が遺存する。土坑内には、南端・中央・北端の3か所に分かれて大小の割り石が数10個存在する。

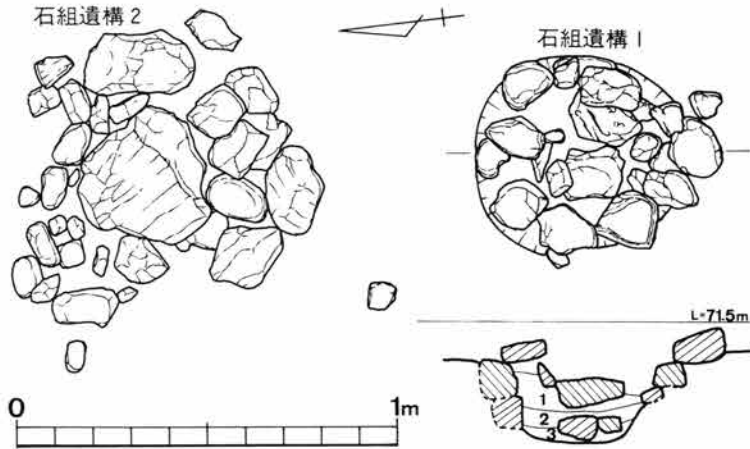


第241図 3号墓埋葬施設遺物出土状況図

石材のうち最大のもは長さ40cmを測る。これらの石塊は、土坑底部から遊離した状態で検出されており、土坑内に据えられた木棺の上部に置かれていたものが、棺の腐朽により内部に転落したものと想定される。

③遺物の出土状況(第241図) 土坑北端部の石塊直下から、鉄製小刀(1本)と土師器皿類(9枚)が出土した。小刀は、土師器皿群の北側に、土坑長軸に直交する形で置かれていた。すなわち、刀の切先は東方(山側)、刃部は北側(棺外)に向けられている。土師器皿類は、鉄小刀南西の径40cm程の範囲に固まって配置されていた。その配置状況は、大皿類を

中心にして小皿類を周辺に置く傾向が窺えるが、整ったものではない。また、土師器小皿の中には、天地を重ねるものが見られる。各遺物ともほぼ同一面で検出



第242図 石組遺構検出図

1: 暗褐色土, 2: 同(骨片含む), 3: 黒褐色土(骨片含む)

されており、棺内被葬者の頭部位置に並べ置かれたものと思われる。

埋葬施設外の遺物としては、盛土上表面から瓦器類の細片が出土しているが、本墳墓に伴うものか否かは明らかでない。

#### (4) 石組遺構(第242図)

1号墓の南西裾付近から2基の石組遺構を検出した。小人頭大の河原石を円形ないし不整な六角形状に組むもので、長径約70cm前後を測る。南側に位置するもの(石組遺構1)は、直径約68cm・深さ12cm程度の円形土坑を穿ち、その周囲に石をほぼ二段に組む。内部の空間には火葬骨を埋納し、その上面をやや大きい割り石で蓋状に覆う。石組遺構2は、石組遺構1の北約50cm離れて位置する。規模は前述のものに比べて大きい。石材の積み方はやや乱雑である。中央に大型の割り石を置き蓋とする。これらの埋葬遺構は、一種の固定された蔵骨器のような形態をとるが、本来は火葬骨を収めるのに紙若しくは木製の容器を伴っていた可能性がある。検出位置からみて、1号墓より遅れて造られたものと考えられる。

### 3. 礎石建物跡(SB01)

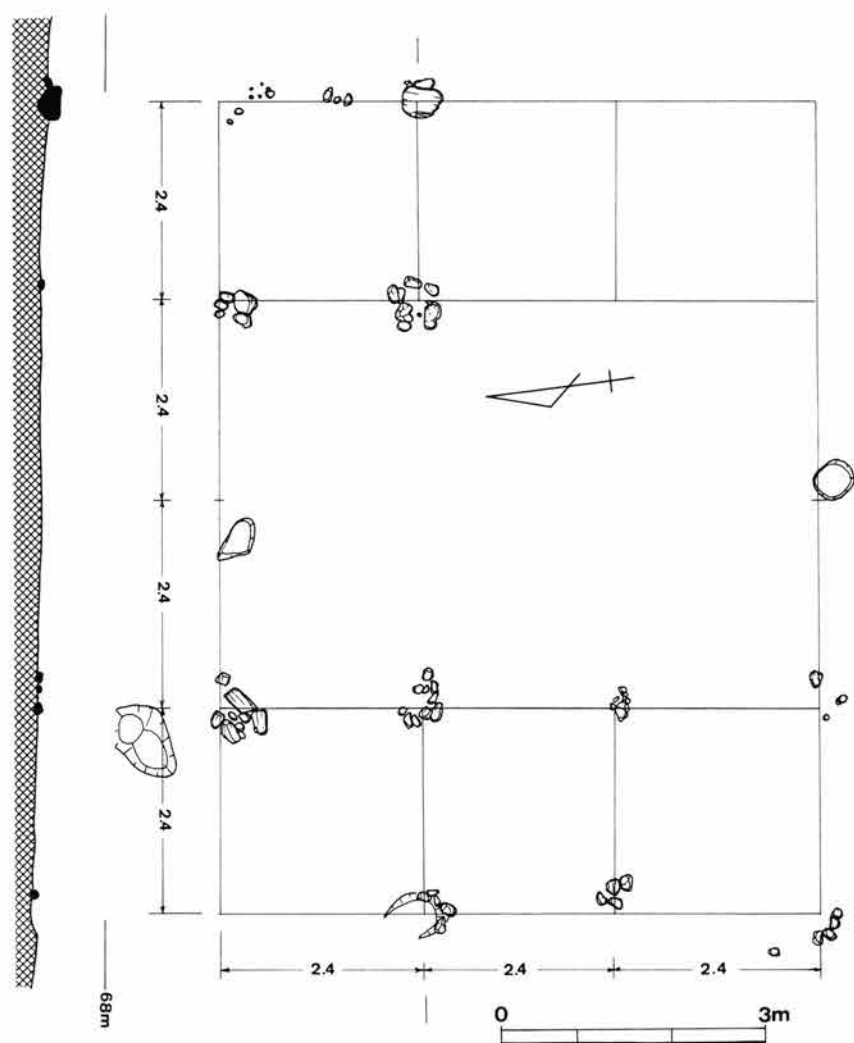
①位置 城ノ尾古墳の墳丘東側、すなわち山腹斜面の高位側は、急な傾斜角度を示しているが、この急斜面を上がったところに、東西約12m・南北約15mの平坦面が形成されている。

この平坦な地形は、全体に西側の辺が広がる台形状をなしており、丘陵高位の東側を削り、西側に盛土して造成されていることが地形上からも観察される。調査着手前から、何らかの建物跡等の存在が予測されたが、調査の結果、礎石建ちの建物跡1棟を検出した。

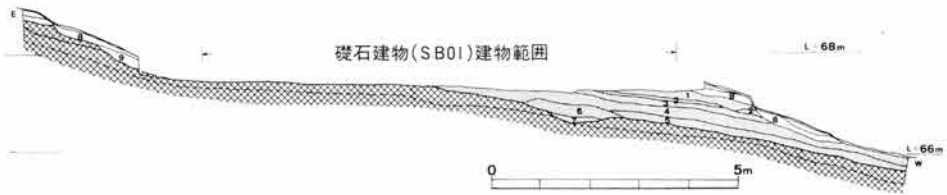
②建物跡の状況(第243図) 建物跡は平坦地のほぼ中央に位置する。後世に耕作地とし

て利用されたためか、攪乱を受けており遺存状況は良好ではないが、原位置を留める礎石1個と礎石の根固めに使われた根石跡を9か所で検出した。根石の残り具合についても、あまり良好とは言えず、その痕跡のみ留めるか所も存在する。礎石と思われる石材は、長辺40cmを測る自然石で、やや平坦になった側を柱当たりの面として利用している。根石跡は、10数個の小礫を乱雑に置くもので、上部の重みを受けると言うより、礫石を安定させる役割が強いものと思われる。

建物は、東西方向に長軸(N83°W)を置き、東西4間(約9.4m)・南北3間(約7.1m)の規模を有する。根石跡の配置からみて、東西の両端1間は、廂になる可能性が高いが、ある



第243図 礎石建物跡(SB01)実測図



第244図 礎石建物跡土層断面図

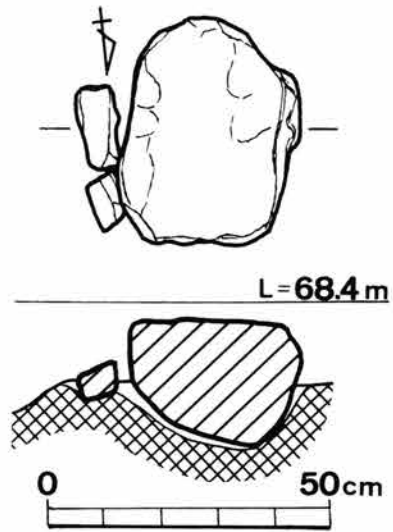
1～5. 暗褐色土～黒褐色土, 6. 暗黄灰褐色土, 7. 黒褐色土(以上整地層), 8. 褐色土, 9. 茶褐色土

いは、総柱建物の可能性も残されている。各柱間の距離は、若干の出入りはあるが2.4m(約8尺)の等間隔である。掘り込み地業、基壇等は設けられていない。

建物跡の東西方向の断ち割りによって、この建物の建つ平坦面は前述したように、東側の丘陵斜面を削り、斜面の低い西側に厚く置土して形成されていることが判明した(第244図)。

③築造時期 建物跡の築造時期については決め手となる資料に乏しく不明な部分が多いが、周辺から、中世の土師器小片が採集されており、また、墳墓群との関係からみて、これらと同時期の鎌倉～南北朝時代頃に比定しておきたい。

なお、瓦類等については、周辺部も含め今回調査では一点も出土していないので、この建物跡の屋根は、板かかや等で葺かれていたものと考えられる。



第245図 礎石据え付け状況図

#### 4. 出土遺物

今回調査で出土した遺物としては、弥生土器片・土師器・瓦器・中国製輸入陶磁器片・国産陶磁器片・丹波焼甕等がある。このほか、不明鉄製品・石器剥片等があるが、全体的に量は少ない。以下、主に中世墳墓に埋納された土器類・鉄器について記述する。

##### (1) 1号墓出土遺物(第246図)

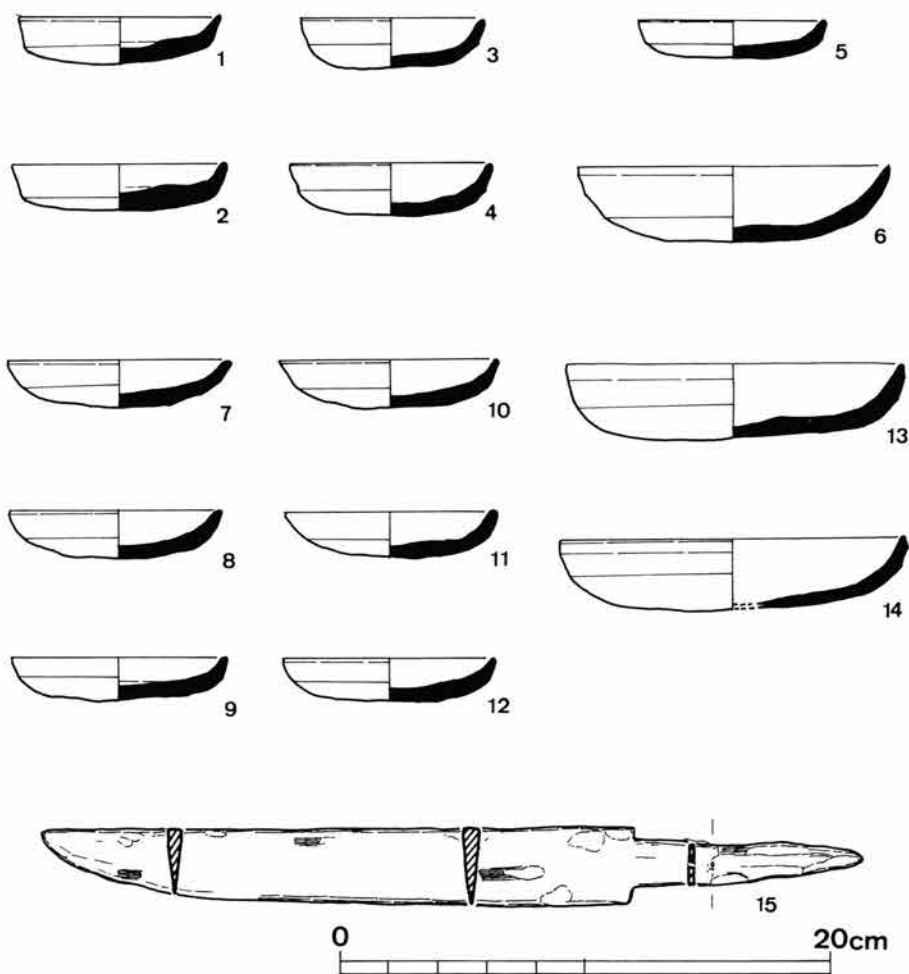
1号墓から出土した土師器皿類は、法量の大小により2種に分けられる。小形の皿(1～5)は、口径7.5～8.8cm、高さ2cm前後を測る。器壁が比較的厚く、底部から口縁部に移行するところに明瞭な曲折する段をもち、そこからわずかに内湾したのち外反して口縁端部に至る。やや平底に近い1・2と、底部が丸みを帯びる3・4、さらに底が浅く扁平な

5のタイプに細分される。いずれも口縁部はユビナデ、底部および内面はユビオサエにより成形する。色調は赤褐色を呈し、胎土は密である。これらの中には、内面に煤を付着するものが認められる。

6は、口径12.8cm・器高3.1cmを測る大形のもので、形態は小形の皿類と等しいが、底部から口縁部への移行はなだらかである。口縁端部は、つまみ上げ気味に尖がる。口縁部はユビナデ、内底面はユビオサエを行う。

(2) 2号墓出土丹波焼甕(第247図)

丹波焼甕を蔵骨器として転用したものである。体部上半を打ち欠いて使用しており、口縁部の破片等は周辺部からも出土していない。残存部の最大径47cm・底部径23.4cm・残存高32cmを測る。焼成はやや軟質であり、器壁の色調は暗赤褐色を呈しているが、底部付



第246図 出土遺物実測図(1~6. 1号墓, 7~15. 3号墓)

近は黄灰白色を呈する。体部はロクロナデによる調整を行う。底部には内部から水抜きのための小孔が穿たれている。

(3) 3号墓出土遺物(第246図)

土師器皿類は、1号墓出土のものと同じく法量に大小のものがある。7～12は、口径8.7～9.2cm、器高2cm前後を測るもので、1号墓出土のものに比べ、底部から口縁部にかけての屈曲は明瞭ではない。

口縁端部を肥厚させるものが多く、先端

部は丸みを帯びる。口縁部は横ナデ、内面はナデにより成形し、その外はユビオサエを行う。胎土は良好である。色調は灰褐色ないし淡褐色を呈する。

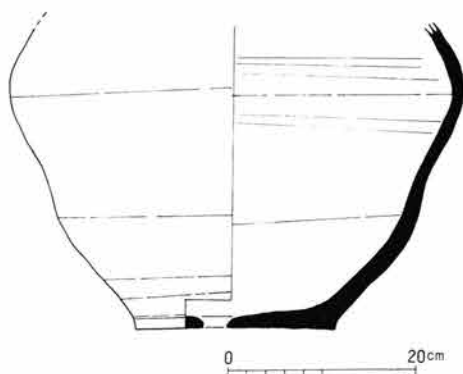
13・14は、口径14cm・器高3cm前後を測る大形のものである。口縁部は二段に強くナデを行い、口縁部先端はやや尖がり気味に仕上げる。内底面はナデによる成形を行う。13は、ほぼ平均した器壁の厚さをもつが、14は底部で薄くなる。焼成は軟質で胎土に少量の砂粒を含む。色調は淡赤褐色を呈している。

鉄小刀(15)は、全長33.5cm・身部長24cm・同最大幅3.3cm・茎部長9.5cm・同幅2.0cmを測る。刀身の棟は直線的で反りは見られない。茎部には目釘孔をもつ。刀身面に木質が残っており、元は鞘に収めていたことがわかる。

## 5. 小 結

宮遺跡周辺では、中世に属する埋葬遺構が数か所で確認されている。昭和54年から55年度にかけて実施した城ノ尾古墳からは、横穴式石室を再利用した平安時代末期頃の配石遺構が検出されている。配石群の周辺には焼灰層が広がり、その周囲に黒色土器を配するもので各地の類似例からみて火葬墓になるものと考えられる。同じく城ノ尾古墳の墳丘東裾で検出した溝状遺構内からは、多量の礫石に混在して瓦器碗・瓦質鍋形土器・鉄小刀・鉄釘類が出土しており、溝内に木櫃状の蔵骨容器をもった火葬墓が営まれていたものと思われる。また、宮遺跡の西側斜面(B地点)からは、瓦器碗と土師器皿を副葬する土坑墓が1基検出されている。このように宮遺跡周辺部は、各時代を通じて丘陵下に住む人々の墓地として利用されてきたものと思われる。

今回調査を行った3基の墳墓は、低平ながら盛土を有しており、周辺地形とは一定区画される墓としての意識を明確にもっていたものと判断される。



第247図 丹波焼甕実測図

1号墓・3号墓は土葬墓、2号墓は火葬墓の形態をとるものである。1号墓は2基の土坑墓が相並び夫婦墓的な色彩をもつ。特に、土坑内の一端に設けられた副室状の施設は類例の少ないものであった。同様な構造をもつ遺構を墳墓以外に求めると、経塚遺跡に類似例が少数みられる。経塚の場合には文字通りその内部に経巻類を入れた甕等を埋納しており、想像の域を出るものではないが、本例も副室内に経巻ないし護符等が収められていた可能性が考えられる。しかし、基本的に性格の異なる墓と経塚を同一の場所で併設することについては多くの問題があり、今後の検討課題であるとともに類例の増加に期待したい。副葬品では、3号墓出土の鉄小刀があるが、これは呪術に伴う魔除けとしての性格をもつものであろう。

これらの墳墓群は、3号墓→1号墓→2号墓の順に築造されていったものと想定され、概ね鎌倉時代前半(13世紀前半)から南北朝時代(14世紀後半)に収まるものと考えられる。当時期の遺例としては珍しく盛土をもつことや、占地および規模からみても、当地域の有力者層の墓地とみることができる。すなわち、その被葬者像については、いわゆる名主層や地方豪族である武家層が比定され、その家族の累代の墳墓地として造営されたものと想定される。

中世墓の発掘例は最近各地で増えており、文献史料では窺うことのできない中世の地域、社会の様相を知るうえに重要な手掛かりとなっている。六人部地域においても今回の近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、宮墳墓以外にも各遺跡から当時期の古墓が検出されているが、今後それらの調査資料を合わせて比較検討することにより、当地域の葬制の変遷や村落との関係がより具体的に明らかになるものと期待される。

礎石建物については今回の調査においても資料に乏しく不明な部分が多い。しかし、立地からみて墳墓群と密接な関係をもつものと考えられ、墓地に結び付いた墓堂(三昧堂)や庵のような性格が付加され得る。すなわち背後に墓を負い、眼下に平野を見下ろす絶好の場所を占めており、極楽往生を願い永遠の眠りについた人々を弔い、また、先祖の霊を供養するために建立されたものであろう。

(辻本 和美)

補注 各調査例からは、当地域においては13世紀から14世紀にかけて大略、火葬から土葬さらに火葬へと大きな振幅をもって変遷していくあり様が窺えるが、その立地・埋葬施設・外形については様々であり、葬法についても一概に前述のように規定できない。これらは、被葬者の貧富や身分差が大きく影響するものと思われる。



## (2) 山 田 館 跡

### 1. はじめに

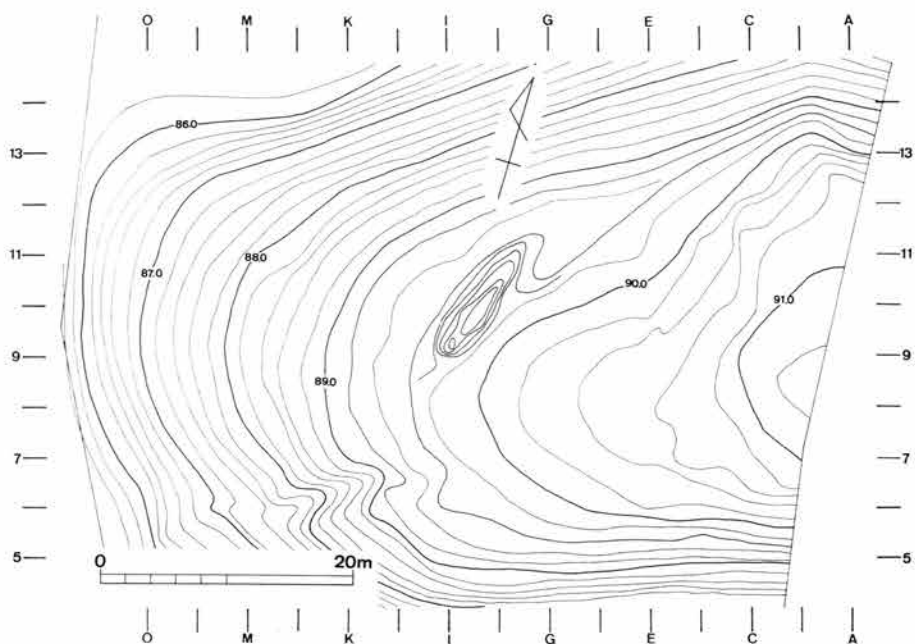
大内山田館跡は、大内小字大内山田に所在する。竹田川の支流大内川が開いた狭い開析谷に面した丘陵上に立地している。この丘陵は東から西にのび、その先端数100mにわたって、平坦な台地が開けている。この台地上と平野部との比高差は約20mを測る。

調査地内には、南北25m・東西60mの緩傾斜地の中央に、長さ15m・幅4m・高さ0.5mの土塁状の高まりが認められた(第248図、図版第113)。この土塁状の高まりより山手側には平坦地が広がっており、「城館跡」と判断された。

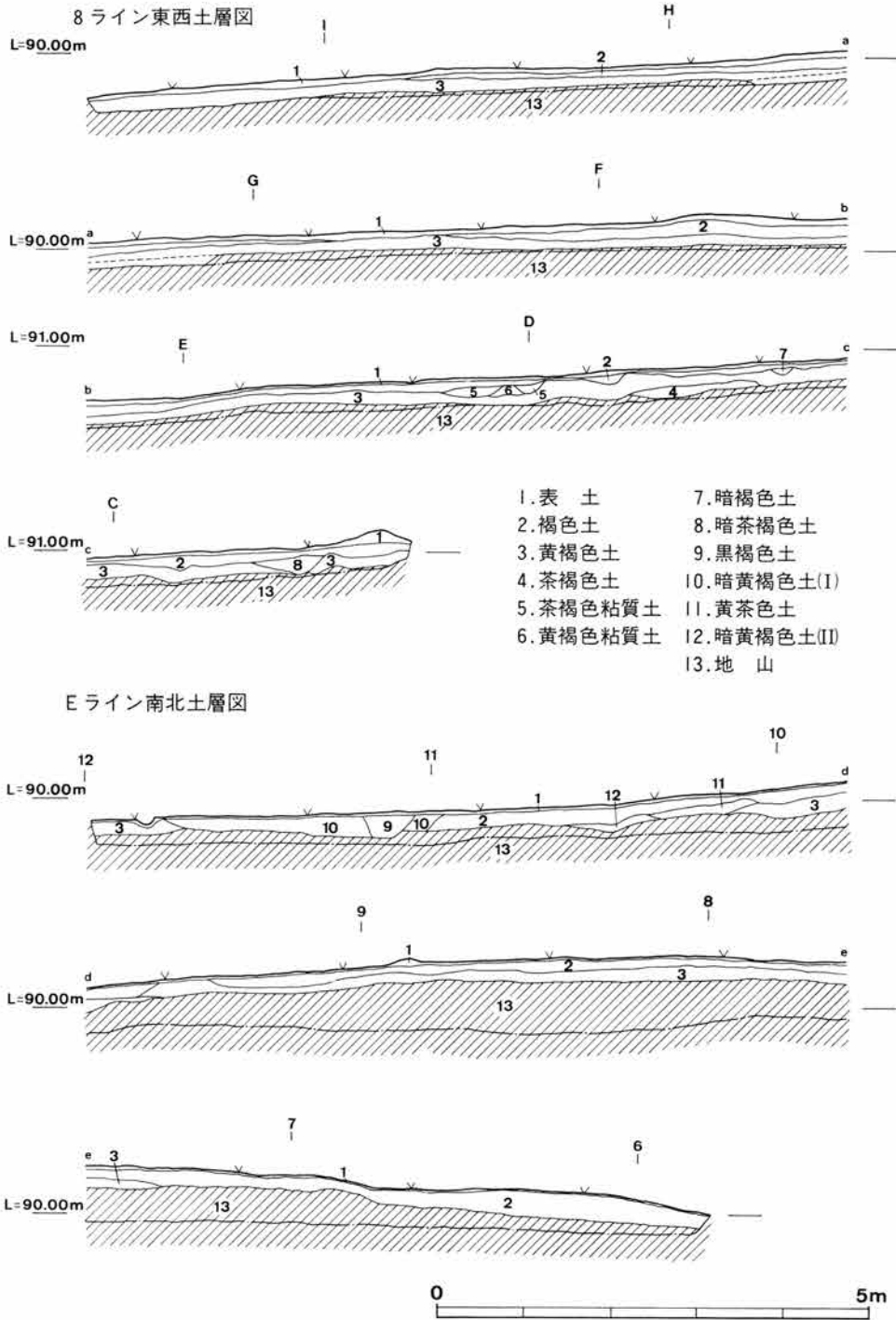
### 2. 調査経過

調査地内の地区割りには4mの方眼に行い、南北ラインは東から西へアルファベット名を付し、東西ラインは南から北へ数字を付けた。地区名は東西隅の交点をなす南北・東西のライン名で表示することとした。

調査は周囲の平坦地に南北方向の試掘トレンチを設けて、土層の観察・確認と遺構・遺物の検出に努め、順次調査地を広げて行った。それと平行して、土塁状高まりの調査を進



第248図 調査地地形測量図



第249図 調査地土層断面図

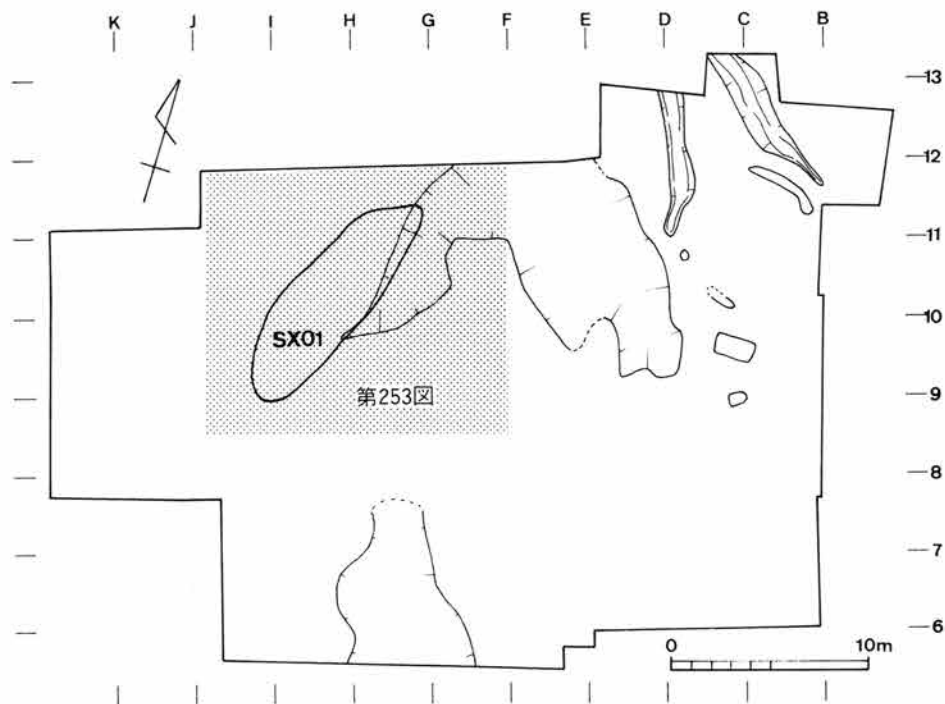
めた。この土塁状高まりの表土を剥ぐと、拳大～小児頭大の石が葺かれ、一部は西側の平坦地にまで広がっていた。この石の検出の際に、自然石に混じって五輪塔片(火輪、空・風輪)を確認し、また骨片や土器片が埋まっているのがわかった。そのため、石の実測図を作成した後、石を除去し、下部遺構の検出に努めた。その結果、土塁状隆起を中心に中世墓が群集していることが判明した。

土塁状隆起を中心に蔵骨器に納められた火葬墓7基、丹波焼大甕埋置1、土壇状遺構、火葬墓及び集石遺構・土塚を60基以上検出した。周囲の平坦地では、土塚・溝・落ち込み等を検出したが、城館跡と結びつく顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

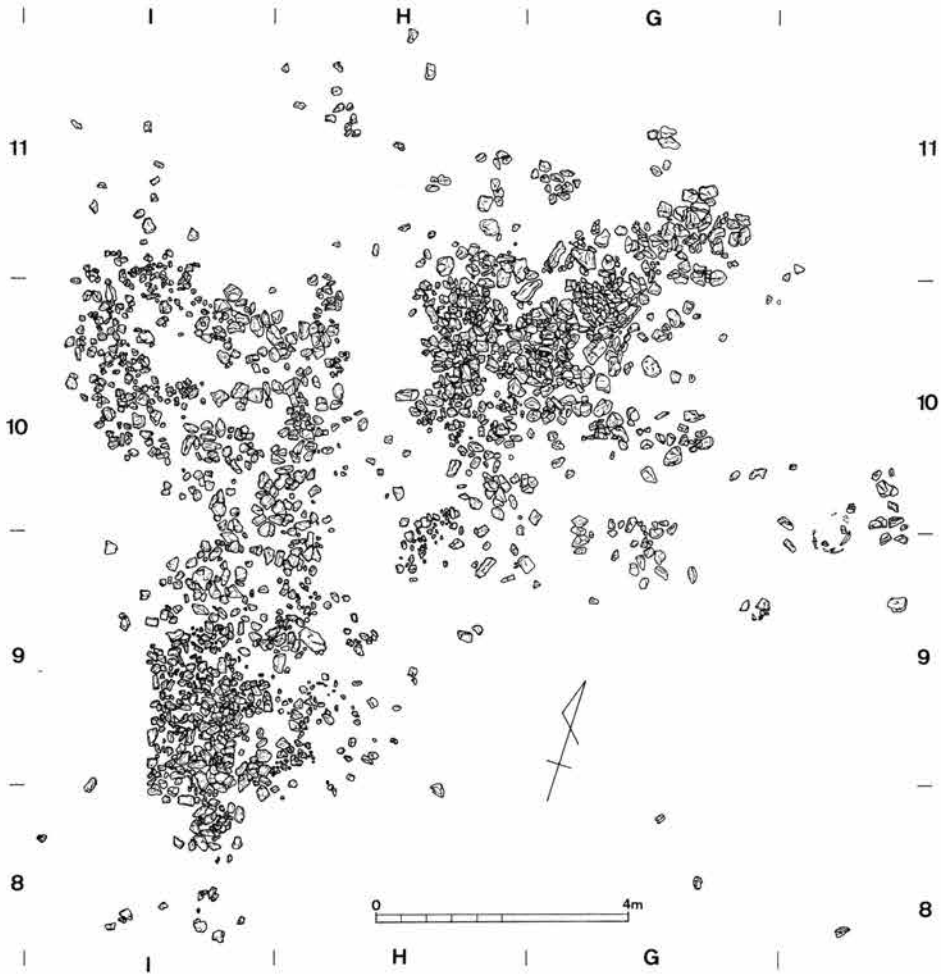
### 3. 調査概要(第249～267図)

調査地の東北部と中央南部で、落ち込み・溝・土塚を検出したが、その性格については不明である(第250図、図版第117-2)。これらの遺構からは、須恵器・瓦器の小片が出土している。ただ、SX01の東側で検出した落ち込みについては、SX01の盛土を採取した跡かもしれない。

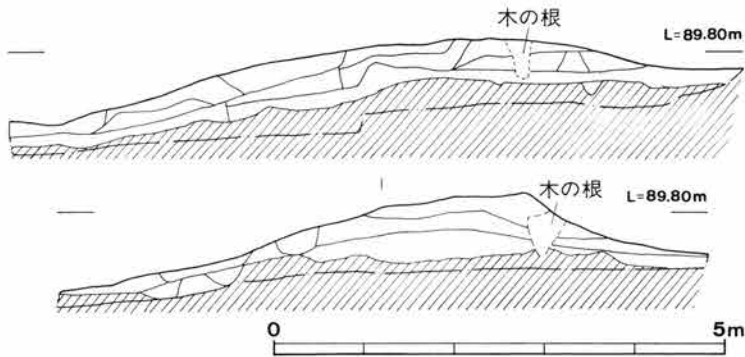
中央部の土塁状高まり(SX01)は表土下に石が葺かれていた(第251・252図、図版第113-2)。



第250図 検出遺構配置図



第251図 SX01 平面図

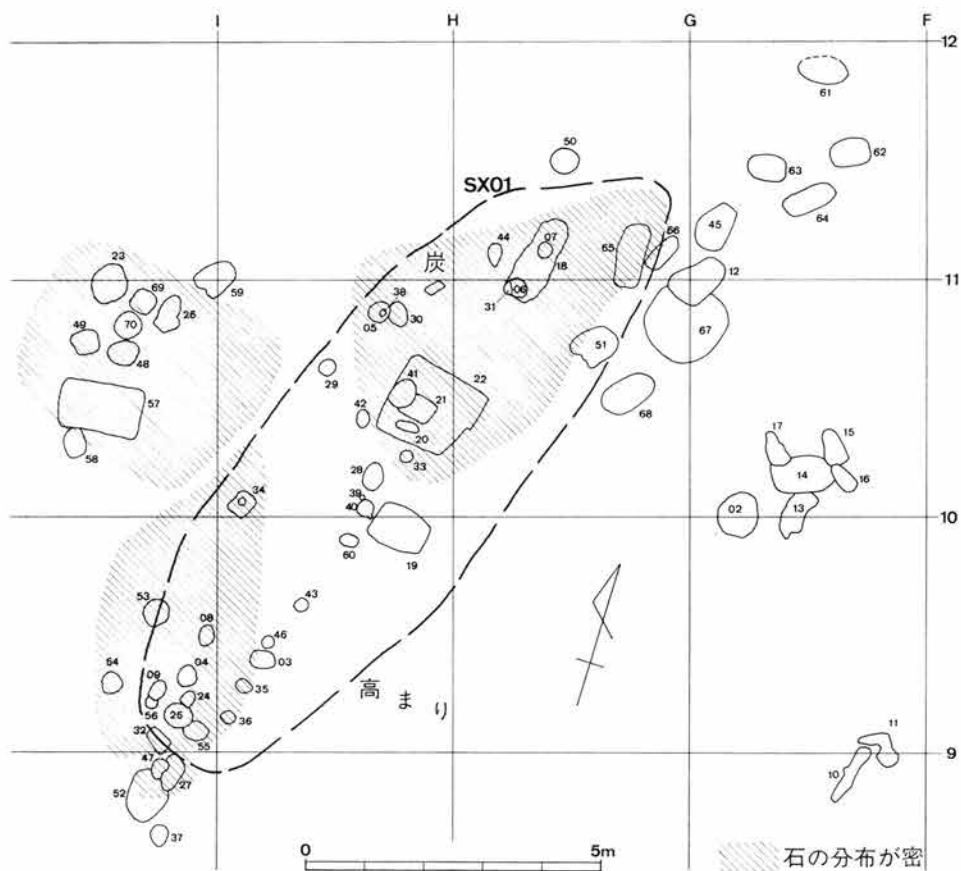


第252図 SX01 東西土層図

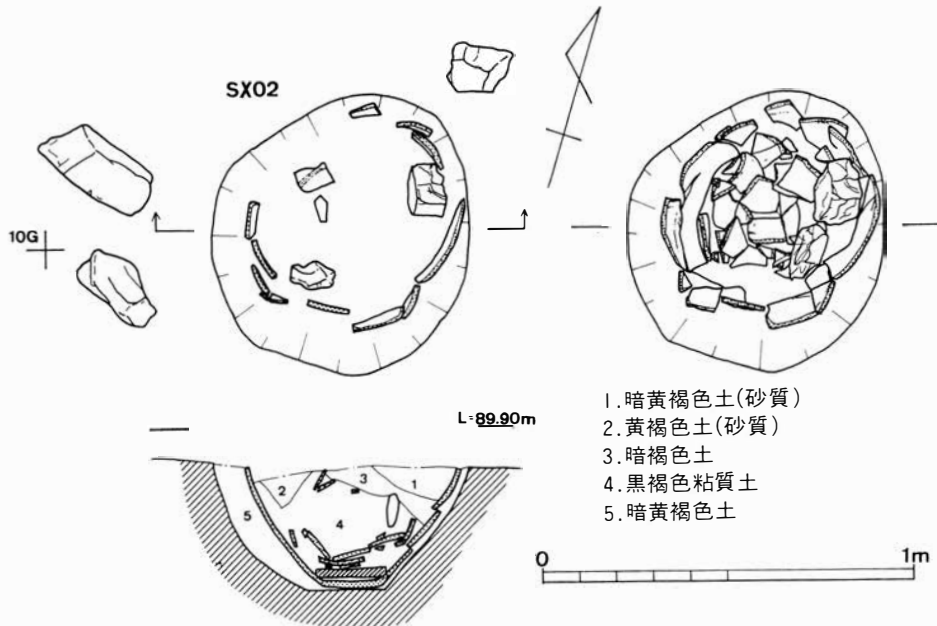
土壘状隆起の全面には葺かれておらず、中央部はまばらで、北部と南部に集中している。また、中央部西側の平坦地にも3.5m×4.0mの範囲に石が密集していた。石の除去後、SX01上及びその周囲で多くの中世墓を検出した(第253図)。SX01の表面に葺かれていた石の総重量は4,300kgであった。

検出した中世墓の埋葬パターンは大きく6大別できる。

- I 蔵骨器を持つもの
- II 土坑内に石組を行い、その中に骨を納めるもの
- III 小土坑を浅く掘り、骨片のみを納めるもの
- IV 大形の土坑
- V 溝状に掘った土坑内の埋土に骨・焼土・炭化物が少量含まれるもの
- VI 外表施設として土壇を有するもの



第253図 検出遺構配置図 中世墓関係



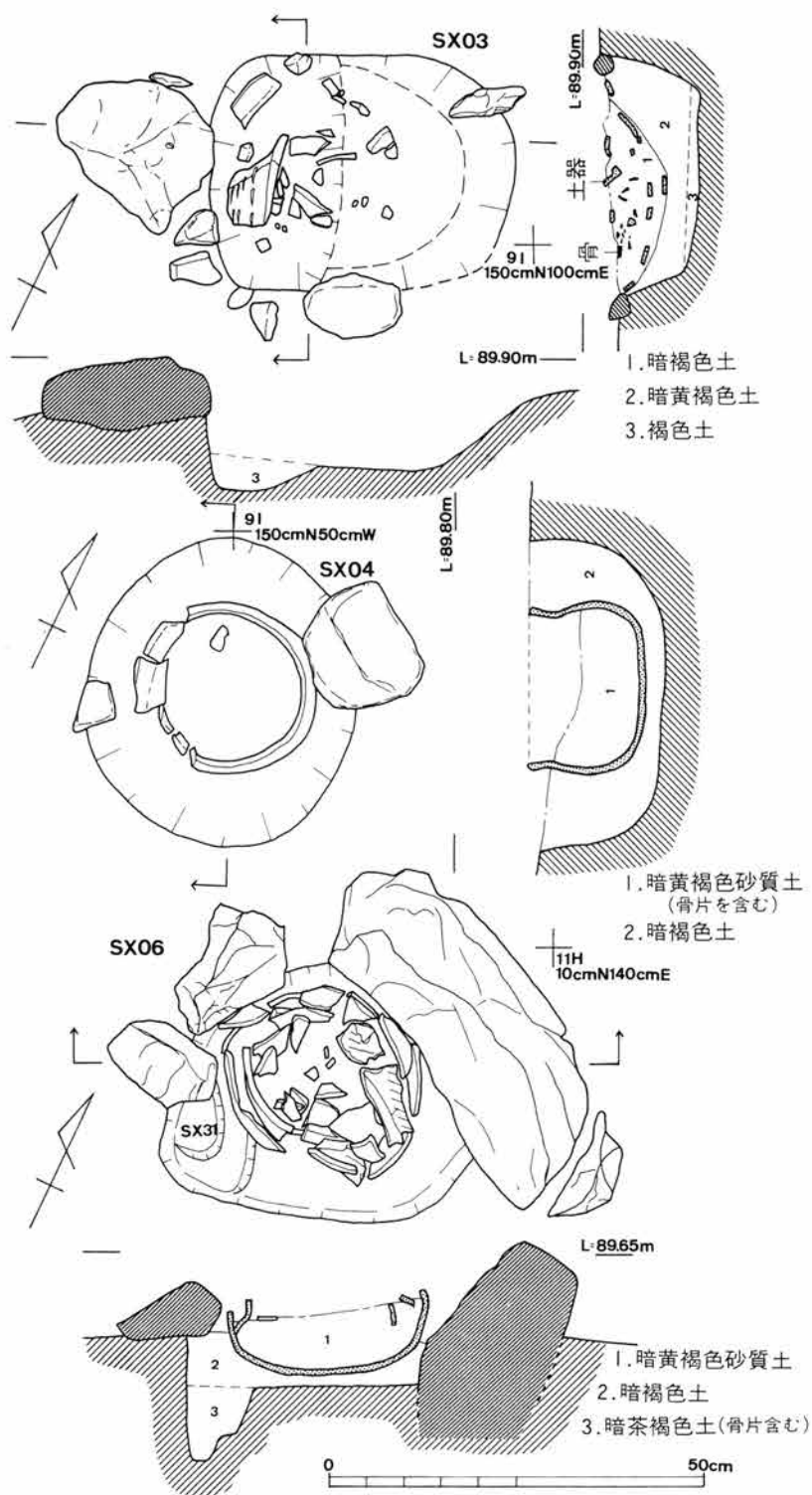
第254図 SX02 実測図 (左:検出時, 右:甕片落ち込み状況)

SX01の盛土上にはⅢのタイプが多く、Ⅰ・Ⅱは盛土裾部に多く検出した。また、北部で多く検出した土坑は、このタイプに骨が混じらないため、埋葬に関わる遺構か判然としない。以下、各タイプの概要を示す。

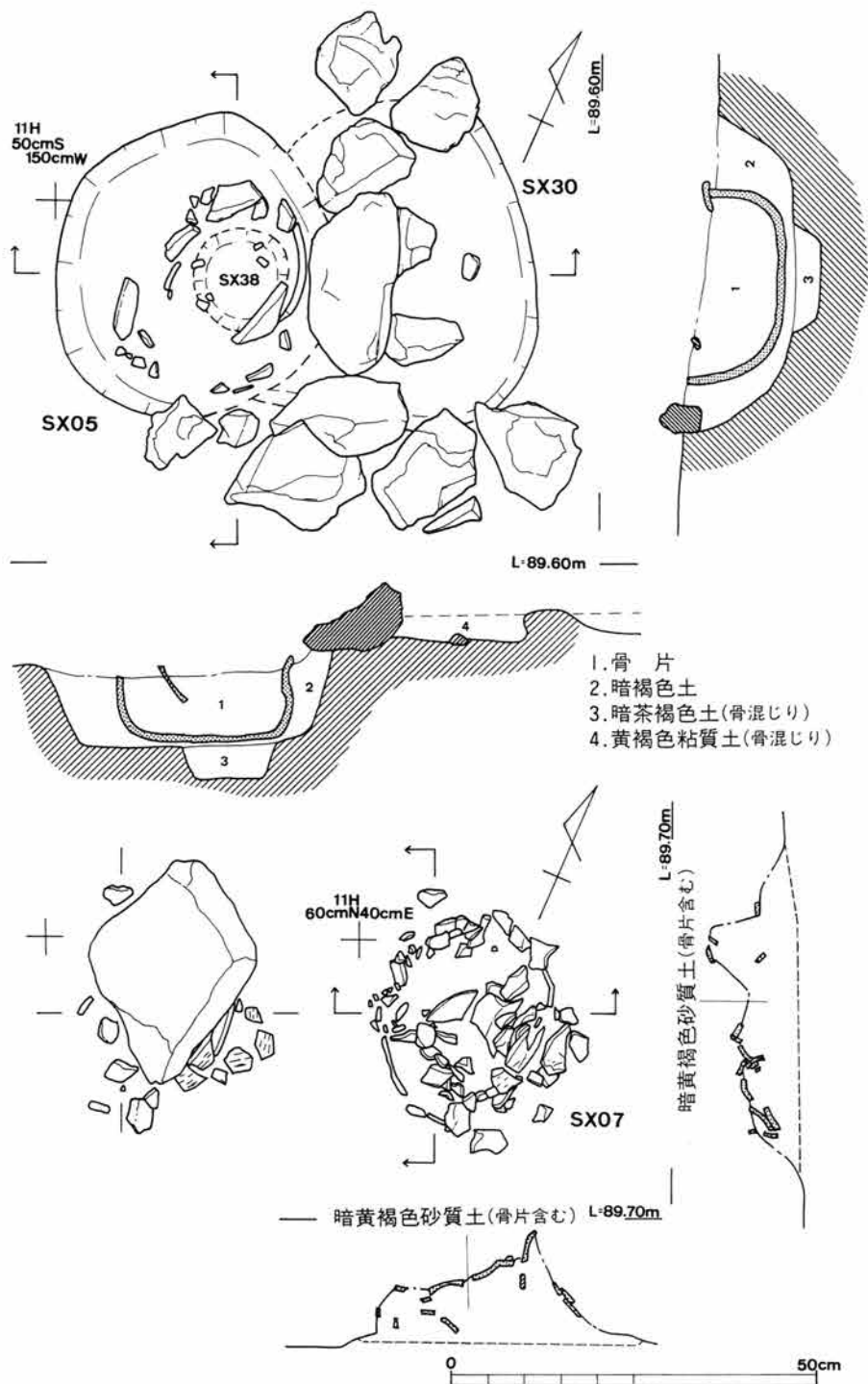
①蔵骨器を持つのは、SX02～SX09である。このうち、SX02は丹波大甕、SX09は瀬戸灰釉瓶子を骨壺に用いているが、他の6例は土師器鍋を蔵骨器に転用している。これらのうち、確実に副葬品をもつものはSX08だけで、その他は副葬品を伴わない。

**SX02**(第254図, 図版第114-1)は、径約70cm・深さ35cmのすり鉢状の土坑に埋納されていた。甕の体部中央までは埋納時の状態のまま検出できたが、上半部は甕の内部に破片となって落ち込んでいた。その甕片の上には、15cm程度の石が数個載っていた。土層の観察により当初の姿を復原すると、穴の中に甕を埋置した上に板材等で蓋がされ、石が重しとして置かれた。それを覆うように塚状の土盛りがなされたものと思われる。板材の蓋が腐った時か、土圧によって甕の体部上半が内部に割れ落ちたのであろう。甕の内側底には、厚さ約3cmの平石が敷かれていた。埋土中には骨片・焼土は混じらず、炭化物の小片が数点あったのみである。副葬品はない。

**SX03**(第255図)は、9H地区で検出した。蔵骨器の据えられた土坑底の東半は段を持って掘り込まれている。検出時から蔵骨器の鍋は小破片に割れた状態であった。しかし、骨の混じる層は蔵骨器の形状を踏襲する形をとる。

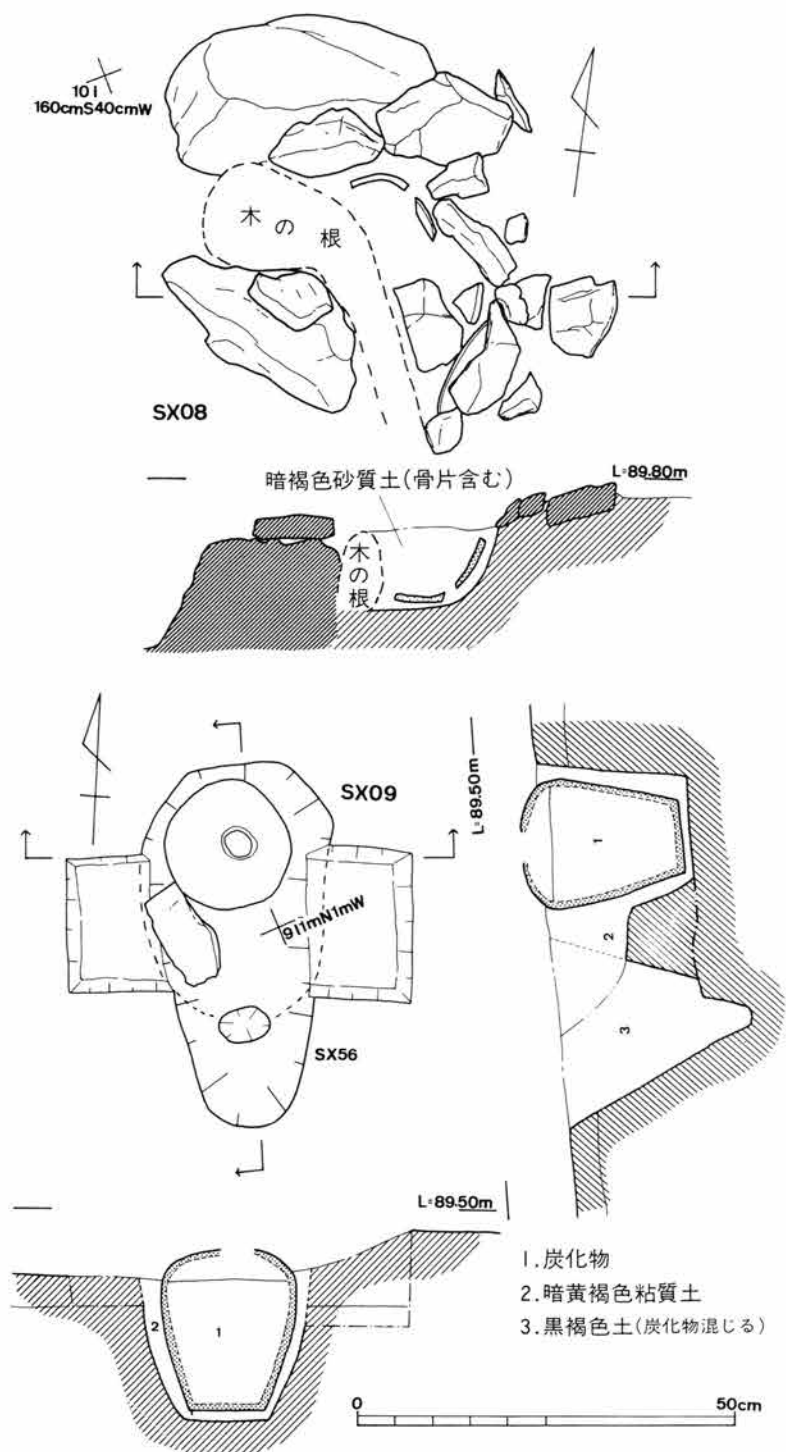


第255図 SX03・04・06・31実測図

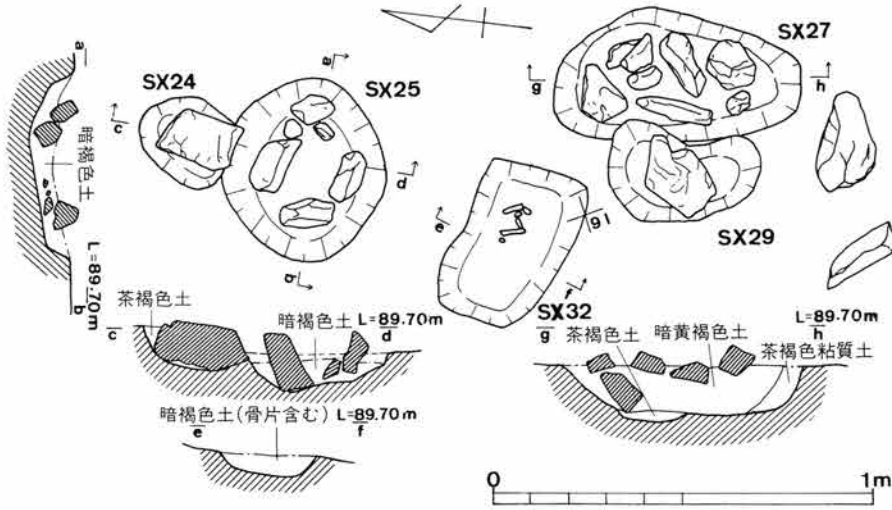


第256図 S X 05・07・30・38実測図

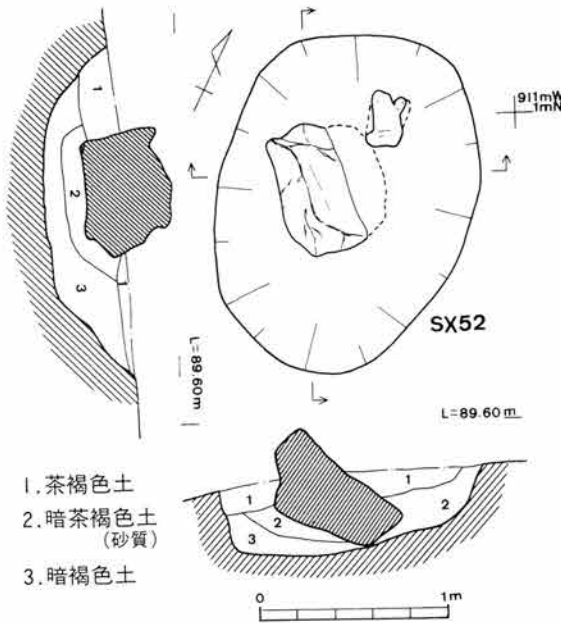




第257図 SX08・09・56実測図



第258図 SX24・25・27・29・32実測図



第259図 SX52実測図

**SX04** (第255図, 図版第114-2) は、9I区で検出した。SX01の石を除去するとすぐに口縁部が見えた。蔵骨器を納めるだけの土壇を穿つだけのものである。この鍋は外表面に煤の付着は認められず、恐らく未使用の土器を蔵骨器に転用したものと考えられる。また、穿孔はない。

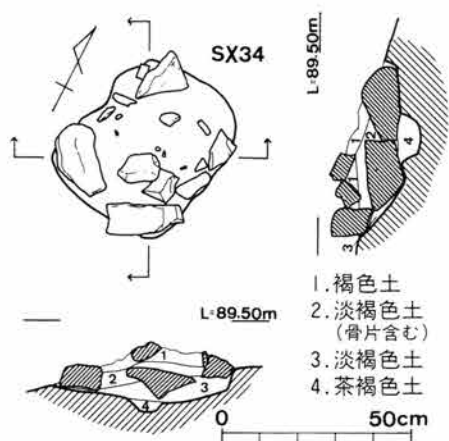
**SX06** (第255図, 図版第115-2) は、大きな石の際で検出した。こういった石が墓標として機能したものかもしれない。据え付け坑の底面に、小土壇(SX31)が設けられている。SX31はその埋土中に

微細な骨片が混じるが、蔵骨器を埋めた土の中には骨片は含まれない。

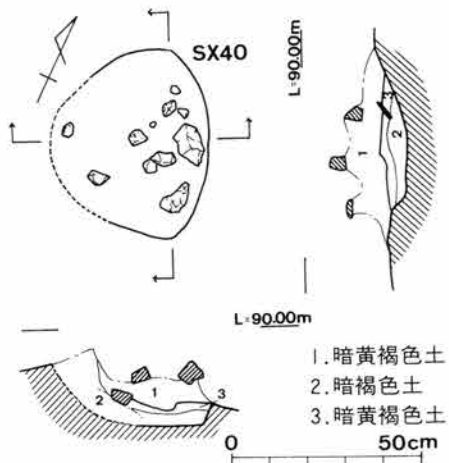
**SX05** (第256図, 図版第115-1) は、SX30に隣接して検出したもので、坑の底面にSX06と同様、骨片の混じる小ピット(SX38)を穿つ。隣接するSX30は、浅い土壇中に骨片を納めるものである。



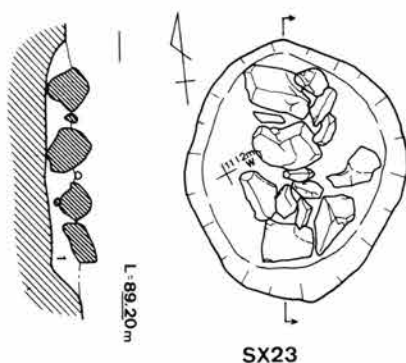
第260図 SK10・11実測図



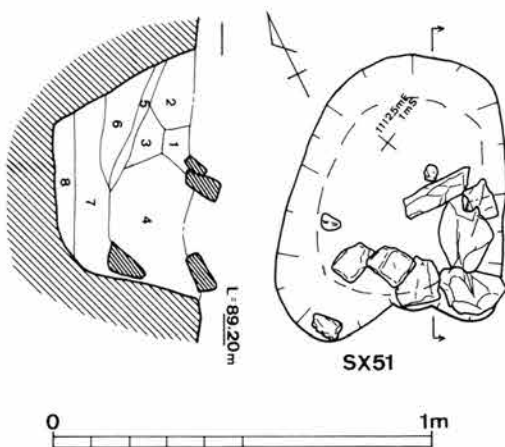
第261図 SX34実測図



第262図 SX40実測図



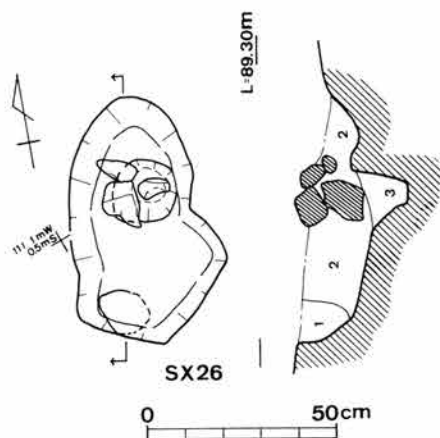
第263図 SX23・51実測図



1. 黒褐色粘質土, 2. 暗茶褐色土, 3. 赤褐色土,
4. 茶褐色土, 5. 暗褐色土, 6. 赤褐色土,
7. 褐色土(砂質), 8. 暗黄褐色土

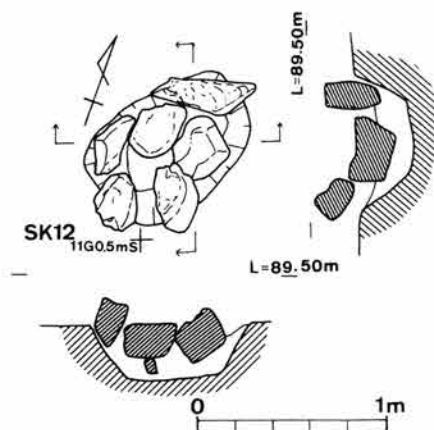
SX07(第256図, 図版第116-1)は、切株の除去作業のため、周囲が蔵骨器より低い状態で検出した。そのため、掘形等はわからない。ただ、この骨壺では唯一、平石を用いた蓋を検出した。このことから、他の5基に関してもなんらかの、おそらくは木質の蓋がなされていたものと判断される。

SX08(第257図)は、石の際で検出し、SX06と同じ様相を示す。この遺構は松の根により攪乱を受けており、詳細はわからなかった。



第264図 SX26実測図

1. 暗褐色土 2. 暗茶褐色土 3. 暗褐色土



第265図 SK12実測図

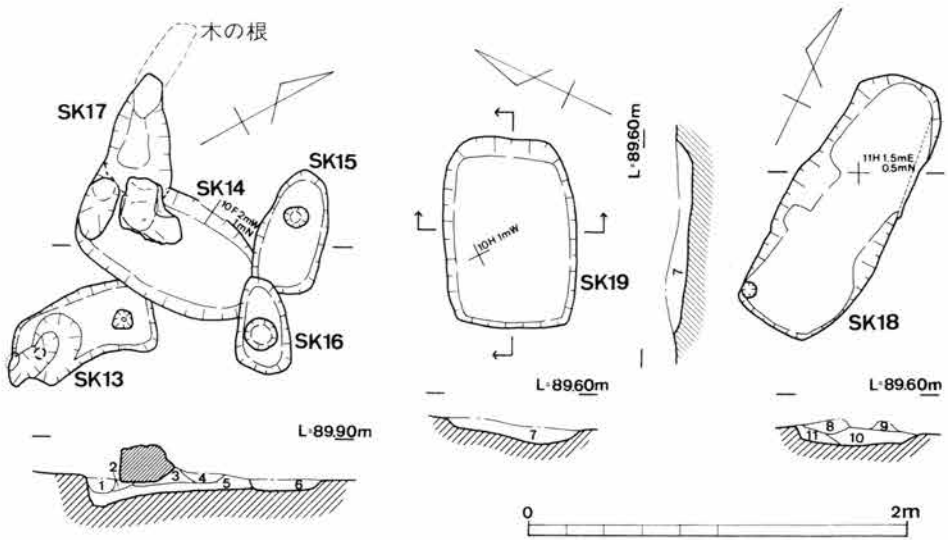
鍋があり、その表面には煤が付着し、日常の使用に供されていたものを転用したことがわかる。これのみ、土師器皿1枚を内部に納めていた。

**SX09**(第257図、図版第116-2)は、SX59と重複して検出した。瓶子の掘形はほぼ土器が納まるだけで、南側は段を持ってやや大きめに掘られている。ここには長さ13cmの石が瓶子に接して、地山上に置かれて埋まっていた。SX59は埋土中に炭化物が混じり、SX09と重複する。

②Ⅱのタイプはその多くが骨片を検出しなかったが、SX24とSX29、SX34とSX23・SX25は形態上の違いは認められず、骨の有無だけが異なるものである。これらの例から、骨片を検出していないものも本来は骨が埋葬されていたが、ただ遺存しなかっただけと判断される。

**SX24**(第258図)は、坑中が一枚の石で占められており、埋土は骨片のみであった。同じタイプにはSX29(第258図)があるが、骨片は混じらない。木質に納められた骨を埋葬した上に、本来は「墓標」的なものとして石が墓坑の上に置かれていたのが、木質の腐食のため坑内に落ち込んだと考えられる。SX52は、土坑が大型のものである(第259図、図版第119-4)が、基本的には先のものと同じと考える。

**SX34**(第261図、図版第119-2)は、石組が坑内にあり、埋土の中層に多くの骨片を埋葬する。この坑底に小ピットを穿ち、微細な骨片が混じる。これは、Ⅲのタイプの別の埋葬が付随しているのかもしれない。SX27(第258図)もSX34と同じ形態で、坑底に骨片の混じる小土坑があるが、石組のある土坑内には骨片を含まない。SX26(第264図)は、小ピットに骨を含まない。SX23(第263図、図版第118-3)・SX25(第258図、図版第118-4)は石組のある土坑を有するだけである。骨片は出土してない。これらの石組も本来は、墓坑上の「墓

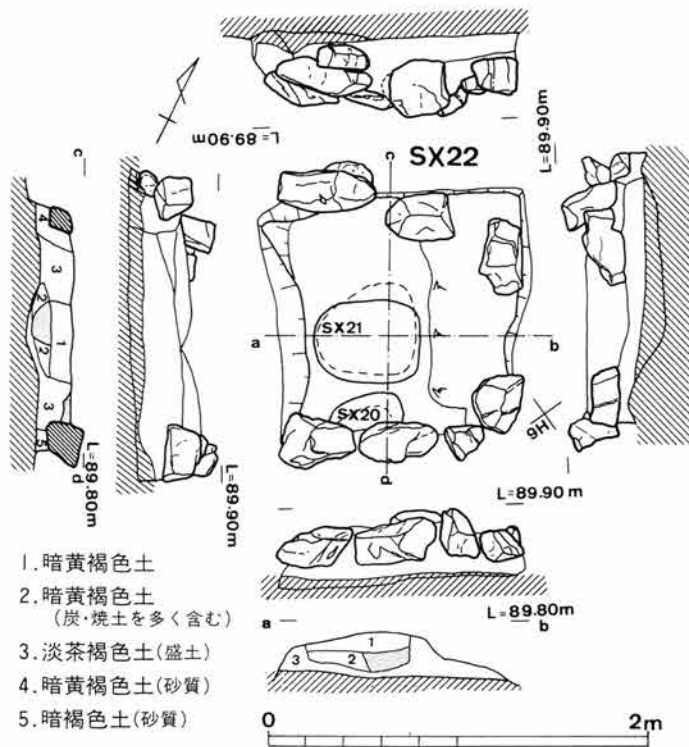


第266図 S K13～19実測図

1. 黒褐色土 2. 茶褐色土 3. 褐色砂質土 4. 淡灰色土 5. 褐色土(炭混じり)  
 6. 淡褐色土(焼土・炭混じり) 7. 茶褐色土 8. 赤褐色土 9. 暗灰色粘質土  
 10. 暗褐色土(焼土・炭含む) 11. 暗褐色土

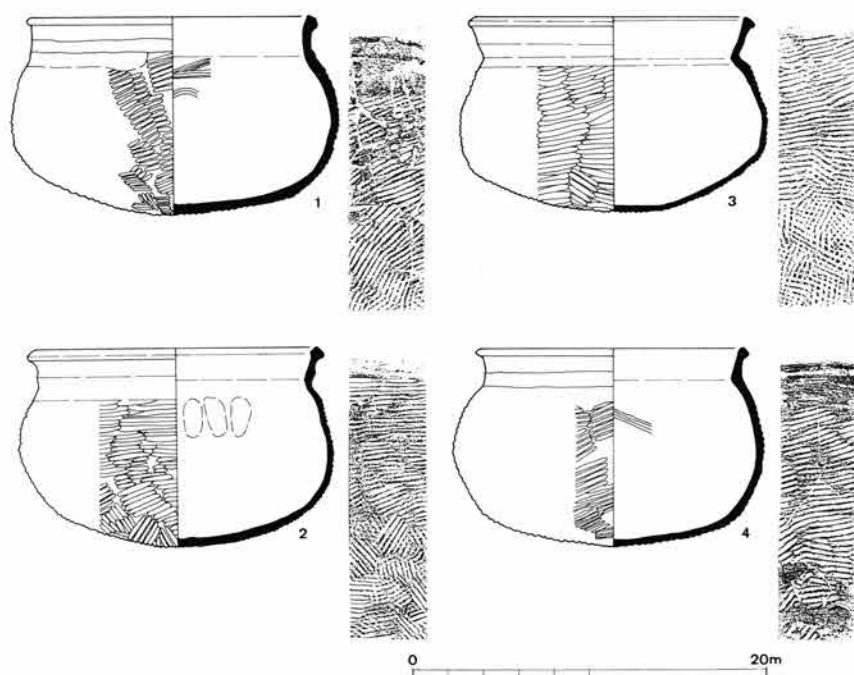
標」的なものであったと推測される。SK12(第265図, 図版第119-1)は大型のものである。

③Ⅲは, 単独であるものと, Ⅰ・Ⅱのタイプの土坑底面に設けられるものがある。前者にはSX30(第256図, 図版第115-1), SX32(第258図), SX40(第262図)等がある。また, 掘形が検出できないほど浅く, いわば骨片が「散乱」した例もある。後者にはSX06の



第267図 S X20・21・22実測図

1. 暗黄褐色土  
 2. 暗黄褐色土  
 (炭・焼土を多く含む)  
 3. 淡茶褐色土(盛土)  
 4. 暗黄褐色土(砂質)  
 5. 暗褐色土(砂質)



第268図 出土遺物実測図(1)

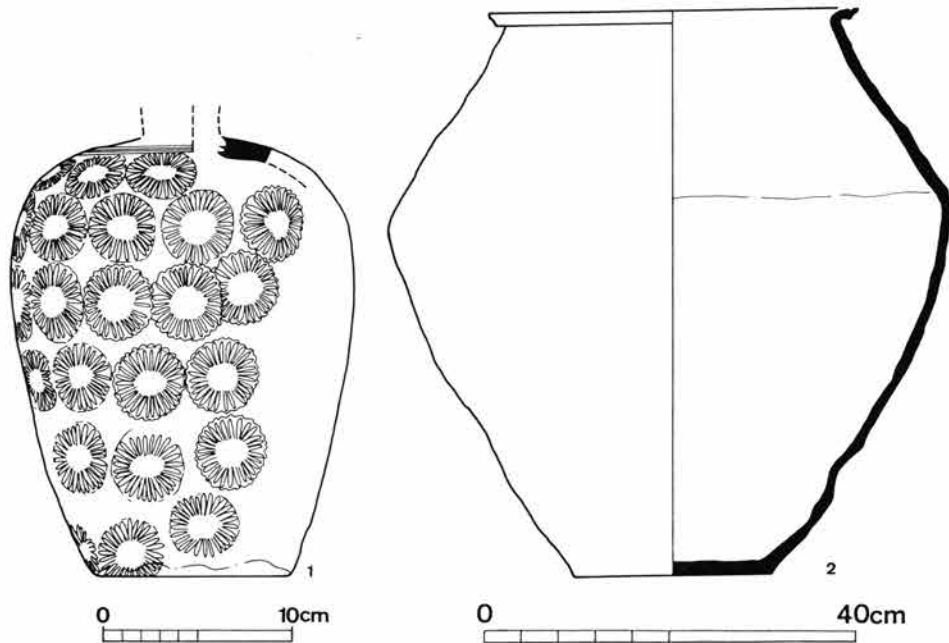
1: SX03 2: SX04 3: SX06 4: SX07

底面にあるSX31, SX05の底にあるSX38などがある。SX34(第261図, 図版第119-2)・SX27(第258図)・SX26(第264図)の坩底にある小ピットは、それぞれの遺構との峻別が困難なため、確証はないが、このタイプと考えてもよい。SX26には、骨片は混じらない。

④Ⅳはいわゆる土塚墓の形態をとる。SX01の東北部で集中して検出した。第266図SK18・SK19などがある。このタイプの土塚からは、骨片を全く検出しなかった。火葬骨とそうでないものとの差異が現われているのかもしれない。

⑤SK10・SK11(第260図)などがこのタイプに属する。SX01の高まりより少し離れてある。SK10は浅い溝状をなし、長さ1.1m・幅25cm・深さ10cmである。埋土中に少量の微細な骨片・焼土・炭化物が混じる。骨片の量は多くない。SK11は、L字形の不定形な掘形を有し、30cm×70cm・深さ5cmである。この埋土には、焼土・炭化物の小片が混じる。

⑥①～⑤は、外表施設としてせいぜい「墓標」と集団で共有する「土壘状」のマウンドをもつものであった。Ⅵは、他と比べて極めて「特権的」な土壇をその外表施設として所持する。SX22(第267図, 図版第117-1)がこのタイプに含まれる。これはSX01の盛土中で検出したもので、SX01より前出する。埋葬主体はSX56・57があり、Ⅲのタイプである。SX22は40～60cmの大振り of 石で方形に区画し、各辺に3個程度を並べている。1.2m×1.4mで約20cmの盛土を有する。この中央にSX57がある。45cm×65cmの楕円形をした掘形を

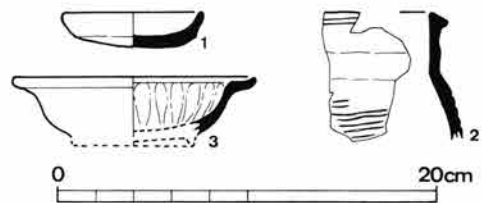


第269図 出土遺物実測図(2)

1: SX09 2: SX02

もち、東半中央に骨片が集中する。SX56は南辺の石組に接して掘られた塚の中に骨片を納めている。平面形は長楕円形で、20cm×45cm・深さ5cmである。これらは、埋葬自体や副葬品の点で、他との差異は認められない。

その他に検出した埋葬施設と判断されるものについての概要は、別表に示す通りである。



第270図 出土遺物実測図(3)

1: SX08内 2: SX08 3: SK12

#### 4. 出土遺物(第268～270図, 図版第121・122)

この調査で出土した遺物は先述の蔵骨器8(土師器鍋6, 瀬戸灰釉瓶子1, 丹波大甕1)の他に, SX08に副葬された土師器皿1, SK12から出土した中国製陶磁器片, SX01の葦石に挟まっていた五輪塔片(火輪3, 風輪1, 空輪1), 周囲の包含層遺構から出土した瓦器片・須恵器片が数点ある。

土師器鍋の内SX05とSX08は, 現地調査で検出した時にはほぼ原形を留めていたが, 水洗いを行った際に溶出し, まとまった形に復原できなかった。須恵器片・瓦器片ともに小

片で図化できなかった。

第268図1～4は、土師器鍋である(図版第121)。体部には平行叩きを施して成形し、底部は同一の原体で直交方向に叩き締めている。内面はナデによる調整である。やや扁平な体部を持ち、頸部は締め、口縁はやや外方に直立する。基本的には口縁端部は断面三角形をなしている。口頸部は横ナデを施している。1はSX03の蔵骨器で、口径21.4cm、高さ15.4cm、最大腹径25.7cm、淡黄褐色を呈している。内面は指ナデで調整するが、一部ハケメが残る。タタキメの原体は7本/2.7cmである(図版第121-1)。2は口径22.2cm、高さ15.5cm、最大腹径24.8cm、色調は明褐色である。タタキメの原体は7本/2.8cmである。SX04から出土した(図版第121-2)。3はSX06の外容器で、口径21.1cm、高さ15.3cm、最大腹径24.1cm、色調は明褐色である。タタキメの原体は7本/2.5cmである(図版第121-3)。4は口径20.6cm、高さ15.5cm、最大腹径24.5cm、色調淡黄褐色を呈している。ハケメが内面に残存する。タタキメの原体は7本/2.6cmである。SX07より出土した(図版第121-4)。これらの土師器鍋は、伊野近富氏の編年案<sup>(注63)</sup>によると、鎌倉後期～南北朝期にあたる。

第269図-1はSX09の蔵骨器に用いられていた瀬戸灰釉菊花文瓶子である(図版第122)。口縁部は打ち欠かされている。現存高22.9cm・肩部径17.9cmを測る。釉は、底面を除いて全面に施されており、淡緑色に発色している。器壁断面による観察では、生地は灰白色できめ細かい粘土を用いている。外面の菊花文(花卉28枚)は径約4cmのスタンプで押印している。体部は大きく2片に割れているが、その割れ口を漆でついで補修している。2はSX02に埋置されていた丹波焼きの甕である(図版第121-5)。口縁は水平方向に短くのび、口縁内面に1条の沈線が巡る。口径39.8cm・最大腹径60.0cm・器高60.0cmである。色調は赤褐色～橙褐色を呈しているが、外面の体部上半～口縁部にかけては灰白色の自然釉が付着している。藤澤良祐氏の編年案<sup>(注64)</sup>によると鎌倉後期～南北朝期で、さきの土師器鍋の年代観と矛盾しない。

第270図-1はSX08の土師器鍋に副葬されていた土師器皿である。口縁径7.5cm・器高1.8cmで、体部から口縁にかけて屈曲気味に立ち上がる。橙褐色を呈し、胎土は粗いが、焼成は比較的良好である。約2/3が残存している。2はSX08の蔵骨器に転用された土師器鍋の破片である。口縁端部は断面三角形を呈し、他の蔵骨器のものと同様である。淡褐色の色調で、胎土はよく、焼成は堅緻である。3はSK12より出土した青磁折縁片で、約1/4の残存である。口縁部は水平方向に折り曲げた後、上方にのびる。内面には蓮弁文が施文される。口縁の復原径は12.8cmである。生地は灰白色で、釉色は灰緑色を呈する。

## 5. 小 結

上述のように、近舞線路線内の調査地内では、「城館」に関連する遺構は検出できな



った。しかし、僅少ではあるが、調査地の東部でも中世の土器片が出土したので、路線外の平坦地に関連する遺構が包蔵されているものと判断される。

一方、当初の予想に反して、SX01を中心に多くの中世墓を検出した。出土土器が少ないので、埋葬に利用された期間を把握できない。蔵骨器の年代観から、鎌倉後期～南北朝期と相前後する時期に形成されたといえよう。本遺跡の中世墓に関して特徴を挙げると、

①細長い土塁状隆起を設けて、それを中心に狭い範囲に多くの埋葬施設が密集する。

②蔵骨器に納めている場合は少なく、埋葬施設は至って簡便である。しかも、蔵骨器に納められている例も、瀬戸灰釉菊花文瓶子を除き、日常雑器を蔵骨器に転用している。

③副葬品が一点を除いて全く見られない。しかもその一点は土師器皿で、装身具や利器などの「特別」なものではない。

④当初、この地を墓域と選定した際は、特別な埋葬施設—土壇を設け、葬送を行い、その後、集団墓として改変している。個人墓→惣墓の過渡的な形態を示す。

⑤複数のタイプの埋葬パターンが混在している。

近舞線関係遺跡で中世墓を検出したのは、宮遺跡・大内城跡・多保市城跡B地点がある。各遺跡の様相は、各報告を参照することとし、その概要をみると、宮遺跡の墳墓は単葬墓で塚の外表施設と副葬品を持つ。大内城跡中世墓は、多彩な蔵骨器と石組の外表施設・副葬品を所持する。多保市城跡B地点では、単葬墓であるが副葬品はなく、日常の雑器を蔵骨器に転用している。これらの遺跡の中世墓のうち、山田館跡と共通するのは多保市城跡B地点で検出した中世墓である。遺構の様相から、階層的には宮遺跡・大内城跡の墓が在地の「支配者」としての性格を有するのに対して、この遺跡及び多保市城跡B地点のものは「民衆クラス」といえよう。

SX01横平坦地の10I区には石敷の区画があり、その下にはSX23・48・49等の埋葬施設がある。これなどは、多保市城跡B地点で考えられているのと同じく、埋葬区画が血縁関係を示しているであろう。また、SX01の東側平坦面の埋葬は3大別でき、9F区 SX10・11、10F区 SX02・13など、11G・F区 SX12・62・63等に分かれる。11G・F区のグループにはⅣのタイプが集中している。しかし、SX01上の埋葬に関しては明瞭な分布の境界はなく、しいて言うならば、当初の葺石の粗密に応じて、北部と南部に埋葬の分布が偏り、中央は疎らである。そして、Ⅰのタイプの埋葬は、この集石の密な部分で検出している。中央部の石が疎らなところにはⅢのタイプの埋葬が列状にあり、その判断に迷うところであるが、一応、一グループと捉えると、SX01上は3大別できる。これらの分布の違いが血縁関係などの社会的要因に起因するならば、総じてこの墓所は6～7家族の墓所として利用されたものと推測される。

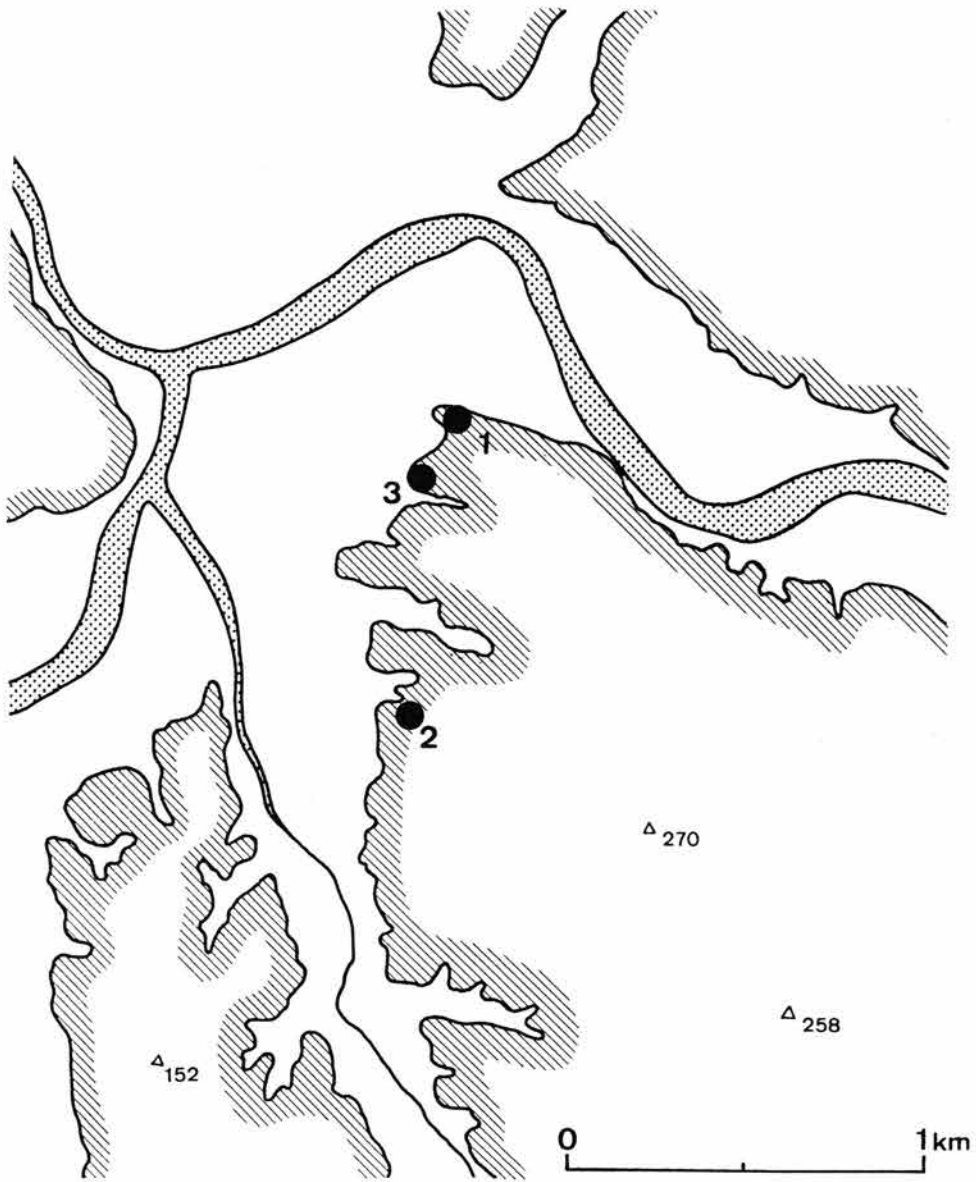
(岩松 保)

付表 8 山田館跡遺構表 (墓関係)

遺構番号	地区	規 模	形 状	骨片	区分	挿図番号
S X 01			表面葺石			251図
S X 02	10 F	70×75cm, 深さ35cm	丹波焼大甕埋置, 甕内底面に 20cm×20cm×3cmの平石を据える。		I	254図
S X 03	9 H	30×40cm, 深さ10cm	土師器鍋転用蔵骨器利用	○	I	255図
S X 04	9 I	35×40cm の楕円, 深さ20cm	土師器鍋転用蔵骨器利用	○	I	255図
S X 05	10 H	径 40cm, 深さ15cm	土師器鍋転用蔵骨器利用, 掘形底面に S X 38	○	I	256図
S X 06	11 G	径 30cm, 深さ10cm	土師器鍋転用蔵骨器利用, 掘形底面に S X 31	○	I	255図
S X 07	11 G	掘形不明	土師器鍋転用蔵骨器利用, 鍋に平石を蓋として利用	○	I	256図
S X 08	9 I	木の根の為掘形不明 深さ10cm	土師器鍋転用蔵骨器利用, 土師皿 1枚副葬	○	I	257図
S X 09	9 I	25×25cm, 深さ20cm	瀬戸灰釉瓶子転用蔵骨器 S X 56を切る	○	I	257図
S K 10	9 F	0.25×1.1m, 深さ10cm	埋土に骨片, 焼土, 炭化物が混じる	○	V	260図
S K 11	9 F	30×70cm, 深さ 5cm	L字状の不整形, 埋土に焼土・炭を含む		V	260図
S K 12	11 G	60×90cm, 深さ30cm	25cm×25cm×20cmの石を土壇内に 6個据える, 底面に小ピット 2個		II	265図
S K 13	10 F	40×80cm, 深さ15cm	(旧) S K 13 > S K 14 > S K 15 > S K 16 (新)検出時に石がのる		IV	266図
S K 14	10 F	65×105cm, 深さ5~15cm	炭化物が少量混じる。35cm×30cm×20cmの石が1個埋まる		IV	266図
S K 15	10 F	40×65cm, 深さ 5cm	底面に径10cm, 深さ10cmの 小ピットをうがつ, 焼土・炭混じり		IV	266図
S K 16	10 F	33×55cm, 深さ10cm	底面に径20cm, 深さ5cmの小ピットをうがつ, 全体に炭が少量ながら混じる		IV	266図
S K 17	10 F	30×65cm, 深さ15cm	S X 14を切る		IV	266図
S K 18	11 G	0.6×1.5m, 深さ15cm (最大30cm)	埋土中に炭化物・焼土が混じる, S X 07の下位に位置		IV	266図
S K 19	10 H	0.7×1.0m, 深さ10cm	S X 01下層。骨片が少量混じる	○	IV	266図
S X 20	10 H	20×45cm, 深さ 5cm	S X 22上。南辺	○	III	267図
S X 21	10 H	45×65cm, 深さ25cm	S X 22上。中央土壇内の一所に骨片が埋置される	○	III	267図
S X 22	10 H	1.2×1.4m, 高さ20cm	土壇状遺構。石で区画		VI	267図
S X 23	10 I	60×70cm, 深さ10cm	土壇内に石を置く		II	263図
S X 24	9 I	20×25cm, 深さ15cm	小土壇内に15cm×25cm, 厚さ15cmの石を一枚埋める		II	258図
S X 25	9 I	40×45cm, 深さ10cm	土壇内に石。骨片全くなし		II	258図
S X 26	10 I	35×65cm, 深さ20cm	底面に径15~20cm, 深さ10~15cmの小ピットをうがつ		II	264図
S X 27	8 I	35×65cm, 深さ15cm	土壇内に石を埋める。底面に25~35cm, 深さ3cm程度の皿状の土壇をうがち, そこに骨片が多く混じる。別の埋葬か?	○	II	258図
S X 28	10 H	35×50cm, 深さ 5cm		○	III	
S X 29	10 H	径 25cm, 深さ 5cm		○	III	258図
S X 30	10 H	30×45cm, 深さ 5cm	S X 05に隣接	○	II	256図
S X 31	11 G	10×25cm, 深さ15cm	S X 06底面の小ピット, 細かい骨片を含む	○	III	255図
S X 32	9 I	30×45cm, 深さ 5cm	長方形の土壇内に骨片が多く埋まる	○	III	258図

遺構番号	地区	規 模	形 状	骨片	区分	挿図番号
S X 33	10H	径 15cm, 深さ 5cm		○	Ⅲ	
S X 34	10H	35×40cm, 深さ15cm	土壇内に石を置く。埋土内に骨片を含む 土壇底に径10cm, 深さ5cmの小ピットを 穿つ。骨片を若干含む。別の埋葬か? 土壇内に骨片を含む	○	Ⅱ	261図
S X 35	9H	25×35cmの楕円, 深さ10cm		○	Ⅲ	
S X 36	9H	20×30cmの楕円, 深さ10cm	〃	○	Ⅲ	
S X 37	8 I	径 35cmの楕円, 深さ 5cm		○	Ⅲ	
S X 38	10H	径 13cm, 深さ 5cm	S X 05掘形底面上掘られる	○	Ⅲ	256図
S X 39	10H	径 10cm, 深さ 5cm		○	Ⅲ	
S X 40	10H	40×50cm, 深さ15cm	中層に骨片が密集	○	Ⅱ	262図
S X 41	10H	35×40cm, 深さ10cm		○	Ⅲ	
S X 42	10H	15×20cm, 深さ 5cm	若干の炭を含む	○	Ⅲ	
S X 43	9H	径 20cmの円, 深さ10cm		○	Ⅲ	
S X 44	11G	20×40cm, 深さ 5cm		○	Ⅲ	
S X 45	11F	60×85cm, 深さ30cm		○	Ⅲ	
S X 46	9H	径 20cmの円, 深さ10cm		○	Ⅲ	
S X 47	8 I	25×40cm, 深さ10cm	小土壇内に 15×25cm の石を一枚置く。 埋土内に骨片を含む	○	Ⅲ	
S X 48	10 I	40×50cm, 深さ20cm		○	Ⅲ	
S X 49	10 I	40×45cm, 深さ15cm		○	Ⅲ	
S X 50	11G	径 45cmの円, 深さ25cm		○	Ⅲ	
S X 51	10G	55×80cm, 深さ40cm	骨片等は含まない		Ⅱ	263図
S X 52	8 I	65×90cm, 深さ25cm	長楕円の土壇内に35cm×40cm×20cmの 石を据える		Ⅱ	259図
S X 53	9 I	40×45cmの楕円, 深さ10cm		○	Ⅲ	
S X 54	9 I	径 35cmの円, 深さ15cm		○	Ⅲ	
S X 55	9 I	35×45cmの楕円, 深さ20cm	S X 25の下層	○	Ⅲ	
S X 56	9 I	20×25cm, 深さ25cm	S X 09に切られる。埋土に炭化物が混じ る。底辺から更に 10cm 程度のピット		Ⅲ?	257図
S K 57	10 I	85cm×1.4m, 深さ10cm			Ⅳ	
S X 58	10 I	35×50cm, 深さ15cm	S X 57に切られる。		Ⅲ?	
S X 59	11 I	70×50cm, 深さ20cm			Ⅲ?	
S X 60	9H	20×30cm, 深さ 5cm		○	Ⅲ	
S K 61	11 F	45×85cm, 深さ25cm			Ⅳ	
S K 62	11 F	45×70cm, 深さ20cm			Ⅳ	
S K 63	11 F	45×65cm, 深さ20cm			Ⅳ	
S K 64	11 F	40×85cm, 深さ15cm			Ⅳ	
S K 65	11G	50cm×1.05m, 深さ20cm			Ⅳ	
S K 66	11G	30×60cm, 深さ30cm			Ⅳ	
S K 67	10G	径 1.35m, 深さ10cm			Ⅳ	
S K 68	10G	50×95cm, 深さ20cm			Ⅳ	
S X 69	10 I	径 40cm, 深さ15cm			Ⅲ?	
S X 70	10 I	径 40cm, 深さ15cm			Ⅲ?	

第4節 城 館 跡



第271図 本文掲載城館跡分布図

1：城ノ尾城館跡    2：後青寺城館跡    3：仁田城跡

## (1) 城ノ尾城館跡

### 1. 調査地概要

この中世城館跡は、城ノ尾遺跡の上層遺構群である。従って、遺跡の立地や調査前の土地利用等については「城ノ尾遺跡」の項(37～40頁)を参照されたい。

### 2. 調査の経過

地形測量後、土層の状況を確認するために15m×60mの平坦地に十字のトレンチを入れた。その結果、檜木の腐植土の下に厚さ10cm前後の旧耕作土(第273図I)があり、その直下が遺構検出面であると判断された。旧耕作土には相当量の土器片が含まれており、多少とも遺構の削平が予想された。遺構面は南半部が地山面に一致するが、北半部は整地層(第273図IV)の様相を呈していた。その後、調査地全域を遺構面にまで掘り下げ、遺構の検出に努めた。

一方、調査前から認められていた土塁状の遺構とその内側に沿う溝については、前者の表土を剥ぎ、後者は数か所にアゼを残して掘り切った。

次節に報告する中世遺構の調査後、土塁の断ち割りとして、下層(「城ノ尾遺跡」の項参照)の調査を行った。

### 3. 検出遺構

柱穴状の多数のピットは、形状と規模及び埋土の検討から、以下の(1)～(4)の掘立柱建物跡と柵列として復原できた。

#### (1) 掘立柱建物跡SB01

調査地の北端部、最も平坦な部分で検出された、東西5間・南北3間(9.0m×5.4m)の総柱建物跡である。柱間間隔にはかなりむらがあるが、平均して1.8mを測る。ピットの形状は、直径50～60cmの円形ないし隅丸方形であり、他の建物や柵列の柱穴よりも大きい。

#### (2) 掘立柱建物跡SB02

調査地の中央に位置する、南北4間・東西2間(7.2m×3.9m)の総柱建物跡である。柱間間隔は南北方向で1.8m、東西方向で1.9mを測る。ピットの形状は、直径30cm前後の円形を呈する。

#### (3) 柵列SA02

掘立柱建物跡SB02の東辺に沿う4間分の柵状遺構である。当初、SB02に属すると考えたが、ピットの形状も大きさも他の柱穴と全く異なるので、後に付け足した建物の廂か、塀のような構築物であろう。

## (4) 平行柵列SC01

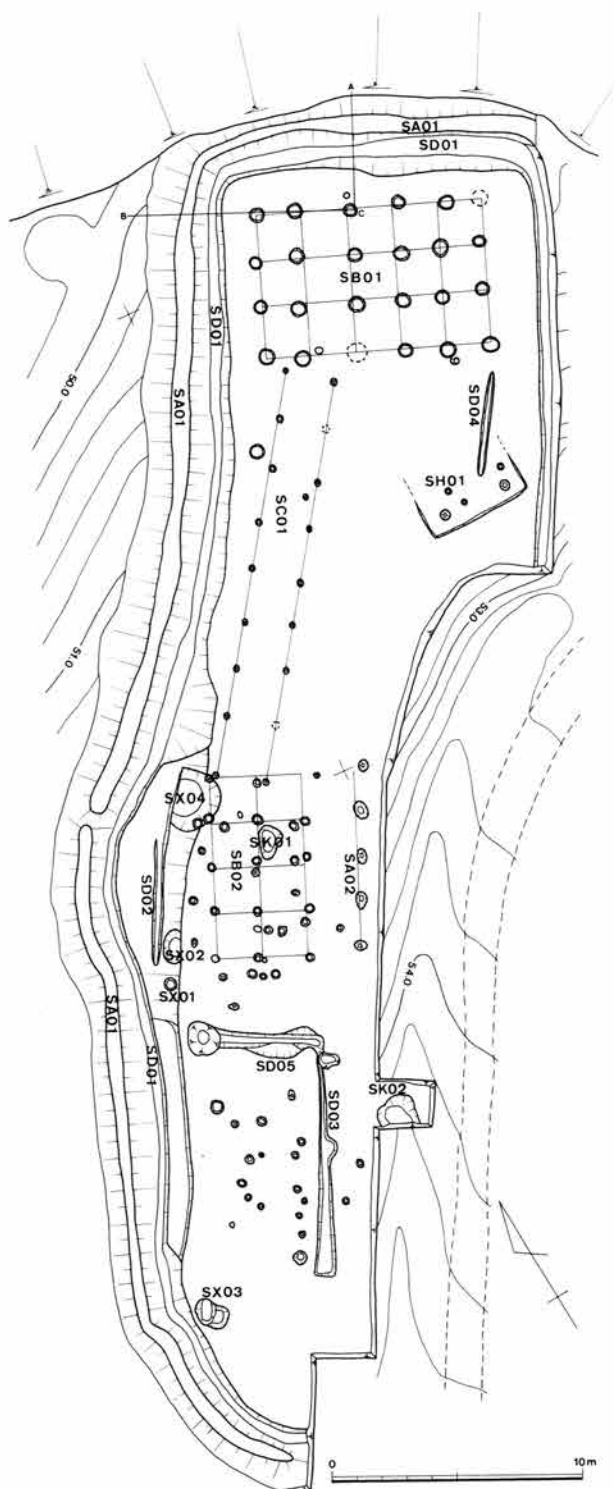
2棟の掘立柱建物を連結するかのような2本の平行するピット列である。各ピット間もピット列間も間隔は1.9mで、7間(13.3m)ある。一応、二重の塀と考えておきたい。あるいは、推測の範囲を出ないが、渡り廊下のような上部構造であったのであろうか。

## (5) 土塁SA01

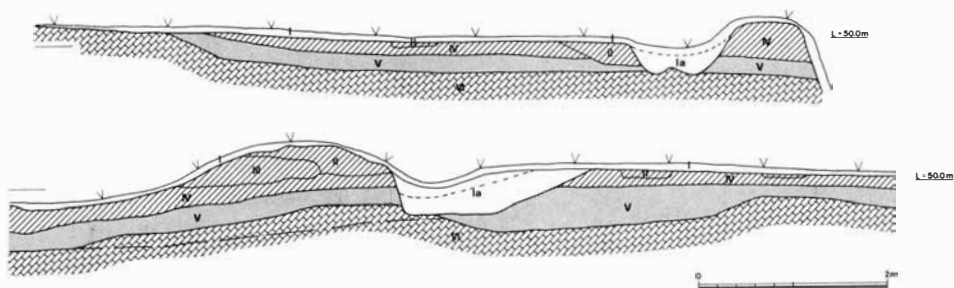
建物等がある平坦部分を巡る土塁で、北と西を限っている。西辺部分の外側からの高さは0.6mであるが、内側に沿う溝の底からは0.75mを測る。上面幅1.5m・下面幅3mである。北辺部分は、やや規模が小さくなり、高さ0.2m・上面幅0.7m・下面幅1.3mを測る。北辺13m・西辺52mで、総延長65mである。西辺の中央部では外側に石を積んでおり、石塁の様相を呈している(第273図Ⅲ, 図版第125-1)が、部分的なもので、大半は内側の溝から掘りあげた土を積んだものであろう。

## (6) 空堀SD01

土塁SA01に沿って掘られた溝であるが、自然の高まりが残る東側においても、北辺



第272図 城ノ尾城館跡平面実測図



第273図 土塁・空堀断面実測図(上：C-A, 下：B-C)

I：表土，II：暗黄褐色礫混じり粘質土層，III：礫層，IV：II層に同じ，  
V：黒褐色粘質土層，VI：地山（黄褐色礫混じり粘質土）

から直角に南下して16m掘られている。総延長81mを測る。土塁とは逆に北半部で幅広く(1.5m)，また深く(0.3m)，南半部(図版第125-2)はやや小規模になっている。

#### (7) その他の遺構

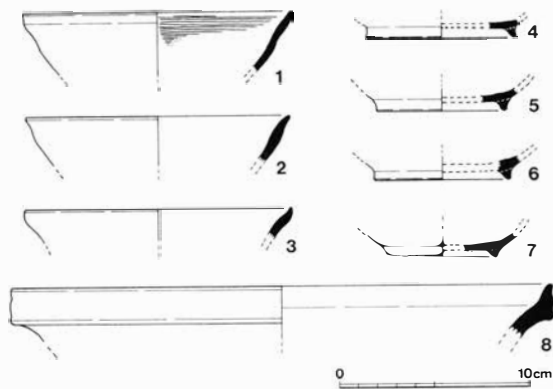
ピット群・溝(SD02・SD04・SD05)・土坑(SK01・SK02・SX01・SX03)などがあるが，性格不詳である。椀瓦などの出土遺物から見てSD05とSD02は，近代以降のものであろう。

### 4. 出土遺物

遺物は，空堀SD01から10数点の瓦器の小片が出土しただけで，2棟の建物跡を検出しているだけに，いかにも淋しい。実測できた資料は第274図1-7に示したものに限られる。いずれも瓦器碗で，伊野氏の丹波中世土器編年のVI期の特徴を示すものが主で，いくつかはV期にさかのぼる。つまり，13世紀前半から後半に位置付けられる資料である。なお，8は当遺跡の北の平地で表面採集した須恵器の鉢で，14世紀のものである。

### 5. 小 結

城ノ尾城館跡は，建物2棟と柵列及びそれを巡る土塁と空堀からなる。空堀が，土塁の内側に沿っている点や，建物が総柱である点など平安時代末期から鎌倉時代の遺構であると考えられる。一方，少量ながら，空堀から出土した瓦器がおよそ13世紀中葉を前後する時期の遺物であることなどから，



第274図 出土遺物実測図

(1) 城ノ尾城館跡

この城館は鎌倉時代中期に営まれたと結論できよう。

この城館の性格については、遺物の量が非常に少なく、また質的にも瓦器碗に限られることなど、あまり生活の臭いを感じることができず、また、かなり短時間しか利用されていなかったようである。上記したように(37頁)、旧山陰街道を見下ろす当地の眺望のよさを考えれば、見張りなどの機能を持つ一時的な築造物であったのではなかろうか。

(小山 雅人)

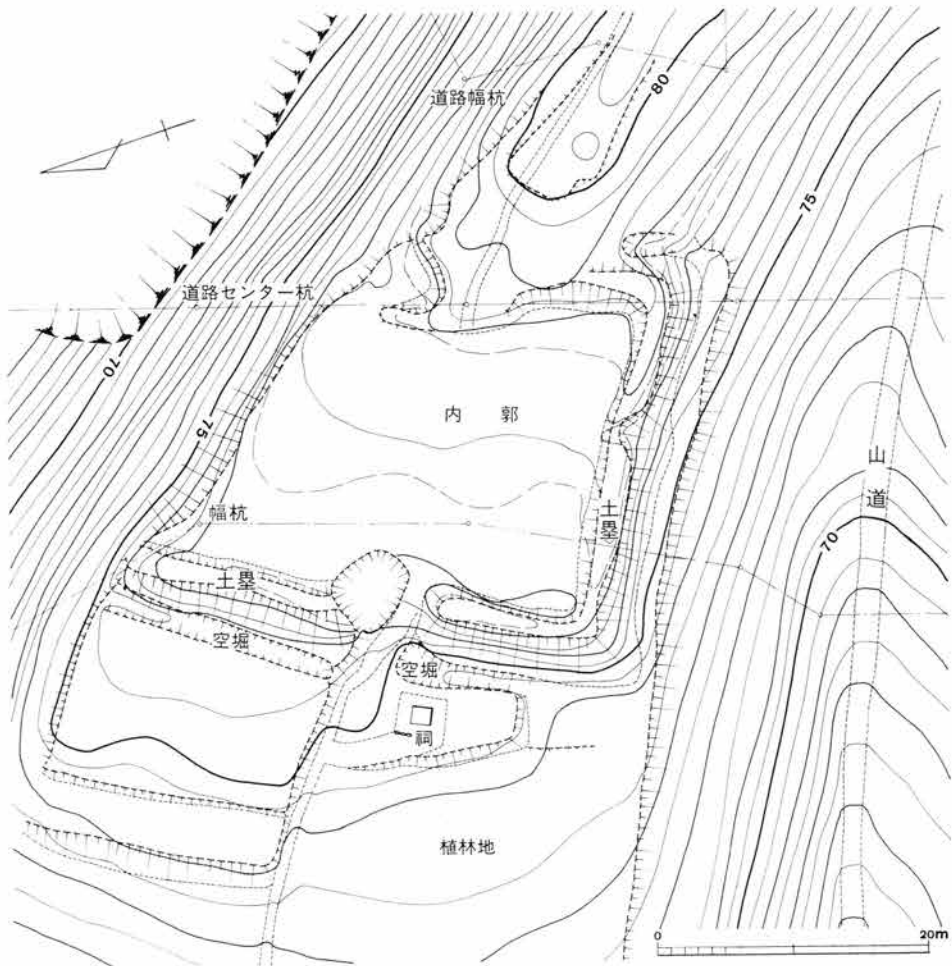


## (2) 後青寺城館跡

### 1. 位 置

後青寺城館は、竹田川の一支流である大内川が形成する山間の狭隘な谷平野に位置する。この谷平野には、幾本かの丘陵支脈が派生するが、本遺跡は、南東から北西にのびる丘陵の尾根先端部に近い標高75m付近に立地する。当地点の北側、約150mの丘陵部には、平安時代から近世初頭に至る城館跡である大内城が所在する。

調査地周辺の地形は、北東側は急峻な崖状を呈しているが、南西側は、浅い谷地形を形成するのみで南側に隣接する丘陵と画されている。調査地の周辺は、杉・檜等の植林地および雑木林である(第275図)。



第275図 調査地周辺地形図

今回調査の結果、主要調査地である「寺跡」調査地では、周囲に土塁を巡らす城館跡と想定される遺構が確認された。また、尾根続きに当たる丘陵地から、木棺直葬の内部主体をもつ古墳が1基検出された。調査に当たっては、城館跡地を「西地区」、古墳検出地を「東地区」と呼称した。なお、古墳(後青寺古墳)については、城館跡の調査と一体のものであるが、遺跡の性格上、項を改めて記述した。

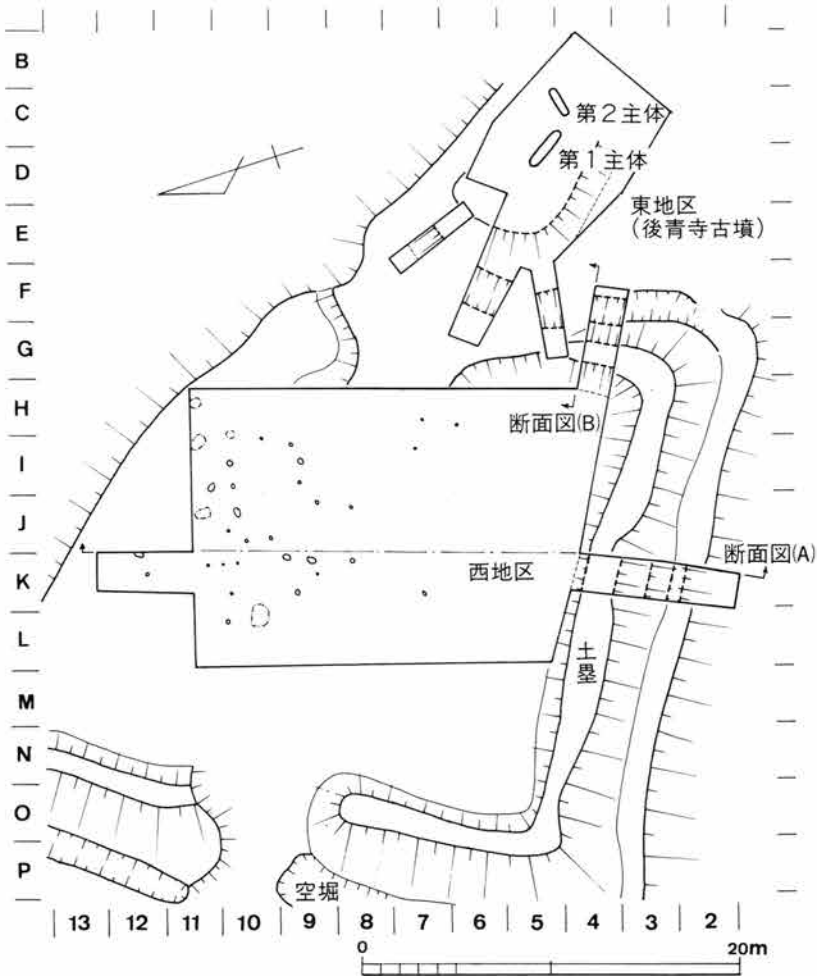
## 2. 調査の経緯

今回の調査地の周辺には、「後青寺」および「後正寺」の小字名が存在しており、地元では同名寺院の存在が伝えられてきた。当地方の地誌を記した『丹波志』は、寛政六年(1794)に福知山藩士古川茂正と篠山藩士永戸貞著の共著になるものであるが、「卷之八古跡 天田郡」の条に、「出雲路山後青寺古跡 大内村」が記載されている。「天正ノ比退轉古跡 南ヨリ西へ回リテ三十間斗掘ヲ構へ 其内少シ高シ 寺跡ヨリ十五間斗西ノ裾ニ 古ノ本尊薬師 立像一尺二寸斗 堂二間四方西向 境内凡十五間四方」の記事があり、今回調査地を、その故地に求める意見がある。しかし、今回の調査によって先に記したように、寺跡というよりも城館跡の可能性が考えられるようになった。ここでは、本題に示したように「後青寺城館跡」と呼称し、調査時点での遺跡名を変更しておきたい。

## 3. 調査地の概要と調査方法

この城館跡は、丘陵の稜線上に位置しており、地形に制約されながらもその傾斜変換点を巧みに利用して、約730m<sup>2</sup>程の面積を持つほぼ台形状の平坦面(内郭)を形成している。また、城館跡に通じる山道の両側にも階段状の平坦面が遺存する。城跡内郭の西側および南側と、一部ではあるが丘陵高位にのびる東側には、土塁が巡っている。北側辺については、土塁を欠いているが、このか所は、小屋ヶ谷川が形成した急傾斜の崖になっており、防御面からみて土塁は省略されたものと思われる。丘陵の登り口に当たる西側土塁の中央部には、内郭に通じる入り口(虎口)を設けている。虎口は、幅約4mを測る。この西側の土塁は、城跡の正面を形作るもので、他の辺に比べ規模も大きく、遺存状況も良好である。同部分では、外側にめぐらされた空堀と土塁上縁部との比高差は、約6mを測る。周辺土塁線の規模は、西辺で約34m、南辺で約26mを測り、城跡全体の平面形は先に述べたように西隅を直角とする台形状を呈している(第276図)。

調査に当たっては、まず道路予定敷のセンター杭を利用して、調査地全域の地区割りを行った。調査地は、3m方眼に区画し遺構の整理、遺物取り上げの際の最小地区単位とした。次に、城内館を縦断する試掘トレンチを十字に入れ、掘削を開始した。その後、発掘区域



第276図 調査地位置図及び地区割り図

を拡張し、調査の範囲外になる西側部分を残し、ほぼ全域を掘り下げた。

#### 4. 検出遺構

調査の結果、地表下約10～20cmで地山面(灰黄色土)が表れ、浅いところでは、腐植土をはずした段階で地山に達した。

城館内郭部からは、今回の調査により多数の小ピットが検出された。ピットは、特に、調査地の北側部分で密に検出された。いずれも直径10cm内外の小規模なものであり、埋土には木根等の腐植土が入るものもあった。これらのピット状遺構の多くは、掘立柱建物等の柱穴跡と考えるより、埋土の状況から判断して樹木等の抜き取り跡と判断した。

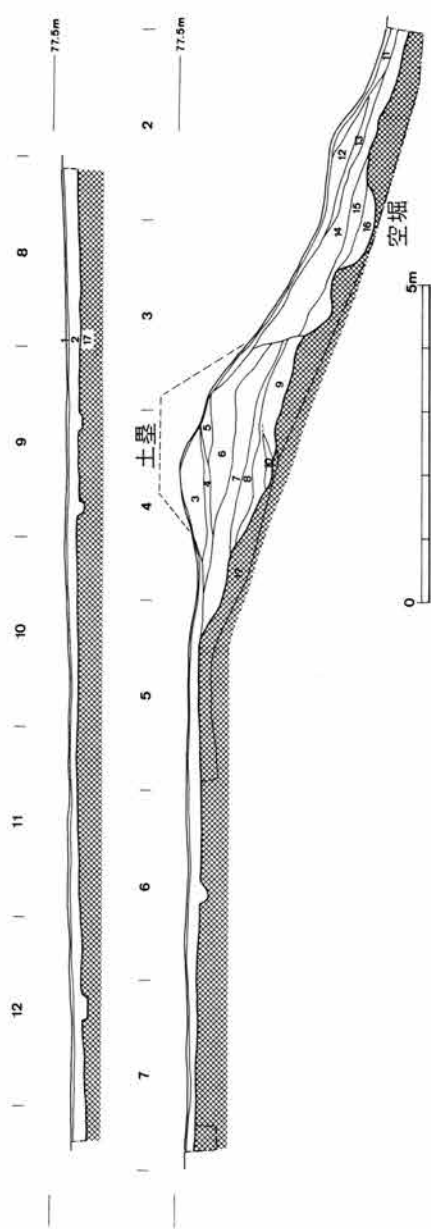
今回の調査では、建物跡等の遺構は検出することはできなかったが、これに関しては、

調査前の測量時に所々で石材の破片や集石を確認しており、或いは、これらの石材を台石とした小建物が存在した可能性がある。石材そのものは、既にもとの位置からは遊離した状況であった。

### 土塁の調査

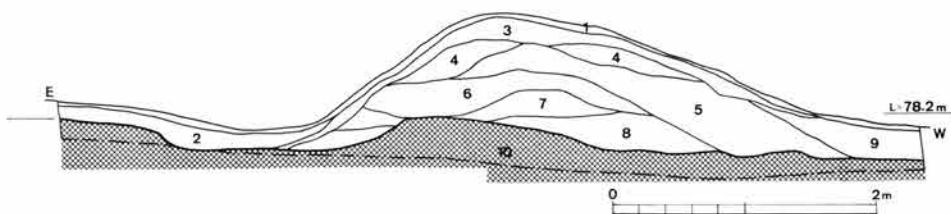
土塁は、築成状況を知るために南辺および東辺の2か所で断ち割りを行った(第277図)。断ち割り調査の結果、南辺土塁の外側斜面の下段で幅約1m・深さ50cm前後の空堀状遺構を検出した。この空堀状遺構は、現在、西辺(城館正面)土塁の外側に遺存する空堀に接続していくものと思われる。土塁の築成は、灰褐色ないし暗褐色の山土を、本来の地山斜面に沿って30から40cmの厚さをもって縞状に積み上げており、上段では、ほぼ水平に積み上げている。西辺土塁の現状では、斜面の傾斜はあまりきつくないが、断ち割り断面の観察結果では、下段の堆積は上部からの流土によるものと判断され、本来の土塁外斜面は、かなりの急傾斜をもっていたことがわかる。

なお、東辺土塁断ち割りの際、上部の築成土中から、ほぼ完形に近い古墳時代の須恵器杯身が2点出土した。これらの須恵器は、別項で述べた後青寺古墳等に伴うものと考えられる。すなわち、城館築造以前にこの丘陵部に数基の古墳が存在し、それらを削り取って本城館が作られたものと想定される。また、城館の築造に遡る遺物として、弥生土器片が数点採集されているが、それらが伴う遺構については、今回の調査範囲内からは検出され



第277図 調査地土層断面図 Aライン

1. 腐植土(表土)
2. 黄褐色土
3. 灰褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 灰黄褐色土
6. 淡黄褐色土
7. 暗褐色土
8. 黒褐色土
9. 灰黄色土
10. 黄褐色土
11. 黄色土
12. 暗黄褐色土
13. 暗茶褐色土
14. 暗褐色土
15. 暗黄褐色土
16. 暗褐色土
17. 灰黄色土(地山)
- 3~10. 土塁築成土
18. 掘埋土



第278図 調査地土壘断面図 Bライン

1. 腐植土(表土) 2. 暗褐色土 3. 灰褐色土 4. 暗茶褐色土 5. 淡赤褐色土  
6. 淡褐色土 7. 淡黄褐色土 8. 茶褐色土 9. 暗黄褐色土 10. 灰黄色土(地山)

なかった。

## 5. 出土遺物

前節で述べたように、調査地からの遺構・遺物の検出はごく少量であった。出土遺物の内、城館の時期に伴うと思われるものは、

瓦質のすり鉢・美濃焼天目茶碗・青花碗等の陶磁器類がある。陶磁器以外のものとしては銭が1枚出土している(第279図)。遺存状態が悪く、文字等不鮮明であるが、中国北宋時代の景德元宝(1005年初鑄)と思われる。このほか、弥生土器・須恵器の杯等があるが、直接城館に関係するものではない。以下図化(第280図)できたものについて記述する。

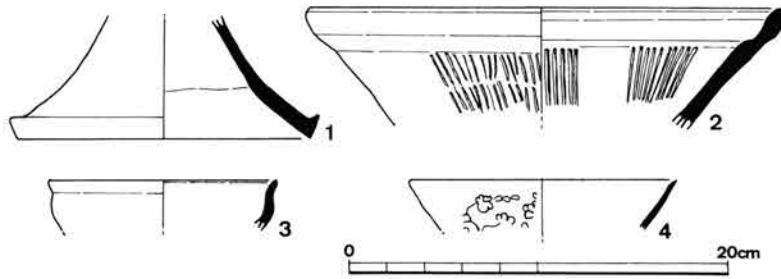


第279図 景德元豊拓影

1は弥生土器の高杯脚部の破片である。脚端部に面をもつ。器壁は摩滅が著しく調整等不明である。9L区で出土した。2は瓦質のすり鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚し、内面に凹帯を1条巡らす。体部内面には楕状の工具による沈線(10条/3.2cm)が施されている。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は縦方向の粗いタタキの後ユビオサエする。表面は黒灰色、断面は灰白色を呈し、焼きはやや甘い。復原口径22.7cmを測る。11H区出土。3は美濃焼の天目茶碗である。内外面とも暗褐色の釉を施す。復原口径12cmを測る。4は青花碗で、全面に釉がかけられており、体部外面にコバルトによる青花文を施す。復原口径14.2cmを測る。11H区で出土した。なお、土壘断ち割り時出土の須恵器杯身については、後青寺古墳の項でふれた。

## 6. 小 結

先に述べたように、本遺跡は外形からみて防御的な色彩が濃く、その性格については、当初遺跡名として掲げた「寺跡」とするよりも、「城館跡」に比定するのが的をえているものと思われる。



第280図 出土遺物実測図

本城館跡の築造時期については建物等の遺構が検出されず、また、出土遺物等も時期がわかる資料が少なく不明な部分が多いが、ほぼ近世初頭(16世紀後半頃)に築造されたものと想定される。

本城館跡のように、30から40m四方の土塁と空堀によって画された、いわゆる単郭構造をもつ城館跡は、戦国期に諸国におびただしくつくられている。この六人部地域でも現在のところ7～8か所程度が知られている。これは、ほぼ現行の大字単位に1～2か所の割合で存在することになり、その密集度が窺える。これらは、日常の居城とするには内部空間が狭く、おそらく、戦時における臨時的な防御基地として使用されたものと思われる。今回、内郭部分から、顕著な建物跡等が検出されなかったのも、恒久的な施設は作られていなかったことによるものと考えられる。

この種の城館跡の築造者については、従来、文献史学の方面からの研究により百姓名等の階層が想定されてきた。しかし、発掘調査例が少なく、構造・築造時期等不明な部分が数多く残されている。今後、その母体となった集落の調査を含め、地域史のなかでこれらの城館がいかなる役割を果たしたか検討すべき課題は多い。(辻本 和美)

### (3) 仁田城跡

#### 1. 調査概要

仁田城跡は、福知山市宮小字城山に所在する。土師川右岸の中位段丘上に立地し、土師川と竹田川の合流点を中心とした平野を見渡すことのできる極めて眺望のよい場所にある。

竹田川は、日本で最も低い分水嶺を経て加古川に通じ、また土師川は、由良川と合流して日本海に至る河川である。従って、両河川は、播磨地域と日本海側を結ぶ重要なルート  
の中央部といえ、この両河川が合流する当地周辺は、交通の便に恵まれていた。また当地  
周辺は、平安時代以降「六人部荘」という荘園となり、経済的にも重要なところであった。

調査は、まず100分の1の縮尺による城館地形測量図の完成を急ぎ、その後、工事により削平される部分である城跡東側空堀及び土塁の一部の調査を行うことにした。調査地内の掘削に先立ち、4mごとの地区割りを行い、空堀に直交する形のトレンチを設けて土層等の観察をし、その後、人力により全面的に調査地の掘削を実施した。

発掘・測量調査を通じて、以下のようなことが明らかとなった。

仁田城跡は、単郭の形態をなす。その主郭部の規模は、空堀を含めた西辺が60m、東辺が推定45m、中央部の東西が43mの台形状を呈する。この郭は、北辺土塁中央部でわずかに南へ張り出す痕跡があり、東西2か所に区割りされていた可能性がある。

土塁は、調査範囲の関係上一部しか掘削ができなかったが、現地地形からみると東辺で上部幅1.4m、下部幅8mで、空堀底部から土塁上面までの比高差は4.4mを測る。

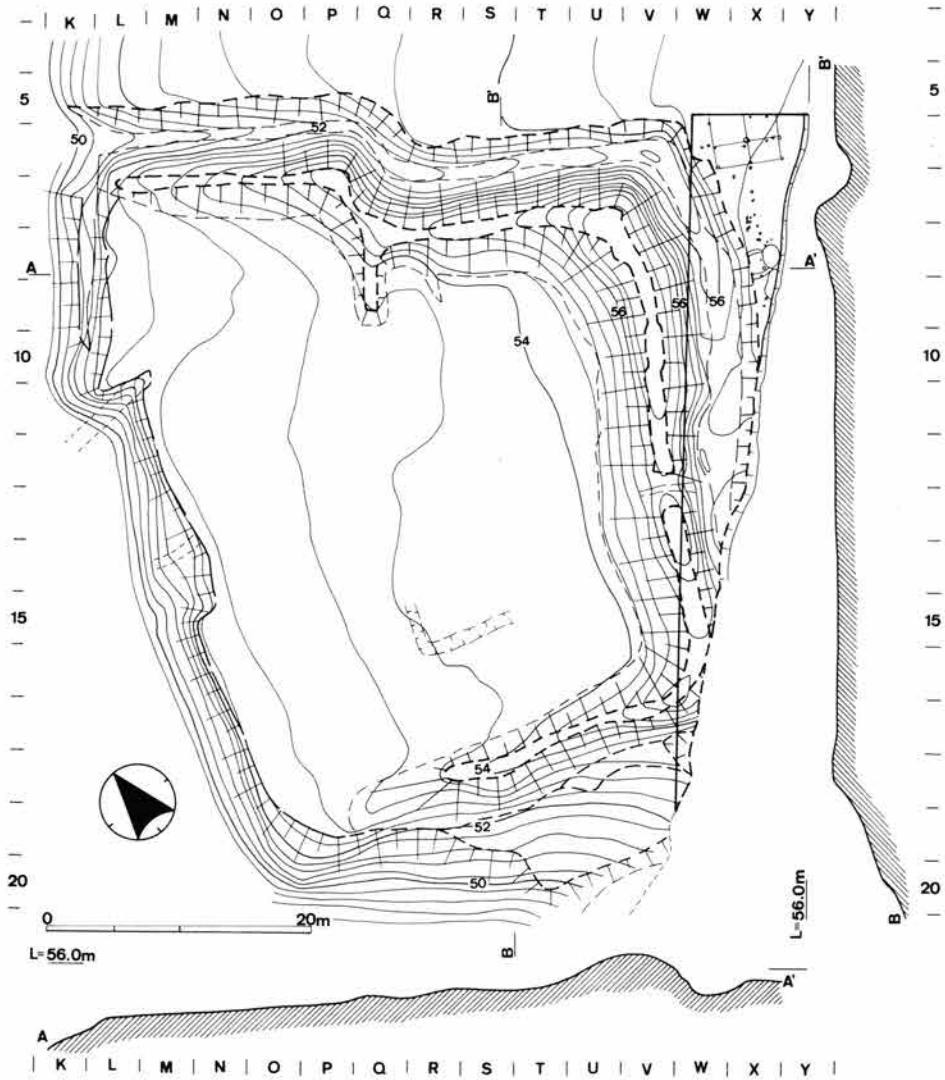
空堀は、東辺のものを調査したが、その結果、上面幅5～6.7m、底面幅2～3.2mの規模で断面は逆台形状を呈する。

土塁・空堀は、西辺を除いた三方に築いたものらしく、西辺には見られない。西辺は平野部に面し、前面部ともいえるものであるが、急角度で平野部へと下がる斜面が防御の要を足していたものであろうか。もちろん、柵・壁などの防御施設も予想される。また西辺北端では、一部犬走りとも考えられる平坦面部が地形測量図から読み取れる。

これらの土塁・空堀は、北辺・東辺では明瞭であるが、南辺においては不明瞭となる。しかし、南辺空堀部は、一部掘削確認しており、土塁も地形測量図で明らかなように、西端まで存在が認められる。

なお、北辺の土塁・空堀は中央部で屈曲しており、横矢を意図したものと推測される。

入口については、明確には言えないが、現在、道の通じる西辺か東辺にあったと推測されるが、さらに、背後にせまる東辺側の道は比較的新しいと考えられるので、入口は西辺にあったものであろう。なお、地形測量図にみられる東辺土塁中央部の道は後世の削平に



第281図 地形測量図

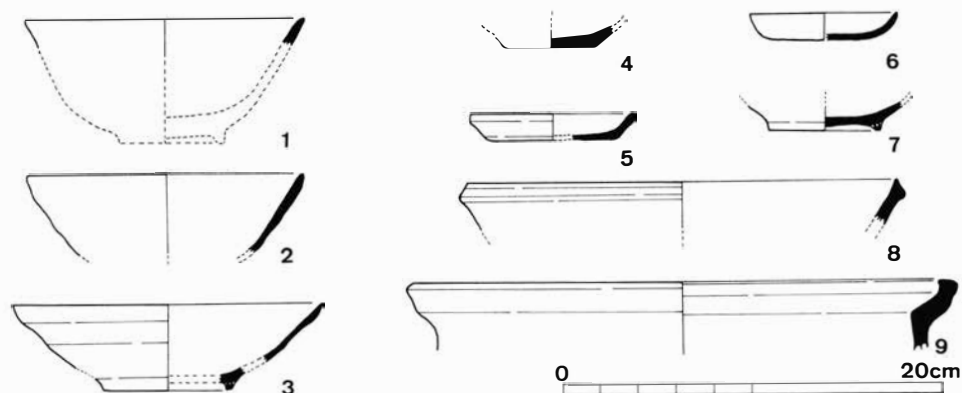
よるものである。

調査は東辺空堀のほか、その外側平坦部についても行った。その範囲は小規模であるが、数個のピット並びに土壇を検出した。また、鎌倉時代の掘立柱建物跡(東西2間・南北2間以上)と考えられるもの1棟と空堀に平行したピット列(柵)を検出している。

出土遺物は、整理箱4箱分出土した。種類は土師器皿、須恵器甕・すり鉢、瓦器椀・皿・鍋、龍泉窯系青磁椀などを中心として、若干ではあるが弥生土器片やチャート剥片、近世の丹波甕すり鉢片、染め付け、瓦などが出土した。

図示した個々の遺物の概要は、観察表に譲るが、12世紀末から13世紀前半にかけての製





第282図 出土遺物実測図

品が多い。なお、南側溝で出土した土師器皿は底部を糸切りしたと思われるもので、古い形態を示す。また、共伴した須恵器鉢(第282図8)は、東播系のものであり、窯跡群の編年観<sup>(注65)</sup>によれば12世紀前半に比定しうる。したがって、12世紀前半頃からこの地が使用されたことになる。

今回の出土遺物は、城館の内部ではなく外部のみで、これらが城館の成立時及び機能時を示すものではない。現段階では、成立以前の12～13世紀前半に人々が居住しており、掘立柱建物や土塚を壊して城館が造営されたと考えられる。

調査した空堀からは、近世以降の瓦類も出土した。この空堀は、掘削前、東半部が自然堆積のみでU字状に窪んでいたが、南半部は全く埋められていた。南半部は、この瓦類などが出土することから、近世以降に埋められたものと考えられる。

## 2. 小 結

以上、調査についてこれまで述べてきた。ここでは、当地域において精力的に中世城跡がまとめられている『福知山市史』<sup>(注66)</sup>を参照して、当地周辺の様相を概観しておきたい。

仁田城跡周辺には、室町時代に築造されたと推定される城跡として、南から田野城跡(福岡城跡)、後青寺跡、大内城跡、仁田城跡が知られる。これらの城跡の位置関係は、大内城跡を中心に南約2kmに田野城跡、北500mに仁田城跡、南隣に後青寺城館跡と非常に近接した位置にある。

田野城跡は、土師川と竹田川合流点直前の、竹田川南岸の急な崖上に位置する。城館の規模は、幅約40m・長さ約150mの広さで、東西に3つの郭が並ぶ。川に面した最西端の郭が「御居間屋敷」(『天田郡志資料』)と伝えられている主郭部と推定されており、東方に連なる二つの曲輪が「二ノ曲輪」・「三の曲輪」と推定されている。

『丹波志』の「古城部」には、「古城主兎ノ木縫殿介」がみえ、藤井善布氏は「兎ノ木」が「小野木」の転訛と考えられることから、後に福知山城主となった小野木縫殿介重勝の一族と想定されている。さらに『丹波志』には、「悪右エ門(黒井城の荻野悪右衛門)ニ被亡、菩提寺ハ大内後青寺也」とあり、大内地区との関連が指摘できる。

大内城跡は、大内集落の東側丘陵上に位置し、通常「平城」と呼ばれていたところである。東西約400m・南北約200mの城域と推定される。城域の南と北は崖が切り立っており、東西に郭が並ぶ構造である。このうち、最も高い東端の郭が主郭部と推定され、西へ更に三つの腰曲輪が続くという広大なものである。主郭部とした郭は、東側に、三条の土塁と空堀を有するというものである。

この大内城は、主郭部については、昭和57年度から当センターが発掘調査を行ったが、平安時代末に築造され室町時代に今の姿となったと考えられる。館から城への変遷を考える上でも貴重な城跡である。平安時代、豊かな六人部荘を背景にした荘園関係の館跡に始まり、『丹波志』にある土豪級の「堀氏」の城館と変遷していったと推定されている。

後青寺城館跡は、『丹波志』にみえる「後青寺」という寺院と推定されていたため、発掘調査が当センターにより実施された。しかし、寺院に関連する成果は得られず、結果としては大内城跡に隣接する戦乱時等の緊急時において立てこもった砦、または館跡と推定されている。『丹波志』にみえる「後青寺」はこの丘陵登口の平坦部に推定されている。

仁田城跡は、大内城跡から北へ約500mに所在する。調査の概略は先述したとおりであるが、『丹波志』には、「古主仁田城主和泉守」とあり、当地の土豪クラスの者と考えられる。さらに『丹波志』には、「長田村高橋ニ被討ト和泉守妻ハ大内村ニ逃ケ来リ弁天ノ前ニテ被討今ニ墓有陵墓ノ部ニ出ス」とあり、大内地区との何らかの関連、少なくとも敵対関係はなかったと思われる。

以上、文献等に若干みうけられる仁田城周辺城跡の記録をみると、すべて大内地区の記載があり、大内城跡との関連が推定される。竹田川・土師川東岸の集落範囲の中で、大内城を中心として、これらの城館のつながりの可能性が指摘できるのではないか。しかし、土師川を経た対岸の多保市城と大内城とのつながりは、小地域の中でのまとまりにすぎず、一つの城を中心として支城網をはり巡らせていた地域に比べ、大きな力を有していたとは考えられない。

(藤原 敏晃・伊野 近富)

## 第4章 結 語

近畿自動車道舞鶴線第7次工事区間に所在し、発掘調査された遺跡は、多時期にわたる複合遺跡が多い。ここでは、各遺跡の遺構・遺物を時代と種類に分類して、6か年間の調査成果をまとめておきたい。自動車道予定地は、当該地を南北に貫通し、10本余りの東から西にのびる尾根の丘陵中腹あるいは先端を通っている。遺跡はこれらの丘陵のほとんどに存在し、『京都府遺跡地図』第2版に登録されている多保市・宮・大内の3地区に所在する27か所の遺跡のうち19か所が全面あるいは部分的に発掘調査の対象となった。以下の記述にあたっては、煩雑さを避けるため、これらの遺跡が立地している10本の尾根を北から順にA～J丘陵と仮称しておきたい。多保市には、A(多保市城跡D-2・3地点)、B(多保市城跡D-1地点)、C(多保市城跡A地点)、D(多保市城跡B・C地点と薬王寺古墳群)の4か所の丘陵がある。土師川を渡った宮地区には、E(城ノ尾)、F(ケシケ谷・仁田城、及び大内地区に属する男塚・姫塚の両古墳)の2丘陵がある。そして大内地区には、G(奥谷西)、H(大内城)、I(後正寺)の各丘陵と、やや南に離れてJ(山田)の合計4丘陵がある。

### (1) 弥生時代～古墳時代初頭

今回の調査結果による限り、大内・宮・多保市地区の最古の遺跡は、弥生時代中期後半の大内城下層遺跡・奥谷西遺跡・ケシケ谷遺跡・宮遺跡・城ノ尾遺跡・多保市城跡D-1・D-2地点である。竪穴式住居跡は大内城下層で2棟、ケシケ谷遺跡で7棟、奥谷西遺跡で3棟、宮遺跡で2棟、多保市城下層で4棟以上を確認しており、A・B・E・F・G・Hの6か所の丘陵上で弥生中期の集落が営まれていた訳である。一方、墳墓としては、E丘陵の宮遺跡の方形周溝墓が挙げられる。

弥生時代後期の遺構・遺物が出土したのは、前代から続く奥谷西遺跡とケシケ谷遺跡であり、竪穴式住居跡などが検出されている。他に城ノ尾遺跡からこの時期の遺物が出土しているが、明確な遺構を伴っていない。つまり、後期になると丘陵上の集落は半減し、(E)F・Gの2～3丘陵で認められるだけである。

畿内の庄内式から布留式最古段階に並行する古式土師器が出土する弥生終末から古墳時代初頭の丘陵上の遺跡は更に少なく、わずかに城ノ尾遺跡で竪穴式住居跡が1棟と焼土坑が2か所で検出されているだけで、おそらく人々は低地に集落を営んでいたのであろう。

## (2) 古墳時代

当地区の古墳時代前期・中期の様相は不明とせざるを得ない。福知山地域では、古墳時代の前期には、豊富谷丘陵遺跡や広峯古墳群に見られるように、弥生終末期以来、台状墓の系譜を引く方形墳を尾根上に点々と営んでいる。中期には、広峯15号墳という当時期の北丹波では例外的な前方後円墳や、八ヶ谷古墳や妙見1号墳のような大・中規模のやや畿内色を持つ方墳も出現するが、これら少数の首長系列墳を別にすれば、相変わらず台状墓系の古墳を造り続けている。しかし、これら布留式土器や古式須恵器を伴う時期の古墳や集落は、少なくとも自動車道予定地の丘陵部には営まれなかったようである。集落は、調査地よりも低地にあったとしても、古墳を造るような首長がいなかったのかも知れない。ただ、竹田川を挟んで大内集落の対岸には庵戸山古墳群の11基が確認されており、この中に中期あるいは前期にさかのぼる古墳がある可能性は残る。

古墳の変遷から見れば、中期末から後期初頭(当地域への横穴式石室の導入まで)の須恵器で2～3型式(TK47→MT15→TK10)、およそ30～40年程度の期間であろうか、この時期は、福知山盆地の西半部の福知山では大きな画期になっている。東半部の綾部市域では中期の中頃以来、古墳は前方後円墳か円墳になっているのに対し、福知山市域では、上述したように、中期初頭の孤立した前方後円墳、広峯15号墳を除いて方墳を作り続けていたが、後期末を前後する頃、綾部市の菖蒲塚・聖塚の伝統を引く大方墳が福知山市の妙見1号墳を最後として消え、弥生後期以来の豊富谷の台状墓系方墳群が終息し、中坂古墳群も方墳から円墳に変わる。この時期に新たに始まる向野古墳群は円墳であり、広峯15号墳以来1世紀ぶりに福知山に築かれた前方後円墳稲葉山10号墳も後期初頭である。

発掘調査による限り、この地域の第2の盛期は古墳時代後期である。まず後期初頭の古墳としてI丘陵の後青寺古墳とD丘陵の薬王寺古墳群の合計6基を調査した。

後青寺古墳は、木棺直葬の主体部を持つ円墳であるが、薬王寺1～5号墳では、主体部は箱式石棺→木棺直葬、墳形は方形→円形という推移が見られ、変換期の福知山の趨勢に合っている。ただ、薬王寺3～5号墳の箱式石棺は、この時期丹後の網野町に数例あるほか、中丹地域では他に例を見ないが、兵庫丹波の氷上郡春日町の松の本古墳群に発掘例があり、現在は県境に隔てられているとは言え、隣接するこの地域との関係が注目される。

調査例の少ないこの時期の集落として、上記の空白期間を経て再び営まれたF丘陵のケシケ谷遺跡・G丘陵の奥谷西遺跡と、新たに加わったI丘陵の洞楽寺遺跡の3か所が挙げられることは興味深い。竪穴式住居跡の他にケシケ谷遺跡では掘立柱建物跡も検出されている。これらの集落は古墳時代後期初頭のごく一時期のものであったらしく、6世紀の中葉近くになると、丘陵から集落はなくなり、新たに横穴式石室を持つ古墳が築かれる。綾

部・福知山地方の横穴式石室の導入の時期は、須恵器のTK10段階であり、この地区は、むしろ早い方に属する。まず、I丘陵に小屋ヶ谷古墳と洞楽寺古墳が相次いで造られ、6世紀の終わり頃にはE丘陵に城ノ尾古墳が築かれる。そして、これらの横穴式石室では、7世紀に入る頃まで追葬が行われている。F丘陵の男塚古墳は当地域では最初で最後の前方後円墳であるが、横穴式石室を持ち、おそらくこの時期の最初に造られた盟主墳であろう。この土師川流域の前方後円墳の出現が横穴式石室の導入と一致することは、福知山では他にも和久川流域の妙見11号墳、牧川流域の牧正一古墳の例と軌を一にしているのであるが、その直前の一時期に現れた奥谷西遺跡などの丘陵上の集落は、何を物語っているのだろうか。

### (3) 奈良時代

小屋ヶ谷古墳や城ノ尾古墳の横穴式石室に最後に追葬が行われたのは、7世紀初頭の飛鳥時代に及んでいる。この時期以降、大内や宮地区の丘陵では平安時代後期まで再び長い空白期間があるが、多保市地区で奈良時代の遺構や遺物が出土している。D尾根を降りた低地にある多保市遺跡では8世紀後半の竪穴式住居跡が検出され、この地域での竪穴式から掘立柱への住居の変化の地域差や過渡的期間の時間幅について再考を促すことになった。また、A尾根の多保市城跡D-1・2地点には奈良時代から平安時代前期の集落があり、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が検出されているが、この谷の奥にある同時期の多保市廃寺との関連が注目される。

### (4) 平安時代後期～南北朝時代

大内・宮・多保市地区の第3の盛期は、12世紀から14世紀の300年間である。この時期の遺跡は、城館と古墓(群)で、弥生時代や古墳時代の遺跡と複合していることが多い。

城館跡として、北から多保市城跡のA・C・D尾根、E尾根の城ノ尾城館跡、F尾根の仁田城跡、それにG尾根の大内城跡の4か所がある。大内城跡は、12世紀から16世紀に及ぶ全国的にも有数の遺跡であり、既に報告書が刊行されている。仁田城跡では鎌倉時代の掘立柱建物跡や多数の土師器・須恵器・輸入陶磁器が出土している。城ノ尾城館跡も鎌倉時代に位置づけられる。多保市城跡の城としての施設は鎌倉時代後期から南北朝時代に確立されたらしい。以上の城館群は、中世前半期の例として発掘調査された数少ない例である。特に大内城や城ノ尾城館は、南北朝期以前の城館の構造を示す好資料である。また、大内城のみならず、多保市城・仁田城などこの時期の遺跡としては、他の地域に比べて、例えば中国製陶磁器の量が多いことなど、都と直結していた中世六人部荘の豊かさの一端をよ

く示している。

古墓として最古の例はH・I 両尾根に挟まれた後正寺古墓で12世紀中頃に位置づけられ、E尾根の宮中世墳墓は13世紀前後、D尾根の多保市城跡とB地点とI尾根の洞楽寺古墳の古墓は13世紀末であり、G尾根の大内城墳墓とJ尾根の山田館墳墓群は14世紀に入る。これらの古墓は、およそ200年間のほぼ同時代の同一地域の例として、その形態を比較検討できる貴重な資料であり、当時の葬送の風習や更に身分階層の解明の手掛かりとなった。

#### (5) 戦国時代

南北朝時代以降、狭義の室町時代(15世紀)の資料は少なく、断片的な遺物しか出土していない。続く中世末期に位置づけられる遺跡には、B尾根の多保市城跡D-1地点、F尾根の仁田城跡、G尾根の大内城跡の第4期、I尾根の後青寺城館跡の4か所がある。いずれも全国各地に数多く分布する戦国時代の城塞である。部分的な調査が多く、全容が知られないが、この地区では上述したような中世前半期の城館を改変して、土塁・空堀・郭などを構築したものが多くは注目してよいであろう。

なお、江戸時代以降の遺跡は、現在の集落と重なっているためか、今回の一連の発掘調査ではほとんど検出しなかった。

以上、多保市・宮・大内の3地区の2,000年間の歴史を、近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査の結果をもとにしてまとめてみたが、何度か空白の時代があり、また長期間にわたる集落遺跡もほとんどない。これは、この地域に人々が住んだり住まなくなったりしたことを示すのではなく、調査対象地のほとんどが丘陵地であり、ここで検出された遺跡は、人々がなんらかの理由で山の上に作らざるを得なかった施設の跡であろう。古墳や古墓は、現代の墓と同様に山に作って当然である。しかし、集落は弥生時代以来、米作りという生活基盤がある以上、現在の集落のように、水田に近く、しかも洪水に見舞われない程度の微高地、あるいは低い段丘に営むのが自然であり、G尾根を降りた西に広がる下地遺跡は、発掘調査はされていないが磨製石斧が出土しており、弥生時代の平地の集落の好例であろう。従って、この地域で山に集落遺跡を遺している弥生時代中期後半から後期前半、古墳時代後期初頭、中世前半期、そして戦国時代という時期には村の(恐らく一部の)人々が山上で生活をせざるを得なかったのであろう。西日本各地の高地性集落の例から見て、弥生時代の場合は、その理由が戦争という緊張状態であった可能性が高いと思われる。また、中世の城館の場合、鎌倉時代を中心とするその前半期と戦国時代とでは、多少性格が異なるかもしれないが、この地域をも巻き込んだ全国的な争乱状態にその理由を求めてよいで

付表9 近舞線関係遺跡消長表

年代 遺跡名	弥生		古墳		飛鳥 奈良	平安		鎌倉	室町	安土・江戸	
	-200	0	200	400	600	800	1000	1200	1400	1600	1800
宮遺跡		■			■					■	
ケシケ谷遺跡		■			■						
奥谷西遺跡		■	■	■	■	■					
大内城下層遺跡		■									
城ノ尾遺跡		■	■	■	■						
多保市城下層遺跡		■	■			■					
洞楽寺北遺跡											
洞楽寺遺跡					■						
多保市遺跡						■					
後青寺古墳					■						
薬王寺古墳群					■						
小屋ヶ谷古墳					■						
洞楽寺古墳					■				■		
城ノ尾古墳					■			■			
大内城跡								■	■	■	
城ノ尾城館跡								■			
後正寺古墓								■	■	■	
山田館跡								■			
大内城墳墓								■			
宮墳墓群								■			
後青寺城館跡										■	
仁田城跡								■		■	
多保市城跡										■	

あろう。

今後の課題として残しておいた横穴式石室導入期直前の丘陵上集落についても、あるいは同様の理由があったのかもしれない。とすれば、本書で報告した遺跡群は、多保市・宮・大内の3集落の2,000年にわたる墳墓の変遷史であると同時に、戦争の歴史でもあったのである。

(辻本和美・小山雅人・伊野近富・岩松 保)

- 注1 小滝篤夫「第3章 大内城跡周辺の地質」(『大内城跡』京都府遺跡調査報告書 第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注2 『福知山市史』第1巻 福知山市史編さん委員会 1976
- 注3 杉本 宏「Ⅲ3. 由良川中流域の群集墳の展開」(『丹波の古墳』I 山城考古学研究会) 1983. 12
- 注4 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』(兵庫県文化財調査報告書第16冊 兵庫県教育委員会) 1983. 3
- 注5 『東山遺跡』(大阪府文化財調査報告書 大阪府教育委員会) 1979. 3
- 注6 石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注7 山下潔己・中村孝行他『青野A地点発掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第2集 綾部市教育委員会) 1976等
- 注8 小山雅人『青野西遺跡』(京都府遺跡調査報告書 第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注9 注8に同じ
- 注10 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 鳥取県教育委員会 1978
- 注11 都出比呂志「竪穴式住居の周提と壁体」『考古学研究』22-2 1975
- 注12 住居跡8で触れた「特殊ピット」と称されるものである。
- 注13 近藤義行『森山遺跡発掘調査概報』(城陽市埋蔵文化財調査報告書 第6集 城陽市教育委員会) 1985
- 注14 検出状況は礫等が乱した形であるが本来はこれらが集まった形であることを予想して集石遺構とした。
- 注15 石器のトレースは(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの黒坪一樹氏の協力を得た。また、黒坪氏並びに同センターの田代弘氏には貴重な御助言を得た。
- 注16 藤原敏晃『奥谷西遺跡』(京都府遺跡調査概報 第13冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注17 寺沢 薫『六条山遺跡』(奈良県文化財調査報告第34集 奈良県立橿原考古学研究所) 1980
- 注18 中嶋陽太郎『日置遺跡発掘調査概要』宮津市教育委員会 1983
- 注19 森岡秀人「高地性集落」(『弥生文化の研究』7 雄山閣) 1986等に詳しい。
- 注20 『滝戸遺跡発掘調査(第1次)概報』富士宮市教育委員会 1977
- 注21 『向原遺跡』(『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1』第2分冊 神奈川県教育委員会) 1982. 10
- 注22 『日詰遺跡(第IV次発掘調査概報)』静岡県文化財保存協会 1978
- 注23 注10に同じ
- 注24 松井忠春・竹原一彦・増田孝彦「豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982



- 注25 奥村清一郎他『半田遺跡発掘調査概要報告書』 福知山市教育委員会 1975
- 注26 注2に同じ
- 注27 辻本和美『石本遺跡』（京都府遺跡調査報告書 第8冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987
- 注28 注25に同じ
- 注29 注27に同じ
- 注30 注8に同じ
- 注31 注10に同じ
- 注32 注8に同じ
- 注33 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古クラブ 1966
- 注34 前後というのはTK47期併行期のものを中心にやや古いもの新しいものを含むという意味である。
- 注35 注27に同じ
- 注36 移動式のカマドの使用を考えると他の住居跡とは時期を後にすると思われるが、土器などから6世紀の前半にはおさまるとされる。
- 注37 『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(2)』 兵庫県教育委員会 1979
- 注38 辻本和美「宮遺跡」（『京都府遺跡調査概報』 第1冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982
- 注39 岩松 保「福知山市大内周辺の新発見遺跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第5号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982.9
- 注40 注39に同じ
- 注41 『丹波の古墳I—由良川流域の古墳—』（山城考古学研究会）1983.12
- 注42 『久田山』（綾部市文化財調査報告 第5集 綾部市教育委員会）1979.3
- 注43 当センターの引原茂治氏の御教示による。
- 注44 注27に同じ
- 注45 福知山市教育委員会 崎山正人氏の御教示による。
- 注46 伊野近富「1. 編年」（『大内城跡』京都府遺跡調査報告書 第3冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984
- 注47 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」（『九州歴史資料館研究論集』4）1978
- 注48 石井清司氏の教示による。
- 注49 石井清司「1. 石原畑3号窯出土遺物について」（『篠窯跡群I』京都府遺跡調査報告書 第2冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984
- 注50 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会）1982
- 注51 藤井善布「第5章 中世の城址」（『福知山市史』第二巻 福知山市史編さん委員会）1982 城郭関係の記述は氏の成果に負うところが多い。
- 注52 注46の文献の「第5節 出土遺物」の項参照。
- 注53 岩松 保「山田館跡」（『京都府遺跡調査概報』第6冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983 なお当報告書も参照。
- 注54 注16に同じ
- 注55 大槻眞純「付載 多保市廃寺」（『和久寺跡』福知山市文化財調査報告書 第8集 福知山市教育委員会）1985
- 注56 坂本美夫『馬具』（考古学ライブラリー ニューサイエンス社）

- 注57 中村 浩ほか『陶邑』Ⅰ～Ⅳ（大阪府文化財調査報告書 第28輯～第31輯 大阪府教育委員会）1976～1979
- 注58 平良泰久ほか「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会）1980
- 注59 京都大学作成「中世土器様式研究」討議資料（第5回調査成果交流会）1981
- 注60 大村敬通「山陰の古代・中世窯」（『日本やきもの集成』8）1981
- 注61 後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」（『人類学雑誌』54-4）1939
- 注62 注33に同じ
- 注63 伊野近富ほか『大内城跡』（京都府遺跡調査報告書 第3冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984
- 注64 藤澤良祐編「瀬戸窯出土遺物編年図」（『瀬戸市史陶磁史編』2）1981
- 注65 丹治康明「東播系須恵器について」（『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会）1985
- 注66 注51に同じ

京都府遺跡調査報告書 第10冊〈本文編〉

昭和63年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3  
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
☎ (075)441-3155 (代)